

# 奇譚クラブ

■ 新しい風俗文獻誌 ■

10  
October

1967

10  
月号



昭和四十二年九月二十日印刷 昭和四十二年十月一日発行 十月号（第二十一巻第十号）毎月一回一日発行 昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可 昭和四十二年四月二十二日国鉄大局特別換承認雑誌第二〇号

昭和四十二年十月号



サディズム文学の最高峰 S派必読の書

長篇羞恥責小説の一大傑作

臨時増刊

花と蛇

小説・絵画

特集号

乞う直接お申込みを 定価五〇〇円 略号「花と蛇」

四馬孝画 「花と蛇」

テーマ画集 十六葉

1、折り曲げられて弄ばれる女体  
2、逆エビ縛り引き回される女体  
3、水を顔面に浴びせかける男  
4、汚水と薬品の洗禮を受ける女  
5、いちじく浣腸を施される女  
6、浣腸とオシメカパの羞恥器  
7、ガラス製一〇〇Cの浣腸器  
8、強烈なイルリガートルの浣腸

9、尻打ちの痛さに泣き喚く女体  
10、片足吊りに狂いまわる女体  
11、女体滑車吊りの準備万端完了  
12、お灸責めに汗を流す女体  
13、トイレで排泄の強要をされる  
14、後手縛りで宙ぶらりんの女体  
15、美女の背の中を黒い管  
16、グリセリン浣腸液を注ぐ女体

団鬼六作 長篇小説「花と蛇」内容見出し一覧

第一章 密室の秘密ショー

狼の批評会  
洗面器

第二章 脱走の失敗

美津子の脱走

望み破れて

絶望の涙

美津子の覚悟

第三章 悪魔と鬼女の饗宴

悪魔の二次会

狂乱の静子夫人

鬼女の計画

第四章 地獄屋敷へ新顔

新たな獲物

美津子のいいわけ

美少年のいいわけ

第五章 翻弄されるカップル

美少年と美少女

折檻部屋

乙女の涙

毒牙は迫る

恐怖のニラメッコ

第六章 一千万円的身代金

正気づいた小夜子

眼の保養

嵐のあと

第七章 身代金奪取の失敗

小夜子の受難

女体の悲しさ  
美しいニューフェイス

第八章 涙の宣誓文

美女と木馬

毒婦の恋

嵐に立つ小夜子

第九章 恐怖の逆転劇

悪魔の相談

恐ろしい計画

千代夫人と悪徳弁護士

静子夫人の慟哭

第十章 奇妙な三々九度

鬼女の嬌声

地獄の花嫁

第十一章 飼育される白い動物

美しい敗北者

プレイ開始

第十二章 悪魔と悪女の悪業

恐ろしい仕事

全身美容

第十三章 屈辱の地獄図絵

猫とねずみ

強入

第十四章 逃走の恐怖と失敗

風前の灯

再教育

京子の号泣

勝利に酔う悪魔

第十五章 悪魔の残忍な所業

朝の酒樽

白い酒樽

ガラスの尻尾

第十六章 落花無残の修羅場

白いコンビ

バラの肥料

開幕準備

第十七章 淫らな美女の調教

嵐のあと

二人の花形

美女合戦

第十八章 すさまじいショー

変身

舌と唇

第十九章 汚水にまみれた宝石

流血

猿の檻

舞台衣裳

スターの心得

バラ夫人

第二十章 華々しき美女の屈伏

一難去って

酔態

身体検査

第二十一章 対峙する

美女と美女

嵐に立つ令嬢

美女対峙

悲しき説得

調教開始

第二十二章 あくどい陥穽

修羅図

失心する小夜子

悪魔の部屋

第二十三章 羞恥図絵の展開

復讐の生贄

汚辱に泣く令嬢

小夜子の屈服



限定版  
写真集

△美しき縛しめ▽ 第七集

山原清子  
妖艶緊縛

刺青の魅力を探ぐる 写真集

頒価一部 一〇〇〇円(〒共) 略号△美7▽

最近撮影の力作 未公開の秘蔵写真集

刺青の女王Ⅱ山原清子の魅力の隅から隅までを抉ぐり出し、その美しさを最高度に発揮した強烈な刺青女体緊縛フォト結集版(思わず息をのむ凄いポーズ満載)

限定版  
写真集

△美しき縛しめ▽ 第八集

大塚啓子・鈴木晃子・山原清子

女斗と緊縛競艶写真特集

一部 一〇〇〇円 略号「美8」

「女性対女性」の激しい女斗美の躍動!

女性が女性を縛る緊縛プレイの写真化

動きのある相互縛り場面の美しい展開

◎フアンの要望に応じて特に作成した女性対女性の女斗美、女斗場面並に女性同志の緊縛場面を若々しい三人の女性によって力いっぱい演技してもらった躍動的フォト集。

限定版  
写真集

△美しき縛しめ▽ 第九集

「女性刑罰拷問特集」△西洋篇▽

革具に拘束される女

媚態  
七十二葉

頒価一〇〇〇円(送共) 略号△美9▽

モデルⅡ清楚な美木乃々子Ⅱグラマーで美貌の大塚啓子真白で肉づきのよい女体が黒光りのする革具或は褐色の牛革具によって嚴重に縛しめられる、さまざまな姿態を七十二葉の華麗なフォトによってグラビア写真集として、ここに提供します。

△女性刑罰拷問特集▽ (日本篇)「略号美5」は売切。本集も残部少し。すぐお申込みを。御申込先はいずれも大阪阿倍野局私書函第十四号箕田京二へ。

△華々しき女体緊縛の組写真集▽

限定版  
写真集

美しき縛しめ 第四集 一〇〇〇円(送共) 略号△美4▽

◎「登場モデル」Ⅱ山原清子Ⅱ木村洋子Ⅱ玉田美佐子Ⅱ大塚啓子◎縛られた美女ばかりのフォト八十態の内容◎

刺青女体の逆エビ責(山原清子)  
鉄扉に緊縛晒し責(玉田美佐子)  
ブロックの石抱き責(木村洋子)  
箆子と浣腸器の鼻責(大塚啓子)  
両足吊にあう刺青女(山原清子)  
古墳に後手吊組写真(木村洋子)  
両手吊に悶える女体(山原清子)  
逆さ吊に揺れる女体(木村洋子)  
猿ぐつわ百態組写真(大塚啓子)

革拘束具アラカルト(大塚啓子)  
柱縛りの庭園晒し(玉田美佐子)  
セーラー服緊縛姿態(大塚啓子)  
野外に於ける晒責(玉田・木村)  
刺青女体の柱縛り責(山原清子)  
捕獲された女の悶え(大塚啓子)  
入墨女の緊縛絵模様(山原清子)  
両足吊りの表と裏(山原清子)  
△以上緊縛フォト八十葉▽



奇譚クラブ

昭和四十二年九月二十日印刷 昭和四十二年十月一日発行 十月号 (第二十一巻第十号) 毎月一回一日発行  
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可 昭和四十二年四月二十一日国鉄大局特別扱承認雑誌第二一〇号

# THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akamurakosoten

Osaka Japan



定価三五〇円

10月号 ¥ 350



# 新しいアイデアに依るS Mフォト案内

## 浣腸にむせび泣く

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
大島照代 略号 八つゆV  
あらゆる浣腸用具を動員の上マ  
ニアの大島夫人の臀部に挑戦して  
浣腸の甘いムードに感泣させる。

## 身動き出来ぬ浣腸

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
大島照代 略号 八つゆV  
身動き出来ぬよう縛り上げられ  
た大島夫人に迫ってゆくポンプや  
イルリの嘴管の毒々しい光沢。

## 竹棒開股答打縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
関谷富佐子 略号 八つゆV  
これは又珍しい関谷夫人に對し  
て五本の竹棒を用い正面開股の厳  
しい縛りで答打ちで悶えさせる。

## 後手吊りにもがく

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
川越美佐子 略号 八つゆV  
嚴重な後手縛りの両手首を鴨居  
に吊り上げてジリジリ引き締める  
と長身をくねらせてもがく。

## 逆エビ縛りの色々

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
愛知葉子 略号 八つゆV  
自分の縛りフォトを讀者にお見  
せしたいと特に提供して下さった  
逆エビ縛りの色々なポーズ。

## 逆さ吊りと足吊り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
愛知葉子 略号 八つゆV  
一本棒のように逆さ吊りになっ  
たり両手と両足を別々に吊られた  
り両足を開股で吊られた葉子。

## 片足吊り上げ縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
愛知葉子 略号 八つゆV  
柔軟な肢体の葉子の片足が高々  
と頭よりも高く吊り上げられ残り  
の片足立ちで僅かに安定を保つ。

## 美しき臀部を晒す

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
左近麻里子 略号 八つゆV  
見事な真白い臀部をこれ見よが  
しに投げだして後手に緊縛された  
麻里子嬢の全裸身の美しい姿態。

## 階段に晒す全裸身

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
左近麻里子 略号 八つゆV  
階段下にその中段に豊かな肉づ  
きの真白な縛りの肢体をうねらせ  
て魅力的な媚をふりまく麻里子。

## 花瓶を太股で挟む

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
左近麻里子 略号 八つゆV  
ガラスの花瓶を真白い太股で挟  
んで全裸の優美な緊縛肢体をマニ  
アの皆さまの眼前に御披露する。

## 麻里子裸身の総て

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
左近麻里子 略号 八つゆV  
鮮鋭なるピントのカメラによっ  
て細にさいなまれる麻里子の肌を  
いきいきと息づくままに見せる。

## 柱立縛りの全裸身

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
左近麻里子 略号 八つゆV  
洋間の中央にある柱に肌をくび  
るように縄がけした裸身をつなぎ  
とめられた麻里子の美しい肢体。

## 絶妙の鞭打ポーズ

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
左近麻里子 略号 八つゆV  
両手と両足を思いきり開けて柱  
と鉄柵に縛られた麻里子の魅力的  
な臀部が突き出すように息づく。

## 悶える白肌を俯瞰

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
左近麻里子 略号 八つゆV  
階段下のカーペットの上に真白な  
緊縛裸身を投げつけた妖美姿態。  
を二階から狙いつけた妖美姿態。

## 両膝頭開股宙吊り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河恵子 略号 八つゆV  
後手縛りの両手首を鴨居に吊るし  
両膝に縄をかけて引き上げれば思  
わず両足が開いて宙吊りになる。

## 片足挙げ吊り責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河恵子 略号 八つゆV

揃えて縛った両手首を上から吊  
って片足を縄で引き上げると一本  
足の不安定な女体が揺れる。

## 両手吊りに悶える

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河恵子 略号 八つゆV  
両手首を揃えて吊り上げた全裸  
の肢体は恵子の願ひ通り、その隅  
々までをマニアの視線に晒す。

## 開股責めを悦ぶ女

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河恵子 略号 八つゆV  
一番好きな縛りポーズはこれだ  
と彼女の望むままに大の字の正面  
開股縛りで御機嫌をとり結んだ。

## 両手万才吊りの女

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河恵子 略号 八つゆV  
両手を万才型に挙げて吊り上げ  
られた無防備の裸身に襲いくる操  
りの触手とあくなき淫靡な視線。

## 遠藤静子の羞恥責

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河恵子 略号 八つゆV  
「花と蛇」の主人公静子夫人に憧  
れてゐる彼女の前に「静子」の名  
札をぶらさげて演じた羞恥責め。

## 雁字搦目にうめく

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
川越美佐子 略号 八つゆV  
瘦型の長身を大量の縄で喰いち  
ぎるれば細い身体をくねらせる。  
げれば細い身体をくねらせる。



昭和四十二年十月号

<第21巻第10号・通刊第232号>

奇譚クラブ 10月号 目次

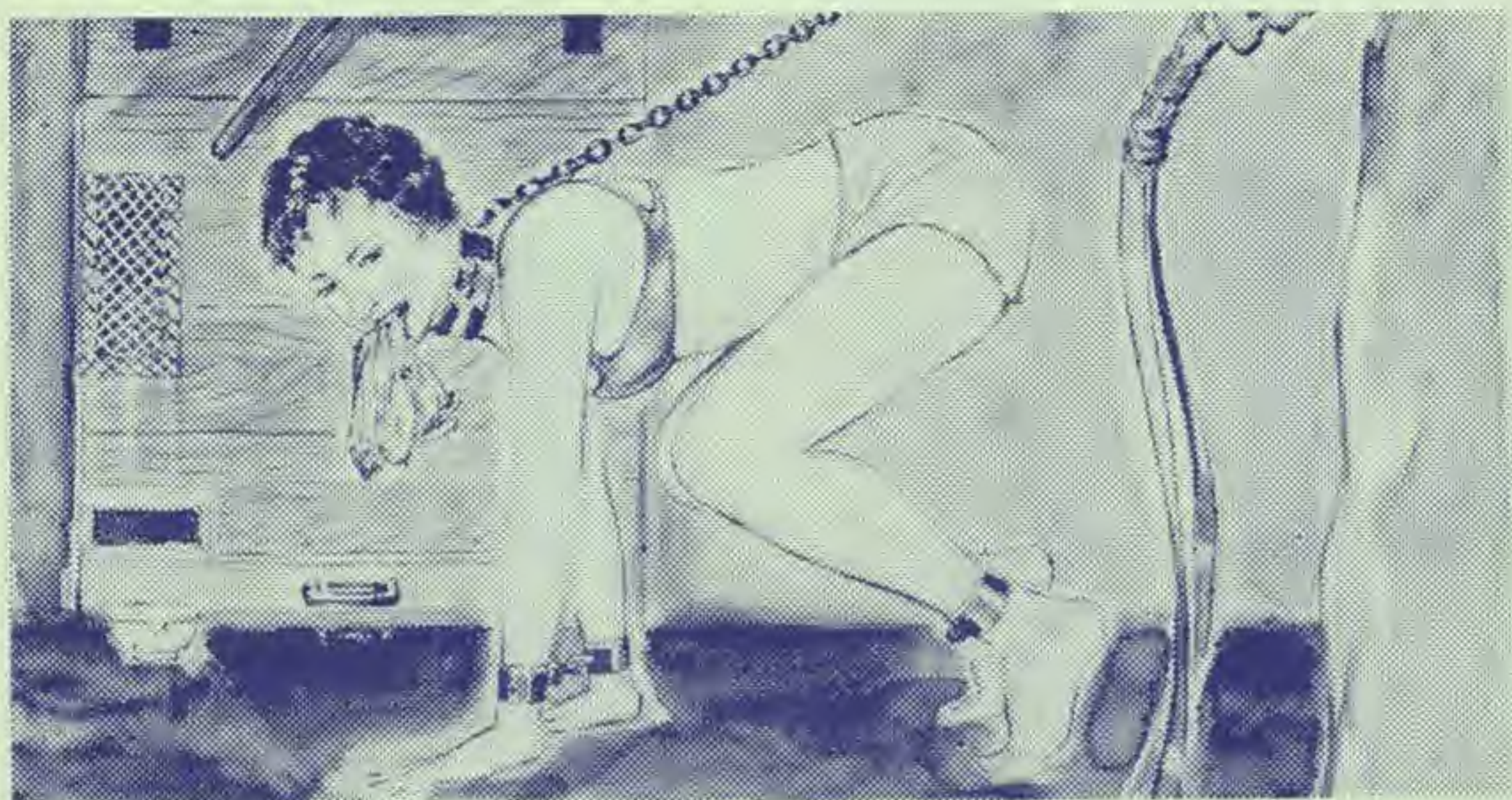
◇奇クサロン.....編集部構成

○S・M時代到来か?.....編集部(9)○妖しい白日夢.....辻村隆  
(10)夜乃探郎(11)「煙草責」の構想.....○城野道一(12)○は花と蛇の美学?.....  
子型愛好生(13)○強盗に縛られた女.....多美野保(14)○猿ぐつわのイメージ.....  
の美江三郎・室井亜砂路・遠藤春一・小妻容子(15)○切腹二題.....桐原  
紫門・新井新治(16)○秘かな願い.....池永敏子(17)○短歌一セリ市原  
女.....高村初子(17)○最近の縛り映画.....細川英治(18)○結婚の屋外実験  
.....田宮恭介(20)○私の観た緊縛映画.....山田佐一(24)メー  
(22)○奇ク偶感箇条書.....基円江須男(23)○細川英治(20)メー  
宮城昌子(23)○特製下着カタログ.....山田佐一(24)メー

△本文▽

本誌自粛の徹底.....	編集部.....	(25)
読物紡唄(自称雑学博士書抜帖).....	江川 詩二.....	(26)
懸賞入選「あきこ」退場.....	井風呂秋於.....	(34)
随 想「アクロ雑感」.....	谷 三太郎.....	(43)
連載サディズム小説 心傷たむ遍歴.....	西条 操.....	(46)
ピンク映画のあれこれ.....	牧 高志.....	(60)
稿 談 性風俗資料入門(7).....	斎藤 夜居.....	(64)
祖母の浣腸の話.....	おもだか・しの.....	(73)
鬼六談義『瓢箪の話』.....	団 鬼六.....	(74)
雑 想 光男の戯言.....	天道 光男.....	(86)
SMカメラ・ハント△大島照代の巻▽		
「甘い羞恥」.....	辻村 隆.....	(90)





マニアのノート……………とやま・かずひと……………	(107)
日本婦人部隊奮迅録「海嘯の譜」(下)……………黒淵 嬰一……………	(112)
創作「水中花」(七)……………芳野 眉美……………	(124)
創作「復讐」△ガンベッタ△(3)……………千葉 青鬼……………	(131)
美女決斗シリーズ「裕姫戦記」……………鶴見 和男……………	(138)
「花と蛇」に現れた「羞恥責」の類別……………安藤 秀一……………	(145)
カメラルポ「この女と」△ローズ秋山の巻△……………山本 一章……………	(150)
懸賞入選告白フエチの海水浴……………安田 隆夫……………	(155)
告白「足への趣味」……………比左良 守……………	(160)
私の△美女拷問△考……………並川 新一……………	(164)
連載S小説花と蛇(続篇第三十五回)……………団 鬼六……………	(166)
随 想切腹研究夜話……………中康 弘通……………	(182)
告白白ガラスの季節……………田井 啓子……………	(184)
告白小説「千恵子という女」……………橘 雅美……………	(188)
浣腸通信 マニア雑記……………小林 薫……………	(206)
懸賞入選「あすなろうの道」……………中河 恵子……………	(208)
夫婦遊戯「女囚とお役人さま」……………早木 夢二……………	(214)
創作「異聞白雪姫」……………鈴木 省吾……………	(220)
静子夫人への手紙……………山上 四郎……………	(224)
サドレディ・ストーリー「異常の門」……………清水 圭子……………	(226)
続・義仲をめぐる三人の女……………黒田 寿……………	(236)
ゴムマニア・ストーリー「罠」(わな)……………津田亜紀子……………	(245)
読者通信……………編集部選……………	(250)



# 四馬孝 妖美画集

## 女体切腹図絵

略号 (しせ)

### △時代物女体切腹図

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、若き姫君の凄絶な切腹美態
- 二、介錯を受ける覚悟の美しき娘
- 三、落城の哀史、切腹する美女
- 四、夫の眼前で切腹する若妻
- 五、愛人の手で介錯を受ける娘

## 浣腸美媚態

略号 (のゆ)

### △女体浣腸の極美図

大中判印画紙極鮮明焼付

三枚一組 六〇〇円

- 一、美しい令嬢に対する浣腸場面
- 二、女事務員の浣腸を覗きみる
- 三、女学生に対する浣腸の私刑

## 浣腸責め図譜

略号 (しき)

### △強制浣腸場面五態

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、片足吊りで美女に浣腸する
- 二、いちじく浣腸の恐怖に悶える
- 三、高圧浣腸に喘ぐ美女の痴態
- 四、硝子シリンダーが乱舞する
- 五、イルリガートルが責道具

## 羞恥責め絵巻

略号 (しい)

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、灌水による人工妊婦腹製造
- 二、浴槽の全裸の美女を責める
- 三、三角木馬で美女を責める
- 四、全裸のグラマー柱抱き責め
- 五、女体洗滌のあられもなさ

## 浣腸責め図譜

略号 (しえ)

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、美貌の踊子へのイルリ浣腸
- 二、ヒマシ油による強制下剤
- 三、进出する緑の浣腸液
- 四、女体浣腸用資衣を応用する
- 五、両足吊りイルリにて浣腸

## 女性切腹風俗

略号 (ゆい)

### △時代風俗女体切腹

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、座敷牢の美女切腹を賜わる
- 二、介錯にて果てる切腹の美女
- 三、塗駕籠の中の姫君切腹す
- 四、男装の美女小姓姿の切腹
- 五、美貌の腰元裸身の切腹

## 倒錯美緊縛画

略号 (えと)

### △美女のいけにえ

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、女体解剖台上に晒らす裸身
- 二、嫉妬に狂う夫と美貌の妻
- 三、美女の鼻料理に興ずる男
- 四、女体を真二つにする股間縛
- 五、山小屋の一夜、処女の受難

## 「花と蛇」画集

略号 (えに)

### △傑作S小説の絵画化

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、京子に珍芸を仕込む鬼源
- 二、静子令夫人へのあくなき汚辱
- 三、操り責めに泣きぬく美津子
- 四、片足挙げ縛りに悶える桂子
- 五、排泄を強要される京子の窮地

## 女体吊責画集

略号 (えほ)

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、弓吊り女体にローソク責め
- 二、エビ縛りのままの宙吊り
- 三、股間縛りの吊り責め
- 四、美女の舌の先縛り吊り
- 五、股間縛りにて鼻孔吊り

## 浣腸排泄画集

略号 (えい)

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、恐怖の浣腸台で美女の浣腸

- 二、浣腸のあとのお楽しみ
- 三、百CCのグリセリン浣腸
- 四、塩水をヤカンで無理に飲みます
- 五、排便を耐えぬく美女の表情

## 美貌汚辱鼻責

略号 (えは)

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、女の美しい鼻をいたぶる
- 二、一本一本女の鼻毛を抜く
- 三、美女の口中をほじくる
- 四、泥絵具にまみれた美女の顔
- 五、顔にラーメンを食べさせる

## 美女の責痴態

略号 (しお)

### △責められる美女波津子

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、恐怖の浣腸責め今展開す
- 二、柱抱きアグラ縛りの責め
- 三、庭園のハダカ責めシーン
- 四、全裸の美女荒縄の股間縛り
- 五、チエン・ブロックの女吊り

## 美少女羞恥責

略号 (しる)

### △可憐な美少女加奈子

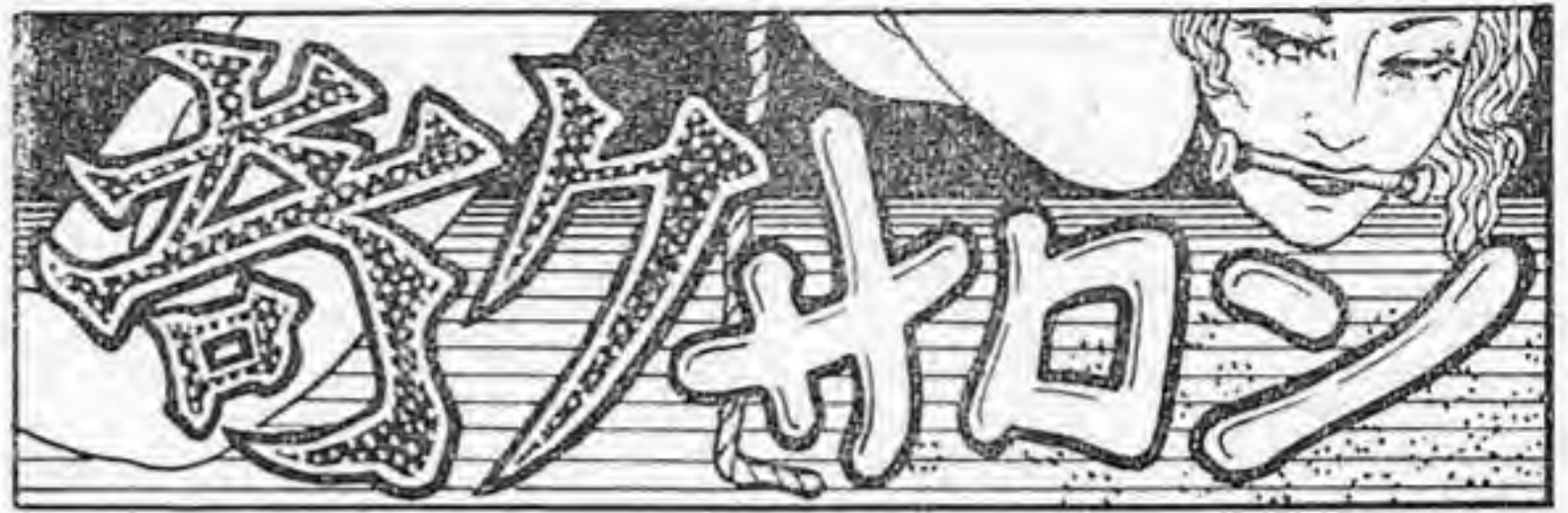
大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、蠟燭の火責めにあう美少女
- 二、ヨチヨチ歩き的美少女責め
- 三、逆エビ縛りの柱宙吊り責め
- 四、股間縛りに絶叫する美少女
- 五、鑑賞用美少女の緊縛美体

◎お申込みは、大阪市阿倍野郵便局私書箱第十四号 箕田京二へ。





## SM時代到来か？

編集子

七月一〇日号の『平凡パンチ』の海外話のタネの中に「サド・マゾアクセサリー」として「フラン」のある自動車会社が、女性ファッションでチェーン（くさり）が流行しはじめていることに、もう目をつけた。若い女性に車を売るときには、オプショナル・パーツとして、黒い硬質ゴムでつくられ

た、無気味なくさりのシート・ベルトをつけはじめたのだ。このシート・ベルトを締めると、まっ黒いくさりで体をしばられたような不思議な気分になるのだ。硬質ゴムだから、鉄のように重くはないが、強さはじゅうぶんにある。」と、書いてある。ひととき金色や銀色のした手首に巻くチェーンが流行していたことがある。これは四重ぐらいにして手首に巻いて飾りに使えるし、また一重か二重にすれば首に巻いてネックレス代りにも使えそうだった。

梨花悠紀子さんが、よく手首にこの金色のくさを巻いているのを見つけたので、一度こういったアクセサリーのくさをういて緊縛フットを作ってみたらと考えたことがあったが、実際にはやったことがなかった。萩千恵子さんもくさりで拘束されることが好きで女性装身具のアクセサリーとしてのくさりや犬のくさり、或は重量物を吊り上げる鉄製のチェーンなどを自分で買ってきて持参したことがあった。真冬の寒さの中で鉄製の太いくさを直接肌に巻きつけたときの冷たさ、思わず身体中の肌という肌が鳥肌立ち、身ぶるいするような寒さは、それだけで十

分責めとしての効果を発揮していた。しかし、写真として見たときは余り見覚えはしなかった。

最近の週刊紙は勿論のこと、月刊誌や単行本に至るまで、サド、マゾ、ホモ、等といった言葉を日常茶飯事のように使っている。そのためか、若い女性の間でも、そういう知識が極めて豊富になってきた。従って自分の性情や性癖についてでも大胆に自己判断をして通信を寄せて来られる女性がすくなくない。「私は貴誌愛読の一マゾ女性ですが……」といった書き出しの通信に度胆を抜かれることが再三ある。あとで逢ってみて、さすがに自称マゾ女性だけあるわいと感じさせられるひともあるが、なかには本や雑誌などの知識だけで殊更自分をヒロインの立場に置きたいためのジェスチャーであったり、被害者意識の濃厚な女性であったりすることもある。

嘗て、バーやアルサロのホステス、料理屋の仲居などに、冗談半分に初体験の相手をその都度機会を見て尋ねたところ、「私、強姦されたの」と答えた者が案外多かった。殆ど眉唾物に違いないのだが、その事実の真否よりも、水商売に入っている彼女たちが何故そ

のような回答をするのかということに興味を持った。だが多くの彼女たちは、その事について話をすすめると「もう、そんな話はよしまししょう」と話題を変えるのが常だった。若し詳細に亘って、その話をすすめる女性があったとしたら彼女はマニアになる素質が十分あるとみて過言ではないだろう。

一旦マニアづいた女性は、私達を驚かすに足るほど奔放で大胆になるものだ。しかし、いつの場合でも女性特有の引っ込み思案から適切なきっかけがないことには、導入することに抵抗がある。フランスの自動車会社が女性心理の深い奥にあるものを見ぬいて、くさりのシートベルトをオプショナル・パーツとしたそうだが、自動車のセーフティ・バンドとして女性ドライバーの身体を革具で座席に拘束したら、どうだろうか。

両腕と両足以外は、嚴重に黒光りのする革製ベルトで座席に縛られていた妙齡の女性ドライバーの姿は新しいファッションとして注目されるかもしれない。飛行機の安全ベルトのように高速道路へ侵入する車のドライバーは、必ずこの革具を装着するよう義務づけるのも面白いアイデアだろう。





(第四十回)

辻村 隆

金沢市のキャバレーミカドから出した秋山美智夫氏の便りを久し振りに懐かしく拝見した。御元気で全国各地を廻っておられる様子は、何よりである。(以下全文)

『前略御免下さい。早速にもお礼の便りをお送りしながら今日になりました事をお許し下さい。七月十六日より八月までのコースを御連絡いたします。』

七月十六日―二十日 大阪大晃

ミュージック

七月廿一日―卅一日 大阪鶴見

第一劇場

八月一日―十日 岡山市

八月十六日―二十日 京都大宮

劇場

八月廿一日―卅一日 大阪東洋

ときまりました。大宮劇場公演中、辻村さんとは親しくしている同好のメンバーだからといって、西宮市K町の梶さんという方からお便りをいただきましたので、七、八月のコースを連絡しておき

とか。しかし母子共今は健全で本当によかった。何はともあれ、衷心よりお祝いを申しのべた。

× × × ×

団鬼六氏の「鞭と肌」面白く拝見した。団氏の「カメラ嫌い」が撮影余話として嬉しい。可憐な女学生の令嬢、美川恵子さんのフォトがピンボケ二枚とは誠に残念。知っておれば団氏に懇願して、千里の道も何とやら、おっとり刀、じゃなかったカメラでかけつけるものをと、ハント根性がむき出しになる。社長二号に扮した志村曜子さんが、新宮明夫氏夫人と容貌、肢態そっくりなのに一驚。さながら新宮洋子さんが演じているような錯覚を感じる。緊縛に今一つ工夫がほしかったと思うのは私のみではなからう。団氏の緊縛演出と存じているだけにその感が深かった。私もかなり自分の正体を曝けだしているが、団鬼六氏がすっかり御自身を明確にされたことは偉とするに足る。おそらく奇巧に執筆されている方々を通じて始めての事だろう。彼からくらべたら、私などまだまだ秘密の殻の中に閉じ籠っている方だ。

× × × ×

東京のK氏の御紹介で知った、

## 編集部だより

○多数の読者の方々から暑中見舞のお便りや激励のお手紙を頂く。中にはビール代にも若干の金子の御寄贈を賜わる向きもあり、御厚情のほど心から感謝している。

○八月号あたりから表紙のデザインを変えてみた。色々の批評はあろうと思うが、概してその新鮮は買われているようだ。今後どのような表紙が飛び出すか、読者の皆さんと一緒に楽しみにしていよう。

○本誌は極めて真面目に編集されているし又執筆や投稿される方の態度も至って真面目である。その真正直なところがかえって誤解されるのではないかと考えるときがある。これも一つ反省の材料にしてもよいと考えるときがある。

○若くて美しく、そして多彩な性格を持つ種々の女性の登場は、最近殊に好評を得ているところだ。奔放にして、しかも時には緻密な頭の働きを見せる中河恵子嬢がたえず八花と蛇V式の場面に憧れを抱きながら、被虐の巡礼を続けているのは一層興味がある。

○予告していた八日本拷問刑罰V



団氏提供「鞭と肌」スナップ



## 妖しい白日夢

それは覗きの美学?

夜乃探郎

故、江戸川乱歩先生がよく好まれたテーマに覗き趣味がある。その代表的な作品は「湖畔亭事件」であることは、大方の周知のことだ。それは妖しき白日夢の出来事

神戸市御影のY氏の御好意で、妙令の美女を撮す機会に恵まれた。五十年代の地位も名誉もある、しかも喰るほど金をもっておられる会長さんである。普通なら、滅多にお近づきになれない方だが、同好の士とは有難いもので、気さくに喋っていただけで、Y氏が気が向けばプレイ用に使用するのが大半の目的の、苦楽園の別宅も気持よく提供していただける。私はY氏の好意に幾許かでも報ゆるため、革具類やクリスタル用具、使い馴れたロープなど進呈した。買えば安いものだが、私が常時使用していたものとい

うので珍重して、別宅備付ということになった。執れハントに次々と協力しようという嬉しいお言葉で、今の処三人ぐらいいはすぐにでも当てがあるらしい。私のカメラに対して、Y氏はビデオで、すぐさまプレイの模様を再現されていた。

(七月二十八日)

地位と金がものをいうと、かくも若々しい美女が、Y氏の言葉一つでいつでも自由になるものかと、今更ながら驚き入った。地位も金もない私が、コッコツと稼いで来たハントの諸嬢達とは異質の女性達だが、ハントとしての面白味は奈辺にあるか、それは又別問題である

偶然にも九月号誌上には、斎藤夜居氏の「性風俗資料入門」の文中と、間宮清満彦氏の「日曜日の犯罪者」に「覗き」が取り上げられていた。執筆の姿勢はそれぞれ違っている。執筆の趣味に大いに関係のある私は、興味をもってよんだことは確かである。両氏の労筆に敬意を表するものだ。

あり、相手に気づかれず、ひそかに覗き見することは、好奇心な人間心理をいたく刺激する。バビルスは、その名作「地獄」によって、覗き趣味を芸術、いや哲学までに昇華した。異常な世界であろうけれど、これも又、生存の一断面であることによって、凄じい事実をえぐり出す。風俗雑誌が、性の奥深い、どすぐろい裏面をクローズ・アップさせることによって、真実を追求す

の写真撮影は二、三の新しいモデルを準備して待期していたのだが場所を提供して下さる方の都合が悪くて一カ月延期、その後の問合せにも返事がないので、今回は見込みがないものと報告しておく。○吊りや逆さ吊りを望んだ女性として梨花悠紀子、関谷富佐子、木村洋子などがあるが、先日、川越美佐子に逢ったところ、吊り殊に逆さ吊りをやってほしいと強く要望していた。妥協のない激しい責め方である『吊り』を望む女性の心理もわからぬでもない。大島照代や左近麻里子も、他人がやるなら私もと『吊り』に意欲を燃やしているそうだが、或は辻村隆や山本一章の感化を受けてハッスルしているのかも知れない。○逆さ吊りにして情容赦のない鞭打ちをしてほしいという関谷富佐子の希望も、時間と場所の関係で未だに果されないでおるが、是非実現したい大きな課題である。○八吊りVといえ、今月号の奇クサロンで田宮恭介氏が「緊縛の屋外実験」を書いていいるが、辻村氏からの連絡によれば、田宮夫人をモデルにしたカメラハントに成功した由。いずれ誌上を飾ると思うので一筆予告しておく。



## ボクの責め方



## 煙草責

## の構想

城野道一

最近ではピンク映画でも女を縛る場面が多く、これを全部観るとなると映画代も馬鹿になりません。

秋山氏のサディズムショウ、京都の大宮と博多の川又で二回見ま



した。あれが全ストなら、もう一つ面白かったのと思います。

最近では辻村先生の影響か鞭打ちを行っておりま。現在一番困っているのは拷問部屋でアパートなどである。鞭音と悲鳴が気になつて駄目。ホテルは柱がなく縛った女を固定出来ないことです。それで考えた末、百貨店で日曜大工用の四つ割（長さ一・五米位）角材を求め、百貨店の包紙を巻いてホテルを転々としている始末です。モデルを全裸にして角材に後手に縛り上げ足も後に揃えて縛りベッドか椅子に斜めに角材と縛った女をたてかけます。この様にすると



下半身がムックリ盛り上って恰好の鞭打ちポーズになります。鞭は西陣で手に入る屑絹糸で編んだヒモを使っています。

口には勿論いつもキセルかマド

ロスパイプで鞭打ち中、煙草を吸わせておきます。初めのころは口からよく落しました。が、この頃は打たれるたびに歯を喰いしめるので落ちません。鞭打ちと合せて喫煙させています。すなわち第一撃で煙を吸い、第二撃で煙を吐くというようにしています。紙巻や葉巻はよだれ



責めています。

最近では緊縛女性に特に恵まれておられる御様子でうらやましく存じます。一度本誌のモデルを使って煙草責めのフォトを作ってみた

などで湿ってしまふので、マドロスパイプが一番です。秋山氏も言うておられるように、こっちは本気でやるのですから女の方が完全に参ってしまい、翌日会社を休まねばならないほど疲れま



いと思います。九月号の読者通信でタバコ責が一服している様で迫力が無いといっておられました。タバコで責める場合、あの様なソフトムードとタバコの火を肌に押しつけるようなハードボイルの二通り考えられ、私の場合、煙のムードに重きを置いたものです。

あのフォートのモデルにおさげ髪或はセーラー服を着せれば、また変ったムードになったと思ってい

ます。「鞭と肌」を最近見ましたが、あの女学生は可愛らしい子でした。「花と蛇」シリーズで欠点なのはいつも立縛りにして縄尻を天井に吊るという形ばかりで食傷気味です。あの女学生にハマキやマドロスパイプで喫煙させれば非常に面白い結果となるのではないかと思

描きましたので同封いたします。縄目から見て苦しそうにタバコを吸わされているのが、おわかりの事と思います。今、構想中のものは、前にも書きましたように、鞭を入れてゆくポーズを考え、試しにプレイしています。すなわち、全裸の女を後手に縛り上げ、横縄も嚴重に縄尻を首にかけ、首縄として自由に引きしぼれるようにして引回します。口にはマドロスパ

イプをくわえさせ、プラスチックの物差しにほうたいを巻いて作った鞭で、縛り上げた女の肩に近い背を打ちます。女にとっては余り痛くないところで一鞭くくるとタバコを一ぱい吸い、二鞭目で白い煙を口から鼻から吐き出すように調教していただきます。フォートが出来れば、お送りしたいと存じます。

## △花と蛇△讚

### △京子型△愛好生

相乗作用による。

夙に鬼源は言う。△——わざと責めを求める仕草だ。単に羞恥に悶えるは不可。はじらいのこもったねだりの言葉。消極的な色っぽく拒否の仕草が不可欠である(続編第十五章)△、畢竟△媚態△の一変型といえる。

この着眼の素晴しさ。ここに読者は熱狂し、そこに私も陶醉するのだ。△文学△は求めない。真摯な△読物△を切望する。

エロティシズムもいえども觀念に他ならぬ。人間性は不要。ただ

ひたすら觀念を愛する。作者も読者も私も。

美女をして、より精緻に△媚態△の極致を演ぜしめよ。かくて△花と蛇△は不朽の名を長く伝えるであらう。△花と蛇△なくしては本誌の魅力激減。敬愛の念を持って、△花と蛇△万才。

○ △じゃじゃ馬ならし△こそ、求めて止まぬ私の夢である。汲めども尽きぬ秘鑰の源泉だ。近号は渴望の一端を癒した。

鉄火娘の調教と反抗と屈服と媚態と。調教は執拗に、反抗は頑強にして、遂に甘美な屈服に至る。この爛熟したエロティシズム。空手二段を逆用し鉄火肌を變質

させたい。慎重に気長く周到に行こう。拙速は望まずあせりは禁物。そして第二の静子に生れ変わる。変性男子を配するの絶妙。じゃじゃ馬娘とシスターボーイの理想的コンビ。京子を更に△活用△させたいと思う。静子よりも美津子よりも小夜子よりも、私は京子に傾倒している。豊潤・清純・華麗よりも△男まさり△の觀念を愛する。

京子をして、より精妙に、△媚態△の極限を究明せしめよう。△鉄火肌△を売り物に△自発的△に演ぜしめよ。かくて△花と蛇△は私の座右の書となる。狂崇の念を持して、△じゃじゃ馬ならし△万才。



△花と蛇△の真髓はエロティシズムにある。九鬼氏の所論は正鵠を射た。△責め△だけでは、だめである。△反応△がなければならぬ。エロティシズムの発現は、この両者の



## 強盗に縛られた女

多美野 保

最近、私の知合の若妻が一人で留守居していた白昼、押し入った強盗に夫のネクタイで後手に縛られたという事件があった。幸い新婚家庭でこれといった金目のものもなく、二千元ばかりの小使いを盗まれただけだったので、新聞の社会面にも載らない小事件で終わってしまった。

偶然、その奥さんと話合う機会があったので、その時の恐怖をじかに聞くことが出来た。その家は郊外の一戸建て、家の中へ入り込まれてしまうと、少し位の物音を立てても外へはわからないという平家で、賊はそこを狙って勝手口から侵入してきた。突然のことに驚く彼女を押し倒してうつ伏せにして両腕を後に捻じ上げた。賊は膝で彼女の背中を押さえながら、洋服ダンスを開けてネクタイを取り出し両手首を括ってしまった。「何にもしないから、許して」

彼女が必死に頼んでも、賊は乱暴に押さえつけ、もう息が詰まり

そうで、殺されるかと思った、と白い手首をなぜながら、彼女は、その時の恐怖を話した。

見ず知らずの男。しかも強盗に若い女が無理矢理に縛り上げられた時の気持は、果してどんなだったろうかと、私はその時の光景を頭に描くのがあった。そして、時折り新聞紙上に出る、女を縛った強盗の記事を興味深く眺めるのだった。その一、二を掲げてみよう。

人妻しほりあげ 金奪う

十日午前三時二十分ごろ、大阪市福島区吉野町一の二〇工員小泉邦夫さん(二九)方へ、若い男が押し入り、二階で寝ていた妻の正美さん(二九)を起こし、刃物をつきつけ、

「声を出すな。金を出せ」とおどした。

男はそばにあった衣類などで正美さんの両手をしほりあげ、サルグツワをはめて室内を物色、タンスのなかから現金一万七千円と協和銀行野田支店の普通預金通帳

(額面十万一千円)を奪い、二階の窓から逃げた。(サンケイ新聞 六月十日夕刊)

南区のマンションに強盗

芸者しほり金奪う

十三日午前四時ごろ、大阪市南区二ツ井戸町一六、マンション、二ツ井戸会館三階の三〇四号室、芸者、須山恵津子さん(二五)が人の気配に目をさましたところ、ま

くらもとに立っていた男が、須山さんの両手を帯あげでしほり、さるぐつわをかけたうえ、タンスの引き出しから約一万円を奪って逃げた。

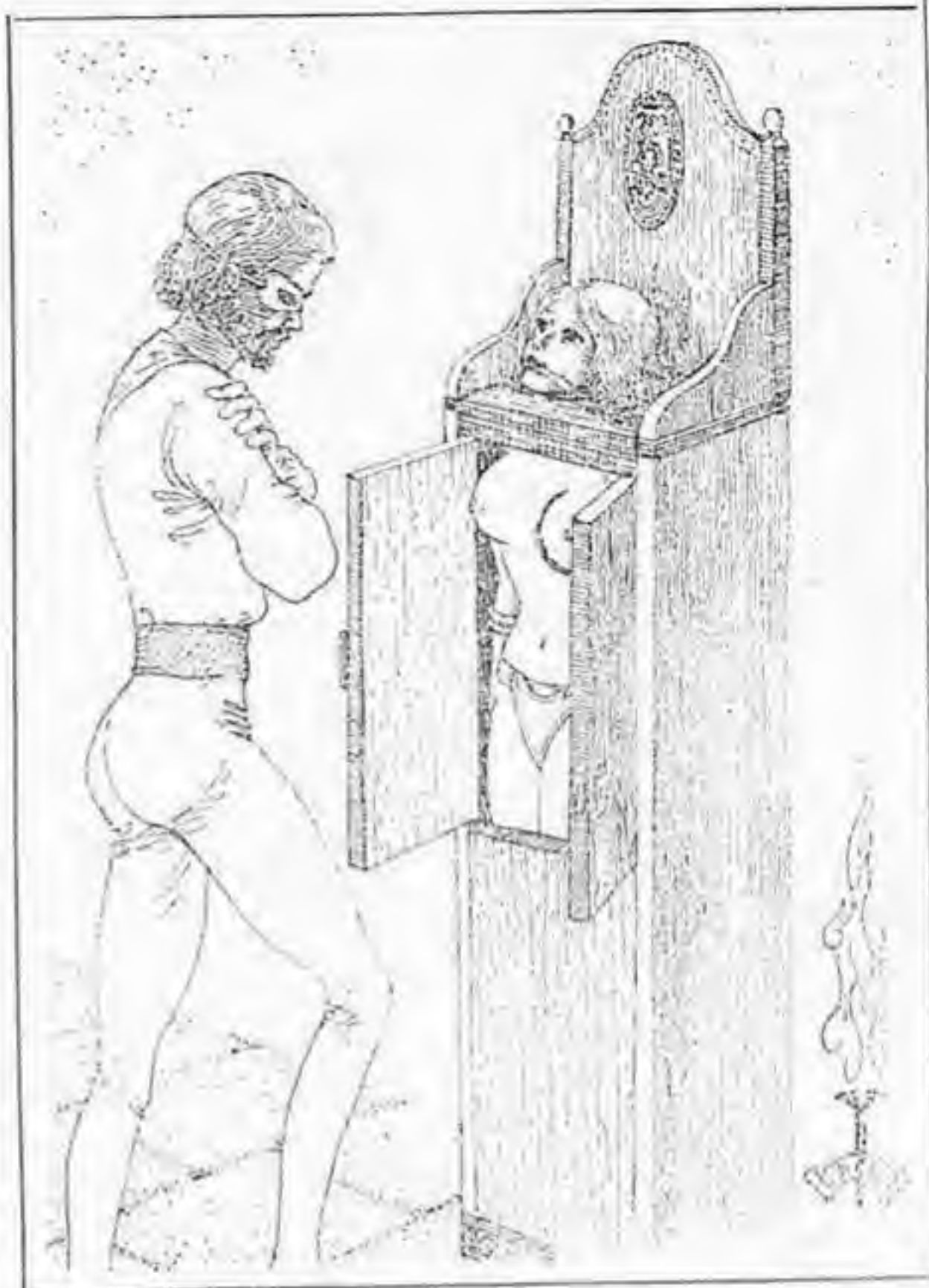
南署の調べでは、カギのかかっていなかった廊下の回転窓から侵入したらしい。人相ははっきりしないが、若い男だったという。(六月十三日サンケイ新聞夕刊)





## 「僕のイメージ画」集

◎十四頁左下＝野江 三郎  
 ◎十五頁右上＝室井亜砂路  
 ◎十五頁右下＝遠藤 春一  
 ◎十五頁左下＝小妻 容子  
 右各氏の数多い寄稿画の中から  
 並べさせて戴いた。他の方々から  
 も沢山に寄せられているが、誌面  
 の都合上、一度に発表出来ぬのが  
 残念。ズバリと訴えるだけに、文  
 章と違った難しさ、楽しさが絵に

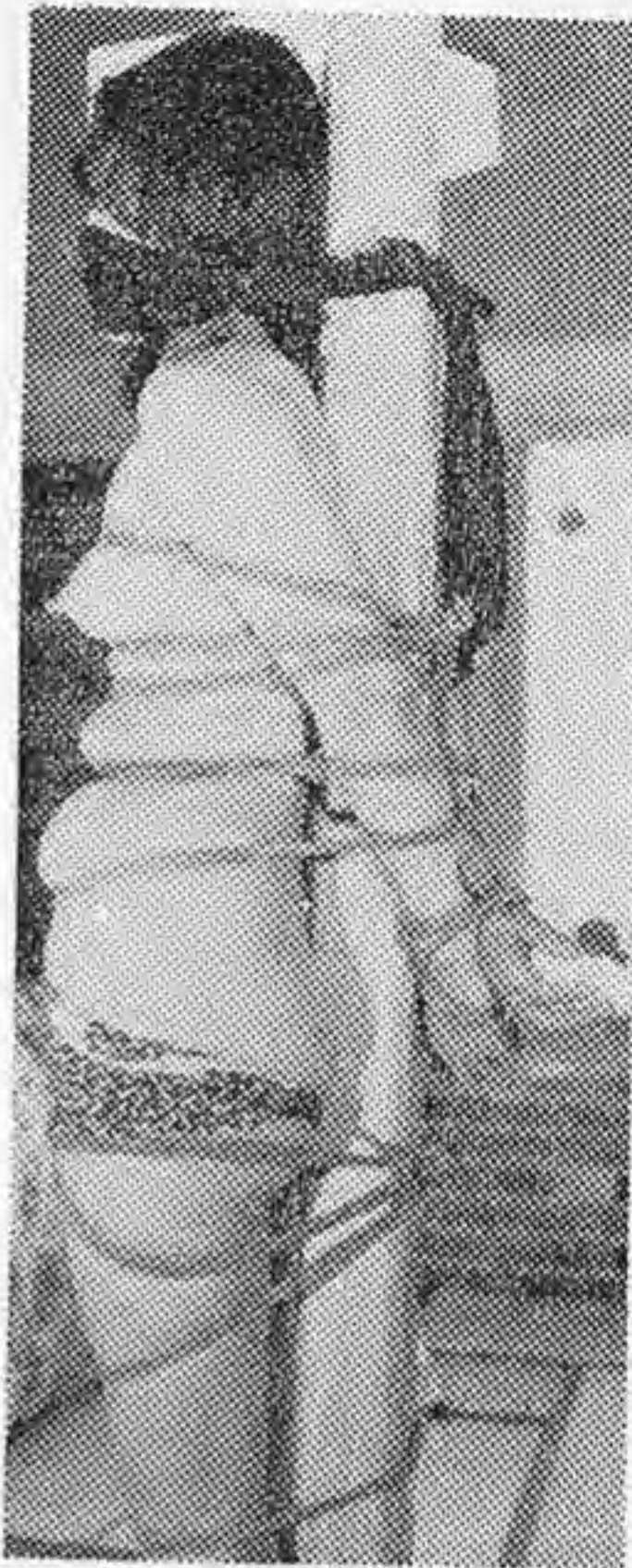


はある。写真とも異質のものだ。  
 寄稿各氏の精力的な健筆と、意欲  
 的なイメージには舌を捲き、熱心  
 さに感嘆する。一部にはアイデア  
 のお積りだろうが、共同トイレの  
 壁と間違われているものもなくはな  
 いが、まじめな労作に接すると心  
 暖る思いになる。挿絵類削減の方  
 針ではあるが、夢と楽しさのある  
 ものなら問題は別だ。S・M画だ  
 からと云って、やたらハダカの縛  
 りや、極限の描写が必要とは思わ  
 ないのだが……。

(T)







## 猿ぐつわの美と

## 黒マスクの美

小池 宏

僕は奇クを読みはじめてから約六年になります。その間はほとんど目を通してありますが、その中ではつきり良いなあと印象に残っているのは、絹川嬢の大きなサルグツワの写真です。

編集の方や読者の大半の方が、おそらく、しぼり写真というのは女の人をはだかにして、みうごきできないようにして、顔もゆがむような、苦しそうな写真が、本当のしぼり写真なのだと思うところ、思いますし、又その苦しそうな所が、最高に良いのではないかと

おっしゃられると思います。

しかし僕の考えとしては、はだかではしぼられて口と口のあいだにロープをかまされたり、手拭をかまされている姿は、なんだか、かたくるしく、きゅうくつで、女のやわらかさと云うか、やさしさというか、その女だけのもっているやわらかいムードがこわされるような気がするのです。

僕の云いたいのは、うしろ手にしぼられて、苦しうにしているという状況は大変いいのです。ですが顔に対してだけは、そんな苦

しそうな、西洋式のサルグツワをはめずに、もっと女としての美しさ、やわらかさを出すようなものにしてはどうかと思うのです。

女の人の口と鼻を手拭でおおった顔というのは大変美しいと思います。また大きな猿ぐつわをされて目をつむって下をむいている姿など最高と思います。また口をふさがれているということは、呼吸困難にも通じて、なにも無理に口だけをきつくおおわなくても、立派に役目をはたしていると思います。それで、僕はその女の人の顔を最高に美しく見せる大きなサルグツワをマスクにおきかえてみたのです。それは、せめられて、くるしい女の人の顔をもっともっと美しく、又やわらかく、やさしくするために……。

そのマスクを黒い革のものにしたらどうでしょう。うしろ手にしぼられ顔は美しいそのまま、ただ

口と鼻を黒い革におおわれ、熱い吐息をはきながら、「ゆるして」と哀願している女の姿、すばらしいと思います。黒い革のマスクはオートバイの部品店にゆけばかならずあります。なるべく大きいのがいいです。鼻の頭を中心に、左右にはほになだらかにわかれ、鼻の頭と口のあたりが、まるくもりあがり、そのもりあがりぐあい女の人胸の曲線に似て、なんともいえないうやわらかなムードをかもします。又革のマスクの上から豆絞りの手拭などできつくぴっちりとおおうと凄くすてきなやわらかさがでると思います。

アイデアとしてはモデルさんをはだかにしないで、(一)、着物すがた。(二)、B Gの姿。(三)、家庭の主婦の姿。(四)、看護婦の姿。(五)、女学生の姿。(六)、踊り子の姿。(七)、水着姿。等々です。

(写真は中河恵子嬢)





# 告白 秘かな願い

池永敏子

私は結婚して二年になる人妻です。BG生活一年半で現在の夫と見合結婚をしたので世間のことは余り知らず、今も子供のいないまま読書やテレビに平凡な日々を送っております。先日、円地文子さんの「月愛三昧」という本を読んだ

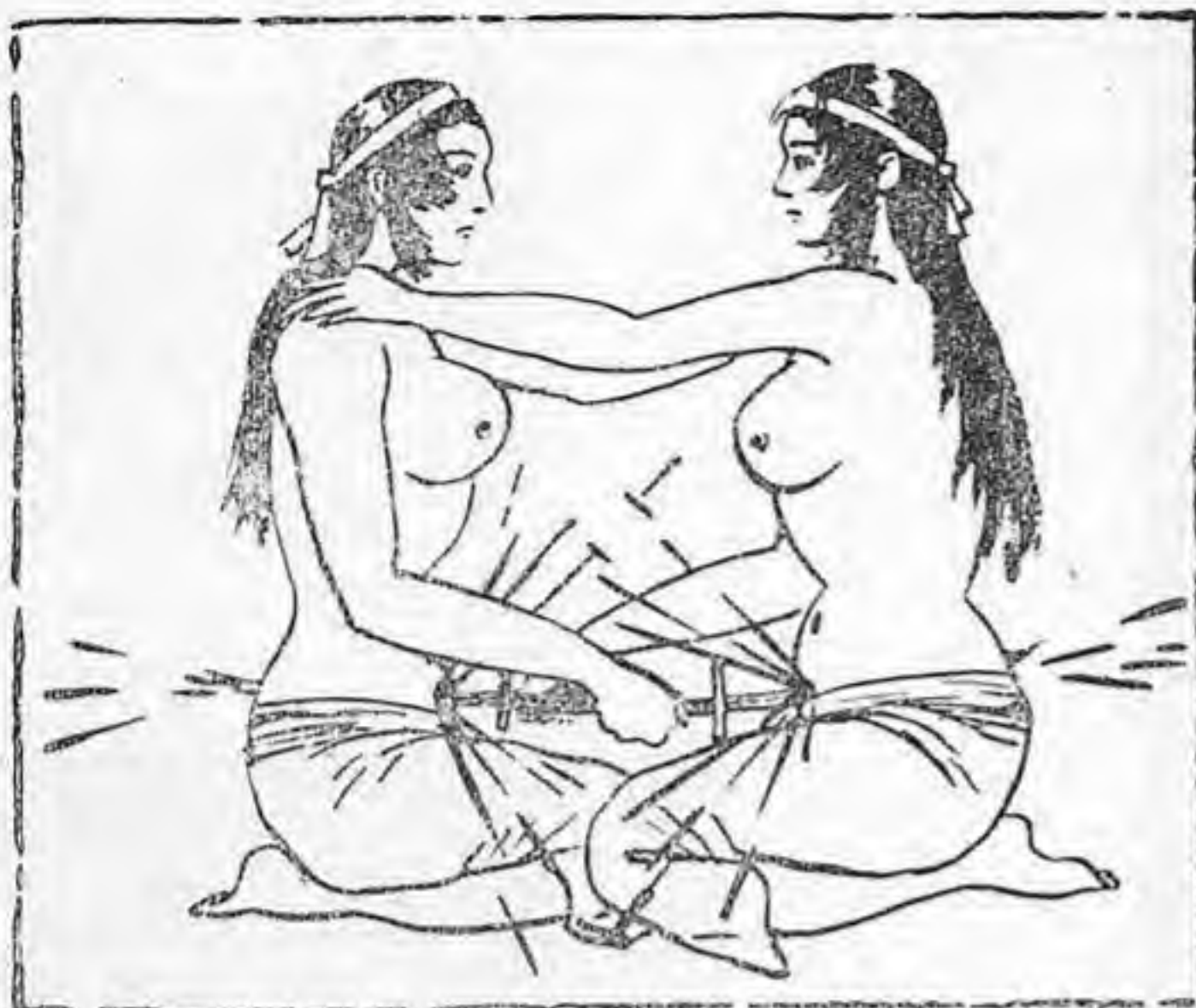
ところ、或る財閥の御曹子と結婚した七重という新妻が昔の恋人とデートする場面が出てきて、思わず興奮させられました。私もまだ二十三才になったばかりの新妻ですが、この新妻のよろめきを読んだ大変興味を抱きました。

文中に、——七重は時々神経的に顔をしかめて、「痛いッ」などと叫んだが、そういう時ののけぞるように首をのばして、眉をひそ

め、唇を噛みしめる表情には、責められている女のような無慚な美しさがあって——云々といった個所があり、貴誌を時折り拝見している私にとって、とてもひかれるものがありました。著者の円地文子さんも、こういうことに関心を持っておられるのではないかとかんぐってみました。

平凡で平和な生活を送っている私に、悪魔のささやきのように誘惑するよろめきの心理、それにもまして、一度思いきり異性の方に責められてみたいという大それた願い。でも私には恋人といった人もありませんので、せめて夫にくれて責めのモデルにでもなってみたら、という秘かな望みが、小さな胸をさわがせるのです。

七重の夫のように私のよろめきを夫が許してくれて、一層激しい愛を注いでくれたらと——。



切腹画は「血」というものの持つ独特の無残感が、陰惨な臭いを強め、愛好者以外は眉をひそめるだろう。Mの極致だろうが、同じ無残絵でも「縛り」とは根本的に違う感じを与える。女性美との兼ね合い、切り口の強調に伴う構図、苦痛の表現法等、とても千差万別とは行かないから余計に難しい画材といえよう。

◎上、桐原紫門・画  
◎下、新井伸治・画





## 会津娘子軍戦史

## 白 刃

## 六角京之助

柔肌に秘めし烈々たる会津魂。キリリと締めた白鉢巻もりりしく寄せ来る敵を迎え撃つこと数刻。女といえど城を守るの心意気、綿の如くなりし体に赤き血潮燃えたぎり、雪のハダをほんのりと染め上げ、敵と共に疲労すら寄せつけまじき奮戦ぶり。

戦いわれに利あらず、無念や、味方の勇婦も一人、また一人と壮烈なる最期を遂げ、四囲を取り巻くもの、すべてこれ敵の白刃。もはや勝敗は明らかと覚ゆ。

今はこちらまで。……花の紅唇キリッと噛みしめ、たおやかなる胸の内に決したる悲痛なる覚悟。この身、女なれども会津藩の戦士、武士の娘の最期をみよ！

斬りつけて来る白刃を打って返したとみるや、さっと退いて、ピタリと正座。いぶかる敵を美しき眸に微かなる笑みすら浮べて制止し、静かに押し脱ぐ愛用の刺しぬのこ。血なまぐさい戦場に、突如として咲いた麗花一輪。

太刀振う力ありとは信じ難い柔軟な線を流し、覚悟を秘めた胸許に艶やかな双丘が息づき、誇りと羞らいを包み、豊かに揺れる。

見よや！……紅唇を衝く気合いと共に、グッと柔肌を裂き通る白刃。凄烈にして華麗。悲しき運命のもと、若き美花、自らここに散らんとす。惜しむべきや、讃うるべきや。思わず息をのむ敵兵。時を同じくするように、会津城から炎が憤き上った。





## ＜短歌＞

## せり市の女

高村初子

○ 後手に括られしまませり台の杭  
 につながれうなだれており

○ せり台に裸身を晒す女等を思う  
 わが身は胸さわぎいぬ

○ 後手のまませり市にひかれゆく  
 娘等の肌紅に染まりつ

○ 後手のいましめ悲しせりのごと  
 肌改めの手を避けがたし

○ とり囲む人の目こわしつながら  
 て杭に身を寄せすくみし乙女

○ 守りきし乙女の操今ここに踏み  
 にじられて金にかえらる

○ 売物に飾りの紅が赤くして揺れ  
 るリングの緑うつくし

○ 荒むしろかこいし小屋につなが  
 れて玉しらべ受く耳輪の乙女

○ 次々に買い手きまりて連れゆか  
 る娘等の背に陽ざしあかるし



## 最近の

## 縛り映画

東山映史

最近の独立プロの作品には、縛りシーンも趣向がこらされてきたが、拷問の方法にも変ったこったものが見られる。

「肉の爪あと」は、トップシーンから外科の手術台の上に全裸で縛られた裸女。それを手術し腹部を切開せよ、と強要される外科医。まだ生命があるのかビクビク動いている裸女。殺すのがいやなら殺してやると、ピストルで裸女を射つ。ピクッと動いて彼女は死ぬ。そして腹部をたち切られる。密輸品のワリフの半片を飲みこんだというので、それを取り出すための荒療治である。彼女―林美樹？が、そのワリフの行方を白状せよといわれ拷問されるシーンが、こ

ったものである。それは氷責めで、緊縛された裸の肉体の上に氷をのせられるのである。ヒイヒイ泣き叫ぶが容赦なく責められる。氷責めとは面白い。夏向きというところか。

「いつわりの処女」美矢かほる主演のもの。パンパンだった彼女が友人とともに更生しようとする。だが、色々の迫害にあう。友達と同宿の者のリンチにあい、ホウキを背負わされて緊縛される。最後に美矢かほるも、昔のボスに発見され連れもどされ緊縛され、部屋中を引きずり回されるシーンは観物である。

シルエットのような描き方だったが迫力があつた。

本誌に「誘拐」という題名で掲載された作品が「鞭と肌」という題名で上映された。「花と蛇」のシリーズものというもの。山本昌平扮する津村が、パンパンの桂子（林美樹）や、社長令嬢の美津子（美川恵子）社長二号の里見（志村曜子）らを縛り上げ鞭打つのだが、さすが「花と蛇」の団鬼六先生の作品だけに、ツボは心得えている。とくに、林美樹のパンパンが「慰めてあげるわよ」という言葉で、彼女を縛りあげ逆エビ縛りにしてムチ打つシーンは、ゾクゾクさせるほど真剣だった。

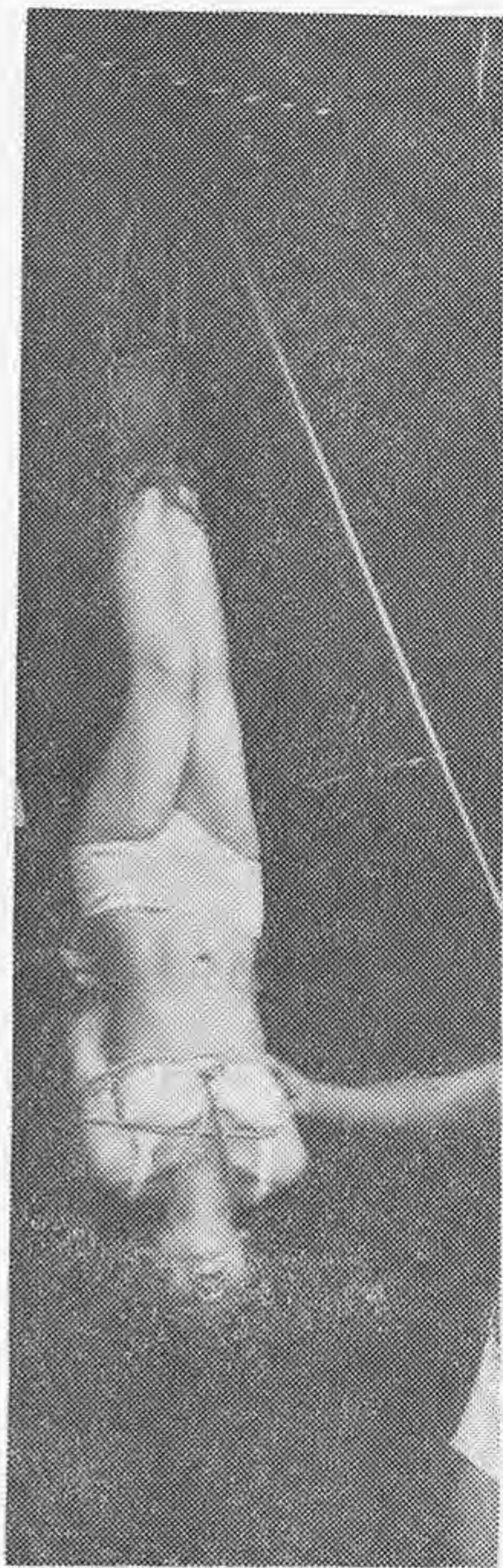
本誌の八月号で、団先生が脚本にない逆エビ縛りを行った、と書いていたが、なかなかよかった。「花と蛇」の京子のシリーズも映画化すると書いていたが、林美樹の木馬責めなど秀逸だろう。美川恵子の美津子の半裸の立縛りは、まだ堅い青い乳房を荒縄で縛りあげられ痛ましかった。

大映作品の市川雷蔵の眠狂四郎で、久保菜穂子を逆さ吊り責めのスチール写真を見たが、五社作品にも吊り責めにするシーンのポスターが出るなど、大いに楽しませてくれる。



## 緊縛の屋外実験

田 宮 恭 介



映画通信

私の観た

緊縛映画

細川英治

私の観た緊縛映画の中で一番すごいと思ひ生つばの出る思いで観た映画が二本あります。

その一つの若松孝二監督の異色イデオロギー作「胎児が密猟する時」は内容も物凄くS的、主人公が一人のうら若い女性を一匹の牝犬として飼育するさまが徹底的に画かれ、初めから終りまで縛りと鞭打ちの連続でした。この映画は本誌でも、これまで何度も紹介されていきますので、これくらいにしておきます。

もう一つはイタリア映画で題名「悲しき奴」というのが、とても凄かった。内容は、若く美しい女をみるとたくみに誘惑して、自分の別荘へ連れてきて先ず可愛がり時をみはらかつて男は麻酔液を浸したハンカチを女の鼻に当て気を失わせてしまう。そして地下室へ

一旦、火のついたプレイへの想念は、日毎夜毎欲求に拍車をかけて、ついに過日妻の寿子を、室内から屋外へと引っ張り出したのでした。高々と逆吊りにしたい欲望――。梯子への逆さはりつけ縛りが、その日の目的です。屋外ということで、寿子は最初躊躇したのですが、私の飽くなき要求で、あらがいもならず承諾しました。始めての実験が実現出来ると考えただけで、早くも私の胸は高鳴る思

いです。

小柄な妻を部屋でパンティとブラジャーのみにしまして後手に縛り上げ、私は縄尻をとって裏へ出ました。隣り近所が密接していますので物音にも気を配り、声を殺し乍ら二人ともハダシになって、いよいよプレイ開始です。物置き

の壁際に、鉄製の脚立をもち出しました。これは脚立にもなり、伸ばして掛金をはめると梯子にもなる、よく電気屋などが使用する便利梯子です。脚立にした片面に妻の寿子の体を凭れさせて、両脚を脚立にそわせて開かせて、足の方は昔から家にある巻脚絆で縛りつけてゆきました。逆さに立てるので、足が痛くなるのが或る位ひどい細い縄よりはましと脚絆をえらんだのです。腰から胸にかけては絆々と、何本ものロープを使って縛り上げました。後手は、別の短い縄で数重巻いてかたく縛りました。豆絞りの猿轡をはめるといよいよ行動開始です。私はもう一度近くの家々の二階の窓や、辺りの気配を窺い終りました。午前十一時頃の水曜日ですので、人影もありません。直ちに脚立の二本の鎖を外し、梯子に脚を伸ばして、し





っかり止め金をはめました。梯子を体ごと抱えて、足の方から力を満身にこめて立ててゆきます。妻の体は逆さに垂直になり、全身の力がぐんと上半身に落ちた感じですが、必死に油汗をかき乍ら梯子の足をやっと物置の屋根にかけ、見事に梯子の逆さ縛りは完成しました。寿子はやや苦しげに眼をとじ顔は徐々に高潮してゆきます。私は大急ぎで十数枚ばかり角度をかえてとりまくりました。所要時間約四分間。その間、寿子は声を殺してたえました。

翌日も幸い天気でしたので、この日はすぐ滑車による逆吊りの実行にかかりました。滑車の一個を梁にしっかりと結び、もう一個を両脚を縛った細帯に結びつけて、下から吊り上げてゆくのです。これは長尺レリーズを利用して、つり上げて行く行程をとりました。カメラはこのために新たに買ったリコーの連続ショットのカメラです。このカメラは今日の逆吊りがとり始めです。うまく撮れることを心に願って、私の作業は始まりました。

小柄といっても女一人、吊り上げるのは流石に力が入ります。ウンウン言いながらも妻の体が、徐々に足から吊り上り、ついで頭が地上を離れ、十センチ、二十センチと上って行く時は、身のふるえるような快感にジーンとしました。のどがカラカラになってきます。こうして寿子の両足が、梁にほとんどすれすれになるまで高々と吊り上げた時、私は全身で快哉を叫んでいました。遂に念願を達した。やったぞ！というこたえられない喜びでした。地上一米以上も吊り下って、妻は、全身の重味を、わずか一本の脚首の紐でたえていました。

プレイを開始して僅々二カ月足らずで、ここまでのことが出来るとは、まさか私も想像してはおりませんでした。夫婦プレイの真髓にはまだまだ到達しませんが、私の妻への飼育は一応成功したようです。

今回はその時撮った梯子逆縛りと、逆吊りを二葉紹介致します。奇巧の夫婦プレイの皆様、おくれませですが私共を仲間に入れて下さい。

編集長様へ——。辻村隆氏より連絡がありました。今からその日を期待しておりますが、早速にいろいろとお手数煩わし、有難うございました。

ひっぱっていくと、たちまち女を素裸にし、自分の愛用のムチでビシビシと女を打つのである。気がついた女は恐怖と苦痛に顔をこわばらせ目をつり上げ逃げるが、又男に連れ戻される。今度は女を太い鎖でつなぐと、天井から吊るし、いろいろな責め道具をもち出して痛めつける。吊り下げられさなまされた女は、やがて息絶える——という筋書きであるが、地下室の責め場たるや圧巻で、Sファンにとってはかたずをのむ思いであつた。

又、同じく洋画で「白い肌に狂うムチ」というのも、鞭打シーンに見るべき処があつた。イギリス映画「コレクター」も凄い。コレクターとは収集家という意味だが、この映画の主人公の収集物は若い女の子ときている。町の若い女をつかまえてきて地下室の中で飼育する。部屋の中では比較的自由に生活させるが、そのかわり風呂へ入るときも便所に入る時も監視つき、逃げだそうものなら髪の毛をつかんで引き戻し、さんざんもて遊んだ上、しめ殺すといった極めてS的要素の強い作品だ。又、日本映画では「砂の穴」の鞭打ちがすばらしい。





— 結 婚 祝 —

栗 瀬 長

「〇〇君御夫妻バンザイ」  
「元気でやってこいよ」  
「おしあわせに」  
東京駅新幹線ホームの午後、  
こうした華やかなムードがいっぱ  
いの、結婚シーズンがやってき  
た。今年のはひのえうまの心配もす  
んで或る程度の好景気と、長年に  
わたる大平ムードも加わって、結  
婚式も次第に派手になっていく傾  
向とかいう。

派手なのがいいか悪いかは別と  
して、若い時は二度と来ない、ま  
して、一生に一度——原則として  
——の結婚式とあれば、或る程度  
の派手は許されてもいいのではな  
からうか。  
結婚は人生の墓場などと、生半  
可な人生論をぶつ人、プレイボー  
イを気取った人などが口にする。  
一応公序良俗に従い、一夫一婦制  
をとり、子供をもうけていけば、  
青年もやがてロマンスグレイとな  
り、ういういしき新妻も世帯やつ  
れした古女房ともなりかねない。  
日常の夫婦和合もマンネリ化し、  
そこに何の感激性もなくなれば、  
これぞ人生の墓場といえるかも知  
れない。

しかし、我々奇ク同人はいささ  
か人生墓場論には賛成しかねるの  
ではないだろうか。妻を飼育する  
喜び、或いは妻に飼育される喜び  
が、結婚を前提として待っている  
のだ。  
縛りあり、鞭打ちあり、操りあ  
り、鼻責めあり、浣腸あり、ア  
ヌス・コイツスあり、さては神酒  
の饗宴ありという所で、夫婦の生  
活は、墓場どころか、年を経るに  
従って、各種のテクニクの深奥  
を次第次第に深めてゆく道程に他  
ならない。他人、第三者ならば、  
往々にして社会的問題となるよう  
なプレイも、愛を基礎として夫婦  
なればこそ、誰はばかりともな  
く、思い切ったプレイも行える  
という次第、人生の喜びは、かくて  
結婚において始るといって過言で  
はないと思う。

閑話休題

こう、友人知人後輩の結婚式が  
相續くと、式への出席は何とかご  
まかすことも出来るが、お祝いだ  
けは欠かすことが出来ない。戦後  
の物資不足の折ならば、毛布一枚  
でも貴重品であったが、こう物の  
豊富な時代となつては、すべての  
お祝い品が陳腐に見える。電気製  
品、コーヒーセット、寝室用品、  
何をとってみても、もう既にそろ  
っておりますというものばかり。  
そこで、或る結婚祝品を用意す  
る日、デパートの進物相談係に聞  
いてみた。  
すると、案外持っていそうで持  
っていないのが、そして家庭をも  
ってから必ず必要になるものが、  
家庭救急箱だという。最近では案  
外二、三千円のデラックス家庭救  
急箱に、のし紙がはられてゆくの  
だそう。

一応よきアイデアだと思う。私  
も早速それにすることにした。だ  
が、お祝いのしをかけて包装しよ  
うとするのを押しとどめ、のし紙  
と包装紙をもらって、そのまま持  
ち帰ったのである。  
所謂、マーキエロ、オキシドー  
ル、ヨードチンキ等の外用薬に、  
胃腸薬、感冒薬、眼薬に、うがい  
薬、絆創膏、ピンセット、綿棒、  
脱脂綿、ガーゼ、体温計の類だけ  
では私には物足りなかった。何故  
かって、贈るべき人は少なくとも  
私の同志エネママニア、奇ク同人  
だからである。  
私は神田の医薬品問屋をまわつ  
て、次の品々を用意し、この救急  
箱に加えたのである。スペースの  
関係で、平凡な胃腸薬、眼薬、軟  
膏の類は、取り出して我が家の救  
急箱におさまってしまった次第だ  
が。  
先ずイチジク浣腸の二〇グラム  
入り二個。三〇CCグリセリン浣  
腸器に、五〇グラム入りグリセリ  
ン。洗滌、浣腸両用に見えるゴム  
スポイト。それに、やがて必要に  
なるだろう婦人用体温計と、サン  
シースキン一箱を添えた。もし  
て、人ぞ知る、赤白だんだらの縄  
を一本加えたのである。この紐が  
若き奥様の手足にまとわりつい  
て、この浣腸器が、その機能を有  
効に果されんことを、心より期待





## 奇ク……

## 偶感……

基円江須男

一、奇クは仲々面白い。クライマックスの時に、正義の味方が入って来ないから尚よい。

一、奇クを読んでもしまったら、好きな場面を切りとって保存し、後は捨ててしまうようにしている。

一、自分に関係のない箇所は、見るのも嫌だからだ。

一、ガンジガラメに縛った写真は嫌だ。拷問の写真なら他誌にもあるし、しかも、もっとえげつない絵もある。奇クは、もっと特異な狙いがある筈だ。

一、〇〇夫人だとか、〇子だとか、登場人物の年令(数え)も入れるとよい。八月号では四十才と出ていたが、たいていの場合、年令がない。時間の経過もない。

一、花と蛇以外の小説は、前文が長い。苦悩の描写が短かすぎる。

一、オマル、バケツ、花瓶など出てくるが、最後に一度にドッと排泄する文になっている。浣腸と排泄の違いがない。

一、短歌はうまい。

一、自分で空想したり、短いものを書いて、楽しもうと考えている。

一、二度ほど、縛ったことがある。妻を縛ったが(十数年前)なかなか大変だ。Mの要素ゼロだから抵抗が大きくて、しまいには里へ帰るといった。せっかく縛っても、少し動くと解けてくる。当時、手錠があれば、と思った。かけ易いし、解けないだろう。

しつつ。

勿論、奇ク同人であり、アヌスエネマニアである以上、エネマシリンジ、イルリガートル、或いは差込便器、大人用おむつカバー、新型ショーツ等考えられるが、あまりに刺戟的と思って御遠慮した次第、いや、こうしたものは、君が次第に奥様を飼育するに従って漸次、適当なものを用意すべきものである。と考えたのである。

奥様に奇異の感を与えぬよう、

浣腸類を一カ所にまとめぬよう、配列には気を配った。君はすぐ理解してくれると思うが、このお祝いを開いた時、君の奥様は何と思われようか、案外、何でもなく受取られると思うが、ただ、この一条の紐を、君はどう説明するだろう。

こんな空想を楽しみながら、私は私なりに心のこもったこの結婚祝いの品に、静かにのし紙をかけるのであった。

私のイメージ画 『菰包配達』 宮城昌子







あなたも一ついかが？

## 特製下着カタログ

山田 佐一

### ○独身男性専用バンド

すばらしい夢をみながら、ついお粗相された経験をお持ちの方は、少くないことと思います。どんな場合にも絶対洩れない、ベッドを濡らさない特製バンド。色は白、黒、ブルー、のズロース型とパンティ型。内側は薄手の総ゴム張り多量の月のものに悩む女性にも愛用されています。

### ○高校男子用運動サポーター

体育の時間、競技場などでブルマー姿の大腿もあらわな女生徒に刺戟されて、つい恰好が悪くならないために用いて下さい。目下、高校生間で評判になっています。特製堅牢のゴム編みサポーターで

色は白と黒。万一そのまま粗相されても、絶対にパンツを汚したりしないように内側はビニール張り、ぴっちりしまった、穿き心持満点のサポーターです。

### ○受験学生用能率おしめカバー

一刻の時間を惜んで受験勉強に精出されている受験生向きに特に工夫されたおしめカバー。朝一回五重に重ねて股間に当て、その上からビニール製ブルマーを穿いておけば、二十四時間、大丈夫。トイレに立つ時間も節約できて、勉強の能率は上がります。大便も兼ねる場合には、紙おしめを当てて、そのまま捨てられることをおススメします。灰色の受験生活に、せ

めてものくつろぎを与えるよう。色はピンク花模様、オレンジのチェック模様など、いろいろあり。

### ○SM一人遊戯用各種下着

相手もなく一人で二役を演じながら、サドおよびマゾを楽しむ方のために、各種女装用品も揃えています。メンスバンド、ズロース（白、黒、紺）パンティ（色もの花柄、十二色）コルセット、ブラジャー、シュミーズ（十二色）、皮製パンティ、コルセット、ワンピース、ツーピース、カツラ、ハイヒールなど。また二〇〇CC大型浣腸器、一〇〇CCイルリガートル、ビニールひも、ビニールシートも取り揃えています。女装できちんと正装されて、グリセリン二〇〇CC浣腸を受けられて下さい。広い黒色ビニール・シートをベッドにしいて、その上で手足をビニールひもで縛って下さい。三分、五分……あなたは迫ってくる苦痛にスカートの裾を乱しながら、ついに……。

### ○ひそかな愉しみ、紳士用下着

あなたのズボンの下に、まさかピンクのレースのついたパンティが穿かれていようとは！あなたのワイシャツの下に、黒いシュミーズがつけられていようとは！

金色か黒のサテンの光った踊子用パンティを穿いて、銭湯においてになってみませんか。紺色の女学生用ブルマーを穿いてトルコ風呂におでかけになりませんか。

### ○紳士いたずら用下着

一週間もつづけて穿き古した白いズロースの前が、黄色くシミのついたものを物干場に大きくひろげて干してみして下さい。団地アパートの共同干場が効果的、干物にきた若い奥さん方の反応がたのしめます。もし勇気を出して、女学生の寄宿舎の物干場にそれを広げられたら、もったのしいでしょう。あなたは、アパートの屋上から望遠鏡で眺めて下さい。黄色く変色した上に、濃い芳香のたちこめるようになったパンティやズロースなら、もっと興味があります。

○妙令の御婦人のもとに、大きな大人用おしめカバーをプレゼントしましょう。「お役にたてば幸いです」と一言そえて。

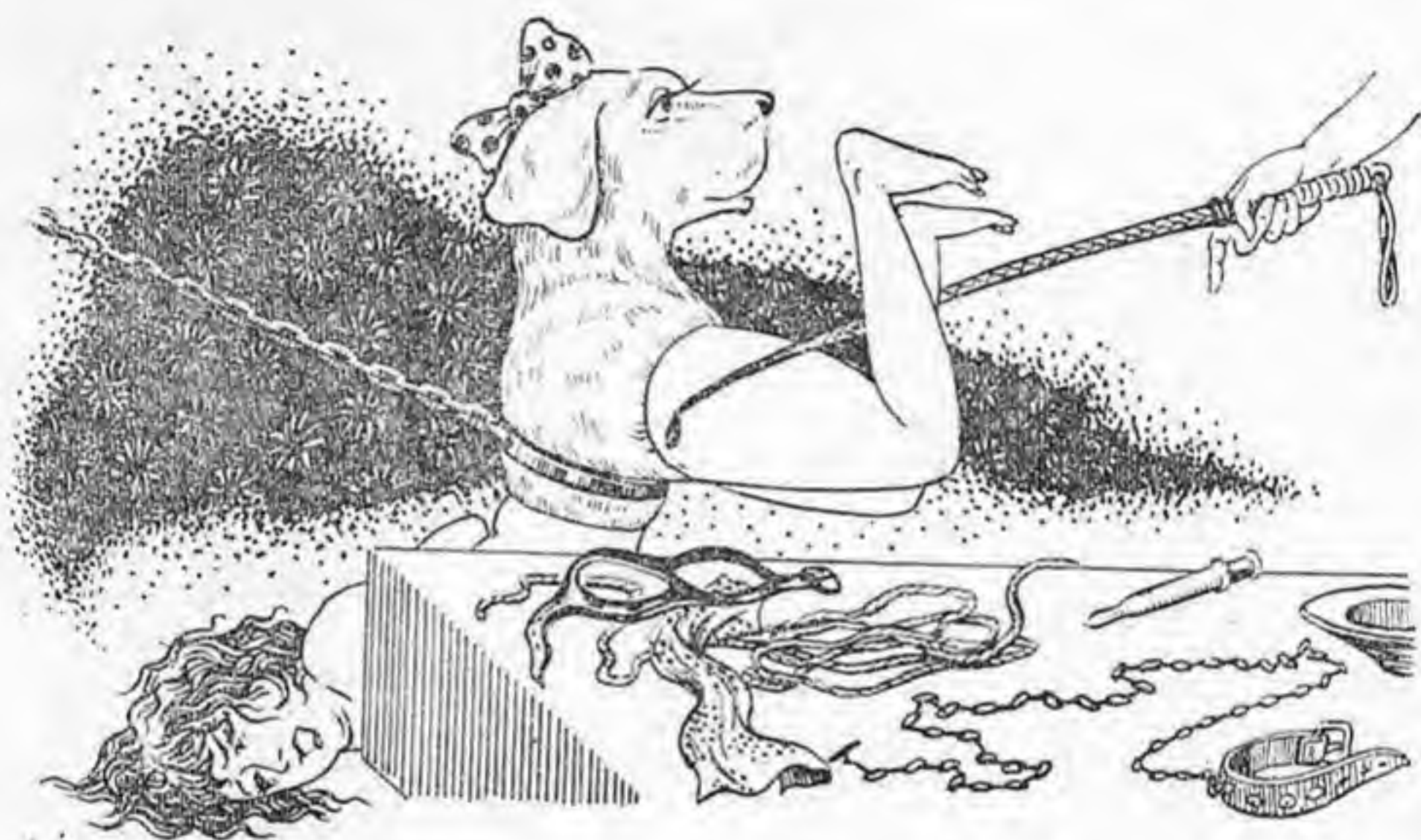
夏で運よく窓が開放されていて、それを開く御婦人の表情が望遠鏡でキャッチできたら最高でしょう。案外、こっそり着用してゴムの感覚を愉しむ女性もいないとは限りませんよ。



# 奇譚クラブ

昭和42年10月号

(1967年・10月号<第21巻第10号・通刊第232号>)



## 本誌自粛の徹底

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する平和で  
 穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象  
 として編集しておりますが、青少年の保護  
 育成に関する条例には抵触しないよう、十  
 分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ  
 ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵  
 の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順  
 次整えて参りましたが、更に挿入写真の減  
 少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な  
 どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺戟の強いもの  
 は極力掲載しないようにするのは勿論、掲  
 載した文章は十二分に検討を加え、いやし  
 くも青少年の健全なる育成に支障を与えな  
 いよう努力いたします。尚、本誌の発行部  
 数は最低限度にとどめ、その増大を企るた  
 めの努力はいたしません。



よ み も の つ む ぎ う た

読

物

紡

唄

△自称雑学博士書拔帖▽

江<sup>え</sup>

川<sup>がわ</sup>

詩<sup>うた</sup>

二<sup>じ</sup>



△文化検閲のイズムに、戦前も戦後もないことは疑いもなく指摘できることですが、ここに、例えば昭和初期の軟派本出版弾圧が小林多喜二の拷問死や満洲事変に間接的につながったという、歴史上の教訓をもってくることは、民主主義世代が確実に育った今日においては、水鳥の羽音にも逃げ出す平家の軍勢の思い過しに似ているような気がしないでもあ

りません。なに、悪書追放運動を支えたPT A純潔族に対する点数稼ぎさという見方、いやいや思想統制の前触れであるという危惧などなど、最近の検閲のハッスル化に対する反応はさまざまのようですが、われわれは『風流夢譚』事件によって、いうならあの人間的な『侮蔑の思想』が大声で語れなくなったことと同じように、相つぐ取締りによってあら

ゆるエロチシズム文学が自己検閲を課することを、先ず、何をおいても恐れるべきでしょう。フランク・ハリスやヘンリー・ミラーの翻訳が規制のなかに自らを押しこめていっているちは未だしも、そういう自己検閲というものは、大江健三郎や倉橋由美子、そして遂には舟橋聖一・丹羽文雄でさえも自らの規制のなかに閉じこめてしまわないとは限らないから



です。

―『続発禁本』 城市郎・

桃源社版(40・11月刊)より―

筆者 雑感

新しい風俗文献誌『奇譚クラブ』が後世に残るべき価値の理由については種々とあろうが、私はそのひとつに、年月を経て散佚すべき運命を持つ、または、特定の収集家の手によってあたら秘蔵、陽の目を見せないこれらS・M・F等の風俗文献資料を八原稿募集という形で広く求め、記録、再評価をふくむ誌上発表という地味な編集構成の点を取り上げたい。いま「明治百年」という言葉がさかんにP・Rされている。過去の歴史は、そこに予言的叙事詩が流れていることに意義があり、そして八風俗史は雑草の強さを持つ民衆の手による世界の物である。かつてマニアが存在した。いまもマニアは生きている。それらの交流は、新しく発表される告白、手記小説など、ジャンルの刺激ともなり、「SM文献紹介」等のタイトルで奇ク発刊の一部になっていると信じたい。

いま、風俗文献市場を見ると、昭和三十八年度までは「風俗文献」も古書通信、直接古

書街散策などである程度入手も可能であったが、現在は、大分底をついてるような状態を思わせる。たまに見かけても、例えば「犯罪科学」昭和六年当時刊など、時価一冊五〇〇円前後(発刊時定価六十銭)。

昨年(四十年)の夏。東京、神田の某古書店で、奇クの二十八年十二月発行・臨時増刊号『アリスの人生学校』が一、五〇〇円の値が付いてあるのを見た(定価百円)。要するに品薄と、静かなる風俗文献ブームが価値をもたらした現状と推測される。

これは「明治百年」という言葉が郷愁をもたって風俗回顧的な意味で各種文献がよりクローズアップされ、収集欲が市場に反映されたこともあるが。ヘンリー・ミラー。サド文学などのセックス文学が一層の評価をなされ、続々と翻訳、紹介される一方『日本人の性と習俗』――民俗学上の考察――。ドイツ民俗学者クラウスが日本民族の風俗とくに性風俗に視点を置いて、きわめて詳細に正確に描いた資料を集大成した物が、安田一郎訳によって新刊(桃源社)されるなどなどようやく単なる好奇心より時流が八性風俗追求の正しい一手段として『風俗文献』に関心を持ちはじめた傾向と、私流であるが一考

される。余談になるが、例のエロダクションの全盛もこれからは八エロV的セクショナルなものよりはSMをモチーフとした一夜漬でない本格的な作品が、ようやく眼のこえてきた観客の要望を満たすことになるうか。

――さて、手前味噌的な話になるが、幸い私は、未だ収集が安易であった頃に雑多であるが風俗資料を若干入手、いまも保存している。これから益々、内外共にSM研究の名門たる真価を発揮する「奇譚クラブ」の誌上に再度、八書抜帖Vを送ることを実に光栄と存するものだ。

○

近頃の本誌を見ると制約下の故もあるうが八異常V八変態V八性欲Vなどの表現はタブーの如く、ま・ま・こ・あ・つ・か・い・さ・れ・て・る・よ・う・に・思・わ・れ・る・が、大正後期より昭和の初期、軟派本華やかなりし頃は、むしろ逆手に取って「オ・イル変態」と、なりもの入りで八変態文献叢書Vが出版されたり、その名も「変態資料」「変態黄表紙」などの風俗雑誌も出た。それ所ではない、その著に「大悪書」の題名を冠した性風俗研究家もいたほどである。

時代の背景事情も違うK誌にそれを望むわけではないが、あのエロ・グロ・ナンセンス



時代の書物を手にしてみると、つわものどもの夢の跡がうかがわれて微笑を禁じ得ない。

——その時代。

『艶笑百貨店春期大売出し』という特集が、  
△デカメロン▽昭和六年三月号にのっている。その「四階・書籍文房具美術品・猟奇の書棚」

△それから軟文学讀訳ものでは、「完訳デカメロン」(森田草平)。このデカメロンは面白い完訳で、ずうっと読んで行っていよいよという所へくると(三頁省略)そして此処はと思うと(以下略)と云う風に出来ているもの。完訳とはつまり話の数は完全に百だけある訳本と云う意味らしいです。日本で一字一句も伏字、欠字のないデカメロンの讀訳が出たら大したものですよ▽とこう書かれてあるが、デモクラシー、出版の自由たる昭和四十二年度の現在は「大したもの」となって、デカメロンは岩波文庫版全六冊などで、文字通りの完訳が出ている。いま評されている「制約」も考えようでは……?

また△「奴隷祭」(酒井潔)アレラ著の原本では、あちらも珍本中の珍本に属する奴です。多少の伏字は止むを得ないとしてもとにかく、好色鞭打小説最初の邦訳本ですから、

一冊位買って置いて損ではないでしょう▽と文章は続いているが、この言葉を信用するとすれば、公刊された△鞭打小説▽邦訳本の元祖として興味が深い。ただし、私はこの本を所持してないので『譚奇』第六冊(酒井潔連続著述)という昭和五年十月発行・竹酔書房の裏表紙にあるPRを転載して置く。

△談奇群書第二編・酒井潔訳並装幀・代表的鞭打小説——肉の呻き——「奴隷祭」秘画十数葉入、四六版三百余頁。定価壹円五十銭▽  
「世の好奇者、彼の鞭打小説の淫虐奇怪なる事を聞くや久し矣。されど、それが邦語に移植されし事未だあらず。猟奇人の渴望亦察す可し。時はこれ奴隷道華かなりし十九世紀の中葉、淫虐飽く事を知らざるアスコット卿とチバースとの、妻を賭しての骨牌争いより、此の物語は展開され、以後章を逐い、編を重ぬる毎に、全巻臓肉の蠢動、体臭の乱舞、血走る鞭打、恥知らぬ露出、裸肉と裸肉の競走、猥雑の汎濫、虐待の快感等々を以て埋め尽くされ、見る者をして異常の悪魔的戦慄を感じしめずんばあらず」——となっているがいままから思うと、まるでそれこそ血わき肉躍るという形容びったりの大時代的名調子(広告文)である。S小説も、初期に讀訳発表された時

は出版社みずから「猥雑の汎濫」とPRしたのだから、おどろきいったものだ。

○

『世界艶本大集成』昭和三十四年五月、緑園書房刊。SMに関する資料のみを三篇紹介。

『臼と杵』

〔梗概〕原名は With Rod and Bun

(一名「倫敦ウエスト・エンドに於ける競技」)全一冊四六判。

オフエリヤ・コックスと称する若い女教員の実験談である。

著者は読者に向って実に驚くべき鞭撻の場面を展開している。全巻を通じて落下する答の響を以て終始一貫している。そして随所に目をおおわしむるような情景が展開する。

苛責なく打ち下ろされる答の下に、阿鼻叫喚の声々と共にひしめく男女の群、彼等は苦痛に堪えずしてのたうち廻るのであるうか、否、それとは反対に快感に陶醉しているのである。真白な、逞しい、雪花石膏のような皮膚は、間断なくムクムクと、上下に動いている。

『女教授ヴェーナス』(一名「鞭撻技戯」)。

原名 Venus School Mistress

女教授ヴェーナスは、単なる美しい若い女



性に過ぎない。彼女は幼い時から常に両親の鞭撻を受けていた。こうした境遇に育くまれた彼女は、成人の後、学校に於てよく鞭を用いることに興味を覚えた。で、云う事を聞かぬ生徒のいたけな臀部に容赦なく鞭撻を加えて快感を享受した。其後、彼女は他の学校に移った。そこでは彼女は助教授の格であった。彼女は先輩の面前で巧みに鞭を使いわけ感心せしめた。そして遂にその女教授が自ら進んで鞭撻的に立つまでに誘惑してしまった。そこで思う存分に自己の初志を貫くことが出来た。

『ホワード氏の生活記録』チャールズ・サックヴィル著。

内容はサディズムとマゾヒズムの交錯した物語。その本文四十頁には

「彼女の正面に現われた彼は、目にも留まらぬ速さを以て左右に展開された彼女の内股の両側に数条の打傷を作った。胫から膝へ、膝から股へ、と段々に上へ上へと鞭撻を加えて行つて、柔やかな肉体に血潮の跡を滲ませた。

彼は心を落着けて、この実験を試みた。そして彼の目前にちらつく真綿のような雪の肌を容赦なく鞭撻した。これ程惨酷な折檻は又

と見られない図であろうと思われた。然も彼女は其の苛酷な痛苦をよく耐え忍び、却つて相手を誘惑するが如きむき出しの両足を思い切り左右に引揚げた」

○

本誌四十一年新年号「宴はてて」辻村隆・山原清子対談で、辻村氏の「推理作家の高木彬光さんも、貴方のホリモノに相当魅入られたということだネ。あの人の『刺青殺人事件』なんか、アタのホリモノがヒントじゃないかな」。これについて山原嬢は「個人的に高木さんとは親しいけど、余り話すと段々素性がバレちゃうから、この話にはふれたくないわ」と答えている。さて、その高木彬光は、昭和二十七年五月号「あまとりあ」誌で（苦痛と快楽の絵模様）という題で寄稿している。副題は「刺青殺人事件」一篇を以て本格推理小説界の新しきホープとなった筆者の研究ノート。

刺青は、阿片のような魅力を持つ。一度その魅力を知ったら最後、人は容易に、その虜となつて、逃れるすべも見出せぬ。男の味を知った女が、金も結婚も目的とせず、ただ盲目的に男を求めて、ズルズルと底知れぬ泥沼の中へ落ちこんで行くような例も決して少く

ない。私は、全身に刺青を施した、ある良家の夫人を知っている。現存の人であるから、氏名の公表は憚るが、仮にA夫人としておう。このA夫人の刺青は、恐らく現存する日本女性の中では、最大のものではないかと思われるが、背中、両腕はもちろんのこと、その領域は胸から腹部、内股から膝の下まで及んでいる。その刺青の記録を、A氏は「刺青録」と名づける一冊の手記に秘めて残している。私はその写本を秘蔵しているが、その発表はここでは遠慮せざるを得ない。もとより夫人の刺青は、A氏の望むところであった。A氏もまた、全身衣服に蔽われているところ手首足首に至るまで、あますところのない刺青であるが、この夫妻の刺青の中、専門家の手に成った部分は、ほんの小部分にすぎないということは一驚に値する。夫が妻に刺青を施し、夫人がA氏の体に墨を入れたのであった。二人とも決してやくざ稼業や、水商売の人ではない。初めは、ほんの腕の一部に悪戯のように施した刺青が、不思議な愛慾を伴いつつ、ぐんぐんと拡がって行つたのだった。A氏がその間に中国へ長途の旅行に上った間に、夫人は孤獨に耐えかねて、自分の太股に自分自身で墨を入れ、懷紙にそのわき出る血



と墨をぬぐってA氏のもとへ送ったこともあ  
るらしい。また、別の懐紙に接吻し、口紅で  
唇の跡を写して送ったものが、そのまま朱で  
A氏の体に刻みこまれたこともあると、この

「刺愛録」は伝えている。専門家ならば、熟  
練と手先の器用さで、施術の疼痛を、最小限  
にとどめるのが常識とされている。だが、A  
氏のような手際では、恐らくその痛さは専門  
家の三倍以上に上っただろう。また出来上っ  
た刺青の芸術的香気も、名人といわれる刺青  
師の作には及ぶべくもない。だが、夫人はそ  
の三倍の痛さを忍び、A氏の針を喜んだ。

「東京の彫芳さんにも今更行けないでしょ」  
という山原清子嬢の言葉をまつまでもなく、  
玉取姫の刺青ある彼女がA夫人でない事は論  
を待たない。ただ、対談の中にたまたま出た  
(高木彬光)の名から、「夫妻の刺青プレイ」  
とも評されよう珍しいケースを摘出した。

某日、私はあるなじみの古書店で、その主  
人より(医者の書く雑誌)という物を一冊示  
された。

大判七十二頁。内容はオール医学博士級が  
執筆。一般向の編集がされている。表紙のモ  
デルには当時の花形スター・木暮実千代が女  
医さんにふんしてケン微鏡をのぞかんとして

いるのも変っていた。古書店の主人は(なん  
といっても、お医者さんが出した大衆雑誌っ  
て珍らしい)と言ってたが、私も未見の本だ  
った。

『ルック・エンド・ヒヤー』—性問題特集—  
(ZON) 昭和二十四年四月号。東京都千代  
田区駿河台二ノ五(日本医師会館内) 診療協  
力会出版部。

この中より、KK的と思われる読物をひと  
つだけ抜萃してみよう。

『マダム・チュソ館怪死事件』椿八郎。

(ロンドン市街も北寄りのメリー・ボン路  
にロンドン名所の一つとして数えられている  
有名な蠟細工<sup>ろうさいく</sup>人形の陳列館がある。この階上  
階下の部屋部屋に陳列されてあるマダム・チ  
ュッソーの創始にかかる等身大の蠟人形は実  
物と寸分もたがわず現代世界の著名人をもう  
らし又一部には英国史上に名を遺した偉人た  
ちがその時代々々の服飾考証も正確に立ちな  
らんで展示されているのである)

(階上階下の展示物を見物し終ったら鉄製  
の中世紀風な階段を下って牢窟式に石畳にな  
った地下陳列場へ歩を移してみよう。鉄格子  
の高窓から射しこむ薄明りで読まれる入口ア  
ーチにかかげられた chamber of Horrors の

古風な銅板文字から既に人々の妖しい好奇心  
をそそるに充分である。ギロチン——緒黒く  
鈍く光ったギロチンが立っている。この『恐  
怖の密室』へ一歩足を踏み入れた私たちの直  
ぐ目の前には仏蘭西革命時代に使われたその  
本物のギロチンが組立てられており、ギロチ  
ンのあの太蛇の刃のような重い斬首刀は今落  
下されたばかりというかたちで、血を噴いて  
いる胴体はうつぶせにギロチンの台上にのび  
ており、胴体から切りはなれた血みどろの首  
の方は私たちの足元に転ってきて薄眼を開き  
蒼ざめている。レ・ミゼラブルのテナルヂエ  
アを思わせる悪相をした斬首執行人は斬首刀  
を落下させてゆるんだ綱の一端を握み、ぎょ  
ろつく、ただれ眼で台上から私たちを見下し  
ているのである)

——これよりこの不気味な「恐怖の密室」  
を舞台として怪奇な事件が展開されるわけだ  
が、この作品は(推理小説)であるとだけ述  
べ割愛する。

この記事の他に『性問題23の扉』(サドの  
変型。フェチイズム。露出症などの項目があ  
る)等紹介されてあるが「サジズムはサド侯  
爵というフランスの狂人小説家の書いたもの  
が、アイテを苦しめることに終始している所



から来て居り（原文通り）”などの調子で書かれていたので書拔は不快になるだけなのでやめにした。

この雑誌の目次裏に、次号予告がされている。グラビヤ特輯（解剖室の実態）見学と解説・藤倉アナウンサーと上げられていたが、いまとなつては、見たくても入手困難であるう。（ともあれカストリ雑誌全盛期に出た物としては異色雑誌とは言われようか）

○

梅原北明が出した「グロテスク」も、風俗資料刊行会（竹内道之助編集）の「デカメロン」も、風俗文献的価値のある雑誌だった。モダンでより大衆的と言え、むしろ後者の方に軍配が上げられようか。ところで戦後も「デカメロン」（全日本出版社）という雑誌が出ている。これはもうカストリ雑誌の範チユウに入ると言えば説明は充分だが、ちょっとアブ的な、興味をそそられる記事があるので、少しばかりのぞいてみよう。

『怪奇座談・死体解剖室の女使丁ばかりの座談会』「デカメロン」昭和二十六年十月号。司会「ヘエ？死体の若返り法というの？」島司「生々とした生前の顔に戻す手術なんです。クロール石炭酸で洗顔して滑石でこす

ったり、いま一つの方法は防腐剤に色素を入れて注射する。私どもの施したのはこれですけど、その手術で死体の顔が、まるで生きて眠っているみたいに美しくなった」

沖「うちでも一度、そんな手術をやりました。受取りに見えた恋人（青年）が”この人は生前瞳のキレイな女だった。だから何んとかして、もう一度瞳を美しくする方法はないか”というのでグリセリンを注射したんですけど、これを打つとパツチリとしたキレイな眼になるんですね。そしたら恋人の男の人がいきなり死体にすぎりついて、皆の見ている前で眼にキスした」

島司「ある有名な捕物小説の本に——仰向けにしたら、真ッ白い血の気の引いた肌に、息を止めた血のり。さしづめ、数刻は経過した——と、書いてありましたが、ウソですよ。人間の死体っていうのは息を引取ってから三時間ほどたつと……どす黒くなる。真白な死相っていちどだって見たことない」

○

（この暑いのに都内ストリップ小屋は結構人が入っている。休憩時間など用心深く、席に鞆などをおいて確保しておく。前の席にカバンを置いて確保する風習だけは、東大二十

五番教室なみである）——これは『読物りべらる』昭和二十八年八月号の（東京意外誌）にのっている一節だが、いまだって、この風習は変らないようだ。

前章で（怪奇）な話を紹介したので（実は、本誌四十一年三月号。高野原美「小説・新解体新書」（下）に刺激されていたので、解剖という「デカメロン」の記事が気になったのである）この章はまず息ぬきにストリップを出した。さて、いささか古いものだが『文学時代』昭和六年八月号（マゾヒズム小説集）マゾッホ作（岡田三郎訳）の『城の女』と、以前ほんの一節のみ紹介した『二十五番目の鞭打』を改めて書拔して、この稿を結びとしたい（私の知る範囲では、近頃、K誌はもとより一般出版界でもマゾッホの作品があまり紹介されてないように一考するので——）

### 『二十五番目の鞭打』

恋愛は死よりもなほ強い。怖るべき身の破壊をすらも、恋愛は決して、厭ふものではない。パレスティン人の息子で、ゲットー年鑑には男爵の名をつらねてゐやうといふ、身分家柄も卑しくない一人の若者があった。彼は最近取引所に於ける失敗のため、散々に手疵



を負ふてこの戦場をよぎなく退かなければならなかったが、その気晴らしと一方金銭に対する執着煩惱からの解脱をかねて、折柄、ウ

インナに開催中の万国博覧会に毎日のやうに通ひはじめることになった。或る日のこと、

彼は偶然にもロシアの部で、一組の若夫婦と邂逅した。彼等もまたゴータ年鑑には男爵と記入されてゐる身分であつたが、如何に彼等の紋章だけは、古い由緒づきのものであつても、その収入はきわめて乏しかった。それを

知つてゐる、この、取引所出入の伊達者であるゲットーの男爵は、勇をふるつて、ゴータ

の美しいマダムに秘密の申し入れを敢行したが、女優であつたらすぐにも心奪はれるに違

ひない素晴らしい申し入れも、堅固な女性にとつては致命的な侮辱でしかなかった。彼女は

ゲットーの男爵に憎悪を感じ、その小さな頭を悩まして永い間復讐の方法を考へた。……

(そして或る時、マダムは毛皮商の前で陳列品に魅きつけられるが値段が高い。がっかり

する夫人の前に現れた若者が贈らせてくれと申し出る。夫人は怒る)……

マダムは思ひきつたやうにいった。

「わたし、あなたを鞭でぶってやりたいと思ふわ。あの毛皮を身に着けたヴィーナスが奴

隷を打つやうに！」

「奴隷にでも何でもなりますとも」と、若者はいふのであつた。

「あなたのお氣に召すまで、私はどんな苦しみでも喜んで受けます。……さうですとも！

この貂の毛皮を着けて手に鞭を持てば、それこそ、あの物語の惨忍な女主人公そっくりです」

男爵夫人は暫く相手を見ていたが、やがて独特の微笑を浮べた。

「それでは、鞭で打たれる事を、貴方は御承知下さるんですね？」

「たしかに承知しました」

「じゃ、二十五だけ、あなたは打たれるんですよ。それから先はあなたの御意のままになりますわ」……(そして約束の翌日)……

彼女はただ一人寝室で、黒い毛皮の外套にくるまり、長椅子に身をもたせてゐた。その

可愛らしい手は、犬を折檻する時に使う鞭を弄んでいた。若者は彼女の手に接吻した。

「約束のことは、覚えてゐるしやいますね？」と、マダムは問ひかけた。

「覚えています」と、彼は答へた。

「二十五だけ打たれて、それから先は、あなたは私のいふことをきひて下さる」

「そうですは。じゃ、あの両手を縛らして頂戴！」

忍に眼のくらんだ彼は、いはれるとほりにおとなしく両手をうしろに括られ、命令に従

つてそこへひざまづいた。彼女は鞭を振りあげ、激しい勢で四つ五つ打ちつづけた。

「随分こたへます！」と、受刑者は泣声をたてた。

「そうですか。……でも、あなたはうんと酷い目に遭はないといけませんのよ」

彼女は嘲弄氣味にいつて、情容赦なく打ちつづけた。……(彼は苦痛の次に来る幸福のために堪えるが、鞭は二十四で止まる)……

「二十五番目のは、お情けで勘弁してあげます」……(彼は有頂天になるが)……

「……でも二十五だけ打った後で、わたしはあなたのいふことをききますって約束したんじゃありませんか？ それなのに、まだ二

十四しか打っちゃしませんのよ。ちゃんと証人もありますから……」

彼女はいひながら、傍の帳を<sup>とほり</sup>かけると、隣室の夫の男爵と、他の二人の紳士が現はれた。

皆は声をあげて笑つた。……(彼は『破滅だ』と呟いて、この小説は終つてゐる)



## 『城の女』

……（暴圧的政治、強窃盜賊のはびこり、叛逆者横行等、險惡な空氣に包まれている頃のハンガリアの國に、マルチャという娘があった。城に奉公していて、女としての万般の手芸に長じ、朋輩達の尊敬を集め）……

ありふれた布のシュミーズに短い下袴、そ



れに跣足で、髪は赤い光沢のある金髪をさんばらに無造作に組み、威厳のある暗い二つの眼の上に形よくたわむ眉を陰険さうにしかめながら、尊大な様子で城の庭などを通るマルチャを見ると、誰しも思はず女神ジュノンのやうな彼女の肩に女王の記章でもついてゐないか、また、彼女に扈從する奴隸たちでもあはしないかと眼をみはるくらいであった。まったく彼女は、召使いに敵命を下したり、また日常誰をでも虐待することに慣れきつてゐる。若く美しい皇后のやうに思はれた。

……（そんな彼女も教会とか酒場へ行つた時には不思議な印象を人々に与えた。彼女には一人だけピタスという愛人があり、彼だけが、窓下の庭で夏の夜の涼風にまどろむことを許されていて、土地の人達からえらいと思われていた。それは）……

マルチャのやうな野性の女に恋をしかけ、そんな女の腕に眠らうとするには余程の勇氣が必要であることを誰しも承知してゐたからである。蒙古の沙漠に住む韃靼の女や或いは印度の女と同様に、マルチャは雌鳩のやうに優しい心を持ってゐるかと思ふと、猫族のやうな残忍な本能を持ってゐるのであった。

……（彼女は、屈強な若者達でさえ手に負

えない悍馬を、鞭一本で征服した。そんな彼女も、教室で、脱走者の若者サンドルに、見詰められて、全身、殺らむ思いになる。サンドルは更に、酒場で強引に彼女にダンスを申し込み、ピタスと対立しながら館まで押し掛けてくる。そして彼女の見降す窓の下で、二人は斗いピタスが仆される）……

次の夜再び彼（サンドル）は城にやって来た。井戸近くの所で、マルチャを見つけると彼はやみがたい激情に彼女を抱きしめた。

「放してよ」と、彼女は力なく呟いた。「あなたの手は、血で汚れたんですもの！」

「それもこれも、みんなお前の為じゃないか！」いふなりサンドルは彼女を抱きあげて、馬の背にのせやうとした。一寸の間、マルチャは物もいはずにじたばたしたが、やがてサンドルが蹠に足をかけやうとする隙に、素早く彼の帯の間から短剣をひきぬき、力一杯胸をめがけて突き刺した。

「なんといふ浅ましい！ 私はもう少しで、お前の者になろうとしてゐたんだ！」

マルチャは泣き咽んだ。サンドルは地に倒れ落ちた。彼女はあとをみずに城の中へはひって行った。（カットは『二十五番目の鞭打』『城の女』の挿絵）



懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

# 「あきこ」退場



井風呂秋於

△

最近は、ミセスにしろ、ミスにしろ、若い女性の和服姿がめっきりと少なくなっていましたね。

ましてや——いまは夏。

ほとんどの女性は、ノースリーブで、なかにはミニ・スカートとやらしい膝小僧まるだしの恰好で、街の通りを、露地裏を外股に潤歩なさっております。

お年寄りの女性だって大概は洋服を召しておられます。それも年々、そのお年令<sup>とし</sup>よりもグッと若やいだ、とも思える色彩やらデザインなりの洋服が、好んで着られていくといった傾向でございますね。もちろん、結構なことでございます。

ところが私の場合——

この一年間、たっぷりシコタマ貯えこまれた榮養も満ち満ちの、剥きだしの蒼い腕を今年もまた、惜しげもなく露わにダブつかせて歩いておられる女性と街の角なんかでぶつかりそうになったときなど、ハッとこちらがたじろぐ眼前へ、みるも生々しく肉迫してきたその腕の附け根あたりの逞しさに、思わずドツキリ！したことが早速にして数回ございま



した。——いいえ、本当！

まア、それらの女性の方は、そんなに気弱い私ごとき男性どもの心臓を意地悪く揺さぶるために、わざわざ蒼白い腕をムキだしておられるのではありますまいが、まずは、この布地の至って少ない洋服姿からは、あの日本女性特有の「なごやかな」和服姿はちょっと想像できません。

だからお見合とか結婚式でオトコが——いや男性が、「はじめて」真剣な眼つきになったとき、その眼に映ったテキの——いや女性の思いもかけなかった和服姿の美しさに、この男性はバカみたいに嬉しくなっちゃうもんでございます。

まさか、こんな場合にこそ、より効果的ならしめるために世の女性方は、普段チョンチヨロの洋服姿でいちびっていられるのではありますまいけれど、せめて、夏が終って秋季の候ともなれば、世の若き女性の十五分の一ぐらいは和服を召して、その伝統ある日本女性の姿、和服の芳香馥郁たる匂いを私にも、時たまには嗅がせていただきたいと思うのであります。

といっても別に、私は「和服一辺倒」でもありません。

活動的な近代女性には洋服がびったりなのだというお話にも、成程そうかも知れぬという気持ちがございます。

でも、こうして眼の回りにチョンチヨロの洋服姿ばかりがハンランすると、つい、ついあの和服姿の美しさ、なごやかに郷愁にも似た想いを駆せるのも仕方ないではございせんか、と思っております。

夕闇に、襟足の白さを仄かに浮かせて涼む女性の、胸も甘くなるような美しさ——

それに、容赦のないメカニズム社会のなかでクタクタに疲れて帰って来られる旦那さま方にしても、ただいまア、といって玄關をあけたとたん、オカエリナサアイと甘やかに応えてかけ出してこられた若奥さまの、あんまりパツとしない丸だしの膝小僧ばかりを見せつけられるよりも、時には愛しい襟足から馥郁と香る匂いをクンクン嗅いでみることも、またそのほうがよっぽど心が安らぐというもンではございませぬか。

また——変な例えではありましようが——劇場に於ても、歌手を中心に舞台上で繰り展ひろげられている踊り子の、美しいライン・ダンスを観賞している客席の一群が若い女性であった場合、舞台では裸足の跳ね躍り……客席で

はムキだしの腕と足の女性がキヤキツキ。これじゃア野天風呂の混浴風景となんら変ることはないと申すところでございます。

キヤキツキの女性に替って、これはいかにも日本的な、和服姿の落着いた女性の観賞であるならば、それでこそ、ラーメン召してガンバッテおられる舞台の踊り子さんたちの芸も見栄えようではないかというもの。

チョンチヨロの洋服で、手も足も露出した女性が、緘はりうたれたみたいにキヤアバタリとやれば、隣りに、横に、後に坐っている男性は、眼移りしてかなわねエ、というもんでございます。

え？

——そんな女性は単純に「歌手だけ」を見にいったのであって、お前だけが「踊り子」の足ばかりに熱中しているもンだから、そんなことをヌカスのだ、ですって？

冗談じゃない。あたしのいいたいのは——いや、まアいいや。

そうと見破られたからには……悪あがきは止して、いさぎよく？ 話を次に移すことにしましょうや！

え？

いったいお前は先刻さつきから何を言っとるのか



ですって？

まアまア、まア……そんなに急<sup>せ</sup>かれずとも

さて、ウチの「あきこ」は、その和服なるものを、いまだ嘗<sup>かつ</sup>つて着せてもらったことがありませぬ。いつもいつも、相も変らぬ洋服ばかりでございます。

何故か、と申しますと、それは今さっき述べました通り私の視界にはいるのは、洋服姿の女性ばかりでございますから。

何かの折り、フトこの女性とプレーしてみたいなア、縄を掛けてみたいなア、とそんな夢を抱くときがありますね。

その「夢」なんですよ。

その「夢」を、より現実感に、より近親感に望むが故にそれがいかにも、現代の「女性」であるかの如く、「あきこ」に洋服をつとめて着せている、といったら過言になるでしょうか。つまり、「あきこ」が洋服姿ばかりでいることによって、他愛もなかった夢が急に現実となってきた……



……そんなことが、理由のひとつになっているんでしょねえ、と思っております。

くずれた島田まげなんかで、着物も妖しく乱れて後手も痛々しく、ギリギリと縛りあげられて折檻を浴びている——そんな女性の姿に、古美的な草紙的な湿美感は抱きこすれ残念ながら現代に棲息するという事実の我が身から考えて、それは夢——あくまでも絵画的な夢で、すこしも現実感が持たれず、そして「夢をすこしでも現実」に——という願いがもし人間の本能としてあるならば、これはこれでまた仕方ないことだろうと思うのでございます。

「あきこ」は現代に生れた「女」なのだ。こんな先入意識が、相も変らぬ洋服を着せてばかりいる——これが、その原因であるかも知れないでしょうねえ。

△

偕<sup>さ</sup>で。

プレーするために招かれた「あきこ」は、そのアデヤカナ？姿で、ただぼんやりと坐っていたり鏡を見つめて楽しんでいたり、寝ころんでいたりすればそれでよい、なんてことは到底許されません。

登志子という、「彼女」の生み親である女性にたちまちのうちに縛り上げられ、そのプレーのプレーたる所以、縄目の責苦にいたぶりつけられるのです。

背中に廻った両手首も執拗なほどの縄目できつく、くくりあげられて、腕がしびれる。息がくるしい……呻くのもかまわず、喘ぐのも無視されて、そのひとときを責めつけられるのです。

縛られたままペランダに曳きずりだされて奇妙な「美容体操」をやらされたり、俯伏せになった足を天井からのロープで持ち上げられてその背中をグイグイ踏みにじられたり、



意もないのにおトイレへ曳き立てられ尿を無理強いさせられたり……。でもそんなことはいつもプレーの最初に加えられる責めで、まあいつてみればプレーの開幕合図、そんな程度の意味しかありません。やがて、いやすぐに、「あきこ」には何がなんだかさっぱりわからぬような、乱雑な仕置が開始されるのです。

登志子の思いつくことと云ったら、それはもう目まぐるしいもので、普段のノンビリ型からは信じられないほど次から次へと、「あきこ」の考えでは到底追いつけないような責めを、ときには強く、ときには弱く、執拗な波状とさせて繰り返すのです。

でも、そこは人間が行っているホーム・プレーのこと、時には次のような会話？ が二人の間に交されて、プレーがしばし中断することがございます。

「ま——待って、ちょっと待って頂戴、ストップよ。……の、咽喉が渴いちゃって、ヒリヒリするの。ひとくちでいいから、お水、くださらない？……」

と「あきこ」。

「ちえ、しょうがないなア」と登志子。

「ほ、本当にたまらないのよ、お願いだからちょうだい！」

「じゃ仕方ないな。そのかわり——紐はまだ解かないわよ」

「ええいいわ。こ、このままでいいから、早くちょうだい」

「それじゃ待ってなさい、持って来てあげるから」

やがて。

ゴックン、ゴックン、ゴッ……

「あきこ」は、差し出されたコップのお水を炎天の砂漠で与えられたもののよう、息もつかせず飲み干します。後手にきびしく縛られたままで、乱れ果てたままで。

そして、まだ一杯が欲しそうに、仁王立ちの登志子を見上げたたん、

「さあ、始めるわよ。——今度はもう、何を言っても聞いてあげないから！」

空のコップを投げすてた音と同時に、ふたたび、ウンウン、アッアアの拷問がはじまるのでした。

さすがにいくら夢中になっても「髪」にだけは手は伸びてきませんが、他の身体の部分には余すところなく、その執拗な責めの手が這い廻ります。

しかし——

苦痛のうちに、そこに一種の快感を覚えるというのがマゾヒストに与えられている特権というもののなのでしょうが、「あきこ」の場合は、正直いって、まだハッキリとそこまでは行きついていない、とも思うんでございますよ。

「あきこ」がわるいのかも知れません。

登志子が、まずいのかも知れません。

ただ直線的に、それが自分に与えられた自然の苦痛なのだとかばかりに堪えて、歯を喰いしばり身悶える「あきこ」と——。

まるでそれが、自然に自分へ課せられている行動であるかのように責め、いたぶりつづける登志子——。

単純でもあり、何だか空しい<sup>むな</sup>ような。

でもこれが、事実のところの「あきこ」の縄を解かれた後の感想でございます。

が、そうして責められている間は、別に大した快感といった快感も覚えないうの……後日、その時の様態を撮ったフォトを見て、この時になって始めて（それが快感といえるかどうかわかりませんが）胸が、妙に奥深く打ちふるえてくるのを覚えるのも事実でございます。



なぜでしょうか？

「あきこ」は、解放感を利用して、ちょっと考えてみます。そうして、それはやはり、フオトの「あきこ」が「よく見馴れている」洋服姿であったから――。

あの女性<sup>ひと</sup>が、この女性が着ている洋服と同じような服を、「あきこ」が着ているから。

これが、先刻申し述べましたように、現実感または近親感だといってはいけないだろうか、このように思ったのでございます。

縛ってみたかった、一度プレーをしてみたかったと思った行きずりの女性への夢が「あきこ」のその姿態に託されて、交錯するが故



に、胸がふるえ、測り知れぬよろこびが湧き上げられてくるように思えてならなかったのです。

「あきこ」は私の夢のかたまり。

そう、そうなのです。それがために私は此の一年近く飽きもしないで、「あきこ」を登場させつづけてきたのでしよう。

△

この、くだらぬタワ言に添えて、数葉の写真と同封しました。

でもそれは、「あきこ」が乱雑に責められている場面のもではありません。

いつものようにオツに澄ました？ ものばかりでございます。

キザな、と思われるでしょうが、やはり「あきこ」は、見苦しい姿をこの密室から、まだ外へは出たくありません。私の一方的な申し述べということから、なるべくあたりさわりのない？ ものを選んで同封した所以でございます。

そのかわり、といつてはおかしいでしょうが、ついでにこんな写真を撮る時の――打ち明け話とでもいったらいいでしょうか、それをお話いたします。

最近、登志子と私は意見を合わせて、このような「あきこ」の緊縛姿態を撮影するとき、折檻などのプレーと併行することになるべく避け、そのためにだけ別に時間を作って行っております。

そして、大体「あきこ」の姿をカメラで撮りたいと言いつ出すのは私のほうです。

それも、別に間隙を縫ってという意識はありませんが、登志子がプレーなどにあまり興乗っていない時のほうが多いようでございます。

でも私は、そんな登志子にも拘らず、衝動的な望みそのままにサッサと用意します。

下着をつけ、お化粧して、服を着るなり、「さあ、縛って……」

綿ロープを登志子の眼の前へ投げだし、そつと両手を後へ廻しながらひざまずくのです。すると登志子は、いつものように、たとえ興の乗っていないときでもイヤな顔ひとつ見せないで、丹念に縛ってくれるのです。

そして――縄止めが終ると私は――いえ、



「あきこ」はよろよろと立ち上って用意のカメラの前まで行き、そこでゆっくりとポーズするのでした。

登志子は、

「——それで、いいのね？」

言いながら、そこで始めて、「あきこ」の頭へ洋髪かつらを被<sup>か</sup>せてくれるのです。

ええ、もちろんそれまでの「あきこ」は、頭部だけが「男髪」という、変な恰好だったのです。

え？

何故か、って？

はい、それは——暑くるしいから。

それとも、着付けもお化粧もカメラの用意もこの場合全部一人でしなくてはならない、ということと共に、この場合だけはカメラのシャッターが押された時から「始まる」からだ、とも申せましょうか。

汗っかきの「あきこ」は、ほんに辛うございますよ。

少々のこと冷房を強くしたって「あきこ」には通じませんし、その上に登志子という同居人が夜にルーム・クーラーを使用することを極端にイヤがるという仕末ですから尚更のことでございます。

だから、お化粧して服を着て、縛って貰ってからカメラの前へ行き、そこで始めて「かつら」を被<sup>か</sup>せてもらうというわけです。

でも、これが済めば、あとは楽なものでございませぬ。

適当に、ダラダラとポーズしていればそれでよいのですから。

「あら、もうちょっと横を向いたほうがいいわよ——そう、それでいいわ。じゃ、そのままで瞳<sup>め</sup>をあちらのほうへながして……」

イヤに知ったかぶりの登志子の指図ごとき楽に従うことができるようになっておりますし、登志子のほうにしたって、クルクルパチとフィルムを巻きシャッターを押して、それがたとえ誠意のない手付きであっても、縛りあげられてあらぬ方へ視線をやっている「あきこ」が相手ですから、絶対楽なものだ、と思っております。

こうして、「あきこ」の、マトモ？な緊縛写真が出来上るわけでございます。

過程に於いてはもちろん、現像焼付という作業がございしますが、これは揮<sup>ひ</sup>いっちょうとなつたミニクキ秋<sup>あき</sup>のする仕事。「あきこ」はその段階になるともう関係ございませぬのね。

——夏。

さよう、夏でございます。

登志子と私、「あきこ」にとって、これだけは、愛するプレーのためにあまり歓迎すべからざる季節のようでございます。

早く、涼しくなれ。寒くなれ。

その季節のほうが、二人のプレーを、よりプレーらしく行えて心ゆくまで楽しめる……登志と秋<sup>あき</sup>と「あきこ」は、今年の夏もまたこのような同じ思いでソツと互いの額の汗を拭い合うのであります。

夏など、去れ。盛夏など、無くてもいい。

だいいち、——あとから洋髪かつらを被<sup>か</sup>ぶ

ったりなどしなくてもいいんだから。

——あんなに派手に、「あきこ」のお化粧がながれたりしないで済むのだから。

△

ところが。とつぜん、ある日。

——登志子が、私に申しました。

「夏が終って、秋がくると……いよいよ、「あきこ」ちゃんはやさヨナラするのね」と。……数秒経<sup>た</sup>ってから、私はその意味にやっと気がつきました。

（「あきこ」が私たちの間に登場してから間



もなく一年になろうとしている——」

考えてみれば、それまでを縛ったり苛めたりしてきた登志子と、実質的な「交替」とでもいうか「あきこ」が登場したのは今から十カ月ほど前のことです。

「これからの一年間は、あたしが立役となる番よ」

いみじくも登志子が宣<sup>のたま</sup>うたが、その一年がもうすぐ過ぎようとしている。

そして、

「「あきこ」がサヨナラする」

ということとは、「あきこ」はここに晴れて縄から、折檻から解放されるということでもございます。

——だのに。

解き放たれて嬉しい筈なのに「あきこ」は……いえ私は、わびしいような迷うたような複雑な心境に陥ってしまうのです。

「案外と、早い一年間だったじゃないの、そうでしょう?」

登志子は、そのような私の気持もツユ知らぬげに、まるで少なくなった月賦の払いに喜んでいるような表情で、いともアッサリと申すのでございました。

（そういえば、たしかにこの一年は早いよう

な気がする——）

私は、正直いって、感慨というより、この一年、いえ精密に言えば十カ月と十日がアツと過ぎ去ってしまったことに呆氣にとられてしまったとでも申せましょうか……

津治良一氏が評されました通り、私がミイラトリがミイラになってしまった、ということとは充分認めております。

『交替制プレー』とでもいうか、登志子の提案で私が女装するという思いもかけなかったことを持ちかけられ、それ以前に登志子を縛り苛めつづけて来たことから、「交替してみるのもちょっと面白いかも」とホンの軽い気持で承諾してから以来、その「女装」という未知だったものへ、次第に興味を持ちはじめ、この妖しい楽しさにポウツとなってしまうたというのも事実なら、自然、津川氏のおっしゃられた「ミイラ」についてしまうということも公算大で、だからこれはこれで私自身、結果としては仕方なかった——とこの点もついでに自ら都合よく認めておく次第でございます。

それ故に。

この『交替制プレー』とでもいうか、「あ

きこ」受難の期間がもうすぐ終わろうとするいま、わびしく迷うたような気持にもなり、その期間のあまりにも早く過ぎ去ろうとしている感じに呆氣に取られたりするわけでございます。

「「あきこ」がサヨナラするとは、ちょっとさびしい気がするね」

「あら、それでは「あきこ」ちゃんにもっと来て貰いましょうか」

「それが、オレ自身にもわからない気持なんだな」

「貴方さえよけりゃ、ずっとこれから先、いまのままであたいはいいのよ」

「ずっと、なんて思っているじゃないさ」

「じゃア何よ」

「——とそんなに面きっていわれると困るんだがね」

「ふふ、変なひと」

「そりゃ、オレは変だけどさ——」

「あら、怒ったの?」

「いいや」

「それじゃ、あたしが、いってあげましょうか、貴方の考えを」

「ホウ、立派なことをいうね、——聞かせて



貰いましょう」

「貴方は……」

「ウン」

「こうして一年ごとに交替なんかするプレーなんて、キラ伊だといいたインでしょう。違う？」

「そ、そうなんだ。そうなんだよ——」

「あたった？」

「見事に、ね」

「そうして、貴方は……」あ

きこ「が消え去ってしまうこともなく、そのように交替だとかいう変な「枠」に嵌め<sup>は</sup>ることもなく自由なプレーを楽しみたい。そのようにおっしゃりたいのでしょうか？」

「その通り」

「ハハハ、当たっちゃった」

「でも、一緒に暮しているんだ。あたりもするだろうけど、そこまでわかっているのなら……」

「そのようにしようよ、というのね」

「いやか？」

「いいわよ。そのほうがあたしもいいのよ」

「なんだって」



「——実はあたしも、前からそういう風にしたいほうがいいなと思っていたのよ」

「——」

「だって、この交替するってこと、あたしが言い出したンだもん。いつも御気嫌よく「あきこ」ちゃんがしているもんだから、あたしのほうから今更になって、言い出しにくかった」

「ヘッヘッヘ、そうだったのか」

「ヤアだ、いやな笑いかたして」

「——それでは、これからそういう風にすることに決めたツと」

「はい、決めましょう」

「お前だって、たまには自分から縛って貰いたいなアって思うことがあらアね」

「また！ そんなにズケズケ言わないでほしいわ」

考えてみると？

大体、この登志子と私という二人は、

「自分はMだ」

「自分はSだ」

なんて、決まりよく己れを分析したり、また確認してみたいというような、そんな、ムズカしくシチ面倒くさいことは思っておりません。そのような柄ではないとも思っております。

強いて（大雑端に）言ったところで、

「そんなことは、どうでもいいでしょう。人間、自分はMだのSだとかって一概に片づけて言ってしまうものではなく、たとえば、私は絶対にS性なのだという人を例にとってみても、その、『相手を苛め苦しめなければ私は真の満足は得られないのだ』といつも心深くに思いつめている状態こそ、立派な被虐状態そのものではないだろうか。また、この論法で逆にいけば、『私はMなのだ』と、他人に苛められ迫害されることをいつも待ち



望んでいる人だって、その、他をわずらわすという点では、これまた立派？な加虐状態にいるというものではなからうか。だから」

人間というものは一概にして言いきれぬ妖しい性というものの持主である——とまあ、こんな程度の判断しかないので、これ以上の思案をすることは知識の具合からいっても不可能なことでもあるし、よって望むべくもない。このように思っております次第。

だから、たとえ、今夜は被縛の身、明晩は加縛の立場となったところで、別にプレー精神が停滞するということは考えられません。

いや、かえってその方が、華々しく楽しいプレーになるうか、というもの。ぐらゐに考えております。

「でも貴方」

「なんだ」

「この四月号に『あきこ登場』ってメイ文を發表させていただいたのでしょう」

「それが、どうした」

「どうしたって、いまこうして一応の区切りがついたのじゃないの。登場しっ放しなんてことはしないで、この際一応『退場』させて貰いなさいよ」

「退場？」

「そうよ」

「——あ、そうか。これからはもう、『あきこ』のこと何も書くことはないもんな。つまり、登場あれば退場あり。いってみれば宇宙の真理、理の当然っていうヤツだわさ」

「妙な言いかた……」

「じゃ、思いきってこの際、『あきこ』退場なるメイ文をモノにしてみるか！」

「べつに、そんなにイキリ立たなくてもいいと思うけど……」

「なにをブツブツ言ってるんだ。——さア、オレは書くぞ」

「——」

「書くぞ、といってるんだぞ！」

登志子は、退場記を書けという意味で言ったのではないとは思ったが、そこは調子に乗るのが大得意という私のことだ。思いついたことに早々とイキリ立って、ただちにこの原稿用紙へと飛びついたわけでございます。

——結果は、このメイ文、いや屁一文であります。

イキッたわりには効果のない文章で、いや

これは予防線のつもりで言っているのではございませぬぞ。実にくだらない文字の連らねでありました。

しかし、『あきこ』退場記ならば、これしか外に書きようもございませなんだ。

△

では最後に、サヨウナラを申します前に、『あきこ』がお願いすることを記します。

愛読者の、女装愛好の諸氏。

そのご体験……夢への一端でもいいから、お聞かせ願えないものでしょうか。

未知の貴方へ対するあこがれのような気持——もっと、もっと色んなことをご教示願いたいという気持。

そういうお願い、いえ、悲願と申すべきでしょうが、お察し下さって、時々でも退場はしても、尚、生きている『あきこ』を慰さめてやっていただけませんか。

いえ、そんな私の身勝手な願いに拘らずとも、その一端をお知らせいただければ……

そして、ここに『〇〇子登場』の幕を截つて落していただければ……

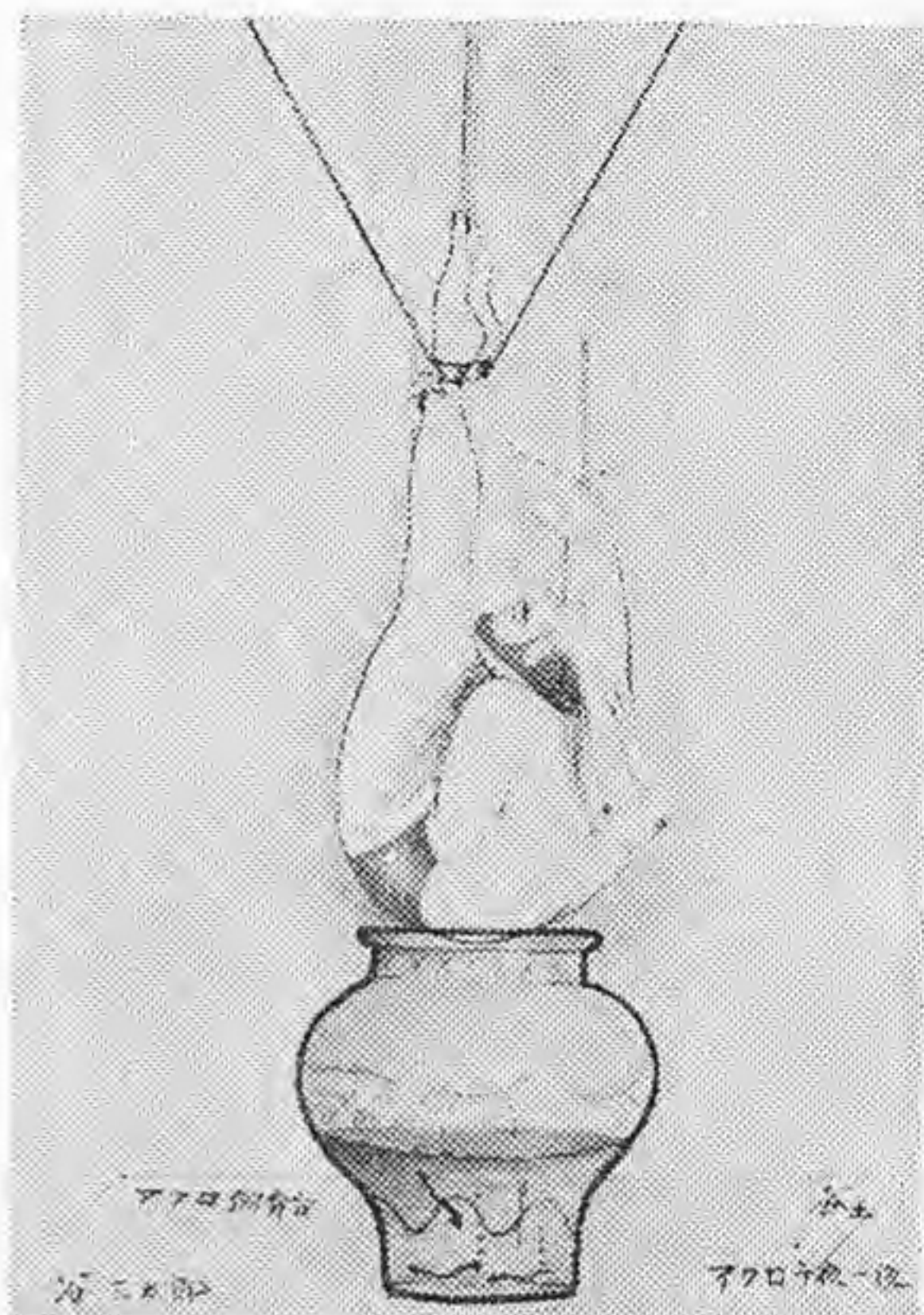
では、これで、——さようなら。

(結)



私が小学六年の時でした。田舎の秋祭りに市の消防関係の方が、街のはずれにかかったサーカスを見に行った時の事です。私が父につれられて、ジンタの鳴りひびく夕方のサーカス小屋をくぐったのは冬に近い十一月の寒い日でした。サーカスの中は、むしろ寒々として、トランペットの「旅の夜風」が泣き入る様に聞こえてくる晩でした。

一行は、二十名足らずの小団体でしたが、当時の興行としては、市の有力者だけにサービスが行届いて、私一人の子供に、綿飴やチ



ョコレートをくれたり、団体には酒二升等出して、御機嫌を取る有様でした。全くの三流サーカスです。

最初の番組が、「骨無しオンナ」でした。全体の客も、時間の関係か、団体を合わせて百名位だったでしょうか！曲が「サーカスの唄」に変わるや、テント内が真暗になり、女一人、男二人が出て来ました。客は殆んど私達の近くに集まっています。

「骨無しオンナ」の口上が終ると、十八、九才の色白の女は、笑顔でシナを作って、サー

谷 三 太 郎

カス特有の挨拶をしながら、柔軟な女体である事を二、三示し、私達の真前にきて、再び深く頭を下げました。消防のオジサン達は、既に冷酒を含んだ勢いで、盛んに女を冷かし始めました。側の二人の男は、一人は片腕無し、もう一人は小人の、見るからに昔のサーカスの掛け声男にふさわしい顔立ちでした。三人は私のつい側にまで来て、意外に女の美人である事に子供乍ら嬉しくなりましたが、対照的に二人の男共には、「いやな野郎だなあ！」と感じました。

ア

ク

ロ

雑

感



二人の野郎共の「ハイッーツ」という掛け声と共に、女の子の顔は、一瞬引き締まった。むしろ、これから大衆の面前で苛められるのだわ!という悲しいムードになりました。芸は、小人の空鞭打ちを合図に、容赦なく開始されました。それは、逆海老を利用して、女の足元に落とされた黄色いハンカチを、口に銜えるまで曲げ、銜えたまま、元の姿に戻る芸です。

一回目は難なく終り、百名足らずの客席の喝采を浴びましたが、二回目からは、高さ十厘ほどの足裏大の木型の上に、片足ずつ載せ一回目の時と同じに、地面のハンカチを口に銜えるのです。二、三、四と重なるにつれて逆海老のアクロは苦しく、それでも拍手の内に、遂に五段になりました。消防の方も、誰も冷やかす勇氣もなく、ジーツと見入っている様です。

ジンは、一段と高くなりました。女の足元から、約五十センチのハンカチを、口で確り銜えなければならぬのですから、先ず大変な事です。皆、息をのんで見入ります。二人のチグハグな男野郎も全く真剣です。

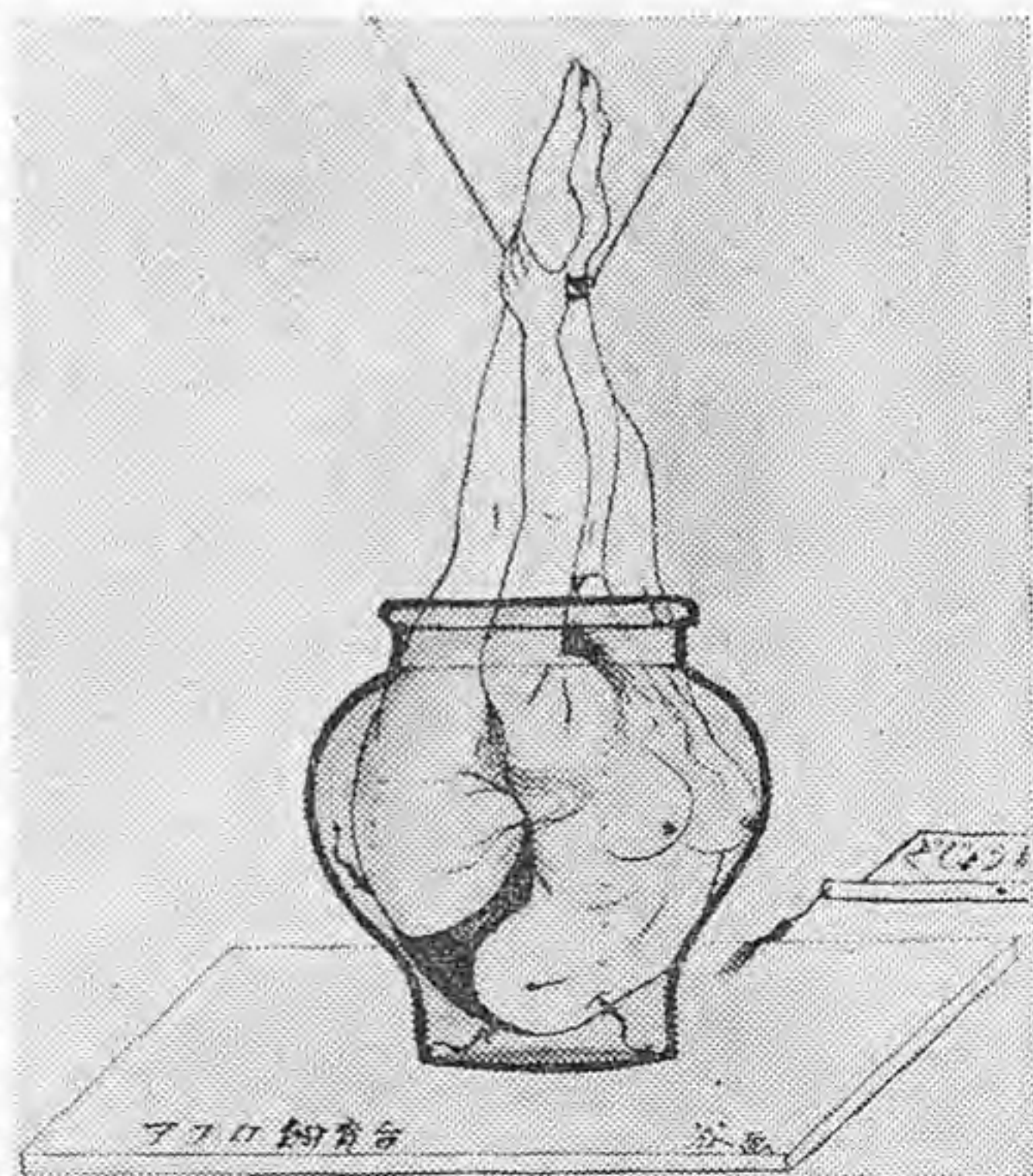
音楽が急に止まりました。掛け声と共に、女は静かに静かに上体を後ろに曲げはじめまし

た。ライトはその女にだけ、恥ずかしそうに光々と当たっています。私の真正面! オナカが、苦しく波打っております。そり返った両手が、女の両踵につきます。そして尚、深く手が、頭が下がります。ハンカチは、まだ遠い! 誰か、客席から「しっかり」の掛け声、と同時に、女の折り曲った体が一瞬グラついて倒れかかりました。

私は、その時の男野郎の機敏な、そして卑猥な動きを、未だに忘れる事は、出来ませ

ん。小聲ながら「野郎! トチッたなあ!」というが早いか、小人は足を、もう一人は女の乳房と太腿を抱く様にしてかかえ、女の奇妙な、甘い様な声も聞かばこそ、女を元に戻し乍ら「馬鹿野郎! 今夜はもっと、痛い目に合うんじゃないか! 少しは我慢するんだ」と早口に叱りつけ、そして小聲から急に大声で「はいいッ、やり直し!」と、呶鳴った。

女は悲しく頷き乍ら、五段の木型の上に再び乗りました。ところが、二人の男野郎は、



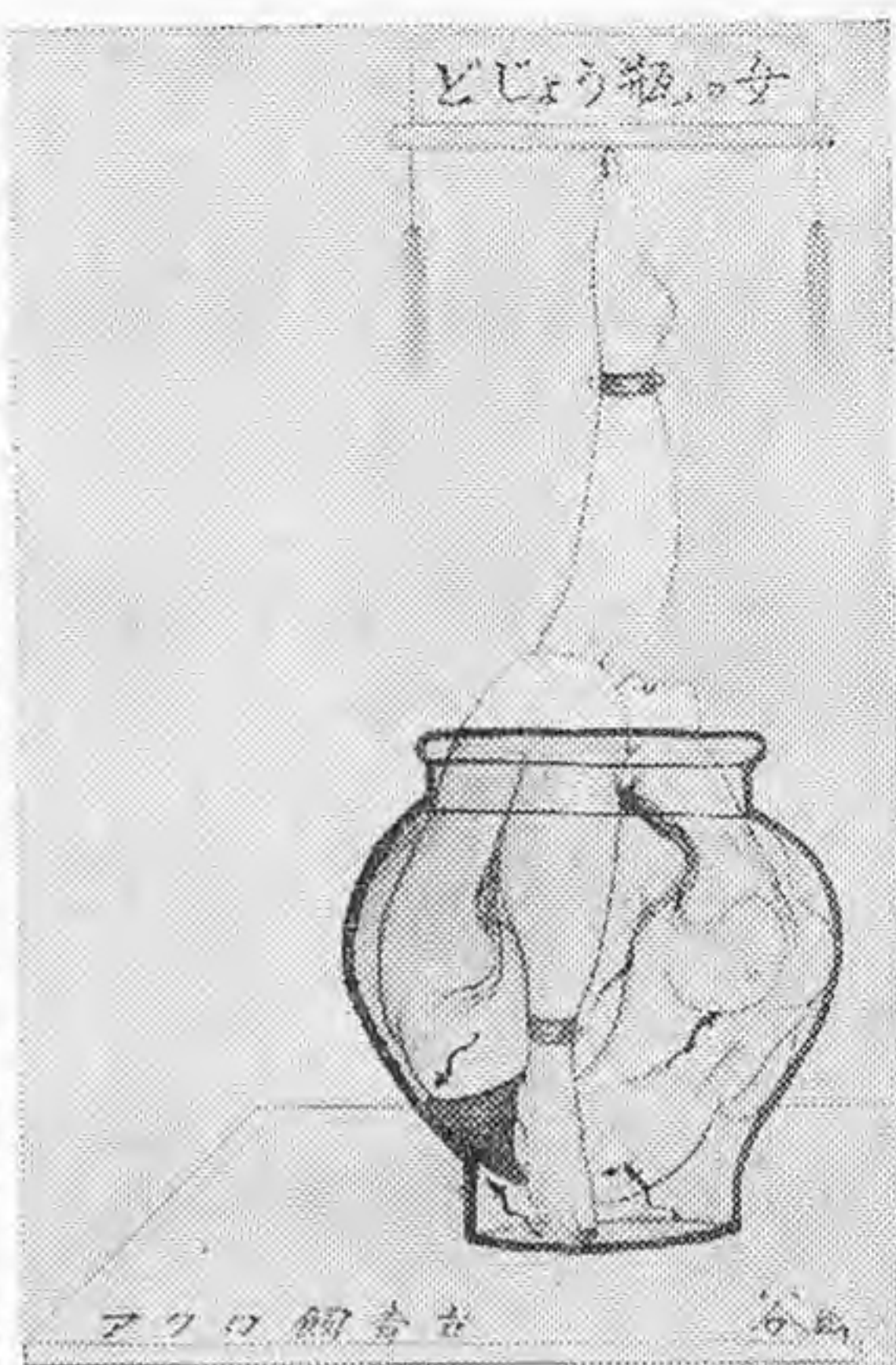
女に小さな声で、「いいか? つかんでやろうなあ!」と、むしろ強引に女を納得させて、女体のパンツの臍の辺りを押え、いかにも観客には女を助けている様な素振りを見せましたが、実は自身のサドを満足せしめるだけの自己満足的な行為であったに、違いありません。

私はその時、子供乍らにそり返った女体の哀れさ、美しさに、ぶるぶる身振いしたものでした。



勿論、押えられたパンツは、女体が曲がる度に、肉体が露わとなった事を想像して戴ければ、その男のしたことがどんな効果があったのか解ると思います。

この事から、私は女を意識し、女って、軟かいなあ！ 美しいなあ！ と想い始めたのです。その後、アクロバット・ダンスの言葉を知り、新宿帝都座のR・テンブルさん、日劇の岡本八重子先生、若山昌子、加賀姉妹、葉山仁智子各ダンサーのショウを、実演と映画と雑誌等により観て参りました。然し残念乍ら、アクロバットショウは私の見聞すると



ころ、現在、全く下火の様な気が致します。私が思いますのに余りにも皆様、同じような芸の繰り返しであり、時間的に余裕なく、急テンポで流れますので、一体位から次体位に移る道程にある美しさというものに、全然気をおつかいになつてない事が、今日の

アクロのマンネリ化をまねいた原因ではないかと思っっているのですが、如何でしょうか？ 岡本先生が、ある雑誌で「アクロバットはスネーク・ムーブメントを理想として、種々様々なアクロバット・ポーズを、蛇の動きのように、いかにスローに踊れるかが、芸の優劣を決定する……要するに、美のイメージをより多く、明確に与えることETC」(甘い写真三月号より)とおっしゃっております。

私も全く同感です。特に私は、あるポーズから次のポーズに移る瞬間瞬間にこそ、優美にして妖艶な日頃知られざる女体美があるのではないかと思います。私に女体美開眼のキツカケを与えてくれたあのうらぶれたサーカスのアクロ女性が、一段、三段と上ってゆく、その心理、体美、そして苦しさに対する物理的な現美、その様なものが何か不足しているのではないのでしょうか。言わば、それこそ深求せられて良い一つの美に対する問題点なのではないかと想う一人であります。

先程の物理的な現美の裏は何でありましょうか。それこそ私の求めるサディスティクな美ではないのでしょうか。添付しました絵は、実は、その意味で画いた絵なのですが、一寸行過ぎた様な気も致します。その点、未熟なものですので御許し下さい。また、画につきまして、アイデアなり、御批評等戴けますならば幸いです。私事で恐縮ですが、私はいま柔軟な体に自信のある女性をさがして居ります。モデルになろうとお思いの方は、是非共編集部の方に御一報下さい。

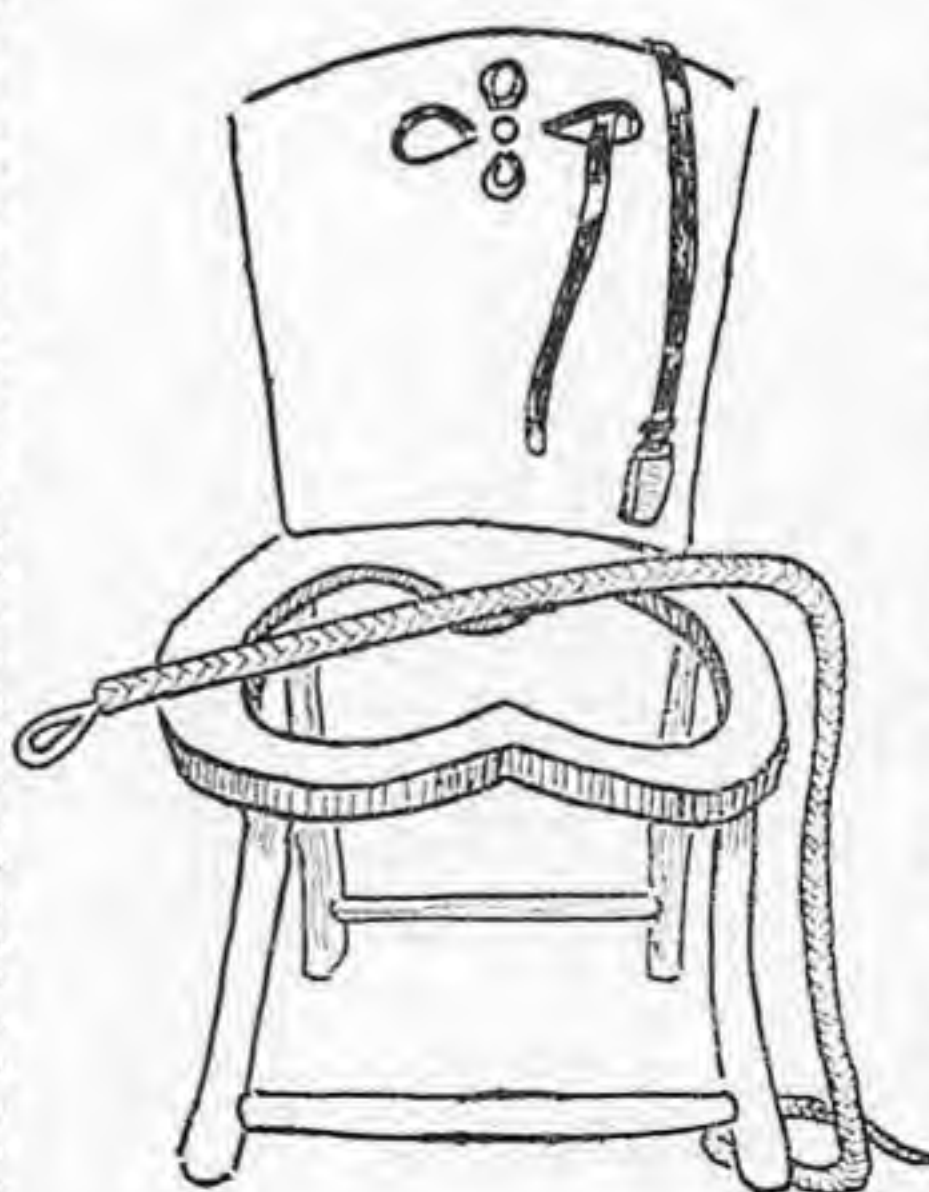
これから愚作ではありますが、「アクロ千夜一夜」と題して、その種のサド画を描いて見たいと思っ居ります。アクロに関する資料等御座居ましたなら、これまた、編集部の方に御一報下さい。では、皆様からの御教示を御待ち申上げて居ります。



# 心傷<sup>い</sup>たむ遍<sup>へん</sup>歴<sup>れき</sup>

△第三十四章 女囚ミシユリーヌ (十四) ▽

## 西 条 操



イヴェットはそっとデスクを離れて、ミシユリーヌ奥さまの独房の前に立った。

ミシユリーヌ呻吟の姿を目近く見ると、イヴェットはついオロオロしてしまふので、そばにアンヌがいる間は近寄らないようにしていたのだ。そのアンヌは既に本番コースだ。「——あと三日ですわ、ミシユリーヌさま。あの、何でしたら——」

イヴェットはMOMPEの鍵を示し、ミシユリーヌはかぶり振って床にしがみついた。「——苦しい——辛いよ、イヴェット。獣みたい——。二週間なんて、永過ぎるわ」

イヴェットは凝然と立ちすくんだ。慰さめようにも、口が利けない彼女であった。ミシユリーヌのふくよかな頬がげっそりと落ち、ふるえる肩も痛々しい。

「——すみません、イヴェット。また困らせちゃって。辛抱するほかないのね。我慢します。でも、延長だけは何とかしてね」

イヴェットは頬をしとど濡らせつつ、確固とうなずいた。もし万が一、懲罰期間の延伸だなんてことになるようなら、そのときこそは職を賭して——。

マリーヌ婦人看守があばずれ二人を引き立て

て、二階労役場から降りて来た。

「喧嘩よ、イヴェット。スリと万引きとどっちが芸術家かって——。手伝ってよ。一応ぶち込んでかなきゃ」

イヴェットはスリのプラチナ・ブロンズに捕縄をかけ、赦しを乞う口に嵌口具をかけ、独房の鉄格子へ突き飛ばした。ミシユリーヌ奥さまの眼の前での手荒な所業だが、こんな莫連女ならば気もひけない。

鉄格子の独房三個はふさがって仕舞い、イヴェットは眺めて歎息したのだった。これでまたも、ミシユリーヌさまにやさしい言葉一



つけて差し上げること出来なくなった。

「これッ、膝が崩れてる。謹慎よッ」

イヴェットはプラチナ・ブロンズを叱りつけ、腕さし入れて、その額を突き飛ばした。プラチナは他愛なくひっくり返り、笛のような悲鳴を洩らしたが、イヴェットの腹立ちはなおも納まらなかったのだった。

ミシュリーヌはイヴェットに、なおも双眸で縋りついた。

「あの——教えて下さいませんか？ ローザンヌ——いえ、三四〇号のこと。怪我は？ 元気になるまして？」

その心根のいじらしさに、イヴェットの胸は一杯になった。

「大丈夫、元気よ。病監にいるわ。監舎には戻らないでしょ。あと一カ月足らずで満期ですもの。あの人も満期までとうとう——」

まあ、イヴェットったら涙もろいのねえ」

マリーは片眼をつぶって去り、ミシュリーヌは心安らいだのだった——。

ミシュリーヌは這いずるようにして謹慎独房を出た。みんな出払った朝の監舎で、マジヨリーがやさしくいたわってくれる。

二週間ぶりのシャワーを浴びながら、ミシュリーヌは自分の体のあちこちを撫で、肉の

落ちた手触わりに涙ぐんだ。

「ほんとによく頑張ったわね。さ、着替えるのよ。汚れ物は桶に入れときなさい」

鉄扉の中から呻きが洩れ、ミシュリーヌは恐怖を浮べた。暗房でなくてよかった。気が狂うか、半死半生になるか、ともかく、足腰立たない有様だったろう。

「あすこはね、お前みたいなたおやめ」を入れるとこじゃないのよ」

マジヨリーは肩を叩いてくれた。でも、固い床に日がな一日の正座は苦しかった——。

ミシュリーヌはMOMPEを穿く前に、色の変った膝頭を撫でたのだった。

マジヨリーがまたも手錠をかけ、ミシュリーヌは本館へ連れ出された。コリンヌ課長が自ら接して、反省のほどを見きわめると言い出したのだ。

「よくお詫び申しあげるのよ。なんといっただって、お前が悪かったんだから、ね」

ミシュリーヌはコックリとうなずき、本館との仕切り鉄格子の内側で革サンドルを脱いだ。鉄格子扉を開いたテレヌ婦人看守が冷たく見守り、ミシュリーヌを立たせて革具を取りあげた。鉄格子の本館側でデスクにふんぞり返るテレヌは保安課の猛者で、逮捕術

にかけては屈指の腕前だ。

ミシュリーヌは革具を見やって肩をふるわせた。コリンヌ着任以来、女囚が本館オフィスに入るときにはハダシにされることになっている。それは我慢するとしても、革具は股バンドだった。男囚には昔から使用されているその情けない戒具は、着衣の都合上、女囚には装着されなかったのだが、囚衣をMOMPEに変えてからは、取寄せられて用いられている。

「オフィスには殿御もいらっしゃるからね。尻癖の悪い女は用心堅固にしなきゃ。そうだろう、ミス三監舎の奥方さま。ウフフ」

テレヌはミシュリーヌの胸奥を搔きむしりながら、分厚い革具を腰に締めた。厚手のズックと革を二枚合せの縦バンド——それが革をきしませつつ前から後ろへと潜り、後ろ腰で締めあげられた。マジヨリーは眼をそむけ、女囚は泣きそうな顔で腰をよじる。

両手が荒々しく掴まれて押し下げられ、縦バンドの鍔金具に、ガチリと手錠を結合されてしまった。鍔金具は下方もいいところで、恥骨のあたりで冷たく光っている。

テレヌは、さらに革具を取り出した。「あら。その必要はありませんわ」



「それがあるんだってば、マジョーリ。この一見貴婦人風のチビはね、保安課のブラックリストに載っちゃってるの。こら、膝をひろげるんだ」

ミシュリーヌは膝をゆるめ、テレエヌの言葉の意味をややあって悟り、頬を微かに染めた。今度の革具は膝枷だった。

「お前って女は、ほっそりと見えるけど肉づきはいいんだね。こら、脚を動かすなッ」

「両脚の膝頭のすぐ上部で、それぞれ革バンドが強く締められ、それをゆすぶってテレエヌは笑い、立ちあがって女囚の顔を眺める。」

ミシュリーヌは世にも悲しげに涙ぐみ、両手に音立てて上体を屈め、眼には到底届かない指を宙にもだえた。

「行きな」

テレエヌは革具の鍵を指先に弄び、マジョーリが静かに促がした。後ろ腰には、いつのまにか捕縄が結ばれていた。

両膝を繋ぐ鎖は二十センチほどで、女囚は絶えず脚をもつらせる。歩き難くするのが目的の膝枷——それを初めてかけられたのだから無理もない。よろめく度に支えてやりながら、マジョーリは嘆息するのだった。けれども、オフィス入室の女囚が身にまとう此の革

具の鍵は保安課所管で、マジョーリとても持たされてはいない。マジョーリは、自分が縛られたような口惜しさを感じるのだった。

「——こ、こんな——。こんな風に縛られるなんて、もう人間もおしまいですわね——」

ミシュリーヌは素足に床を踏み悶え、腰の革具をギシギシききませ、鋼鉄を鳴らせて涙をこぼした。あたりは娼婆のたたずまいと物音だし、制服でない男女がチラホラするし、

我が姿の浅間しさが一しお胸を抉るのだ。

マジョーリはやさしく腕を叩いてやり、刑務課の扉を押した。

ミシュリーヌは、コリンヌ課長不在のデスクの前に立たされた。室内を曳かれるその姿を眺めて、春ドレスの年増が眼を丸くした。

「まあ。世にも悲しき装身具ね。ここもツーロン並みになっちゃったじゃない？」

「そうよ。事故防止は大袈裟過ぎるくらいでいいんだって」

春ドレスと語らっている婦人課員が、チラと見やって答える。

「——というのは表で向きでさア、コテンコテンにぶちのめしてガツクリさせるのが狙いよ、オリヴィア。まあ。一種の精神的虐待、じゃなかった、悔悛のための具体的手段。ホ

ホホ。ま、ここもいろいろと進歩するわよ」

「ともかく、あれじゃ完璧ね。手も足も出ないわ。地球の裏側まで護送するみたい」

オリヴィアは頭を振って感じ入った。彼女は元婦人看守で、このコンピエーヌ婦人刑務所を二年前に辞めて結婚したのだが、今日は通りかかった道すがら、元の職場に顔を見せ

て、オールドミス連中をひがませているところだ。化粧は匂やかでドレスも一張羅——。

オリヴィアは平気な顔でミシュリーヌに近寄り、しげしげと革具を打ち眺めた。

「およしなさいよ、オリヴィア。あなたにはもう関係ない道具なんだから」

と、マジョーリは、屈辱に身を硬張らせるミシュリーヌの胸中を思いやったのだ。

「旦那さまはお元気？ うまく行ってて？」

「ええ」

と、オリヴィアは胸許を直し、香水の匂いをまき散らす。

「あのね、こんどニース中央署へ転任なの」

「そうお。で、古巣のひとたちに逢った？ あなた四監だったわね？」

「そう。でも、この子は知らないわ。四三三号か。何したの！ 綺麗なひとね。涙、拭いてやったら？ 聖マジョーリさま」



「商売気出すんじゃないの。もうクビになつてゐるでしょ」

マジョーリは苦笑いしてハンカチを取り出した。彼女の菩薩ぶりは音に響いている。

「さっき、イザベルに逢つたわ。課長さんたら、監舎に入っちゃいけないって。ずい分と官僚的ねえ。マルチーヌとどっちがいい？

あ、現われたわよ」

「監舎へ行ったら帰れなくしたげるわ」

マジョーリはコリンヌに踵を鳴らせた。

「いいわねえ。秩序と上司に対する敬意の発露。制服に郷愁を感じちゃう」

オリヴィアは舌を出し、革張り椅子に納まるコリンヌを観察し、マジョーリは女囚の連行を申告した。コリンヌはオリヴィアを眼顔で追い払い、オリヴィアは

「だけど考えたデザインねえ、このお仕着せは。支那のクーリーとアラビアの奴隷女のチャンボンスタイル。涙こぼさない女はいないわよね」

と、そこを立ち去つたのだった。

コリンヌ課長は、ミシュリーヌの憔悴ぶりを眺めて、先ずはうなずいた。そんなには手加減もしなかったらしい。コリンヌとしてはそこどころが知りたかったのだ。

「——よく反省したことだろうね？」

「は、はい——悪うございました。もうしわけございません。よく分りました——」

コリンヌのお説教がはじまつた。ともかく平身低頭、ひたすらに詫びるしかない。

「お説教の流儀はマルティーヌと少うしちがうようね」

と。オリヴィアはデスクに坐る。

「そうかしら。ともかく、スゴイ断絶思想。

社会人からの峻別をトコトン叩き込もうっていうの。そして、さらにこんどは、受刑者の中でも差別待遇で絞りあげるって寸法」

「つまり、要領とおベンチャラのうまいのが楽をするってわけね。いいじゃない？ イザベルやベルディチなんか張り切ってることね。眼に見えるようよ」

「あのひとたちはピカルディの空っ風で育つた生粋の海峡女だもの。男勝りのしっぺり者よ。私たちとは体格からして違うわ」

ピカルディ県は娯天下が名物でジャポネ国で云えば、さしずめ上州女という所か——。

「——規則というものは、どんなことがあっても守るべきなのよ。それがお前たち受刑者の心得第一歩であるし、お前たちが生きる道なの。ほんとに分つたのかしら？ これッ、

眼なんかつぶるんじゃないワ。まだ骨身に沁

みてないのね？ いいこと？ お前の反則は立派な逃走予備なのよッ。反省が足りないのなら、もう二週間ばかり続けさせます」

「あ、あッ、おゆるし下さいましッ」

ミシュリーヌは身悶えて声を絞つた。

「これッ、じつと出来ない？ 不動の姿勢よ」

「——は、はい。も、もう、独房だけは——」

「うるさいわね。赦しを乞うのなら態度で示しなさい。口先だけで泣き喚いたって通用するところじゃないわ。正座しなさいッ」

コリンヌはピシリと命じ、両肘をデスクについて指先を塔の形に合わせ、その尖端越しに女囚を見据えた。

ミシュリーヌは夢中で両膝を落とし、お尻をおろそうとして、忽ち呻いた。

「あれで正座は無理よね」

オリヴィアが呟いてうなずくとおり、両膝に締められた革枷がきしんでめり込むのだ。

「おや？ 私の命令よ。正座しない気？」

ミシュリーヌは齒を喰いしばって尻をおろしたが、深く喰い込む革と金具に、ヒーツと悲鳴をあげた。

「膝をそろえてッ。坐るお作法さえも身につけてないのね。命令よッ」



コリンヌは、赤い唇から齒をこぼし、脂汗  
 浮べる女囚を眺めやった。

「公務員に対する尊敬と服従の念に乏しい受  
 刑者には容赦しません。しばらくそうしてる  
 がいいわ。反省の色が認められないなら、仮  
 釈放なんて飛んでもないことです」

ミシュリーヌは縦バンドを懸命に挟み、膝  
 の上で両手を必死に合わせた。

「聖マジョーリったらオロオロしてるじゃな  
 い？ ホホホ」

とオリヴィアが脚を組み直す。

「愛情派の舞台がマルチヌのときより狭く  
 なったのは確かね。あの女囚、元伯爵夫人な  
 のよ、オリヴィア。そして、コリンヌは苦学  
 して大学を卒業したってわけ——という話」  
 「なるほど。復職しようかしら、私。制服  
 だってエレガントになったし、超勤だって予  
 算タツプらしいわね」

「あんたは峻厳派だったのね。あのお仕着せ  
 に交ってからというものの、女囚たちが私たち  
 のモードを見る眼ったら——。私なんかそぞ  
 ろ哀れになっちまって——。ヒューマニスト  
 だもん」

「歪んだ博愛主義。アフリカへ行って学校で  
 も始めたらどう？ でも、私は応報刑主義じ

やないことよ。刑罰ってのは要するに見せし  
 めよ。苦しめてやったところで、殺された人  
 が生き返る？ 盗まれたものが返って来て？  
 こっさり苦しめてやったって社会のプラスに  
 ならないわよ。あのお仕着せには賛成ね。ポ  
 イントは、ダブダブのおヒップと寸足らずの  
 裾と、肝心なのは股布。あれ着せて、珠数繁  
 ぎにしてやって、そこらを引張り回してやる  
 といいんだわ、ほんとよ」

「御高説、折を見て大臣宛具申するわ。ま!!  
 もう勘弁してやったらいいのに——」

ミシュリーヌが膝枷に責められて、正座の  
 まま横ざまに例れたのだ。マジョーリが扶け  
 起してやり、コリンヌが舌打ちした。

「そんなこらえ性のないことでどうするの？  
 ここをいずれ出て行くわけだけど、悪の誘惑  
 に打ち勝てる？ 真人間に立ち戻ろうという  
 意志が薄弱です、お前は——」

「すごいシゴキ方ね、スパルタ精神」

と、オリヴィアが肩をすくめた。

「あの課長さん、やはり矯正主義なのね。で  
 も、八分どおりは無駄骨よ」

「オリヴィアは虚無的ねえ。でもさ、エライ  
 人は統計数字が怖いもの。見込ある女囚はう  
 んと優遇してやれて。でも、それが案外に

少ないのよねえ」

「アツタリマエだわ。じゃ、あのコリンヌも  
 仮釈推進派なの？」

「さあね。ま、定員九〇%党でしょ」

「もっと刑務所をこさえりゃいいのよ。社会  
 の白血球だもの。悔悛したから仮釈放してや  
 る、更生しろ——なんて、どだいおかしいわ  
 よ。犯罪者の更生だけが目的なら、死刑との  
 釣合いがとれないじゃない？ 二十年だ、二  
 十五年だ、なんて長期刑も更生の邪魔だわ。  
 そうでしょ？ 十年以上も隔絶されてて、ま  
 とくに復帰できるかしら？ 刑罰って、やっ  
 ぱり見せしめなのよ、ウン」

オリヴィアは力説し、ミシュリーヌは漸く  
 正座の苦行を赦された。何度となくよろめい  
 て、その度にマジョーリに扶けられる。

「独りで立たせなさい。あまりやさしくして  
 やるのは本人のためになりません」

遙か年下のコリンヌに注意されて、マジョ  
 ーリは悲しげだった。

「四五三号ッ」

「——はい、課長さま」

「分った？ 反省と悔悛が充分に認められた  
 ば、それだけの処遇はしてあげます。これに  
 懲りて今後を慎しみなさい。いいねッ」



「——はい。よく分りました。あの——」

「なに？」

「は、はい——いえ、も、もう懲り懲りでございます——」

ミシュリーヌはわなないて訊ねそびれた。夢にまで見る仮釈放——その悲願がどうなるのか訊ねたかったのだ。しかし、女囚は眸を伏せて、肩をふるわせただけだった。

「やっとファイナーレね。可哀相に、涙じゅう顔だらけにしちゃって——」

よろめく女囚の腰縄をマジョーリは短かく握り、室を出るや、後ろ腰で革バンドを掴んで支えてやった。

「痛ましいシーンは幕がおりたんだから、お茶ぐらい淹れてよ」

とオリヴィアが見送る。

「課長が出て行ったら息抜きしに行きましょう。いまの女囚、なんだか特にハートに響いちゃった。でも、コリンヌは革鞭だけはあまり使わないのよ。マルチーヌだったら、いまの半ダースは固いとこね。いや、いまのはマルチーヌ特選品だったかしら」

「コリンヌは正座が好きなのよね」

「そう。ジャポネかぶれ。いや、チャイナだったかしら？」

「劣等感を叩き込むには打ってつけだわ」

オリヴィアはこともなげに云った——。

ミシュリーヌを二週間ぶりに迎えて、第十一房の五名は口々にいたわった。

「おミシュちゃんが帰ってくると、なんだか鼻唄でも出そうになっちゃう」

「エドウィージュの真似をおしでないよ」

ダイアナがからかい、ミシュリーヌは両手首を揉み、その夜の十一房は口数も多いのだった。点呼後の一刻、クリスチーヌがダイアナと語らい、二人の商売柄、話題はきわどく面白い。痛めつけられて戻ったミシュリーヌを慰さめてやろうというのか、こんな女二人もいじらしいものだ。ミシュリーヌは素直に笑い、その笑い声にクリスヌーヌたちが喜び合い、ミシュリーヌはあわてて口を押える。

シモーヌなんかまでが笑いをこらえた。

そこへ、マットを踏んでイヴェットが現われた。ともすれば全神経が集中してしまう第十一房——彼女にして見れば、その第十一房のトラブルについては、常に、荒っぽい連中より先手を打たねばならない。

「静かにしなさいッ。反省の時間よ」

六名の女囚たちは居ずまいを正した。

「笑ってたのは誰？」

「はい。私です。すみません」

ミシュリーヌは立って双腕を背に回し、首を垂れた。

「駄目じゃないの、四三三三。折角、課長さまにお赦し頂けたところだというのに——」

叱りつけるイヴェットは精一杯だった。

「勘忍してやって。担当さま。あたしが悪かめたんです。つい、妙な助平男たちのことを面白おかしく喋ったもんですから——はい」

ダイアナが身もだえて両手を合わせる。

「罰するのなら、あたしを——。縛って下さいます？ 捕縄できつく縛りあげていいわ」

イヴェットは吐息を洩らし、

「気をおつけ。バカな話するんじゃないわ。四三三三も坐りなさい。ゆるしてあげます」

と、立ち去った。

「バカだね、お前さんは」

クリスチーヌがダイアナを嘲ける。

「イヴェットがおミシュちゃんを痛めると思ってるのかい。二人は気が合うのさ。依怙ひいきじゃないよ、これは。そうとも、ウン」

クリスチーヌはイヤに力むが、第十房の元文部省秘書嬢あたりは、イヴェットを斜めに睨んで見送った。

「へん、なによ。私たちだったら、忽ち全員



正座と来ることだろね」

また、第九房の武骨女どもはホツとする。

「よかったこと、おミシユちゃん。折角、シヤバに戻れた矢先だろ。心配したね、もう」  
「でも、どうだろ、あの可愛い笑い声——」

三監ピカーに遅ましい三七二号と、これも超グラマー赤毛の三六八号とが嘆じ合い、叶わぬ想いに腰をよじった。この二人は寝台から離れて、側壁に鼻ヅラくっつけて正座している。服役態度劣悪のあばずれたちだから、就寝までは毎日こうやって反省を強いられるのだ。

「ちきしょう。味気ないねえ。今夜はお手々を背中だったつけね？ 脚がこわれちまいそうだよ」

「お前さんはお尻が重いからね。あたしゃ脚も脚だけど、腰の骨が疼いてさア——。あーあ、また春だよねえ。いまましいミラー」

正座の二人は呻くように切ながり、背に握り合う両腕をもだえた。

第二房の三一二号——元銀行員の横領娘が泣き声で哀訴した。この女は、裁判の不公平を今だに恨みがましくふてくされ、態度が悪いので、房内正座の組だ。

「イヴェットさまア。ゆるして下さいまし。

も、もう——膝小僧が割れそうですの——」

しかし、イヴェット婦人看守は哀願を黙殺した。差別待遇は公認だから気が楽だった。

——日曜日の午後、マリー婦人看守が鉄格子越しに云った。

「四五三号。面会よ。ルーシー・アントワネット。逢う？」

同囚たちが眼を光らせた。ミルドレーヌが「ルーシーって？ あのルーシーですか？」  
「そうよ、三八五号。でも、お前に逢いに来たんじゃないって。お名指しは四五三号」

ミルドレーヌは唇を噛み、ミシユリーヌはいそいそと立ちあがって監房を出た。

「でも、いったい何の御用かしら？」  
「逢いたくなきゃ、逢わないでいいのよ」

マリーは鉄格子扉を閉じ、スカートの裾をからげながら訊ねた。

「おねがいします。連れてって下さいまし」

ミシユリーヌは監房の前で両手をそろえ、

マリーは右腿に手をやった。監房内の女囚たち

ちが哀しげに眺める。スラリと伸びたマリー

の脚は太からず細からず、薄い靴下にピタ

リ包まれ、黒いガードルの端がヒラヒラ覗

いたのだ。クルスチーヌが涙さえ浮べて凝視

した。日暮れどきともなれば、あのような仕草

で何人の男たちを手玉に取ったことか——。

マリー婦人看守は、腿に吊った革ホルダーから、婦人用拳銃にあらすして、手錠を抜き出した。西部女気取りのこのいでたちは、ほかならぬ此のマリーが草分けだ。いかめしい腰ベルトが無くなったので、新モード制服の着崩れを気にしていた連中が早速真似て、三監ではキャスリーヌとフィリスあたりが早捌の手並みを競い合い、ジョアンヌ女史も苦笑いしている。コリンヌ課長も、仲の良いマリーがおっぱじめたことだから黙認の形だ。

マリーは鉄格子に向いたまま平氣の平左、スカートを高々とかかげて靴下止めを直し、革ホルダーの位置を気にし、やっとスカートをおろして引張り、ポーズを取って裾の長さを調べあげた。ようやく得心したか、左手に持つ手錠を持ち替えてカチャンと捌く。

ミシユリーヌは、マリーの衣裳直しの間、ずっと両手をさし出したまま待ち、プレスの利いたスカートを悲しく見詰め、やる瀬ない氣持で手錠を受けた。両の手首が、自から鋼鉄環を求めて哀しく動く。

「そんな哀れっぽい顔しないで。鼻なんか嘔りあげて何よ。私たちがバッジつけて歩くのとおなじことじゃない？」



マリーはさらに腰ロープを打って手錠を押え、当直デスクのところで、こんどは唇を直し、「どう？」と、制帽を留め直す。

「ずい分とおシャレするのね。舞踏会にでも行くの？ あら、腰は革枷が規則なのに」

フィリスが肩をすくめて鉄格子を開けた。面会室で、ミシュリーヌは軽く声をあげた。

鉄網越しに見るルーシーの姿が、あまりにも豪華であてやかだったからだ。

「やっぱり、あなただったのね、ルーシー。いえ、三〇——じゃないわ。ごめんね、ルーシー。でもあんまり綺麗なもんだから」

ミシュリーヌはまぶしげに云った。マリーが容姿を念入りに整えたのも、ルーシーと対面するせいだった。マリーの家は、昔はルーシーの家よりも富み栄えていたのだ。

「考えて見ると、そんな風にしてるあなたは初めて見るわけなのね。ほんとに美しいわ。私、恥かしい——こんな——」

「何云ってるのよ。みんな元気かしら？ いまが一番いい時候ね。でも、楽な季節はすぐに——。ミルドレーヌはまだ憎まれてるの？ 損なひと」

マリー婦人看守がキラリと眸を光らせた。「ほかの受刑者のことを話しちゃいけない」

「そうお。相変らず弱い者苛めしてるのね」

マリーとルーシーは睨み合って火花を散らし、お互いの容姿の品定めを素早く終えた。

「あの——なににいらしたの？ こんなところ、もう見るのもイヤでしょうに」

「あら、そんなこと平気だわ。もう、刑期だって過ぎたし、大威張りよ。指一本ささせやしないんだから。いい人生修業させて貰ったわ。ねええ、バツジさん」

ルーシーは流し目をくれて厭味を云い、マリーが半月形の眉を吊りあげた。

「今日はねええ。ここへ調査に来たの。それに、あなたに逢って、励ましてあげたいと思ってたし——。いえね、調査っていうのは、ホラ、ジャンヌって制服女がいたでしょ？ あの子がここを辞めたときのこと。やっぱり諭旨免職だったわ。履歴書にインチキ書いてたわけよ。自分で調べて胸がスツとしたわ——つまり、こういうことだった。」

年末年始を南アルプスに遊んだルーシーだったが、パリへの帰路、リビエラ海岸に立ち寄り、父の会社のニース支店にも顔を出したところ、その支店のオフィスに、ジャンヌの勤務姿を見出したのだった。社長令嬢を迎えて全員が敬意を示し、ルーシーはつかつか

とジャンヌに迫った。二人は顔見合せて睨み合ったが、逆転した地位に、ジャンヌは忽ち眼を伏せた——。

「お立ちって叱ってやったのよ。嬉しくって涙がこぼれたわ、ミシュリーヌ、あなたも喜んでよ。ずい分と撲られたじゃない？」

ミシュリーヌは複雑な心持ちだった。「ポンポン云ってやったわ。意地の悪い牢番女だったってこと。そして、本来なら刑務所で自分が女囚服着てなくちゃいけないことをして、うまくゴマかして貰ったってことも。」

事務所のひとたち、ビックリしてたわ。あら私の前科は知れ渡ってるのよ。それからね、支店長室へ呼びつけて、お茶なんか運ばせてやって、ドレスが身分より派手過ぎると叱りつけてやって——。涙ぐんでたわね。煙草買いにやって、間違ったのを買って来たってお説教してやったの。もちろん、立たせたままだよ。二時間立たせたら、モジモジと泣き出したわ。分ってたけどデスクの前に釘付けにしていたの。社長令嬢の前から許可なしに姿を消すなんて減俸だわって脅かしてね。おしまいは両手合わさんばかりに頼んだわよ。縛ってやって地下室へでも放り込んでやれたらなあ、と残念だったわねえ。ホホホ」



ルーシーは憑かれたようにしやべった。  
「おやめなさい、ルーシー・アントワネットさん。穏やかならざる会話と認めますッ」

しかし、ルーシーはマリーを無視した。

「——それからねえ、靴を磨かせてやったのよ。まさかとは思ってたけど、泣きそうな顔をして磨いたじゃない!! よっぽどクビが心配なのよね。調べさせたらねえ、やっと見付けた彼氏が病気になって、貢いでも貢いでも足りないらしいわ。株でも大損したらしい」

ミシュリーヌはホッと溜息をついた。浮世での金銭というものの方が、鉄格子や鎖や手錠なんかよりも、結局のところ解き難いしらみなのであるうか——。

「ね、ルーシー。お気の毒じゃないの。昔のことは忘れてあげたら?」

「そうは行かないことよ。履歴書のインチキを見付けたし、トコトン行ったら例の件をバラしてやるの。あなたも知ってるし、ミルドレーヌだって証人だし——」

ルーシーは失敗ったと口を押え、たまりかねたマリーが立ちあがった。

「面会を中断するわ。おいでッ」

「あら、そんなに手荒にしないでやってよ。ミシュリーヌに当ることはないわ。しゃべっ

てたのは私よ。なんなら懲罰する? 手錠かけたら? さ、どうぞ」

ルーシーは両手さし出して高らかに笑い、マリーは頬を紅潮させた。

「ま、そのうちにね。おぼえとくからねッ。手首や腰のサイズは分ってるし」

「どうぞ。あなたもここをクビになったら、うちの会社へ来たらいいわ。私のボディガードにしたげる。あら、ミシュリーヌ。じゃ、

元気だね。出たら訪ねてよ。あなたはお客様として遇するわよ、勿論。みんなにもよろしくね。ミルドレーヌやなんかと同窓会やらない? ローザンヌは出たのかしら?」

マリー婦人看守は女囚を廊下に突き出してから、もう一度ふり返ってルーシーを睨みつけた。公私ともどもの怒りに燃えた眸だ。

「早く帰った方がいいわ。まごまごしてると逮捕よ。官吏侮辱罪っての知らない?」

ルーシーは微かに顔色を変え、象牙色のドレスの裾を悠々と蹴えしたのだった——。

——イヴェットはモレシエンヌとともに夕暮れの車窓を眺めていた。

ミシュリーヌ奥さま二週間の受難も済んでかれこれ一週間——あんなに喜んでいらした外勤処遇を剝奪されておしまいになり、少し

シヨンボリなさったようだけど、でもまあ、そのほかにはこれという罰は科されなかったし、ようございまましたこと——。

イヴェットはモレシエンヌに誘われるままに、ミシュリーヌさまには申しわけないことだったが、一日の休暇をパリに遊んでの帰途なのだった。帰宅したら、またぞろ母親マリアにお説教されることだろう。

ミシュリーヌ奥さまがあすこにいらっしゃる間は、やっぱり遊ぶのはよししたわ——。と、折角観た芝居も上の空であった。

「何か御本ない? モレシエンヌ」

「バッグにあるわ。でも笑わないでね、ボードレールの詩集よ。私、こう見えても……」

イヴェットはバッグの中を見て驚いた。バッグはまあいいとして、手錠が冷たく光っていたのだ。詩集と同居はふさわしくない。

「私、いつも持ってるのよ」

モレシエンヌはきまり悪げに笑った。

「だって、パパが飛び切りのマジメ人間。私に制服着せるのが念願だったの。女の子の私によ。男の子をこさえて士官学校へ入れりゃいいのに——」

モレシエンヌには男の兄弟はいない。

「でも、私だってキチンとしたことが嫌いじ



やないから、婦人警官になりたかったのよ。けど、ラテン語とギリシャ語で不合格——」

モレシェンヌは、ほっそりと色白の頬をほころばせた。不合格は体重あたりのせいだ。

「だもんで、やむを得ず、仕上げの方を受持つことにしたの。捕まえる方は諦めてね」

「そうお。だから、こんな物を持ち歩いてるのね。ま、痴漢除けには役立つわ」

イヴェットは微笑み、そして、詩集を手にとって泌み泌み見詰めた。二昔も前の古い装丁——彼女の思いはコモ湖畔のいにしえに立ち帰るのだった。ミシュリーヌ奥様が館を去られるとき、ずっしりとした退職金とともにお手許の品々を分かち与えて下さった。そのときイヴェットが頂戴した物のなかに、この詩集もあったのだ。装丁も同じ一冊が——。

イヴェットはそのまま詩集を戻した。

「あら、読まないの？ 何度読んでもいいわよ。私、ときどき声出して読むの」

「ええ、今夜そうするわ。私も持ってるの」  
そう、ミシュリーヌさまの手垢がついてるであろうそれを、今夜は静かに吟誦しよう。ええ、それがいいわ——。

イヴェットは臉を閉じ、列車は夕暮れのルジョン駅に、滑り込んだ。コンピエースから

二つ目の駅で、かなり大きい。例のファルマン縫製工場に最寄りの駅だ。

イヴェットはあくびを押えて窓外を眺め、ハッと眸を光らせた。

「ちょ、ちょっと——モレシェンヌ。あ、見えなくなったわ——」

「なに？ 女優でもいたの？」

このあたりでは、先週からロケが行なわれているという話だ。ここらは風景がいい。

「でも、若い男優でなきゃイヤよ、私」

「そんな呑気なんじゃなくてよ。でも、まさか——」

と、イヴェットは向いホームになおも眸を凝らした。

「あ、それ、あすこよ。柱の陰に立ってる娘よ。よくよく見てみて——」

「どれなのよ？ 多勢いて分りやしないわ」

「ホラ、手押し車のところ。金髪の綺麗なのが帽子なしで顔隠すようにしてるじゃない？」

「金髪を見せびらかしてるのよ。きつと」

「バカ。あれは、たしか二監の二六五号。えーと、ソフィアとか云ったわね。外務に付添って行ったとき憶えさせられたわ」

「そうお。スゴイ記憶力ね。私、よその監舎のことなんか——。でも、独りなんでしょ？」

だったら人違いよ。おかしいわ」

モレシェンヌは探そうともせず、頭から問題にしない。

「だから妙なのよ。ピンと来ない？ モレシェンヌ。ソフィアは今日もファルマン工場へ行ってるのよ、ロープ一本なしに。あんたが

婦警にならなくてよかったわよ。税金の浪費だったわね。ともかく降りて行って見ない？ 間違いないわ」

「いいじゃないの、今日は休暇よ。もし、ソフィアとやらが逃げたとしても、私たちの責任じゃないもの。逃がして見てやったら？」

「なに言ってるんのよ。バッジが泣くわよ。横着きめこんでないで、さ——。ちがってたら夜勤一回を代動したげるわ」

モレシェンヌは洩々おみこしをあげ、二人は陸橋を駆け昇った。

ソフィアは、滑り込んで来たパリ行き列車に乗り込もうとするところだった。

「お待ち」

と、襟を掴まれてホームに引き戻され、ソフィアは色を失なった。

「なにすんのよ、いったい——」

「あなた、ソフィアね。二六五号でしょ？」

イヴェットは息弾ませてきめつけた。



「私たちを見覚えあるわねッ。ファルマン工場から逃げて来たのね？　そうでしょッ」

と、モレシエンヌも眸をキラリとさせた。

「どうやら、彼女も思い出したらしい。」

「人ちがいよ、知らないったら——。放してよ、邪魔しないで」

ソフィアは声ふるわせて必死だ。人々が集まり、イヴェットは手首を強く掴んだ。

「じゃ、お名前は？　どこにお住まい？」

ソフィアは絶句し、掴まれた両腕をもがいた。片腕ずつを押える二人がよろめくほどの力だった。

「ともかく、ちょっと来てくれない？」

イヴェットはハンドバッグを拾ってやり、モレシエンヌが娘の手首を調べる。

「これ、どうしたの？　妙な傷痕ね」

ソフィアは渾身の力をこめて暴れた。

「放してったら——。なによ、いったい。助けてえッ——」

「何だ、何だ？　女三人で喧嘩かい」

人々が取巻いて首をかしげ、ソフィアのスカートがまくれあがった。ちらと見やって、二人は眼配せし合う。青灰色の下着が見えたのだ。もう間違いない。

「モレシエンヌ——手錠持ってたわね」

仲裁しようと近寄りかけた男が二、三人、眼を丸くして後退りした。モレシエンヌがバッグから手錠を取り出したからだ。

ソフィアの踵がイヴェットの向う脛を蹴ったが、イヴェットは遮二無二ねじあげた。モレシエンヌも手錠を握って息を弾ませ、金属音とともに、ソフィアは号泣を洩らした。

「スリですって!!」

「そうでございますか。ほんの娘々した女に見えますのにねえ」

御婦人たちが囁やき合う。

「でも、相当なしたたか女ですこと。あんなに抵抗するなんて。でも、もう大丈夫だわ」

「あのお二人、婦人警官なのね。お手柄だこと。手錠が入られてしまえば、もう逃げられないですわね、絶対に。よかった」

モレシエンヌはいささか得意顔——ソフィアの後手錠をさらにきつく締めつけた。そもそもが、あまり手際のいいかけ方ではなかった。

イヴェットはハンドバッグを拾う。さらにソフィアのハイヒールを遠くから拾って来てやり、自分も穿き直した。ローヒールを穿き馴れているので、たまのハイヒールでの荒仕事事が一段落ついて見ると、どうやら、軽く足

首を捻挫しているようだ。

ソフィアが金髪ふり乱して号泣を絞った。

「——捕まったのね、あたし。ああ、やっぱり——折角——。でも、もう手錠が嵌まったのね——」

「逃げ切れると思ってたの？　バカね。もがいたって無駄よ、もう」

と、モレシエンヌが手早く身体検査をし、イヴェットはハンドバッグの中を調べた。

「——おねがい。逃がして——。これ、解いて逃がしてよ。すぐ戻るわ、誓うわ。ほんの二、三日でいいんだから——おねがい」

後手錠が音を立て、ソフィアの声は悲痛だった。手錠傷がさらにひどくなったろう。

「バカなこと云うもんじゃないわ。お前、もうすぐなんでしょ？　ほんとにバカねえ」

イヴェットは溜息を洩らしつつ、金髪の豊かさを掻きあげてやった。

「——そりや、あたしだって分ってるわ。でも、もう少しのことが辛抱できなかったのよオ——だって——だって、あのひとが、フェルナンが——病院で死にそうなんだもの。交通事故に逢って——。ああ、あたしのフェルナン。も、もう、死んでるかも知れない。おねがいだから行かせて——おねがい——」



二人の私服婦人看守は顔見合わせた。肺腑を抉る哀願の声には真実がこもっていた。しかし、そのいじらしい願いを叶えてやるわけには行かないのだ。

脱走女囚ソフィアは突如、身を跳えした。虚を突かれながらも二人は忽ち追ひ縋り、両腕を掴んで取押えた。

「——い、いたい——痛いわ。ゆるめて」

「暴れるからです。もう、手錠かけられたのよ、お前は。もがいたって、どうともなりやしないんだから、諦らめておとなしくしなさいッ」

「さ、立って。この上に反抗すると——」

ソフィアは、言い聞かされつつも跪いたまま、ガクリと金髪を垂れて啜り泣いた。涙ながらの哀願も空しいと知り、途切れ途切れに呟く言葉も哀れだった。

「事情はあったのことだろうし、お前の気持は分らないでもないわ。でも、それは駄目。分ってるでしょ？ さ、帰りましょう」

イヴェットが涙を拭いてやったとき、漸く警官が現われた。モレシェンヌがバッジを示し、若い警官に敬礼され、嬉しそうだ。

「まだ手配ありませんの？ 脱走囚です」

「いや——その——まだのようですが」

若い警官は油を売っていたらしく、どきまぎと答えて、イヴェットをまぶしげに見た。「そうお。私たち、ちょうど通り合わせたものですから。電話して下さいます？ いえ、自分でかけますわ。それから、車も——」

「は。御案内します、婦人看守殿」

女囚を押えていたモレシェンヌが顔をしかめた。折角、婦人刑事を気取っていたのに、これで身分がバレてしまった。

女囚は両腕扼されてよろよろと歩み、人々は首振って見送った。不思議なもので、脱走女囚の逮捕劇と知るや、見物衆たちの眸には残酷な喜びとともに、同情の色が混じる。今しがたの悲痛な声のせいもあるだろうが、愚かに浅はかな群衆は、ともすれば弱い者に味方したがるものだ。

「その女は何という名ですか？ 年令は？」

「そんなこと、どうして訊くの？」

「はあ。本署へ連絡しとかなないと——」

「バカね、あんたは？」

イヴェットは若い警官を叱ってやった。

「脱走して二十四時間以内よ。警察の介入は駄目。あなたが捕まえたのなら別だけど」

「ああら、そうだったわねえ。折角だけど、留置場の御心配は要らなくてよ」

とモレシェンヌも勢いづいた。

「お前、私たちに見付かってよかったじゃない？ 逃走罪にはならないわ」

「バカね、モレシェンヌ。起訴猶予になるケースが多いって言うだけよ」

二人の間に挟まれて歩むソフィアは茫然とした足取りで、話声も聞えない風情だった。

警察差し回しの護送車の中で、ソフィアはまたも泣きじゃくった。恋人のことは諦らめたものの、今度は懲罰が怖ろしいのだ。

「おとなしく縛に就いたってことにしたげるわ。さ、元気出すのよ」

「——はい。考えて見ると、到底逃げられはしませんでしたわね。あの人に逢うまでに捕まっていますわ、きつと」

「そうよ。分ってくれたのね。よくお詫びするのよ」

「はい。あの——あたしどうなりました？」

イヴェットは黙って溜息を吐いた。脱走の方は単純逃走だから、先ず起訴猶予になるとしても、窃盗罪の方が心配だ。ソフィアはフアルマン縫製工場を脱走するとき、女子工員のロッカーから、ドレスとハンドバッグを盗んでいたのだった。

もし、ミシュリーヌが知ったら、その柔ら



かな胸を痛めることだろう。ソフィアは、恋人の歡心を買うために罪を犯した娘で、警視庁の留置場でミシュリーヌと一緒にいた。恋人の写真を見せるとせがんで罰を喰い、呻き泣いてミシュリーヌの眸をそむけさせたパン工場の女工だ。窃盗で三年のソフィアだが、折角仮釈放も近いというのに、逃走したからには満期まで勤めさせられるのは必定——しかも、悪くすると一年ぐらいは更に喰らい込むことだろう。それに、忽ち眼前に迫っているのは保安課の取調べと懲罰——。

どうせ、五十歩百歩だったのよね。見逃がしてやればよかったわ——。

イヴェットは吐息とともにモレシエンヌを眺めた。

「どうしたの？ イヴェット。手柄立てたというのに元気ないじゃない？」

モレシエンヌのいうとおり、これは大手柄だ。ジョアンヌ女史がさぞかし手を打って喜ぶことだろう。なにしろ、他監舎の脱走囚を自分の部下たちが引っ捕えたのだ。しかも、今日の付添いには、三監からは出ていない。「——担当さま、ゆるめて。もう、決して暴れませんから——おねがい。とてもきつくって、もう——」

女囚がシートで身悶えた。

「すぐなんだから我慢しなさい」

「ゆるめてやったら？ モレシエンヌ」

モレシエンヌは肩をすくめ、鍵を取り出して女囚の肩を押した。

「そりゃまあ、可哀想なところもなきにしもあらずだわ。これッ、もっと手をこっちへ出して——。でもさ、イヴェット。逃走するなんて絶対に許すべからざることよ。さ、これでいいでしょ？ けど、私がバッジと手錠持っててよかったわねえ」

モレシエンヌは、わが眼で見たとなると、その悪を憎む気持は人一倍だ。先刻、降りるのを渋ったモレシエンヌだったが、そんなことは柵にあげて明るくいうのだった。

ソフィアは膝に涙を散らし、停車した窓外に獄門を見て、絶望の声をヒューッとあげた。よろめきながら降り立ち、両腕扼されたまま身もだえる。

「——自由になりたい——もう監獄はイヤ」  
イヴェットとモレシエンヌは心を鬼にして引き摺ったのだった。

守衛室には、既に保安課スカートが二人、眼を光らせて待ち構えていた。今日の付添いには、保安課からもテレエヌが行っていたこ

とだから、面目丸つぶれの鬼婆アたちはいきり立っている。

「お早や早やとお帰館だね、え？」

マーゴットが眼を細めていい、ソフィアは顔面蒼白にわなないた。

「——お、おゆるし下さいましッ——」

「へえ、もうふるえてるのね。もっと度性骨が据わってるかと思ってたけど——」

「ともかく脱ぎなッ」

モレシエンヌは、床に崩折れたソフィアに身を屈め、後手錠をはずしてやった。

「ああ、あんたたち、お手柄だったね」

保安課スカートたちは忌々しげだ。

「このひと、おとなしく手をさし出しましたのよ。自首しようかと迷ってたようですわ」

「へえ？ イヴェットだったわね、あんた。」

それにしちゃ、靴が汚れてるし、靴下の引掻き傷はどうしたんだい？ コメディ座がそんなに混んでたの？ どう見ても武勇伝だね」

「こらッ、早く脱ぐんだ。お前なんか着ておれるものじゃないんだよッ」

ソフィアは盗んだドレスを脱ぎ、お仕着せの下着をも全部脱ぎ、泣きじゃくりながら丁寧に畳み、立ちすくんだ両膝を忽ち落とし、恐怖の眸で保安課スカートを打ち仰いだ。



「おんや？ それなのかい。まあ、まあ!!」

マーゴットとレダが舌打ちした。ソフィアの腰部には生理用具が装着されてあった。それだからこそ、逃走などという大それたことを仕出かしてしまったのかも知れない。

守衛室の中央でソフィアは恥じらい、忽ち床にしがみついた。捕縄術抜群のレダが、捕縄の束を眼前で解いたからだ。

「さ、神妙にお縄を受けるのよ、神妙にね」

イヴェットは金髪に言って聞かせ、わななく肩を抱き起してやった。

「御迷惑かけました。悪うございました」

ソフィアは観念してひれ伏した。

「不心得女のアタクしにお縄を受けさせて下さいまし——お手数かけましてすみません」

「ふむ。セリフだけは知ってるね、どこでいつ憶えたのか——。ま、ちよっぴりとポイントを稼いだよ。恰好は一応整ってるねえ」

マーゴットが満足の意を示した。形式だけでも秩序立ててやれば、婦人部隊下士官あがりの彼女は単純に眼を細める。

レダが女囚の金髪を蹴り、ソフィアは背を向けて双腕を後ろ手に重ねた。

「こらッ、右手首を下にするんだ」

手練の捕縛が両手首に巻きつき、さらに首

へ吊られ、女囚は耐え切れぬ心細さに泣く。

そのとき、テレエヌが足音も荒く入って来た。怒りに燃え、眼が吊り上っている。

テレエヌは、ソフィア逃走事故の責任を感じていた。ソフィアが用便に立ったまま戻って来ないのに気付かず、一時間以上経ってから、終業直前に狼狽したのだった。それも、一一〇号囚キャプシーヌが意を決して告げ口してくれてからあわてふためいたのだから、まったくお粗末な仕儀だ。外勤女囚たちは罪もないのに一喝され、壁に向っての正座に身動き一つ禁じられた。テレエヌは先ず保安課長に急を告げ、マルタ課長女史は熟考一番、警察への通報を三時間保留し、保安課全員に動員をかけたのだった。テレエヌは工場内を探索し、眼を血走らせて飛び出し、そして、ルジョン駅頭の逮捕劇に駆けつけ損ねた。テレエヌは駅で聞いて地団駄を踏み、警察のジープに強引に打ち乗り、ソフィアの護送車を追って駆け戻って来たのであった。

「このろくでなしッ」

テレエヌは駆けつけざま、ソフィアの腰を蹴り飛ばした。金髪を掴んで力まかせにゆすぶり、むき出しの腿を踏みにじる。

「——私にやらせておくれ、レダ」

テレエヌは息弾ませた。怒りと憎悪をこめて捕縄が引き絞られ、血の気を失なった肌に喰い込む。ソフィアの眸は恐怖に見開かれ、いまにも失神せんばかりだった。

「しっかりおしッ。これから本番だよッ」

凄まじいビンタが立て続けに鳴り響き、ソフィアは悲鳴をあげた。素腰を蹴り飛ばされて膝をつき、縄尻引き戻されて立たされ、三人の鬼ババアどもに引き立てられて去る。

イヴェットとモレシェンヌは暗然と顔見合をせた。思いは同じ二人だった。

「分るわ、死刑を言い渡した裁判官の気持」

マーゴットがふり向いた。

「あんたたちも来るのよッ。下手に底い立てすると、幸い転じて禍いになるからねッ」

私服の二人は溜息をつき、のろのろと身を起したのだった。本館保安課の壁際では、これも肌を剥き出された女囚の群が三十名ばかり、後手錠を銀色に光らせて背を向け、横一列に並んで正座していた。今日の外勤女囚たちが、とばかりを受けているのだ。ソフィア不在を知っていて黙っていたと責められ、お説教とビンタをタップリと受けたあげく、沙汰のあるまで反省しろと命じられたのであった。



# ピンク映画のあれこれ



## 段高志 文画

東京には、いくつかのピンク映画上映館がある。そして今日もまたご多聞にもれず同じような男女のからみつきをえんえんと上映している。

いつも筆者は思うのだが、このような映画館に入ろうとまず切符を買う時、大抵窓口には若い女性がいるものだ。まことに平気な顔をして金を受取り切符を渡す、入口にはモギ

り嬢がいて、これまた、別に何んともありませんわ、商売ですからねえ。と云わんばかりに平気で切符をモギって呉れる。いや、実は今週はいつもと違って凄じくないか、団鬼六氏の後手縛りが、今あんだのいるこの映画館で上映されてるんだよ。いや、知らないとは云わせない。ホラ、スクリーンから聴こえるじゃないか。

へ変態だねえ、あなたは……。一体どうしようと云うの？ あたしをこんなめに逢わせてさア……。

と喋っていても、それが聞こえていても別に……もう慣れてるんですの。女のひとがどんな男のかたに、いじめられようと縛られようと、別にかまわないじゃありませんか。あれはエイガ。わたし達は平気。もともと一カ月いくらで、映画館に雇われているだけなんですもの。いちいち画面のお芝居に興奮なぞしちゃ居られませんワ。却ってもっともつと物凄い映画を上映して、お客さんがワンサと来て頂いた方がどれ位いいか分らないワよ。ボーナスにひびくんだもの。と答えんばかりの顔付である。

そうかも知れんが一寸妙な気もする。

現代風のお嬢さんがたには尾を巻いておいで、今度は男同志、いや男の心理をご披露してみよう。館内見渡す限り、単独に入り込んだ人ばかりで二人連れはほんの数える位しか居ないとみた。まして女性同伴なぞ、薬にしかくも見当らない。本当は、恋人なり何な



りの女性を連れてピンク映画を観るのは大いに楽しいものだが、こう周囲がオール男性ばかりじゃ、お互いに気がひけて、とてものと堪らないのだろう。休憩時間には皆んな隣の連中に無関係に、天井ばかり見ている。中には螢雪ならぬ読書をやっている勉強家もある。外は暑いと冷房をいいことにして、折角のピンク映画をよそに、スヤスヤと安眠あそばしている御仁も、結構広い東京にはいるんだから面白い。

一体何を考えてるんだろう？　なんて筆者は曾って友人某に尋ねたら、某君ニヤリとして曰く……いや考えてなんぞいないんだよ。性欲と同じことさ。三日目毎に頭をもたげる程の急激さは無いにしても、一週間もたてばつまらんのを承知で、またピンク映画をのぞきたくなる、あの心理なんだろうよ。第一、筋らしい筋もなくて、映倫さんさえもあくびが出る位、春画もどきの声ばかりをむやみと聴かせてからみつくあたり、一体何処がいいんだろう？　って云ったって無駄さ。いや、こんな理屈を申立てちゃいけない。それは時代劇と全く同じことなんだ。人里離れた山の中に、一糸乱れずご盛装の高島田の娘御が結

構幕して居るナンぞ、おかしいじゃないかって異議を申立てても、理屈抜きの処が時代劇のよさ、そして面白い処なんだ。だから、もうこの位で、場面転換かも知れないと思う時に、とんでもない男ととんでもない女がヒョコンととび出して来て、いきなり抱き合ってハッスルするってなことがやれるのがピンク映画って奴さ……。

そう云えば、今回の「鞭と肌」と云う映画も、団先生原作脚本と銘打ってあっても、やっぱりどこかにからみつきを出さないことにはピンク映画にならないものらしい。だからこうなれば、も早や敵も味方もなくなる。当然憎んで然るべき相手方の男が猛然とかかってくるのはいいとしても、死にもの狂いのはずの女が、……いやッ離して、馬鹿、駄目、やめてッ。……ってなことをいいながら、一応はさからっているうちに、いつの間にやらよろしく妥協して、一切を水に流して了う辺り、女の方は余程男ヒデリに悩んでいたか、または、頼のない、好き者としか思えない。「鞭と肌」ではセーラー服の女学生の娘と着物姿の二号さんが仲よく裸にむかれて太い縄で後手に縛られ、例の如くお誂え向きの一軒

家の物置の中へ閉じ込められる。

実はその前にあるヤクザの情婦を裸にして太紐で後手にして縛り、足まで御丁寧にくくり合わせて、鞭——と云っても自分の革バンドなんだが、この間に合わせの鞭で女を打つシーンがあるのだ。

へ俺はこうして、女をいじめるのが好きなのさ。女に裏切られた男は何んとしても復讐せずには居られないんだ。……

てなことを陰にこもったいい方でその男が喋ると、突然観客席の方から一斉に笑い声がわき起った。

そのもの自体決して深刻じゃないんだネ。この期におよんでサドだとかマゾだとか云ったってどうってこたあない。もうそんなことを通り越して、……何んでも好きなものを演れッ。何んでも金出して観たるぜッ……と云わんばかりである。だからスクリーンで妙に深刻ぶればぶる程、ますます今の観客席では笑い声が起ってくるのだ。

これだから、本誌「奇譚クラブ」あたりも先き<sup>さき</sup>き用心するに越したことはないと思うんだ。……とまあこれが、筆者の友人の与えてくれたアドバイスなんである。



つまり一言に云って、世の中がこうどんどん先へ先へと進むようになった現代では、いちいち立ちどまって感心なンぞして居られないンだろう。

いつか上野駅に近いピンク映画館で、筆者は小森白監督の「続拷問刑罰史」を観たことがあった。この時でも映画そのものがわざとらしいのか、観るお客さんの方が一向にこたえなくなってしまうのか、さらさらにしびれた風もなく、釜ゆでのあたりはむしろクスクス笑いの方が画面の悲鳴より強く聴こえる位で終わってしまった。考えようによっちゃ、金を払って内心ゾクゾクしたくってわざわざ来るのに、却って笑わされて映画館を出る位、間の抜けた話はない筈である。

筆者は思うに、結局ピンク映画（何もこの種の映画ばかりでなく、例えば時代劇でも、TV映画みたいなものでもそうらしいが）なんてものは、筆者の一方的な愚論かも知れないが、公開の一步手前で製作している時が、むしろ大いに楽しいのではあるまいか。大都市の周辺では、よく何んとか撮影会がひんぱんに開催されている。こんな場合カメラ技術の競技もさることながら、モデルを真ん中に

置いて、ああでもない、こうでもないとやっている間が、結構楽しいもので、作品の評価はいつもそのあとで結構と云うことになる。だから出来上ったピンク映画には、批評らしい批評はまず無い。本当は有った方がいいのだろうけれども、無くて金がしたま儲るところに、ピンク映画の特徴があらうと云うもの。

昔は映画館の前に、まず観客を集める手段として、これが只今上映中の映画の真髓だと云わんばかりに厳選されたスチール写真をでかでかと張り出したものである。ところが当世は忙しくて、これまたいちいち見ちゃ居られないと見えて、とりわけ、ピンク映画ともなると、どうひねくろうと題名も似たりよったりでいい加減なところへ持ってきて、どのスチール写真も全く同じとみてよい。ただ違う点は、お縛り位なもので、これは妙にパツと目につくから不思議だ。ところが近頃はこの目につく客寄せすらも、影が薄くなって来た。つまりピンク映画にはお縛りが特殊なものでなく平々凡々極く当り前のこと……と云う割り切った世の中になりつつあるようだから、何んとか前途が寂しいような気がして

ならない。

ところでこんな頼りないピンク映画にただ一つ目を見張るもの、つまり感心する流行があらわれてきた。それはパートカラーっていう奴である。これは文句なしに、それこそ楽しいオワシスではなからうか。

映画が「何んとか拷問史」と来れば必らず真紅の腰巻一枚の美女が、実感そのものの荒縄で後手にギリギリに縛られ、青竹で打たれているシーンが、突如として白黒のみの世界から、極彩色の世界へと引継がれて映ってくる。

色は万人の心を揺さぶって止まない。……成程、昔はよかったなアと思っていると、これまた暗黒の中を七人の花嫁御寮が、薄明りに燃えるような緋の下着を乱して、何処かへ連れ去られようとしている。皆んな両手を後ろに廻わされて細引のようなものでがんじがらめに縛りあげられて、猿轡までかまされている。一応総天然色の色付なのだから迫力万点とくる。南蛮渡来ならぬ大和娘の密輸出シーンだから断じて許せん……なんて云うけなげな気にもなろうというもの。だからたとえ安物のカラーでもちよいと怖ろしくなるので



ある。

「鞭と肌」の中でも、二号さんが裸にむかれて、帯や着物をそのあたり一面に投げ散らすところがあるが、これが白黒だけの画面だと何が何んだか分らぬのに、パートカラーに移ると、とたんに緋色地に梅の花をちらした華やかな女の長襦袢がなまめかしく迫力を持って映し出された。

コストが高い安いの問題ではなさそうだが、否、安くしてしかも効果があがればこれに越したことはない。兎もあれ、最近はただただもうお盛んなものである。

けど同じような物が三本立ともなるといささか食傷する。筆者はこんな場合、いかに明治百年、そして大正の匂いがする物の云い方をするようだが、必要以上の露出趣味がそもそも食傷の原因ではあるまいかと思っている。どうしても見ようとするに対して、決して見せまいとする……云ってみればたわいないジャレ事に過ぎない仕草が演りようによつては相当量のエロ味があたり一面に発散し、観客をひきつけるものだ。

そう云えば、いつか東映のピンク映画？

題名を忘れて了ったが、往年の東京の洲崎遊

廓を背景にした女郎哀史とでも云った映画を観たことがあった。オールカラーなので画面は仲々綺麗だったが、相手がなんせ色の世界であるだけに、殊更な露出を自ら制御している気配があちこちにうかがわれて、ホッとした記憶がある。すべてが遠慮勝ちのところへもっていった、遊廓に付き物の女郎の折檻が盛られてあった。ゼスチュアは頂けなかったが、明治20年から30年頃の風俗がよく考証されていて、成程あれなら朝から晩まで、女を折檻して見たいものだ、と云うような気にもなる。

総じて、こんなものにはこうしなさいと云うお手本がある筈はないのだが、女郎を後手に縛りあげ、両手首は空しく空中を泳いでいるそのうしろ姿、前に向けばしどけなく裾前が乱れて、遊廓のお女郎がする独得の緋色の腰巻が見えつかくれつするあぶな絵姿……仮りにこれが生（なま）緩（ゆる）るいからと云って、戦後のカストリ雑誌に見られるように、もろに捲りあげて膝小僧まで露出したり、故意に演出した不自然な姿態にしたんでは、却って見苦しいものである。

ピンク映画は人間の偽わらない本能である

ところの性映画であると同時にほのぼのとした芸術品であって欲しいと思う。いくら裸女が美しいといって、やたらにハダカにヒンムクばかりが芸術じゃあるまい……てなことをいってもみたくない。

つまり絵画に例えるならば、幕末のリアリズム画家芳年の描く浮世絵ではなくて、先生股間のものが見えてますよ”にニヤツ、と笑いながらご愛嬌の一物を画中に描き添える現世の最後の浮世絵師、故人伊藤晴雨先生の描く絵画でありたいものだ。

ピンク映画には、あらゆる意味から“色”を欠いてはいけない。文字どおりのピンクであると同時に、どのシーンからも、ほのぼのとした色のにじみ出る画面であって欲しいものだ。

「いろいろゴチャゴチャ仰言いましたがどうなさいました？ご堪能なさいましたか？どうぞ、これにコリタなど仰言らずに、毎回映画館へお運び下さいまし。従業員一同お待ち申上げて居ります」てな具合に、ピンク映画館の出口でお嬢さん方に挨拶でもされれば、もはや万事云うことなし、もって冥すべきであらう。



# 稿談性風俗資料入門

(7)

宮武外骨の逸文『手淫通』と

『寂滅為楽考』及び『半男女考』の紹介

斎藤 夜居

宮武外骨に『手淫通』と題する秘稿があった。△ますたあべーしょん△のみをテーマに取扱った一冊の読物というのは、まったく珍しい。

もっとも最近は△手淫△とはいわずに一般に△自慰△という言葉がつかわれている。手淫と自慰では随分と言葉の意味が違うから、性的自慰行為というべき所であろう。が、まあそんなまどろこしいことを言っていたら間に合わなくなってしまう。普通にはますをかくななどと言うが、それよりもっと分り易い言葉があるから、それで考えて頂いても結構

である。インディアナ大学動物学教授アルフレッド・C・キンゼイ博士の有名な報告書——人間に於ける、男性の性行為——に拠れば年齢と性的捌け口の章に、自慰と年齢。婚姻状態と性的捌け口の章に、自慰。思春年齢と性的捌け口の章に、自慰。社会階級と性的捌け口の章に、自慰。というような四カ所に亘ってデータが示されているが、説明文の方をかい摘んで記すと、

自慰は主として若い結婚していない人々の行為であるが、結婚した人の履歴でも相当数の人がこれを行っている。自慰とその

回数は、社会的環境に支配されており、また教育程度や職業の状態にも関係がある。全部の独身男子のうちで、自慰を最も回数多く行うのは十六—二十才の間であって、その年代では88%の人が行っている。独身者の約半分は五十才になってもなお自慰を行っている。既婚男子では最も頻回自慰が行われるのは二十一—二十五才の間で、年と共に徐々に減る。自慰回数は、個人的に非常に異なる。一生涯のうちに二回か三回しか自慰をしない少年もあるし、また一日のうちに二回か三回自慰を行い、数年の間を



通じて一週平均二〇回あるいはそれ以上行っている少年や、もう少し年上の若者もある。……また変った喜びを味うために、既婚男子で時々わざと行われることがあるということは、注目すべきことである。下層社会の男子は異性間性行為を直接契機として、自慰を全く止めてしまう。自慰を非常に恥ずかしがり、発覚すると盛んにこれを否定するものである。

自慰とは所詮、自分自身によらなければ性欲を充し得ない社会的無能力者の、快楽源でしかない。所が、比較的教育のある人々の大多数は、結婚前の性的捌け口をすべて自慰によっており、結婚後も自慰はその性的捌け口としてみなみな地歩を占めているのであるから、教育程度の低い人々が、性交に代えて自慰する人々がいかに多いかということを知ったら、驚くにちがいない。上流階級の既婚男子が自慰行為を保存するのは、カレーヂ教育を受けた婦人(妻)に見受ける性感の度合の低いことに基因する。

などと言っている。その説明の裏付けとなる統計が図示されている。アメリカは物質文明が極度に進展している国であるから、精神

文化が置き去りにされ、かのヘンリ・ミラアの薔薇色の十字架『セックス』などを読んでも、文明への反逆つまり人性を原始人の生活まで回帰せしめようとする、血みどろな男女の闘争を感じるし、活字印刷という文明の利器をつかって、それを手として無限のエネルギーを放散しているようにも思われる。自慰(手淫)という行為は、くらい事柄で書誌解題を離れて余談ばかりで申訳ないが、もう少し……。

私が大平洋戦争中に皇軍の一員として南方共栄圏スマトラ島に従軍していた頃。軍用慰安所(俗にピー屋という)設営係から聞いた話が、いまだに忘れられない。何しろ一個大隊数百人の将兵をお相手する慰安婦というのが十二、三人なのだから、どうしたってあぶれが出てしまう。夕方まで慰安所の附近をうろついても女が空かない。帰営時間になってしまふ。椰子の葉蔭を求めて、止むを得ず夕照の大海原を眺めながら、ピー屋の飾窓を遠目にうらめしそうに見て、淫らな妄想をえがき、手淫に耽っている兵隊さんを見た、とインドネシア人が報告にきたと言うのである。慰安所係の伍長は、私にしきりに、「まったく、皇軍の名折れだ。はずかしい」

と言って嘆いていた。

自慰というのは事柄が事柄だけに我国では科学的な詳しい文献は少いようである。『性科学研究』(昭和11)に、故山本宣治氏と安田徳太郎博士が計画・調査した「性教育資料集」という、大正十一年から昭和三年にわたる約七年間の帝国大学学生・早稲田大学学生を対象とした性記録のうちに「自慰」の項目を見たが、これは完結をしたかどうか判らない。その他では、篠崎レポート『日本人の性生活』(昭和28)の後尾に小さな統計が出ていた。



宮武外骨の奇書『手淫通』については、会員雑誌『近世庶民文化』(第15号昭和28・1月同研究会発行)に、故少雨莊斎藤昌三により紹介されている。大正末期の刊行だが刊年月がなく、筆写で伝ったものを外骨流に註をしてマツメた。十五種目あり、そのうちの芝居小屋の「雪隠のぞき」の全文のみが載っている。著者不詳とあるが、この書は編者作者兼発行者共に宮武外骨である(温古書屋主人談)。原本は半紙判四十頁、一頁十二行詰だったとの由。この書は『玩索考』と改題され



全文活字化された。B6判仮装31頁の小冊子である。奥付も刊者の記名もなく、恐らくは好事の特志家の手により成った書であろう。次に紹介してみたい。

(一)「雪隠のぞき」これは前掲誌にあるので省く。

(二)往来で自慰を行うには二様あり。その一つは途中で出逢った美女に淫念を起し、ひそかに独悦を試みる。もう一つは道路の雪隠(共同便所のこと)に入り、節穴より往来をのぞき、通行する女の姿に目をとめ、それを対象として行為に及ぶ。というのだが、この書中の事柄はいずれも明治末期の関西それも京都・大阪を背景とした話である。往来で美女をみてこれならばと思つたら二、三丁あとをつけ、その間に十分に得手吉をひねくっておき、もうよしという所で足早に別嬪より先に出ぬけ、立小便をするふりをして立留まり首を横にむけて、その女の顔かたちを目をうつし、性的妄想を加味してスカリスカリとKAKUべし。というのだから、何ともはや暢気な話である。また、更に快く独楽するには節穴多き雪隠をえらみ、その中で先きに準備態勢をととのえておき、これぞとおもう美女が通行した時に、短兵氣に行為にうつせとい

うのだが、美女が通行するわずかの時間に目的を遂げるのであるから、早目にはずませて待っているのがコツだと言っている。詩趣のある風物(節穴多き共同便所)などというのは、今日の都市ではもう探したって見つからないから、ずいぶん昔の話だ。

(三)どこそこの女房は綺麗だ羨ましいあの女と一義に及んだらと、平常目を付けておいた家の前を、夜更けて何気なく通りかかり、夫婦の寝物語を戸の隙間より盗み聴きして、そのテンポとリズムに合わせて、自分の楽器も掻き鳴らすという話。然し、余り他人の家の戸口に佇み居れば、犬に吠えられたり人に怪まれることがあるから、その点に注意を怠ってはならぬと言っている。

(四)風呂屋のぞき、の話だが以前には銭湯の構造もずいぶん粗末だったことは、いずれの風呂屋と雖も、窓のしとみに淫水の跡残り居らぬはなく、又窓の障子に穴の明いて居らぬはなし。と書いてある。

(五)大都会の風呂屋は男湯女湯の区別正しく、間の羽目より、窺うことがむづかしいけれども、田舎では取締りもゆるく、中にはわざと穴を明けておき、女湯が見えるようになっていたりして、独悦も随意だ。但、湯の中で

は不味い。淫水が浮上したりする形容面白からず、また且衛生上有害となるやはかり難いからで、なるべく板の間に出て女湯を差覗きながら、からだを洗うふりで、石鹸(しゃぼん)を用うれば他人に見られてもわからない。

(六)春さきの野辺で、田舎の少女らの草摘みを眺めたり、又神社仏閣の庭であそぶ少女を眺めて目的を果す、という話だが、まだズロースとかパンティというものを穿いていなかった頃の話である。

(七)都会ではないことだが、田舎では女が往来で尿することを恥しく思っていない。人がいたって平気で女が立小便して、用が済むとサッサッと行ってしまう。そういう時がチャンスだ。かの女の小便せし所に至り葉末にたまり居る小便のしたたりをチリ紙にしめしとり、人目につかぬ所まで来たら、鼻へ当てそのむしくさき匂いをかぎつつ、淫念をかき立てて行ふべし、という話だが舌先きにて吸込み惚れた女を舐めるような気持でやれば、思いの外快感をおぼゆるものなり、と附け加えている。——都会人には草の葉の匂いをたまに嗅ぐと、性の郷愁を感じたりすることがある。改めていうまでもなく実に露骨な話だが、近代感覚に通じるものがあるようだ。



(八) 人混みの中も又その場所である。縁日とか当時はなかったけれど映画館や電車の中などをさす。そして一種の哲学を述べているのが面白い。独楽行為にはその性質上あくまでも△損得なし▽を原則としているから、人混みの中の女の衣服を汚すような他人迷惑は不仁の所為だ、と論じている。つまり筒先に紙ぐらい当てがってやれ、といっている。……私感だが、いまでも時々新聞記事になる、正月や成年式の女性の晴着に硫酸を浴びせる痴漢がいるが、あの△硫酸▽は、つまり△精液▽の代償だと考えると、事柄の意味がよく分るではないか。完全にけがさなければ目的が達せられないということである。

(九) 京都は万事節約をむねとする所だからばかりで小便を拭きたる紙(註。男性の場合は振るだけだから、つまり女性が使用したという意味になる)を屑籠に入れおき屑屋に売るのが例なり(又註。まったく京都の読者にはすまないと思うが恐らくは事実だったと思う。然し淫文漁りもこういう民俗的記録にぶつかった時はうれしいものだ)。されば朝早く商人の家、又は髪結床、湯屋等に至り、急に腹の痛む振りをして雪隠を借りる。誰れも常習独悦犯とは知らないから貸してくれる。

そうしたら先ず人のいるや否やを確かめ、そつと屑籠を改めて見る。一枚紙のもみくちゃになっているのは小便を拭いた紙、三、四枚重って丸めてあるのは、必ず一件を済ました始末紙と知るべし。それを持って雪隠に入り別の用件をたのしめばよい……。又、京都は昼寝好きの土地柄故、何れの家でも昼寝をするから、中には夫婦で昼のたわむれを行うのもあるから、さきに述べたと同じ要領で独悦すればよい、とも言っている。

以下まだ『手淫通』には長短六話ほどあるが、本書の内容については察知できたと思われるので此処迄とする。

私はこの書を読んだ時、外骨が何故このような奇稿をのこしたか、その点に興味を感じた。猥褻主義を唱えた人にふさわしい、まったく古今無類の珍文献である。唯我独尊的な独悦思想で、これには何らかの動機があった筈だと考える……。



戦後も世の中がすっかり安定してから、宮武外骨翁の訃報が新聞の片隅に小さく出ていた。八十数歳のご長命だった。官僚反抗と猥褻主義で通した八十年ということになってい

るが、昭和の中頃から没年まで吉野作造博士(日本における初期のデモクラシー学者として著名)の懇ろなる、推薦によるものとは申せ、東京大学法学部嘱託となり、明治新聞雑誌文庫主任という半官僚で余生を過したことは、この翁らしからぬ言行不一致の生涯だった。自己主張がはげしかった人物だけに、その精神的な汚点は、ぬぐい切れぬものを感じる。私たちがそう思うことは自分の性格の弱さを自覚しているからでもあるが、外骨にはそれ相当の理由もあって敵(官僚)に操を売ったのではあろうが、その著述を読んできた読者たちにとっては空言を長い間買わされて来た訳で、その変節を憎むよりも、哀れさが先立つ。ムシロでも△主義▽をおっ立てたらそれで死ぬまで通さなければ、著述家の場合身体は楽をしても、著作の精神が死んでしまふ。やはりその点では文学では永井荷風、軟派出版の梅原北明、「責」の伊藤晴雨などは筋が一本キチンと通っていて、作品に対する不安とかやましさがなく、気持が良いものである。外骨は△半狂堂▽と号していたが、つまりは半分は正気だったのだから、狂気と正気が半分ずつというのは人間の常態を意味するもので、別に不思議なことではなかった。



外骨の評価は、(文献)にめぐまれた時代を生きた明治文化研究家、然もそれは先駆者でもあったことと、文献蒐集家、明治文献学者であったことである。明治十八年四月以来(十九歳)、職業的著述家と称し、生涯に刊行した印刷物は新聞・雑誌・単行本等は等身量以上であった。

最初の筆禍は、エロではなくて不敬罪である。秩序壊乱罪であった。読書人士にはよく知られている事実だが、やはり外骨著述をいう場合、どうしても触れておかねばならぬ大切な事柄である。問題を起した『頓智協会雑誌』を発行するまでの外骨は、若気の至りとは申せ郷里で納れられぬ貧乏士族の娘(と言っても初対面の時に、三味線を取り出し上方端唄「こすのと」を唄ったというから、幾分泥水にしみた娘だと思われる)と、手に手を取り合って讃岐を出奔。上京しても差当って仕事がないので、京橋の郵便受取所の事務員を一年、其処が移転と同時に失業して、三田で親戚が出版事業をやっていたので二人して其処の居候となり、仕事を手伝いながら印刷出版に関する事柄をおぼえた。根が独立心に富んだ根性のある男だから、いつまでもひとの厄介になっても居られず、京橋南鍋町の二

階に間借して、雑誌発行を計画したまでは良かったが、足手まといになるのは田舎者でいつまでも小便臭い房子というその妻。ひどいことをするもので、伝手を求めて、新潟県令(知事)の本邸に女中奉公に出してしまった。そのくせ性的要求に迫られると、時折呼び出しては排泄容器としての任務を与えていた。この間にも幾種かの編輯物雑誌を刊行してや

っと生活していたが、国許の母親から二十五円という送金があつて、これを『頓智協会雑誌』第一号千部の印刷製本料として、銀座の読売新聞社に払込んだ。所がこれが実に当って、再版三版の大景気だった。(註。一冊原価二銭五厘、卸価一冊七銭)

毎月二百円以上の月収があり、一カ月間に二十回以上吉原遊廓にあそんでも、尚まだ金がつかい切れなかったという。それでも、房子には女中をさせたまんまで顧みなかった。冷酷な男であった。これらは明治二十年から二十一年の出来事で、外骨が二十歳から二十歳一歳の間のことであるから、随分と早熟で達者なものであった。

明治二十二年二月十一日帝国憲法発布。そのお祭り騒ぎに、『頓智協会雑誌』(28号、この号限りで廃刊)で、「大日本帝国は天皇

之を統治す」という第一条以下を……大頓智協会は讃岐平民外骨之を統轄す……云々と戯文化し、「骸骨憲法を授ける図」という漫画を入れたからたまらない、忽ち東京輕罪裁判所検事局より召喚状が来た。外骨には未決拘留、不服控訴上告等の期間八カ月、禁固三年合計三年八カ月の獄窓生活(石川島監獄)が待っていたのである。

外骨がこの事件を起す以前のことだが、妻の房子は神田警察署に説諭願いを出した。兩人対審の場所で、彼女は次の如く言った。

「この人が今でも暮しに困って居るならば、わたくしはこれから先き何年でも勤め奉公をしています。けれども最近は何に妾を置いたり、遊廓に足繁くかよったりで、贅沢な暮らしをしながら、わたくしにはヒドイ思ひばかりさせております」と言つて泣き伏した。房子は思ったよりも温順貞淑な女性だったのに、外骨はこの時にも振向きもしなかった。

彼女は、事件が禁固三年と決定した時に、高松にかえり、後に大きな紺屋に再嫁した。その後の話が伝えられていないことは、つまり幸福な生涯を過したことと思われる。

◇ ◇ ◇



さて、それからの石川島監獄における三年間の獄窓生活は、エゴイスト外骨をしていよいよハオナニストVたらしむべく土壌を培ったとみるべきである。獄中生活の寂しさと無聊を慰めるものは、過去における遊蕩生活とそれにともなう女たちの面影や姿態だけだった。また脳裡にのこる強烈な性的印象の残像だけだった——。のちになって、やはり文筆の人として心のあとの記録として『手淫通』をのこしたと見るべきであろう。事柄における奇稿というのみならず、文章上の迫力ある由縁でもある。

次に外骨には『寂滅為楽考』という秘文があり、戦前まで末摘花の研究評釈が地下で行なわれていた頃に、大曲駒村刊行の研究書に付録として載っているという話はきいていたが、未見のままだったところ、最近その部分を筆写した豆本を求めることを得たので、全文を紹介する。けだし之また奇籍というべきもの、

### ○死ぬく

#### 死にますく考

人生至上の快感で自己満足の極に達した際死の観念が起ることは、古今内外共通の人情であるらしい。これを天真流露の文献に徴す

るに、貞享二年の『恋の息うつし』には「ひと抱きつきて死にますと高声にいふ」とあり、明和六年の『活花二人契子』には、遊女の口吻として「此年月いくせの客衆にあいんしたが今宵のやうなハアモウ死にんすく」とある。『春窓秘辞』には、しきたへの枕はづしつ乱れ髪なく声たかみ死ぬといふなり。

また『太平楽府』に長命丸に題す（註。長命丸は媚薬）という狂詩があり、大要次の如く詠っている。「この妙薬を誰れが発明したか知らないが、怪むべきはその効能たるやその薬名に背むいている、閨房で試みに佳人に用いたら、煩悶し苦しうに死にそうだといった」。また『花合四季詠』には「見性成仏の死にますく」とあり、俗謡には、「アレ死ぬくは気がよわい、一緒にしんで下さんせ」とあり、深川靈運院東明の『さんこさんまいこ』の句中に、「いのやかきのや、屋のゆるふ」云々の句解に、「いのやかきのやは俗に死にます也」と見えている。此の外に川柳・狂句には末摘花を始めとして古今前句集や柳樽に、天保——明治年間の狂句集に数十句あるが、其の半ばを次に摘録すると、

死にますの声に末期の水を呑み

おッかあが死んぢゃあいやと坊は泣

死にんすが息子病み付く初めなり  
アアもう死にますで御曹子は生きる  
死んでも命のあるやうに女房させ  
おや夕べおッかあ死んで活きたのか  
死ぬといふ字も聞き所でおもしろし  
死ぬく泣いて嬉しき床の海

死ぬ程によくて鬨からあばらが出  
死ぬ程の仲は草履を殺して来  
行そうになるとあれ死にますと泣  
私も行よ死にますと後家の夢  
私も死にますとは仏に済まぬ後家  
紫色雁高死ぬくと女出し

御亭主のすき見生死の境なり

死にますくと無病で夜は泣き

死にますよ十萬億をおくを也

死にますといつて女房は泣きますよ

死にますといふは行ます時の事

死にますに姑は息を殺してる

死にますといふは女房の夜病なり

四つ目を合せ死にますの生きますの

悪い癖ああ死にますとすり泣き

死ぬくと祝す門徒の姫始め

死にますと云はれて拔身ぐつとつき

あれさもう涅槃に入ると那瑜陀羅女

朕はもう崩御々々とみことのり



玉の緒が切れるやうだと宮女いひ  
儒者の妻ああ歿します歿します

(註。これらの句は紹介に当って当然畧解を副えるべきであり、そうしなければ妙味が伝えにくいのですが、本誌読者特志の方はこれにより古川柳の面白味を探られんことをのぞみ、原文のままとします)

斯く、我国人が死ぬくと叫ぶばかりでなく、諸外国人も又同様であるらしい。支那の『笑府閨風篇』には「婦連呼して死を欲す」と記し、『肉蒲団』にも「死了」若しくは、「叫死」と言う語を数カ所に使っている。それで、現在の支那語では之を「要死了<sup>ヤオスリーラ</sup>」と言<sup>ウオースリーラ</sup>い、絶快の頂に達すれば「我死了」と叫ぶそうである。台湾人が閨房で「アスカベシーヨ」と叫ぶも又同義であると聞く。次に英国の春本には、ユー・キル・ミーがあり、汝はわたくしを殺す、でつまり死ぬとである。恐らくは独逸、仏蘭西、伊太利、その他諸蛮邦にも同義の語があるであろう。さて、此の「よがり」が起るのは何故であろうか？ 武道教者の説には、男女の交接は寿命を亡ぼす基であるから、其の佳境に達すると、死の觀念が起って慟哭するのであると言うが、これは「泣く」を悲哀の声とした説であって、正

当の見解ではあるまい。よがり<sup>ヨガリ</sup>を泣くと称するのは、発声の類似から言っただけの語で、慟哭の意義は含まれて居ない。昔の文弥節(ぶんやぶし)が悲哀の声曲でないのと同様によがりの真義は叫快である。然らば此の哲理如何と言うに、人の臨終は諸神経が麻痺して無苦痛であると言うが、至上の快感で涅槃無我の境に入つた無意識状態に成ると、死の觀念が起るのは、無苦痛の死(快感)を表すものであるらしい。若しこの説を当らずとすれば、これも生物学的に見て、生殖の本義に達し、「これで人間の目的を遂げた、我は死んでもよいもの」という新陳代謝の挨拶であろうか。

### ◇ ◇ ◇

以上が『寂滅為楽考』の全文である。『手淫通』と共に、外骨奇文の双壁をなすものだが、稿の書初めにおいて、(性交は)人生至上の快感で、と述べたことに異義はないけれども、続けて自己満足の極に達した際には死の觀念が起ると説いたのは、外骨らしい哲理で、元来性行為は独りのよろこびではなく、男女互いの愉悅であるべき筈のもので、自己満足同志でやることではない。男尊女卑の思想のみならず、いかにもオナニストらしい独

善の見解であると思う。然し学者や芸術家肌の人々には、男色愛好者や手淫常習者が稀れにあり、愛や歡喜を独り占めにして、現実には異性によるこびを与えたりがらない思想というものも、たしかに此の世の中に存在している。詳しくは戦後における男色文献雑誌類を解題する時に述べることにする。

宮武外骨は職業的著述家を自称しただけあって、流石にその編纂書には異色本が多かった。が、断片・断章の連続で一箇の著述としては全身全力を傾注したものが無く、食い足らず物足らず、暗示的ではあるが本当の主張もなく、研究書としても統一を欠いていた。代表的著作は次の通り、

猥褻風俗史

猥褻と科学

変態知識

奇態流行史

川柳語彙

面白半分

日本擬人名辞書

売春婦異名集

一癖隨筆

半男女考

私刑類纂

賭博史

川柳叢書

明治奇聞

自家性的犠牲史

文明開化

このほかに数え切れぬ程の、新聞・雑誌・単行本・パンフレットがあった。明治二十年頃より大正十年迄で六百五十冊以上と自記し



ているが、それ以後の刊行物も実に多いのである。まったく精力的な文筆労働者だった。

『自家性的犠牲史』（昭和6年4月）は外骨の性史であり自叙伝とも見るべき著述だが、女性に対する愛情も同情もない、自己に都合がよいように性体験を述べた書で、その幾人目かの妻が姦通して、それが露見して服毒した際にも、大学病院に入院し生死不明の報告に接した時にも、あんな女は生かすに及ばぬ死んだ方が、彼女もわしも幸福だ、と言い女は大苦悶の果に絶命してしまったが、それから数日後に別の女性と再縁を結んで、それ迄の廃姓外骨と称していたのを、再生外骨と称した。知人間に配ったその時の招待状というのが、下段、枠囲みの如きものであった。一種の自虐趣味だったかも知れないが、相当のサディストであったことも事実で、女苛めもこういうのは、まったく閉口である。

外骨の著述は多く自家の半狂堂版と、版權の譲渡をうけた河野成光館版がほとんどで、和紙和綴の外骨本は古本マニヤだったら、恐らくは必ず書架に二、三冊は備えていると思う。

自著自刊ではあったが、今日のいわゆる私家版的要素はまったくなく、飽までも堂々と



先月十九日不貞女〇〇毒死後交渉三日にして縁談整ひ小生は八年以来の相識〇〇子と先月二十四日箱根温泉に於て結婚いたし我家ばかりに春は来にけりの悦に入つて居ます就ては来る八日午後五時より湯島天神魚十楼に於て其経過報告旁々ノロケ披露のため粗酒献上いたしますから是非御来会下さい

昭和三年十二月二日 再生外骨

販売しド商人根性にてっしていたのは、如何にも関西人らしいネバリ強い生き方だった。文献絵画資料の同好者間の貸与に当たっても、必ず幾らという金銭上の規定があった。自己のみの人生と人性に執着した点でも、まったく、あぶらぎった生涯を過した人物であ

る。関東大震災後に小学館では『滑稽文学選集』の企画を樹て、当年の諷刺・警句の作家生方敏郎六冊、宮武外骨六冊を発行する予定だったが、これは如何なる事情か知らぬが立消えとなった。外骨選集は一部の好古趣味の読者のみならず、広く大衆層に食い込む要素もあったのだから、惜しいチャンスを逸したものだ。小学館のこの企画はのちに、昭和三年に『現代ユーモア全集』として実現されたが、外骨は含まれていない。衆伍に列するに余りにも個人臭（アク）が強過ぎたからであろう。

外骨著述は今日でもまだ坊間で得易いが、特殊な雑纂書はすくなくなった。『半男女考』と題する特定会員にのみ頒布した珍書を次に紹介してみよう。

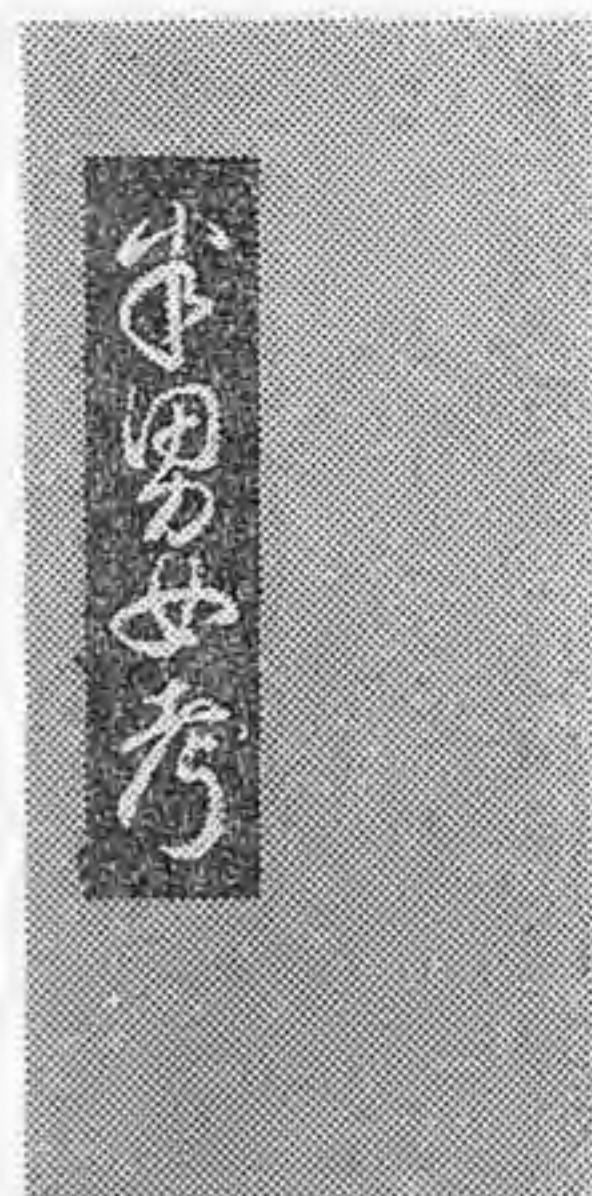
◇ ◇ ◇

この書は始め定価を附け弘く販売する予定だったが、挿絵に難点があり、一般販売は内務省より禁止されることが分っていたので、少数のみ印刷して加盟読者にのみ配布したが、勿論そのように言ってもそれは外骨の都合で、発行と同時に発禁となっていました。

『半男女考』全一冊 菊判和装 六十頁 非



## 宮武外骨『半男女考』表紙



売品 大正十一年五月発行 編纂兼発行者

(宮武) 外骨 頒価二円

内容は、不具者ではない過具者ともいいうべき中性人物の研究書。世間には性の決定のない曖昧な例外が、複性無性の奇形が多くあることを知らなければ、人間学に精通したものとはいえない——、というのがこの書の主張であった。

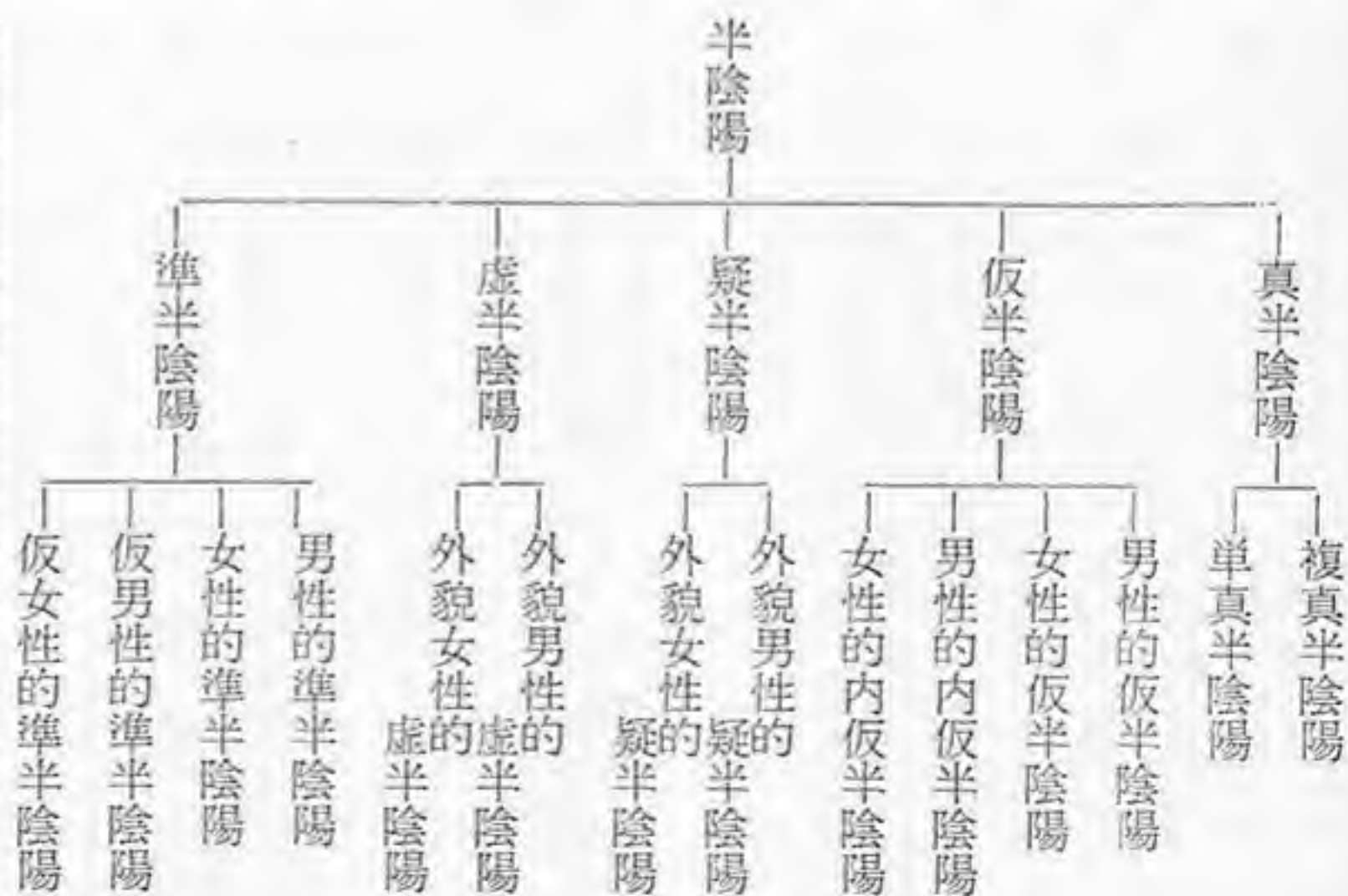
『卜養狂歌集』に「女かと思れば男の万之助ふたなり平のこれも面かげ」とある如く、半男女とは和名では「ふたなり」又は「はにわり」と称し、漢名では「人癪」「半月」「博叉半扨迦」などと書き医学書では「半陰陽」と言うが、この書では『五雜俎』に拠って半男女と題した。要するに生物学上の雌雄同体

ということ、一人で男女両性の生殖器を兼具する、性器不具者である。種類、形状、変化および法制上の問題について、その実例を古絵巻異疾草紙より、江戸期の色道禁秘抄や枕文庫まで、更には明治・大正の新聞雑誌医書等に出たる三十余件を集め、絵画・写真等をも挿入したものであった。

分り易いように下段の如く図示している。参考までに転載する。

をとこをんな、嫁に行きて離縁さる、子宮なき女、陰門ある男、無性の人、睪丸を発見された女、陰門より放尿する男、腰巻をして壮丁検査、男の女芸妓、尼より僧へ、月経ありし男、男がお嫁に行きます、等々。多数の半陰陽に関する雑話が採録されている。だが雑駁資料の提出のみに終って、猟奇好奇のみの書としてしまっている。尚まだ多く考えるべき問題の多いテーマだったのに……。

余談になるが、伊藤晴雨には「沢村田之助絵巻」と題する秘巻があり、幕末から明治初期の名優沢村田之助が、実は半陰陽（ふたなり）だったという長編絵巻物で、石版線描に手彩色を加え、五十部発行している。怪奇美に溢れた妖しい作品であった。



附記 川柳末摘花の研究では、大正末期に刊行された沢村五猫庵の『末摘花難句註解』（大正11、横本四冊、発禁）が当時もっとも良い解説書だった。これが大阪から複製本がでて、その大阪版には序文に代えて「寂滅為楽考」が附いていた。以上中野栄三氏の調べにより補遺訂正いたします。



# 祖母の浣腸の話

おもだか・しの

私が小さい時分、身体が弱かった事は、度々書いた通りで、十六、七の頃、祖母と話しをして居る内に、たまたま腸が弱くて下痢しやすいと云う話になった所、「しばらく浣腸を続けて見たら、きっとよくなる」と云って、娘時代の話をして下さったのです。

私は體質的に、多分に祖母に似たらしく祖母も小さい時分には、割合身体が弱く十四、五才の頃は下痢がちだったそうです。一人娘でしたので、ずい分大切に育てられたそうで、主治医の指示で、大分色々な養生法を試みたあげく、当分の間浣腸を続けて、腸を鍛えるのがよからうと云われ、毎日イルリガートルを使って、清水一升（一、八立）の浣腸を、二年間続けたのだそうです。

水はむろん温水ですが、夏の間などは、井戸水をそのまま使ったそうです。

何分にも明治二十年代の事ですから、イルリガートルなどの器具は、すべて輸入品でしたし、第一恥し盛りの箱入娘が、大量

の注腸を毎日行うのには、よほどの決心が必要だったと思います。この娘の母親は、旧藩時代、国表の奥女中頭取を勤め、城中では、きびしい御女中頭でならした人だったそうで可愛がり方も人一倍なら、躰け方も生やさしいものではありませんでしたでしょう。

ですから医師の指示とあれば、恥しいも何も有無を云わせず、毎日きちんと時間を定めて、定量の注腸をさせたそうで、祖母は「なれば何んでも無く、後がさっぱりとして気持ちのよいもの」と申して居りました。

祖母の話はこれだけです。此の話を聞いた後で、私は私の主治医に、それとなく聞いて見たところ、とんでもない無茶な事だと、一蹴されて了いました。

昭和の初め頃には、小児科の万能療法として、浣腸が一世を風靡したような時代がありました。現在中年以上の浣腸愛好家の方は、大部分この頃に浣腸の洗礼を受け、それが病付きになられた方々の様に思われますけれども、明治前半の頃にも最新の舶来療法として浣腸がもてはやされた時期があったのではな

いでしょうか。ただ此の時代の流行は、医師の間でのみ行われ、家庭療法にはならなかったもので、一般には余り知られて居ないようです。

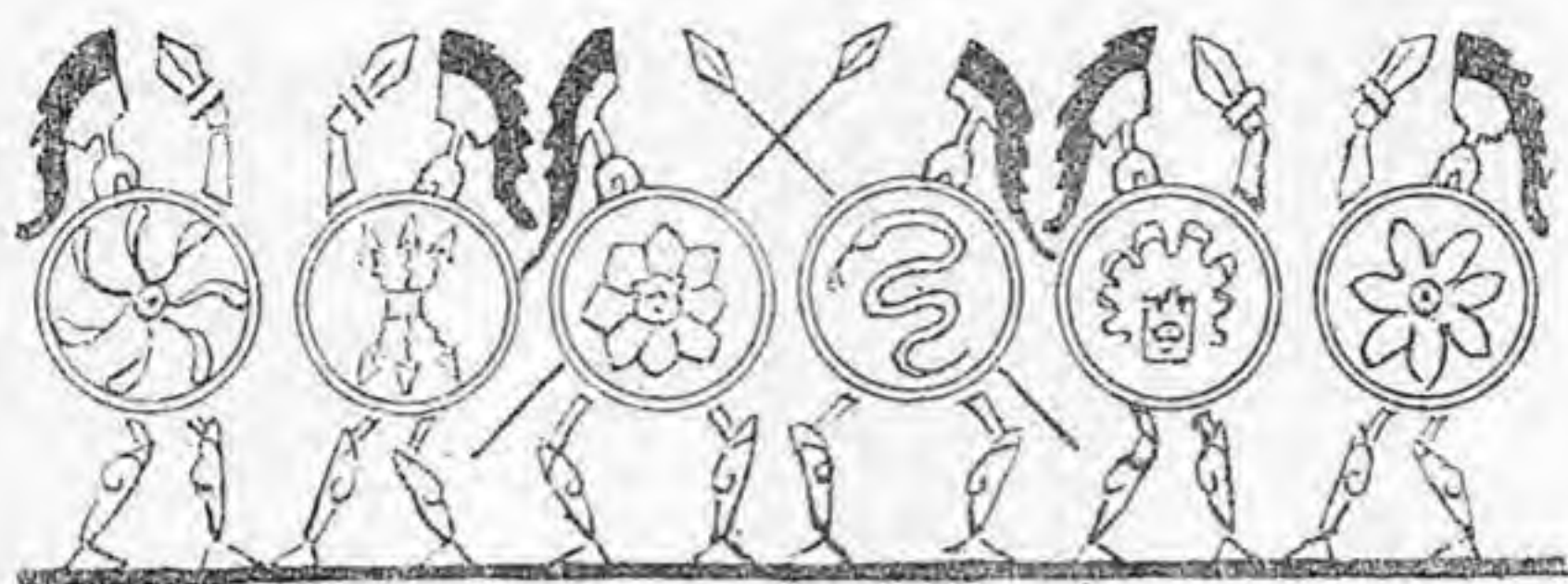
胃腸を鍛えるという理由で長期間、大量の清水浣腸を続けたと云うような話は、私の祖母の例以外に聞いた事がありません。一、八立と云えば、ずい分大量で、現代の医師はよほどの事が無ければ行わないでしょう。それを二年間も毎日続けたというのですから、処方する医師も医師なら、云われた通り続けた方も相当なものです。

しかし、祖母はその浣腸がきいたのか、其の後丈夫になって、六人の子の母となり七十八才で亡くなりました。ですから少くとも、長期間の清水浣腸が、身体に悪影響をあたえなかった事だけは、確かだと思えます。

私は、浣腸が特別に好きと云うわけではありませんので、連用した事もなく、あまり大量に使った事ありませんが、神経性の下痢が続く事がよくあり、そんな時、温水か冷水の注腸を行うと治って、当分の間正常な便通が続きます。しかしほって置いてもいつか治るものですし、浣腸が効いたかどうか、はっきりわかりません。



## 鬼六談義



ひょうたんのはなし

## 瓢箪の話

## 鬼六團

E君は、数年前、崩壊したST映画の監督である。十年近く、助監督をやり、苦しい下積み生活を経て、ようやく一本になろうとした時、会社が倒産してしまったのだ。彼が撮る事になった映画も内定し、ようやく陽の眼を見ようとしていた矢先にこの大悲劇に遭遇してしまったのである。忿懣、やる方なく、E君の心中は察するに余りある。だが、才能もあるし、肉体も強靱な方であるし、会社は潰れても、そのタフさにものをいわせ、テレビ界などで彼は大いに活躍するだろうと思っていた。ところが、一向に芽が出ないのである。幸運に見離されている人というのは彼のような人というのだろう。一、二本、子供向きの活劇番組を、テレビでやっていたようだが、最低の視聴率という事で、スポンサーから苦情が出、その責任をプロデューサーとなすり合いして、評判を落し、とうとう局から閉め出しを喰ってしまった。生活の問題もあり、ピンク映画の方へ、その後、流れて来てAプロダクションで一本撮ったが、周囲の反対を押し切った形で、何か前衛映画のようなものを作りあげ、これも、配給会社の方から閉め出しを喰ってしまったのである。配給会社や観客などはどうでもいい、俺は自分の作



りたい映画を作るんだと天を恐れぬ暴言を吐いたとかいう事で、傲慢無礼とか、少し、頭がおかしい、とかいうレッテルをはられ、このプロダクションでも、彼を敬遠するようになってしまった。

再び、生活に困り出したE君は、私の所へも借金に來た。こっちは楽じゃなかったが、八帖一間に親子四人が間借りしているという彼の窮状を聞くと、断るわけにもいかず、家人には内緒でシナリオの稿料を前借りし、渡してやったが、それから彼は、バツタリと姿を見せなくなってしまった。

それから、もう三年になったろうか。彼は昔の仲間に私の居所を聞き、つい最近、事務所の方へ、ひょっこり姿を現したのである。三年ぶりであったが、彼は、もう十年も年をとったよう老けこんでいた。私の前から姿を消してから、現在に至るまで、一体、どこで何をしていたか、ブローカーをやっているとか家具のセールスをやっているとか、と私は彼を知る友人に聞かされていたが、私の眼の前に現れたE君は、その事についてはあまりしゃべりたがらず、盛んに昔の話を懐かしげに語り出すのである。

人間、落目になると懐古的になるらしい。

私は、彼の<sup>そばかす</sup>雀斑だらけの疲労した表情から、もうこの男の再起は、不可能だろうという事をぼんやりと感じ取っていた。昔は、このE君と夜の街を酔っ払って徘徊し、お互に、大いにやろうじゃないか、という事を酒飲み特有のうるさい調子でどなり合い、肩をたたき合ったものだが、今は、昔のそうした若々しさは完全に喪失し、妙に色褪<sup>あ</sup>せた気分で、向かい合っているのである。というより、私はまた、E君に金を貸せといわれるのではないかと内心おどおどしているのだ。友情とか愛情とかいうものも、ふと、色が褪<sup>あ</sup>せてしまえばこのように薄情で、打算的なものではないかと、私は何とはなしに感じ出している。奴と付き合うな、ろくな事はないぜ、とE君を知る私の友人達は、そんな事をいいかわしているようだが、それは、皆、E君から、大なり小なり何かの被害を蒙ったからである。それだけに、私としても、三年ぶりに逢ったとはいえ、一種の警戒態勢を知らず知らずのうちとっているのである。

昔は、大いに談じ合い、酒の席で、青くさい芸術論などをさかんに戦わした二人であったが、彼と私との間には、現在、カサカサした空気がやり切れなく張りつめてゐるだけで

あった。

私は彼のために、近くの酒屋に電話し、とにかく、ビールをとり寄せてやる。普通ならどうだい、今夜、付き合わないかと、たとえ相手の都合が悪くとも擱えて離さないのに、今の彼に対しては、我ながら不思議なくらいに薄情で、全くそういう気分が、起らないのだ。彼と共に痛飲し、下宿の二帖で天下を論ず式の氣炎をあげるといのが、実に馬鹿馬鹿しく下らない事に思われ出すのである。つまり、彼のために、この忙がしいのに時間をさくという事が無駄に思え、どうにも気分が乗らないのだ。

捨てた女と落目になった男とは、こうも逢うのが辛いものだろうか、落目といえ、こちとて、彼とは大差はないにせよ、何とか家族の善良な扶養者となり、他人には、なるたけ迷惑をかけざるよう努力しているつもりである。それだけに、デカダンになった昔の友にツカヅカ土足で踏みこんで来られては困るといった、浅ましいばかりの防衛本能が頭をもたげて来るらしい。

E君は、事務所のソファの上で、悠々とビールを飲む。片足を卓の上に乗っけるような恰好で、事務所に人が入ってこようと出て行



こうと、そんな事是一向に気にかける様子はない。そして、誰々の馬鹿が、とか、どここの阿呆が、とか、昔の仲間達をけなしたい方で、その消息を話題にし、いい気持ちに酔って来て、次のような愚痴をこぼし出すのであった。

——俺は、まがりなりに芸術的発掘を試みある地点まで、人間的進歩をとげたつもりだが、この世の中が俺にとって、底知れず恐しいものである事がわかった。つまり、俺にとって快楽という事実は何ものもない。また、今後生きていても快楽を得るという見通しも立たない。清い、美しいなんて言葉は俺にとっちゃ死語同然だ。この天下を自由党が牛耳ろうが共産党が乗っ取ろうが、俺にとっちゃそんな事何の関係もない。アメリカだって、ロシアだって、嫌悪以外の何ものでもない——酒を飲んだ時の彼特有のぼやきであるが、こんな出来損いの世の中で、よくお前は、真面目な顔して下らない仕事をしていられるもんだ、という嫌味を彼は私に対して、いいたがっているのである。相当、神経がいかれている、と思い、私はただ、フンフン、とわけもなくうなずいていたが、不快な限りであった。そんなにこの世がつまらないのなら、一

そ、自殺でもしたらどうだ、とこっちも嫌味が出そうになるのをこらえ、私は、ニヤニヤとごまかし笑いをしていたが、

「実は、今日、俺がここへ来たのは、君にいい儲け話があったからなんだ」

と、胸を張るようにして、彼は急にいい出したのである。

近くで学生アルバイト達が仕事をしていたが、E君は、彼等がいると、どうも話しくい様子である。「じゃ、その辺へ出ようか」と私は、ようやく腰を上げた。

彼は、こんな調子で何やかやとうまそうな話を持ちこみ、友人達から金を引っ張り出している、という事は私も知っていたから、彼を表に連れ出してから、適当にあしらい、いくらかの小遣いを渡してやって帰らせる胆であった。

近くのスシ屋に入って、酒を注文する。彼は、コップに入った冷酒を欲求し、マグロのブツ切りなどを出させ、不自由そうな歯をもぐもぐ動かして噛みながら、その儲け話とやらの本題に入る前、次のような前置きを並べるのであった。

「俺は君を始め、何人かの昔の仲間にも義理を重ねている。しかし、最初から騙そうと思

ってした事ではない。どうも仕事がうまくいかない時には仕方のないもので、すまない事をしてしまったと、内心では大いに恥じ入っているんだ」

まあ、いいじゃないか、人間、七転び八起きだぜ、くよくよすんなよ、などといって私は笑ったが、人間、一つ軌道を踏み外すと、こうもみじめになるものかと、今までの傲慢な態度をふと引っ込めて、急に気弱な調子になり、そんな事をいい始めた彼が一層、哀れに思われ出したのである。

彼は、次にこういうのである。

「この話は、決して君をペテンにかけるつもりのもではない。昔、君に迷惑をかけたお詫びに、今度はひとつ君に大いに儲けさせようと思うのだ」

前置きは、その位にして、一体、何だね、その儲け話というのは？と、私も、しきりに彼が思わせぶりの話し方をするので、ふと、興味を覚えて聞いたが、

「O県のFさんを知ってるかね、君は？」

と、彼は、私の眼をのぞきこむようにしていうのである。

「ああ、成程、と私は、うなずいて見せた。彼のいわんとする事が大体、想像出来たから



である。

O 県の F 氏というのは、O 県で、大きな果樹園を持っている六十前後の老人で、私は、二度ばかり、上京して来た F 氏と面談した事があった。F 氏は、半通道楽で、或るピンク映画のプロダクションに金を貸していた事があったが、それは、自分の趣味に合ったピンク映画を作らせようという気持があったからである。

以前、そのプロダクションに頼まれて、伊藤晴雨みたいな老人の出て来る映画台本を書いた事があるが、何時か鬼六談義に書いた事もあると思うが、私は全く晴雨翁に関しての知識がなく、似ても似つかぬ奇妙な老人の登場するお粗末な話を書いて渡し、映画にした事があった。あとでわかった事だが、そんな映画を、そのプロダクションに製作させたのが、彼のいわんとする O 県の F 氏であったのである。つまり、F 氏は、この種の映画のマニヤなのだ。ただ、KK 誌を毎号かかさず読むというようなマニヤではなく、縛り絵、縛り映画専門なのである。

もうかなり以前の事になるが、O 県から上京して来た F 氏をそのプロダクションの社長の仲介で知り合い、食事をおごられた事がある

ったが、その時の F 氏の容貌を思い出してみると、六十才とは思えぬ赤味を帯びたツルツルした頬の色、どこか海豹に似た精力的な風貌をしていたようである。こういつては何だが、その全風貌からは、強烈なばかりの好色さが感じ取れた。

逆さ吊りとか股裂きが次から次と出て来る映画を作りなはれ、とまるで自分の趣味のために映画はあるといった話しかたをし、一寸 KK 誌にも登場出来ないような、えげつない責め方を実に楽しそうに語り出して、しかもそれを映画でとり上げる、というような非常識な事をいい出すので、このおっさん、少し頭がおかしいのではないかと、いささか不快な気分になってきた。勿論、彼は映画作りに関しては全くの素人で、マニヤの一人としていつてゐるのだが、私が座付作者の形で所属している Y プロでも、その種の映画をとるべきだといったいい方をするので、別にこの親爺に金を出してもらってゐるわけじゃなし、何を厚釜しい事いうのかと、鼻白む思いになったのである。

何でも頭ごなしにきめつけてしまうようなこの老人のいい方が、私としても腹立たしかったのだが、F 氏が金を出していたプロダク

ションは間もなく、F 氏に大変な迷惑をかけたまま倒産したという事をその後、私は耳にした。ピンク映画を後援するというのも、やはり一種の色道楽で、F 氏も気の毒な事だが、その道で散財したと思えば、そう腹も立たないだろうと、私もそのうち、F 氏の事は忘れてしまったのだが——今、E 君が急に F 氏の事を持ち出したので、ふと、私が想像した事は、熱心なマニヤである F 氏が、仇でも討つ気で、倒産したプロダクションのあとを引継ぎ自主制作にでも乗り出したのではないかとこの事である。そうしたおっちょこちょいな所が F 氏にはあったようだ。E 君が私に儲けさせるといふのは、相場以上の脚本料を支払うから、F 老人好みの脚本<sup>ほん</sup>を書いてくれというのではないかと私は思ったのである。もし、そうなら、私は、現在の多忙を理由に断わるつもりであった。F 老人の趣味を満足させる映画など、無理な話で、責めシーンに注文をつけられるのは、不愉快であったからだ。

E 君は、F 老人の後援していたプロダクションで、以前、一本撮った事があり、それで F 老人と知り合ったのだらうと思うが、現在彼は、F 老人にいわゆる喰いついた形になっ



ているらしい。芸術を発掘する問題よりやはり、彼とて食う道を講じなければならぬ。彼なら、それとて、色々とむつかしい理屈をつけるだろうけれど、俗悪な精神に徹しているのは事実である。

「Fさんとは、以前、一二度、逢った事があるよ。なかなか愉快な爺さんじゃないか」

私は、何時の間にか、彼と同じコップ酒になり、「そのFさんが、どうかしたのかね」とさりげなく聞いたのだが、E君のいい出した事を耳にして、私は驚いてしまった。

F老人が映画を作る気になったという私の勘は当たったが、映画は映画でも、それは、ピントにあらずブルーの方なのである。門外不出の趣味の映画を作りたいとF老人はE君に相談を持ちかけたというのだ。人に見せるのが目的のものではなく、あくまでも、マニヤである自分の性情を満足させるための映画であるという。それも、この種の映画は八ミリと相場は極まっているが、老人の欲求するのはそんなちやちなものではなく十六ミリ映画、しかも、トーキー入りであると聞かされ、私は眼をパチパチさせた。私も随分とその種の映画は見て来たが、トーキー入りの十六ミリ映画というのにお眼にかかった事はない。

現在、外国テレビ映画翻訳の仕事をやっている私は、事務所に十六ミリ映写機を二台置き、フィルム輸入会社が運んで来るフィルムを毎日カチャカチャ廻して見ているのだが、あれは、映写幕の配置の仕方によっては、昔の劇場映画と大差ない位に拡大して見る事が出来るのである。F老人の悪趣味も、はなはだしいものだが、金のある好色親父のやりそうな事だと私は苦笑してしまった。

更に私が驚いたのは、それからである。

E君は、椅子の下へ無雑作に投げ出していた、古ぼけて、すり切れた鞆を持ち上げると花と蛇の特集号を取り出したのである。それは、表紙など手垢で、かなり汚れている、今となつては懐かしいようなグラビラ入りの特集号前篇の方であった。この前篇は、作者の私も持っていない。編集部から贈呈されたのをすぐに友人の誰かが持って行ってしまい、返してくれないのだ。妙に懐しくなつて、それを手にとると、手垢で汚れた本文に赤鉛筆で線が引かれたり、何やら小さい字が書きこんであつたりした。

この種のマニヤではないE君が、こんなものを所有しているのを不思議に思ったが、彼は、それをF老人から借りて来たというので

ある。つまり、F老人が、最近、この特集号の前篇を誰かに譲られ、何とはなしに読んでいるうち、すっかり気に入って、その内容の好みの場面に自分のアイデアを加味し、自家製版の映画化を思い立ったというわけなのである。

大体、F老人の好みは、時代物であつたようだし、私としても、いくら相手がマニヤだとはいえ、飲み仲間なら別だが、よく知っている人に、この珍本を読んでもらうのは妙に羞ずかしく気がひけて、こういうものを書いてある事は教えなかったのだが、花と蛇の前篇を手にしたF老人は、私がこんな本を書いているなら、どうしてすぐ自分に教えてくれなかったのだろうと、E君にこぼしていたという事である。

E君は、KK誌やこの種の雑誌を眼にして、さっぱりわけがわからぬそうで、というより何か気味悪いなどといい、以前、私が、この種のマニヤで、この種の珍小説を書く事もあると正直に教えると彼は、へえーと感心した顔つきになり、やっぱり、お前は痴漢だったか、などと情ない事を吐かして私に嫌な顔をさせた男だが、それが、このマニヤ老人の趣味の映画を制作、監督するというのだから



ら、私はあきれるというより、何か物悲しい気持ちに陥った。

彼のいう通り、この趣味の映画作りがかなりの金になるのは事実である。F老人は、ピンク映画、一本分に相当する制作費用をこの映画作りのために出そうというのだ。という事は二百五十万円。もし、これをいわゆるブル映画と見なすならば、日本一の豪華版という事になるだろう。その上、撮影前半金。

撮影終了後、半金という約束が、すでにE君と老人との間で出来上っているというのだから、配給会社より六カ月もの手形をもらって安い映画制作に憂身をやつしているエロダクシヨンの業者が聞けば、正に夢の様な話かも知れなかった。一時間の十六ミリ映画なのだから、ピンク映画ほどの費用がかかる筈はななく、しかも、O県にある老人の屋敷を使って撮影してくれた方がいいというのだから、また、映画の性質上、場所移動や野外風景などほとんど必要ではないのだから、老人が出すという金額の半分位で、その映画は出来上がるかも知れない。

しかし、色々と問題もある。この趣味の映画のアフレコ、ダビング等は、一体、どこスタジオでやるかという事、そして、出演

する役者の問題である。普通のピンク映画を制作した所、映倫や配給会社にケチをつけられ、おくら入りになってしまったと考えればそれだけの金を投入して趣味の映画を作った方が利口のような、とF老人はE君にいったというけれど、やはり、それだけの大金をかけるのだから、出演する女優には、注文がうるさく、とにかく絶対に美人である事、と、幾度も念を押しているという。

E君は、スシ屋の木の卓の上へ、紙を拡げ鉛筆で、内定しているスタジオやスタッフの名前など書き出すのであった。彼の説明する声があまりに大きいので、私は、周囲の容に聞かれはせぬかと冷や冷やする。

或るスタジオで交渉した所、その所長も好きな男であつたらしく、金をとって見せる代物ではなく、法律に触れる事はない、とE君が力説すると、日曜日の真夜中に録音してはどうかとあっさり許可してくれたそう。

そして、真面目な顔つきで、問題があつてはいけなから私も立会いましょう、といったという事だ。普通なら、徹夜の仕事を嫌がるミキサー達も、その日を楽しみにしていると。スタジオの方は、そのように一応、段どりは出来たらしいが、何といつても問題は

この映画に出演する女優である。今までの所全く女優に関する限り、見通しは立っていないと彼はいうのだった。

この種の映画に出演する女優？ は探す気になればいくらだっているものだが、美人と云うことになる、ハタと行詰ってしまう。内定した女優の写真をO県に送ることになっているのだが、F老人の気に入るようなのは一人も見当たらない、とE君は口をとがらしながら、苦心して手に入れたらしい一枚の古ぼけた写真を私に見せたのだが、それは、落語の金馬に似た顔つきで、思わず吹き出してしまふ。

とにかく、この映画作りを任されたE君は何かの形で私に協力してくれ、というのである。自分は、この種の趣味は、持合わせてないから、マニヤである私に色々アドバイスを頼むというのだ。F老人の好みというのは君が適確に知ってるのだから、特集号に指適されてる場所をうまくつなぎ合わせ、F氏好みの話を台本として、作ってみてはくれないか、ともいうのであった。それに対し、相当な謝礼を支払うというのである。

冷たい現世の冷たくひねくれた批判者であったE君は、一人の好色な老人を喜ばすため



また、その老人から金を引っ張り出すため、何かといえは振りかざしていた芸術家的良心を放棄し、浅まし過ぎる程の卑猥な映画を作ろうとしているのである。

文学も芸術も、つきつめれば、一本のエロ映画に勝てないと、彼独得の詭弁が忽ち出て来たが、彼も全くお粗末な人間になったものだ、自分の事は棚に上げて、私は彼に対しふと嫌悪感を抱くのである。たしか、私が、ピンク映画などの仕事に手を出した時、私に對し、何だかんだともっともらしい意見をしに来た友人の中に、このE君も混っていたように思うが。その彼が、浮世の浮沈に身をゆだね、何時しかこの業界に流れ出し、その上にも安住を得られず、私より一步、突き進んで、ブルーフィルムにまで手を染めようとしているのである。

「な、協力してくれよ。嫌いな仕事じゃないだろう」

と、E君は、揚子で齒をせせりながら、ニヤニヤしているのであった。

私は、うん、と気のない返事をし、コップ酒を飲み、したり顔して考える。Eの奴とはかかり合ふな、ろくな事はないぜ、といった友人達の言葉を思出す。最近、少しは修養が

出来たというか、狡猾になったというか、私は付き合っていて、得をする人間、損をする人間の見分けがつくようになってきた。触らぬ神にたたりなし、君子、危きに近寄らず、などの警句が、次第に酔って来た頭の中をかきめぐり出す。

「協力したいは、山々なれど——」

と、私は、何かをごまかすような調子でいい、今、新たに始めた仕事は軌道に乗りかかっている事を説明し、趣味の映画も結構だが万が一、その筋にひっかかって、そのとばかりを受けるてな事になれば、せっかく、まともになりかけている私の神経が、また、やっこしくなってしまうと、薄情ないい方をした。何年か前に、E君から、エロダクの仕事なんかして羞ずかしくないかね、と嫌味をいわれた仕返しをしている気分にもなっているのである。

落目にある友人をこうして前にした場合、大いに慰さめ、大いに励ましてやりたい場合と、どういうわけか、意地悪く、そっぽを向いてしまいたい時とがある。それは相手の持っている雰囲気の原因があるのだろうけれどE君の場合、自分以外の他の奴は皆馬鹿だというようなものいい方、一切自分を中心に

したものの考え方、そうしたものが相手に、こん畜生、といった不快な印象を与えるものである。

とにかく、そのような調子で、私が彼の申し出を断わると、忽ち彼は「馬鹿な人だね、君も」といったいい方をするのであった。人が、せっかく儲けさせてやろうといってるのに、といった具合である。

「これは、O県の山にいるFさん専用の映画なんだぜ。Fさんがせっかく作ったそれを転売するわけではないし、ひっかかる道理がないじゃないか」

それは、そうだが、と私は、酸っぱい顔をする。理屈は、そうだろうが、制作する方はやはり、金をもらって仕事する事になり、ブルーフィルム屋と何ら変りはない。その制作過程にどういう障碍が起らないとも限らないと、屁理屈をこねた私は、とにかく、現在、忙がしくて、それどころの騒ぎじゃない、と意地悪く突っぱねたのである。何も、O県の山奥にいる好色老人の御機嫌をとるため、それがいくらかの小遣金になる事だとしても、今更、危い橋を渡りたくない。不思議なもので、人間、少し、堅気になってくると、自分でもおかしく思う位に、小心になってしまう



ものだ。第一、今、そんな事に手を出せば、大好きな道だけに、せっかく始めた仕事もほったらかし、夢中になってしまいかも知れない。濡れぬ先こそ露をもちとえ、で、三文エロ作家の私が逃げ腰になってしまったのをE君はどうも理解出来かねるといった顔つきで見るのであった。

「じゃ、この映画に出てくれそうな娘、君の力で何とかならないかね」

E君は、とにかく、君は、この道じゃベテランだから、そういう女だって、二人や三人の知人はあるだろうと、嫌味とも皮肉ともつかぬいい方をし、私は、その横柄な口ぶりがふと癪にさわって、

「Fさんの妾でも出演させたらどうだい。そして、Fさん自身も出演する。そうすりゃ費用も節約出来るし、うんと迫力も出ると思うぜ」

などといった時、事務所で仕事をしていた社員のT君が店へやって来て、客が来たという。私は救われた思いで腰を上げた。

「ま、その女優さんの事は考えておこう。二三日したら、また電話してみてくれ」

と、彼に告げ、店の勘定を払おうとするとE君はあわてて私の手を止め、内懷から真新

しい一万円札を出して、支払いをすますのであった。悪いね、と私が礼をいうと、

「Fさんから、わずかだが、もう前借りしてしまってるんだ。今更、後へはひけないよ」と、彼は、ふと淋しげな微笑を口元に浮かべていうのである。

——それから、一週間ばかりたった頃、E君は、私の事務所へ電話をかけてよこした。

「声優の方は、ようやく、二人、都合をつけたよ」

E君は、やはりあれからも、その趣味の映画のため、あちこち奔走していたらしい。

このトーキー入りの趣味の映画に出演する女優さんは、勿論、科白せりふがあるわけだから、スタジオでアフレコ（声の録音）を行なわねばならない。彼女達に生の科白せりふを吹きこませるというのは、どうしたって無理だろうから、いわゆるアテレコ役者といわれる声優を使っで、画面に合わせ、外国テレビ映画の場合と同じく、声を吹替えさせる事になるが、この声優を二人内定したとE君はわざわざ私に報告して来たのであった。

この吹替えという方法は、ピンク映画の場合だって、時々、使う事がある。いや、最近では、田舎訛りのある素人の女優がどんどん

増えて来たので止むを得ず、方々のエロダク

ションもこの手を使っているようだ。若いピチピチした肉体を持つ女優が、ベッドの上で男優とからみ合い、熱い吐息を吐き、泣き、うめき、のたうつシーンの声が、本人にあらず、それを吹替えてやっていたのが、四十近いでっけり太った、おばはんであったという事がよくある。声優というのは全く器用なもので、四十近いおばはんでも、十八九の声を見事に吹替えてみせるのだ。ベッドシーンにしろ、それに発する女優の声は、脚本に書けるわけがないのだから、女優の方で、アドリブよろしくやるわけだが、下手くそのピンク女優などは、阿呆からすの一つ覚えみたいに、アア、アア、と鳥みからすみたいに鳴いてばかりいるのがある。そこへいくと声優というのは、やっぱりうまいもので、幾通りもの用語を色々と折りませ、傍で見ているスタッフ達を感心させる事がある。珍らしい用語を急に声優が発したりし、彼女はあの時、今みたいな用語を使うのかと、ミキサー室で聞いている連中、思わず顔を見合わせて、ニヤリと笑ってしまう時もあるが、経験が豊富でないとあやうまく声は出ない、などと陰口かげぐちをいってはいけない。声優は仕事だと思ひ、ピンクならピンクなり



に一生懸命やっているのである。

さて、E君が内定したという声優の一人は昔、或る声優のプロダクションに所属していた、テレビ漫画の声のレギュラーになった事もあるという女性で三十を一つか二つ越えているといい、もう一人は、昔、或る有名な劇団の研究所に入っていた事のある、ハスキーな声の持主だという。二人とも現在は、うだつのあがらない舞台俳優の女房らしいが、かなり生活が苦しく、多額のギャラに眼がくらんだのか割と簡単にOKしたそう。

「問題は、出演女優だよ。何とかいい智慧はないものかね」

と、E君は、その点で、やはり弱り切っている。

浅草で、以前、ポン引をやっていた男に逢って、彼が相談してみた所、ポン引は、その多額な出演料に驚いて、E君を喫茶店に待たせ、あたふたと走り廻って、二人の女性を伴ってやって来たが、どうもパツとしない御面相なんだ、とE君は電話を通じて私に告げるのだった。

F老人が『花と蛇』を読んで感興を覚えたというのなれば、やっぱり、容姿にこだわらなくてはいけないだろう。どだい無理な注文

である。

「女にゃ十万円まで出すよ。何とか頼むよ、君」

と、E君は、ほとほと弱り切ったような声音を出す。

「十万円だって？」

十万円といえば、今のピンク女優の主演クラスでも、それだけのギャラをとる者は見当らない。そんなにはずむ気であるなら、口説けばOKする何人かの女性の心当りが無い事もなかったが、静子夫人や京子、美津子のイメージを念頭においた老人を満足させるような女性ではない。

「忙がしくなければ、一寸、逢ってくれないか、頼むよ」

と、E君がしきりにいうので、私は彼に、××町にあるビルの地下の安キャバレーへ来るよう場所を指定した。E君の執拗なまでの熱心さに、段々とこっちのペースはかき乱されて来た感じである。

その安キャバレーへ彼を誘ったのは、そこに割と義侠心のあるN子という姐御型ホステスがいるので、彼女に相談してみれば、十万円の魅力にとりつかれて出演をOKするようなホステスを探してくれるかも知れぬと思っ

たからである。

「成功するか、しないかわからないが、このキャバレーで少々の散財は覚悟しろよ」

と、私は、キャバレーの前へ姿を現わしたE君にいった。

キャバレーは、最近、不景気で困ると、N子から聞いてはいたが、その通りで閑散としている。私は、まず指名でN子呼び、それからE君と私は、派手にパツと騒ぎ出したのである。N子の機嫌をまずとるために、N子の親しくしている朋輩のホステスを指名という事にしてやる。景気良く、ビールがポンポン抜かれ、早速、助平話などが飛び出して、キャツキャツと座は賑やかになり出した。

いい気持に酔っ払っていると、私は、この際、どうでもなれ、といった調子のいい気分になり、フラフラ立上ると、××組の信用のおけるやくざ？ や、六本木の信用のおけるコールガール等へ、キャバレーの電話を使って連絡し、事の次第を手短かに話して、私の友人に対する協力を依頼したのである。下手な鉄砲も何とやらで、あっちこっちへPRすれば、どこかがいい女を見つけて来てくれるかも知れぬと思ったからだ。といって、別にそれを当てにしているわけでもなかった。E



君に、こうして御馳走になった手前、それ位の努力をするのは止むを得ぬと思っただけの事である。

——それから、何日かたち、E君と私は、新宿の小料理屋の二階で、再び逢っていた。

××町の安キャバレーで、痛飲してから、それまでの間に、趣味の映画に出演を希望する候補者が一応、出揃い、そのうち、どれを選ぶか、私は、また、E君の相談を受けたのであった。最初は、君子、危きに近寄らず、とE君を敬遠していた私だが、大体が好きな道だけに、また、E君がねばりついて来るだけに、知らず知らず、積極的な協力を示すようになってしまった感である。

出演者であるが、一番、当てにしていたキャバレーの姐御の推薦したのが、一番駄目で、金壺眼をキョロキョロ動かし、何か爬虫類的な気味の悪い女を彼女は二三日して私に推荐したのである。自動車の運転に凝っているそうで、中古の自動車を手に入れたため、その映画に出演するというのだが、そのカメレオンに似た容貌はどうも映画のイメージではないので、E君が上手に断わった。一番、当てにしていなかった××組のやくざの推薦によるものが集まった候補者の中では一番上等

であつた。やくざのB吉から頼まれたと、同じく××組の一人が、私の事務所へ電話をかけて寄こし、私はE君に連絡して、その男と、近くの喫茶店で逢つたのである。

私が親しくしているやくざB吉の紹介状を持って現れたその男はS雄といい、まだ、二十を一つか二つ越えた位の色の白い男前であつた。黙っていれば、一寸、不良には思えぬいい男だったが、それより私の眼を引きつけたのは、彼が連れて来ていた十八九の紙袋をかかえた女性である。少し、瘦型だが、スラリと均整がとれていて、スラックスを通して想像出来る尻の肉づきは豊かそうだし、腰の線もきれいである。私が最も、興味を引きつけられたのは、彼女が無造作に背中へ垂らしている柔かそうな長い栗色の髪であつた。しかも、面長の、やや冷たい感じの美人——E君も私も、一ぺんに気に入つたのである。

S雄は、最初の電話で、これから女も連れて行くが、女の素性なんかは、あまり聞かないで欲しい、といったので、そうした質問は差し控えたが、とにかく彼女は、今、どうしてもまとまった金がいるのだとS雄はいうのだった。彼女が金を必要としているのか、S雄が必要としているのか、そのへんは曖昧

なものだが、S雄と彼女の間柄はどうもはっきりしない。彼女は彼の完全な情婦ではなさそうで、麻布近辺のあるナイトクラブを根城にした一種のモンキー族である事はたしかであつた。

催眠薬とモンキーダンスに明け暮れし、怠惰な享楽に浸っている不良少女なのだが、これは、強請ゆすりやかっぱらいなどを平気でやらかすような、いわゆるズベ公ではない。そういうズベ公連とは異質な、全然別なグループを作る、無気力な夜行動物で、刹那の快楽に身を沈めているのである。何か虫の居所の悪い時など、犬猿の群が子猿の群を襲うように、ズベ公連は、こうしたフリーテン族を襲撃する時がある。彼女達が、ズベ公連に寄つてたかつて丸裸にされ、根城にしていたナイトクラブからほり出され、縄張を取り上げられたという事件も時たまあるが、彼女達は、ズベ公連に一種の肩入れをされている場合が多く、恐しいズベ公のお姐さん連に、庇護された形で、彼女達は怠惰な快楽に浸り、精神的その日暮しをしているようだ。

それはとにかく新宿の小料理屋の二階で、趣味の映画のキャスティングをするE君と私は、やくざのS雄が推荐したT子という美貌



のモンキー族を採用する事に、意見は一致する。というより、何人か集った女の中で食指をそそののはT子しか見当らなかったのである。強いて彼女を『花と蛇』の内容に取上げるとするならば小夜子といった役どころか。

「あとは君、適当にやってくれ」

と、私は、ここまでお膳立してやったのだから、これから後の事は自分でやれ、と突っぱねたのである。急に仕事の方が忙しくな

って来て、私としても、これ以上、E君の仕事にだらだら協力する時間の余裕はなくなつて来たのだ。というのも、これ以上、探してみても、F老人が納得し、私達も満足するような美人が現れる事はないだろう、と悲観的になってきた故もあった。

「ここまで来て、そう水くさい事いうなよ、俺は君が頼りなんだぜ」

と、E君はニヤニヤして私の肩をたたき、今夜、また、どこかのキャバレーへスカウトに行ってみようじゃないか、といい、仲居に再び酒を注文し、いい気持になって唄をうたい出すのである。

奇妙な映画に出演させる美女をスカウトする、そういう名目で彼はF老人より受取った金をつかい大いに遊びたいらしい。何か、捨

鉢になってきているような感じもするのである。彼特有ののだらしなさ徐々に首をもたげ出したようだ。

この男が、こういう風にだらしなくなる時昔からよく唄うのが、へ浮いたか瓢箪軽そに流れる、行先や知らねどなりたやあの身に、という越中小原節で、彼自身、どこへ流れて行くのかわけのわからぬ瓢箪みたいな気分

に陥っているのだろう。

——それから、何日かの間、私は、あちこちのピンク映画会社で働いているカメラマン助手やライトマン助手に電話をかけてこられて閉口した。Eさんから、奇妙な仕事の依頼を受けたが、そんなものに手を出して大丈夫か、という相談事である。E君は、いい収入になるアルバイトがある、と彼等を口説いて廻ったようだ。

「さあ、何ともいえないね」と私は曖昧な返事をし、苦り切った気分でお茶を濁しておいたが、E君は、新宿の料理屋で逢って以来、どうい

うわけか、こっちへ連絡して来ない。

一番、閉口するのは、やくざのお兄さんの推挙によるT子からの電話である。出演料の半分を前借出来ないでしようかというのだ。男に貢ぐのか、それとも、ズベ公連に強迫さ

れているのか、理由はわからないが、急場の金に追われているようなのである。考えようによっては、普通のブルーフィルムよりも、えげつない趣味の映画の出演を決心する位だから、よくよくの事だと思われるが、不良のS雄などを仲介としていただけにかなり彼等にピンをはねられる事は覚悟しているだろうし、また、前借などして逃走する事は出来ぬとそれも覚悟している筈である。私の友人である義理堅いやくざは、彼女が逃げたりしようものなら、仲間を使って、草の根を分けても見つけ出し、私に対し顔を立てるだろう。

それだけにこっちとしても、何時までも曖昧な態度を示しているわけにもいかず、E君の奴、何をさらしているのか、と自分の仕事も手につかず、落着かない毎日を過ごしたが或日、今度は、O県のF老人から私の事務所へ電話がかかって来た。E君より、事務所の電話を聞いていたらしい。

「Eさんの行方、わかりまへんか」と、F老人はいらした調子でいうのである。

ここ二週間あまり、まるきし姿を見せませんが、と私が答えると、「ほんまにあいつ、ひどい奴っちゃ」と情なそうな声を出し、前後、三回にわたって五十万ばかりの現金をE



君に持って行かれた事を、私に告げるのである。そして、その金はすべて、私に渡し、女優やスタッフを集めてもらっているとE君はF老人に話したそうで私は驚いてしまった。

「冗談じゃありませんよ」と私はぶつけるような声を出し、E君より一、二度御馳走になり、そういう相談を受けたが、現金をあずかるなんてとんでもない事だ、というところまでっしゃるな。わしかて、どうもあいつのいうのはおかしいと思うてました」とF老人は私をなだめるような調子になっていうのだ。

つまり、E君は、F老人に依頼されたその仕事の準備中、突如、姿をくらましてしまったのである。F老人はE君に五十万円をばったくられた形になったのだ。E君に依頼した仕事の内容が内容だけにF老人としても、その筋に訴えるわけにもいかず、しよげ返っているのである。楽しみが大きかっただけに失望も大きく、しかも、その好色さにつけまわられて大金を詐取されるなど、F老人の口惜しさは察するにあまりある。

「とにかくE君の行方がわかったら、そっちへ連絡しますよ」

と私はいい、まだ何か話したげな老人の声をこちらから切った。こっちは直接、被害は

なかったものの全く下らない事に時間を浪費したものだ、と、いまましい気分になってくる。すぐにまた電話が鳴った。今度はまた、例のT子である。

「ね、三万円でもいいんですけど、今、何とかならないでしょうか。私、弱ってるの」

T子は、はとほと困り果てたような声を出している。

あの話はどうもキャンセルになったようだと、T子に告げるには何とも気の毒な気がする。全くあの人騒がせな馬鹿野郎め、と私はE君を恨み、こういう電話の受け答えをしなくてはならない自分が実に間が抜けたものと思われるのだ。やっぱり、友人達に注意されたようE君とかかり合うんじゃないかと、後悔してみたものの、この電話の女性をこのまますげなく突っ放すという事は、相手がちょっといい女であるだけに、また、私がフェミニストであるだけに、哀れというより何か勿体ないような気もしてくる。

私は、仕方なく、彼女にとりあえず今夜八時にこの前の喫茶店へ一人で来るように命じた。乗りかかった舟で、自分のコレクションの緊縛写真を彼女をモデルにしてとってやれという気持になったのである。

助かったわ、と彼女は喜んで、そのモデルをOKした。それから、私は、何時か、「カメラ嫌い」で書いた雑誌社のカメラマンに電話をかける。私好みの芸術写真を彼に撮影してもらうためである。

「三万円もとられるんだからな。今夜は、無茶苦茶にえげつないのをとるぜ」

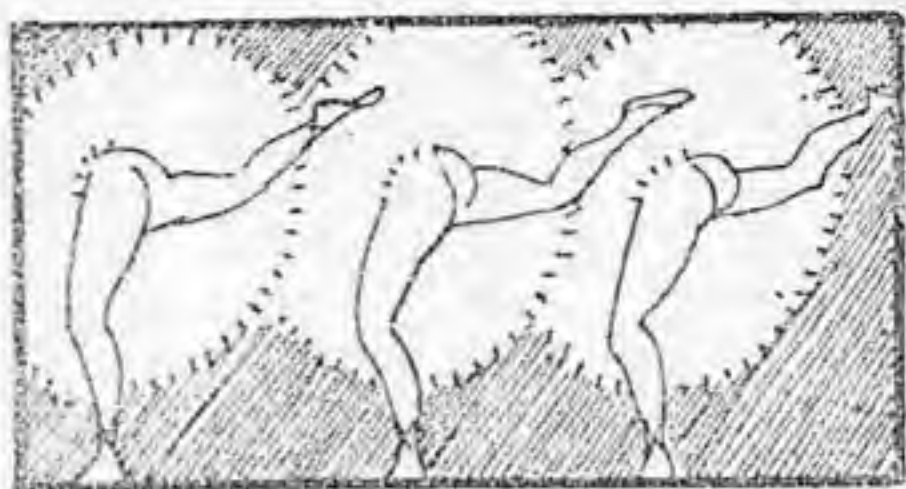
と、大体の事情を彼に説明して、そういうと、「君も物好きな男だな。三万円も出すぐらいなら、元女優していた別嬪さんを俺は口説いてやるぜ」と、彼は笑うのだった。

このカメラマンに時間と場所を打合わせ、電話をきると、私は何だか疲れを覚えて、机の下に隠していたウイスキーを取り出してグラスに注ぐ。どうもこういう奇妙な色遊びから私は一生、脱け出せぬ運命にあるらしい。

それにしても、一体、E君はどこへ行ったのか、私は、遂にこの趣味の映画すら完成さし得なかったE君の事を思うと、ふと口に彼の愛唱する越中小原節が出てくるのであった。また、これでE君は何年かの間、私の前から姿をくらませるのであろう。

あいつは何時までたっても流れ瓢箪か、私はふとこみ上って来る感傷を打ち消し、吐き出すようにいってウイスキーを飲んだ。





## 光 男 の 戯 言

天 道 光 男

◎『責め絵のある関係』を読んで  
我々平凡な奇ク愛読者に思う。

懸賞入選作品、能美積氏の『責め絵のある関係』前後編を読んで、近親感を感じたのは光男ひとりではあるまい。

それは、この体験の内容が我々日常茶飯事にある様な（少くとも行いうる可能性はある）出来事を、題材にしているからであらうことと、それ以上に筆者の能美氏の性格なり考えが似ているからではなからうか。——すなわち平凡な奇ク愛読者なのだ。

ごく平凡な男。SでもMでもいいのだが、

唯何んとなくSに引かれる。責め映画や奇クを見ると、唯何んとなくSに強く引かれ、それが何時か自分をSだと自負させる……。たまたま何かの機会で、相手の女性を口説き、プレーを行っても、映画を観、奇クを読んだ時のような感動も情熱も得られない。

女性を縛っているという実感はあっても、それは子供の時「泥棒ゴッコ」をして遊んだ時のそれではない。身も心もトロケル程の感情は湧かない。何故か？ 知れた事だ。相手がプレーに身も心もトカサヌからだ。プレー中「そんなに強く縛るんなら、私、帰る」の一言は『百年の恋を一瞬にさます』以上に

プレーを破滅さす。だから機嫌をとり、加減して縛る。結果はミジメだ。陶酔の世界へ入れぬのは当然である。

しかしそこまで要求するのは、光男の欲心なのか……。愛読者諸氏の御意見を乞う。

かくて我々（光男）は、奇クに熱中し、映画を観、無限の空想の世界へとハセサンジルののである。——これが『平凡な奇ク愛読者』ではなからうか。

平凡な奇ク愛読者ゆえに悩む、それは「結婚」だ。愛読者の中にも、結婚したい相手はいるが、はたして自分の性格を恋人に話すべきか、否か。で悩んでいる人もあらう……。そういう人達にとって、この作品はよき相談相手になる様に思える。唯、注意せねばならぬのは、能美氏があの親爺さんを知った事だ。

我々（光男）と能美氏の唯一の相違は、あの親爺さんである。親爺さんを知った事が、能美氏にとって幸か不幸か光男には分からぬが、不幸でなかった事だけは断言できる。

光男は、雅代さんとの夫婦生活に水をサス積りはモウトウ無い。が文中からさっする所氏はまだ芳子さんに、多少の未練がある様にも思える（間違っていたらゴメン）



いずれにしろ、もう少し話し合う必要があったのではないか、結果がどうであれ。

しかし、雅代さん、芳子さんの様な、多少ともSMに関心のある「いずれがアヤメかカキツバタ」のような女性に、巡り会えたのだから能美氏は幸せ者ですよ。光男もあやかりたい。

光男の感じとしては、能美氏は芳子さんよりも雅代さんの方が幸せになれるでしょう。それは雅代さんの方が、氏の気持を素直に理解しており、今後理解してもらえる様に思える。又SMにも、より関心があるのではないのでしょうか。その意味で結果的には良かった様に思えます。『責め絵のある関係』を読み終えて、総合的な感想は、一服の清涼剤を飲んだ時の様に、実にすがすがしい気分だ。人間と人間のふれ合いが、S・Mを通して実に暖かく感じられる。S・Mは暗いムードという観念を捨てた、今までになかった作品の様に思われた。読者に希望をいだかせ、生きる喜びを感じさせずにはおかない。

最後に、光男は能美氏にお聞きしたい。もし氏が親爺さんを知らなかった場合、はたして芳子さんに自分の性格をうち明けていたか否か？ である。

光男には、やはり能美氏も我々同様、悩みに悩み、うち明けずに終っていた様に思える。

されば結果は当然反対になっている？

しかし「サイ」は振られた」これも運命でしょうか……。能美さん。

(他人の心中を光男の推測で表現し、申し訳け有りません。許して下さい)

### ◎六月号、奇クサロン「下着泥棒」を読んで、「泥棒君」に一言

六月号の目出鯛三氏(六月号、光男の手元にはないので違っていたらゴメン)。「下着泥棒」実にユーモアがあり、おもしろかった。

後日譚が又楽しい「その泥棒君、男モノだけ元に戻して有った」とか、誠にもって、この泥棒君、若く美しい女性のパンティだけが欲しかったのだと、光男イササカ、イジラシイ気がした。しかし泥棒君、悩ましいパンティでも、必ずしも美女が穿いたモノとはかぎらないヨ。「そんな事ない」だって？ では光男がこの目で見た事を話すか……。

光男の住む団地の「オク上」も御多聞にもれず、晴天の日曜日ともなると、まるで洗濯物のジャングルである。そのジャングルの中

には、マニアなら喉から手の出そうな程、欲しい、悩ましい色トリドリのパンティが風にナビいている。

五月のゴールデンウィーク。

光男は行楽日和というのに行く所もないままに、ブラブラとオク上に出て見た。

例のごとく洗濯物が快い五月の太陽をアビている。その光景も風情のあるものだ。

坐ってボンヤリ眺めたり、メイ想にふける光男の耳に、人の気ハイが感じられた。

階段を上って来たのは、同じ団地(十五号)の「おばチャン」である。

どうやら洗濯物を干しに来たらしい。手に持つカゴにそれらしきモノが見える。

光男に軽く会釈して通り過ぎた。

しばらく後、このおばチャン、干し終えたらしく、再び光男の前を通り過ぎていった。光男もそれにつられて立ち上った。その時、ふと今おばチャンが干し終えた洗濯物を見るとはなしに見てしまった。

驚いたノ驚いたノ、どうだろう。その中に目を瞞る様な色柄のナイロンパンティが三枚あるではないか。しかも「フリル」付きだ。若い娘でも恥じらいそうな悩ましいものだ。「お前(光男)アホとちゃうか……。何も驚



くことと違うじゃないか。そのおばちゃんに「若い娘」がいて、その娘が着けていたもんじゃないか」と君は言うの？ 残念でした。

——このおばちゃんには子供はいないよ。光男はこの夫婦をよく知っている。

さればこのパンティは……このおばちゃんが着けていたものだ。おばちゃんには悪いがおばちゃんからイササカこのパンティは想像しにくい。しかしおばちゃんしか穿くものはない。おばちゃんが自分から好んで穿くのか、おばちゃんの亭主が無理に穿かすのか、いずれにせよ、このおばちゃんが着けていたモノに間違いない。

五月の太陽の下、楽しい空想にふけていた光男の心の中から夢をウバったのは事実だが。光男が「ハレンチ」な空想にふけていたのが悪いのだ。

考えてみれば、このおばちゃん、立派だ。

「アメリカ人」は年をとる程「オシャレ」をするというが、このおばちゃん、正にアメリカ婦人の精神だ。それだけ「文明人間」だよこのおばちゃん。

日本婦人が総て、こういう風に（おばちゃんの様に）何の抵抗もなしにモノゴトを考えられる日が来る事を、光男は期待したい。

あの時の事を考えながら今こうして書いていると、今までのおばちゃんに対する光男の観念が消え、妙に光男にはこのおばちゃんが「色っぽく、女っぽく」思えだした。

やはり女性は、何年になってもオシャレをしなければ……。光男は「おばちゃんががんばって！」とハク手を送らずにはいられない。

ところで泥棒君。君のシッケイしたパンティ、目出鯛三氏が文中で言っているが、間違いないに美女（若い）のパンティだそうだね。

君、運がいいんだヨ、ホントニ。

エノ 何んだって？「若く美しい女性のパンティと知っていて、シッケイした」って。イヤ参った、参った。

### ◎体操に思う

光男は体操を見るのが大好きだ。体操といってもラジオ体操ではない。オリンピックの種目にある体操である。といっても、あの選手はジョウズとか「ウルトラC」だとかにはまるで関心がない。しかも女子種目しか興味がない。——体操を見るのが、大好きだという、男性の六割まで、いや八割までがこうではなからうか。

光男には、はち切れそうな健康的な肉体美がたまらない魅力だ。水着の様なユニフォームに包まれた、若い美しい肢体が、思うぞんぶん飛びはね踊る姿は、健康的な一種のお色気というか「エロチシズム」がある。

プロの「ショーダンサー」とは、又違った感が有る。これを夜の大人の悩ましきエロチズムとすると、彼女達には若人の健康的なはずらつとしたエロチシズムが有る。

てなもつともらしい理屈をつけたが、何んのことではない、光男の助平心が見さすのサ。

### ◎前衛芸術と奇クの関連性

近頃「前衛芸術」が盛んだ。

前衛音楽、前衛絵画、前衛ファッション……等々。取り上げれば切りがない。

そこには必ず「美女」が登場し、「エロチック」なムードがあり、「神秘」さがある。

これが我々若者にはたまらない魅力だ。これが我々（光男）を引きつける原因なのか……？ こういう中から芸術が生まれるとはスバラしい。

世間がこういう風潮にあるのは喜ばしいことだ。墮落ではない、二十一世紀への象徴だ。未知への追究、変った事への追究。これ



すなわち人間の本能だ。これすなわち前衛だ  
(光男はこう解釈する)

さて、我が愛する奇ク、一風変わった内容  
(人間の本能)である事は、今さいうまで  
もない。だが、この変わった内容が、前にのべ  
た種々の前衛芸術の中に多分にふくまれてい  
るとしたら……というより、この内容の一つ  
一つの行動が前衛芸術を創作しているとした  
ら……。例えば、

前衛絵画——或る者は全身「絵具の裸女」  
をキャンバスに置き、裸美女を「筆」代りに  
使用する。絵具だらけの裸美女から軽い「う  
めき」がもれるのは当然である。画家はそれ  
により「インスピレーション」で創作する。  
(光男には、筆の裸美女がM、画家がSの、  
一種のSMプレーに思えた)

SMプレーを芸術に結びつけるなんてスバ  
ラシイ。そこから創作される芸術作品も、又  
「スバラシイ」その様な作品を光男は愛す。

結局、光男の思いは……。

奇クも、前衛芸術の一つに入るのではない  
か？ 書物であり雑誌であるから「文学」で  
ある。『前衛文学』だ、前衛文学雑誌だ。

我々だけでも諸君、ヘンタイ雑誌の観念を  
捨てよう。奇クは、二十一世紀の文学、前衛

文学である。『前衛文学雑誌奇譚クラブ』こ  
ういう見方も出来るのではないか？

何時かこういう時代が来ると光男には思え  
てならない……。少なくとも今後、奇クの様  
な雑誌は益々栄える事だけは確信できる。

(尚、現在奇クは風俗文献雑誌とあるが、こ  
れは又違った角度から見た、光男個人の考え  
である)

### ◎パンティという名の衣

パンティについてももうヒトコト。

およそ男性にとって、女性のパンティ程魅  
力のあるものはない。(目出鯛三氏もいつて  
いるが光男も同感)何故か？ 知れた事。

先日、ストリップ小屋で変ったオヤジに会  
った。オヤジ曰く「ワシは全ストよりも「カ  
スカ」に見える様なパンティを一枚着けた時  
の方がムクムクとくるヨ」

だからこそ女性は下着にコリ、男性を魅了  
する。結構な事だ。

かくて下着売場は繁盛し、下着ドロは増加  
(これだけはイタダケない)

光男、奇クを「まだ知りソメヌ頃」パンテ  
イに対する一つの思い出がある。

あれは確か高三の時だった。一人の女が光  
男の家の二階に下宿した。この女、亭主と離  
婚して自分で働いているそうである。はじめ  
て顔を合わせた時、美しいとはいえないが、  
色の白い体格の良い健康的な女だと思った。  
或る日、庭に出て野球のバットを振ってい  
て洗濯物を落した。拾ってみてこれがあの女  
の物である事に、はじめて気づいた。

白いナイロンパンティだった。確か非常に  
ツルツルしていた記憶がある。「きれいなパ  
ンティ」唯、それだけだった。

二カ月程、過った或る夏の夜。その夜は確  
かムンムンする様なムシ暑い晩だった。光男  
は風呂場へ時計を忘れてきた事に気づいた。

「誰れ……？」

(風呂にあの女が入っていた)

「僕、時計忘れた」

時計はすぐ見つかったが、脱衣カゴの中に  
薄いピンクのパンティを見た。一瞬、何の抵  
抗もなしに、ごく自然に手が出た。

夏のムンムンする日に着けられていたパン  
ティは、全体がジメジメしている。一部分は  
特にひどく汗(?)の色がついていた。もっ  
ている間にも、妙な臭が鼻にくる……。

「きもち悪る……」思わず投げ捨てた。



甘

い

羞

恥

辻

村

隆

恥 羞 い 甘

山本一章氏が大島照代のカメラ・ルポを逸早く発表したので、相前後して撮った私のカメラ・ハントは出鼻を挫かれて、書く意慾を喪失していたのであったが……。

彼の眼隠し猿轡の山本流の、オーソドックスな緊縛に引きかえ、私は大島照代の体内に潜む、浣腸への憧求を、執拗に探究する恰好になってしまった。

クリス・マニアのためにも、私は過去三回に亘る、彼女との浣腸の交流を書いて見たい気になって、今一度大島さんに登場してもらった。一九六七年三月号の「この

女と」以来、半年振りの登場である。

彼女のプライバシーの面を、私なりにかなり深く掘り下げて見たつもりであるが、今一度、山本一章氏の「この女と」を、再読していただいて、彼女の認識を改めてもらえれば幸甚である。

同年五月号で、山本氏との対談中にも、大島照代さんのクリスタール・プレイのことについて簡単に言及しているが、『緊縛モデル秘奥談義』と重複する点もあるかも知れないが、私のペン是否が応でも今年の三月初旬まで廻らねばならない。

―浣腸プレイ第一章―

大島照代が一児の母であり、かつては人妻であったことは既に熟知していた。経済的な面で割切ったプレイであることも推察に難くなかったが、唯一つ気掛りは、いつも謎めいた第三者の男性の同行であった。

三月初旬の晴れた日、箕田氏より連絡してもらって、私はその日山本一章の後塵を拝すべく、約束の待合場所、阪急十三駅構内の、神戸線ホームで待った。彼女は私の面相を知らないが、私は数々のフォトを山本氏より拝





「ええ、ちょっと——連れの方がいるものですから」

「連れがあるのですか。山本さんからも聞いていた例の男性ですネ」

「どうしても、ついて行くと云ってきかないんです」

「どうします？ 一緒じゃ困りますが……」

「訳を話して帰っていただきますわ」

駅前の喫茶店の前で立止り、

彼女は数米はなれてのろろついてくるその男を待った。人妻である筈のこの大島さんにこの謎の男性は一体何者に当るのだろう。私是不愉快ながらも推理的興味を抱いた。

私から数歩離れて、大島さんはしきりになだめる様な口吻で、二度、三度頭を下げていた。やっと男はうなずいて、渋々私の方に視線をやり、おいときびすを返して、駅の方に戻っていった。

「本当にすみません」

「帰りましたか。一体誰なのですか？」

「一寸した知合いの方なんですけど……」

「知合いにしては少しおかしいな」

「本当に何でもありません」

彼女は男性のことに關しては、深く触れたがらない素振りを示した。

「山本さんから、あなたの事はいろいろとお伺いしています。今更御説明もいらないでしょう」

「カメラ・ハントは毎月愉しく読ませていただいておりますわ。いつかきつとお目にかかれそうな予感がしていたのですけど、案外早く辻村さんにお逢い出来て嬉しいのですわ」

「今日は変わったプレイをお願いするかも知れませんよ」

私は鞆の奥深く秘めてきた、浣腸道具に思いを馳せ乍ら、言外にそのことを匂わせた。

「山本さんから、随分非道いことされましたから、大抵のことなら我慢出来るのですけど何だか怖いみたいですわ」

彼女は大きな瞳をいっそう開いて、案外言葉は平氣に応えてきた。

「まあ、それはホテルに入ってから説明しましょう」

ホテルの林立する一面に私は足を踏み入れた。

× × ×

風呂から上った大島照代のほてった体を私

見させてもらっているのです、とつくに承知の上である。約束の午後一時過、神戸から入って来た普通電車からその人はホームに降り立った。地味な灰色のオーバーに、グレーの襟巻を頭からすっぽり真知子巻にしてかぶっている。私は無言で近附いて、頭を下げると、大島さんはハッとした様に、瞬間キラリと眼を輝やかせてうなずいた。

この一帯、連れ込みホテルにはこと欠かない。どこかのデラックスな一軒にもぐり込むことにした。駅の改札を出ると、彼女は二度許りふり返った。

「どうしたのです？」



はそこに見た。未だ湯気が薄く立ち昇っている。バスタオルを巻きつけた俵、彼女は私の作業開始を待っているかに見えた。

逆吊り、海老責り、反転責め、逆海老などは彼女に対する緊縛の、殆んどのポーズを、私は山本一章の、前後三回に亘るプレイフォトから既に見聞していた。今更再び、それを繰り返すのも、余り曲がなさすぎるというものだ。今日の真の目的は、クリスタールプレイにあったが、矢張りいきなりは言い出しかねた。先ずは型通り、オーソドックスな縛りから始めずばなるまい。

女囚めいた縛り方の、菱縄にした前手縛りをまずやって見た。協力的な彼女は、素直に私の縄をうけてくれる。数枚とり終って解くと、次は後手の高手小手縛り。二の腕をぐいと挙げさせて、両手を背に高々と吊り上げ、縄を首から前に廻して、直線に股に通して、後手に繋いだ。両手は挙げも下げもならず、かなり苦しい緊縛の方法である。

私は山本氏の様な眼隠しも猿轡もしない。苦しければ声を出させ、呻きをあげさせ、苦悶の様相をとったりとこの眼で確かめたかったからだ。前後左右からこのポーズをカメラに納めた。勿論全裸であって、発表を憚かる

もの許りである。股縄が深々と喰い込んで、没し去っているのが印象的であった。

私は充分観察し終って、縄を解いた。

「痛かったですか？」

「ええ少し。でも山本さんにくらべたら、うんとラクですわ」

「そうですか。じゃあ、もっとラクな縛りをやりましょう」

大島照代はヘンな顔をした。もっと強いのを言うと思ったに違いない。

私は極く平凡な胸縄の後手縛りを始めた。

彼女をその場へ立たせた俵、私は鞆の底をゴソゴソいわせて、ビニールの風呂敷をとり出し、黙って畳の上に伸ばして敷き始めた。

「あら、何をなさるおつもり？」

「今に分りますよ」

あえて答えず、私は照れ笑いし乍ら、敷き終ると、珍らしく、山本一章流の目隠しと猿轡をかませた。何かいいかげんに、彼女は喰い込んだ縄の猿轡の奥でムムムと口を動かしていた。彼女の体を背後から抱きかかえると、そっとビニールの上に仰向けにねかせ、片方の足首にしっかり縄を巻いて、鴨居に引っ張って吊り下げた。

カメラを三脚にのせて長尺レリーズをとり

つけ、彼女の体の横まで引張ってきてから、私は風呂の湯を汲んで来た。いよいよ浣腸開始である。大島照代は未だ何をされるか判つきり分っていなかったらしく、片足吊りのポーズでじっとしていた。

鞆を引くり返して、ガチャガチャと浣腸用具を畳の上に拡げ終ると、私は最初にポンプをとり上げた。湯桶の底へ石鹸を沈ませて来たので、少し湯を掻き廻すと泡立ってきた。泡のたった湯液を少しポンプに吸い上げる。彼女の自由の片足を私の膝で押さえ、……手をやって、ポンプを圧入した。刹那、彼女は私の意図が分ったのか、腰を振り、自由な片足をかなりバタつかせたが、それも束の間液が吸い込まれて行くと、ぐったりと力を抜いていた。一〇〇ccのポンプで三回注入し終り、ついで私は、エネマをとり上げた。猿轡の下で、しきりに何か訴えている様であったが、意に介せず、私はエネマの一方を湯桶にひたし、ゴム球を握り、離れた。数回のこの動作で、グルグルと異様な微かな音を私の耳に伝えて、湯液は正しく彼女の腸に流通していったようであった。私のひが眼か、大島照代の下腹部は心持ち脹らんでみえた。湯桶の湯は半分許りに減っている。その分だけ流入



したことになるのだ。一リットル足らずは注入したかも知れない。レリーズはこの間、容赦なく握りしめて、閃光が走り、ジジッと自動巻きのフィルムは流れていった。

吊っていた足縄をとき、私は彼女の体を抱き起した。解放するのではなかった。後手縛り、眼隠し猿轡の俤、彼女の体を押し出すようにして、片隅のトイレへ歩かせていった。ヨロヨロとよろめき乍ら、彼女は私に背を押されて歩を運んだ。大小兼用のトイレ、その上に押し上げしゃがませる。扉を開いたままにして、カメラ位置を移動させ、私はしっかりとレリーズを握りしめている。耳許に唇をよせて、ささやくように

「苦しかったらどうぞ——」

いやいやをして、彼女は小刻みに体を震わせていたが、下腹部の重圧にはたえられないのか、数分我慢に我慢を重ねた挙句、遂に羞恥をこらえて、元気よく激しい排水の音が私の耳朵を撃った。

始末をして私は再び縄尻をとって部屋に引返した。縄、眼隠し、猿轡といてゆく。自由になった瞬間、彼女は飛ぶ様に私の傍らを離れ、折りたたんだ俤の、ノリのきつい浴衣を引剥すようにして、慌てて羽織ってうつむ



いてしまった。了解なしで始まったクリス・プレイだけにお互いに気拙い。私も声を掛けるきっかけを失って、詮方なくボツボツと浣腸用具類や、カメラ、縄等を片付け始めた。時間にして未だ一時間足らずである。目的は達したのだから、今日の処は、深追いはよそう。多少のプレイに対する未練はあったが、相手の羞恥の気持も察して、私はあっさり諦めることにした。

「もうお撮りにならないんですか？」

向うをむいた俤の、大島照代が、か細い声で背中ごしに声をかけてきた。

「ああ、いいですよ。だってもう、嫌でしょう、こんなこと」

「でも、未だ一時間も経っていませんわ。本当に構いませんかの？」

済まなそうな声で、やっと彼女はこちらを振り向いた。

羞恥からか、眼のふちがうっすら赤く染まっていた。長い髪が乱れて、私はその乱れ髪に、関連もなく、大島照代は或いは、羞恥の中に悦楽を感じ

じとっていたのではなからうかと、フト思った。眼のふちの仄赤さは昂ぶりのバロメータではなかったであろうか——。私は大胆になった。浣腸プレイに自信をもった。

「浣腸なんかして怒った？」

「……」

大島照代は、はじらいの笑みを浮べて微かに首を振った。

「いきなりやったりして御免ね。最初に変ったことをやるといったのは浣腸プレイのことだったんだけど、どうしても言い出せなくてね。でも一度やって見たかったのだよ」



「いいんです。お気になさらないで」

「本当に？」

「ええ」

「じゃあ、この次は、もっと本格的にやっていい？」

「その時は、その時のことですわ」

彼女は口籠り乍ら、又頬を染めた。

その羞らいは人妻にのみ見る、或る種の媚がそこはかとなく浮んでいた。

「早いに越したことはないでしょう。じゃあ簡単な食事をして駅前でお別れしましょう。」

お子さんが待ち兼ねているかも知れない」

「突然でしたものだから取乱して御免なさいね。今度はその覚悟でまいりますわ」

まといつくような妖しい濡れた瞳がじっと私を見上げた。

## —浣腸プレイ第二章—

七月である。不快指数の高い、雨上りのねとつくような蒸し暑い日、私は数カ月振りに大島照代と出会った。

その間——、編集部気付で二度許り彼女の便りを受取り、返事は出しておいたが、仕事や雑用に追われ、彼女との出会いはいついのびのびになっていたのだった。

最初の便りは、私が彼女とのクリスタールプレイをカメラ・ハントにしない不満めいた文面であった。それから察して、彼女はあのプレイの逐一を大いに期待していた様であった。次のお約束の日を待ち兼ねているといった言葉で結んであった。彼女への便りの返信が、Kという男性方になっているのは、万一の場合を慮んばかつてのことではあるうが、Kというのが例の謎の男性であるとすれば、いささか面白くない。Kという男は大島照代のプレイの逐一を知悉し、何か彼女の急所を押えているかの様な印象をうける。返信するのがすべてKにのぞかれるかと思えば癪だったが、その点を考慮して、遠廻しの当らず触らずの返事を出しておいた。

六月中旬、二カ月許り中を置いて、ひょっこり又、私宛の私信が、編集部より廻って来た。今度は凄惨。彼女の焦燥がありありと感じとられ、しかもクリスタールへの要求をあらさまに縷々と書きつらねてあったのだった。子供が六月下旬から一カ月、郷里の母親が連れ帰ったので、いつ何時でも自由がきくという、人妻のよろめきに似た妖しさを文面にただよわせ、

『……尚、辻村隆様によって教えていただい

た、あの時の何ものにもかえがたいよろこびは、日を増すごとにいやましくるのでございます。わたくし自身、みずからの手で真似ごとを致す夜もございますが、それは到底叶えられる喜びではございません。はしたない女と嘲笑なさいますとも、わたくしの心に一度点ぜられた、あの秘やかな喜びは二度と消えないと想います。お目もじの日神かけてお待ち申し上げます。すべてをゆるすことになろうとも、更々悔いなきわたくしの今の心境でございます。わたくしの生理日は……以下略』（原文のまま一部）

流石に「浣腸」という二字を全然使っていないが、文中からは、それを充分に察しられる言葉で流暢に書いている。相変らずKという男性気付である。ここまで書くのならば、何もK気付にしなくともいいではないか。しかし、彼女にも色々都合もあるのだろう。私は氣をとり直して、すぐ返事をしたためて会う日時のみを簡単に書き送った。

不快指数最高の今日、うだる様な湿度の高い暑さである。十三近辺は混雑するので、車は反っておそくなるし、厄介なので阪急を利用した。不評高い冷房タクシーも、今日だけは流石に心地よく、運転手は大きな顔をして



割増料金を請求した。

十三駅を出て商店街の中の喫茶で待つ。

この暑い日に駅構内ではやり切れない。この喫茶からは、駅の改札の様子が比較的分り易いから、彼女の姿を見掛けたら飛び出すつもりでいた。

大平洋、太西洋の横断をなしとげたコーサー二世号のチップケなヨットが、テレビの画面をにぎわし、主人公が衆人環視の中で、久々の対面の細君と抱き合い、頬をすり寄せん許りにかたく抱擁しているのが、心温まる風景であった。感激の喜びを、日本人もどうやら西欧なみに、素直に発現吐露しているのが微笑ましく快よかった。

画面にみとれ、フト気付いて、駅前をのぞいたら、大島照代がパラソルをさして、人待顔に街頭に佇んでいるのが眼に入った。

慌てて伝票を掴んで、喫茶を飛出す。逸早く私を見付けて、彼女は安堵の笑みを隠そうともせず俄かに浮べた。彼女から近附く。

「もう来ていらっしやったのね」

「今日はK氏はこないの？」

云わずもがなのことを言ったものだ。

「ええ、ついて来るといってましたけど、私きつくお断わりしましたのよ」



「一体どういう人、あの人？」

「孰れ申し上げる時もございませうけど、今日  
はこれ以上、仰有らないで——」

彼女は少し悲しげな眼付になった。ノースリーブの薄いブルーのワンピースが、彼女の肌の線を生々しく出していた。ノースリーブの腋から濃い腋毛が覗かれるのは肉感的すぎた。そりあとの青々とした女にも、反って妙なものを感ずるが、こう濃く出ているのも少し幻滅である。それはとも角として、私達は一時も早く、この熱射を避けて、よく冷房のきいたホテルにもぐり込みたかった。彼女の鼻梁にも汗の玉が浮かび上り、私の白い半袖

シャツもべっとりと汗でへばりついている。アベックのように肩を並べて、ホテル界限へ向う。

「今日は大分変わったもの、準備して来ましたよ。例の方の……」

「……」

彼女は無言で小さく首を振った。否定ではない。皆までいいうなと言う意味か。すべては期待しての了解ずみのことなのだ。あえて言葉にする必要はなかったのかも知れない。文面ですべてを許している筈だったから——。

「子供さんはお母さんがお連れになったそうですね」

「ゆっくりしているんですよ。四国でも端っこのHという処なんです。何でも近くにいい水泳場があるとか申しましたわ」

「Kさんはクリスタールプレイのこと知っていますか？」

「さあ……恐らく……」

恐らく知っているとのか、恐らく知らないというのか、微妙である。これは余り聞かない方がいい。

× × ×

前回と違うホテルを選んだ。どうってこともないが、あちこち行って見て、気分のいい



ところを探すのも又愉しみの一つだからだ。

今日のプレイの場合、緊縛は完全に従の立場であり、主眼はクリスタールにあった。

もう私は、眼隠しも猿轡もなかった。甘い羞恥に悶える大島照代の赤裸々な表情を存分にこの眼で確かめたかったからだ。

三面鏡の低い腰掛を中央に持出し、腰掛けに腹部をピッタリとあてがってうつぶせにさせる。両手を頭の前で重ねて縛り、両脚を開かせて柱の一方へ、片一方はテレビの脚に縛りつけて固定させる。位置が低いので、膝下に座布団を二つ折りにして挟み込み、臀部が持ち上げる様に配置すると、私はイチジク浣腸を二つとり出して、先端を切った。先ず腸内の洗滌である。小さいグリセリン液は一握りギュッと押すだけで忽ちペチャンコになってしまう。続いてもう一つ。グルグルグルグルと、彼女の腸内で異様に鳴る音が私の耳にも伝わってくる。

「あっ、もれそうですわ。早く解いて——」  
彼女は眉間にしわをよせて悶えた。大急ぎで足の縄をとき、頭上の縛った両手の縄を引っ張ってトイレに走る。ここは洋式で、バスとトイレが同居していた。普通なら洋式トイレに坐るのだが、それでは目的を達しない。

「逆さに向いて、その上へ跨がるんだよ」

「羞かしいわ」

「いいだろ、その目的できたのだから」

「一緒に出ますわ」

「いいさ、さあ早く」

言われる俚に、私にせき立てられて、彼女はやつこらさと、それに跨がった。待てしほもなく、奔放な噴射が始まった。白濁から薄黄色に変じて、軟かい固体が後半に交って落下した。特有の臭気が立ち籠めた。いきなりプレイが始まって、あっという間に始まった出来事なので、私はカメラの準備をすっかり忘失していた。今更おそいし、これからだっているいろあるーなど、ホゾをきめて直視する。

放射につれて、時々空気洩れの高音がひびく。その音の発する度に、彼女は身も世もあらず、体をすくめようとする。

イチジクによる流出作業は一段落したかに見えた。

「手をといて下さいな。自分で始末します。」

「本当に恥かしかったわ」

「そうするかね。ついでにバスに入ってよく洗って出てきたらいいよ」

私は簡単な縄をするすると解くと、バスト

イレルームを出た。ざあざあとシャワーを浴びる音をじかに聞き乍ら、カメラを据え始めた。

バスタオルにくるまって出て来た彼女を待ち兼ねた様に、私の手はバスタオルを剥ぎとる。

「一寸いっぶくさせてね。タバコ一本下さない」

ハダカの俚、チェアに坐って彼女は濡れそぼれた長い黒髪を掻き上げていた。控えの間が洋式で、洋ぶすまを開くと、和室の寝室につながっている。私は片隅の冷蔵庫を開いてビールとジュースをテーブルに運んだ。

「どちらをのむ？」

「おビールがいいわ」

「相当いけるのかい？」

「そうね、コップ二杯ぐらいがいいところよ」  
ハダカの彼女と、これ又パンツ一枚になった私は、奇妙な恰好で、ビールで乾盃した。

冷房が入っていても、暑さはひしひしとこの部屋にまで忍び込んでいた。私のひたいにも汗のしずくが浮いていた。

「もう、いいですわ」

彼女からプレイの誘いがかかった。私は和室との境のふすまを外し、立柱に彼女を引っ



張っていった。敷居に座ぶとんを一枚しき、両脚を柱にそわせて引っ張り上げた。

「どんなポーズですよ」

ポーズを説明してくれば、自分でとるといわん許りの彼女の口吻りであった。

「おしりを柱に添わせて、ぐいと両脚を頭の方に折り曲げるんだよ。両手は柱を挟んで、柱のうしろで縛り、両脚は揃えて縛って、首で伸びないように縛る。腰の辺りも柱に縛って固定させるんだけど」

「長くつづけると胸が苦しいけど、やって見ますわ」

彼女は、柱に添って、ジリジリと両脚を挙げていった腰高になると、両足を折って肩の辺りまで降して来た。私の緊縛作業は直ちに始まる。双臂が天井を向いている。

イルリガートルを掴むと、大急ぎで、バスの湯を一杯に入れる。こぼさぬ様戻って、鴨居に紐でつなぎ、準備は終わった。湯の温度は未だ四十度近くあって熱く感じた。

ゴム管の先の嘴管を挿入し、私はレリーズを引寄せて握る。



水止めを把握すると、音もなくイルリガートルの温水は減量していった。一杯いれると二リットル入る器具である。大体七分目ぐらい入ったところで、イルリガートルの温水は目に見えて速力を落して来た。高圧の力が弱まって来たらしい。大島照代の、やや鼻にかかった、呻きとも溜息ともとれるような、熱い吐息が洩れて、ウンウンうなっている声に変わった。苦しいポーズでの高圧流腸が、腹部のふくらみと共に、急速に緊縛ポーズにたえきれなくなってきたのか。すっかり注入したかったが九分目辺りで温湯の落下スピードは止った。私は水止めを離し、スルリと引抜

くと、とも角縄をときにかかった。一・五リットルは確実に入っていた。カメラはこの様相を十数枚に亘って捉えたが、どれもこれも同じようにしか撮っていないだろう。実施する者しか知り得ない、注入刹那の、快楽である。

ドサリと横倒しになって、しばし彼女はあえいでいた。

「行っていいかしら、おトイレ」

「縛りたいな」

「じゃ、早くしてね」

大島照代は、足ぶみし乍ら、両手を自からうしろに廻した。簡単な胸縄と両手後ろ縛りをすますと、彼女は私の縄尻を引曳るようにして、トイレに小走りに走った。私が縄尻を離して、カメラ位置を変える間に、今度は私に言われる迄もなく、洋式トイレに片足をかけて上ろうとしていた。後手縛りで自由がきかず、独りでは上れぬ焦立たしさが、

「早く、早く」

と叫ばしていた。

滝の様に落下する、湯気の立つ液体が、奔流の様に一気にほとばしっていた。綺麗な白い一条の流れが、水道の蛇口をひねったように間断して流下していった。



「おろして——」

甘えるように私を顧いた彼女の瞳は、濡れて妖しく光っていた。

「どんな気持？」

耳許でささやくようにきくと、

「御存知のくせに……きいちゃイヤ」

甘い陶酔のひびきがこもっていた。

「すっかりおナカの中が綺麗になったよ。もう一度いいことをしてあげようか」

「今度は何をなさる？」

うるんだ瞳が期待に光っている。

「今度は縛らなくていいから、もう一度さっきのポーズをとって御覧。ウンとお尻を高く上げてね」

私は鞆の中からビニール袋に入れた粉末のジュースをとり出す。イルリガートルの中をよく洗って来て、ほぼ八分目の水を入れると冷蔵庫を開いて製氷皿の水を、流水して分離させてイルリガートルに投げ込んだ、ビニール袋のオレンジジュースを全部イルリガートルに投入する。備えつけの長い柄のスプーンで攪拌すると、オレンジ色のジュースが出来上った。水止めを把握して口に入れると、勢いよく甘いジュースが口中に激しくあふれて流れ込んで来た。味もよし、さてと——。

私は再びイルリガートルの作業を、大島照代にくり返していた。先程の温湯がジュースの冷水に変わったただけだ。冷めたさが腹の底に沁み渡るのか、

「ウン、ひえるわ、つめたいもの——」

と呟くように彼女は甘い言葉を投げた。

今度も底辺にわずかを残して、注入は緩慢になり止った。私の手に直径一センチ近くある……のカテーテルが握られている。先の尖った方をしめらし、それを挿入する間もあらず、カテーテルの口から、オレンジの液体がスルスルと糸を引いて、流れてきた。口にうけると甘いジュースの味が沁み渡り、腸内を巡環したのか、やや生あたたかくなって戻って来た。一旦引抜いて私は彼女に声をかける。

「おいしいよ、のんでみる？」

「届かないわ」

あらがわな。私が先ずのんでみたことに大いに感激したのか、自分自身試してみようと思っっているのだ。私は大島照代の肩から頭の方にかけて、ビニールの風呂敷を敷いてやり、うしろに廻って、腰の辺りをぐんと彎曲させて、彼女の体が、まるでヨガの修練のよう二つ折れに屈曲するまでに押え込んだ。

カテーテルの一方が、殆んど彼女の口唇、数センチまで近づくに違いない。こうしてカテーテルを入れれば、甘いジュースは、顔面にサラサラと降りそそぐに違いないのだ。

「やるよ」

私は見当をつけて、ジリジリと押しこんでゆく。チヨロチヨロと糸を引くように出始めたオレンジの液が、やがて勢いよく一本の流れとなって落下した。彼女は大きく口を開くが、あごに、鼻に、頬にしぶきはかかって、口には仲々入らない、やっとうまくうけて、ゴクゴクとのどを鳴らして、それを嚥下していった。むせてぱっと吐いて、ジュースは辺りをベトベトに濡らし、黄色い溜りをビニールの風呂敷につくった。

「ウ、ウ、もういいわ、とめてえ——」

さっと抜いて、私は体を横たえさす。

「ああ苦しいわ。自分のを自分でのむなんて考えても見なかったことですわ」

濡れタオルで胸や肩から顔をふいてやり乍ら、顔を近づけて、

「どう、おいしかった？」

「ええ、少し生まあったかいけれど」

「体温であつたかくなつたんだよ」

カテーテルをしげしげとみつめて、手にと



ると、

「大変なものがあるのネ」

「ほら、ここにもう一本、細いのがあろう。これは尿道のカテーテルさ。やってみる？」

「いいわ、もうこれ以上——。今日はヘトヘトよ。又この次にね」

「そうだね、都合三回だからね」

「未だ残っているようよ。もう一度いってくる。又縛る？」

「いいよ、いって来給え」

私も亦、三回のクリスタールでホツとした飽和状態にあった。大島照代は又バスにつかっているらしい様子であった。

暑さ疲れか、私はかなり疲労していた。ぐったりとダブルのマットレスにねそべっていると、バスから上って来た彼女が、私の傍らに、ハダカの儘、身を投げ出してきた。

「なあ、言つてよ。あのKって何者なの？」

「そんなに聞きたいのですの？」

「ああ、聞きたいね」

「箕田さんにも、山本さんにも言わなかったのだけど、辻村さんには負けましたわ。あの人はネ……」

「ウン」

私は固唾をのんだ。Kという謎の男の正体が、今、解明されようとしている。

「辻村さんはKさんを、どう思います」  
はぐらかすように彼女は私にきいた。

「さあネ、一度会ったきりで、それも三月頃のことだったろう。正直いって分らないね。唯、暗いかげを彼から感じたネ。何か卑屈なそのくせ、どこか押し強い、しいて考えれば、あなたの秘密を握っているといった」

「例えば、どんな秘密」

「あなたが何かの拍子に、フトKによるめいた。或いはKに抜きさしならぬ弱味を握られているとか。そんなところじゃない？」

「弱味ネ、どんな弱味とお思いになる？」

彼女は私の推理を愉しんでいるようであった。ねそべっている私に凭れかかるように、熱いまなざしでのぞき込んで来た。彼女のしなやかな右手が、私の胸から腹の方へじわじわと、さりげなく触れてきた。危険信号だ。これは——。ええいくそ、度胆をぬくようなことを言つてやれ。

「ズバリ当てようか。あなたとKは、或いは隣り同志か近所かも知れない。近隣の眼を盗んであなたが誘いかけたか、Kが誘惑したかそれは分らない。あなたはもともと被虐的な

人だ。御主人と別れて子供だけとの二人暮らしをいいことに緊縛のプレイに耽り、果てはクリスタールは勿論、ありと凡ゆる遊戯に耽溺した。Kは恐らく奇巧のファンに違いなかった。それでKは奇巧誌上に、あなたのフォトリットを希んで、モデル募集に応じさせた。出来得ればKは、プレイの様子を自分の眼で確かめ、自分以外の人間、例えば、山本章や辻村隆のプレイ振りを見て、ひそかに悦楽を味わおうとしたに違いなかった。最初の編集長との時はうまうまついて来たが、二度目からは断わられて、その機会をねらっている、といったような……。勿論報酬はすべて彼に吸い上げられて、あなたは彼のカイライになっている。そんなところでしよう」

「辻村さんらしい推理ですわ。でも少し違いました。本当のことを申し上げると、あの人は現在の私の内縁の夫なんですの」

「えッ、本当かい、それ？」

「本人の私が言うのですもの、間違いないでしょう。御存知のように離婚してから、子供と二人暮らしだったので、彼は私のその淋しい生活にうまくつけいたのです。ズルズルと、いつしか彼に惹かれていったのです。別れた夫がそうであったように、彼も又



奇クのファンでした。私ってよくよく奇クとは因縁があるのですね」

「貴女の体のどこかに、被虐の相が込み出ているのじゃないかしら」

「そうかも知れせんわ。何しろ私は、別れた夫には、結婚して半年目切りから、もうそろそろ縛られ始めていたのですもの。たしかに、私自身にも被虐を求めるような、虐められて反って身のうちの

燃えるような気持をもっていました。子供が出来て二年ぐらいいまでは、夫の仕事の方も順調で、なかなか羽振りもよかったのです。だから、夫のそうした虐めたり征服したりした感情も、男らしい行為として受取っていましたから、むしろ進んで夫の氣にいるよう、どんなことにも耐えてきました。事業の失敗のつまずきが、夫の間を変えてしまったの



です。うつろなぼんやりとした男にかわり果てて、全然働く意慾を、なくしてしまいました。余程、ショックが大きかったのでしょう。子供は主人の母が見てくれるので、私は間もなく働きに出ました。働き先が水商売だったものですから、夫は次第に独りよがりのやきもちを焼き出し、少しでも帰りがおそくなったたりすると、誰かいいい男でも出来たのだらうと、殴ったり蹴ったり

の拳句、一晩中縛った俵で責め抜いたり、果ては浮気出来ぬようにだと、毛をすっかり剃ったりして、それはもう半きちがいのような「随分苦勞したのだね」

「主人の母も、主人と私のこんなことを薄々知っていたようです。荒れたそんな夜は、お母さんに子供を押しつけ、夜の夜中、二時間許り散歩してこいというのです。夏でしたらいいけど、冬のさなかでは凍えてしまいます。泣き泣き、お

母さんは私の子供を起して、近所の親戚で、その夜は泊って来ます。誰もいないガランとした家の中で、嫉妬に眼を血走らせて、忽ちに私を裸にしてしまうのです」

「聞きしに勝る暴君ですね。それで……」

「私の当時の家は、小さい三間許りのものでしたが、中の間は、昔いりりにしてあって掘りごたつ用に、一米四方許り掘ってあるので。四角いはめ込みの畳を普段は敷いてありますが、荒れる夜は、私を裸にして、その掘りごたつの中へ押し込め、床板に首だけ出るような穴をあけて蝶つがいとめるようにしてあります。裸の私は勿論、雁字搦目に縛られて放り込まれます。時によっては、私の体にバターや蜂蜜など塗って、穴の中へ飼猫を一緒に入れたりもするのです。猫がなめ易いような姿勢に縛られてなんです。首だけ出して身動きの出来ぬ私に、夫はありもしないことを妄想して、白状せよと悪口雑言のすべを浴せかけ、唾や痰を私の顔にかけたり、顔じゅう真黒に墨を塗りたくったり、髪の毛を縄で結んで首が引き千切れるほどに吊り上げたり、ビールやお酒をのんでは、便所にも立たず、私の口で代用させたり、部屋中の電気を消して、私の口中に太いローソクを押し



立てて、じりじりと芯の燃えつきるまでの火傷寸前までみつめていたり、それはもう狂人じみていたのです。拳句の果は、私の顔に体ごと蔽いかぶさって来て、自分を満足させていました。夫は奇クのグラビヤの中でも、新宮さんや水野さんの生首フォトには、特に興味を抱いていたのか切り抜いて大切にもっておりましたが、私に対する一連の行為も、或いは生首にみたててのことだったかも知れません」

「体がもたないでしょう、それじゃ……」

「ええ、何度も死にそうな目にあって来ました。そのくせ、自分の気がすむと、さめざめと泣いたり、ペコペコしてうるさいほど謝まるんですの」

「それで離婚を決意したの？」

「いじめられるのには馴れていますから、私は、自分さえ我慢したら、それで済むと思っていたのですが、幸か不幸か、四国から商用で上阪した兄が、突然私方に立ち寄って、責めに狂ったようになっていて、その現場をみてしまったのです」

「おや、おや、えらいこっちゃ、そいつは。」

三人三様に身すくみで、随分困ったでしょうね」

「その前夜、散々吊された私は、体中のふしぶしが痛くて、翌朝はとでも起きられず床についていました。夫は又ぞろ、お母さんに用事をいいつけて外へ出すと、昨夜おそくなつた件を蒸し返して云い出して責め始めたのです。本心は何もないと分っているくせに、むしろ責める口実に言い立てている様なことでした。体中痛いし、相手にせず、いい加減うるさくなって、言いたい放題いわせておくと夫はいよいよいきり立ち、私の寝巻をむしりとると、ハダカにして、柱の前まで引ずって行きました。柱に無理矢理立たせて、雁字搦目に縛りつけ、猿轡をはめて声の立てぬようにして、縄尻で、ところ嫌わずぶち始めたのです。その時突然、（何をしているノ）と大きな声がして、夫の背後に兄が立ちはだかつていたのです。昼間なのでうっかり錠を表戸にかけ忘れていたのを、勝手知った兄が、ツカツカ上り込んで来たのでした。音を殺すため、ラジオの音を大きくしていたので、夫も夢中になっていて気付かなかったのです。兄はいきなり夫の頬を殴りつけました。急いで私の縄をとき、そのわけを、聞き訊いたのです。理由なんてありません。夫は平謝りに謝りましたが、私の全身の生傷を見て、兄は決

意し、そして離婚話が持上ったのです」

「ずい分数奇な、劇的な幕切れですね。それで別れたあと、今のKと同棲ですか」

「彼は私が母子寮におりました時、ヘンなものを売りにきたのです。弱々しいタイプのくせに、どこか図々しく、私は警戒し乍らも、いつしか彼の言にまどわされていたのでしよう。ひとつは母子寮の陰気な雰囲気を出て、彼の好意のアパート暮らしに、惹かれたのかも知れません」

「彼がモデルになることをすすめたの？」

「奇クのモデル募集の記事をよんで、私になってくれといわれた時は、最初は冗談かと思いました。モデルになれる程若くはないし、既に子供の母親なんでももの、一笑に附しましたが、根よく嘆願するように頼まれて、いっしか心の底で、私の虐められてみたい気持ちがそっともたげてきたのです。どうせ半世は屈辱にまみれた自分なのだしいいきかせて、とうとう承諾したのです」

「一種の自虐行為ですね。でもね、あの豊満なファーストレディたる関谷富佐子さんの御主人にしても、奥さんをそうしたプレイにわざとやるんですよ。それが一種の倒錯した強烈な刺激剤になるんですね。経済的には全然



困っているどころか、有り余る生活をしていても、そんな傾向の人がありますよ。中だるみの夫婦なんかには、それが案外潤滑油の役目を果して、すぐくハッスルするらしいんですね。大島さんの場合もそうじゃない？」

「彼は本当は、私の縛られる姿を見たいらしいのです。最初はうまくいったけど、二度目の山本さんの時も、次の辻村さんの時も断わられたでしょう。気の毒なぐらいガツカリしてしまいましたわ。いくら断わられても矢張り気掛りになるのか、いつもついてくるのです。」

プレイのしじゅうを自分の眼で確かめて、昂ぶりを鎮めたり、私を独りやるのが不安で、自分の眼で確かめたかったのでしょうね。最初から夫婦プレイとでもいえばいいのに、それならモデルにならないと考えたのかも知れませんわね。でも私が帰ると、それはそれは大変なんです。その日の様子を根掘り葉掘り聞き訊して、自分が納得するまでやめないのです。それで彼自身が又あやしくなってくるのです。そんな夜に限ってとてもすごいのですよ。口には出さず言えないようなことをするんです。前の時だって私と辻村さんのプレイを再現するために、もう一度同じホテルへ行って、その通りやってみせろなんていうの

です。浣腸用の道具なんかも、何処で探してきたのかチャンと揃えているんです。クリスタールについては、ずい分いろいろとやらされました。最初は拒んでいた私自身が、今度は無性にプレイがなつかしくなって来ましたの。辻村さんにあんなヘンなお手紙さし上げたのも、きつと心の昂ぶりが押えられなくなったからでしょう。彼がついてくるというのを断わったなんてウソ。今日は私の一存でまいました。彼が知ったら、又あとが怖ろしいけれど、我慢出来なかったのです」

彼女の体が重く私の上にかかって来た。思わずハネのけようとしたが、ポリウムのある彼女の肉体は重い。無言で私の体を這う女の指は妖しくうごめいて、何かを示唆していた。クリスタールに刺激されて、よろめくつもりなのだ。

「もうお撮りにならないんでしょ」

「ああ」

私はものうげに応えた。

「私、もうそろそろ帰らなくちゃ」

心にもない言葉とはうらはらに、彼女は甘い行為をせいているかに見えた。

「そう、じゃあさようしよう」

私は言葉を擱んで立上りかけた。女の指が

強く私の腿を抓った。

「あッ、痛い」

「辻村さんでダメね」

彼女はさっと立上ると、急に白々しくなった。一盗二婢とかいうが、私は自から好んで据膳の一盗をいただきそとなった。あわい悔恨が残る。もっとじんわりとムードをつくるべきであった。確かに彼女はその気で、大きい瞳を妖しく濡らせていたのだから――。

それはKに対するレジスタンスか、或いは未知の男性への憧求からの出来心であったかも知れないとしても。

私はのろのろ立上って、疲れた体で、辺りのちらばった道具を片付け始めた頃、身支度をととのえた彼女は、クローラーのそばで、冷気をじかに受けて、私を見下していた。

「もう、これでおしまいですの？」

「いや、あなたさえよければ又」

「いつ？」

「そう、なるべくK氏不在の時がいいね」

「明日でも明後日でも構いませんわ」

「編集長と一緒にとりたいたいってたけど」

「箕田さんと御一緒ね。いいですわ」

あっさり彼女は肯定した。

早速、今日のクリスタールの成果を彼に報



告せずばなるまい。

### — 浣腸プレイ第三章 —

「とことんまでやったね」

「ウンまあネ」

「しかし、このプレイ、分譲には無理だな。

どうしても肝心のところがいけない」

「ごもっとも。それで、明後日一緒にいって限界ぎりぎりの線かどうか？」

「まあ、出来るだけ浣腸ムードを盛り上げてとって見るか」

「山本さんもうだろう」

「あかん、あかん、彼は今、左近マリ子嬢にカンカンだ。いつか大島照代にクリスタール出来るって、あんたの一件話したら、その時えらく乗気だったけど、もう忘れているのか一向に言わんね。何しろ、次々と新らしがり屋だから、わたしもシンドイ」

「すっかりお株を奪われたカタチだね。金と力のある色男には、私も一步譲らざるをえませんよ」

「じゃあ、兎も角、勝手に話きめてきたのだから、あんたの顔を立てて行くか。土曜日でホテルはつまっているぜ」

「河岸を変えて、あんたの車で少し走ってみ

たら。今の彼女なら、

時間は余り気にしないからね。子供さんは彼女の母親が見てくれるそうだから」

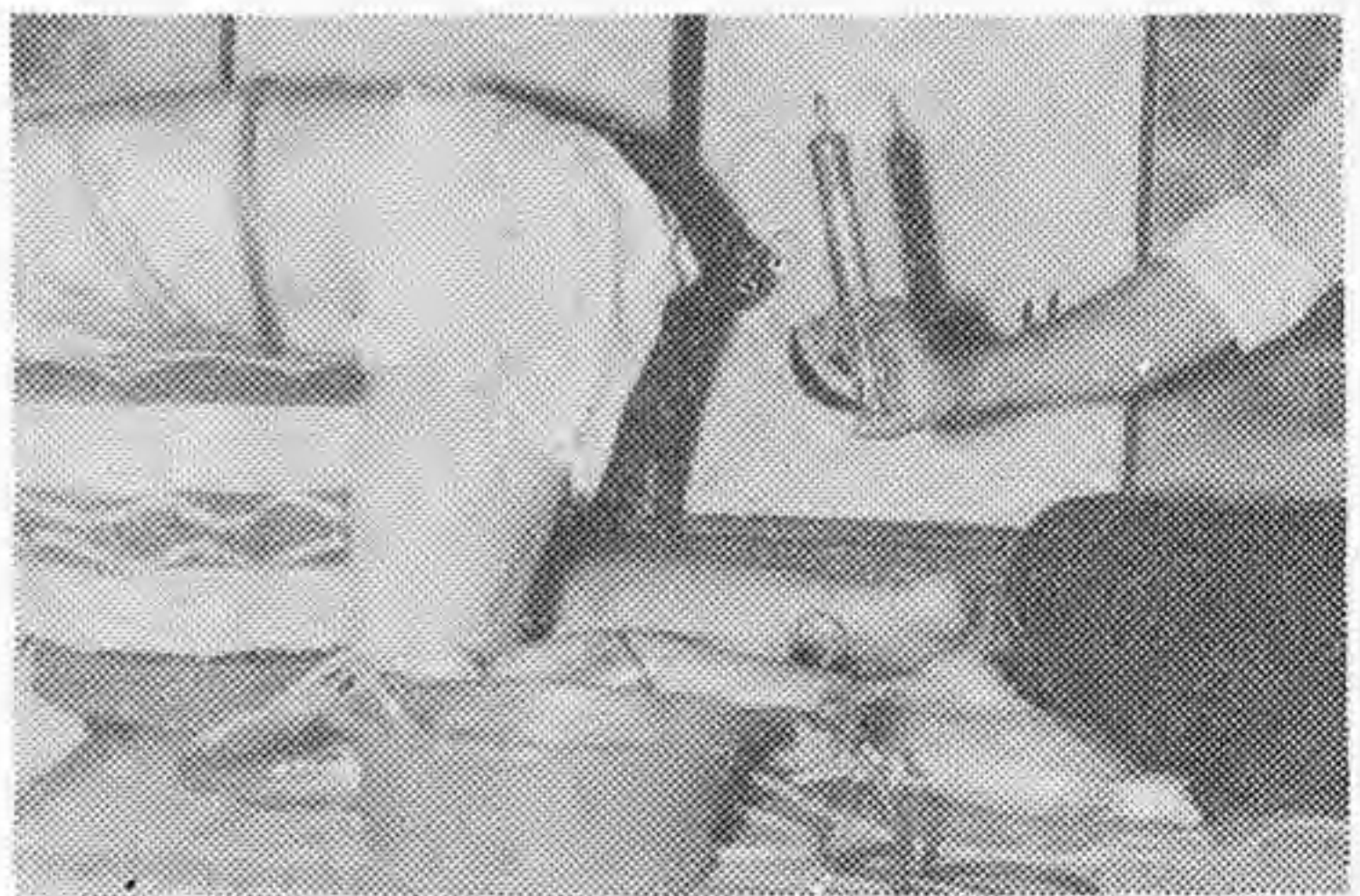
「じゃあ、例のいつものところで逢って、生駒か奈良辺りまで走ってみるか。あの辺りにもいいのが大分あるからね。モーターも便利だしね」

話はきまった。兎も角、過去二回私の撮ったフォトは、殆んどズバリのもので、ハント用になるものは皆無に近かった。第三回のプレイで、編集長がハント用を撮ってくれるに違いない。本当は面白くなくても所詮限界とはそんなものである。

× × ×

私は私なりの趣向を凝らして、カワったものを鞆に忍ばせていった、プレイと共に孰れ追々わかるだろう。

いつもの十三の駅で落ち合った。大島照代



は、何故か辺りを憚かるように、そそくさと編集長の車にのり込んだ。やはりKが来ているのか。

志に反して、車の混雑に辟易してうろろし、結局土地カンのある十三へと、車の浪に揉まれて逆戻りしてしまった。こんなことから最初から十三の公園近くのホテルに入った方が、少なくとも時間のロスが省けたというものだ。

今日の彼女は、意外によそよそしかった。やはり一対一より一対二の方が、すべての面でビジネス的になるものなのだろうか。

編集長は勝手知ったる、駐車場のあるいつものホテルに車を乗り入れる。このホテルの設備はいいし、駐車場からすぐホテルへ遮光ガラスを押せば這入りこめるので都合いい。「辻村さんよ。クリスタールプレイもいいが折角とるのだから、半分は緊縛もとるとしようよ。クリスとなると範囲が狭いのでネ」



「ああいいですよ。今日の彼女は一寸水くさい。ぐんといじめて見たい気がしていた折も折。人妻を泣かせて見るのも乙だしネ」

彼女の風呂へ入っている間のよからぬ相談はすぐ纏まった。

一昨日の、あの日のプレイのあとの、本心をチラリと覗かせたのが悔恨となるのか、大島照代は尚もよそよそしかった。編集長も一緒にやろうといった私の言葉が、私に対して燃えかけた炎の心に水をさしたのだろうか。所詮辻村隆という人間はプレイに徹した男、女心の人情の機微を弁えぬ男と見てとったらしい。しかしその方が反ってサバサバしていいというものだ。なまじ情緒連綿たるレターをもらうとシンどい。

私の緊縛は、彼女が思わず、ウウと呻きをあげる程きつかった。虐めて見たい想念がヒタヒタと私の心を押しつつんでいった。そう言えば、過去二回、彼女に対する緊縛は、クリスタールに重点をおきすぎて、なおざりになったきらいがあった。この女性は、内縁とはいえ公認のプレイのあと、更にハッスルして、Kから強烈な責めを甘受していたのではなからうか。とすれば、充分に被虐の魂を身につけている筈であった。Kや別れた夫との

プレイの模様を、誇張ではなしに語っていたが、あれからすれば、私の緊縛は兎戯に等しいものであった。前後三回に亘る山本一章のプレイも、私の二回のプレイにくらべたら、相当強烈なものを行なったことは、カメララルポからでも汲みとれた筈であった。クリスという変型プレイの実施のため、私は少し大島照代を甘やかして来たようだった。私のSの想念は急速にめざめてきた。

私は彼女を柱の前へ引っ張ってゆき、柱のうしろで両手を縛りあげたのち、全身にぎしりと轟々縄をしめつけて巻いていった。眼も口唇にも縄は容赦なく喰い込んでいった。

編集長が持参した浣腸道具一式をその前に誇示するように並べた。編集長の持参したものには軽便便器から女性用の尿瓶まである。一寸ゴテゴテし過ぎたようだ。思ったら、おもいは同じ編集長の声で、

「こら何んぼなんでも、チョット行き過ぎやな。反って真実感が薄いわ」

ごもっとも。それではと、道具類を一旦とり除き、ポンプからエネマ、ついでイルリガートルと、順を追って私は構成してゆく。都合のわるいシーンはうまくカットして、箕田氏のカメラは慌ただしく光る。

小憩後、胸縛りの横倒しのポーズや、うつぶせの縛りで更に浣腸シーンを数十枚、種々の観点からとる。箕田氏が私に耳打ちした。

「フォトはもうええさかい、こらで一丁浣腸やったらどう？ あんたつまらんそんな顔してやってるで」

「じゃあ、フォトお預けでやりますか」

「私は見学しているよ。彼女、いいんだろかね？」

「それは先刻経験済み。でも、かなり強烈だから、これでおしまいになるかも知れませんよ」

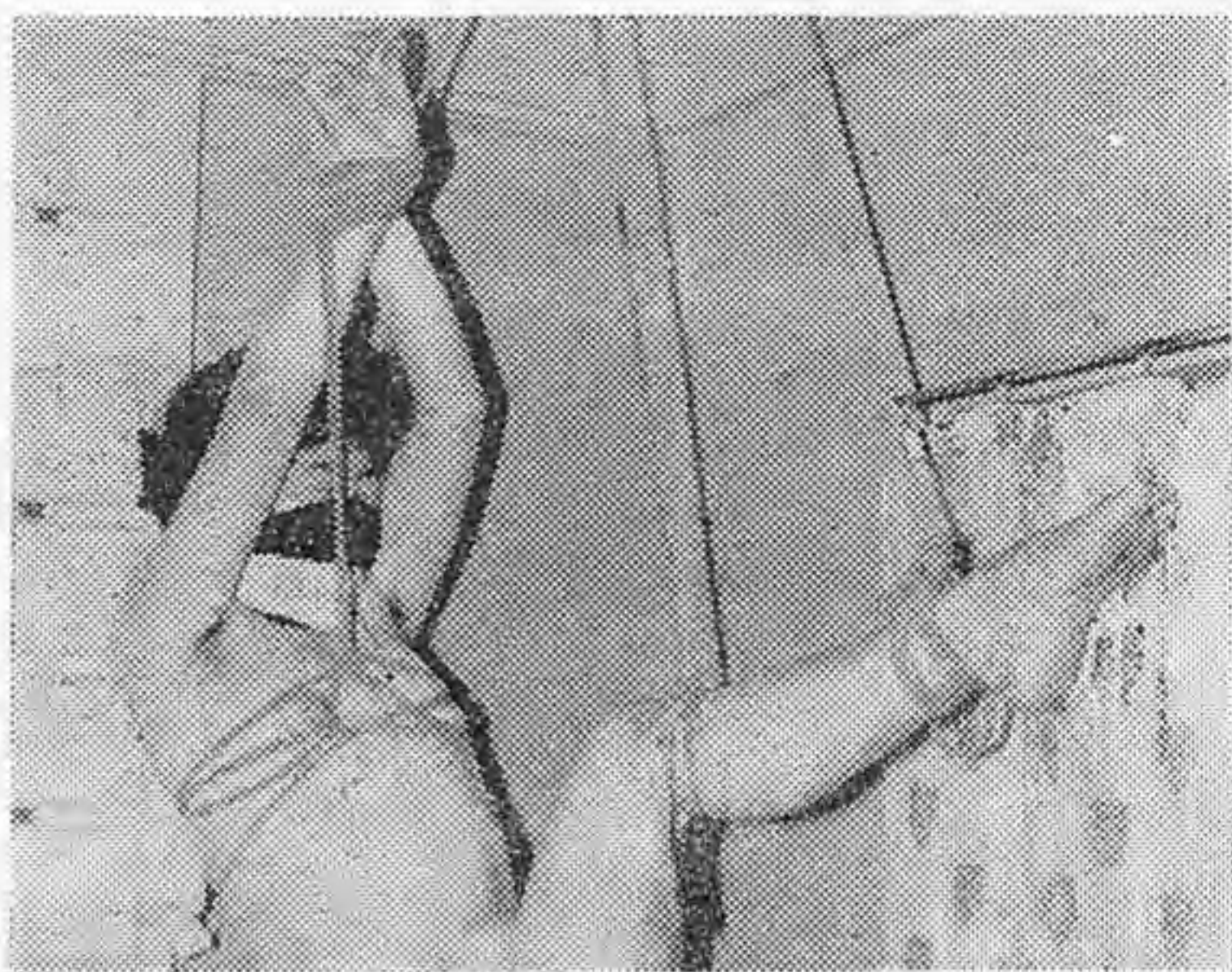
「いいとも、いいとも、私も根気がなくなってね。この辺で恰度いい頃だよ」

編集長は二個のライトを消した。螢光灯の光だけになると、部屋は忽ちに深海のような薄暗さに変った。二基の照明に馴れた目の一瞬のうつりかわりだろうか。

大島照代は私のなすが俚に、従順に口数もなく協力していた。しかし彼女の瞳に一昨日の、あの刹那の妖しい光はなかった。プレイとして割り切った女のポーズであった。

私は鴨居の真下に座ぶとんを敷いて、そこへ正座させた。両手を後手にして手首をしっかりと縛り上げると、背を押えて、ぐいぐい





と押え込んでゆく。恰度乙の型になる。手首を縛った縄の余ったのを両脚に下に廻してしめあげ、別の縄で、背から二の腕を伝って怪を廻してきつくしめ上げて行く。こうして吊り下げるつもりだが、余程強く締めつけておかないと、体重の重みで縄が伸びてくる。彼女の豊かな乳房は、ペツタリと太腿に密接し

ていた。編集長は手伝おうともせず、私の縛りの過程を黙ってみつめている。私が彼に視線を送るとニヤリと笑った。

すでに意図を察していたらしい。背と腰の縄に吊縄を通して、いよいよ編集長の応援が必要になってくる。

「少し手伝ってよ。私が抱き上げるから、鴨居で縄をとめてくれない？」

「よしきた」

彼はやおら立ち上って縄を引き始めた。

重い大島照代の体をエンサと抱き上げたところで、彼は縄をピンとはりつめて強く鴨居に結ぶ。そっと手を離すと、彼女の体は鴨居と敷居の恰度真中辺りで、宙にぶら下った。背や腰の吊った個所に空白が出来、それと反比例して、怪や脚首や、二の腕の縄が深く喰い込んでいた。撮らないといた彼が、逸早くカメラに戻り、照明もつけず、慌しくストロボを光らせて、数枚、この宙吊りをカメラに納めた。私は、バッグから封筒をとり出し、中から数個の白い錠剤を掌にあけた。

「何、それ？」

小声の編集長の問いに、

「発泡錠」

「どうなる」

「分らない、やってみないと」

私は指先をしめらせて、三個の錠剤を押し入れる。空間にゆらゆらとポリウムがゆらめく。尿瓶に汲んだ温湯に石油の汲上パイプの尖端を入れて、私は片手に尿瓶を握って、彼女に近づける。変ったものを持って来たとこのはこれだった。どの家庭にもある、石油缶などから、ストープへ石油を注入する場合に使う、ビニール製の、弁のついた吸い上げポンプなのだ。ビニールパイプの先端の方は、すばつと切断してあるだけなので、丸味がないから挿入しにくい。たっぷりクリームをなすりつけ、私はようやくにして押し込んで、片手で抜けないように押える。一人では作業困難なので、ついに箕田氏に応援をたのんで尿瓶をもってもらい、私はひだになった空気圧の円筒を力限り把握した。しかし握りしめても空気の流通がないため、一向に液は上ってこない。手に圧力のみが澁ね返るだけである。物理応用のこの器具の、こんな簡単な原理を私は忘れていたのだ。注入させる方のパイプの口をしっかりと押えているのと同じ。息を弾ませて数回押し私はついに諦めざるを得なかった。奇クで誰方が書いてい



たことはウソであった。実現出来ないことなのだ。恐らくその人の想像上の産物であることを、私は今、大島照代に試してみても判つきりと知った。

エネマシリンジと似た様な原理にも拘わらず、吸上げポンプはやはり人体には不可能であったのだ。私はややガックリし乍ら、急いでエネマに変えた。既に彼女の宙吊りは、かなりの苦痛の段階にあるのか、時々呻いた。

エネマから急流が腸内に流入していった。尿瓶がすっかり空になったところでエネマを抜きとる。いよいよ錠剤の効果が現われるのだ。一分——二分。次第に大島照代の顔面に苦悶がみなぎってきた。この尽でいいというのか。

「降して、早く降して、ああ」

「そのままでいいんだ。降さない」

私は叱咤の声になって彼女の願いを非情に蹴った。

「ああ、もう辛抱出来ない。たまらない——」

液体を含んだ発泡錠が、今白泡を立てて腸内に渦巻いているに違いなかった。

英語で押し出すことを(PUSH)という。

何をのんきなと思われるだろう。しかし私は今、彼女の奈辺に判っきりPUSHをきいた。

PUSH...PUSH...PUSH。

白泡となって勢いよく、押し出されるその撓音は、正しく、押し出すという意味以外のなにものでもなかったのである。

私の受ける白い便器に、泡立つ液体が、宙吊りの女体から、際限もなく吐き出されるように思われた。それはとんでもない個所に飛沫をあげ、走って、私の両手は泡で濡れて白く濁って光った。

ポトポトと断末の液が、足首に伝って、しずくを畳におとしていった。

「ああ、ああ、いや、降して……苦しい」

宙間で大島照代は身をよじり、鴨居はミシミシとなった。

限界と見て、私達二人の手は伸びて、彼女の体を抱え、縄はするすると解かれる。

顔を蒼白にして、黒髪を乱したまま、彼女はトイレにきえた。

PUSH...PUSH...PUSH。

緊張からさめて私と箕田氏は思わず顔を見合せた。どちらも無言。SMの限界のクリスタールプレイに酔ったのだろうか。我を忘れていた私の手に、白い便器が、おびただしい泡沫を浮べて握られていた尽であった。

x x x

「もう懲りて、二度とはこないかも知れないね」

と私。

「いや、その時の苦しさも、日が経てば甘い陶酔と愉悦にかわるものなのさ。そのうち声をかけたら、又出掛けてくるよ。何なら賭けてみようか」

大島照代は全身の羞恥を私達の眼前で撒きちらして、数分前に消えていった。

赤く周囲の色づいた菊……影が、私の脳裡に灼きついて離れない。

「やることをやって気分が落ちついただろ」編集長はこともなげにいつて、車の浪に入っていた。

「柏戸優勝したかな、今日辺り……」

カーラジオのNHKをひねると、千秋楽を待たずして、十四日目の今日、一敗の柏戸の優勝の声が折しも耳に入ってきた。

勝負に一瞬を賭ける男——。プレイに一瞬を賭ける男——。

都会の片隅で、雑草のようにうごめく私の身边に、又新らしい一つのデーターが加えられていった。

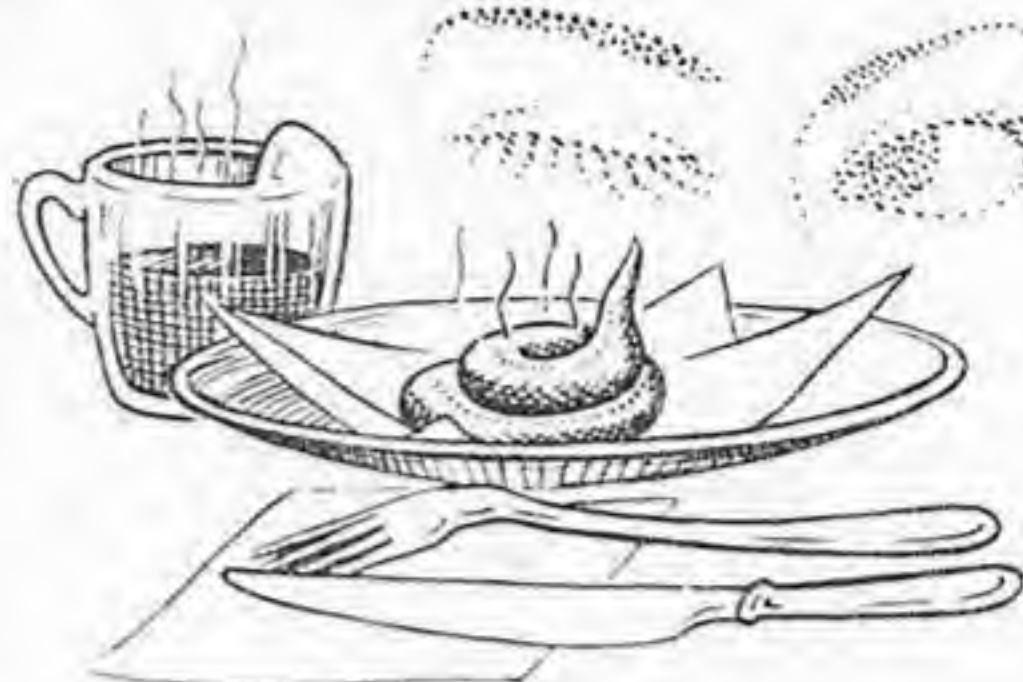
(おわり)



……美しい味・みにくい味……

地上最高の……

……たべものの話……



## マニアのノート

とやま・かずひこ

### カムバックの弁

愛するKK誌に『マニアのノート』を書かせてもらって、早や十年になる。

ふるい読者なら、とやまかずひこの名をおぼえてくださっている筈だ。

本職の、企業宣伝の顧問室をもったため、なんとも忙しく、このところ、ご無沙汰がつ

づいた。

しかし、けっして『足を洗った』わけではなく毎号送られる本誌は、熟読してきたし、ひそやかな樂園には、相変らず遊んでいる私である。

本職のほうも、石の上にも三年とはよく云ったもので、ようやくスポンサーも固定し、スタッフも充実して手をはなしても歩いてゆ

ける体制ができたので、ここに再びノートを書かせてもらうことにした。

原稿も送らないのに、毎月キチンと新刊を送ってくれる、編集部的好意にもこたえたくこれからまた、折りにふれて、レポートを送りたいと思う。よろしく。

### 妙薬口にがし

ときどきだが、むしように吞みたくなったり、喰べさせられなくなるクセが、私にはある。

月に二回か三回、そんな欲求が、からだのなかを吹きぬける。

前者は比較的たやすく、渴をいやすことはできるが、あとのほうは、仲々オイソレとはいかない。

むづかしいだけに、よけいのぞみがかまってくる、止めようがない。

一種の病気なのだろうか。

……ある女性の間では、私は、正体不明の胸ヤケに悩む作家ということになっている。

胃ガンの一歩手前の、ひどい胸やけを、やわらげるためには、それが最高の妙薬という大義名分を用意してある。

さりげないPRと、アプローチが、病人へ



の同情という形で、かえってくる。

けっしてうまいものではない。

不潔感と、汚辱にさいなまれ、せつかく入手したものの大半を、ムザムザと捨て去るのがオチなのだが、なんというか、それを手にいれることにスリルを感じるのだ。

去る四月二十九日の夕方、東京新宿のマンモス・テイルーム『C』の階下ボックスのシートの上に、そつとおかれた、ピンクのハシカチに包まれた落とし物をひろった人がある筈だ。

告白しよう。

電話で所望したそれを、本人のS・N子をもってきてくれたのだ。

『ありがとう』

きわめて事務的に、私は、そのプレゼントを受けとった。

せつかくの休日、電車に四十分もゆられて、わざわざこんなものを届けてきたS子こそご苦労さまだが、じつは、これには、ワケがある。

失業中であつたS子に、三カ月も無条件で生活を援助し、あげく、私の関係する、ある自動車販売会社の社長秘書に、すばらしい条件で就職させてやり、保証人にまでなつてや

りながら、指一本だすでなし、礼なども勿論とらない私には、ある作戦があつたからである。

その容姿、そのマスク、いかにも、私の好みにピッタリなので、ひとつ、味わつてやれと、かねがね思っていたからだ。

『お礼なんていいよ。ただ、できたら、ボクの胸やけを治すために、呉れないか。なにしろ、ガンに転移するオソレがあるんでネ』

さりげなく、そうきりだしたのは、就職決定の、二人だけのささやかな祝いの食事の席で、であつた。

彼女、はじらいながらも、けっきょく、OKしたのは、礼心と、そんなモノで病気がよくなるのなら……といったやさしい心根からと云えるだろう。

× × ×

あこがれのプレゼントは、いま私の手の中にある。

さりげなく、それを、アタッシェケースにいれると、私は席を立った。

こんなときは、サッサと、サヨナラするほうが、ご本人のためなのである。

彼女と別れて、ゆきつけの『C』のボックスでプレゼントをひらく。

正視できないものが、そこにある。

この世界で最上のたべものと信じ、なんとか、この手にとり、この口で、ぞんぶん味わいたい、とユメにまで描いたそのものを、いざ現実に手中におさめると、そこに、躊躇と不道德、背徳と不倫理を感じて、手が引つてむのは、何というムジユンであろう。

しかし、私の心のなかの、いまひとつの心が、私をケシかける。

（思いきって、手をだせよ、すばらしいぜ。サア、はやく）

（よせよせ。おまえだって、妻子ある人間ではないか。社会にできれば、先生と呼ばれる立場ではないか。そんなみにくいもの、捨ててしまえ）

こうして、二つの心がカミ合つて、はてしがない。

しかし、私は、その味には、ついに負けたのである。

何とも表現しようのない、その味。舌に、肉に、こびりついてはなれぬ、その香。

しかし、何か痛快な征服感の伴う、恍惚感をおぼえるのは、ふしぎだと思う。

思うぞんぶん、とか、腹一杯、口いっぱい



ほうばる——そんな大量は、とてもものどを通るものではない。

せいぜい、小指の先にちよっぴり！ とい  
うのが限度というべきだろう。

——私は、吾にかえり、思案のすえ、せつ  
かくのプレゼントの大部分を包み直した。

あとは処分の方法だ。

ここで、私のイタズラ心が、頭を持ちあげ  
る。

忘れ物をよそおって、シートのうえにおい  
ておこうというわけだ。

いずれ、私のあと、誰かが、このボックス  
にすわり、半ば好奇心から、その包みを開く  
かもしれぬ。

何もしらぬその人は、なかみを一目みて、  
アッと思うというだろう。

その奇怪ななかみを、どんな表情でながめ  
るだろう。罪ふかきイタズラ。

しかし、それはそれでよいのだ。

美女のそれを、白昼、第三者の眼にさらす  
ことに、妙なスリルを感じるのだ。

しかも、その美女は、私に恩義を感じ、そ  
の求めに応じて、イヤイヤ、これを採用した  
ことだろう。さぞ恥ずかしかっただろう。

ほんらいの私は、M好みなのだが、女性に

ムリヤリ採取させることには喜びを感じずるの  
だから、ふしぎである。

## 団先生に

わがKK誌の、バックボーンとまでいわれ  
る大作『花と蛇』——作者団先生にたいして  
私ごととも者が、いまさら愚見を述べるのは失  
礼とは思いますが、大作を愛するがゆえに、一言  
いわせて頂く。

作中、浣腸シーンや、強制放射シーンが、  
しばしば登場して、吾々に、息づまるような  
情感を与えてくださるのは、誠にうれしいこ  
とだが、これに加えて、そのつぎなるシーン  
をも盛りこんで頂きたいと思う。

名花、静子夫人が、肌をピンクに染めて、  
ようやくに、死ぬおもいで、一とつ、二たつ  
と、おとしたそれは、いったいどう処分され  
てゆくのだろうか。

ズベ公たちの目に、姿体をさらし、立ちす  
がたで、放射させられた、そのはてのものは  
むなしく、そのまま、捨て去られるのだろう  
か。

私は、この大作の読後に、つねに、その行  
くえが気になってならない。

わずかに、それが、遠山家に送りとどけら

れたり、バラの肥料にされるような、処分方  
法は、ときにでてくるけれど、静子夫人のそ  
れともなれば、その価値は、まことに絶大で  
これらも、使いようでは、大作に、さらに花  
をそえる筈だ。

過日、私は、ある浣腸グループで、生みだ  
されたそれらは、別の容器に移され、参加者  
中の有志に、オークションの形で、売られる  
ことを耳にした。

それも、かなりの値で取引きされるとかー  
ー。

静子夫人のそれなら、おどろくほどの高価  
で売られても不思議でなく、そのようなシー  
ンを加えることで、この大作の比重は、ます  
ます重くなるのではあるまいか。

そして、また、おのれのが、商品とし  
て、金で売られてゆき、好奇の眼にさらされ  
る恥ずかしさは、いっそう、静子夫人や、そ  
のほかのギセイ者たちの、被虐の心をかりた  
てるのではあるまいか。

かつて私は、あこがれのモノを手にいれよ  
うとして、金で自由になるプロ女性に、売っ  
てほしいとたのんだら、

『からだは売っても、そんなものを売るほど  
金に不自由はしていない』



と、ハネつけられた経験がある。

後日、じぶんの好みを、じゅうぶんに説明して、ようやく、小塊を手中におさめたことがあったが、プロ女性にしても、このような行為には、予想外の羞ずかしさ、ないしは嫌悪を感じるものようだ。

話は、少々横道に外れたが、

団先生！

静子夫人たちの排出した、おぞましいものにたいして、さらにその行くえを、追求してください。

好事家は、それを、味噌や、ウニと称して愛好し、黄金の酒として、愛飲するのです。

ズベ公たちの手で、空しく、それらの宝物が、トイレに捨て去られるのでは、あまりに勿体ないと思います。

## 週刊誌二題

『奇談マガジン』誌41年8月号は、マダム族に飼育される「ペットメン」と、新語いりで金あり、力ある女性たちが、男を飼って楽しむ風潮を紹介している。その一節、

三十二、三才になる、マンションぐらしの優雅な女性が、ペットメンをいちどに二人も、十万円ずつのこづかいで、じぶんの

モノにし、アブ性を発揮する。

『あの女性は、自分の……を、ペットに食わせる趣味がある』

とズバリ云い、その文章の前さきでは、

『いくら金を貰ってもいやだ』

とにげだすペットメンもあるほどのすさまじい残酷ぶりを、暗示している。

本文には……の部分で、漢字二字でハッキリかいてあるが、これは、いうまでもなく固体そのものにほかならない。

十万円の金で、食べることを強制する、すばらしい女性。金のためには、云いつけをきく弱い男性。どんなときに、どんなシーンで演ぜられるのか、想像すると、興味が湧いてくる。

これと同時に発売された『週刊女性』誌は、加賀まりこの日常生活を紹介して、

枕もとに、ビュッフェの画集があり、サ

ドの『閨房哲学』がほうりだしてあった。

——サドなんか読んで、おもしろい？

『ええ、道徳的でダメになるわ。あなた、読んだことあって？』

と、あきらかに、（まりこ）が、同書を読んだことを裏書きしている。

とすれば、である。

本誌の9月号で、眉美さんが紹介したサドの『閨房哲学』の一節で、夫人が、夫のすきなものを、すばらしい姿態で夫にプレゼントし、夫も、よろこんでそれをうけいれた、十二年におよぶ生活の場面も、彼女の眼にふれたといつてよい。

まえにも、まりこは、アサヒ芸能誌の対談で、対談相手から、ネクタールのことを、ちよっと、耳に入れられたと考えられる一節があったが、この、エキゾチックな、にぎりしめてみたい、カワイコちゃんが、私たちの、最高の趣味の近くにいられると、思うと、たのしくなる。

とにかく、元にもどって、十万円はいらないから『食べさせる趣味』の相手になりたいものだ。

## 洗面器

K子、青森生まれの女性。

職業は、観光バスのガイド。

きょうも、しごとでバスに乗務し、富士五湖めぐり、富士スバルラインへ二泊の旅をしてきたという。

彼女の主人も、観光バスのドライバーで、きょうは、彼女といれちがい、しごとで、



伊豆へでかけたといって、留守。

K子夫婦と、私と、保険会社につとめるO  
LのM子の四人は、マージャン仲間。

四畳半一と間の、K子のスイートホームは  
私たちのよきたまり場なのである。

『ガイドすると、疲れるわ。足がほてってた  
まらないの』

K子は、訪れた私を招きいれると、私の目  
のまえに形のいい足をムキだしに、投げだし  
て、さすっている。

『洗ったらいよいよ、ウイスキーをたらしして』  
もっともらしく私は答える。

洗面器に、ぬるま湯をとり、それへウイ  
スキーを落して、足を漬ければ、ホテリなどは  
イチコロにとれる、と私のデタラメ療法。

『そお、やってみようかしら』

ちょうど、バスの客にもらったという、ウ  
イスキーの丸ビンがバッグのなかにあるのだ  
から、話は、はやい。

『ホント、軽くなったわ!』

軽くなる筈はないのだが、ぬるま湯のおか  
げで、軽く感じたものらしい。

さて、問題は、ウイスキーをたっぷり含ん  
だ、そのお湯だ。

人妻とはいえ、まだ二十二才、細っそりと

色白の、K子の足の脂と汗と、垢をうかべた  
お湯なんて、めったにおがめるものでない。

そのお湯を捨てに立つK子を、

『チョットまって』

と押しとめる。

私は、洗面器をとりあげ、いきなり、ジュ  
ースの呑みのこりのタンブラーに残るストロ  
ーを手にとるや、かまわず洗面器につっ込ん  
で、チュウツと吸ってやった。

『あらあら、きたないわ』

呆れるK子を尻目に、私は吸って吸いまく  
る。

こんなときは、遠慮は無用なのだ。

じつは、かつて私は、K子にたのんで、呑  
ませてもらったことがある。だからK子は、  
私の好みはよく知っている。

それだけに、やりやすい。

ぬるま湯は、かすかにウイスキーの味がし  
かすかに塩の味がし、そして、かすかににご  
っていた。

『フッフ、捨てる手間が省けたわ。ぜんぶ呑  
みなさい』

K子は、イタズラっぽく笑う。

二階四畳半、トイレも台所も階下にしかな  
いこのへやで、汚れた水のよいすて場所が私

の口なのだ。そうおもうと、ゾクゾクとして  
くるのだった。

## 一匹狼の唄

『漫画サンデー』連載、梶山季之の、この作  
品は、吾々にとって、『なかみの濃い』すば  
らしい小説である。

あらゆるフェティストが登場する。

バナナと表現して、『喰べる』シーンがあ  
る。

長尾のぼるの、さしえがまたすばらしい。

高利貸の、風采のあがらない老人が、それ  
を呑み、かつ、むさぼり食らう場面が、真に  
せまる。

私は目下、この作品を読むための目的だけ  
で毎号二部ずつ、買っている。一部は読むた  
め、そして、一部は珍重保存のためだ。

このごろ、映画に作品に、スープやクリー  
ムが、しばしば登場するのは、嬉しいかぎり  
である。

(つづく)

✕

✕

✕



## (日本婦人部隊奮迅録)

海

かい

嘯

しょう

の

譜

ふ

(下)

黒淵 嬰

一

「第一次攻撃隊発進セヨ」

日本海軍の主力は第三艦隊司令長官、山口多聞の率いる空母群である。

赤城、加賀、飛竜、蒼竜、翔鶴、瑞鶴。

これを直衛する第五、第六水雷戦隊。

前衛は第八戦隊の偵察巡洋艦筑摩、利根。

支援する第三戦隊の高速戦艦比叡、霧島、

榛名、金剛。

発進した攻撃隊は天山六十六機、彗星六十機、零式艦上戦闘機三十九機。

第二艦隊は南雲忠一に率いられて右前衛。

第四艦隊 愛宕、高雄、鳥海、摩耶。

第五戦隊 那智、足柄、妙高、羽黒。

第七戦隊 熊野、鈴谷、三隈、最上。

第三航空戦隊 瑞鳳、祥鳳、竜驤。

水上機母艦兼甲標的母艦日進。第二、第四

水雷戦隊を加えて五十隻より成る。

航空戦の一助に九七式艦上攻撃機十八機、

零式艦上戦闘機十五機を送り出した。

第一艦隊は左翼前方の位置を占めている。

山本五十六の武威も此の戦列に加った。

三隻の補助空母から九七式艦上攻撃機二十

四機、九九式艦上爆撃機十八機、零式艦上戦

闘機十五機が飛び立った。鳳翔だけは対潜警

戒機のみを搭載している為攻撃に参加せず。

後方には総予備の第四艦隊が控えている。

第六戦隊 青葉、衣笠、加古、古鷹。

第十八戦隊 竜田、(天竜駆)

巡洋艦として使える第十九戦隊の敷設艦

沖島、津軽。

第二十四戦隊 愛国丸、報国丸。

第七航空戦隊 大鷹、雲鷹、沖鷹。

第七水雷戦隊と多数の掃海艇、哨戒艇等。

三隻の特設航空母艦から九七式艦上攻撃機

二十七機、零式艦上戦闘機九機が発艦した。

他に索敵機として二式艦上偵察機六機と各

種水上機七十二機が三段に分れて先行した。

× × ×

「此の艇には十一人しか乗っていない。君を



監視する人数は出せないし、監禁する部屋も無い。気の毒だが縛らせて貰うよ」

ケネディ中尉が言った。

「どうぞ御存分に」

磐城朋子は米国水兵用の大きなシャツだけを与えられていた。素直に立ち上り、背を向けると自分で手を後ろに廻した。

「すまないね。戦闘が終わったらすぐ解くよ」

若い艇長は健康な腿を見て眩しそうに眼を細めた。

「戦場は始めてなのでしょう。指が震えていますよ」

背の高い青年将校が中腰に膝をつき、立った。尽の磐城朋子を後ろ手に縛った。

「正直に言うとう矢張り恐ろしいよ」

彼女は三年来、戦場を馳駆した古強者だが人の好い中尉には逆らう事が出来なかった。

「お上手とは言えませんか。ほら此の通り」縛った縄は手首の間から脱けて落ちた。

ケネディ中尉は頭を掻きながら苦笑した。

× × ×

米国式空母は艦体不相応に広大な飛行甲板を有する。常備全機の同時発艦も出来た。

アヴェンジャー雷撃機二百五十二機。

ヘルダイバー急降下爆撃機百九十八機。

ドントレス偵察爆撃機百九十八機。

ワイルドキャット戦闘機百五十機。

大空軍が十三隻の空母から飛翔した。

特設空母群は満を持して未だ放たず。

× × ×

「第二次攻撃隊発進セヨ」

閉鎖格納庫式の日本空母は攻撃隊を二派に分ける必要があった。

第三艦隊から天山七十二機、彗星六十六機零式艦上戦闘機三十九機が発進した。

第二艦隊は九七式艦上攻撃機、零式艦上戦闘機各十五機。零戦の一部は爆装している。

第一艦隊からは九七艦攻二十一機、九九艦爆十八機、零戦十五機が発艦。

第四艦隊も九七艦攻十八機、零戦九機。

以上を先導する三座水上偵察機二十七機。上空を直衛する零式艦上戦闘機は第一艦隊

十五機、第二艦隊二十一機、第三艦隊三十三機、第四艦隊十五機、計八十四機。

× × ×

七時五十分。

第二次攻撃隊が第一、第二艦隊の中間に集結して東方に向う時、山本五十六は旗艦武蔵の橋頭高く四彩の信号旗を掲げた。

「皇国ノ興隆此ノ一戦ニ在リ。各員一層奮励

努力セヨ」

× × ×

八時五分。

米国機動部隊が全航空兵力を発進させた直後に一式陸上攻撃機の一群が襲来した。数百門の五吋高角砲が弾幕を展張する。

米海軍は未だヘルキャット戦闘機を実用化していなかった。ワイルドキャットは運動性においても火力においても零式艦上戦闘機ゼロファイターの敵ではなく、東になって撃墜された。

併し日本軍の一式陸上攻撃機はそれ以上に脆かった。インテグラル油槽タンクは全く無防禦。十二・七耗一発の命中で容易に火を吐いた。それでも操縦士は燃える機体を曳き擦るようにして射点へと殺到して行く。

サラトガに魚雷一本命中、戦列より落伍。給油艦ネオシヨネオシヨは積載燃料引火。

駆逐艦シムスシムスは積載燃料引火。シヨウは大破炎上。第一航空艦隊の雷撃機は殆んど全滅した。

× × ×

依操子は激しい震動に揺り起された。彼女を覚醒させたものは至近弾の爆発だったらしい。舷側の壁に穴が開いている。

手足を縛った縄は少しも緩んでいない。下になっていた腕は痺れて千切れそうに痛む。



未だ血が通っているのだろうか。

床下で十八万馬力の全力回転が咆哮した。

三万三千噸の鋼鉄が全身で怒号する。

急降下特有の唸り。高角砲の喧騒。

舷窓の外で彗星が一機急旋回した。翼端の日章が眼に痛い程の鮮紅色を見せて翻える。

「九七艦攻六機。右舷二千米。砲火急げ」

叫ぶ拡声器。レキシントンの巨体が大きく廻り始めた。重々しい回避運動。

湧き上る歓声は日本機の墜落か。

又も至近弾。舷窓を海水が洗う。弾片で開けられた破孔から水が噴き込んだ。

倭操子は堪らなくなって立ち上った。不自由な姿勢で舷窓に寄り添う。いや、嘔みつく  
と形容する方が妥当だろう。

火の柱。黒煙の渦。ヨークタウンだ。

ホーネットの飛行甲板に爆煙が沸き上る。

プリンスストンが眼前で爆発した。

エセックスから魚雷命中の水柱が奔騰。

駆逐艦ポーターは赤腹を見せて転覆した。

無数の飛行機が火の玉と化して降り注ぐ。

× × ×

九時十二分。

米海軍の八百機が天を掩って押し寄せた。

零式艦上戦闘機が敢然と激撃。

世界無比の運動性。二十耗砲装備の火力。

支那事変以来の経験を積んだ歴戦塔乗員。

来襲機は枯葉の如くに撃墜された。恐る可き零戦の偉力。

併し十倍の敵を阻止する事は出来ない。空母戦を決するものは在空機の撃墜ではなく、

飛行甲板に対する先制の一弾である。

祥鳳沈没。続いて子ノ日沈没。

加賀が火災を起した。蒼竜も炎上。

翔鶴、飛鷹、瑞鳳何れも被弾。

赤城の艦橋破壊。名提督、山口中将戦死。

× × ×

「敵空母撃沈の必要は無い。緒戦は飛行甲板を破壊すれば足りる。無傷の空母を狙え」

武蔵の作戦室で樋端航空参謀が言った。

十時過ぎ。日本軍の第二次攻撃隊が突入。

「ボンホムリチャート戦闘力喪失ノ模様」

触接機から電報が入る。

「突撃体形作レ」

「全軍突撃セヨ」

指揮官機の無電が傍受される。

「エンタープライズ命中。効果甚大」

これは列機の報告。指揮官機応答無し。

「インデペンデンス大火災。ヨークタウン沈没中。ホーネットに一機突入自爆」

斯く報告した偵察機も亦、連絡を断った。

× × ×

「着艦セヨ」

零式艦上戦闘機は堂々と凱旋した。併し攻撃機と爆撃機の残影寥々。着艦と同時に殞れる操縦者あり、着水して救助される者あり。

× × ×

午後二時。

両軍共、航空兵力を再建して最後の突撃。

併し消耗と疲労を重ね、決定打を欠く。

× × ×

加賀はノーチラスの雷撃で最期を遂げた。

竜驤も沈没しつつある。

飛竜炎上。直衛駆逐艦照月も沈没。

瑞鶴、隼鷹、竜鳳が残って奮戦中。

× × ×

ワスプが爆発した。艦尾から急速に沈没。

ベローウッドの中央部に爆弾命中。火災。

イントレピッドには魚雷命中。傾斜した。

ホーネットは又も一機突入。機関停止。

台風一過。海面に漂流する無数の破片。

「あと二隻。もう少しで日本の勝利となる」

高い舷窓に伸び上って外を眺める倭操子。

「レンジャーは無勢力の旧式艦だけどレキシントンは強敵。早く撃沈して下さい」



不自由な両手の拳を背で固く握り、唇を噛み、毗を決して待つは火か水か。

辞せず、截断の風。レキシントンが沈む時こそ彼女の生命も亦、失われる運命なのだ。

× × ×

「航空決戦は刺し違えに終ったようだ。今夜の水雷戦と明日の砲戦にすべてを賭けよう」

山本五十六が宇垣纏に向かって言った。

最後の航空攻撃隊は帰還しつつあり、日没は近い。残る正規空母は端鶴一隻。隼鷹、竜鳳、鳳翔、大鷹、雲鷹、沖鷹は搭載機少く、且つ低速の為に第一線戦力たり得ない。

× × ×

「機動部隊空母は相討ちになった。併し此方には特設空母の予備兵力が無傷で待機中だ」

キムメル大將がクック大佐に言った。

十四隻の特設空母は雷撃機六機と戦闘機二十四機宛を搭載しているが、速力十八節で機動運用に適さず、搭載雷撃機もデヴァステーターで戦闘行動半径僅か百七十五哩。陸戦協力の任務もあってエニウエタツク島附近に留っていた。併し正規空母が共倒れになったら三百機の戦闘機が物を言う。二十年来米海軍が理想とした制空権下の艦砲決戦が此の傘の下で可能となる。

× × ×

「中高度ノ少数機。低速デ西方ヨリ接近中」

武蔵の対空レーダーが飛行機を捕捉した。

「五機。複翼固定脚。九六艦攻らしいぞ」

室井参謀が機種を識別した。

「婦人部隊の航空隊だ。攻撃に行くらしい」

榎端参謀は寧ろ呆れ顔で言った。

九六式艦上攻撃機は鳳翔にも積んである。

但し低速を利用した対潜哨戒機だった。此の旧式機で何を為さんとしているのか。

「針路誘導の水偵を出せ。隼鷹と竜鳳には全

戦闘機の発進用意を信号しろ」

山本五十六が二人の航空参謀に命令した。

「娘達は九六艦攻の性能を承知で発進したのだ。生還は期していないだろう。敵の上空迄は送り届けてやれ」

× × ×

神酒慶子は左右の列機を見た。

カタパルト発進に耐え得るよう、胴体下面を強化し、二百五十珎徹甲弾に減装した九六式艦上攻撃機が五機。緊縮梯陣で飛行中。

水平飛行技術を習得したばかりの十五名。

緊張に硬直した顔が風防の中に見える。

「此の旧式機。此の練度。一時間後の確実な死。併し無駄死だけはしたくない」

× × ×

「遅いな。牛と馬の二頭立てだ」

零式戦闘機の隊長が苦笑した。俊足零戦が

十八機。電光形に蛇行しつつ直衛している。

「併し聯合艦隊唯一の攻撃力だ。必ず守ってやる。山猫野郎奴。来るなら来い。淑女には

爪一本触れさせないぞ」

× × ×

レキシントン艦内に空襲警報が鳴り響く。

「慶子だ。早く来て」

俵操子が思わず叫ぶ。見慣れた複葉機。併しそれは救助者ではない。殺しに来たのだ。

× × ×

無敵零戦がワイルドキャットを阻止した。

九六式艦上攻撃機は爆撃針路に入る。

「あとは任せた。怒張るな。駆逐艦でいいから早く投弾して来い。帰りも守ってやるぞ」

× × ×

「只今ト連送を受信しました」

室井参謀が叫んだ。「全軍攻撃セヨ」だ。

「五機の全軍か」

正に日本海軍が現時点で所有する全戦力。

「九六艦攻、緩降下開始」

誘導機の三座水偵から報告が入る。

「緩降下だ？ 自殺同然ではないか」



宇垣参謀長が驚いて問い返した。

「九六艦攻は急降下の出来る機体ではない」  
山本長官は東方の空を見凝めている。

× × ×

米艦隊機動部隊の直衛艦は大部分健在。

数百隻がレキシントンを圍繞し、鉄火の旋風を噴き上げた。それを縫って迫る五機。

艦橋に立って沈着冷静に観察する一士官。

「水平爆撃ニ非ズ。急降下ニ非ズ。雷撃ニモ非ズ。中高度デ迫り、緩降下ヲ以テ突撃ス。驚ク可キ大胆。本日来襲セル日本機中ノ最勇者。我が戦闘機勢力減少ノ機ニ乗ジ薄暮攻撃ヲ策ス。複翼機ノ安定性ヲ利用セル攻撃法。スキップ・ボンピング。反跳爆撃戦法ヲ既ニ実用化スルモノノ如シ」  
リンドン・ジョンソン少佐だった。

× × ×

直衛任務を終った零戦が上空を旋回する。

「あの娘達、馬鹿ではないのか。それとも本当に恐怖心を持たないのか」

機影は既に四機しか見えない。

一機は煙を曳き始めた。

眼の前で一機が花火の如く飛散した。

× × ×

近接感応信管の正確な炸裂。

弾片は機体を貫き、爆風は翼を煽る。

誰か言う、大胆不敵と。生死を超越せる若

き女性十五名。眼球は固定し、四肢は硬直。火の如き吐息。満身の冷汗。無意味な叫喚。

それでも九六式艦上攻撃機は飛翔する。

オーバーブースト。八百六十馬力全回転。

刻々拡大する平甲板型艦。

× × ×

上空で手に汗を握る水偵塔乗員。

「早く投弾しないか。眼の下に駆逐艦だぞ。それ以上無理をするな。今落とせ。巡洋艦に届くぞ。未だ不足だと言うのか」

又一機、海面に激突した。

続いて一機。翼が裂けて飛んだ。

× × ×

レキシントンの艦上に歓声の渦が沸いた。

最後の機が遂に火を発したのだ。

併し墜落する如く見えて落ちず、

辛くも機首を上げ、五百米を飛び続けて、

レキシントンの飛行甲板後端に、恰も着艦するような姿勢で、一塊の火の玉と化した機体を叩きつけた。

固定脚が折れた。機体は大きく反跳。

二度。三度。そして微塵に砕けた。

寸断された翼が、粉碎された機体が、乗員

三名の肉体が、二百七十米の甲板一面に散乱

した。ガソリンの霧は一時に引火。

中部リフトから転げ込んだ二百五十匁爆弾は格納庫甲板上で裏発。灼熱の火球が走る。

奔騰する黒煙柱は天に冲して二百米。

× × ×

俵操子が泣いていた。扉の隙間から侵入する煙に咽せているのではない。

「慶子。よくやってくれました」

濡れた顔を掩う事も出来ない。両手は後ろに縛られていた。

誘爆。裏音。鳴動。

× × ×

三万三千噸が身震いしつつ絶叫している。

「レキシントン炎上」

水偵の報告に武蔵の司令部が躍り上った。然し山本五十六は独り動かず、

「通信は、それだけか」

快哉は鎮った。果して

「九六艦攻、全機還ラズ」

× × ×

沈黙。そして鳴咽。

嵐気を含んで毒々しいばかりに赤い雲が飛ぶ。台風の前兆か。暫し、

「夜戦決行だ。女達に遅れるな」

山本五十六が厳然と言った。



× × ×  
午後七時十五分。

旗艦武蔵の電波が愛宕を呼んだ。

「第二艦隊司令長官夜戦ノ統一指揮ヲ執レ」

× × ×

南雲忠一が夜戦兵力を掌握した。

第二艦隊の全力。

第三戦隊の高速戦艦と第五水雷戦隊。

第三水雷戦隊。

第六戦隊の巡洋艦四隻と第七水雷戦隊。

若しも、昭和十六年末の危機に日米開戦となっていたら、水雷戦の名手南雲が序列に従って空母集団を指揮する筈だった。これでは槍の名人に弓を持たせたようなものだ。自信は勇気を生む。適所を得た南雲は勇躍して闇中に邁進した。

「各水雷戦隊ハ前進シテ敵ヲ襲撃セヨ」

× × ×

名提督、山本は判断を誤らなかつた。

主敵は機動部隊。併し動いている。夜間の

捕捉は困難。

エニウエタツク周辺の船団と護衛艦隊は動かない。否、二箇師団を残しては動けない。

「エニウエタツクの敵を衝け。必ず機動部隊が救援に来る。各個撃破だ」

繊細な神経を持つ山本は、孤島に苦戦中の婦人部隊残兵を早く救出したい焦燥感に駆られていた。

× × ×

「上陸船団が危い。エニウエタツク島西方に阻止線を展開しろ」

ニミッツ中將は先ず巡洋艦隊を放った。

続いて自らも戦艦群を率いて急行した。

損傷の空母群は駆逐艦と共に残された。

× × ×

P・T・ボート十四隻が遮蔽線を作った。

P・T・一〇九号もその中の一隻だった。

「戦闘中は解く事が出来ないが悪く思わないでくれよ」

ケネディ中尉が言った。

「御心配は要りません。解きたくなったら自分で解きますから」

磐城朋子は艶然と微笑した。後ろ手に縛られ、足首も縛られていながら、舷側の壁に背を凭れさせ、動かずにじっと坐っている。

天は既に墨の如く、星は見えず、風も立って小さなP・T・ボートは激しく揺れ動く。

× × ×

五藤存知少将揮下の第六戦隊が接敵した。

敵はノルマン・スコット少将の率いる第一

第二巡洋戦隊、重巡洋艦十隻。

此方は重巡四隻、軽巡一隻、駆逐艦八隻。

優秀なリーダーを持つ米軍が先制砲撃を開

始した。青葉炎上。五藤少将戦死。

日本艦隊が撃ち返した。

旗艦ウイチタ大破。スコット少将戦死。

古鷹の塔載魚雷誘爆。艦尾より沈没。

タンカルーサが被弾損傷した。

七水戦が米戦列後方から突撃を敢行。

旗艦由良の探照燈が敵艦を照射した。

「此の敵を撃て」

駆逐艦が左右に分れ、中心の一点に殺到。

敵弾は火の奔流となって由良を包んだ。

由良沈没。陸月転覆。如月爆発。

併し九三式魚雷は八方から敵を刺した。夷

沈の火柱が昇天の竜の如く噴き上る。

アストリア沈没。

両軍共に疲労して緩慢な同航戦に入った。

衣笠と加古が酸素魚雷各十二本を発射した。

航跡は稀薄。米海軍は三万米の射程を有する

魚雷を夢想もしていなかった。

クインシー炎上。艦首粉碎。沈み始めた。

ヴィンセンス爆発。真二つに裂けた。

× × ×

第三戦隊の高速戦艦が十四吋砲八門宛を振



り上げて参戦した。戦艦を以て水雷戦隊の進路を啓開する。日本海軍の大英断だ。

カラハン少将の第四巡洋戦隊を掃蕩した。旗艦サンフランシスコ大破。司令官戦死。ヒューストンが横転した。シカゴも爆沈。ポートランドは戦闘力喪失。

第三水雷戦隊が突破口に躍り込んだ。

× × ×

「戦争が終ったらアメリカに來ないか」

無邪気な青年艇長が言った。

「僕は下院に立候補する。大統領になるぞ」

磐城朋子は微笑しただけで何も答えず。縛られた唇、姿勢を正して話に耳を傾ける。

「僕の家はマサチューセッツで資産家と言われている。ブルックラインは良い町だ」

此の瞬間、巨大な壁が二人の間を遮った。

そう見えた。天地急旋廻。喪音と共に艇体が裂け、海水は奔入する。駆逐艦天霧が三十節でP・T・一〇九号を乗り割ったのだ。暗中の無灯火航行。双方共、衝突予定進路に気附かなかった。

× × ×

「第三水雷戦隊。全軍突撃セヨ」

神通が十四糎砲を急射した。闇中に浮かぶ竜艦と三脚艦。米戦艦の縦陣は全長十五軒。

その全長から火線が集束した。炉中の熔鉄の如く炎上する神通。業火を背負って立つ不動明王も斯くや。

火光の隠から十四隻の駆逐艦が突進した。雷速四十九節。九三式六十一糎魚雷百十二本の織り成す開進射線網。

夜眼にも白き大水柱が戦艦ニューメキシコの舷側から噴き上った。

× × ×

ケネディ中尉は泳ぎながら部下を集めた。

海面で燃えているガソリンは、どうやら艇体には延焼しないようだ。両断された艇体は未だ沈まずに漂流している。

「現在員九名か」

二人は遂に発見されなかった。

「もう一人居る筈だ。日本の婦人伍長が」

手足を縛られた磐城朋子は舳の方に居た。その艇首部が彼方で正に沈もうとしている。

× × ×

第二水雷戦隊の一部が闇中から無照射砲撃を受けた。ライト少将の第三巡洋戦隊だ。

不利な態勢から直ちに反撃。魚雷一閃。

ペンサコラ一本命中。機関室浸水。停止。

ソルトレークシンチー一本命中。艦首切断。

ニューオールリーンズ二本命中。大火災。

ノーザムプトン二本命中。転覆沈没。此の交戦で日本艦隊は高波一隻を失った。

× × ×

磐城朋子が水の中で跪いていた。

「口惜しい。手足が自由なら泳げるのに」

縛られた縄を解く余裕は無かった。水に濡れた縄は緩む見込みもない。

切断された舳部は垂直に立って漂流している。浸水は次第に増加し空気は濁って來た。

揺れる度に溺れかける。何時の間に負傷したのか、大腿部の出血が激しい。

意識が薄れだした。呼吸が苦しい。

遂に頭が水中に没して見えなくなった。

× × ×

米艦隊の重巡群は既に潰乱した。日本艦隊の第四、第五戦隊は一鼓して船団泊地を襲撃した。八吋砲と九三式魚雷の急斉射。

巨船の炎上誘爆忽ち数十隻。

× × ×

エニウエタツク島に続く無人の珊瑚礁脈。

「あなたが大統領になったら……」

磐城朋子が僅かに唇を動かした。出血は既に致死量を越えている。

「太平洋を、その名の通り平和な通商路に」

微笑を残して一切の動きが止った。



蜷の如き額は飽く迄も白く、

「許してくれ。君の手足を自由にしておいた  
らこんな事にはならなかったのに」

ケネディ中尉は骸を揺すり続ける。

「駄目だ。もう還らない」

ヒューマニストの号泣は珊瑚礁の潮騒に掻  
き消された。

× × ×

五月二十八日の朝が来た。併し太陽は昇ら  
ない。重い雲が雨を孕んで飛び、風は強く、  
波濤次第に高まり、暴風の襲来を思わせる。

「各艦戦闘序列ニ占位セヨ」

武蔵が信号を掲げた。

山本五十六の正確な計算は黎明と共に彼我  
の戦艦を砲戦距離に会合せしめた。

「機動部隊の快速戦艦が来援するには四十分  
を要する。大和型の斉射は四十秒。命中率五  
%、出弾率八十%、初弾命中に五分。命中九  
発で戦闘力消滅するから武蔵、大和だけで四  
隻撃破が可能だ」

電子計算機の如き頭脳が数値を算出した。

× × ×

戦艦群の主砲戦。

航空万能時代の昭和十八年に斯かる形式の  
決戦が行われると誰が想像したか。

古典的な、美しき闘争が其処に在る。

米国戦艦の電橋は鎖鎖か、面煩か。

四十八星旗を掲げた十字軍騎士が波の大平

原に並んでいた。

日本戦艦の重層櫓橋は五枚鏢の兜。

黒皮緘の大鎧。旭日の指物。奥州悍馬を駆  
った鎌倉武者の勢揃い。

× × ×

十八吋巨砲三聯装の三砲塔。

八股大蛇かレルネアの九頭蛇にも似た四十

五口径砲身が虚空を睨んでいる。

仰角四十度。射距離は三万六千米。

竜蛇の火舌か。閃光と共に裏く砲声は、戦

う為に生れ来た武夫の雄叫び。

太平洋全岸に響けとばかりに鳴り亘る。

「明治三十八年、対馬の合戦に、其の名も高  
き三笠が十八代の後胤、日本の戦艦武蔵。二

千六百三年の国運を担う旗艦として菊花旭日  
を戴き内南洋を固めたり。前陣に見ゆる星条

旗はウエスト・ヴァージニア殿に非ずや。待

つ事久し二十年。呉工廠の鍛えし十八吋徳甲  
弾を用意仕る。ベスレヘム製装甲の強度や如

何。いざ尋常に勝負勝負」

× × ×

南雲忠一は十二隻の重巡群を率いて特設空

母集団に砲戦を挑んだ。これを阻止せんとす

る米巡洋艦の一隊と急激な近距離戦を展開。

インディアナポリス魚雷命中。転覆。

ミネアポリスは砲撃で炎上。沈没中。

大型軽巡ヘレナは爆発して二つに割れた。

日本側は三隈沈没、最上大破。

第四、第五戦隊は特設空母に迫る。

ブロックアイランド沈没。数隻火災。

× × ×

「第九戦隊攻撃開始」

山本は重雷装巡洋艦に襲撃を命じた。

我が戦艦列の背後に位置する北上、大井。

九三式六十一糎遠達酸素魚雷は四十本。

第二深度装置を以て味方戦艦の艦底下を深

く潜り、彼我の中間で戦艦調定深度に浮上。

射程三万米。雷速四十二節。

空気魚雷の如き白色の航跡は見せず、

五百疋の炸薬を抱いて水中の伏兵は迫る。

× × ×

「特別攻撃隊発進セヨ」

瑞穂、日進は米戦艦の主砲射程外に先行。

水上機母艦とは名ばかり。実は日本海軍の

軍機兵器甲標的の母艦。(他に同種艦として

千歳、千代田が有るが航空母艦に改装中)

二十節で航走し、千米毎に艦尾開口部から



特殊潜航艇を発進した。四十五種魚雷二本を構えて水中速力十九節。二十四隻の決死隊。

× × ×

二十年間、太平洋を睥睨し続けた<sup>ビッグファイブ</sup>五大戦艦は半時間内に鋼鉄屑と化した。

ウエスト・ヴァージニアに十八吋砲弾十発命中。沈没しつつある。

メリーランド大破。戦列より落伍。

コロラドも損傷したが辛くも戦列に留る。

戦艦隊旗艦としてパイ中將の将旗を掲げるカリフォルニアは水中部を貫通した十八吋砲が機関室で裏発した為に安定を失い転覆中。

テネシーは長門の砲火で火災を起した。

伊勢の一弾は水中からアリゾナの前部弾薬庫に突入。五百米の火柱を噴き上げて裏沈。

キムメル大將の総旗艦ペンシルバニアは後部三脚檣が落ちた。

オクラホマは魚雷三本に刺されて沈没中。

ネヴァダも魚雷を受けて速力低下。

日本艦隊も無傷ではない。

殊に後半部は苦戦。

日向の艦尾砲塔天蓋が爆砕された。危く弾薬庫誘爆と見えたが注水に成功して鎮火。

発射速度の遅い山城、扶桑はミシシッピー級の五十口径砲に撃たれて危険。落伍した山

城は駆逐艦三十隻に包囲されて被雷沈没。

第三戦隊が三十節で米戦列の後尾に噛みついた。旗艦比叡はユタを追い越し、ワイオミングと並び、アーカンソウに迫る。

十四吋砲が十二吋砲を壓倒した。

ユタは弾薬庫誘爆。見えなくなった。

ワイオミングは艦尾水中に没して沈没中。

日本側は比叡が落伍して沈み始めた。

甲標的は落伍艦ネヴァダに迫る。

× × ×

俵操子が眼を醒ました。顔面に水を浴びせられたような気がする。見ると舷窓の硝子が砕け、水沫が吹き込んでいた。水は塩辛くない。雨が降っているようだ。

縛られた状態は少しも変わっていない。自分の手足が何処に有るのか解らない。雨水を口に受けて漸く意識が鮮明になった。

舷窓の外を大きな壁が塞いでいる。これは接舷している軽巡洋艦サヴァンナだった。

ハルゼーの司令部や査察使ジョンソン少佐等が移乗している。

レキシントン自体は水線下に被害無く、機関は全力発揮可能。中部リフトの填塞が終れば航空母艦としての機能も恢復出来そう。

俵操子は窓硝子の破片を見ていた。

「あれを握れたら縄が切れるかもしれない」併し指は自分の意志通りに動かない。床を転って硝子の破片に近寄る事すら出来そうになかった。

風が強くなったらしい。レキシントンの巨体が大きく揺れ始めた。

× × ×

十二隻の日本戦艦が十六隻の米国戦艦を壓迫していた。武蔵、大和の十八吋砲、九三式魚雷、甲標的の奇正三拍子が偉功を奏した。上空では残り少い彼我戦艦機が乱闘中。

南雲忠一の第四、第五戦隊が現れた。非戦側から米戦列を挟撃し、主砲戦の間隙に乗じて副砲射程外から八吋砲弾を急射した。更に魚雷発射。数隻の戦艦に命中。

「第二、第四水雷戦隊突撃セヨ」

正に殲滅の好機と見えたが、

「高速戦艦八隻接近中。北五万米」

瑞穂の電報。

「分火戦法」

山本五十六は直ちに対策を採った。武蔵の後部砲塔が旋回して試射を送る。他の諸砲は従来の目標に対する連打を止めない。

五分後。敵嚮導艦アイオワを夾叉。射距離算出成るや第一戦隊目標転換。



新鋭の敵も七十二門の十六吋砲で応射。

アイオワとニュージャーシーの五十口径十六吋砲弾十余発が武蔵に炸裂した。

武蔵の十八吋砲弾はアイオワの前部砲塔二基を破壊。

サウスダコタが炎上、落伍した。

陸奥の第四砲塔天蓋を一発の十六吋砲弾が貫通。噴火山の如き火柱を立てて艦影消滅。

第三戦隊が夾撃した。ノースカロライナの上部構造物大破。第三砲塔旋回不能。

霧島は六弾を受けて停止。転覆に近い。

彼方では日本の水雷戦隊が川内以下を失いつつも米戦艦多数に魚雷を命中させている。

「第一水雷戦隊突撃セヨ」

山本は最後の予備隊を放った。戦艦と戦艦の間から駆逐艦十二隻の縦隊が現れ、忽ち横陣に展開し、三十五節で蹶進する。鮮やかな運動。神得流車懸りの陣、海上版。

米戦艦は一斉に外方転舵。避雷運動開始。

正に迫撃の好機。併し惜しむ可し、旗艦武蔵は損傷して速力低下。先頭に立つを得ない。

「全軍、突撃セヨ」

山本五十六は自らの指揮権を解いた。

主力艦隊の全軍突撃。それは日本海軍独得の戦術である。総指揮官が統制を解き、各戦

隊司令官と各艦長が自らの判断で突撃する。

「全軍突撃セヨ」

電波の奏する突撃譜。波間の白兵戦。

戦艦も駆逐艦も飛行機も、固有の全速力、全火力を発揮して疾駆、又連射。

折から吹き荒れる風速二十米。彼我の艦艇一時に交錯し、勇躍追撃するあり、損傷後退するあり、粉々たる乱戦模様をエニウエタツク島西方水域一帯に描き出していた。

× × ×

文字通りの全軍突撃。

旗艦の周囲には一隻の駆逐艦すら留めていない。

損傷せる武蔵は大橋折れ、煙突砕け、備砲半減。傾斜十度。死傷数百。浸水五千噸。

それでも、

「全軍突撃セヨ」

弱い電波が蹶進撃の続行を命じている。

鮮血に染った主将が陣太刀を杖に立ち上り

「進め進め」と叫ぶ姿に似て壮絶の極。

山本提督は戦艦艦橋に黙然と立つ。

此の時、西方に一団の煤煙が現れた。艦影は次第に大きくなった。

× × ×

沛然たる豪雨。疾駆する波濤。風の唸り。

太平洋の名に背き、闘争を繰返す日米両艦隊の上に落ち掛った天の怒りか。

天地暗黒。飛ぶ雨脚のみ白く、閃々たる砲火次第に闇に消え、大自然の発する風と波の叫喚。砲声爆音これに和し、雄大凄絶なる四重奏を海と空一杯に鳴り響かす。

× × ×

「我レ鹿島。聯合艦隊司令部本艦ニ移乗。只今ヨリ指揮ヲ執ル。全軍突撃ヲ継続セヨ」

快音を発して全力回転する、十五万馬力タービン。三十五節で蹶速する数万噸巨艦群。

その後方を、公試排水量一万六千五百噸、明治三十九年ヴィッカース社建造に成る旧式戦艦鹿島が、往復動機関も喧しく、十七節の全速力(?)で肅々と前進していた。

滑稽と言う勿れ。今や聯合艦隊の総旗艦。

橋頭高く懸える大将旗は司令権の所在を誇らかに告げている。

艦橋に山本五十六と並んで立つ稔田少佐。

羅針儀を擁して楯法子。

距離を測定する杜鵑花秋子。

十二吋砲の間歇的射撃。

弾薬通路は焦熱地獄。担送する重砲弾は婦人水兵の膚を裂き、血は汗に混って流れる。

カージフ無煙炭を焚くべく設計された石炭



専焼缶に効率の悪い撫順炭を焚き、二本煙突からは煤煙濛々。

女性の誇りを炭塵の底に埋め、満身の汗の上に石炭微粉を浴びつつ焚火する女汽缶兵。

「エニウエタツク島へ」

千二百の意志が一つになって燃え上る。

× × ×

海神は怒号していた。

紫青の電光、十字を描いて天空に裂け、時に火柱となって山成す怒濤の顛頂に砕けた。

既に、在空の両軍飛行機は風神最初の一呼吸で豪雨の一滴と化し去った。

小艦艇は転覆。損傷艦は浸水。

風に押されてか、戦場は漸次東方へと移動して行く。併し決して米艦隊が退却しているのではない。

× × ×

「前方五千米。大型艦」

杜鵑花秋子が叫ぶ。雨の幕を破って幽霊船の如く浮き上った艦影。

「敵か、味方か」

稔田少佐が双眼鏡で観察する。

「レキシントンだ」

海の男、山本は即時に識別した。

十二吋砲二門が撃ち出した。

敵は航空母艦と雖も八吋砲八門を持つ。距離は五千米。高角砲も射程内。洋上一騎討。

飛散するスプリンター。交錯する火線。

楯法子が弾片に胸部を貫通された。

「レキシントンは」

稔田少佐が抱き起す。両手一杯の鮮血。

「見ろ。燃えだしたぞ」

一個の艦長となった山本五十六が厳然と指揮を執る。

「距離三千五百。砲側照準。連続射撃」

× × ×

俵操子は爆風で壁に叩きつけられた。

舷側に開いた径三十糎の破孔。十二吋砲弾は無装甲の左舷を貫通し、艦内深くで炸裂したらしい。

「砲弾だ。日本の大型艦が近くに居る」

縛られた俵、膝行して破孔から外を見た。

「鹿島が……」

二橋二煙突。正しく婦人部隊の乗艦。縛られていなければ手を振って招きたい。

「早く撃って。レキシントンを沈めて」

十二吋砲弾が又も中央部を貫通。

レキシントンの八吋砲が飛行甲板越しに撃ち下した。鹿島に火の手が上る。大橋が落ち

煙突が砕けた。俵操子が身悶えしている。

× × ×

山本五十六の大將旗が落ちた。それを掴んで桁に結びつけようとした杜鵑花秋子は橋と共に海中へ吹き飛ばされた。

「十二吋砲弾欠乏」

稔田少佐は山本提督の顔を見る。

「本艦には衝角が有る。突撃せよ」

衝角戦術。それは十八世紀の海軍戦術だ。

一九〇五年建造なればこそ可能な攻撃法だ。

「機銃戦用意」

距離一千米。火線が散る。

「白兵戦用意」

本来、陸戦向きに訓練されている婦人水兵は手近の接戦武器を把って構える。

「衝突用意」

総員が緩衝物に身体を預けた。

× × ×

レキシントン艦上の狂燥。怒号。絶叫。

舵器を損傷した巨艦は転回不能。

三百米。二百米。迫り来る鹿島の艦首。

正しく一万六千五百噸の魚雷。

後ろ手に縛られていながら独り泰然と待つ

俵操子。舳は彼女の船倉に向っている。

遂に、鋼板を引裂く大音響。

俵操子の「万歳」を鹿島が押し潰した。



× × ×

五月二十九日の夜。

台風一過。硝煙も霽れて星が美しい。

残骸と化した鹿島はエニウエタツク環礁に  
擱坐している。艦体は焼け爛れ、婦人兵の死  
屍は艦を中心とする陸上一帯に散乱。

「エニウエタツクを守り抜いたのは婦人部隊  
の魂だ。人為では説明出来ない」

稔田少佐が言った。二箇師団の米軍は事実  
上攻略していた此の島を自ら放棄してクエゼ  
リン島に退却したのだ。

「本官の任務は終わった。残った人数が如何に

## 懸賞〔告白、手記、体験〕原稿募集

### ★賞 金★

一、第一席	一篇につき	五万円
一、第二席	一篇につき	三万円
一、第三席	一篇につき	一万円
一、第四席	一篇につき	五千元
一、第五席	一篇につき	三千元

### ★規 定★

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここ  
に新しく、〔告白、手記、体験〕の原稿を  
広く読者の間から懸賞募集いたします。  
一、従来、〔告白、手記、体験記〕の分野  
で文獻味豊かな数々の告白特集号を刊行し  
て、輝かしい金字塔をうち樹てた本誌が、

少くともエニウエタツク島で米艦隊の進撃は  
阻止されたのだ」

重傷の山本五十六は鹿島の焼け残った上甲  
板に臥っている。これを見守る者は稔田少佐  
と婦人兵三十余名。その一部はエニウエタツ  
ク島を守り抜いた元第三中隊だった。

「米艦隊の喪失は少くとも戦艦七隻、航空母  
艦六隻。当面の決戦兵力は我方が優勢だ。此  
の機を逸せず媾和を計る事。占領地を全面返  
還し、石油輸入の保障と交換する」

呼吸が荒くなった。併し頭脳は依然健在。

「基地航空兵力を充実せよ。大鳳、天城、雲

更に充実したあらゆる傾向の告白を以て誌  
面を飾るべく今回の企画をしました。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る  
に足る手記、どうしても誌上に発表し活字  
として残しておきたいと願う熱意のこもつ  
た原稿を求めます。

一、文章の巧みさや、表現や描写のうまさ  
は勿論大切ですが、なんといいても、實際  
に体験された事実の裏付けのある告白であ  
るといふことが肝腎です。従って必ず自作  
の未発表のものに限りません。

一、枚数は枚数に制限はつきませんが、原稿用  
紙は三十枚位から百枚位までが適当です。用  
紙は必ず原稿用紙をご使用願います。

一、掲載は毎月十日。入選作品は翌月号に  
掲載いたします。  
一、応募原稿の送り先は、大阪市住吉局私  
書箱第四十一号「出版株式会社懸賞告白原  
稿係宛」と他の原稿と区別するため、「懸賞  
告白」と第一頁に鉛筆書して下さい。

竜を完成させて機動部隊を強化せよ。ウエー  
ク島を攻略し、マーシャル群島の奪回を計る  
事は情勢に依る。但し其処迄が日本の攻勢終  
末点だ。攻略を自制し、聯合艦隊を解散し、  
巡洋艦と潜水艦は通商破壊に、駆逐艦以下は  
海上護衛に使用する。艦隊決戦の時代は終つ  
た。これからは補給が勝敗を決めるだろう」  
声が次第に低くなった。

「聯合艦隊を指揮する後継者は山口多聞と決  
めていたが一足先に靖国神社へ行った。本官  
の後は小沢治三郎。次は角田覚治がよい」

公的な遺言を終った山本は安心したのか幾  
らか楽になったように見えた。

「稔田君。婦人部隊には随分助けられたな。

マーシャル決戦を可能にしたエニウエタツク  
の防戦。航空戦を決したレキシントン攻撃。  
聯合艦隊の総進撃を指揮した鹿島の通信。併  
しみんな死んだ。思い出すよ。棉津見洋子。

神酒慶子。いい娘だった。どうやら迎えに来  
たようだ。最後迄世話になるね」

提督は静かに眼を閉じた。

婦人兵の号泣。

稔田少佐は唇を噛んで空を見上げる。

大きな星が日本の空に向かって、落ちて行っ  
た。

(完)





す い ち ゅ う か

水

中

花

(七)

美 眉 野 芳

## ハ プ ニ ン グ

銀杏並木を歩いていった牧二郎の横に、クラシックなモーガン・プラスチが停まり、「二郎、ハプニングがあるのよ。面白そうだからいってみないこと」

貝塚絵馬に呼びとめられた。旧式なボディ

シャシーに、銀一色のレジャーウェアの絵馬は、その対象があまりにも大胆すぎて人眼をひいた。二郎は帰宅の途中であった。

ハプニング——偶発とか、即興と訳す。アメリカから輸入された、前衛芸術家たち、または、ヒッピー族と呼ばれる若い男女たちのパーティーの一形式と思えばいい。既成芸術を

否定し、既成道徳に反抗し、ジャズのアドリブのように、即興に、自己の感性を発散させる。もともと、タイム誌によると、日本のそれは、ジャプニングというそうだけど。日本人はエロチックなハプニングが、上手だそう

だ。  
絵馬の銀一色のレジャーウェアも、ハプニングに出席するには最高のファッションといえるだろう。金や銀の光りは、金属板を思わせ、その光りからは、人間性を失った冷たい人間が表現される。金属板を思わせる生地が絵馬の全身にびったりとまつわりつき、なだらかな曲線を描いて、絵馬の肢体をあますところなくあらわにして悩ましい。

イギリスのスポーツカーは、都心のビルディングの地下のクラブの前で停まった。ネオンに（麻耶）とあるが、ドアには本日休業の札がかけられてある。

赤い絨毯の階段を下りると、豪華なシャンデリアとピアノが置いてある店内には、すでにハプニングに集った若い男女のいきれとタバコの煙でむっとする。

ボックスが六つに、ソファが一つ置いてあるだけの小さなクラブに、カウンターのスト



ールをいれても、定員を軽くオーバーしていた。来会者は皆、靴を脱いで素足であった。

「クーラーをいれて」

ボーイに指示しているのは、このクラブのママなのだろう。オールレースのミニロープの妙齡な女性で、ライトの方向によっては下に何も着てないように見受けられる。美しいハプニングの理解者であった。

ソファアールの上で、裸の少女が少年たちを相手にしてペッティングにふけていた。リリであった。ハプニングはリリのヘビーペッティングで、自然に開始されたようであった。リリは次々に相手の少年を変えていく。参加者たちはカクテルグラスやタンブラーを握って、リリと少年たちの乱痴気さわぎを見守っていた。

横縞やたて縞の派手なストライプのシャツの少年たちは、リリの仲間なのだろうか。学生もいれば、いっぱしの社会人もいることだろう。木綿のスラックスをリリにとられ、ブリーフまで剥ぎとられて悲鳴をあげているのは少しだらしがない。少年は満座の中でリリに征服された。照明はそのカップルを明るく照らす。

絵馬がウイスキーの水割りを両手に持って戻り、

「飲めば、落ち着くわよ」

二郎を抱くようにして絨毯に坐った。鬼頭老人の晩酌の相手をして、日本酒は飲んだことはあるが、ウイスキーの味は、まだ知らない。二郎は顔をしかめて、ウイスキーを飲んだ。うまくはないが飲めないことはない。

「キスして」

心持ち顔をあげて、絵馬は眼をつむった。熟れた苺のように赤い唇が可愛く、また妖しく光る。絵馬は口紅をつけていない。キスをして欲しいのなら、女は口紅などというマズイモノはつけないほうがいい。

空腹だったから、一杯の水割りでもきいたのだろう。それに、二郎は今度は女を知っていた。童貞ではない。寿美麗夫人との経験が二郎を勇気づけた。

二郎は絵馬の唇を吸った。絵馬のなまあたかい舌が、情熱をほとばしらせて応える。二郎の首を抱き、絵馬は二郎を床に押し倒した。

キスやペッティングは序の口であった。女連れの間では、すでに幾組かのカップルがつ

くられ、肌を露わにした女たちが急激にふえていった。女学生もいれば、モデル、バーや喫茶店のホステスもいた。若い健康な小麦色の肉体がせまい店内に脈動し乱舞した。照明がぐるぐる廻る。

ハプニングはフリーセックスの渦の中にあつた。人間本来の興奮がすべてを奪った。「キスしたことないなんて、うそつき」

絵馬はまるで年上の女のように二郎の髪に指を絡ませながら、二郎の耳にささやいた。一月ほど前、はじめて絵馬と予備校の近くのトレリスで囲まれた喫茶店で会ったとき、二郎はキスすらも知らなかった童貞の男であつた。

「寿美麗夫人に教えてもらったのね」

絵馬は記憶がいい。二郎が下宿している鬼頭寿美麗の名をおぼえていた。

「さあ、白状なさい」

二郎は答えない。絵馬に云う必要はない。寿美麗夫人のことは、二人だけの秘密であつた。そう約束した。

「白状しないの」

「——」

「そう」



絵馬はすっと立ち上るなり、銀一色のレジヤウエアを脱ぎ捨てた。下には何も着ていない。常識だ。

店内のライトが消え、クラブの白い壁に、前衛地下映画がうつしだされた。スクリーンはない。

キスをしている二人のクローズアップ。そのまま二人は動かない。死んだように唇を重ねている。

三十分経過。画面は同じである。題はハキスV。

「はじめてじゃなかったのね」

二郎の胸をまたぎ、キラキラ輝く眸で絵馬は二郎を見下した。

「二郎の最初の女に……と思っていたのに」

二郎はいきなりギリシャ風の銀のサンダルで顔をなぐられて呻めいた。バシッ、バシッというきびしい音が、辺りのカップルの声の中にひととき目立って響く。痛い。

二郎は抵抗しない。絵馬のなすがままにされている。二郎にとって、絵馬は二人目であった。顔が腫れたようだ。

いきなり、一条の白線が孤を描いて落下し二郎の顔を濡らした。

「冷せばすぐ直るわ」

絵馬は二郎の腫れあがった顔にUrineを浴びせたのである。二郎は眼を閉じた。しみるが、顔をそむけようとしめない。絵馬の清涼な滝の中に甘んじて埋没した。息をするたびに鼻から、口から、絵馬のUrineは容赦なく流れ込んでくる。二郎ののどが鳴った。

プライベートフィルムの画面がかわった。

△女の足Vとある。

床に坐った裸の男の口。ソファにゆったりと腰を下ろしたゴージャスなイブニングドレスの貴婦人が、小さな素足を入れたり出したりしている。男を軽蔑しきった冷たい女の顔のアップ。唾液があふれる、男の口のアップ。男の大きく開いた口に、貴婦人の素足はすっぽり収められてしまう。細く可愛い。男の口から血が流れた。貴婦人の鋭い足の爪が、男の口中を傷つけたらしい。男の顔を足の裏が押し放すように、貴婦人は男を床に蹴倒す。貴婦人は立ち上って男の顔を足の裏で踏んづける。イブニングドレスは背中が大きくカットされ、貴婦人の魅力的なヒップが覗いている。

「絵馬、あまりいじめるものじゃないわ」

いつのまにか、オールレースのミニロープのママが横に立っていた。

「のどが渴いたでしょう」

絵馬にビールのジョッキをわたし、

「わたくしにその男の子を借して」

二郎を抱き起こした。

「ついていらっしゃい」

絵馬は飲みかけのビールを二郎の顔にぶつけた。

「許してあげるわ」

カウンターの奥で、バーテンたちが大きなボールに五合瓶の牛乳を五、六本ぶちまけ、氷で冷やしながら、パウダーシュガーとかきまぜていた。生クリームをつくっているらしい。そんなに多量の生クリームをいったい何に使うつもりなのだろう。

カウンターの奥のドアに、△堤麻耶アトリエVと書いてある。ママの名をとってクラブの名前にしたものと思われる。ママは前衛女流画家なのかもしれない。寝室兼用のアトリエであった。

麻耶はバスルームを指さし、

「とにかくシャワーを浴びていらっしゃい」と二郎に云った。



「絵馬の匂いを消してくることね」

バスと洋式トイレが一室に収まっているのはホテルなみであった。

二郎は頭からシャワーを浴びた。絵馬にあらぬ思いがけない異常な行為をされても、怒るところか抵抗すらしない自分が不思議でもあった。Urine を浴びせられるという行為は鬼頭老人が西日のあたる物置で、能面の女に強制していたのと同じであり、二郎はなんのうたがいもなく自然に受け入れてしまったのかもしれない。

そればかりではあるまい。寿美麗夫人に対しても二郎はいいなりであった。絵馬ばかりではない。二郎は誰にでも受身であった。先天的な性格だろうか。

二郎が全身を洗っていると、オールレースのミニロープの麻耶が姿を見せ、二郎の前で洋式トイレの蓋をあげて腰を下ろした。膝に丸められた花模様の薄いパンティが妙になまなましく二郎を刺激する。

風変わりなハプニングの主宰者だけあって、羞恥心が無いのか、それとも、他人に見せられない肢体を、わざと見せつけて二郎をからかっているのか、よくわからない。

白い陶器の壺の中に、かすかにせせらぎの音がしたが、麻耶は二郎の顔を見つめて笑っていた。二郎は見返した。群集の中で絵馬に征服され侮辱されたことが、二郎を大胆にさせているのかもしれない。

「だめだわ」

眼を閉じて麻耶がぼつりと云った。

「鏡の前の箱から、ガラスの浣腸器を取って下さない。二郎」

「浣腸器」

「ええ」

「その前に、タオルを取って下さい」

タオルかけは便器の横の壁にあった。

「そのままでもいいわよ」

二郎はシャワーの湯滴を拭きもせず、鏡の前の棚から宝石箱のような綺麗な小箱をあけガラスの浣腸器をつまんで、麻耶に差し出した。

「可愛い顔」

麻耶は楽しそうに二郎を眺め廻した。

「どこが悪いのですか」

「そんなことをきくものじゃないわ」

浴槽に入ろうとすると、

「そのままです。お薬を取って」

麻耶は二郎に命じた。麻耶は二郎に薬品の瓶の栓を取らせ、浣腸器に薬を吸い上げた。

「浣腸をして下さるわね」

「そんなことしたことはありません」

「やさしいわ」

麻耶は立ち上り、浴槽のふちに両手をついて上体を支え、ミニロープをまくった。

「よくって」

二郎の頭に血がのぼった。

「静かにお願いね」

二郎はやにわに片手をのばして麻耶をおさえつけ、右手に持ったガラスの浣腸器を取上げた。

「あっ」

息を殺し、二郎は片手に力をいれる。かすかに甘い嘆息が洩れた。

そのまま動かない。麻耶が二郎の左手を胸に抱いた。二郎の手の甲に爪が食い込んだ。強く。

十六世紀のオランダ画家・ヒエロニムス・ボスの「愛欲の園」に描かれているように、絵馬は浣腸をしたところを花で飾っている。三十分後、バスタブの中で、二郎は麻耶に征服された。二郎にとって、三人目の女であ



った。ここでも、二郎は完全に、受身であった。浣腸するとき、突然、二郎が乳房に手を押したことが、麻耶を刺激したらしい。受身に慣れたものでも、意志に反して突拍子もない行動を起こすことがあるものである。

二郎がアトリエからクラブに戻ったとき、全身生クリームだらけのリリに、数人の男たちが群がり、リリの胸といわず、腹といわず顔を埋めて、リリの肌に塗りつけられた生クリームを舐めていた。その中に、プライベートルフィルム／＼女の足Vの作者兼主演の花衛作家の顔もあった。

「くすぐったい」

「馬鹿、食いつく奴があるか」

リリの甲高い悲鳴に、周囲からわっと喚声が湧きあがった。

バーテンたちがせつせとつくっていた生クリームの用途が、こんなところにあるうとは誰も気がつかなかったことだろう。

リリに続いて、女学生らしい一人の少女がブラウスもミニスカートも剥ぎ取られて、カウンターの上におさえつけられた。少年たちはよってたかって、その少女に生クリームを分厚く塗り始めた。

「いや、助けて」

少女の細い体は、まるで石膏像のようにみえるまっ白になった。

「気持悪い」

あばれてカウンターから落ちそうになり、あわてて少年たちが少女を抱きかかえた。少年たちのシャツもストラックスもクリームだらけであった。

リリが自分の全身に塗られた生クリームをすくい取り、観客にめがけて投げつけた。輪が乱れる。悲鳴をあげて折り重なり、床をころげ廻って逃げた。観客の服といわず、クラブの壁といわず、生クリームはべっとりと付着した。

「あら、いらしてたの」

さわぎをよそに、カウンターの隅のストールに一人腰かけて、ブランデーを飲んでいた勘解由小路公博は、カーネーションのミニロブというウルトラファッションの麻耶に驚かされた。

麻耶のふくよかな胸のあたりから赤いカーネーションを一本引き抜き、公博は胸にさした。

「何本あるかな」

「五百本くらいでしょう」

麻耶はこともなげに云った。

「今夜のハプニング、招待してくれて、有難う」

「奥様は御存知」

「知らないだろう。わたしのことは、無関心だ」

「そうかしら」

麻耶は二つのブランデーグラスに、ナポレオンをつぎ、縁を重ねた。

「お会いできてうれしいわ」

「生クリームのアイデアは誰なの」

「さあ、誰でしょう」

公博はクリームだらけのリリにつかまってYシャツを破られている少年の顔を見て、おやと思った。隣りの鬼頭老人のところの浪人じゃないか。気がついたが、声はかけなかった。二、三度、家の裏の自然公園で会ったとはあるが、挨拶をするだけで話をしたことはない。お楽しみものじゃまをしては悪い。

「谷崎潤一郎の／＼美食倶楽部Vを思い出したよ。美女に天婦羅のころもをつけてたべる話だがね」

公博は麻耶に話をした。



△高麗女肉△というのが、その料理の名前である。即ち、

△其れは、一枚の素敵に大きな、ぽっぽと湯気の立ち昇るタオルに包まれて、三人のボーイに恭しく担がれながら、食卓の中央へ運び込まれる。タオルの中には支那風の仙女の装いをした一人の美姫が、華やかに笑いながら横わって居るのである。彼女の全身に纏わって居る神々しい羅綾の衣は、一見すると精巧な白地の綴子かと思われるけれど、実は其れが悉く、天ぶらのところもから出来上って居る。そうして此の料理の場合には会員たちはただ女肉の外に附いて居る衣だけを味わうのである。△

とある。

「同じようなものね。ころもが生クリームになっただけだわ」

「あの小説は大正八年の作だから、あれがハプニングのつもりなら、あまり進歩もしていないわけだな」

「それ、皮肉」

「気の小さい男に皮肉がいえるかね」

公博は笑った。

「わたくしのお部屋にいきましようか」

麻耶は公博の手を握った。

「皆さんをほっておいてかい」

「勝手に遊んでいるわよ」

「ここで見ていたほうが面白いな」

「麻耶を抱きたくないの」

公博の頬に麻耶は唇を近づけ、軽く触れてから、公博の耳に熱い息を吹きかけた。そつと耳たぶを噛む。

「今夜招待したのは、あなたの御希望をかなえてさしあげようと思っていたからよ」

「ママに何かたのんだかな」

「麻耶のを飲んでみたいとおっしゃったのはどなただったかしら」

「そんなことを云ったかね」

「酔っていたから忘れたとおっしゃるのね」

「おぼえていないな」

「あなたが忘れても、わたくしはおぼえていきますわ」

「どうするつもりかね」

公博は二郎がリリに責められているのを見つめながら麻耶にきいた。二郎のズボンはすでにナイフで切りさかれていた。二郎にとっては受難の一夜であった。リリも二郎も生クリームだらけになって床を転げ廻った。

「ご希望のものを飲まないうちは、おうちに返さない」

「逃げるよ」

「だめ、許さないわ」

「困ったな」

「奥様のだけじゃなく、麻耶のも味わってみるものよ」

「そんなことまで話をしたのか」

苦笑して公博は立ち上った。酔にまかせて妻の香葉から Wine を飲ませられた話を麻耶にしてみました。ソワサントヌッフやフレンチキッスの話からそこまで進展してしまつたらしい。酒席の話は男と女の話しかない。

クラブから姿を消していた絵馬が、長いロープを持って戻ってきた。ロープを買ってきたらしい。重なり合っているリリと二郎に近づき、少年たちに手伝わせて二人を縛り始めた。胸から胴に、腰も、脚も揃えてぐるぐる巻きにする。ロープが足りない。絵馬は電気のコードを持ちだした。

手拭を水に濡らし、インスタントの鞭をこしらえると、絵馬は目茶苦茶にリリと二郎を打ちはじめた。胸から、背中から生クリーム



が飛び散り、二人のはだけた肌に赤味がさした。

「痛い」

あまりにも激しい衝撃に、二郎は思わずリリの肩を噛んだ。リリの肩が、腕が、青く腫れあがる。

二人を囲んでいた輪の中から、絵馬は地味なブラウスとスカートの少女を見つけ、無理に脱がせると、丸めて二郎の口に、詰め込んだ。白い清純なパンティであった。

「リリの腕を、食いちぎるつもりか、この馬鹿！」

更に少女のブラジャーまで取り上げて、二郎の口に猿ぐつわをした。

「勝手にわめけ」

濡れた手拭のかわりに、観客の中の男から皮バンドを引き抜き、絵馬は続けてくりつけられた二人に打ち下ろした。

「うっ」

口の自由なリリが二郎の肩を噛んだ。生クリームは四方に飛び散り、充血した肌は次第に広がり、幾重にもみみずばれが二人の全身を走った。

バンドの金具が、リリのクリームのはげた

尻を傷つけ、二郎の背中から血を流した。

狂ったように、絵馬は二人に皮バンドを振った。血は誰でも興奮させる。

寿美麗夫人と二郎の間の秘密を感じとった憎悪だろうか。それとも、いつもリリを責めているのと同じように、単なる絵馬の遊びなのだろうか。

八女の足Vの作者が、絵馬を抱き止めた。絵馬は前衛作家の胸毛の中に倒れ込んだ。前衛作家は絵馬をそっとソファに横にして、絵馬の銀一色のレジャーウェアを脱がせにかかった。

バスルームのタイルに、勘解由小路公博は正座していた。麻耶にシャワーを浴びるよう甘くささやかれ、英国スタイルのシックなスーツを脱いだのが不覚であった。

古代更紗でつくったネクタイで公博はうしろ手に縛られた。

「あばれると、奥様からプレゼントされたネクタイが破けてしまうわよ」

麻耶の端正な頬はほんのりと上気し、翳の深い瞳がしっとり潤んで、タイルに正座した公博に優しく微笑んだ。

麻耶は洗濯用のロープで、公博の膝と膝を

合わせて丁寧に縛りあげた。

公博は勿論抗うことはしない。そうされるのが好ましいと、酒席で云ったかも知れない。そんな気もする。

柔らかく、湿った、香ぐわしい唇が公博の口をおおった。麻耶の吐息の混った、むさばるように吸いつく、熱い、練絹のような唇と舌の感覚が、自由を奪われた公博の心までも呪縛した。

五百本余のカーネーションでつくったミニロープのまま、麻耶は、公博の肩にまたがった。肩車であった。

繊細な細工物のような美しい素足が、公博の胸のあたりにあった。肉づきの豊かな、固く緊まった成熟した太腿が公博の首を締めつける。

突然、公博は、首に、妙に暖かい液体が触れるのを感じた。その妖しい温湯は、公博の首から肩にあふれ、胸に流れた。

公博に肩車をした麻耶が、少しずつ先程の会話通りのことをはじめたのである。

黄金の滝は、やがて激流となっていく。麻耶の神秘的な滝にうたれて公博は瞑目した。

(続く)

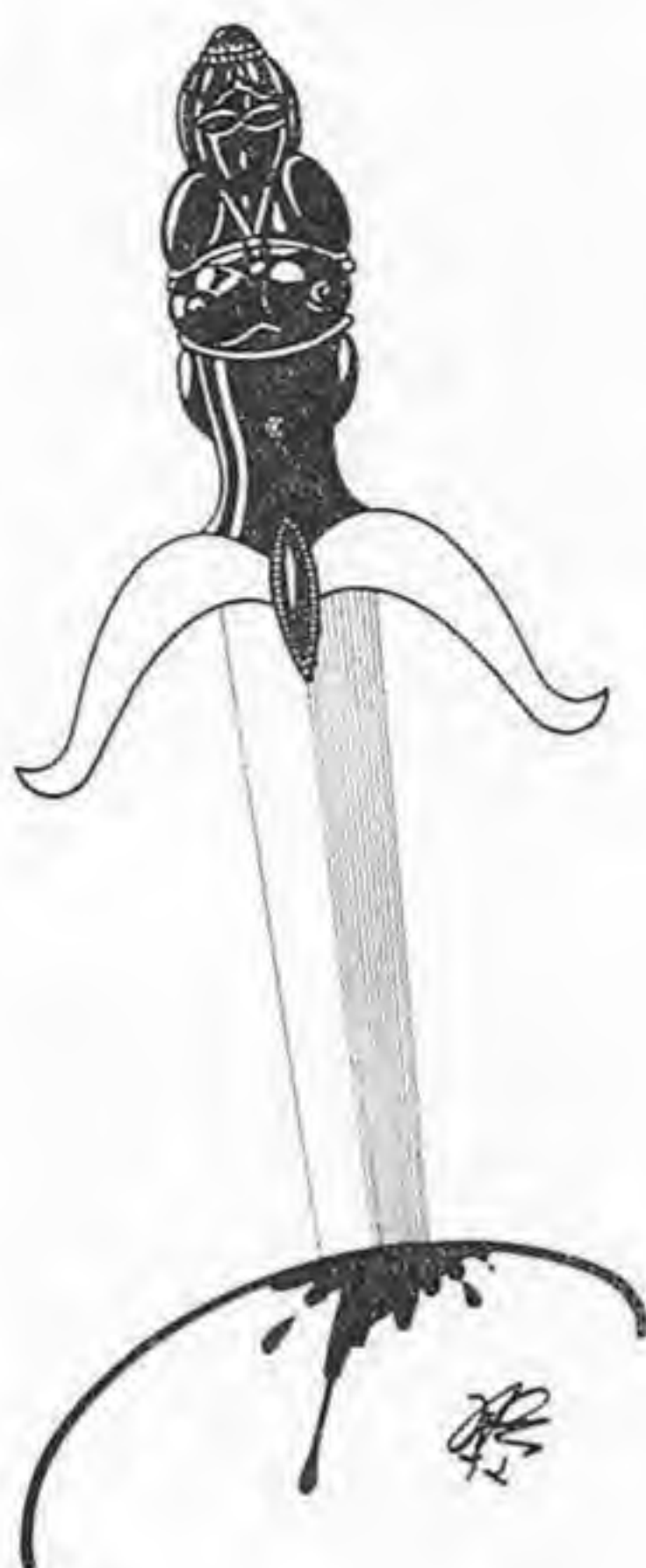


古来、コルシカでは裁判や法律より、銃とか、あいくちの方が尊ばれて来た。目には目齒には齒というような原始的な復讐、これをガンペッタ、という。

復

讐

(その3)



|| (ガンペッタ) ||

千 葉 青 鬼

### 鼻 吊 り (続)

緋沙絵夫人の頭の中は、ただ恵利香の鼻梁を守ることで一ぱいだった。この瞬間は、たとえ自分の片足をパッサリ切られたとしてもそれが恵利香を救うためなら、喜んで耐え忍べるだろうと思うくらいだった。しかし、緊張には、物理的な限界がある。カタストロフ

は急速に近づきつつあった。

男はいえ、この修羅場を非情に眺めながら、やれ一服という風に煙草をとり出して火をつけるのであった。

血走った眼を男の方に向けて、物のいえぬいらだたしさを、そのまなざしにこめて、今はただ憎い男に、ひたすら哀願の意を伝えようとすると緋沙絵夫人の努力も、冷酷なこの男

には全く通じそうもなかった。そのうちにも目の前が赤黒くぼやけてくる。

突然、思いもかけないところに激しい衝撃を感じて緋沙絵夫人は飛び上った。男が火のついた煙草を、緋沙絵夫人の肌に押しつけたからである。何でたまろう。たちまちにして、ようやく保ち得ていたバランスがくずれて、それにつづくのは、おぞましいほどの、恵利



香の絶叫である。その声とても、もはや絶望に瀕れ果てたかのように、ただ吼えるような慟哭を繰返すばかりだった。

断末魔のギリギリになって、やっとのこととで男はOFFスイッチを押す。鎖が切っておとされる。苦悶の舞踏にもだえていた二つの白い肉塊は、もんどりうって床に打ちつけられ、そのまま動かなくなった。あまりの責め苦に精神は打ちくだかれて、二人ながら気絶してしまったのである。

## 回想

恵利香は悪夢の中をさまよう。しかし、彼女の場合は緋沙絵夫人とちがって、何といっても一カ月のキャリアがあった。どんな苦痛も、繰返されるに従って一種の馴れが生じてくる。拷問による肉体の痛みは変らないのだけれども、精神は次第に潔癖さを喪失して徐々に現実に対応しはじめていた。かくされた自虐本能が諦めの芽を育てたのである。

ここでの恵利香の生活は、緋沙絵夫人と同じく、地下室の一室で眠りから醒めたときに始まった。

恵利香の前には、スツキリと着こなしたグレイのコンチネンタルスーツのよく似合った美青年が立っていた。

仕掛け椅子に縛りつけられていた恵利香は猛烈に怒っていた。それで、銀座や赤坂のカフェテラスなどで見掛けたとしたら、きっと好意を感じたであろう、この青年に対して、日頃のしとやかさも投げすてて激しい言葉をあびせたのであった。

「何さ、男のくせに、女一人をさらって、こんなに縛っておくなんて！ 恥ずかしいと思わないの。サ、早くほめてよ」

普通の場合なら泣きさげんだであろうに、逆に高飛車になったのは、青年の物腰が礼儀正しく、悪人とも思えなかったからでもあった。青年はうやうやしく一礼して言った。

「お嬢さま、誠に申し訳ございません。決して失礼なことは致しませんから、暫くご辛抱下さい。実は、お父様に少しばかりお願いしたいことがあります。お嬢さまには申し訳ありませんが、人質というような立場になっていただいたわけでございます」

「お父様をお願いがあるなら、なんで正々堂々とおっしゃらないの。男らしくないわ。卑怯よ、あなたは」

「いいえ、お嬢さまがさらわれたということが、お父様の贖罪の第一歩なのです」

暗澹たる調子で、贖罪という言葉をつかったので、一瞬、恵利香は気押されたような気持になってしまった。青年は続けた。

「お聞き下さい。お嬢さまは、或はご存知ないかも知れませんが、私の母、新藤かねは、お父様がお母様と結婚なさる前から、お父様の内縁の妻でございました」

恵利香は、ハッと胸を突かれたような気がした。父をめぐって母ともう一人の女性が妻の座を争い、その結果、現在の母、緋沙絵夫人が勝ち、もう一人の女性は痛ましくも自殺してしまったという話を、年老いた召使から聞かされたことがあった。中学生だった恵利香にとっては少からぬショックであった。尊敬していた父が、急にうとましくさえ見える程だった。けれども、今は父母のむづまじさと家庭のあたたかさに包まれて、いつとはなく、この苦い思い出も、古傷のように忘れともなく忘れてしまっていたのであった。

青年は語りつづけた。

「私の父は戦死して、母は戦後の混乱にもまわっていました。その頃、私たちの家に下宿なすっていたのがお父様でした。母は三十四才



お父様は二十九才でいらっしやいました。い  
つしか二人は、むすばれました。結婚こそし  
ませんでした。が、小学校へ入ったばかりの私  
を、父のように可愛がって下さいました。そ  
の限りでは幸福な家庭だったのです。そこへ  
お母様があらわれました。先代の社長が、お  
父様の将来を見込んで、養子になさろうとし  
たからです。いろいろの出来事がありました  
が、結局母は捨てられ、さびしく自殺してし  
まいました」

十八才の乙女のロマンチックな心情は激し  
くゆさぶられた。青年に対する敵意はそれ  
によって大巾に後退せざるを得なかった。

「私にどうしろとおっしゃるのですか」

おずおずと青年に問いかける声は、許しを  
乞うかのようにさえあった。

「簡単なことです。この通り書いていただけ  
ればよろしいのです」

といいながら、ポケットから折り畳んだ紙  
片をとり出した。

お父様お母様どうか

警察へはいわないで

黙って信用して下さい

私は安全ですし

自由でいられますから

早く助けて下さい

この人のことを

そうして下されば

部屋の中にいる限り

ひどい目にあう様な

心配はございません この方とお父様との  
用事が済めば帰ります くだいようですが  
呉々もさがさないで さもないと殺されます  
お元気でさようなら  
四月十日  
恵利香より

一読した恵利香は、別  
段おそろしい内容でもな  
いし、父や母を脅迫しよ  
うとする風でもないので  
内心ホッと胸をなでおろ  
した。

「お手紙は書きますわ。

でも、あまりお父様やお  
母様を苦しめないで下さ  
い」

青年は丁寧に礼を言い  
部屋の隅からテーブルを  
押して来て恵利香の前に  
据えた。そして、恵利香  
の右手の縛めを解く。言  
われるままにペンを取っ  
て、便箋に前出の文章を  
書写した。青年は慎重に  
手袋をはめた手でそれを



畳みポケットに戻した。この手紙はすでにお  
わकारの通り、下半分が切りとられて東京へ  
送られたのである。

「さて、これから用事がありますので二時間  
ほど失礼いたします」

青年が立ち上った。

恵利香はあわてて、

「これ、ほどうして下さい。も  
う逃げたりなんか致しません  
から」

「実際、このまま行かれては  
たまらない——と恵利香は思  
う。

「きっとこの部屋から出ない  
とお約束ができますでしょ  
うか」

「ええ、誓いますわ」

「よろしうございます。ご信  
用いたしましたよう」

青年は恵利香の四肢と、胴  
の五カ所を固定した革帯の錠  
を外した。恵利香は立ち上っ  
て、自由にはなったものの、  
何かしびれたような左手をさ





すっていた。

ほとんど三十分ほどの間、恵利香はそのまま、ボンヤリと立ちつくしていた。青年が出て行ってから張りつめた緊張がほぐれ、その代りに虚脱したようになってしまったからであつた。

部屋は、真紅の布壁で天井まで蔽われており、敷き詰められた分厚い絨氈も又、真赤であつた。ラクダの皮を赤く染めたストールが四つばかり、部屋の一角に片づけられていて床の真中には、恵利香を拘束していた仕掛け椅子と小さいテーブルがあるだけである。

急に恵利香は真剣にあたりを見廻しはじめた。しのび寄る尿意が彼女を虚脱状態から自分をとり戻させたのである。

(困ったわ。どうしよう。ご不浄はどこかしら)

奇怪にも、この部屋には扉らしいものがどこにもなかった。しかし、ふと気がつくとき青年が出て行つたあたりの壁が、少し開いて、そこから明りが洩れていたのである。指を入れて引いてみると、スーッと開いた。そこは廊下のように見えた。要求に追われる恵利香には、青年との約束を思い出すいとまがなか

つた。便所をさがして恵利香は廊下に出た。

八メートルほどの廊下の反対の隅に又扉が開いている。抜き足、さし足、恵利香は、その扉に近づいて行つた。途端に、その扉はバタシとしまり、同時に今出て来たばかりの扉もスーッと閉つた。つまり、恵利香は廊下に閉じこめられてしまったのである。さすがの恵利香も飛び上つた。とりすがって押してみても、どちらの扉もビクともしない。巾三尺、奥行三間ばかりの長方形の空間はガラシとして、ムキ出しのコンクリートが余計さむざむとした感じだつた。恵利香に出来ることは、檻の中の牝豹のように行きつ戻りつすることだけになつてしまつたといえよう。そして、突き上げてくる要求は、次第に激しさを加えて来た。冷い汗が背筋を走つた。

死ぬよりも辛い思いだつた。廊下の隅で、誰も見ていないとはいつても、花はずかしい乙女盛りの娘が、どうにも辛抱しきれずにトイレ以外で用を足すといふことのみじめさ。脱いだパンティを丸めて床を拭き、丸めてそつと隠すように床の隅に押しつける。

丁度その時、再び青年が現れたのである。羞恥に全身を硬直させる恵利香に向う、青年

の表情は険しかった。

「約束を破つたな！」

「いいえ、だって……」

「黙れ、約束は約束だ」

青年は手にクロロホルムをしみこませたガーゼを持っている。プンと甘酸っぱい匂いがただよう。

恵利香は恐怖で目を一ぱいに見ひらいて白いガーゼを見つめた。

「やめて、やめて、アッ、ウ、ウ……」

哀願も空しく羽交じめにされ、嫌だなく鼻先を塞ぐガーゼから、胸一ぱいにクロロホルムを吸い込んでしまう。

(もうおしまいだろ)

朦朧となつてうすれて行く意識の間に、ふとこんな絶望感が走つた。

## スタンション

恵利香は首筋がひどく痛むのを覚えて、はじめて蘇つた。足首をアグラ縛りに固定され両手は後手に結ばれていた。その上、二本の太いパイプが、約十センチ程の巾で恵利香の首筋をガツチリとはさんでいる。そのパイプは下端を足首の縛り目に、上端は天井からたれ下つた鎖にひっかけられていた。パイプに



吊られた恵利香の首は、その範囲で上下することは許されるが、抜け出すことは出来ないのである。家畜を繋留するときを使うスタンションという器具と同じ原理である。

恵利香は苦痛にうめいた。

目をあいているのに何も見えない。そのあたりの感じから目かくしをされているのだと判る。不安と焦燥に、氷のようなものが背筋を走る。何ということだろう。ひんやりとした湿気が直接肌にふれるではないか。身じろぎをする度に、ザラザラしたコンクリート床の感触がじかに伝わってくる。

恵利香は、自分が衣服を剥かれて、その上で固定されたのだということに咄嗟の間に理解した。悲しげな溜息が洩れる。

突然、降ってわいたように男の声が耳に入った。ギクリと全身を硬直させる。その声はあの青年のものにはちがいがなかったけれど、その調子は、もはや以前とは打って交って、まるで裁判官が被告に尋問するような厳しさと冷たさを持っていた。

「恵利香！ ここはもう日本ではない。人身売買も奴隷制度も、ここでは公然と認められている。私には、お前の一切を自由にするこ

とが出来るのだ。覚悟をきめたがよい」

「……」

恵利香は、あまりのことに声も出ない。容赦なく男の声は続く。

「何故、お前がここに来なければならなかったか？ お前は罪を犯した。お前はそれを認めるかね」

噴然と怒りがこみあげて、恵利香は思わず甲高い声で罵り返した。

「何をおっしゃるんです！ 私が何をしておっしゃるんですか。私は何も罪なんか犯してはおりません」

「まだ反省が足りないな。よろしい、言っておあげよう。お前は私の与えた信頼を裏切ったではないか。私はお前にあの部屋から出ないようにと頼んだ。そしてお前は、それを約束したのではなかったのね」

「でも、でも……」

「でも？ でも何だというんだね」

どうして口に出して言えよう。屈辱に唇を噛んで沈黙した恵利香に

「このことだろう？」

いきなり鼻と口をふさいだ濡れた布、その臭気に、さっき廊下の隅にかくした筈の自分のパンティだと気がつく。

「ウッ」

とうめいて、右に左にさけようとするが、首をガツチリと固めるスタンションがそれを許さない。

「私との約束には例外はない。盲目的な履行が要求される。これからあることだ。胆に銘じて覚えておくがいい」

不自由な頸部を、せい一ぱい動かしつつけて逃れようとする恵利香の顔に、石炭バサミでつまんだおどましいパンティを執拗に押しつけながら青年は鋭く言う。

「どうかね。約束をやぶったことは認めるかね。そうしたら、これはやめるよ」

何といっても恵利香には弱身があった。約束を破ったことは事実だったからである。たとえ何と理由があろうとも。

「みとめます。ですから許して下さい」

はりさけるような声で、そう言わざるを得なくなってしまう。

「私の信頼を裏切ったことを認めるね」

青年は念を押した。

「はい」

と完全に屈服したのをみて、青年は満足そうに言葉をつづけた。

「よろしい、判決を言いわたす」



何が判決だと恵利香は思う。又もや腹立たしさがこみ上げてくる。

「恵利香は罪を犯した。この国では主人の信頼を裏切ることとは第一級の犯罪となる」

「犯罪ですって！」

と思わず恵利香が叫んだ。

「あなたに危害を加えた覚えはありません。ただお部屋から出ただけじゃありませんか」

ピシッと恵利香の頬が鳴った。

「黙って聞け！」

叩かれた頬よりも、青年の怒鳴った声の方が恵利香を打った。猫背に拘束された背骨がミリミリと痛んできた。苦痛がのしかかってきて、そうでなくても恵利香を黙らせてしまふのであった。

「この国の法律によれば、これは死刑に値する罪だ。しかし、お前は初犯だから罪一等を減じてやろう。お前に贖罪の機会を与えてやる。これから言う二つの条件のうち、どちらか一つを選んでよろしい。いいかね。一つは心から私に服従を誓って、身も心も捧げ切って、永久に妾兼奴隷となること」

「いやです、そんなこと」

歯ぎしりをして恵利香は反抗する。

「第二は」

青年は、恵利香にかまわずに続けた。

「一カ月の間、家畜となって暮すこと。この場合は、刑期を過ぎたら家へ帰してやる。恵利香の貞操は保証しよう。第一、家畜と一緒に寝るわけに行かんからな」

恵利香の頭は火のようになっていた。どちらを選んだって、同じ様なことではないか。

青年の声が悪魔のそのようだった。

「前にも言った通り私の約束は絶対だ。こちらも守るが、恵利香の方も守らねばならぬ。さあ、どちらをえらぶかね」

「ひどいッ。そんな……。ひどいわ」

恵利香は遂に泣き

声を出した。

ヒステリックに身をよじる。しかし倒れることも、立上ることも出来ない。空しく天井からスタンションを吊っている鎖をガチャガチャ揺らすばかりだった。

「ギャッ、ヒィー」

不意に鼻の頭に激しい電撃を感じて、



恵利香は尻を浮かせた。スタンションは五十センチ程しかないから、そこで頸がおさえられて足首に激痛が走った。

いつの間にか、細身の電気鞭が青年の手に握られていたのである。

次の一撃が乳首を襲う。

目かくしをされている悲しさに、いつ、どこを突いてくるかが判らない。気の狂いそうな責め手であった。何回か電撃を受けて、魂ぎるような悲鳴をあげているうちに、忽ち、恵利香は油汗にまみれ、息もたえだえになっ



「お前は罪の反省が足りないので罰を受けているのだぞ。アラビヤ人なら、とくに首をチョン切っているところだ。どうかね、どちらを選ぶか。前の方か後の方か、早く決心をした方がいいね」

そういうながらも、鞭は今度は恰好のいい脛のあたりをつつく。

「あっ、やめて。勝手に、勝手にしたらいいわ。どんなに責めても、私の身体を自由にしても、心は絶対に負けないわ」

目かくしの中で、皆を決して恵利香は絶叫する。

「そうかね。じゃ、勝手にさせてもらうよ」

ヌケヌケと言葉尻をとらえて青年は笑いを含んだ声で言った。

たちまち、ガラガラという音がして、スタンチョンを吊った鎖が巻き上げられる。それがピンと張ると、今度は次第に足首を引き上げはじめる。首が前へ押し出される。

「痛いッ。たすけて」

と悲鳴をあげるのにかまわず、遂にアグラ縛りのまま、二つ折りになり、首が足首とくっついたところまで引き上げられてからやっ

「苦しかったら早く返事をおし。この姿じゃ十分と、もちやしないのだから」

あざ笑うような声、そして

「アッ」

と恵利香を吠えさせる。電気鞭がスーッと背肌を撫でたからである。

「十、数えるうちに返事をしろ。さもないと電気鞭を突込んでしまふぞ」

さすが強気の恵利香も、こうなっては無条件降服の決心をするしかない。

蚊のなくような声で

「あとの方が……」

といいかけると、すぐに鎖がゆるんで足首が降ろされ、もとの姿勢にもどされた。

恵利香は今ももう、ただ、さめざめと泣くばかりだった。

目かくしが外される。

何のかざりもない十八畳ほどのC室であった。天井の真中をウインチレールが走り、そのウインチから伸びた鎖が恵利香を拘束するスタンチョンに繋がれていた。

「二番目の方を選ぶというんだね」

青年は、あくまで念を押してくる。

泣く泣く恵利香がうなずく。

「よろしい、早速契約をしよう」

といって恵利香の後手をほどこした。

はじめて自由になった手首だが長い間縛られていたために、すっかり痺れてしまっていたので、恵利香には手がほどかれたことすらわからなかった。やがて、血液が流れはじめるうちに、今度は猛烈な痛みが来て、苦痛に両手をもみ合わせる恵利香だった。

あぐら縛りの恵利香の前に画版が置かれ、白い罫紙がひろげられた。

「さあ、いう通り一字一句も間違えずに書くんだぞ」

威厳をこめて青年は命じた。

涙ながらに恵利香はペンを取りあげ、青年の声を待った。

(未完)

○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の紹介には一切応じておりません故御諒承下さい。手紙の転送は誌上に可能と但書きしたものに限りません。

○如何なる理由に拘らず直接発行所への御訪問は固くお断りいたします。御用件はすべて書面にて大阪住吉局私書箱四十一号暁出版株式会社宛へお願いいたします。○編集者へ面会をお求めの方は住所氏名職業を明記の上お便り下されば電話番号、連絡場所等をお返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお会い出来ません。



## 美女決斗シリーズ

女 川 中 島



## 裕 姫 戦 記

(前 篇)

## 鶴 見 和 男

(一)

天下分け目の関ヶ原の戦に、西軍を潰滅させ勝ちほこった徳川勢が、石田三成の本城佐和山を攻め落し、その余勢をかってさらにその北方の長浜の城に殺到したのは慶長五年九月も末のことであった。

秋風わたる琵琶湖面に、美しい影をおとしているこの小城は、石田の一族志賀小太郎彰行の守るところであったが、当主小太郎は若冠二十の身をもって家臣の主力を率いて関ヶ原に出陣し、斬撃奮斗部下の悉くとともに斃れたので、城には新妻の裕姫が老臣およびわずかな男女とともに留守居をしていたのである。従って寄手の猛将板倉重勝が、婦老の守る孤城ひとつ、一揉みに揉みつぶせと強攻したのも無理はなかったのである。

しかるに、あにはからんや、寄手はおびただしい死傷者を出し、見苦しくも敗退した。別に城方が、意外に多数であったわけでもなく、精強であったわけでもなかった。城も要害というのではなし、名将による奇手奇謀があったのでもなかった。

それは一に、守将裕姫を中心に強力に団結した決死の兵の玉碎戦法が功を奏したのであ



る。裕姫——つい半年前堂上から彰行のもとに嫁いできたその人は、芳紀まさに十七才、かつて宮中において美女選みがあつた際に、その随一に推され、時の主上から直々にお賞めの言葉をいただいた程の絶世の佳人であつたが、心また雄々しく、老臣以下を指揮して夫の城の死守に當つたのである。

嬋娟たる美姫が、襷、鉢巻も凛々しく、打物とつて真先立つた時、それに続く武士達がその姿に神を見たこともあり得ることである。死に喜びを感じた部隊の爆発力はすさまじい。その予期せぬ勢いに寄手はたちまち中央を突破され、後陣をくつがえされて、左右はちりぢりになった。しかも城兵の追撃は鋭く、板倉勢は随所に掩殺された。それは体勢を立て直して再攻することなど到底出来ない程の惨敗だったのである。身をもつて逃れた重勝も、事の重大さと悲憤のあまりに自害せんとしたが、部下に宥められて後退した。

報を得た家康も大いに驚き、急いで後任を本多忠次に命じ、兵を増して再び長浜の城を攻めさせたのである。

しかし、緒戦に大勝利を収めた城方の士気は頗る高く、本多勢の再三の攻撃も徒勞に終り、長浜城は落ちる気配がないばかりか、長

浜の快勝を聞き知つた西軍の落人が続々と集つてきて、むしろ強勢を増す有様に、忠次もまた苦境におちいった。まごまごしていれば板倉重勝と同じ運命に陥り、また他の者と交代させられては面目が立たない。

その彼に一策を授けて救いの手を述べたのは、外ならぬ彼の妻、桂の方であつた。その策というのは——

(志賀勢が意外に手剛いのは、その団結の中心に美しく勇ましい裕姫が居るからに外なりませぬ。裕姫さえ討てば城はたちまち落ちましよう。それには裕姫を一騎打ちにおびき出すことにするのです。たとえば川中島のご事に習い、双方から一人ずつ代表者を出し、城方が勝てばわれが兵を引き、われら勝てば城を明け渡す風にするのです。そのように城の運命をその者の肩に掛けるとなれば、城方からは必ず裕姫みずから出るでしよう。)

(そう、うまくゆくか。第一、志賀方がそのようない騎打ちに應じるかじゃ。)

(普通なら応じますまい。そこで裕姫で応じるように仕組むのです。裕姫もなかなかの武芸自慢、そこでこちらからも女人を出して一騎打させます。)

(まさか、そなたが相手になるのではあるま

いな?)

こういう策を授けるだけあつて、桂の方みずから武勇秀でた美女であつた。忠次の一族であり、かの勇名高い本多忠勝の末娘であつたのだから無理はない。娘武者として既に戦場で敵と渡り合い、忠次に嫁いでもからも、子の無いこともあつて、常に忠次とともに出陣し、数々の武功を立てて勇婦の誉れが高かつた。しかしこの時はすでに三十を越えていたのである。夫の言葉にニッコリ笑つた彼女、(それはあなた様がお許しになりますまい。それに妾は姥桜、小娘相手に大人気ない。妾の部下に裕姫と戦わせるにふさわしい者が居ります。)

(ほう。)

(御家中岡田三左エ門保正の娘にて美智子と申しますもの。)

(おう、臂力すぐれた娘と聞いて居つたが、たしか美濃部主水に嫁したと聞いたが。)

(その主水、この度の合戦に討死致し、彼女は志賀の者に対し、烈しい憎しみをもちて居ります。そこで腰元とあつては裕姫も二の足を踏みましようから、彼女に本多姓を名乗らせ、妾の妹として戦わせましては如何に。)(なるほど、妙計じゃ。しかし万が一、美智



が討たれた場合は如何に致す。)

(裕姫はたかが深窓育ちの剣法。まず美智の勝利は動きませぬが、負けた時は、一旦約束どおり兵を引き、いつわりの和睦をなして次の策を打つも、大事にはなりますまい)

(よし、美智を呼べ。)

かくて命を受けた岡田美智は、勇躍してこれを受け、裕姫また、女将同士の一騎打とあって、無益の血を流さぬにしかじとこれに応じ、ここに未曾有の美女同士の晴の一騎打ちが展開されたのである。

## (一)

一騎打の場所は、長浜の城からも近い琵琶湖の中の浮島に設けられた。ここは両軍からともによく見えるところで、卑怯な加勢をすれば、すぐ分るから、介添も検分も無用であった。双方浅瀬を馬で渡って島上で相對すれば、全く同じ条件で堂々と渡り合える。打ち合わせによって、わざと鎧は着けず、衣裳のまま馬上で雌雄を決することになっていた。

さて、合図の法螺貝の音とともに、両陣からしらずと馬を進ませる両女武者、遠目にはいづれがあやめかかきつばた、共に劣らぬ美女の身のこなしに、両軍の見物の男女は、

結果如何にと固唾をのんで見守る。

裕姫その日の扮装は、うす紅の桜花模様を散らした白っぽい振袖に、金襴の帯をキリリと胸高にしめ、赤いしごきを襷にして、両の袖を思い切ってくり上げ、清純な白い二の腕を目もまぶしい程にあらわしている。五尺二寸五分、十一貫と均齊はとれていながら、十七才の成熟し切らぬ細っそりとした女体をつつむ曲線は、長い襟足から柳の腰へと夢のように流れて、痛々しいとも見える美しさを醸し出している。

一方本多美智姫こと岡田美智は年つもって二十二才、桂の方が鬼姫と呼ばれた時からのお気に入りのお侍女だけあって武芸は抜群、その上臂力にも恵まれて、既に戦場で兜首を二つ、三つ取った経験もある。加えて眼元涼しく鼻筋通り、長身細腰の凄程の美人。五尺四寸もあるう背丈のためにスラリとは見えるが、円熟し切った女盛りの肉体は十三貫を越える重味を備えていた。その女体を、空色の水仙模様の衣裳でつつみ、紺青の帯でキリリとしめ上げたさまは、如何にも清々しい。

「妾は徳川方の代表本多美智姫、年つもって二十二才、見参！」

「おう、妾は志賀裕姫、いざ！」

さわやかに名乗り合った両美女は、たちまち馬を寄せて、早くも丁々発止と打ち合う。

「エイ！」「ヤッ！」

と女にも似ぬ鋭い気合いを発しながら、黒髪をなびかし、毛すそを乱して斬り結ぶさまは遠くからみると、葵の花にちりかかる桜の花びらにも似て、あでやかともなまめかしいとも言いがたい。

互いに自軍のために、かけがえのない美首を賭けての一騎打。いづれが先に散る花よと観衆は固唾をのんで見守っているのだが、一上一下と打ち合う切尖はいずれ劣らず、容易に勝負はつきそうにない。とみて美智姫は、いきなり刀を投げ捨て、馬上に大手を拡げ、

「この上はいざ組まん」

と挑む。体力にまさる美智姫としては予定の行動である、裕姫もそれとさとらないではないが、今さらいやとはいえない。いさぎよく刀を投げ捨てると、

「さらば、まいりますぞ」

たちまち白い四本の手がつと伸びると、うす紅と紺青の色彩がもつれ、からみ合って、馬上に壮烈な組み打ちとなった。

「あつ、裕姫様が組んでは危い！」

「卑怯だぞ、美智姫！」



志賀方もそれと氣附いて、口々に叫ぶが、  
どうしようもない。こなたでは、

(してやったり！)

とほくそ笑む美智姫は、まだ成熟し切らぬ  
華奢な裕姫の身体を、おのれの豊艶な胸のう  
ちに呼び込んで、これを羽搔締めにしようと  
する。そうはさせじと裕姫も、しなやかな体  
をひねって相手の体を馬下に投げ落そうとす  
るのだが、見掛けにましての思わぬ強力に、  
技を封ぜられた裕姫の体は、ズルズルと馬ご  
と、美智姫のふところに引き寄せられる。そ  
のさまは、まるで蜘蛛の巣にかかった胡蝶の  
よう。

(ウフッフッフッ、こうなれば、こちらのもの、  
鞍壺におしつけたまま、細首搔き切つても  
すむこと)

美智姫の目は早くも、裕姫の透き通るよう  
に白い頸すじにキリキリと狙いをつけ、その  
襟がみをとった左手に体重をかけつつ、相手  
の体をおのれの前鞍におし伏せるようにしな  
がら、右手を後ろ帯にやって、懐剣を引き抜  
こうとする。その隙！ このままでは殺られ  
るばかりと知った裕姫の窮予の一策、鎧をも  
って強く馬腹を蹴ったので、馬は急に跳ね上  
り、はずみを喰って両美女は、もつれ合った

ままだうと馬下に落ちたのである。

「アッ……ッ」

「裕姫様、しっかり！」

「美智姫様、早く上になって！」

目まぐるしい変転に、両陣の見物側は沸き  
に沸く。落ちたはずみに体をひねって、美智  
姫の胸から逃れようとした裕姫だが、そうは  
させじと、美智姫は襟がみをとった左手を金  
輪際離そうとしない。その敵の力を利用して  
一転、二転はしてみたものの、結局は非力の  
悲しさ、美智姫の強力に捻じ伏せられて、遂  
にはムズと馬乗りになられてしまった。

### (三)

「ウムームッ、チッ」

かつて洩らしたことのない苦吟を上げて、  
裕姫も今は身だしなみも忘れてあがくだけあ  
がいてみたが、相手は名に負う勇婦美智姫、  
一旦こう上になられたら、大の男でも刎ね返  
すことは容易ではない。ましてあえかな姫の  
女体をもってしては、まさに螭螂の斧にもひ  
としく、いたずらにそのズッシリした重味か  
ら、成熟し切った女人というものの豊艶さを  
思い知らされるだけであった。

勝負あった！ 誰もがそう思って、次の瞬

間には、裕姫の細首が血しぶきとともに胴を  
離れ、美智姫の手に握られる場面を想像し、  
徳川方はどっと喜びの声を挙げ、志賀方の男  
女は思わず目を掩ったのだが――。

それは恐るべき運命の転変であった。

美智姫も並の時なら組敷いた敵の首を搔く  
のに躊躇するはずはなかったであろうが、両  
軍環視の晴の場所とて、わざと余裕を見せた  
い功名心に駆られたのと、それにもまして、  
討とうとする相手が、かつてない年下の美少  
女であることに煽情され、思わず手を鈍らせ  
たことが、逆に彼女の命取りとなったのであ  
る。断末魔に喘ぐ美少女の、最後の息吹きに  
のたうつその柔かい肉体を、おのれの尻の下  
に敷き捉えた快さは、獲物をなぶり楽しむ猛  
鳥の惨忍さを誘う。

二の腕まで露わの、スナナリした両の手ま  
で、美智姫の膝頭にしっかりと踏まえられては  
さしもの烈女裕姫も、観念の臍を決めるより  
外はない。そのキュッと紅唇をかみしめた無  
念げな美しい顔を見下しつつ、勝ち誇った面  
を輝やかせた美智姫は、

「いかに裕姫殿、まことの戦場の勝負とはこ  
のようにするもの。堂上の姫様剣法では物の  
用に立たぬこと、ようくお分りになりました



か。不愔ながら姫君のみ首級、長浜の城とともに、この本多美智が申し受けます。この上は観念して潔く討たれませ」

と嘲けりつつ引導を渡したのだが、しかしそれがかえって彼女の禍となった。嘲けられて、裕姫はさらに斗志をもやしたのである。むしろ優しい言葉を掛けたなら、裕姫も命運と知って、静かに首を授けたかもしれない。勝敗はまさに微妙の機にあったのである。

(このような無礼な敵に討たれたくはない。まして妾が討たれては長浜の城をとられ、亡夫の霊にも申しわけが立たぬ)

その思いが、この美姫に死力を出させた。しかも、そのように相手が観念し切ってもいないのに、そのまま生首を掻き落そうとした美智姫の不用意も、逆転に輪をかけた。

「一城の主にも似合わぬ見苦しいあがき。しからば、雑兵同様掻き首にいただきます」

おのれの膝下にうごめく若い女体を抑えこみつつ、生きながら首を刎ねる快感を味わいたかったのか、最初は左手で裕姫の襟をひき上げるようにしながら、右手の懐剣を使おうとしたが、姫がなおも首を振り、左手に必死の力をこめて、おのれの右手を働かせない。ややあせり気味に、今度は、左手を伸ばして

ムンツと裕姫の黒髪をとって、地上に抑えつけ、首をふらせまいとした。自然美智姫の体が前にのびる。その一瞬の隙——思わず浮いた相手の膝の下から脱した右手の懐剣をふるって、裕姫必死の一撃、急所を狙ったわけではなかったのだが、手練の一刀はあやまたず美智姫の固くしめた帯の下、ふっくら盛り上った下腹のあたりを、グサとばかりしたたか刺し通したから、何じょうたまろう。

「アッ」と魂切る声とともに、美智姫ははじかれたように、一旦長身をのけ反らせたが、そこは流石になうての勇婦、

「ム……ッ」

懸命に重傷に堪えつつ、なおも左手に相手の黒髪をたぐりつつ、右手の懐剣をふるおうとする。しかし、それより早く裕姫が、すかさず、刺し通した懐剣でグイと一抉り、

「アー……ムッ」

と再び、美智姫の体をのけ反らせておいてしかもとっさの機転、引き抜いた懐剣で、われとわが、美智姫に握られている黒髪をサッと斬り払ったので、支えを失い、はずみくらった美智姫の体はもんどり打ってしりへに倒れる。同時に牝鹿のような敏捷さではね起きた裕姫が、素早くその上にのしかかる。

それは、描写すれば長いが、ほんの見物人がまたたきする間の出来ごとであった。そして、これはと彼等が目をこすって改めて見直した時には、まるで瀕死の白鳥を仕止める小鳩にも似て、華奢な裕姫が、美智姫の豊艶な肉体をしっかと組み敷いていたのである。

「ワ……ッ」「ヒ……ッ」

あまりにも見事な逆転劇に、喚声とも悲鳴ともつかないどよめきが起って、両方の陣とも鼎の沸くような騒ぎとなった。

「美智姫殿、如何なされた？」

「美智姫様、しっかり!!」

「南無! 裕姫様に勝たせ給え」

今まで固唾をのんで見ていた緊張が、堰を切ったようにはぐれて、おのずと口を衝いて出る叫びとなったのである。

しかも徳川方にも、まだなお美智姫が再びはね返すであろうという期待があったし、志賀方としては、ここまで来たら何としてでも裕姫に勝ってもらいたいという気持が錯綜して、双方の軍士が浮島目がけて殺到すまじき有様となった。

「静まれ、静まれっ!!」

「約定を破って敵方に笑われな」

必死に制する上司の声。



事実、剛氣な美智姫は、組敷かれながらも重傷に屈せず、両足を蹴り、体力に物を言わせて刎ね返そうとし、嬋娟たる裕姫の upper body は右に左に烈しく揺れる。

「姫様！ 姫様!!」

叫ぶ志賀方は直視出来ないらしく、女達の多くは大地につつ伏し、男達は拳を握りしめたまま、祈るかのように天を仰ぐばかり。

しかしそのなかで最も冷静なのは、当の裕姫であった。最初の一撃で、美智姫の抵抗がそう長くは続かぬことを見越していたし、姫とて武芸の達者、こう上になれば、敵の弱腰を両股で充分しめつけて、刎ね返させないぐらいは心得ている。美智姫が油断したのとは逆に、無理をせず、辛抱して、確実な勝利の機会を狙った賢明さが、遂に強敵を制したといえる。案の定、刻一刻、美智姫の抵抗は弱まり、岸側から見える彼女の足の蹴り方も、ようやく緩漫になってきた。あわれ、再逆転ならず、今は黒髪も乱れ、晴眼は血走り、血の出る程噛みしめた唇はゆがんだ。その凄艶な形相は、見物人には見えないのだが、美智姫危うし!! の不吉な暗雲が徳川方陣地を掩い始めた。

最初は自信に満ちていた本多忠次および桂

の方の顔も次第に蒼白に、こわばり出した。

#### (四)

「あー、いけない——美智姫様が殺られる」

「美智姫様っ！ 頑張って!!」

徳川の女達から挙る悲鳴。

そのどよめきを知るや知らずや、美智姫の力のつきかけたのを見てとった裕姫は、敵の右腕をしっかりとおのれの左膝に踏み敷き、左手で襟がみをとってぐいと引き上げると、右手の血染の懐剣の刃先をその雪白の咽喉へピタリと狙いをつけ、

「いかに美智姫とやら、そなた如き勇婦が、堂上の姫様剣法におくれをとったとあってはさぞ口惜しかろう。しかし戦場の勝負は、剣技のみではきまらぬもの、長浜城二千の男女のため、是非ともそなたの首が所要なのじや。覚悟致せ」

と、溜飲三斗ともいうべき報復の言葉を浴せる。やさしい裕姫としては珍らしい仕打ちだが、先程組みしかれて嘲罵されたことが、余程身にしみて口惜しかったのであろう。

思いは同じ美智姫は、

「くやしい！」

と身をよじりながら、恨みの形相もの凄く

ハッタと裕姫の顔を睨んだが、有無を言わせず、おのれの咽喉にのびてくる懐剣の白光に目を射られると、

「アレ——」

と遂に哀れな悲鳴を挙げて、少しでもその切尖から逃れようと顔をのけ反らせる。

しかし、ここで勝を逸してはと、正念場を失わぬ裕姫は、相手の足搔きに委細かまわず

「美智姫、覚悟しや！」

透き通るような声と共に、纖手一閃、突きおろした懐剣は、あやまたず、しなやかな美智姫のくびすじの中程を、もろに貫いたから何じようたまるう。

「キャッ——」

肺腑をつんざく絶叫とともに、一旦はその長身をピンとえびのようのにのけ反らせ、その衝撃に上に乗っていた裕姫の身体も危くふり落されるかと思えたが、やがて懐剣の刃先がグイと柔らかな皮肉に喰い込まれてゆくとともに、その下半身がうねり二うねり海藻のようにゆれて、断末魔の苦痛に、その白き五尺四寸の女体をのた打たせるさまは、凄惨とも、妖艶とも言いがたい。あの容姿端麗無双の美貌の持主であった美智姫が、あわれ首に釘をさされたどじようにも似たあられも



ない姿を衆目に曝しているのだ。

しかし、それも束の間、柄元まで深々と刺さった懐剣をグイと抉られて、ぐったりと四肢をのぼし、白い顎を突き出し、長い咽喉をのけ反らせたまま、ガックリと首もかしげてしまった。ただ晴眼だけはうらめしげにカッと見開かれ、くいしばった花唇には、後れ毛が二筋、三筋かみしめられている。

今までしきりに地を蹴っていた両の足が大字に投げ出され、肉づきのよい太腿まで露わにしたまま動かなくなったのを見た時、はつきり美智姫の負を認めたのだろう。徳川の陣から言いような哀哭の声が湧き起り、志賀方の歓喜の叫びといりまじった。中にも美智姫縁故の者達はあまりの無念さに走り出ようとする者もあったようだが、さすがに警固の役人達におしとどめられた。

一方敵の女将美智姫が全く息絶えたのを見届けて、スーッと懐剣を引き抜いた裕姫は、さすがにホッと一息、熱斗に汗ばんで乱れた黒髪を細い指先で掻き上げたが、そのしぐさのなまめかしさ。この上ない興奮に白い頬がポッと上気して、紅を散らせ、柳の肩はなお烈しく上下して、フックラした両の乳房のあたりも波打っているさまは、生ある乙女の美

しさを、最高に醸し出している。それにひきかえ討たれた美智姫は、あの薔薇のように輝いた美顔も今は白蟻のように血を失い、まだぬくみの残っている豊艶な肉体も、胸ははだけ、裾は乱れたあられもない姿で、敵の女性の膝下に組みしかれている。

まことに勝者と敗者とは、天地雲泥の差がある。冷酷な勝負の世界であった。

（ああ、いつの日かは妾も、このような敗者の姿に――）

勝者の裕姫すら、無常迅速の思いに、襟元を風で吹かれたようにぞーっとしたが、今はそのような感傷にひたっている余裕もない。「ふびんながら、志賀方勝利のしるしに、そなたの首級、裕姫が申しうけまする」

キッと言い放つと、裕姫は容を正して、右手の血染めの懐剣を逆手に持ちかえ、その刃先を、首がかしいで、さらでだに長いそれを鶴のようにうねらせている美智姫の頸すじの中程にピタリとおしあてた。そしてスナリとした左手をのばして、その前髪をムツとつかんで、仰向かせるようにしながら、

（南無！）

と念じつつ、グサと斬り入れた懐剣を右に引きまわしつつ、キリキリとそのやわらかい

皮肉を切り裂いてゆく。乙女の腕といえども手練の一刀、何じょうたまろう、嬬やかな美智姫の細首は、水もたまらず胴体から斬りはなされて、血しぶきもろとも大地に転った。

かくて、未曾有の美女同士の一騎打は終わった。勇婦の聞え高かった本多美智姫が、二十才を一期に、その美首を十七才の乙女志賀裕姫に授けたことは、あるいは番狂わせであったかもしれない。

裕姫はしばし、首のない美智姫のむくろにうちまたがったまま、なお無念げにカッと両眼を見開いたままのその生首を、眺めていたが、やがて細い指先で、その臉をさすって目を閉じさせてやると、たちまち美智姫の首は観音像のように美しい女人の相にかわった。静かに立ち上った裕姫は、その首を高く右手に掲げ、

「敵も味方もよく見られよ。本多美智姫の首を、この通り志賀裕姫が討ちとりましたぞ」

湖面を渡るその透き通った勝名乗りを、両軍とも水を打ったように静まりかえって聞くのであった。一方の美女が首討たれた凄惨な光景に固唾をのんだというよりも、裕姫の生ある乙女の美しいポーズに見惚れてしまったのであった。





## 一、概 説

「花と蛇」は羞恥責小説の傑作であるが、作中に展開される「責め」の態様もまた多岐に亘っている。そのゆえ、この拙稿ではその「素材」を適當摘出、整理し、各項目別に簡単な注釈を加えてみたいと思う。「花と蛇」のテーマとか本質とかについては、過日の九鬼氏の論考が決定版となった。核心をついた平易明解な論及であり、それ以上何も加えることはない。ここでは「責め」の「素材」のみに記述の対象を限定する。

別置として用語の定義を述べる。ここでも「責め」とは当事者（責め手と受け手）間にやりとりされる一切の「はたらきかけ」を

# 『花と蛇』に現われた

## 『羞恥責』の類別

安 藤 秀 一

いう。むろん女性達からの行為も含む。何らかの意味で受け手（ヒロイン達）に心理的苦

痛感を与えるものであればいい。単なる感情の表出は責めではないが、それが相手方を意識した場合、それは責めとなる。「素材」とはその発現形式の単位であって、作者の意図的に構成したものを意味する、同一のモチーフが二つ以上の素材に現われることも多い。

各項目を列挙する前に、「花と蛇」における羞恥責の技法構成を概観しよう。私の考えでは、責めの態様を次の二系統に大別できると思う。

A類―直接的なもの。その責めの実現（完成）が、責め手の意思のみによるものである。身体の挙動を要する場合と要しない場合

に分れる。

B類―間接的なもの。その責めの実現（完成）が受け手の意思に基かないと不可能なものをいう。むろん、その責め自体は強制されるのであるが、それが受け手の行為として実現するのである。身体の挙動を要しないものが多い。

素材を右の基準で分類すれば、(1)、A類のみにあてはまるもの。(2)、B類のみに属するもの。(3)、A B両方に該当するもの。の三種類に分れる。以下記述の便宜上、(3)は(1)に含めておく。流腸を例にして説明すると、物理的強制として展示させられた時はAである。だが受け手よりの「要求（懇願）」に基く場合はBとなる。「要求」の意思表示自体もB



に入るが、それとは別に排出行為もまたBとなるのである。

A・Bの相互関連性は責めの構造を統一的に理解し説明する場合にはきわめて重要と思われるが、本稿の趣旨ではないから、割愛する。以下、各素材をA・B両類別に分けて順次列記する。

簡単にいえば、AⅡしてみたいこと、BⅡさせてみたいこと（いずれも読者が責め手になった、と規定して）、となるであろう。尚取上げた素材は、本年度8月号までの分である。

## 二、A 類

(1)「縛り」——すべて後手縛りである。

身体の拘束作用以外の意義は少い。特殊なものとして「股間縛り」がある。静子、小夜子美津子に実施。小夜子Ⅱ鈴つき。尚、「ポーズ」「悦虐」の項参照。

(2)「脱衣」——羞恥責めの第一段階。この

作品では、全員逮捕後、すぐ全裸にされている。下着（スリップ・ブラジャー・パンティ）をとりさる手順がポイント。小夜子Ⅱズベ公達が力づくで。京子、美津子Ⅱ身体拘束の後

に。

○

(3)「ポーズ」——基本型が二種あり、いずれも後手縛・開脚が共通。第一Ⅱ立位。開脚は横に通した棒に足首を縛るが、柱を背にしたときは柱に固定。第二Ⅱ仰臥位。婦人科検診スタイルの変型とでもいうべきか。開脚を体と九十度になるくらいに、中空高く浮かせる。また、尻の下に枕をあてる。浣腸には第二型を常用。後手縛は鑑賞のため、開脚は羞恥感覚の刺激と実際上の利点のため。尚、片足だけを掲げる変型もある（静子の排尿）。

○

(4)「排尿」——むしろBに属する。各人も回数多く、静子七回、京子三回、美津子二回、小夜子二回。このうち小夜子の一回のみが失禁でA類、行為の前後にいろいろ工夫がこらされる。（後始末など）尚、静子にはふんどし着用時のものあり、また静子、京子同時展示（前方への放出共演）も一回ある。

○

(5)「浣腸」——羞恥責めの王者。(イ)、意思の力で耐えきれない、(ロ)、羞恥感覚の侵害が極めて強烈、(ハ)、短時間で実現させうる。以上の三要件を具備しているので羞恥責めの代

表格となっている。排尿（塩水飲用後の失禁）は(イ)の要件を欠くのでA類としにくいわけ。

尚、B類の排尿に対応する意味での（自発的）排便も考えられるが、何故が使われていない。また、排泄関係では「放屁」もあるが、これは作中に見当らない。行為の前後にいろいろの粉飾の多いことも(5)に同じ。静子五回京子・小夜子・美津子各一回と、静子が断然多い。京子・美津子の同時共演、小夜子のは見物人が一人（津村）だけ。

○

(6)「処女性」——処女を奪うことをいう。

静子以外の三名は逮捕時処女だったのでその相手をだれにするかに大変興味を持たれた。

（尚、桂子のははっきりしない）京子Ⅱ川田Ⅱ自分が空手で打負かした男。小夜子Ⅱ津村Ⅱ自分が振った横恋慕のニヤケ男。両名とも屈辱的な相手にソレをいただかれたといえる。

美津子は恋人の文夫であるからこの点救われたが、その代り衆人環視の中へ物理的強制という最大の恥辱を受けた。いずれにせよ、これはたった一回しか使えない方法だから。周到な筋書の推敲があったと推測される。小夜子、美津子については全く申分ないが、京子の場合はいくぶん性急に過ぎたように思われ



る。尚、「交合」の項参照。

○

(7)「交合」——これ自体は、責めではないが、相手との関係においてそうなる。(6)の処女性とは別の観念である。ここでいう交合とはむしろB類(させてみたい)に属するものが多い。美津子—文夫はその典型。外部から変な人物を相手役として連れてくる例がしばしば。静子—川田—田代—伊沢(悪徳弁護士)—岩崎(ヤクザの大親分)—捨太郎(白痴の大男)の五名。(捨太郎と現在進行中)京子—川田—森田(はつきりしないが)—吉沢—春太郎・夏次郎の五名。(最後の二人とは現在進行中)美津子—文夫(多分専属)。小夜子—津村、美津子—文夫は観客・撮影つき。静子—捨太郎もそうなりそうな気配。形態上の変型として美津子組にいわゆる尺八あり、京子—春太郎組に尺八の他、Anus 交合が行なわれそうな段階。尚、bestiality は未登場。小夜子—文夫はまず不可能。とにかく交合については(6)と異なりさまざまな組合せ及形態の変型が考えられる。

○

(8)「悦虐」——性感帯への刺激を意味する。(用語として不正確だが)これには多くの

の態様があるが次のように分ける。(1)、部位 clitoris への攻撃が最も多い。一番の急所だからという理由によるらしい。次いで scrotum anus (浣腸は別として)はほとんどない。各人別の差異はあまりみられないが、最近京子に関してやや anus に重点がおかれ出した。(2)、方式(手段)指技と薬剤、またはこの二つの併用が一般的。特殊なものとして股間縛りがある。vaginas にはお人形と称するゴム製の張型が使用される。小夜子には鈴がvとaに、京子にはガラス棒がaに使われた。尚、「レスピアン」の項参照。

○

(9)「剃髪」体毛の剃除である。静子と京子に実施された。京子は二回された。小夜子・美津子は何度かチャンスがありながら未だ実現されていない。頭髮の剃除は美的見地から好ましくなく絶対に行われるべきでない。腋毛については単なる記述すらないが、一の素材たりうるであろう。

○

(10)「写真」(撮影)常套手段である。被写対象は全体及局部の他、(1)から(9)まですべて該当する。実際上もそのようにされている。各人別の特色はあまりない。尚、録音つきと

いう入念なものもある。京子については、小夜子—津村と美津子—文夫の二種類が作成された。前者はセルフタイマー付きで津村が自分の顔だけ隠して写すという離れ技を演じた。記録の保存という本来の用途の他に、被写体(ヒロイン)の家族、知人、恋人などへも送付される。送付物としては、この他文書排泄物・恥毛などがある。

○

(11)「測定」——身体各部位の実測。実際上は一カ所に集中される。小道具作成のため必要という口実が使われる。測定内容は奥行・太さ・角度・面積・間隔など。各人とも一通りやられている。

○

(12)「表現行為」——(発言)会話として「」の中に入っている責め手側の感情表現である。身体の拳動を必要とせずA類のみに属する。形態は千差万別、とうてい記述しきれない。嘲笑・揶揄・叱責・賞讃・助言・強迫など。羞恥を侵し、屈辱感を与えることに主眼をおき、人格を貶めることを目的とした一切の表現が該当する。責めのアイデアもさることながら、私はこの部分が後記(14)とともに「花と蛇」における最も優れた技法である



と思う。千代夫人は実に効果的な人物である。

○  
(13)「その他」——これにもいろいろあるが、さして重要なものは少い。肉体的苦痛（特に痛覚）を与えることは極力回避されている。暴力を振っては、羞恥責とならないからである。

### 三 B 類

(14)「表現行為」——これは(12)に対応する受け手側の感情表出である。むろん責め手側より強制されるのであるが、(12)同様すべてを列挙することは不可能に近い。以下主要なものを例示しよう。(イ)、屈伏—陳謝、忍容、承諾など。(ロ)、挑発—積極的な媚態をいう。静子によくやらせており、京子にもその教育を受けさせつつある。(ハ)陳述—事実の告知、説明など。(ニ)喜悅—肉体的快感の意識を表出すること。尚、以上は抽象的形式であるが具体的内容及形式については(15)以下参照。

○  
(15)「テープ」——これはよく用いられる。外部の人間に自己の意思を伝達する目的「口実」で作成される。静子—遠山（夫）、京子

—山崎（恋人）、小夜子—内村（恋人）。伝達内容は(イ)、事実の説明—自分がいま、どこで、どのようにしているか。(ロ)、心境の吐露—今の境遇に自分がいかに満足しているか、(ハ)、依頼—探さなくてくれ、締めてほしい、とか送付物の知人関係への配布の要望など。他の用語として、交合時の喜悅状態の録音もある。(静子・京子)写真と違って受け手が自発的に自己の人格を表現するのであるから効果はより強烈である。尚、テープにする必要のない時は宣誓なる儀式が行なわれ作成書面を読み上げるという便法が講じられる。

○  
(16)「レスピアン」——変型張型を用いて前方を相互に連結させる。静子対京子、静子対桂子の二種類あり。組合せ、方式ともいろいろ考えられるところである。見世物として演出される関係で、腕の自由は奪ってある（後手縛り）。

○  
(17)「踊り」——始めから全裸なのでストリップではない。静子、小夜子各一回、調教が進めば本来のストリップも当然出現しよう。

○  
(18)「珍芸」——静子がバナナの寸刻みを披露

した。生卵のほうは調教指導を受けたようだが実演していない。現在、小夜子が鬼源の専任コーチを受けているので今後が楽しみというところ。一筆書きや、各種吸引作用が考えられる。

○  
(19)「隠語」——その部分の卑猥な名称を言わせること。静子、美津子、小夜子に実施。単なる俗称（オ——）だけでなく、生理学上の用語を駆使して、各部名、構造、機能、効用などを詳細に陳述させることも考えられよう。尚、これはいわゆる開陳サービスとも関連すると思われる。

○  
(20)「月経」——生理日を告知させる。小夜子に実施。生理現象そのものは今のところ扱われていない。

○  
(21)「妊娠」——受胎・出産願望を表明させること。全員に実施。交合の相手が多数の場合（静子—5人、京子—5人）、だれの子であるかをどうやって識別するのか、興味深い。受胎（確認）は二カ月、出産は十カ月を要するので、物語の進行状態からみて実現の可能性はほとんどない。



○  
 ②「自慰」——その経験の有無を聞きただし、嘘偽の事実を述べさせる。(経験者であり且つ愛好者であると)これをマクラに「悦虐」要求へと誘導する。美津子、小夜子に実施。

○  
 ③「結婚」——定まったパートナーとの関係をそのように見立て、宣誓させること。静子、白痴の大男、京子、二人のシスターボーイ、となっている。小夜子は未定。美津子

文夫の関係をそういつても差支えないが、恋人同士なので「責め」にはならない。尚、法律上正式の夫婦関係を成立させるには届けを出させないとだめで、現在の秘密が露見する危望を生ずる。痛し痒しといったところ。

○  
 ④「芝居」——静子・川田・捨太郎の三人で演ずる予定で、脚本を作ってリハーサルまでしたようだが未だ実現していない。調教が完成すれば各人とも順次このような演技が要求されよう。秘密ショー・映画のスター達と

もなれば当然のことといえる。

○  
 ⑤「技巧」——閨房内における媚態の総称をいう。現在京子が教育を受けている。エロチズムの色彩が濃厚なので「責め」との均衡上、「拒否」にあらざる甘い抵抗のポーズ、「相手の責めを求める仕草」などとなって現出するわけである。物語は今後次第にこのような方向へと、推移していくように思われるが、これは読者にとっては極めて望ましく且つ好ましい現象といわねばならない。

## 毎月確実に入手されるために

### 本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実に発売!

一月分	1冊	三五〇円 (送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円 (送共)
半年分	6冊	二一〇〇円 (送共)
一年分	12冊	四二〇〇円 (送共)

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたらという御希望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時に、お手元までお届け致します。○直接予約購読のお申込みを下さるのには

大阪市住吉局私書箱第四十一号曉出版株式会  
 社宛表記予約購読料をお払込みの上、何年何  
 月号より何カ月分と御指定下さい。  
 ○三月分以上お申込みの節は、送料、包装  
 代などは、総べて当社にて負担致します。但  
 し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分  
 二十円(切手可)の御負担を願います。  
 ○本誌は十月号から定価三五〇円に値上げ  
 になりましたので、予約購読料は三月分三冊  
 一〇五〇円、半年分六冊二一〇〇円、一年分  
 十二冊四二〇〇円になります。今後当分の間  
 誌代の改訂はしない予定です。  
 ○予約お申込みの方には、毎月二十日、印  
 刷完成と同時に、外部から見えないように厳  
 重包装の上、一斉に発送申し上げます。  
 ○毎月一冊宛お申込み下さる方は、誌代送  
 料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御  
 送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読  
 者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号  
 から何カ月分送れとお書き願います。第一回  
 分発送の際、明細表を雑誌に添布致します。  
 何月号からとお書きにならないときは、重複  
 や欠号をきたしますので御留意願います。  
 ○予約金が切れましたときは、封筒の上に  
 〇本号にて前金切の判を捺印致しますから  
 継続お払込み願います。継続のお払込みでも  
 何月号からと御明記願います。  
 ○局留にて雑誌をお受けとりにならない方は、  
 毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局  
 留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受  
 取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構  
 です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。  
 ば、当方では御指定の局留としてお送りいた  
 しますから、数日後その局で御受領願います  
 局での留置期間は十日間です。その間に  
 お受取りにならないときは、発送人に返戻さ  
 れます。



## カメラ・ルポ

この女ひとと

△ローズ秋山の巻▽

## 山本一章

ローズ秋山——説明するまでもなくサディズムショーのヒロインである。その秋山夫妻については、既に「ショウこそわが命」と題された対談（七月号）と、「真夜中の宴」と

た。私なりの角度で焦点を合わせたこの一文から、彼女の魅力の一端を認めていただければ幸いである。

○

傍題の附けられたハント（八月号）によってその全貌が浮彫りにされている。一気呵成に対談とハントをものされた辻村氏の情熱には驚きの外ないが、彼の意欲を掻き立てたこのカップルの魅力もまた非凡なものがあるのであろう。その後を承ってローズ秋山さんをルポすることは全く容易ではなく、色褪せたものになるのを怖れながらも敢えてペンをとつ

暑い日だった。正十二時、私は鶴見橋にある劇場まで秋山夫妻を迎えに行った。四カ月ぶりの来阪の機会を私は逃がしたくなかったのである。詳しい経過は省略するが、この魅力あるカップルを紹介してくれたのは勿論辻村氏であり、また彼等が私のルポの申入れに快く応じてくれたのも、この先輩や箕田編集長のバックアップがあったからだということ

を記して置こう。前日の打合せで、彼等の第一回出演までの二時間余りを利用しようということになっていた。食事や往復の時間を計算に入れると、写真の撮れるのは一時間程しかない。自信がないが、スケジュールの詰っている彼等のことだから致し方ない。正直云って私の本心は写真にはなくて、舞台用でない生のプレイを目撃できるという期待にあった。私が秋山夫妻のショーを初めて観たのは去年の秋のこと、その時は非常なショックを感じて箕田編集長に電話をしたのであったが、その時には一観客に過ぎなかった私が、



今夫妻と三人だけでプレイしようというのであるから、時間の不足を苦にする余裕がなかったというところである。

定刻五分過ぎ、秋山夫妻はひっそりしている劇場の出口から顔を出した。美智夫氏と簡単に挨拶を交わす。

「道具はどうしましょうか？ 良ければ少し持って来ますが……」

「いいですよ。ロープも蠟燭も準備してありますから」

私は舞台上で演じられているものを場所だけ変えて観ようというのではない。舞台の再現は既に辻村氏によって果たされているのであるから、その繰返しは今となっては陳腐なものにしなければならないだろう。ローズ秋山さんに焦点を合わせた被虐の図を、私の目で確めたという意図からする時、舞台用の小道具はこの際邪魔でさえあるのだ。

「今起きた所ですので化粧が出来てなくすみません。車の中ですわ」

「構いませんよ。反って素顔の方がいいですね」

「じゃ簡単に。このままじゃあんまりですか」

ローズ秋山さんは、ちらっと美智夫氏に視

線を送る。彼は軽く頷く。私はその無言の動作の中に、静かで根強い夫婦の愛情を感じていた。

食事を済ませて、三人が一室に落着いたのは一時過ぎだった。早速準備にかかる。ローズ秋山さんはバス室に消える。美智夫氏が口を開く。

「どんなものをやりますか？」

「まかせますよ。強烈な程いいんですが、僕を無視してやって下さればいいんですよ。勝手に撮りますから」

私がバッグの底から出した白いロープを、美智夫氏は確めるように揃える。準備ができ

て煙草をふかしていると、ローズ秋山さんがバスタオルを体に巻いて入って来た。

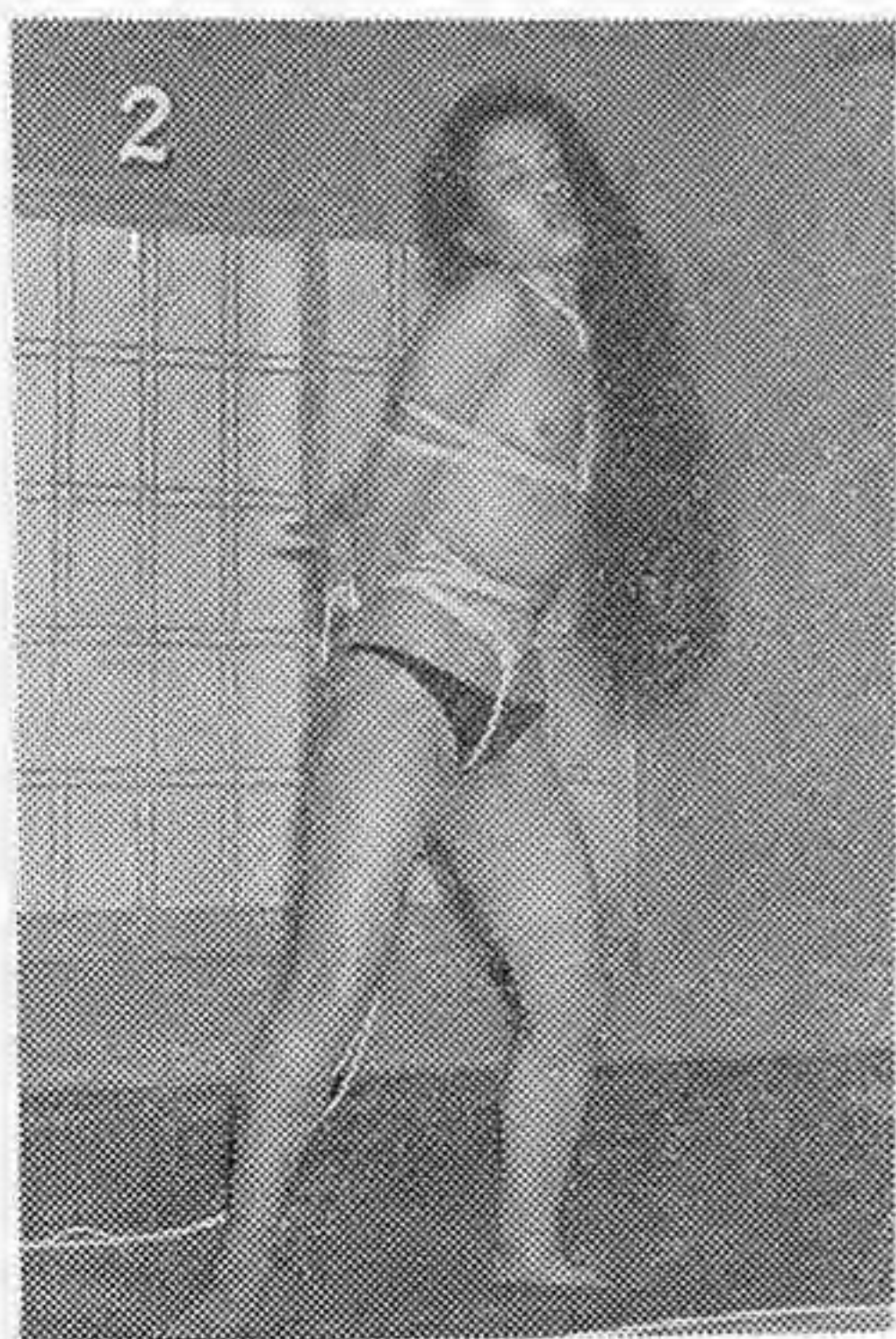
「髪は解いた方がいい？」

「うん。山本さん、パンツは着けさせてやって下さいよ。恥ずかしいがりますから」

残念だが致し方ない。初対面に近い私の前で、いきなり全裸のプレイができないのも当然だろう。それにルポされるには秋山夫妻の芸名は知られ過ぎてお

り、万一を慮って、警戒する気持も理解できる。

彼女は这个世界でツンパと呼ばれる幅の狭いパンツを穿いてバスタオルを脱ぎ捨てた。小柄だが均整のとれた裸身である。乳房が大きくはないが、彼女の場合不自然ではない。美智夫氏はロープを一本手にすると、立っているローズ秋山さんに近づき、いきなり両手を後に廻わさせて手荒く縄を掛けた。乳房の下に何重にも縄を巻いて、それに首縄を結ぶやり方は、特異なもので辻村氏や箕田氏の縛りとはまた異っている。それに縄の掛け方もショーで見たものとは違って強烈である。肌





への食い込み方でそれがわかる。ローズ秋山さんの顔に苦痛の表情が走る。後手首を縛った縄をウエストに巻きグイグイと容赦なく締め上げた時、彼女は呻き声を出した。

「アア、ウウウッ！」

美智夫氏は彼女の呻きに耳を藉さず、脛が上向きになる程強く締め上げた。その時の写真(1)である。豊かな黒髪が裸身の半分近くを蔽ってしまったが、ウエストや腕に食い込んだ縄の強さと、彼女の拡がった鼻孔を見ていただけるかと思う。息づかい荒く喘いでいる証左である。

「ウン、ウン、ウン、ウン」

断続したその呻きを、実際にローズ秋山さんの口から聞いたことは感激であった。別の縄が脛の下に巻かれ、体の前面から女体の下半身を縦に割って後手へ。臀部に廻わされた縦縄がしごくようにして力一ぱい引かれると彼女は思わず爪先立って悶えた。

「イタッ！ ツツツツ」

その小さい叫び声は、妙に煽情的な響きを持っていた。縦縄は黒いツンパと共に女体の中に陥没した。縄尻は強く後手の縄に巻きつけられて結ばれたが、縛られている上からのそれは彼女の掌を、みるみる変色させて行っ

た。写真(2)がその完成図である。そのまま膝立にして、後手首、右足首、太腿と連結したのが写真(3)である。ショーの時でもそうだが、片足を曲げて縛るのが美智夫氏独特のやり方である。自由の束縛と同時に凌辱の可能性を加味したうまい縛りだと思う。この後その女体は無情にも押し倒された。下はマットレスとは云うものの、投げるように押し倒された彼女は

弾みながら鋭い叫び声を上げて悶えた。立っただけで固く縛られた体を、横倒しにされた場合、縄の食い込み方が違って凄く痛いことは経験者なら知っていることであろう。私の経験上も、縛りだけでは皮膚に傷つけることは滅多にないが、この横倒しによってモデルの肌に内出血の縄の跡を作ることが多いのである。私は彼女の苦痛を想像して、ちょっと眉をしかめた。しかしその女体はそれで解放されたのではなかった。俯伏せになったローズ秋山さんの足首と太腿と後手を連結した縄が上へ引き上げられたのである。弓なりになった彼女の口から鋭い悲鳴が再び洩れた。



「イタッ！ タタタッ！ ユルシテ！」

美智夫氏の表情は変わらない。変ったのは私の方であった。しかし夫婦のプレイの場合、第三者である私が口出しすることはあるまいと唇を噛みしめた。横向きにしての股裂き、仰向きにしての乳房責、黒髪を掴んでの引摺りと責めは続いた。ローズ秋山さんの肌に汗が玉をなして溢れ流れた。冷房も彼女にとっては何の役にも立っていないようだった。

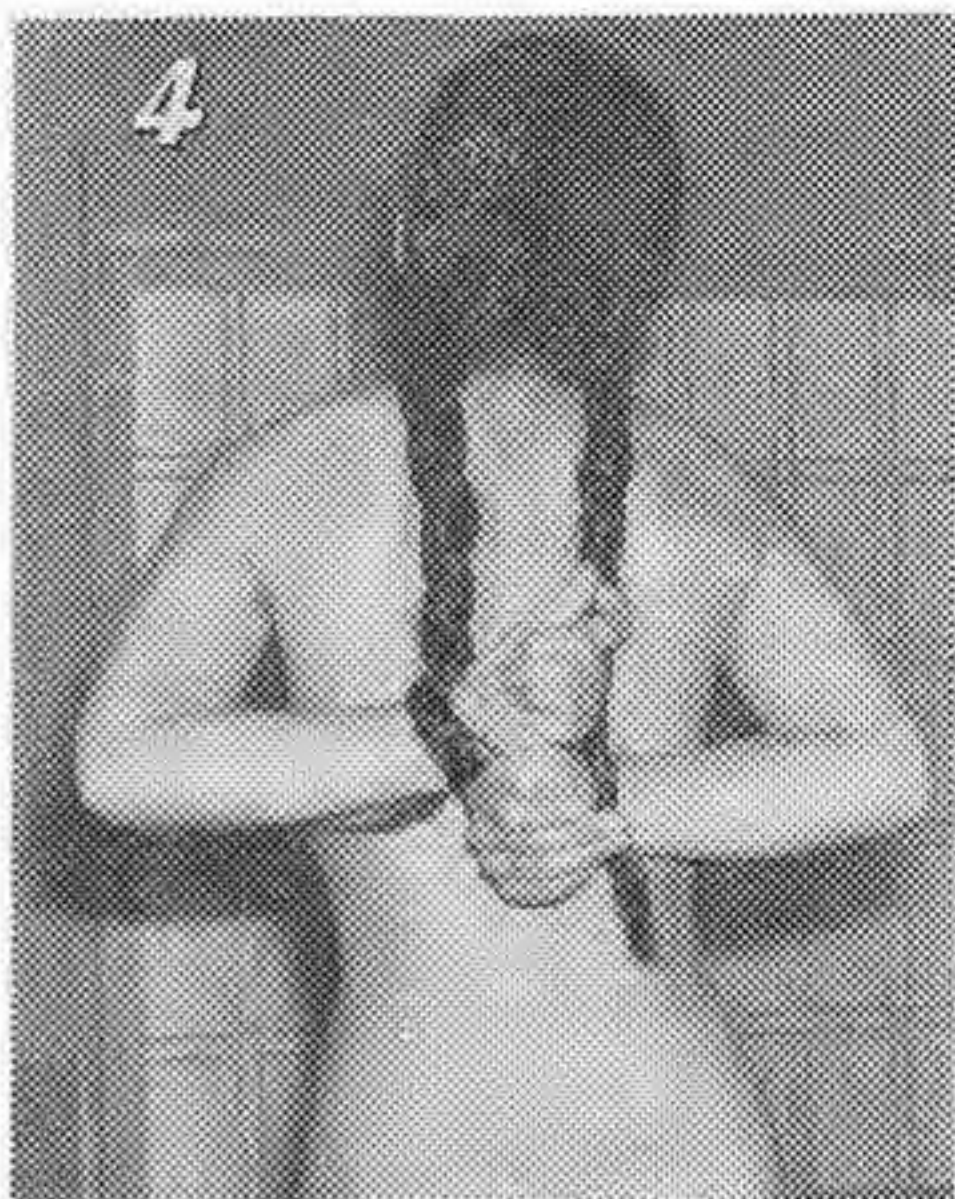
「一度休みましょうよ」

私はたまりかねて声を掛けた。

「まだ大丈夫ですよ。いいだろう？」

しかし彼女は嘆願するような目つきで主人





を見て答えた。

「手が……。一度解いて」

真迫の演技というのは、これを指すのである。勿論当人には責めそのものなのであるが、第三者である私に、与える感動からする時、正に真迫の演技に違いない。苦痛を苦痛として表現することは必ずしも容易ではないからである。事実、私の喉は乾き、カメラを構える手は震えていたのである。

解かれたローズ秋山さんは、頻りに掌を揉んでいた。痺れ切っていることが想像できたが、主人が横にいる以上、私のフェミニストを発揮するわけには行かない。

「苦しかったでしょう？」

「大丈夫ですわ。直ぐ治りますわ」

「気にすることありませんよ」

美智夫氏が横から割って入る。そして小声で彼女に何か云った。すると彼女は鏡台の前に坐ってその長い髪を編み始めた。三ツ編みである。私は器用にみるみる編み上げて行く彼女の手の動きに見とれた。

「面白いのをやってみますよ。今までにこんな写真を見たことはありませんが——」

美智夫氏は再び彼女の耳許で話しかける。

ローズ秋山さんはちょっと体をゆすって駄々をこねるような振りをしていたが、やがて立上ると私が最初求めていた姿になった。すると直ぐ両手が後にねじ上げられ、今編んだばかりのお下げの三つ編みが片方ずつ手首に巻きつけられた。頭髮による後手縛りである。写真(4)がその珍しい姿である。後手を下げようとすれば顔がのけぞった。その姿のまま彼女の乳房が驚づかみにされた。呻き。そして——。

頭髮による後手縛りが解かれると休む間もなく縄が掛けられる。写真(5)がその経過である。両肘が後に絞られ、両手首は両脇腹という変った縛り方である。私の好みの型ではないが、成行きにまかせる。更に腹部と股



間に縄が掛けられて、彼女はマットレスの上に横倒しにされた。三つ編みのお下げが、片方ずつ両脇腹の手に握らされる。それが写真(6)である。蠟燭に火を点けた美智夫氏がその女体に近づき、しばらく火の燃えるのを見つめる。私は蠟燭による責めが始まるのを待った。乳房が握られ、そのま近に寄せた蠟燭が倒される。溜った蠟燭が堰を切ったように、その白い乳房に落ちた。

「アツツ、ツツツ、アツツノ」

激しい悲鳴が沈黙を破った。

「上の方から落すと、そう熱くはないんですよ。ショーではそうしていますがね。この位の距離だと熱いもんですよ」

苦痛に表情を歪めているローズ秋山さんの



全身に蠟滴が落されて行く。しかも焰が肌を嘗めんばかりの至近距離からである。

「ツツツ、アツツ、ヤメテ、ヤメテ！」

女体は激しく悶えてその蠟滴を避けようところだったが、焰は執拗にその肌を追った。余り動き過ぎるのを見かねた美智夫氏は、彼女を俯伏せにして腰の上に馬乗りになった。もう逃げることはできない。蠟滴は滑らかな臀部とその周辺を襲った。彼の体の下で震え悶えるローズ秋山さんの悲鳴は、私の耳に何か夫婦愛の歓喜を響かせた。仰向けにされた女体に、やはり同じ責めが繰返される。それからの詳しいことは誌上をはばかるので省略するしかないが、私はその二人の姿にショートを離れたプレイへの熱中と、夫婦だけが理解



できる無言の和合を感じていた。そこには責めがありながら、責めを感じさせなかった男と女があった。そして性があるのだ。苦悶と陶酔と愛撫と。私は完全に、取り残されていた。苦悶が頂上に達した時、ショーでも見られるように、蠟燭の火が女体で消されたのである。臀部に押し当てられた蠟燭は、瞬間音を立てて肌を灼くように思えた。女体は押し殺した呻きと共に痙攣する。彼等のショーを近くで見られた方はお気づきと思うが、ローズ秋山さんの左の臀部には点々と無数の斑点がある。彼女の希望もあって、その臀部だけを写したのは提供しなかったが、その斑点が蠟燭の火を消した名残りなのである。彼等のショーの続く限り、ローズ秋山さんのその偽りのない痕跡は消えることはないであろう。それはいわば二人の愛の刻印にも通じると思われる。辻村氏の一文によれば、ローズ秋山さんは自らMではないと云っているようである。しかし私はそうは思わない。勿論Mも人によって定義が異なるかもしれない。だが私の見た限りにおいて、二人は仲睦い愛人同志であると同時に、その愛情の表現方法がSとMであることにも疑いを持たない。ローズ秋山さんは、残酷ショーのヒロインであると

共に、その夫婦の間においても被虐のヒロインとして生きているに違いないと思う。またそうであって欲しいと思う。そのショーがあくまでプロフェッショナルなもので、全く違った夫婦の生活が別にあるのなら、それは余りにも救いのないものではないだろうか。彼等のショーはそれ程妥協のないものである。その後三態程の縛りをやる内に持ち時間はやがて無くなってしまった。

私はローズ秋山さんの裸身の緊縛を百枚余のフィルム面に写し取った。その全部をここに発表できないのが残念であるが、いずれ機会があれば見ていただくこともあろう。

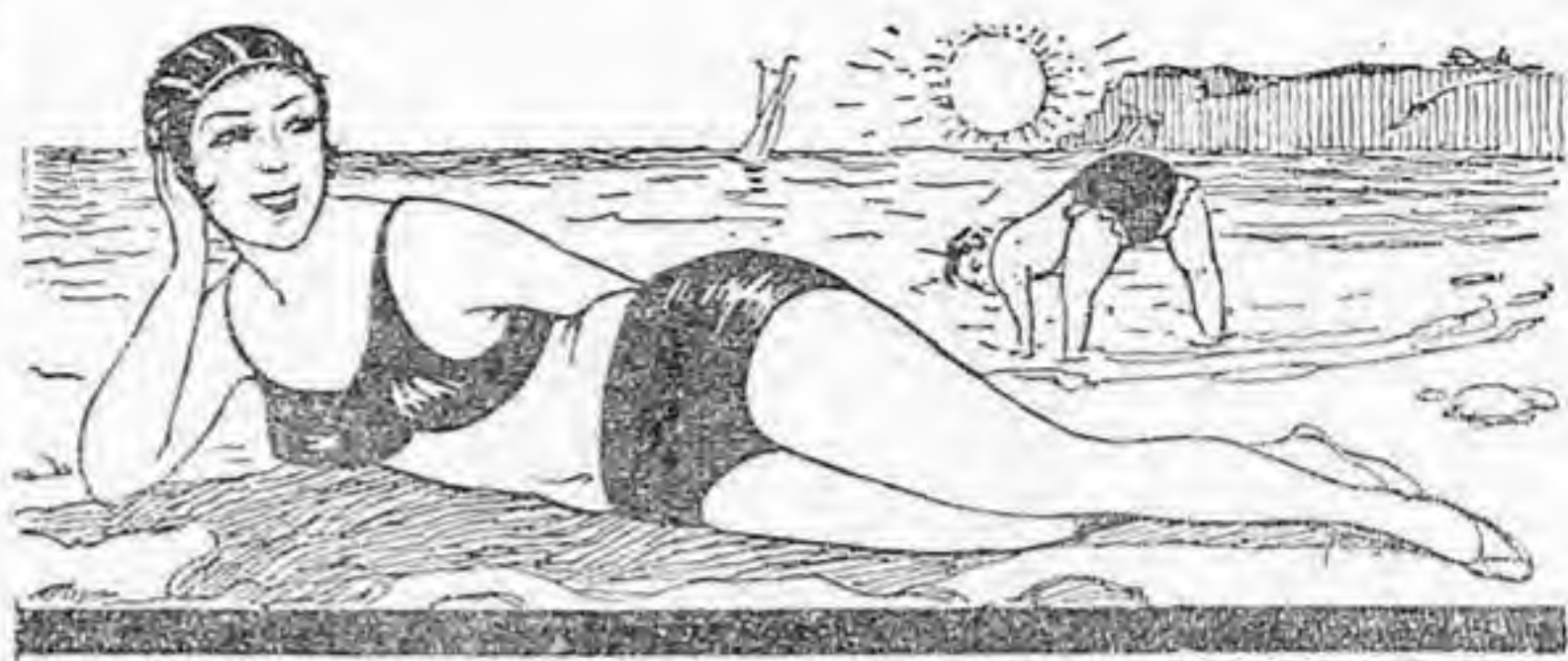
ローズ秋山さんは乱れた髪を直し、服を着た。私はその表情の中に疲れと共に満足感が秘められていたことを見逃さなかったつもりである。

第一回の出演時間が午後二時半からだというので、私は車を急がせた。しかし私の体の中にある感動の余波は、なかなか消えてはくれないかった。

彼女の健康と終りないヒロインの位置を祈ろう。

(この項おわり)





# 告白

懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表表

## フエチの海水浴

安田隆夫

私が海へ行く時には、たった一人で、出来るだけ遠く、顔見知りの人に逢う心配のない海岸へ、車をとばすのが毎年の例になっています。その時に車に積みこむ荷物は、いつも相当なものになるのです。

大きな風呂敷に、私、秘蔵のコレクションの内から、特に気に入っている切り抜きや、写真のブック。黒や赤のズロース。黒、白、ピンクの各種月経帯。綿メリヤス、ナイロンのスリーマー。パンティ。オシメカバーにオムツ数枚。更にカメラ、三脚等々を包みこんで持参することになっているからです。

遠いところで、知り人はいないと思うのですが、やはりどここの海水浴場でも、人の混

み合う中央部はさすがに自然と避けて、可成りのはずれに車をとめることになってしまいます。

最初の内は車のかげに隠れ、人の眼を気にしながら着替えました。海水浴場のことから、ハダカになることは別にどうということとはないので、黒いメンスバンドに足を通すことに、つい人眼をはばかってしまうのです。誰も気にして注視するような人はいりわけはないのですが、白昼、いい年をした男が、女の、それもメンスバンドを穿くというスリルがどんなものであるか、バンドマニアで、経験された方でないとかわかってもらえないのではないのでしょうか。

夏の楽しみは、海に、山に、生ビールにといろいろあるものですが、海水浴は私にとって最高の楽しみなのです。三十男が海水浴などというと、不審に思われる向きもありましょうが、勿論、月並の海水浴ではありませんし、子供達を喜ばせて幸福を覚える楽しみでもあります。



私の海岸での楽しみは、実にこのスリルに  
慄えるところにあるのです。

しかもそのバンドを着用したまま、海辺に  
遊ぶご婦人方の間を縫って歩き、さり気なく  
見て貰うところに無上の楽しみを求めている  
私でした。

意識しなければ、私の穿いているバンドは  
一見海水パンツとして受取られるでしょう。  
けれど、ベルトを通すところもないし、前側  
にはちゃんとローズバンドとトレードマーク  
が縫いつけてあるし、後からは、内側の替ゴ  
ムの所が扇型にハッキリとした形がついて、  
その替ゴム用のボタンが浮き出すように見え  
るのですから、少し観察を鋭くする人なら、  
すぐ生理帯だと解るだろうと思いますが……  
人間の観察力というものは案外なもの、と思  
います。初めて試みた時のスリルは、今考え  
ても素晴らしいものでしたが、当然起るであ  
ろうと予期していた嘲笑は起りません。私は  
ホッとすると共に拍子抜けの恰好でした。  
婦人だけに許されたメンスバンドを穿いた男  
が、なるべく女性の近くを、これみよがしに  
縫って歩き廻っているというのに……。

次には、自動車の傍でバンドを穿くとき、  
女性が通りかかるのを待って、わざとゆっく

りと、眼につくように穿くようにしましたが  
なかなか見てくれません。

見て笑い物にしてほしいという目的以外に  
海に入ると替ゴムの中に海水がたまり、岸に  
上っても水が抜けず、奇妙な楽しみを発見す  
ることもありました。

その内、前開き式のバンドも試みてみまし  
たが、さすがに、黒いバンドに白いボタンが  
目立ち、思わず知らずタオルで隠してしま  
いとても活歩する勇氣は出ませんでした。

人の眼を避けて、ボタンを外し、前開きの  
布とゴムを後へたくし上げたり、しゃがみ込  
んで、バンドの布の先端で、砂を掃いたりし  
て、写真撮影を楽しみ、全く、独りで有頂天  
になって、たわいのない悦びに浸ったもので  
した。

然し、時が経ち、日を重ねるに従って、そ  
んな独りよがりな物足りなさを感じ始めた自  
分に気がつき出しました。

賢明な同好者はお判り下さると思います。  
そうです。私が月経帯を穿いていることに  
他人様が気づいてくれないからなのです。  
やはり、私のような「変態」といわれる部類  
のスリルに愛着を覚える者には、他動的な刺  
激を求める心理があるらしいです。

そこで私は、二重替ゴムの、お尻一杯に飴  
ゴムが拡がり、前後のボタン留めのフチを別  
のゴムでフチどりされ、甚しくゴムの露出し  
ているメンスバンド（以前、分譲フォートの中  
で梨花悠紀子嬢が着用していられるのと同型  
のもの）を穿き、その上から、菱形の網目の  
ついたナイロン製、ピンク色の生理帯を穿き  
ました。こうすると、黒の地色にピンクの菱  
格子がハッキリと浮び上り、どう見ても男の  
海水パンツとは見えません。前後の裾に青と  
飴色の替ゴムが顔をのぞかせ、それを締め、  
留めている白い貝ボタン。一見して、まぎれ  
もなく婦人専用のパンティでありバンドであ  
ることは判然とするでしょう。

私は、そのままいつものように海水浴客の  
群の中へ行くつもりでした。でも足は自然に  
人影のない方へ向いてしまいますし、手は胸  
の内と正反対に、バンドの上にタオルを巻き  
つけてしまうのでした。私はいく度か、自分  
の手足を叱りつけましたが、駄目でした。海  
水浴場のはずれで足がすくんでしまい、どう  
しても進む勇氣が出ません。

でも、私のような人間にも神は哀れんでく  
れたのでしょうか。チャンスが訪れてくれま  
した。海水浴場とは反対の方から、三人連れ



の女性がやって来たのです。若い女です。キヤキヤはしゃいでいるところを見ると、まだ、よくいって高校生ぐらいのところでしょうか。私は身慄いする程、体中の血がさわぎ出すのを覚えました。

彼女達は笑い興じながら、だんだん近づいて来ます。五〇米、四〇米。勿論、彼女たちには私など眼中にないでしょう。何かしゃべっては笑い、いたずらしては逃げたり追いかけたりしながら近寄ってくるのです。

三〇米、二〇米。彼女たちとの距離がせばまるにつれ、私の胸はおどろ、膝がガクガクとふるえてくるのをどうしようもないのです。十米ほどにもなったとき、私のカッカとする頭から一切のことがフツとんだように、思考する能力が休止したようでした。

だが、行動は、希求するところに従っていたようで、腰に巻かれていたタオルは、頭にかぶさり、用意のサングラスが顔をおおい、バンドをこれ見よがしにさらしたまま、仁王立ちに、彼女たちの真正面に立っていたのです。

三人の中で一番背の高いお嬢さんが、最初に私の異常な「海水パンツ」に気づいたようです。明らかに不審そうな視線を、私に投げ

かけて来たのが感じられました。私は改めて血がさわぎ立てるのを覚えました。わざと彼女たちを無視した態度で、ゆっくりと背を見せたりして、何かを探しているフリをしながら、彼女たちの様子をうかがいます。

驚いたように一寸立ち止った彼女につられて、他の二人が何か訊ねたようでした。そして次の瞬間には六つの眼が、私のバンドに痛い程集中したのです。それは、私にとって、灼けるように貫ぬかれる程の想いの視線でした。つい先刻までのハシヤギ方は消え、三人共、黙ったまま、更に近づいて来ました。

横眼で、サングラスを通してうかがう私の目に、三人が顔を見合せ、「やっぱり」というふうに肯き合うさまが、よくわかります。一人のお嬢さんは吹き出しそうなのを、ようやく堪えているといった顔付きでした。

更に近づくと、彼女たちの視線は、バンドからはずされ、チラチラと素早い流し目に変りました。皆、体格のよい、可愛い顔立ちをした利発そうなお嬢さん方でした。

私は、彼女たちが三、四米まで来たとき、ゆっくりと歩いてその前を横切り、六つの眼が追っているのを感じながら、波打ち際に立ちました。そして思い切って両手を海水に浸

しました。四つ這いで貝でも探しているかのように……。

私の念願の図は実現しました。

即ち、大きなメンスバンドのゴムカバーはピンクの格子を透し、青いフチとりと白いボタン、そして大きくハミ出ている飴色ゴム。三十男に穿かれたそのバンドは、いまその全容を、一米と離れていない至近距離で、美しい三人の若い女性に贖められているのです。これこそ、私の長らくの夢。バンドマニアの冥利に尽きる図と云えるでしょう。

私は全身を耳にして、背後の「批評」を承ろうと緊張しました。気配では、お嬢さん方三人共、私の真後ろで立ち止まり、しげしげと眺めているように思えるのでした。

「この人どうしたんでしょね。月経バンドなんて男の人には関係ないものだろうと思うんだけど……」

「おかしいわね、海水パンツの代りにするなんてネエ。それにこんな変な恰好して、わざわざ私達に見せつけてるみたいよ」

「あんな飴ゴム製なんて、お母さんなんか使ってたものよ。しかも、ピンクのバンドまで当ててさ、海水パンツの代りにしてるんじゃないわ、きつと変態よ。いやらしい」



「頭がおかしいんじゃない？」

……聞えた訳ではないのです。私の勝手な想像なのです。きっと彼女達はこんな会話をしたのに違いありません。瞋められていると思ったのは私の一人合点で、横を向いた眼に三人が相当な距離のところを、肩を寄せ合いそれでも時々私の方を振り向きながら、急ぎ足で遠ざかって行く後姿が映りました。

私は、確実に観られた満足感と、その効果のあっけなさに放心したように、四つ這いスタイルのまま波に洗われておりました。

あの三人のお嬢さんが、もう少し精神的な大人であってくれたら。もう少し不良がかって、大胆な行動性があってくれたら……。

私の欲求の流れは、今の現実を幕開けとして、頭の中でその続篇を創り出し始めていたのです。

三人は立ち止って、私の方を眺めながら何やらヒソヒソ話し合っていました。打ち揃って引返して来ました。私はドキドキしながらも、さり気なく両手で海水をかき分けています。

「おじさんヨウ、もういいからそんな真似をやめて、チョット顔をかしてよ」

姉御株の背の高い女が声をかけて来ます。

私はいわれるままに砂浜に上り、彼女達の前に立ちました。

「よく見せてごらんよ。あたい達に見てもらいたくてそうしてたんだろ？ メンスバンドをサ」

と、いやにメンスバンドに力を入れて大きな声でいい、指をかけてひっぱりまします。

「へえ、ゴム付とはまた古くさいのだネ」

三人が揃ってあざ笑い、ひっぱり廻しますので、バンドがズリ下り、ボタンが外れそうになります。私は困ったことになったと青ざめるのを感じました。

「ついといで」

女たちは顎で私を促して歩き始め、私は、思案に余ってとまどいます。

「妙な恰好で女の子をからかうくせに、いざとなったら、ついてもこれないのかい？」

きつい眼付きで私を叱って、女はバンドの締めゴムに手をかけ、ぐいぐいと引張って行くのです。

「あんた、荷物はどこに置いてあるの？」

私は仕方なく車の傍らに彼女達を案内します。女は、車中にある荷物に手をかけます。

私は、例のストラップ類を見付けられたら困

るので制止しました。

「いけない？ 生意気いうわね。あんたみたいな変態男はね、あたい達みたいな若いピチピチした娘のすることに、どうのこうのって文句をつける権利はないのッ！」

平手打ちと共に、私の足はものの見事にすくい上げられ、どっと転んだ私は、ハチ切れんばかりに発育した、柔軟な三人の娘たちのお尻や、太腿や、膝で、ぎゅうぎゅうに抑えつけられました。余り急転直下の攻撃に、私はうろたえて悲鳴を挙げるだけでした。俯伏せになった私の頭から首は、女のお尻に敷かれて動かせません。背骨の所にも、一人の体重が馬のりに、もろに掛っていて、両手は背に廻わされて掴まれています。首に加っていた重さが外されて、ホツと私が息をつく間もなく、女の両手が私の顎に掛るなり持ち上げられて、体が弓なりに反らされたと思うと、背後から別の女の腕が伸びて、両側から私を抱えこむようにしたかと思うと、その腕が外れたときには、私の胸に、私の車に置いてあった細紐が巻きついており、私を抑えつけていた柔軟な重さが消えた時には、後手に縛り上げられた私が転っていたのです。

私は完全に彼女たちの捕虜になりました。



彼女達は、ハダシの足で、私を踏んだり蹴ったりしてからかい、抱き起すようにして、いろんな嘲罵を浴せながら傍らの松の木に縛りつけてしまいました。

「まあ！ 何よ、これは？ ズロースにパンティ。あら、スリーマーまであるじゃない」「どう、これ！ オシメカバーやらバンドがこんなに沢山よ」

「やっぱり、変態だったのネ。フン！」

三人は、私の大きな包を開けて、大声でわざと驚いたり感心したりしています。

「このカメラはチョットいいじゃない。これあたいが貰っとくわね」

「あたしは、このガスライターにするわ。あの人が欲しがってたから、きつと喜んでくれるワ」

「じゃ、財布の中身は、あたにくれる？」

晩ご飯ぐらいは、おごってやるからさ！」

私は慌てます。三人が、私のものを好きにしているのです。私は縛られてはいますが、必死になって抗議しました。

「ウルサイ！」

姐御が一喝して、私の前に立ちました。

「こうして欲しいのッ！」

彼女がつきつけたのは、パンティで猿ぐつ

わをされて緊縛されている美女の写真です。スクラップの中の私の秘蔵の一葉です。

「写真の美しい女の人とは大違いだけど、恰好だけは似てるわね。どう？ あんたの好きなゴムの味は？」

女は、可愛い顔に似合わず強い力で、メンスバンドの内の一枚を、私の口に押し込みます。

「あたいたいな若くてきれいな娘に、こうして猿ぐつわして貰えるなんて、嬉しいだろう？ ネエ、Hなおじさん」

しっかりと、押しこんだバンドの上から手拭いで締めつけて、女は、私の額を指先ではじきながら云って、三人で顔を見合わせてクスクス笑い、尚も荷物の中の金目の物を分配するのでした。

「折角だから、記念撮影といこうよ」

カメラの新らしい持主が、得意そうに提案し、立木に惨めに縛りつけられている私を背景にして、彼女たちは気取ったポーズを作ります。何回かシャッターが切られ、今度は松の木から離れた私を転がし、腰かけたり、馬乗りになったりしたポーズで何枚か撮ったのですが、撮影が終わったらしいのに、跨った女は降りず、猿ぐつわを外し、代りに三人の足

が、交互に私の顔を踏みつけたり、足の指で私の鼻をひねり上げたり、口へ足を突っ込んだりして執拗にいたぶり始めたのでした。

その日から私は、彼女たちの命令がある度に、命ぜられた通りの物を買って整えては車を飛ばし、メンスバンドと細紐以外は身につけることの許されぬ場所にはせまじ、車の運転か、ボートを漕ぐか、彼女達をマッサージさせられるか、食事の用意か……。とにかく働いていない時には後手に縛られ、猿ぐつわのゴムの臭いにむせていたぶり続けられる……という生活が繰り展げられるのです。

ああこの素晴らしい世界。私は果しない海の彼方を眺望しながら、バンドのゴムを締め直すのです。

フト気づくと、砂浜を男女のカップルがこちらに向って来ます。まだ相当に距離はありましたが、私は慌てて深みへ行き海水に胸まで浸りました。見て嘲ってほしいと希った筈なのに、男の姿があると、急にその望みがすくんでしまうのが不思議です。夕方近く、風が出てきて大浪がザブツと私に襲いかかって来ました。まるで私の嗜好に対する、世間の風当りの様に……。





〔告白〕

## 足への趣味

比左良 守

四月号で『美しき足を求めて』を発表して貰った結果、根山北氏より絶讃を頂き、又、まずい文を書き始めた。最近足フエチに関する記事が少ないのが残念だが、一人でも賛意を表してくれた同好者がある事を喜んでいゝ。以前はこんな趣味は私だけかと思っていたが、ふとした事から、風俗草紙を借りて読み、続いて本誌を手にし、色々な人々の様子を知らる事ができ、私の趣味の領域もだんだん広がった。

男性が女性の肌にあたりたいのは、万人共通だろうが、人それぞれその部分が違ふと思う。私はお尻などさわろうとは思わない。手や首の方にはさわることもあるが、何をおいても足にさわらないと満足しない。何故か自分でもわからないが、とにかく足が好きだからだ。それ以上の理屈はない。その足が特に美しいものであれば不思議と長く印象に残っているものだ。若い女性に出会っても、第一に目のいくのは足だ。それから顔、手、体格

を見て総合判定をする。これが長い間の習慣だ。しかし美人で、足も好みの型で体も均整がとれているのは稀少である。

春先から秋までは女性の素足がよく見えるシーズンだ。最近履物の関係で美しい足を見せてくれる機会がふえて喜ばしい時代となった。一つ不足なのは、学生の靴ばきだ。高校、大学の女生徒には若くて美しい足の持主がたくさんいるはずだが、靴の中では見えなくて残念だ。キャバレーへ行くのも一つは足を見せてもらいたいからだ。だから美しい足で踵から趾先迄よく見せてくれるホステスの所に限られている。趣味というものは年代と共に変わっていくものだ。足に対する趣味も以前と現在では大きく差があり、又、反面それだけ進歩したとも言える。でも根本が足である事については変わらない。又、趣味にはこれで満足という事がない。次々と新しい事を考えだしてやってみたくなる。又、同じ事でも好きな事は再びやってみたくなるので結構飽く事がない。

私の子供時代は年下の子供の足をよく弄んだものだ。その時代はただ見たい、さわりたいというだけで、今考えると平凡な遊びであった。だから美しい足という観念もなく、印



象に残っているものもない。しかし当時から足が好きであった事は事実だ。

中学生頃になると、さわるだけでは満足できず、足に色々な刺戟を与える事に興味を持った。方法としては、足の裏に虫をはわせた、ペンや鉛筆で落書きして擦ぐり感を与えるのである。又、長い針を足の裏の皮膚の厚い部分に突き通したり、ペンにインクをつけて入墨のようなしるしをつけて、軽い痛さを与える、等々色々考えだしてやったものだ。しかし直接自分の手で足の裏を撫でまわし、かきまわして擦ぐるのが一番手取り早く、又、好みにあっている。直接さわる所に、魅力があり、足への刺戟は足の裏の擦ぐりが一番適しているからである。何故なら足の裏は非常に敏感であり、又、擦ぐり責めは相手が喜んで受けてくれるからである。この頃は擦ぐり易い人を次々と擦ぐってきたが、取立てて印象に残る程良い足は無かった。

成人してからは、世間も広くなり良い足を見つける機会が増えてきた。数人良い足を擦ぐると前の足なんか失礼だが、もう気に止めなくなる。専ら心は良い足に集中して今度は何処で擦ぐろうかと、そればかり考える。今最上だと思う足も、次に良いのが出現すると

それが最上になる。やはり芸術品だから、これが最上というのではないのだろう。現在迄深く印象に残っている足で一番古いのは、私が二十二才の時から擦ぐり始めたものだ。何故印象に残ったかを考えると、一に可愛い女で好みの足型であった事。二つに非常に従順で協力的であった事。三に擦ぐる程よくなつき擦ぐられる事を期待しだした。もう結婚しているが、果して御主人に期待通りしてもらっているかどうか。

初めのうちは、娘の足の裏を擦ぐったりすると、親に報告されはしないかと心配したが自分から言う者は殆んどいない。やはり女としても秘密にしておきたいのだろう。おまけに何回もやっていると、擦ぐられるのが好きになるから不思議なものだ。友人には時々話すのがあるが、好きになった人は絶対に言わないから早く好きにさせる事になっている。それには上手に擦ぐってやる事だ。最初は何か機会を作ってこちらから積極的に擦ぐらなければならぬ。好きになった事は女は口では言わないものだ。相手の動作や素振りや判断しなければならぬ。性格上見込みのないのは早くあきらめている。初めはきらっといても温順そうな女は、だんだんと慣れてくるも

のだ。まあ大きく分けて、いやがる人、別に好きではないが擦ぐられてもかまわない人、擦ぐってもらう事を好く人の三種に分けられる。

又、年数が経つと単に足だけ握って擦ぐるだけでは満足できず、変ったポーズで擦ぐる事を考えだした。腰の所を肩にかついで上体を後に垂れ下るようにして前になった足を曲げさせて足の裏を擦ぐる事もやった。又ひざを後から肩にかけるようにしてかつぎあげ、やはり上体を後に垂れ下げてかついだ足の裏を擦ぐったこともある。前者は胴にしがみついているが後者の場合、背中合わせに逆さになっているのでしがみつけない。擦ぐるにも後者の方が足が近くて便利が良い。後向きに逆さにぶらさがった姿を見たくて鏡の前でかついだ事もある。しかし自分でかついでいては満足に眺める事もできず、又、私の好きな足の裏が全然見えない。その後何という映画だったか忘れたが、第三者として逆さにかつがれた女を見る事ができた。逆さにぶらさがった女性は何かしら好きだ。

その時代から今迄続けているのは、海老責めのような型にして擦ぐる事だ。先ずおおむけに転ばせて足をあげ、その足を頭の方の



床につくまで押さえこむ。すると自然にお尻が上に立って後首だけが床についた恰好になる。それを背中側の側から太ももと一しよに抱き込むようにする。顔は両ひざの間にはさむようになるので非常にきゅうくつだ。中には足先からひざ頭迄床につけても平気なものもあるが、一般に若い程やり易い。それから徐ろにひざを曲げさせ足を引寄せる。すると足の裏が丁度おしりの前に二つ揃うようになる。曲げた足も一しよに抱きこみ、頭の方は前にずれないようにひざ組みに据った私の両足を頭の前に回しておく。頭は動かせず体は曲げられて逆向きできゅうくつ、おまけにきつく抱きしめられている。足の裏は目の前で上向きになって私の手を待っている。擦ぐったくても絶対に動けないのが魅力だ。手は動くが邪魔と思われる時には後手に縛っておく。だが、すぐに縛る必要などなくなるものだ。腰にかけている時などは相手の頭を私の両ひざの間にに入れて、お尻と足を持上げて前と同じ恰好にして擦ぐる。ぎゅっと抱きしめて目の前に足の裏をおいて思う存分擦ぐりまわすのは今でも非常に好きだ。

風俗草紙を借りたその夜、徹夜で読んでしまったのだから、私には相当魅力のある雑誌

だったと思う。いろんな責めのなかから吊し責めに興味を覚え、構想をねり始めた。逆吊りはただ棒がぶらさがっているようで、やはり胸部を縛って吊り上げた方がポーズとして価値がありそうだ。しかし私は以前から逆さに向いた女体が何となく好きだったのでは非逆吊りにしようと考えた。私は自分の趣味でいこうというわけだ。又、足が下の方にあるよりは上の方にあるのが好みでもあるし、言わば足を尊重した吊り方とも言える。先ず候補者として、美しい足の従順な者と言う条件で一人に白羽の矢を立てた。その女に頼むと窓の辺り位に思ったらしく「うん、して」ときた。さっそく自分からねころんで両足を窓のしきいの所へあげていた。窓では低いので柱にひっかける設備をして吊り下げたのが、逆吊りの最初である。

逆吊りにした足の表情は又格別の見ごたえがある。経験が多くなる程足の表情は軟らかくなり、ますます美しくなる。初めの数回は足に力を入れるので硬直した感じだ。足の表情を見れば経験の度合がわかるわけだ。だから同一人を何回も吊れば吊る程、自然美がでてくるのでますます好きになる。その頃某所にお化屋敷が設けられた。その入口の前に安

達原の一軒屋の場面があった。腰巻だけの妊婦が逆吊りにされて、その下で鬼ばばが庖丁をといでいる。等身大の人形だったが、逆さになった妊婦のスタイル、顔の表情、足の型等私の好みにあい、非常に良く出来ていた。最初の逆吊り相手を、この場面を見せに連れていった。「どうだい。逆吊りにされるのはお前だけではないだろう」といったら「ふうん」とにっこり笑っていた。果してどんな気持でこれを見ただろうか。この頃から私はますます逆吊りが好きになっていった。後に伝説画集でこの絵を見たが、恐怖だけを極度に現わしており、魅力がなかった。

本誌も長年読んできたが、特に記憶に残っているのは、ずっと前に「足の遍歴」というのがあった。自分の趣味にあう事は良く憶えている。足に関する事、擦ぐり責めに関する事、逆吊りに関する事、これが現在の私の趣味だ。子供時代の足趣味からこれだけ発展した事になる。「足の遍歴」は女の足ではなかったが、可愛い美少年の手足を縛って土管の中にころがせ運動靴と足袋をぬがせて、美しい足を愛撫しようとしたが抵抗されてできなかったという告白だった。最近逆吊りの記事は少々でてきたが足とか擦ぐり責めの記事



が少ないのは残念だ。逆吊りにして美しい足を賞でながら擦ぐってやる。これが現在の私の最高の望みだ。逆吊りは全く無抵抗の状態だ。眺めるだけでも最高のポーズだし、その上、足を愛撫するにも最適だ。裸体でなくても私は一向に差支えない。足だけは十分に擦ぐれるからだ。

当時は、逆吊り等は一般に行われていないと思っていた。私だけが、自分だけの趣味の為にやっている事と、ひそかに幸福に思っていた。最近色々な本等により他の人も広くやっているらしい事を知り、拍子抜けと同時にうらやましい感がある。新婚旅行の宿で新妻を逆吊りにした人。妻の留守中に妻の妹を浴場で逆吊りにした人。女事務員が同僚の男に逆吊りされた事等、実際に沢山ある事がわかった。伊藤晴雨先生も撮影の為、妻を逆吊りしたという事だ。三原葉子が「九十九本目の生娘」で、水車に逆さに縛られたのがあったが、逆吊りとは違うけれども、こんなのも好きだ。

映画で「ふうてん老人日記」を見た事がある。初めから終りまで、足に執着した映画だったので良かった。特に足型を取る場面は最高だった。横になって投げだした足にまくら

をかまし、如何にも楽しそうに足の裏の拓本を取っていた。欲を言えば、もっと足の良い女優を使えばよかったと思う。この作者谷崎先生は小説の通り女性の足が好きだったそうだ。当時ニューフェイスが先生を訪問すると「足の裏をなめさせろ」と言って困らせたそう。美女拷問の映画にも逆吊りがあるそうだから是非、見たいと思っている。

もう五年程前になるが、擦ぐり責めを希望する女性があった。しかし足の裏だけは絶対しないしてほしいという。我慢できそうにないそう。これでは私の趣味にあわない。現在迄に取扱った一番若い美しい足は、十八才の高校生だ。若いだけにピチピチした足で型も非常によく、申し分なしだ。これなんかはすぐに、擦ぐられる事を予想して、長い靴下はかなくなった。すぐにぬげるように考えているわけだ。他の人がいても、皆が帰る迄待っていてそばへ寄って来る。この娘は常に足だけは清潔にしている。その娘の母がよく足について注意しているのを聞いたが、私とこの事を、知っているのではないかと思われる位だ。かなり長時間きゅうくつな姿勢で擦ぐっても、逆さにぶらさげても、一度も不平を言わず、平然と耐えているのだから尚好きにな

る。

妻も擦ぐってほしい時は「今日は足がきれいよ」と見せにくる。時には手で擦ぐるだけでなく、足の裏の軟かい所をなめまわしてやることもある。これが又、特別に気持ち悪いような擦ぐったような、で好きだそう。逆吊りもしばしばやってやるが太っている時は苦しいらしい。二十日ばかり入院した後、非常にスマートになった時、何回も自分から吊ってくれと言っていた。吊る私も軽くて便利がよいし、吊られる方もあまり苦しくないらしい。だから私は肥満女性を好まない。女は年と共に価値が落ちるものだ。若い頃は足のハダもきれいだし、足の裏もみずみずしいが、ふけるに従って足の裏などがガサガサだし、中年太りともなれば、全然魅力がなくなる。だから妻もそろそろ時代物になりつつあるわけだ。

最近当地にやってきて、第一号の足を見つけた。一般に言う美人ではないが、純朴そう、整った顔つきで体格は標準だが肉がしまった感じの娘だ。足はやや大きめに見えるが形良く、趾の揃い方、肉付等非常に良い。東洋医学で判定しても非常に健康そうな足だ。おまけに手の指も美しく、化粧やマニキュア



# 私の「美女拷問」考

並 川 新 一

最近、奇クで評判になっている映画『美女拷問』を見た。たしかに縛りの場面、とくに宙吊りにされてシナイで叩かれたり、エビ責めと棒責めの組合わせ、さらに日本刀を用いた特殊なサド責めなど、マニヤを喜ばせるシーンがカラーで、迫力ある描写がなされていた。しかし、ほんとのマニヤにしてみれば、いろいろ細部にわたっては不満の点も、少くないだろうと思った。どなたかも、その一つ一つをとりあげて不満をのべられていた。

私はSとMのマニヤであると同時に、一方、ズロースや排泄物マニヤである。その点、この貴重な映画について一言のべてみたい。

第一、戦時中という時代を考証して、娘の子や母親が正しく白のズロースを穿いていたことが何よりも嬉しかった。どうもこの種の映画では、おきまりのように白のパ

ンティしかでてこないのに、この映画では昔なつかしい白のメリヤスのぶかぶかのズロースだったこと。しかし、これも少しケチをつければ、責めのシーン、犯されるシーンの中で、娘の太股にピッタリくいこむズロースのゴムの感じを、もっとリアルに写してもらいたかった。

われわれマニヤにとって、あのズロースが太股にくいこむギザギザの裾口の感じが最も大切な部分なのだから。さらに希望をいえば、二人並んでズロースをむき出しにされるのなら、母親には白のメリヤス、娘の方には黒の木綿のズロース（ブルマー）を穿かせたかった。これから先は映画では無理にちがいないが、私の頭の中では、そのようなシーンが浮かんできたし、宙ぶりのシナイ叩きによって、むき出しになったズロースの裾の間からちびちびと排尿が洩れてくる……叩かれた痛みで下腹部の緊張

もせず、本当に自然的に美しい。こんなのが私は好きだ。足というものは次々と好きなのがでてくるから有難いものだ。今迄の最良よりまだ良いのがでてくるから、楽しみなものだ。

一度だけ逆吊りの経験者を二人呼んで、お互いに見物させた事がある。どうせ吊られる事は二人共わかっていたはずだが、どんな気持で人の吊られるのを眺め、又自分も吊られただろうか。お互もよく知った仲ではあるしうすうすは自分ばかりでなく、もう一人もこんな事をされている位は知っていたと思う。二人共いる所で準備をし、順に一人ずつ逆吊りする事を言い渡した。一人は数分の経験しもなく、もう一人は、二十分でも平気だった人。どちらを先にしようかと考えたが長持ちする方を後にしたのが楽しみがよい。三分位で一人をおろし次のを吊った。二人共常ににやにやしながら互いに吊られた姿を眺めていた。

前には人間を逆さに吊すなど考えても見なかったのが、現実には女性を逆吊りするようになった。一般の人に言わせれば、全く奇怪な趣味だろう。何回も吊る度に色々と工夫をして、労を少く、痛さを軟げ、より美しい環境



が一瞬ゆるむと、大抵失禁するものである。あの白いズロースからシトシトと黄色い液体がにじみ出て、やがてシユミーズをぬらし、下に細く長く流れてくるものが見られたら……娘が椅子に手足を縛られて、両親の日本刀責めを見せられるシーンがある。そのとき娘が恐怖の余り、お粗相してしまうなら……そのあと憲兵が娘のためにオシメカバーを穿かせるように命令する。そして伍長の手で嫌がる足を開けられ、ゴムのぶかぶかのオシメカバーをはめられる……。

もっとも、こんな希望を出すならきりがないが、拷問の一つに娘に、浣腸責めがなされるなら、どんなにすばらしいことだろう。(これは戦後に娘が憲兵の娘を山の中でいじめるシーンで用いてもいい)娘は手足を椅子に縛られて動けない。しかも両足を開けられて、女として最も恥ずかしい姿である。その姿勢のまま、兵隊たちのみている前で恥ずかしいものを溢出させたら……カラーフィルムで、白いズロースか黒のブルマーをとおして太股をつたわって床へこぼれていったとしたら……このように私の夢はつきない。たしかに、この映画は拷問のシーンがリアルですぐれているだけに、浣腸責めとまでいかないまでも、何ら

かの形で排尿場面の感じを暗示するセリフかシーンがほしかった。

かつて『エデンの海』という日活の江波杏子の映画があった。その中で、女学生が運動会でころんで気絶し、医務室のベッドに運ばれるところがある。受持の先生が見舞にいったとき、意識をとりもどした彼女が、みるまに真赤になり「オシッコが出ちゃった」といって、黒のブルマーの上から毛布をかぶるシーンがあった。そのシーンが、どんなに私を感動させたか――。

もし映画として黄色い液体がもれる場合が許されないのなら、せめて椅子に縛られて叩かれた娘が、いつのまにかお洩らしをしているのに気づいて恥じらう姿がほしかった。犯されるシーンも、白い裸にむき出されてズロース一枚にされるところ、そして足をバタつかせるところは、とてもよかったが、もう一つ希望をのべるなら、白いズロースを脱がされたその下に、ピンクか黒のメンスバンドを穿いていたとしたら――。

ああ、これは私の『美女拷問』である。満たされない私は、せめて一人でホテルの床の上に広いビニールをしいて、自作自演の美女拷問を思いきり楽しもう。ゴムのきつい木綿のズロースを穿いて――。

を求めてきた。上を眺めれば何か吊れそうな物を考えるクセがついた。家の中では梁を見て、山へ行けば枝ぶりを見て、遊園地ではブランコを見て、工場ではクレーンを見て、それぞれ吊るす構想を考えるのが楽しみだ。逆吊りなどは頭が充血して不可能と思う人もあろうが、案外簡単で、小竹一浩氏の言の通り私も逆吊りは最高のポーズと思っている。

神の作り給うた足は非常に便利にできている。くるぶしより足首を細くしてあるのも、吊り紐をかけるためだと私は思っている。もしこれが反対ならすっぽぬけて吊す事はできない。擦ぐりに対しても脇の下や内股はおおう事ができるが、足の裏だけはかくす事ができない。全面露出で有難くできている。擦ぐり責めでも逆吊りでも、私には素足あつてのものだから、強いて裸は希望しない。スマー卜な体は裸にこした事はないが、足だけは必ず素足を要求する。まだこれからどのように趣味が変わるかわからないが、足への趣味がこんなに迄発展してきたわけだ。

これからまだ、私の発展は続くだろうけれど、「美しい素足」という根本的な素材を離れては成り立たないと思うのだ。







肉体を眺めている。

鬼源が、片肌脱いで立ち上る。

「ただ、……演じるだけじゃ駄目だぜ。御見物衆は、静子夫人が、どういう具合に小夜子を調教するか、それを御覧になりてえんだからな。いいか、小夜子にコツを教えてやりながら、プレイするんだ。わかったな」

といい、鬼源は、夫人の白い肩のあたりを手で突いた。

静子夫人は、線の美しい端正な頬を染め、顔を鬼源から、そらせる。

「よ、わかったな」

鬼源は、ぐいと夫人の頸に手をかけ、顔を自分の方へ向けさせると、浴びせかけるようにいった。

静子夫人が、翳の深い眼を悲しげに閉じ合わせ、小さくうなだれるのを見た鬼源は、満足げにうなずいて

「じゃ、始めて頂こうか」

鬼源は、意地の悪い眼つきになって、その場にあぐらを組む。

「小夜子さん」

静子夫人は、濡れた美しい眼を開き、小夜子の覚悟を求めるようにいった。

「私達、もうこの運命から逃がれる事は出来

ないのよ。お願い、小夜さん、静子と一緒に地獄に落ちて——」

「——先生、小夜子、もう——もうどうなったって——」

二人は、そういうと、ぴったり頬と頬を合わせ、熱い涙を流すのである。

ほのかな香気が立ちのぼるような光沢のある白い頬と頬を密着させ、しばらく、すすりあげていた二人であったが、

「何時まで、メソメソやってやがるんだ。いい加減にしろ」

と、鬼源が、銀子に注がれたウイスキーを口へ運びながら、ガラガラ声をはり上げる。早く小夜子を燃え上らせ、受入れ態勢を作ってやらねえか、と鬼源はいうのだ。

美しい瞳に翳の深い、もの哀しげな色を浮かべて、静子夫人は小夜子から頬を離すと、

やや首を斜めにしながら、小夜子の羽根のように柔かい唇へ、そっと、自分の唇を当てがった。小夜子は、その時、ぶるっと全身を慄かせ、もどかしげに身を揺すったが、すぐ、うっとり眼を閉じ合わせ、夫人の接吻を小さく唇を開いて受け入れる。

静子夫人の濡れ絹のように湿り気を帯びた舌が小夜子の唇を割って中へ入ると、小夜子

は、上気した頬に一筋二筋、涙を流しつつ、夫人の舌を吸い、熱い吐息と共に舌をからませるのだった。このまま、静子夫人と共に、桜色の雲に乗り、大空高く舞い上りたい——小夜子は、上気して夫人の舌を吸いつつ、そんな思いになってしまふ。

やがて、静子夫人は、小夜子の口中を舌端で愛撫しながら、豊満な乳房を小夜子の柔かい、ふっくらとした乳房に当てるのである。

乳首に夫人の乳首が触れた途端、あっと小さく声をあげ、五体がしびれ、揉み抜かれるような陶酔が小夜子の身内にこみ上ってくる。

敬愛し、憧れをもって、接して来た美しい静子夫人の乳頭が自分の胸に——そう思うだけで小夜子は、かっと全身が火照り出すのである。

更に静子夫人は、むっちり肉ののった、妖しいばかりに艶めかしい……小夜子の柔かい乳色の太腿に押し当ててくる。

「——ああ、先生——」

小夜小は、静子夫人から唇を離すと、ぴったり、夫人の頬へ上気した頬を当てて激しくすすり泣く。

「——小夜子さん、お願い、静子の言う通りになって！」



静子夫人は、呻くようにさういうと、ねっとりと、白い脂肪ののった太腿を……け出しやがて、それを小夜子の……びったりと……がった。その瞬間、小夜子の心臓は激しく高鳴り、さっと、困惑と羞恥の色を顔を一杯に漲らせ、思わず、全身を火のように熱くしたが、静子夫人は、……たそれを、ゆるやかに……始めたのである。

「あっ、ああ——先生」

「——許して、許して、小夜子さん。調教するとは、こ、こういう事なのよ」

静子夫人は、屈辱の涙を流しながら、それと同時に、小夜子の可憐な薄紅色の乳頭に乳房もすりつけ、また小夜子の耳や頬に軽く口吻しつづけるのであった。

固唾を呑むようにして、見物している悪鬼達は、哄笑し始める。

「よ、小夜子、先生と調子を合わせて、おめえも……えねか」

鬼源が大声をあげ、田代達と顔を見合わせて、笑い出した。

「——ね、小夜子さん、貴女も、ね、ね、お願い——」

静子夫人は、小夜子のうなじのあた……を唇で羽毛のように優しくくすぐりながら、小夜

子の共同作業を求めるのだ。

静子夫人の……で、充分、肉体に……小夜子は、やがて得体の知れぬ魔風にあふられ出したよう、夫人の動……わせ、ゆるやかに体を左右へ……かし……たのである。

いいぞ、いいぞ、と見物人達は、一せいに拍手し始める。

ほんのりと翳っている煙のように柔かい……が、風にそよぐ芒の葉のように淡い草ずれの音を奏で始めた。じっと、それに眺め入る田代や川田、吉沢達は、ムズムズこみ上ってくるうずきをもてあましたよう、フワフワと……浮かし、ゆるやかに……ねらせている美女の傍へ吸い寄せられていくのだった。

小夜子は、次第に息をはずませ、……は一段と激しくなり始める。

「へへへ、どうだい小夜子嬢。感激のあまりいう事なしってところだな。美しくて、優しい静子先生と……の……つこだ。え、天にも登る気持だろう」

吉沢がそういって、黄色い歯を出し笑い出す。

小夜子が、その言葉に背筋に水をかけられたような思いとなつて、はっと動きを止めると、忽ち、鬼源の怒号が響き渡るのだ。

「何してやがるんだ。こっちがよしというまで、つづけるんだ」

静子夫人が、小夜子の耳に唇を当て、すすり上げるようにいう。

「——つづけて、ね、お願い」

二人の美女は、再び、臉を閉じ合わせ、もうこれが最後という風にびったり唇と唇を合わせ、くねくねと……かせ合うのだ。

二つの乳房……を相手に喰いこまずばかり……つけ合い、なめらかな腹部と……合わすように密着させ、……を撫でるように、さすり合うように摺り合わせている静子夫人と小夜子をじっと見つめていた千代は、たまたまなくなったようにフラフラ立ち上る。

「如何が？ 奥様にお嬢さん。日本舞踊なんかより、その方が、ずっと楽しいそうじゃありませんか」

と、二人をからかって、千代は、田代の方を見る。

「ね、社長、この奥様もお嬢さんも、揃って藤川流の名取りでいらっしゃるのよ。お尻の振り方なんかも、随分とおしとやかでいらっしゃるでしょ。そう思いませんか」

田代も、えびす顔でうなずき、  
「なるほどな。そういえば、なかなか品のい



い身のこなし方だ。そのうち、この道の名取りになってもらわなきゃならん」

と、声をあげて笑った。

銀子と朱美は、かすかに揺れ動く美しい二つの肉体の周囲を笑いこけて廻っている。

「さ、もっとしつかり……わすのよ。フフ、どう？」

熱い頬と頬をびったりと当て合い、互に、すすり上げながら、なよなよ……合う静子夫と小夜子の顔を、のぞきこむようにしながら銀子はからかったが、

「でも、何だか物足りないでしょう。お互に女同志って事がじれったそうね。一寸、可哀そうみたい」

そして、銀子は、鬼源の方を見て、ニヤリと笑う。

鬼源は、うなずいて、桐の箱を手にし、二人に近ずいた。

「さ、気分が乗って来た所で、支度にかかるぜ。こっちへ身体を廻しな」

鬼源は、ゆるやかに左右……ている夫人の量感のある双尻を手でたたく。

静子夫人は、上気した頬に更にパツと紅を散らし、小夜子の艶やかな肩へ、その美しい顔を隠すよう深く埋めるのだった。

「そんなに羞しがっちゃ駄目よ。奥様は、今や大スターなのよ。ハイ、まわれ、右」

銀子と朱美が、静子夫人のふくよかな白い肩に手をかけた。

「小夜子さん。辛抱して、ね、お願い」

静子夫人は、その美しい頬に、ハラハラ熱い涙を流しつつ、小夜子の頬や耳たぶ、唇などへ、いたわりと、はげましの意味をこめた柔かい口吻を矢つぎ早やに注ぎ、決心したよう、さっと身体を一廻転させ身じろぎもせず立つのであった。

田代や川田、吉沢達の眼が、美しい静子夫人のまぶしいばかりに光沢のある全身像に注がれる。

静子夫人は、凄艶なばかりの容貌を正面に向け切長の美しい瞳を静かに閉じ合わせた。

充分に脂肪が乗り、まばゆいばかりに、乳色に霞んだ肌の色、胸の見事な隆起といい、腰のカーブといい、美術品のように引き緊った静子夫人の美しい、そして、官能的な肢態は、何時になっても、男達の眼には新鮮なもの。そうして、妖しく美しいものとして映ずるのである。

「小夜子も、こっち向いて——」

静子夫人の大理石のようにツルツルした背

に額を押し当てるようにして、すすり泣いている小夜子の肩に銀子と朱美が左右から手をかけた。

小夜子が身体を廻転させ、うしろを向くとその前に、津村義雄が、ニヤニヤ笑いながら立っている。その、狡猾そうな彼の顔を見た途端、小夜子は、血の出る程、唇を噛みしめさっと顔を横へそらした。

この屋敷から救出してやると自分を騙し、毒牙にかけ、その上、地獄の底にまで突き落した反吐の出る程、憎い憎い男——口惜しさに全身が打震えるものの、しかし、今の小夜子は彼に対し、呪いの言葉を吐く気力はもうなかった。

「ハハハ、小夜子、よかったじゃないか。敬愛する静子女史の調教を受ける事が出来るんだからな。今日の初稽古を、僕はここでゆっくり見物させてもらうよ」

静子夫人は、心臓をえぐられるような口惜しさと羞しさに、わなわな身体を慄わせる小夜子をなだめるつもりか、小夜子の背中で縛りつけられている手首のあたりを、縛りつけられている手で握りしめる。

がまんするのよ、いいわね、小夜子さん。と、夫人は心の中で血涙を流して小夜子に



い含めているのだ。

小夜子の華奢な雪のように白い肩から、麻縄に締め上げられた白桃のような乳房、繊細な、それでいて、充分、官能美を湛えた太腿あたり、義雄はギラギラする眼を向けていたが、鬼源が義雄に近づき、小夜子の……を指で示しながら、何か小声でささやくのであった。

「成程、体勢が整っているかどうか、点検するわけか」

「そうなんですよ。まだ充分といえなきや、もう一度、……こさせる。自分達の努力でそのなるまで、何度でもくり返させるんです」

鬼源は、出歯をむき出して笑うのだった。

鬼源の助手という事になっている銀子が、静子夫人の前に身をかがめ、朱美が小夜子の前に身を沈める。

「あっ、嫌っ」

あまりにも出しぬけに朱美の手がのびて来たので、小夜子は、思わず悲鳴を上げ、腰を引き、全身を硬直させた。

「馬鹿ね、ちよっと具合を調べてあげるのじやないの。お客達の前で演じる時はね。こういう風にするのが定法なのよ。さ、あまり手数をかけさせちゃ駄目」

朱美は、そういうや小夜子の麗わしい両肢を片手で抱きしめるように、片手を――。

小夜子は、うっとうめき、美しい眉を寄せ首を大きくうしろへのけぞらした。

小夜子の後頭部が柔軟な静子夫人の肩にもたれかかる。

「――小夜子さん」

静子夫人も、ぐっと美しい顔をのけぞらせ

小夜子の肩に頸のあたりをすりつけるのだ。

「まだ、充分とはいえないようね、小夜子。

ね、銀子姐さん、奥様の方はどうなの」

「こっちも充分じゃないわ。最初だけにお互に遠慮し合っているのだわ」

ゆるやかに……ながら、夫人を調べていた銀子は、立上り、

「仕様がないうわね。さ、も一度向い合って、言われる通りにするんだよ」

打ちのめされたように深く首を垂れ合った静子夫人と小夜子は、あまりの屈辱に、ブルブルと体を慄わせて、号泣する。

「やい、何をもたついてやがるんだ！」

鬼源が再び、ガラガラ声をはりあげた。

「そんな調子じゃ、何時までたっても満足に舞台が勤められねえじゃねえか」

鬼源は、静子夫人の前に立つと、いきなり

ピシヤリと夫人の頬を平手打するのだ。

「おめえ、それで弟子を仕込んでるつもりなのかよ。小夜子がモタつくのも、みんなおめえの責任だ。俺は、随分とコツを教えた筈だぜ。なめやがると承知しねえぞ」

鬼源は、更に二発三発と夫人の頬を平手打する。

「待って！」

小夜子が、悲痛な表情で声をあげた。

「小夜子が悪いのよ。ね、先生、お願い。も一度、小夜子を……！」

そういうと、小夜子は、くるりと身体の向きを変えた。

「先生、小夜子を調教して。さ、早く」

小夜子は、静子夫人の苦衷を知って、自分から、悪魔達の望む女になり切り、夫人と共に地獄へ落ちこもうと悲痛な決心をしたのである。そうした小夜子の心情は、静子夫人の胸に痛く突きささった。

「小夜子さん！」

静子夫人は、小夜子の方へ身体を向け、鬼源の激しい平手打を受け、硬くなった頬に幾筋もの涙を流しながら、小夜子の唇に激しい勢で自分の唇を当てたのである。

先程の……とはまるで違った激しい……



二人が展開させたので、卑劣な見物人達は、へへえ、とばかり眼を見はる。先程までの絹糸のようにか細いすすり泣きは、獣……めきにかわり、全身を躍動させ、あられもないくらいに激しい……を演じ始めるのであった。

激しい泣き声を発しながら、狂ったように振り動かせる……波打ち、……う乳房と乳房。

「ねえ、次は、こうして……わ、小夜子さん」

静子夫人は、小夜子の唇から唇を離すと、そういつて、じっと削ぐように上半身を後へのけぞらし、逆に……へ突き出すようにした。小夜子も、ためらわず、静子夫人と同じポーズをとる。

その……だけを……わせ、……い泣き声を立て合いながら、激しく……わせ出した夫人と小夜子。それを見た田代、川田、吉沢達は、互に顔を見合わせ、ニヤリと口元を歪めるのだった。

千代と義雄は、カメラを手にし、そんな熱演をくり開ける二人の周囲をグルグル廻りながら、シャッターを切りつづけている。

やがて、二人の美女は、再び、鬼源に号令

され、互に身体を廻し合い、点検を受ける事になる。

「次の当番は、千代夫人と津村さんにしようじゃないか」

田代が愉快そうに腹を揺すって笑うのだ。

「まあ、私が——いやーだなあ」

千代は、口に手を当てて笑いながら、しかし、万更でもなさそうな顔つきで、全身に脂汗をにじませている静子夫人の前へ立つのである。

象牙色の端正な顔を上気させ、睫毛の長い切長の瞳を軽く閉ざして、静子夫人は、大きく息ずいている。

「すごい熱演ね。私、見ていて、息苦しくなっていましたわ」

千代は、そういつて、何を思ったのか、左手の指にはめていた大きな翡翠の指輪を抜き取り、静子夫人の頬を指でつつく。

「一寸、ごらんになって、奥様。この翡翠の指輪は、踊りの会に出席されたりする時、奥様がよくはめてらしたものですわ。藤色の小紋の着物を召した奥様が、この指輪を見てみると、すぐに思い出されて来ますのよ」

静子夫人は、翳の深い、しっとり潤んだ瞳をかすかに開いて、千代が鼻先へ突きつける

翡翠の指輪に、そっと向けるのである。

「ホホホ、これを眺めていると、うしろの小夜子さんと踊りのお稽古をなさっていた時の事が思い出されるのじゃございません。この指輪、今、私が愛用しているのですけど、何だか、奥様の事を思い出すようで、淋しい光を放つんです」

千代は、そういつて、次に指輪に向い、「今、あなたの眼の前に、あなたの元の御主人様がいらっしゃるのよ。ホホホ、え、何だつて？ そう、奥様の匂いを嗅ぎたいの。じゃ、今、たっぷり嗅がせてあげるわ」

千代は、一人ではしゃぎながら、その場に腰をかかめると、ねっとり脂肪を乗せた、柔かい光沢のある夫人の太腿、内腿に、翡翠の指輪を摺りつけていく。

「まあ、この指輪ったら、エッチね。どうして、そんな所へ行きたがるの」

うっと静子夫人は火のように熱くなった顔を伏せ、柔かく揃った長い睫毛を悲しげに慄わせた。

「奥様がとても可愛がってらした指輪じゃありませんか。指輪も、こんなに奥様を恋しがってるのよ。ね、いいでしょ。一寸の間、お腹の中へ——」



「嫌、嫌——ああ、千、千代さん」

「ホホホ、そう羞しがらなくなっていていいじゃありませんか——さ、奥様のお許しが出たわよ。懐かしい奥様の匂いを気がすむまで嗅がせてあげるわ」

「あっ、ああ——」

千代は、静子夫人を宝石箱にしてみましたので、周囲を埋める悪魔達はどっと哄笑し、千代の奇抜なアイデアに、拍手喝采するのだった。

「奥様の方は、どうやら充分のようだ。そっちはどうです？ 津村さん」

鬼源が小夜子を点検する義雄に向かっていう。

「結構だね。態勢充分だ」

義雄は、艶々とした小夜子の麗わしいばかりの二つの太腿を片手で横抱きにし、片手で……た感触に……ながら、鬼源の方を向いて笑った。

小夜子は、何か天に向って祈りを捧げるよう大きく首を仰向かせ、優雅な美しい線を描く横顔をくっきり浮立たせ、縛られているとはいいいながらいじらしいばかりに無抵抗で、義雄の手……に身を任せている。

「それじゃ、はっきりと勝負をつけさせまし

よう」

鬼源は、静子夫人の前にかがみこんで、クスクス笑いながら、……を点検している千代を肩をたたき、桐の箱を手渡した。

それを待ちかまえていたように、銀子と朱美は手をたたいて、はしゃぎ出す。

「いよいよね、うわあ、愉快だわ」

二人のズベ公は、一切を諦め、必死になって冷やかな表情をつくらっているような小夜子の左右へ寄り添って、小夜子のバラ色に染まった首筋や縄に上下を緊め上げられているふっくらした隆起のあたりの匂いを吸いこむよう、クンクン鼻を近づけながら、

「これで小夜子は、静子夫人とは普通の間柄ではなくなるわけよ。だから、もう、先生なんて呼び方は駄目。そうね、静子おねえ様がいいわ。さ、静子おねえ様に、こういって甘えてごらん」

銀子は、クスクス笑いながら、小夜子の耳に、しきりに何かを吹きこみ始める。

「さ、静子おねえ様に、肩とお尻とをびったり押しつけて、甘えるように体を揺すって、いうのよ」

それを聞いた鬼源は出歯をむき出して、  
「そうさ。見て下さるお客様に対し、ねっと

りしたお色気を盛り上げる。それが一番大切だ。いいな、二人とも」

鬼源は、その要領を静子夫人と小夜子にガラガラ声を張り上げて教え始める。

「わかったな。ショーに出演していると思っ  
て、しっかりやるんだ。さ、始めな」

静子夫人と小夜子は、燃え立つばかりの屈辱と凍えるようなあきらめを同時に抱き合い背の中程でかたく縛しめられている両手首を動かしつつ、互の手をまさぐり合った。共に奈落の底へ落ちるべく、再び、覚悟を求め合ったのである。

「何をモモタしてるんだ。早く演技を始めねえか」

小夜子は、未練を断ち切ったよう、柔かい絹のような感触の房々した黒髪をさっと一振りしたかと思うと、静子夫人の光沢のある大理石のような肩にびったりと自分の肩を押しつけ、と同時に、むっちりと大きく盛り上った夫人の……に自分の……も押しつけて、左右に激しく……かせながら、おぞましいせりふを声にした。

「ねえ！ 静子おねえ様っ。早く、早くお支度して、小夜子、もう、がまん出来ないわ！」  
たった今、云いつけられたとうり鼻を鳴ら



し、さももどかしげに、……をすりつけ、身悶えするのだった。

「——待、待って、小夜子。そんな事いったって、私、貴女と同じよう、お手々を縛られているのよ」

「嫌っ嫌っ、ああ、じれったいわ。ねえ、おねえ様！」

小夜子は、たまりかねたよう……を夫人の背面に摺りつけ、

「ごらんになつてゐるお客様へ、お願いになつて。ねえ、おねえ様、早く！」

と、必死の演技をくり返すのだった。

なかなか小夜子もやるじゃないか、と田代は川田の方を向いて北叟<sup>ほくそう</sup>笑む。

鬼源も満足げにうなずきながら腕組みし、死ぬ思いの狂態を演じて見せている二人の美女を眺めている。

静子夫人は、滑らかに引き緊った美しい顔を羞しげに歪めながら、すぐ前に腰を落し、煙草の煙をゆっくりと吐いている千代の方に向ける。

鬼源に指示されたよう千代に向つて、羞しいねだりの言葉を吐かねばならないのだが、千代のわざとらしく片頬を歪めた皮肉たつぷりな顔を見ると、たまらない嫌悪感が、一瞬

胸にこみ上げて来て、静子夫人は、思わず、千代から顔をそらせてしまった。

忽ち、鬼源から激しい叱咤の聲が飛んだが千代も、ありありと陰険なものを表情に表し煙草を灰皿に押しこむと、ついと立上る。

「ね、奥様、どうして私には、そうして柔順になれないの。元、遠山家の女中だった私の前では口惜しくて、何もする気になれないというのね」

そのぞつとするような千代の陰湿な口調に静子夫人は、狼狽したように首を上げる。

「奥様が私に対して、そういう敵意を何時までも抱くのなら、私だって、何時までも、意地の悪いことを致しますわよ」

「敵意だなんて、そ、そんな——」

静子夫人は、ベソをかきそうな表情になつて、首を振つたが、千代は、わざとらしく、自分の指を見て、あら、と頓狂な声をあげ、「変だわ。さっきまで、指にはめていた私の大事な翡翠の指環が無いわ」

と、驚いた仕草をとり出した。

田代も、川田も、鬼源も、ゲラゲラ笑い出したが、千代も、彼等に対して、舌を出すようにして笑つて見せ、

「奥様、貴女まさか盗んで、どこかに隠した

んじゃないでしょね」

それが、邪悪な千代の夫人に対する意地悪なのだろう。静子夫人は、この世の者とは思われぬような千代の陰湿な残忍さに、声も出ない。

先程、千代の手の……奥深く秘められてしまった宝石は、いくら身悶えしても、緊縛された身で、……する事は不可能になつてしまつていた。たまらない異物感に、夫人は、先程から、……モジモジ身悶えしていたのである。

「ね、どこへ盗んで隠したの。正直におつしやい」

「ぬ、盗んだなんて、ああ——ひ、ひどいわひどいわ」

静子夫人は、紅を散らした美しい顔をさつと横へそらせ、肩を慄わせる。

「正直にいわないと、またお仕置を受ける事になりますわよ。さ、どこへ隠したか、おっしゃいな、奥様」

「ひ、翡翠の指環は、静子のお腹の……」

静子夫人は、真つ赤な顔をのけぞらせるようにして、苦しげに声を慄わせる。

「そう。やっぱり盗んでいたのね」

「ああ、千代子さん」



静子夫人は、この狂人同様の千代に対し、ものをいう気力はない。もっと、もっと私を羞しめるがいいわ。とでもいった捨鉢な気分で憤怒を噛みしめ、うすら冷たい横顔を見せてかたく眼を閉ざしてしまふのだった。

## 薔薇と百合

声にならないうめきをあげ、五体をくねらせ、狂おしいばかりの屈辱に身ぶるいする静子夫人からようやく宝石を取出した千代は、「宝石を盗んで隠していたお仕置は、明日にでもゆっくりしてあげますわ。ホホホ、私ね奥様のために、とっておきのすばらしいお仕置を考えてあるのよ」

ほのかな香気が匂う静子夫人の光沢のある美しい頬にかけける羞恥の色を、千代は心地良さそうに見つめて、そんな事をいった。

川事が、千代の肩をたたく。

「ま、明日の事はとにかく、早く仕事にかかんなよ。お客様はしびれを切らしていなさるぜ。それに捨太郎だって、さっきからお預けの喰わしっぱなしだ」

「そうね。じゃ、この仕事は兄さんに任せてあげるわ。その方がいいんでしょ、兄さん。」

ホホホ

「おっと、任しときな」

川田は、舌なめずりして、千代から桐の箱を受取ると、千代に代って、静子夫人の前に腰をかがめた。

元、遠山家の女中であつた千代と運転手であつた川田は、こうして、かつての美しい主人に対し、徹底的ないたぶりを交互に加えつづけるのである。

「よう、大スター。そんな風に黙っていちゃ味もしゃしゃらねえじゃねえか。御覧になつているお客様を楽しい気分にするんだ。あれ程いったのに、まだわかんねえのかよ」

鬼源は、鼻をこすりながら、静子夫人を叱咤する。

静子夫人の線のきれいな鼻筋や気品のある美しい頬に、困惑の色がさっと掠めたが、すぐに胆をすえたようぐくりと息を呑み、静かに顔を上げ、涙の粒をキラキラ光らせている柔かい睫毛を開くのだった。

何か遠い幻でも眺めているような抒情的な夫人の美しい瞳を見た川田は、気もそぞろになつて桐の箱を開き、それを取り出す。

「お、お願いしますわ。川田さん」

見物人達の心をとろかせるようなハスキー

な声を出した静子夫人は、ぴったり閉ざしていた乳色の柔らかな太腿を、さも羞しそうに左右へゆっ………ていく。

「ねえ、お願い、川田さん」

しつとりと、沈み入るような恥らいを見せて、静子夫人は、鼻を鳴らし、ゆるやかに……ねらせるようにして、心にもない甘いねだりの言葉を吐かねばならないのであつた。

川田は、陶然とした面持で、そんな静子夫人を見上げながら、ふと、遠山家で運転手をしていた当時の事を想い出す。慈善音楽会に出席した静子夫人を川田が車で迎えに行った日の事だ。

——音楽会が終わり、静子夫人は内外の名士に囲まれるようにし、明るく談笑しながら会場から出て来たつけ。訪日したばかりのフランスのデザイナーと静子夫人は流暢なフランス語を使って楽しげに語らいながら、川田の運転する車に乗った。伸びやかな肢態を持つ静子夫人の和服姿のあでやかさは、内外の名士を魅了させていたようである。白いバラの花を裾模様にした疋田絞りに、豪華な佐賀錦の帯をしめた静子夫人は、よく似合うアップの髪型で、高雅な匂いに溢れていた。それから、俺は、夫人に頼まれて、村瀬宝石店へ



車を走らせたつけ——。

川田は、軽く左右へ………いる静子夫人の優雅で、そして十分に官能美を盛った妖しいばかりに色白の太腿の一つに片手を巻きつかせるようにしながら、そのなめらかな内腿に軽く口吻しつつ、再び、追想にふける。

——あの時、俺は、宝石店の中で、真珠を選んでいる静子夫人を店の表のウィンドウから盗むように見つめていたつけ。澄んだ黒い瞳、高貴で柔かい鼻の線、白い半襟をくつきり浮きたたせたような、水もしたたるばかりの襟首の白さ、艶々しさ——川田は、こんな美しい若奥様の運転手となって働くという事に生甲斐を感じると同時に、男と生まれたからには、一度はこんな美女を、と、切なく口惜しい思慕を寄せたものであったが——。

その静子夫人が、あの時、俺が、息づまるばかりに胸をこがした静子夫人が、一片の布も許されぬ生まれたままの姿にされ、日夜、徹底した調教を受け、奴隷としての服従を誓わされ、現在、俺の眼前に、臓物までをさらけ出し、甘いねだりの言葉をささやきつつ、切なげに身を悶えさせているのだ。

夢ならば、どうか、覚めないでくれ、といった気分で、川田は左手を夫人の一方の……

付け………たりにしっかりと巻きつかせ、鬼源が樹脂とゴムをねり合わせて作ったというそれを右手に持ち、夫人のそ………るやかに………さすった。

静子夫人は、忽ち上気の色をその美しい容貌に紅を流したように浮かべ、川田に抱きとられて太腿をなよなよと………始める。あれだけ俺を、切ない思いにのたうたせた女だと思つと、川田は急に憎しみもわいて来て、あの時の仕返しに、うんと切なくしてやるぞとばかり、軽く………たり、たたいたりするのだった。

「——か、川田さん、嫌っ」

静子夫人は、堪え切れなくなったように、薄く眼を閉ざしたまま、羞しげに首を振り、

「——ね、お願い、じ………さないで」

切なげに激しく身を揺すりながら、吐き出すように声をあげるのだ。

鬼源達に叱咤された小夜子が再び、ぴたりと、夫人の艶やかな背筋に、背中を押し当て、尻………れ合わせる。

「ね、静子おねえ様、早く、早くお支度をして。小夜子を何時まで待たす気なの」

して、静子夫人は、小夜子にせかされた形で川田にねだりの言葉を——。

鬼源と義雄は、懊悩の極にある小夜子の前に並んで腰を降ろし、小夜子の動きや演技が停滞すると、煙草の火を小夜子の肌に近づけて、おどしつづける。

「あつ、嫌よ、嫌っ、川田さん！」

川田は、それをわざと、………下方深く持つて行き、夫人の………められた可憐な………押しつけたのである。

「美しい若奥様、ここじゃ駄目ですかね」

川田は、柔かい睫毛を閉じ合わせ、顔も首もバラ色に熱く染めて、必死に顔を横へそむけようとしている静子夫人を見上げ、からかうようにいった。

「い、意地悪。川田さんの意地悪」

静子夫人は、揺らぐような色気を全身から発散させ、嫌、嫌、とすねるように………悶えさせたが、更に意地悪く川田がそれ………し始めると、夫人は、どうする術もなくなったよう首をがっくり前へ垂れ、シクシクと泣き出すのだった。

川田は一層、残忍な心をかり立てられて、更に激しく夫人に………を与えつづけ、夫人の唇から洩れる絹糸のような繊細なすすり泣き



を飽かずに眺め、聞入る見物人達と一緒に楽しんでいたが、夫人が川田の淫靡な責めに対するおびただ……応を示し出すと、ようやく、その行為を停止し、それをようやく、夫人に対し、ぴったりと――。

「あっ」と、狼狽した声が夫人の唇からほとばしり出る。血走った悦びとも戦慄ともつかぬものが、激しく夫人の全身を襲った。

いきなり、ヒ口で敵の脇腹をえぐったようなあざやかさで、川田は静子夫人の……道具づけをしてしまったのである。

見物人達は、哄笑し、一せいに手をたたき始める。

その道具は、鬼源が調教用として作ったものらしく、ぴったりと女……定させるため弓の弦らしい細い糸が三本ばかり周辺に、三角型につけてあった。

「仕上げを頼むぜ」

川田と川田にいわれた銀子と朱美、そして、千代の三人が、舌なめずりするような顔つきで夫人の……身を低め、左右から糸をたぐり合うようにして、まるで、揮でもしめてやるような具合に、その二本をうしろへ引き、量感のある見事な肉づきのヒップの上あたりにしっかりと結びつける。残った一本を、千代

は、夫人のゆで卵のような光沢を持つ……ぐらせて、銀子と一緒にうしろから、たぐり上げ、ヒップの上でかたく結ばれている横をつないだ糸の真中あたりに結び始めた。

「ホホホ、さ、若奥様、これで大丈夫。このお嬢さんを思う存分、愛してあげる事が出来ましてよ」

千代は、仕事を終えて、前へ廻ると、世に哀しげな顔をし、息もつまりそうな羞恥を全身で耐えようと努力している静子夫人のわなわな慄えるバラ色の頬を指で突き、それからとりつけられた、その先端を眺めるようにして、どうにも押さえがきかなくなったように笑いこけるのだった。

銀子も朱美も、それを突いたり、指ではじいたりして、吹き出し、そのような、みじめな……姿にされてしまった静子夫人をからかいつづける。

「如何が、若奥様。フフフ、……になった御感想、聞かせて下さいよ」

静子夫人は、この血も凍るばかりの憤辱をぐっと噛みしめたよう、美しい切長の瞳を凍りつかせて、じっと上の方を哀しげに見つめていたが、千代や義雄達がカメラをかまえ出し、正面や側面から、パチパチ、シャッター

を切り始めると、わなわな頬を慄わし、大粒の涙をポタポタ落とし始めるのだった。

「さて」と、鬼源が、ズベ公達をかきわけるようにして、静子夫人の前に立つ。

「大分、時間を喰ったから、少し急ごうじゃねえか。これから、おめえ達二人は、ここにお集りの皆さんに祝福してもらいながら、離れられない間柄になるんだ。わかったな」

鬼源はそういって、

「だまっていちゃわからねえ。ちゃんと返事をしねえか」

と、夫人の美しく緊った鼻を指ではじく。

凍りつくような凄艶さで、屈辱を噛みしめていた静子夫人は、鬼源に再び、叱咤されてふと、柔かい睫毛を悲しげに動かし、

「わ、わかりました」

唇を慄わせ、か細い声を出すのである。

「さっきと違って、今度は、こんな………を取りつけてもらったんだ。二人とも、必ずタイミングを合わせて………するんだぜ」

鬼源のその言葉を聞くと、静子夫人は、名状の出来ない悲しげな表情をして、切なげに顔をそむけるのであった。

「おめえは、本当に男の子になったつもりで小夜子をリードするんだ。小夜子より早くて



も、おくれでもいけねえ。ぴったりと小夜子に合わせてやるんだ。それで始めて、二人は結ばれるってわけだ」

鬼源は、田代の方を向いて、ニヤリと笑いながら、そうした陰險な難題を静子夫人に吹きかける。

「まあ、若奥様、そんなに悲しげな顔をなさなくても、大丈夫ですわよ」

と、千代が、クスクス笑いながら、悲しげに眼を伏せた静子夫人の傍へぴったりと寄り添った。

「遠山家のお座敷で、このお嬢様の踊りのお稽古をされていた時、二人舞いは呼吸を合わせるのが大事だと、おっしゃってたのを、よく私耳にしたものですわ。あのお稽古の時と同じよう奥様が男舞い、お嬢様が女舞い、互にぴったり呼吸を合わせて、お尻の動かし方を研究なさったら、今、鬼源さんのおっしゃった事ぐらい何でもないじゃありませんか」

そういつて千代は、見物人の方を向き、ねえ、皆さん、そうでしょう、と同意を求めるのだった。

演技者に対し、最後の打合わせをするのか、よう、鬼源、川田、それに二人のズベ公は、二人の緊縛美女を取囲むようにして、何か、

小声で指示している。

静子夫人も小夜子も、沈み切ったようにやや首を垂れ、鬼源や川田のいい含める事を、かすかにうなずきながら聞いている。余程の難題を吹きこまれたのか、急に小夜子は、シクシクと泣き出した。

田代が、ウイスキーのグラスを口に運びながらいった。

「どうしたんだ、川田。まだ、プレイが始まってもないのに、お嬢さんを泣かせる奴があるか」

川田は、へへへ、と首をすくめて

「絶頂に登り上げる時、女って普通、どういう事を口走るか、それを二つ三つ教えてみたんですがね」

「ハハハ、随分と芸が細かいじゃないか。だが、そいつは、ショーのスターとして、絶対必要なことだな」

川田は、そら見ろ、と小夜子の赤らんだ頬をつつく。

「社長も、ああいつてなさるんだ。よくわかったな」

「さて」

と、鬼源が、したり顔になり、

「そろそろ始めようぜ」

と、その場にあぐらを組む。

「さ、始めな。まず、口上からな」

静子夫人は、背中中で縛り合わされている手を、小夜子の手とからませ合いながら、はっきり心を定めたよう、静かに顔をあげる。そして、何か訴えるような情感をたたえた美しい眼を周囲の見物人達に向けながら、

「――皆様の、皆様のお情けにより、村瀬小夜子と遠山静子は、只今、ここにて、女同志を愛を完成させて頂きます」

見物人達は口笛を吹き、手をたたく。

「ねえ、皆様、そんなに御遠慮なさらず、もっと私達の傍にお寄りになって」

次に小夜子が、鬼源にいい含められた通りの事を、涙に濡れた睫毛をしばたきながら、すすり上げるようにいう。

田代達は、グラスやウイスキー瓶をぶら下げ、モソモソと動き出し、手を出せば二人の柔肌にとどく位置にまで身を乗り出し、ぎっしりと取囲んだ。

静子夫人と小夜子の幻想的な位に白く、官能美を湛えた肉体と、観念し切った抒情的なばかりに美しい瞳を見上げながら、銀子と朱美は、田代に注がれたウイスキーを、うまそうに吸いこんでいる。



「フッフ、奥様、とても良くお似合だわ。そのスタイル」

「小夜子、あたい達が教えてあげたよう、すっかりお尻を振るのよ」

「うんと悩ましい愛の音楽を、あたい達に聞かせてね」

ズベ公達は、そんな事をいって、キャッキヤッ笑い合っている。

「どうしたんだ、どうしたんだ、口上は？」

鬼源が、伏眼し、顔を伏せてしまった静子夫人に向って大声をあげる。

静子夫人はハツとしたように顔を上げた。

「———、それでは、これより、私達二人、精魂を尽して演技し合いますわ。その前に、皆様にお願いがございます」

静子夫人は、頬を熱くしながらも、キラリと美しい黒眼を光らせ、遠くを望むような抒情的な表情になっていた。

「何だね」

と、吉沢と津村が、静子夫人のその美しい表情をのぞきこむようにして北叟笑む。

「———二人が、その行為を演じましたなら、うんとお笑いになるなり、二人のヒップをお触りになるなり、皆様の御自由になさって下さいませ。でも———」

静子夫人は、たまらない羞しさを噛みしめるよう、象牙のように輝く線の美しい鼻筋を横へそらして

「———でも、二人の……が、羞しいハーモニーを立て合った時、どうか、拍手なさって、く、下さいませ」

そういって、静子夫人は、しっとりした気品のある美貌を真っ赤に曇らせた。

「わかったよ、若奥様。さ、始めて始めて」

銀子と朱美が黄色い声を張りあげた。

「よし、それじゃ、向い合いな」

鬼源があぐらを組んだまま命令し、田代の突き出すウイスキー瓶を恐縮してグラスで受ける。

再び、向い合う静子夫人と小夜子。二人の美女は、一切を投げ捨てた観念と、ねっとりした情感を湛えた瞳を向け合ったが、すぐに激しい勢となって、びったりと唇と唇をつけ合い、もうこれがこの世の終りとばかりに、荒々しい悲しみを織りまぜながら、頬や顔を悩ましく揺さぶりつづけるのだった。

「しっかりやれ、もう少しだ」

川田が、ウイスキーに濡れた唇を手で拭きながら、愉快そうに声をあげる。

しばらく、唇や頬、乳房など触れ合わせて

いた二人の美女は、苦痛と羞恥に歪む顔をそむけ合うようにしながら、互を………るべくゆらゆら尻………らせ出したのである。

「両手が使えないってのは、哀れなものね」

銀子は、野卑な見物人達に嘲笑され、励まされ、盛んに………ねり合わせている二人の美女を見て、ゲラゲラ笑った。

「何をモタモタしてるんだ。しっかりしろ」

鬼源が口元を歪めて立上り、ムツチリと肉の乗った静子夫人のたくましいばかりのヒップに平手打を喰わせる。

「こりゃ、ラチがあかねえ、手伝ってやろうか」

と、吉沢が近づくと、鬼源はそれを止めて「自分達で解決させるんだ。こいつら、ショーのスターなんだからな」そして、再び、そういう状態になろうとして、悲しい行為をくり返している二人を揶揄し、夫人と小夜子の尻を交互に足で蹴上げたりするのだ。

静子夫人は、自分と小夜子を獣の道に追いかむような、この底知れぬ怖しさと苦しさのたうちながら、口惜しい………火花を散らして、

「小、小夜子さんっ、もっと、———」



どっと、見物人達の哄笑がわき上る。

しかし、小夜子は、見物人達の揶揄も嘲笑も、もう耳に聞えなくなつたよう、夫人に命じられるまま……大きく……出す。静子夫人を何とか……れようとして、可憐なぐらゐに涙ぐましい努力を続けているのだ。

「あつ」と、小夜子は、突然、静子夫人の艶やかな柔かい肩に顔を押しつけ、全身に電流が走るような感触に、ブルブルと双……攀させた。

忽ち、見物人達の絶笑が室内に充満する。

「許、許して、小夜子さん！」

小夜子の……を引きちぎる自分を呪い、烈しく泣きつつ、静子夫人は小夜子の体……って行つたのである。

一種の憧憬を持って師事して来た美しい静子夫人が、今、自分の中へ——動乱する神経の中で、はつきりそれを感じとつた小夜子は恐怖とも歓喜ともつかぬものが、身内から、渦巻き、噴き上って来る。

「ああ——先生っ」

小夜子は、羞恥も屈辱もかなぐり捨てたよう、複雑な陶醉に狂って、身を……ねらせる。

銀子が、口に手を当て小夜子にどなった。

「先生じゃないわよ。静子おねえ様とおっしゃい。小夜子」

小夜子は、熱い吐息と一緒に、ねっとりとして夫人の身体に身を押しつけ、

「静子、静子おねえ様っ」

小夜子は、夫人の乳色の滑らかな肩に顔をすりつけ、ウェーブのかかった黒髪を切なげにゆさゆさ振り動かしながら、声をあげて泣き出した。

「——小夜子さん、許して。静子を静子を、許して頂戴っ」

静子夫人は、小夜子の透き通るように白い首筋のあたりに熱い頬をすり寄せながら、激しく嗚咽する。

「へへへ、見事に……たじゃねえか。だがそう何時までもメソメソしてもらっちゃ困るな。互に……かして、悩ましいハーモニーをやつを聞かせてもらおうじゃないか」

川田がせせら笑って、そんな二人の廻りをぐるぐる歩きながらいった。

「俺が教えてやった通りの要領で、どうしてやらねえんだ。しっかりしろいッ」

鬼源の激しい怒号を浴びせられた二人は、声をひそめてすすり泣きながら、静か……をくねり出した。

静子夫人の量感のある、ねっとり脂肪を乗せたヒップのゆるやか……に合わせ、象牙色に光るふくよかな小夜子のヒッ……き出す。そして、夫人と小夜子は、世にも切なげに顔や身を振り合いながら、好色な見物人達の胸に泌みこむような哀泣をつづけるのだった。

千代は、それを見て、狂つたように笑い出す。粋な小紫の着物に藤色のおでやかな茶羽織を着た静子夫人が扇子片手に小夜子の踊りの稽古をつけていたあの小春日和の遠山家の日本間がふと脳裡をかすめたのだろう。

互に弧を描き合うよ……踊りをつづける夫人と小夜子を心地良げに見つめながら、

「ホホホ、お二人とも、さすがは藤川流の名取りだけあって、随分、優雅なおヒップの動きです事。でも、これは日本舞踊じゃないのですから、そんなに黙りこくってるの、つまらないわ。何とかおっしゃって、若奥様」

と、千代は、段々と激しくなる静子夫人の哀泣を心地良げに聞きながら、火のように熱い夫人の頬をつく。

「どうしたんだよ、科白はっ」

と、鬼源が笠にかかって大声を出した。

静子夫人は、次第に高まって……分を必



死にこらえつつ、ねっとりした妖艶な瞳を小夜子に向けて、

「小、小夜子さん、静子を……て、先に花園……嫌。一緒よ。ね、わかって？」

と、小夜子の赤らんだ耳に優しくささやくようにいった。

艶々と輝くばかりに白く美しい二人の……は、汗と脂を浮かべ、ギラギラ光り出す。

小夜子は、急に激しく歯ぎしりすると、わなわな全身を慄わせ、夫人の柔軟な肩に思わす歯を当てるのだった。

「静子おねえ様っ」

「あっ、駄、……。小夜子さんっ」

静子夫人は、狼狽して、動きを止め、小夜子を正気づかせるよう上体をゆさ……。すって肩の上へびったり顔を押しつける小夜子の首を振り動かした。

「か、勘忍してっ」

小夜子は、そういうと同時に、ブルブル全身を痙攣させたのである。

再び、周囲で爆笑がわき起る。

「馬鹿野郎、あれだけタイミングを合わせるといったじゃねえか」

と、鬼源は、苦笑し、舌を鳴らす。

「仕方がねえ。もう一度、始めな」

静子夫人は、絶……った小夜子のうなじのあたりに額を押しつけ、大粒の涙をぼたぼた落している。

小夜子は、夫人の肩に相変らず深く顔を埋めたまま、恥しさで顔を上げられないのだ。

静子夫人は、再び、鬼源に叱咤されると、辛い、悲しげな色を上氣した顔一杯に湛えて「ど、どうしても、そうならなくては、いけないですか」

「当り前だ。仲良く一緒にゴールインして、俺達はお前さん方の関係が成立した事を認めるんだからな。さあ、そんな情ねえ顔せず、も一度、ケ……振り合うんだ」

鬼源がそう意地悪く、突っ離すようにいうと、小夜子が、夫人の肩の上で、激しく顔を動かしながら、

「ごめんなさいっ、おねえ様、小夜子が、小夜子が悪かったのよっ」

と泣きじゃくる。そして、房々した黒髪をパツと首を振って撓ね上げるようにすると、小夜子は、自分の方から、びったりと夫人の前に身……。着させ、くずれかかる身に鞭打ち、荒々しく泣きつつ、

「——愛して、も一度、愛して頂戴っ、おねえ様っ」

「小、小夜子さん！」

二人は、再び、激しく口を吸い合うと、必死に……。の火花を散らし合ったのである。狂おしく躍動する二つの……。波打ちうねり舞う二人の……。まるで、そこへ命をかけたよう激しい……。をくり返し、声を重ね合うようにして、激しい哀泣をくり返すのだった。

「——小、小夜子さん。今度は、今度は、ねえ、お願い、静子と一緒に——」

「わ、わかったわ。おねえ様っ」

燃えさかり、熱い悦びの戦慄の中で、完全に溶け合った美しい二つの女体を、男達は圧倒された気分で、息をのみ見まもっている。

銀子と朱美は、ニヤリとして、男達の顔を見廻す。

「そら、皆さん。拍手してあげましょうよ」

静子夫人と小夜子は、遂に、妖しいばかりに微妙な啼泣を……。から発し出したのだ。

「まあ、ホホホ、嫌だわ、若奥様」

千代は、口に手を当て、身体を揺すって笑いこける。

「遠慮する事はないぜ。もっと派手に……がいいさ」

男達は一せいに拍手し、火の玉のようにな



って躍動する二つの……塊に対し、大声で  
擲擧しつづける。

すでに頂……を徘徊している小夜子の血  
走った神経は、そうした男達の淫らなからか  
いも受けつけなくなっている。魂も消え入る  
ような陶……触の中で、小夜子は、髪を  
振り乱し、異様な声を発して、キリキリ歯を  
噛み、自分に堪えているのだ。

「駄目っ、駄目よ、小夜子さんっ」

静子夫人は、小夜子が再び、限……達し  
そうになっているのに気づくと、はっとして  
身……をゆるめ、上ずった声で小夜子を叱咤  
しながら、自分も小夜子に……ようとして  
必死になり出す。

水底の藻草が悶えるような甘美なハーモニ  
イを流し合う二人の美女を、その周囲をぎっ  
しり取囲む卑劣な見物人達は、魂を痺れさせ  
るような思いで凝視しているのだ。

肩から、背中できびしく縛り合わされてい  
る両手から、そして、腹部、脚の先まで、ね  
っとり脂肪汗を浮かべ、その妖しいまでに白  
い光沢のある肌をゆるやかに……ている  
二人の美女の間から、濃厚な甘い山百合に似  
た花の香りが、激しく匂い出してくる。

静子夫人は、一と際、甘美で激しいすすり

泣きを口から洩らし、優雅な身悶えを大胆な  
……に変え始めた。

見事に盛り上った夫人の……、どうしよ  
うもならなくなったように激しく慄え出し、  
切れ切れに、「小夜子さんっ、ね、小夜子さ  
んったら！」と、さももどかしげに催促し、  
凄まじいばかりの……になるのだった。

「お、おねえ様！」

「小、小夜子！」

もうそこには、羞恥も屈辱も恐怖もなく、  
火のように燃えさかる一刹那の……があるだ  
けである。その一刹那に命を注ぎこむかのよ  
うに二人は、生々しい啼泣を發して、ほとん  
ど……流を感じ合ったようブルツと全身  
を……せる。

静子夫人は、柔かい睫毛を切なげに閉じ合  
わせ、優雅なうなじをくっきりうき立たせて  
その気品のある美しい顔を、ぐっとうしろへ  
のけぞらせると

「……………」

川田や鬼源に教えこまれた、そうした場合  
における女言葉を、透き通るようなハスキー  
な声で、はっきりと口に出したのである。

田代や川田達が喜んだのは、それだけでは  
ない。小夜子までが、夫人と同調し、火のよ

うに熱くなった顔を夫人の艶めかしい白いう  
なじに押しつけるようにして、熱い……に全  
身を震わせながら、夫人が口走ったのと同じ  
言葉を、はっきりと口から発したからだ。  
山百合とも野バラともつかぬ濃厚な甘い花  
の匂いを一層激しく匂わせ出し、静子夫人と  
小夜子は、……余韻にヒクヒク……打  
たせながら、肉も心も完全に一つのものとな  
ってしまったのである。

精魂の限りをつくし、遂に同時に……た  
静子夫人と小夜子を目撃した悪魔達は、一せ  
いに哄笑し、手をたたいて立ち上ると互の肩  
にぐったりと額を押しつけ合い、甘い余韻に  
浸っている二人の美女の肌にまといつく。

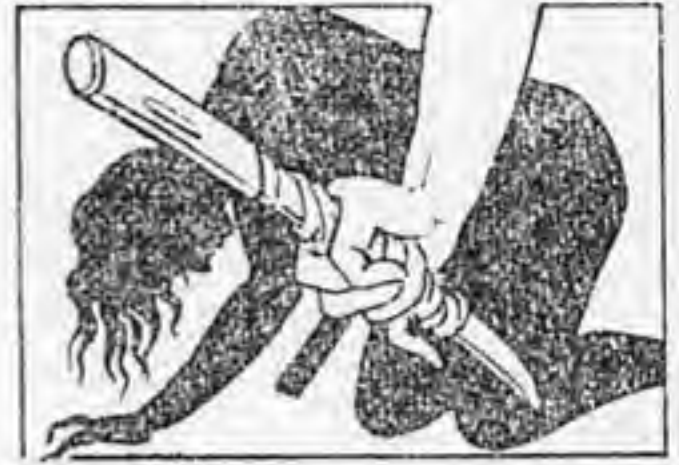
「ホホホ、これでお二人は、……たの  
ね。心から、おめでとうを申し上げますわ」  
千代は、そういうと、狂ったように笑い出  
した。  
(未完)

## 臨時増刊 「花と蛇」 特集号

一部 定価五〇〇円 (送30円)

残部僅少ですから、御入用の方は売切れに  
ならぬうち、お早くお申込み下さい。大阪阿  
倍野局私書箱第十四号箕田京二宛。





# 切腹研究夜話

中 康 弘 通

「日本のいちばん長い日」。いま写真入りで各誌に紹介されているこの映画の意義を、私たちはどう受けとめればよいのであろうか。国を守るためにはポツダム宣言を受諾しよう。と云う閣僚、また、国体護持のために抗戦継続を叫ぶ閣僚、文字どおり、国を思う道に二つはないのである。しかし、正反対の手段で祖国を守ろうと苦悩した、当時の軍官首脳の心は、永久に伝えられていいであろう。

この映画の新聞広告に「八月十五日に何をしていたか?」という懸賞があった。その字づらを見ていて、二十二年前のその日が、私の目の前に彷彿と浮かびあがって来るようであった。

町内会を通じて、正午の重大放送をラジオ

で聞くように指示され、高一式受信機の前に坐った私たちの耳に、雑音ばかりが入った。

やがて和田信賢アナウンサーの沈痛な解説ポツダム宣言受諾! うすぐらい茶の間から二階へ上がって、私は、心なしか、うす雲にさえぎられた八月の光りが、緑の山に鈍く照るのを見ていた。心に蘇える言葉があった。「もし日本が負けたら」の仮設に、何んの躊躇いもなく、「切腹するワ」そう云い切ったY子の倅を、私は暗い西空の雲に描いた。その山の向うに、何十里かへだたって、焼けただれた私の故郷があった。

もうY子はその町にはいない。日赤に志願して前線へ出ていた。Y子は死ぬだろうか。あどけなさの残る唇を白く見えるほど噛みしめ、看護服を朱に染めて切腹して行くY子の

幻影が、私の脳裡に明滅した。

私の幼ない初恋の、Y子は少女であった。そのY子の踪跡は、とうとう追い切れなかった。

そして私は、今も生きて馬齢を重ね、拙文に恥を曝らしている。

もしY子が生きていたら、この二十二年をどう生き、そして今のこの瞬間をどう心に受けとめているだろうか。狭いとはいえ一億の人間がひしめいているこの島国で、Y子に再会するすべとでもないが、私はY子の言葉に口にくそ出さね、生き死にはY子と共に独り心に誓いながら、Y子の生死をたしかめるために生き延びた生命を、そのまま今日まで運んで来てしまった。

人並と云えずとも、家庭にも仕事にも責任らしいもののある身となって、せめて拙文を綴ることによってのみ、Y子の純粋な志を私の中に生かして行くほかはないようである。あと何年か何十年か、生命ある限り、私はY子の倅を心にして、拙文を綴って行くであろう。その限りにおいて、Y子は今も「二八か二九からぬ」年ごろの少女なのである。

## 二

グループサウンズがはやる。そのグループ



サウンズが生み出した美少女歌手でTVタレントの九重祐三子さん、高校時代体操の選手だっただけに、スポーティで伸びやかな肢体と、明るくりりしい風貌の持主。書道は親御さんゆずりの能筆。武道にもたしなみがあったはずで、美少年と美少女を足して二で割ったような、いわば人類の理想美を具象化したような女性である。

活潑な性質だけに気性ながら言葉も鋭く「今どきの若い男の子、自衛隊へ入って来るといい」などアッサリ云ってのける。

終戦以来男性の値打ちが下落したのかも知れないが、無規律な青少年たちを見ていると九重さんの言葉も「ごもっとも」と肯ずけそうである。

こういうお嬢さんが戦国から江戸初期のお姫さまに生れていたら、文弱の若侍は、軽く切腹仰付けられていたかも知れない。少くとも文武両道に熱心で、ヤワな若侍どもはコテンパンに打込まれ、稽古薙刃で張りとはばされていたかも知れない。

大和撫子の風、いまだ衰えず、頼もしい限りである。

男装の美少女歌手、水前寺清子さんは、いつか週刊誌の談話に、腹を刺される夢をよく

見る、とかあった由。この週刊誌、教えて貰ったときは店頭になく、発行所へ申込んだが応答なくて、とうとう読み損ねたもの。

バタ臭くパンチな云うより、メリハリ利いたとでも云いたい歌いぶりの傾向とは対象的に、お人がらはおしとやかそうである。そう思うのは私だけではあるまい。

とにかく、観ていて、聴いていて、文句なしに楽しめる少女歌手が増えたものである。

### 三

戦後強くなったのは、女と靴下、と云われるが、たしかにこのごろの二十代、三十代の女性には勇ましいようである。

つい先ごろも知人から知らせて貰ったのだが、一度ほかの手段で自殺未遂を引き起した夫人が、とうとう腹を切って目的を達した？事件がある。人間、一度死地を脱するとなかなか死ねないものだし、まして切腹なんて、男でも当節は類がないのに女性ではある。

姉妹げんかが昂じて妹さんを追っかけ廻し逃げられた口惜しさに、持った刃もので我とわが腹突き刺した娘さんもある。ナマハンカな男どもの出来ることではない。

ご主人の転勤で店をやめねばならなくなつた美容師さんが、剃刃で切腹してしまったの

は、日ごろ大切にしていた商売道具を使つての事だけに、その心根のほどがいたましい。

こうした事件の起きるのは傷ましくて、何んともやり切れない思いがするが、地方紙に出たのを切り抜いて送って下さる読者の方が少くないのは、ありがたいことである。

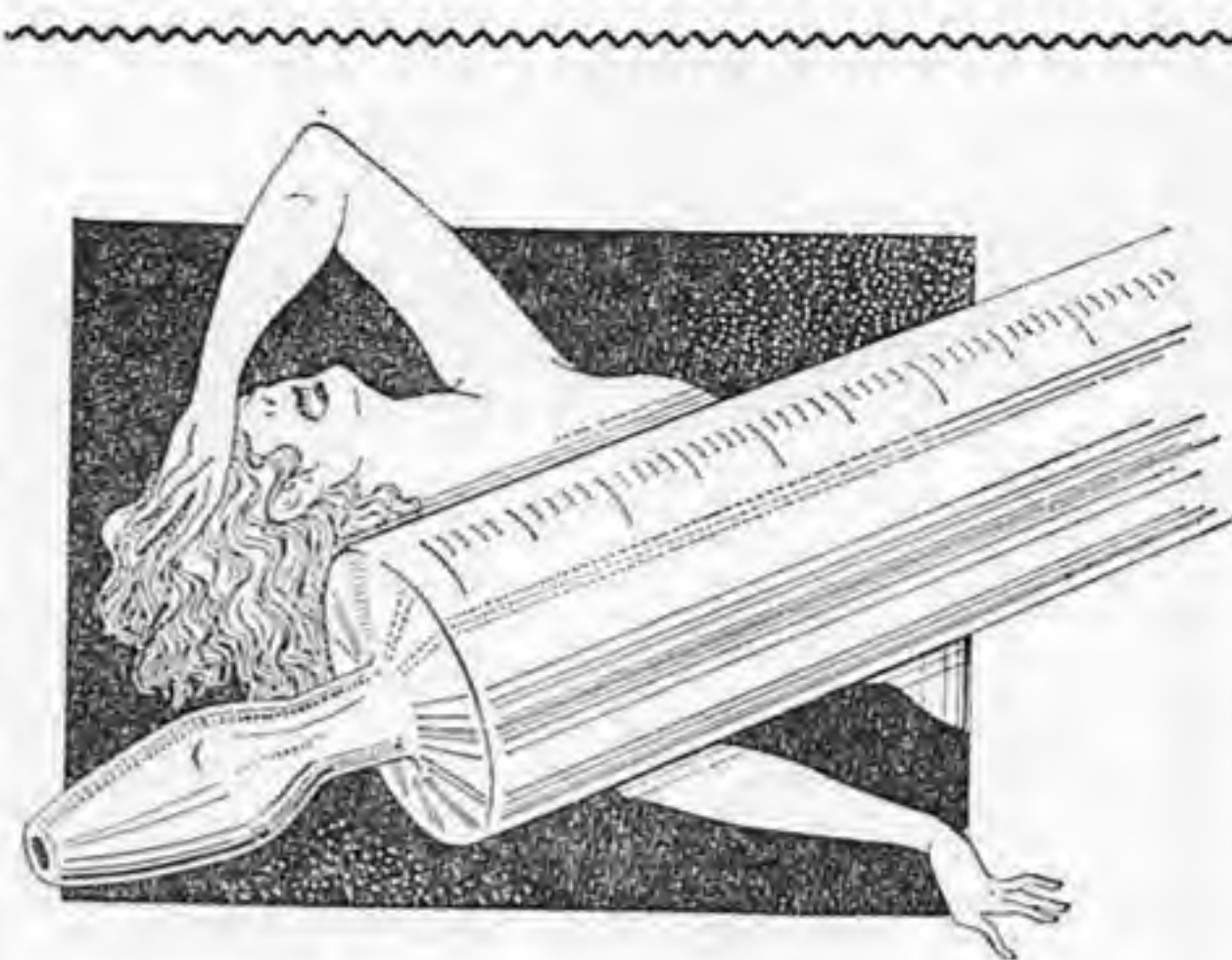
実際問題として全国のニュースを知るわけには行かないから、郷土史料とか、又、事件とかになると、皆さん方のご協力ご高援に頼る他はないわけである。

テレビドラマやバラエティショーなどで、この研究に関連するシーンなども、スナップ添えて、描写などで教えて下さる方が少ない。是も独りで全部観ているわけには行かないから、全くありがたい。

いずれこうしたテレビでの触目や事件について、ゆっくり書いてみたいと思っているが今後ともよろしく、と申上げておく。

尚、亡くなった老父の申し込んでおいた電話が、やっと近々に架設される。全国でも積滞数ベストテン上位の京都西陣局だから、申し込んでから三年は経っている。この十一月発行の番号簿には載るだろうから、今までお便り下さった方々は、夜間八時から九時までの間ご利用頂くとよいと思う。





告

白

# ガラスの季節

田井啓子

たところでございます。

それは一般読者の方には別に目に止まらないような記事でございます。

『「保健所だより」「検便。学校給食従事者と二十四日午前九時から保健所」「二十九日母子相談」「食品業登録受け付け」市衛生作業所では次の日程で本年度の食品業登録の受け付けと従事者の検便を行います。手数料百円。検便七十円。該当者は魚介類……』

毎年春から夏にかけて必らず、このような記事が新聞にのり、私達学校給食関係者を羞恥の極みに陥し入れるのです。連絡板に「二十四日九時検便」と記入されると、初めての人には漠然とした不安を抱かせ、二度目三度目の方は、恥しい想い出に頬をほてらしながらも、心の片隅では各々複雑な想いをめぐら

せ、それでいて、ああ又かと半ばあきらめの気持ちに追いやるかのようでした。事実このような掲示を見ると、皆んな一瞬はっとしながらもだまりこんでしまいます。「又か」といって大声で検便のことを話題にするのは、照れかくしをする男の方達でした。

私が初めて経験したのは短大を出た年でした。来週検便という知らせに、お勤めをはじめたばかりの頃でしたので先輩のLさんに、「検便ってどういう風にしてするの？ 私、便秘がちなものですから。それから何か決った入れ物があるのでしょうか？」

とたずねますと、

「ああ又検便の季節ね。憂うつだけど生徒の健康のため、私達が犠牲になるってわけよ。準備って別にいらないわよ。保健所に集まり

私は今では平凡な一家庭の主婦に過ぎませんが、短大で栄養士の資格をいただき、つい二年前上京して結婚する迄、郷里の新潟県S市にあるK中学校に栄養士としてお勤めしておりました。先日郷里に帰る機会がございましたが、新聞に目を通していううちに次のような記事が目にとまり、恥しい想出に顔が自然にはてるのを覚えると共に、たまたまなくつかしくも思われ、つい筆をとる決心を致しまして拙文をかえりみず夫に内緒でしたため



さえすればいいの、但し絶対におくれないことよ、遅刻すると後悔するわよ」

と教えてくれました。

それでも前日になると不安になって来て黒板の前に立っていると、先輩が「いよいよ明日ね」といって私の肩を叩いたので、心の中で気にしていることをさとられてはいやと思

い、話題をそらそうとしましたが先輩は、

「万一菌が出ると新聞に出るかも知れないし大変よ、これ飲んどきなさい。それと明日は下着をとりかえておくことね」

というなり私にお薬の箱を握らせ、さっと向うへ行ってしまう。多分自分でも照れていたのだと思います。まだ若い方でしたから。

お薬というのは「クレオソート丸薬」で、これを前夜三粒飲んでおけば菌が死ぬので、検査にひっかからないとの事でした。検査の日が近づくにつれて、特に若い方達は心もち口数が減って行くようでした。おばさん風情の方達は、「あんなこと迄しなくてもいいのに」とささやき合っていました。

検査の当日は、その日の給食を簡単なパンとミルクにして、先生方をお願いし、揃って保健所に出かけました。

今から思えば送り出す時、「あなたは最初ね、同情するわ」と、一人の先生がおっしゃり、又保健所の受付の方も、仕事が出来てうんざりしたような顔と同時に、興味があるような、又、気のせいか汚ないものを見るような、さげすみの表情ともたれなくはないようにも見えました。

私といえば、実は以前高校生の時、寄生虫の検査でどうしても採れなくて、お母様にお流腸していただいて持参した方があったのを思い出し、もしものがあつては大変と二三日前から心がけ、やっと前夜少し採ってこっそりかくして持っていたのです。

やがて予防課長さんから、学校保健のための積極的に協力して下さることに感謝するとの挨拶があり、いよいよ採便にかかりました。

控室で伝票をいただき、名前や年令を記入して順番に呼ばれるを待つのですが、私と一緒に入った新米が二人一番先に廻されました。

一番先は今年高校を出たばかりの若くきれいな子でした。「Tさん」と呼ばれて、「はいっ」と威勢よく、検査室に入って行きました

が、中々出て来ません。不安になってそっとのぞいて見ると、黒いレザー張りの診察台の上につつ伏せにされているのですが、なんと

下半身には何もつけていないではありませんか。看護さんになぐさめられながら、三人がかりでやっと検査が終わったらしく、次はやはり今年入ったS子です。会社勤めをしたことのあるS子は案外早く出て来ました。

検便といっても、おそらく便を入れる容器を渡され、トイレのような所で採ってくるものとばかり思っていたのに、検査室に入ってから始めて直接ガラス棒を使って、その場で採取するということが分かりました。

初めての時のことは、正直にいうとよく覚えていません。でも多分「診察台の上に乗ってうつ伏せになって、膝を立てて、腰を高くして、それからお尻を出して下さいね。あっという間に終わりますから、口をあいてお腹の力を抜いて。——そう、もうよろしいのよ」という具合だったと思います。これで先輩の言葉の意味も課長さんの「正確に検査する」という意味も納得が行きましたが、考えてみるとずい分検査される人の立場を無視した、ひどいやり方だと腹が立ち、一週間位悶々としていました。

大学で衛生のお講義や細菌の実習見学に行った時のことを思い出すと、確かに直接体から検査材料をとることは最も間違いのないこ



とはよく分かるのですが、健康でびんぴんしている人を十何人も強制的に集めて、一人一人裸にして検査するなんてことがあって良いものかと思います。どのような目的があるにせよです。

しかし現実には拒み切れない弱味が私達にはあるのです。七月十一日号のプレイボーイ誌の表紙の白鳥の背中モデルさんのような恰好に、お尻を天井に向けて、裸にしてさらに、何度検査を受けたことでしょうか。長い夏の間は毎月——赤痢の流行のある年は——始めに検便が行われました。女性の生理にも関係なく、流れ作業のように。

私は始めのうちは本当に検査が憂うつでした。でも慣れるに従って、だんだんと（このことを告白するのは本当に恥しいのですが）何か期待するような、心境になって参りました。

ガラスの棒はよく見ると先端が少し曲っていて材料が採り易いようになっていて、棒は鉛筆の半分位の太さで、長さはいろいろですが、十二、三糎という所でしょう。材料を取った後、一本一本試験管のような容器（中に青味があった液体が入っている）におさめられ番号を合せて箱につめられ、検査室に運ば

れて行きます。お尻に看護さんの手がかかったと思うと、冷いガラス棒を感じます（おおよそ五糎位と思います）その冷い感じは一寸忘れられないように思います。三日程すると保健所から結果の通知があるのですが、陰性となると、今迄の不満や何やらの気持が一度にどこかに飛んでしまうから妙なものです。

看護婦さんが一人足りなくて私が手を貸したことが一度ありましたが、その時のことが縁になって、急にそれ迄口をきいたこともなかったS子とも親しくなりました。後にS子の下宿で二度程S子に浣腸したことがありますが、S子は何ともいえず可愛らしく、又、敏感に反応するのが大層好ましかったのです。

丁度その頃、県内のI温泉に天皇の御視察があり、お泊りになるお宿舎の従業員の検便があり、四つん這事件として、あまりにも人権を無視したやり方だとか、新聞で問題になりましたが、赤痢菌の検査は必らず直接採便法によっているようです。いつかI温泉に泊った時、女中さんに伺ってみましたら、「本当にいやねえ。でももし赤痢がうちから出たとなると、商売上ったりでしょ。だからいやがる若い子なんか、私達で押えつけてやっちゃうの」

なんでも四つん這事件の時は、座ぶとんを三枚位積んだ上で、やはりうつ伏に、おふとんを抱くように肘をついて、膝を曲げた姿勢で、男の検査員が実施したそうです。それも女中さんなどは、着物を着ている上に下半身の下着はとってから室に入るよう指示されたとかで問題になったようです。今ではあまり強制も出来ないのです、自分で採って例の試験管に入れて出すので、自信のもてない者などは、他人のを入れたりすることもあるそうです。

今でも食品関係の工場にお勤めする時、身体検査の中に検便（直接採便）を含めている所があるようです。それでなくとも、保健所で検査してもらった証明を必要とする所が多いらしく、仕方なしに検査を受ける人は、毎年何千人といらっしゃるのではないのでしょうか。私としては一度もまだ検便を受けてもらっていない方は是非一度就職という口実でも作って、近くの保健所を御利用になることをおすすめていたいと思います。そういう方なら、エネマについても話し合えるのではないかと思います。料金は多分二百円以内です。

何回かの検便（程なく私は給食係長になり



直接食品に手を触れないので、私自身は検査の必要はなくなったのですが、給食従事者全員に検査を受けさせるため、私は進んで検査を受けることにしていました）をくり返して受けるうち、唯一回、判定上疑い結果が出て、念のため、強制的にはなく、市の隔離病棟に二週間入院したことがありました。ところが何とS子と一緒にした。

別に自覚症状もなく、たいくつな毎日でしたが、唯、毎日午後二時頃になると病棟の一せい検便があるのです。看護婦さんも患者さんもなれたもので、時間になると皆んな一斉にお尻を出して、自分のベッドにうつ伏になり能率的に採取されて行きます。そして二日後にその結果が出て三回連続陰性だと退院ということになるようでした。唯チフスの患者さんは、お小水の方にも菌が出るおそれがあるので、必らずこれも直接、膀胱から管に採って検査するのだそうです。私には経験がありません。体験した方のお話を伺っていたかったです。

この病院では、検便の他に必らず、週一回（皆というわけではないようですが）直腸鏡（看護婦さんは「ロマン」といっていました）が、ロマンといって笑われました）の検査が

ありました。直腸にただれがないかを調べるのだそうですが、検査の前の夜はミルクだけしかいただけません。そして夜、やすむ前に処置室でグリセリン浣腸が施され、当日早朝今度はイルリガートルを使用してくり返し洗腸が行われ、大体午後、手術室に近い内視鏡室で検査されるのです。

私は実はお浣腸はこの時が初めてで、検便と違って横に寝た姿勢でしたので思ったより楽でしたが、イルリガートルと先についた太い赤いゴム管を見た時は、本当にびっくりして、看護婦さんに思わず、「これを本当に入れるのですか」と恥しいのも忘れて質問したりしました。

こんな装置を考え出した人はどんな人だったのでしょうか。処置の間、顔中をかくす大きなマスクとゴム手袋をした看護婦さんは、きつい眼で私の体中を監視しているようでした。S子は何かあったのか、婦人科の検診台に乗せられて、上を向いて膝を曲げる例の強制的な姿勢で、洗腸された由でした。

内視鏡室は暗室なので落着いていました。先生の「口をあいて力を抜く」という指示には、暗示をかけられたようにおとなしく従っていました。これでお腹の中が約三十糎位ま

でのぞけるのだそうで、カラー写真の撮影も出来るとか。全く便利な機械が出来たものです。勿論お腹の中です。検査は病院の中ということもあってあまり負担にも思えませんでした。が、むしろ検査が終って病室へ戻って来て皆んなに顔を見られたり訊ねられたりするので困りました。お浣腸の後では毛布で顔をかくしてしまいました。それと処置室でお浣腸をするのに（病室でしないだけですが）スピーカーで「田井さあん、明日検査です。お浣腸しますからすぐ処置室へお出でになって下さい」と二度もくり返すのには閉口しました。

こんなわけで新聞で検便の記事を見付けると複雑ながら、限りなくなつかしいような感じに引き戻されるのをどうしようもありません。私もやがて赤ちゃんに恵まれると思いますが、その前にもう一度だけガラスの検査、直腸や膀胱の検査を受けてみたくて仕方がないのです。夫のある身では、S子というわけにも参りません。最も安全なのはやはり病院でしようが、内科や婦人科では多分目的が達せられないのではないかというS子の話です。





橘 雅 美

## 『千恵子という女』

創

作

(一)

黒くスミを塗った様な夜空に、深々とカサをかぶった大きな月が、青白く冷たい輝きを放って私を見おろしていた。秋葉原のホームに立つと、駅の大時計はすでに十時を廻っていた。六月末の事である。私は偶然にもせよこの日自分が痴漢になろうとは夢想だにできなかったのだが……。

私は、いつもの様にぎっしりとつまった一日の仕事に疲れ、耳ざわりのする金属音と共にすべり込んできた電車の中に、引き込まれる様にして乗り込んだ。ドアの近くに寄りかかると、自分の足では支えられなくなった体の重みを、そこに預けてしまった。

ドアがしまりかけた時、二人の女性が私の目前に飛び込んできた。イキを切らし、足元が思う様に定まらぬ彼女等をよそに、電車はガクンと動き出してしまふ。

その衝動で、手前の女性が重心を失ない、よろめいて私の胸にもたれかかったが、そのまま二人は足場を固め、しゃんと姿勢を正してしまった。フト気がつくと、やわらかな物体が快いあたたかみをもって私の手の甲に押しつけられているのだった。話しに気をとら



れている彼女は、それに気付いていないらしい。

手の位置を替えなければ……と、私は何度も自分に言い聞かせたが、心の中で、かま首をもたげかけた悪魔は、一枚一枚、着物を剥ぎとる様に私から道徳心を奪っていく。

悪夢にとりつかれた私の右手は、自分の必死の自制心とはウラハラに、そっと手のひらを返し、ぴったりとその豊満な物体に吸いついてしまった。

甘いかすかな髪の毛の香りと、電車の震動と共に伝わる若い女性の感触。全てが私にとって初めての事だが、未知の世界で脈うつ若々しい血が衣服を通りぬけ、皮膚をつらぬき、私の体内に流れ込んでくる様な気がした。

——痴漢とはこんなものなのか——私はそんな事を漠然と頭の中で考えながら、指先に全神経を集中させていった。

べらべらとまくしたてる背の低い小肥りなもう一人の女、二、三才は年上に見えるやせぎすなこの女性の背後で、私はイキを殺して事の成り行きをうかがう。自分の臀部にある手を感じずにいる筈はない。少しして、一、二度指先を動かしてみたが、あいかわらずその女性は無関心を装い、相手の話しに聞き入

っているふうに見えた。

三ツ目の駅で、小肥りな女の方が降りた。

相手を見送るしぐさも、ごく自然なまま、電車はホームを離れる。そうした彼女の横顔を私はドアのガラスで盗み見した。淡いクリーム色のサマーセーターを着こなしているその顔は、ひどく大人っぽくみえた。二十三位だろうか。

内側にカールされた黒い髪の下で、ネコの様な目が銀色に輝いていた。キッと結んだ形のよい唇が、しっとりと濡れている感じで、私の心をますますゆさぶるのだった。

私はだんだんと大胆になった。手首を動かし、手ざわりの固くなった丘の上で、境を作る下着の切れ目から切れ目まで、行ったり来たりし始めた。さすがにガラスに写る彼女の顔は、みるまに曇り出し、魔手から逃れようと、しきりに体をくねらして、避けようとした。

私は半身になり、片足を出して彼女の太股をしっかりと押えつけて、更に手を伸し活発に指を動かしてやる。ピクリと眉をひそませた彼女は、無言のまま、それでもやっと私の魔手を払おうとした。私が空いている左手でその手首を掴むと、細いマユをつり上げ、こ

ちらを凝視する彼女を、逆ににらみ返した私は、尚、更に右手指に力をこめて這い廻らせたのだった。

髪の毛のわれ目から覗く白い首すじに私の息がかかり、彼女は肩をすくめる。ヒザ頭を同じ合わせ、上半身を震わす彼女の顔が、ガラスの中で瞳をふせ、唇をゆがめて痴漢の不ラちな行為にじっと耐えている。

何人もの乗客がいるのに、ひと言も助けを求めようとしない彼女の様子に、私は、ひとり悦に入っていた。

「すみません、降ろして」

妙にかすれ、やっと聞きとれる位な声を耳にしたのは、新小岩駅へ着いた時だった。

私は言われるままに手を離してやったが、魂のなくなった影の様に、彼女についてホームに降りると改札口を出ていた。後をつける私を意識してか、彼女は足早に歩き続けた。

商店街をしばらく行くと、駅からの集団と別れ、細い横道に入った。明かりも少なく、人通りのない路地の中で、彼女のハイヒールの音と、それを追う私のくつ音だけが、あたりに響きわたった。

頃あいをみはかると、私は一気に彼女に追いつき、左腕をぐいと取った。足音が止む。



いや、私が右手を出した方が先か、彼女が歩みを止めたのが先か、それはほとんど同時だった。

ふり向いた彼女の顔は、いたって平静だった。むしろ私の方が必死の形相になっていたろう。腕の付け根をつかんだ私は手の力を強め、自分自身を落ち着かせ様とした。顔をしかめた彼女は、尚も手に力を加えると、視線をそらし、横を向いてしまった。

くびれた彼女の細い腕は、手のひらに冷たく感じていた肌の感覚を捨て去り、次第に熱くなっていく。街灯の青白い光に照らし出された彼女の口先、軽く閉じた瞳や小きざみにふるえる長いマツ毛を見ていると、私は何か急にこの女性がこわくなってきた。

あわてて手の力をゆるめたが、彼女はしばらくそのままの姿勢をくずさなかった。私の胸は高鳴った。一度ゆるめた手を素早く手首におろし、その左腕を思い切り背にねじ上げてしまった。

重心を失なった彼女は、足元をふらつかせそのまま私に体を預ける形になった。かなりきつくねじ上げたのだが、叫び声ひとつ上げようともしない彼女は、全く私のこの暴力にさからおうとはしなかった。荒くなった二人

の息だけが、私の耳の奥まで響いてきた。

甘い香水のかおりが鼻を刺激し、緑色に輝く柔らかな髪が、私の顔をおおった。更に力を入れて手首を上へ曲げると、彼女の髪が私の顔中をたたいた。無残にねじ曲げられた腕の指先は、すでに白く変っていた。

私は空いていたもう一方の左腕を前に廻わし、ねじ上げられた彼女の手首を持ち替えると、抱き込む様にこちらに向き直らせた。相い変わらず顔を横にそらせている。

「どうだ。いたいだろう。恐いか」

私はなるべく彼女の耳もとに顔を近づけて小声で言った。彼女はなおも身体をそらせ、首を二、三度横に振った。それが何を意味しているのか、私には考える余裕はなかった。

「これではどうだ」

私の右手は、大きく肩で息をしている彼女の、無防備になった胸のふくらみを狙って蠢き始める。

「あっ」と、初めて彼女は声をもらした。上半身をよじらせ、足をバタつかせて抵抗したが、それもすぐにやめてしまった。いつの間にかハンドバッグを持った片手が、私の肩を力強くにぎっていた。

「いたいかな？」

私は少しずつ、指先に力を入れていった。『アーツ』というかすれた呻めき声が断続して起きる。ほっそりした体がこわばって震えているのがよく判る。

「君は変ってるね。どこの誰だかもわからない僕に、こんな事をされて、何で逃げ様としないんだ。もちろん僕も変ってる。わるい奴さ。初めて逢った君にこんなひどい事をするんだからね。でも、どうしても君をこうしなければ気がすまなくなったんだ。君の美しさが全てこうさせたのさ」

私は顔を後へのけぞらし、まる見えになった白い彼女の喉に唇をつけながら、うわずった調子で弁解めいた事を言った。彼女の顔をおそろおそろ覗くと、唇を噛みしめ、まぶたは強く閉ざしていた。

逆手を取ったままで彼女のくずれた姿勢を正すと、もう一度指先に力を加え、私の肩を掴んでいた片手も背中へとって、後手に交叉させて握り合せた。

「さあ、目を開けるんだ。僕の顔を見るんだ。君の名前と年、そして勤め先、これだけ言ったら離してあげよう」

私の声は、言葉使いとは逆に段々と荒々しくなり、大きくなっていた。



私に寄りかかったまま、顔を向き直した彼女は、瞳を閉ざしたまま何かしゃべった。良く聞きとれないのは、のどがカラカラにかわいているからなのだろう。

「もう一度、ハッキリ言うんだ」

私はようやく両手を離し、彼女を自由にしてやった。

「スズキ・チエコ、十八才。神田の〇〇会社に勤めています」

うつ向いたままポツリポツリと、言葉少なに口を開いた。容姿だけでなく、声もハスキーで、とても十八には思えなかった。

「本当だね」という間に、押し上げた彼女の顔はコクリとうなずいた。私をじっと見つめる彼女の瞳がキラリと輝き、その輝きが尾を引いて幾すじもホホを流れた。

自由になったのに逃げ出しもせず、よろけるように私の肩にすっかりうずまった彼女の顔は、涙でぐしゃぐしゃになっていた。

## (二)

会社と家とを、毎日振子のように往復するだけの、単調極まる生活が続いていた私にとって、四年目に起った偶然の出来事は、全く「私」を別の人間にするべく、指針をとんで

もない方向にかえてしまった。

次の日、ふるえる手つきで、彼女から聞き出した会社へ電話をかけた。ツーン、ツーンという呼び出し信号が、かなり長く続いた。脈はくが増し、ひや汗が額に浮かんた。

発信音が止む。受話器を取る音——果たして、それがウソではなかった。会社も名前も本物だったのだ。小踊りしたい気持ちで呼び出しを待った。

「もしもし」

低く落ち着いた声が受話器に伝わった。

「君かい。僕がわかるね。昨夜の事、悪かったと思ってる。お詫びしたくてね。逢ってくれるだろう」

「知りません。ひどいわ」

私は大きく深呼吸をすると、調子をかえ、話しを続けた。

「名前まで教えてくれたのに、どうして知らないなんて言うんだ」

「だって、ウソをついたら、この次に逢った時、何をされるかわからないと思ったんですもの」

「今度も、そう思わないかな」

これはすばらしい効き目のある文句だと、我ながら思った。彼女は声もなかった。

午後五時。ピタリに、うす水色の事務服を着た彼女が指定した電話ボックスの前に来た。

囲りをひどく気にしている様子なので、すぐに近くの喫茶店『H』に入った。

「私、まだ仕事が終わらないんです。すぐ帰して下さい。お願いです」

席に着くなり、彼女が口を開いた。私を正視する事も出来ず、うなだれた顔に髪がかぶさっている。

「そう。じゃ、帰ってもいいよ。明日って日がない訳じゃないしね」

「すみません」

彼女は初めて顔を上げた。ホッとした表情が、そこにはありありと浮かんでいた。

「そのかわり、今度はゆっくり話しをしたいんだけどな。約束出来るね。もうお互い知らない者同士じゃなし。いいだろう」

「仕方ありませんわ。でも、昨夜の様な事もうなさないで下さい」

それに答えようともせず、私は目で出口へうながした。おびえた目つきの彼女は、何度も何度もこちらを振り返りながら、街の中へと消えていった。

幾日かが過ぎた。灼けつくような真夏の陽が窓越しに机の上を照らしている。冷房の効



き目もさして感じさせない程の日が、何日も続いた。

そんなある日、会社の仲間と海へ行く事になった。いつもは遠慮していた私も参加すると答え、ましてや皆と同じ様に女性を連れて来るとあっては、『丸の内の一大珍事』とひやかされても已むを得なかった。しかしながら、皆をアッと驚かすだけの自信があった私は、ただニヤニヤするだけだった。

——チエコはいやがった。しかし、今度は許さなかった。強引に誘った。そして半ばベソをかき始めた頃、どうにか承諾を勝ち取る事に成功した。「ありがとう」と言う私の言葉に、チエコは肩を落して「勝手な人」とポツリと言った。下から見上げる瞳が意味ありげに笑っていた——。

七月の第三日曜日。朝から、肌を突き刺す様な陽が頭上で輝き、じっとしていても身体が汗ばんでくるムシ暑い一日が始まった。八時少し前、男女ともに五人ずつのグループが東京駅で集合した。柄物の派手なシャツを着こなすグループの中で、私とチエコの二人だけが、申し合わせた様に、おとなしいまっ白な服装だった。

逗子へ向かう電車は、案の定、大変なラッ

シュだった。荷物が多いせいか、毎朝の満員電車をしのぐものがあつたが、それでも若者達の楽しい雰囲気、チエコの気もほぐれ、目的地に着くまでには、何とか話しかかわせる様になったのは収穫だった。

鈴木千恵子——鉄鋼会社の社長を父に持つ三人姉妹のまん中。何ひとつ不自由のない家庭で育ったわりに、わがままな所がひとつもない。口数も少なく、『人の沢山集まる所、あまり好きじゃないんです。それに……』一人、部屋で本を読む事が何よりも好きな女——これがスズキ・チエコだった。

葉山の海は底ぬけに明かるかった。青い空が、白い雲が、そして緑に輝く渚が、両手を大きく広げて私達を迎えた。

「お前には良すぎるよ、あの娘。大人っぽいし、普通の娘にない妙な色気があるんじゃないか。うまくやったな」

ビキニ姿の女性が走り出たあとから、ブルーに染められたワンピースの水着を身につけた千恵子が、うつ向きかげんにヨシズの中から現われたのを指さして、友達が私に話しかけた。

「海に入らないのかい？」

笑いながら首を横にふる彼女は、他の仲間

が水の中ではしゃいでいるのを、面白そうに眺めるだけだった。砂の上に投げ出された白い足が、すんなりと延びて、私の目を楽しませてくれる。形の良い足の指先で、銀色の砂がサラサラと舞った。

「ちょっと行ってくるよ」

コクリとうなずく彼女の肩に、私はそっと手をかける。なめらかな肌に、しばし動きが静止した。一人前の女としか思えない千恵子の、胸元に見つけたそばかすの跡に、初めて子供っぽさを見出したのはこの時だった。

「この辺でイタズラしてみないか」

波間で顔を合わせた五人の悪童の間で、とんでもない相談が始まった。グループの女性を、海の中に漬けてしまおうというのだ。ワァーワァーキャーキャー騒いでいる海辺で、この位のイタズラは誰の目にも悪意と写るわけがない。

「よし、あいつがいい」

私は真っ先に、千恵子に対して白羽の矢を放った。他の四人がこれに同意すると、いっせいに奇声を挙げ、五人の男達が波を蹴って砂浜へ走った。

不意をつかれて身動き出来ぬ彼女を、男の腕ががちりと組み敷き、手足を持ち上げて



しまうと、海辺を目がけて駆け出した。水しぶきを上げ、勢いよく海に駆け込むと、「ソレッ」とばかり放り出した。

白い身体が思い切り海面をたたき、バシャッという音がした。浮かび上った千恵子をお向けにしたまま、五人がかりで手足の自由を奪い、一回、二回と水に沈める。

「助けて下さい！」

海水を飲みながらも、大の男でさえ押え切れない程の力を出し、水中でもがき、水面上で抵抗した。私は、とっさに片手を延ばし、千恵子の胸を狙った。彼女の抵抗が一瞬ウロタエに変じた。「ワッショイ、ワッショイ」私はことさらに大きくかけ声をかけた。

五回、六回、もはや声もなく、力のぬけた彼女の身体が、波間に力なく伸び、沈みはじめた。

「おい、もう止めてくれ」

強烈なショックのあまり、青白く変ってしまった千恵子の唇を目にして、私はあわてて皆にストップをかけた。髪の前までぐしょ濡れになり、ぐったりした細身の彼をかかえ、大急ぎで水からあがり、砂浜へドサリと投げ出した。

一度小さくバウンドして、「ウーン」とか

細い声をもらした。長々と足元にのびた身体は、自らを動かす力を失っていた。黒髪が顔にべったりとまといつき、凄艶なムードをかもし出している。

ほっそりとした肩からはずれた水着の肩ヒモをもとに戻し、指先でねれた髪を額の上に巻き上げてやると、まばたきもせずに私を見つめる千恵子の顔がそこにあった。黒い瞳の中に、青い空と私の顔がぼんやり写っているのが見える。小刻みにふるえている唇に、指をあててやると、冷たい舌がやわらかくそれを迎えた。白い歯が軽やかに。まぶたが閉じられ、長いマツ毛の先が夏の日に輝いていた。

「可愛いよ、千恵子」

口もとがほころび、濡れた顔がサッと赤く染まった。ヒザを落し、両手でホホを押えると、私は生き生きと赤味を取り戻した千恵子の唇を吸った。

### (三)

有楽町にあるNデパートのサテライト前、これが二人の待ち合わせの場所になった。一見、誰しもが思いつく場所であり、事実、数え切れぬ程の待ち合わせのカップルが見受け

られたが、恋人同士とも、友達同士とも言えない私達は、何かしっくりとなじむ事が出来ず、すぐにここを離れるのが常であった。

会社がひけたあと、今日も逃げ出す様に私はそこを離れた。千恵子は一、二歩うしろから黙ってついてくる。彼女と二人きりになるのはこれが四度目。いつも目的もなく、行く先も定めないうちに電話で呼び出し、足の向くままに歩き廻るのだから、至っていいかげんなデートである。

が、そうした時の困惑した表情が、千恵子の美しい一面であり、私を、そのポーズひとつだけで満足させる力を持っていた。カールされた髪に指をからませ、上目づかいで何か言いたげに見つめる彼女のしぐさが、私は一番好きだった。

ガードをくぐり、日比谷に向かう。皇居前の芝生には、幾組ものアベックが赤々と西日に照らし出され、長い長いひとつの影を作っていた。

「みんな楽しそう——」

後で声がして、私はそっと振り返る。

「うらやましいのかい」

「私だって、女ですもの」

私は千恵子にはもっとぴったりのものが



ありそうに思えた。『そうだ！ あれがあるじゃないか。試してみるチャンスだ』この時二、三日前に目にした新聞の映画案内欄を思い出したのは、タイミングが良かった。

「映画を見よう」

「エッ？」と聞き返す彼女の手をとると、タクシーを止め、新橋へ急いだ。車から降りると、恐怖におびえる女の顔が、見上げる程の高さに吊るされていた。下に書かれた『拷問』という文字の赤色が、まるで血のしたたりのように見えた。

「まあ、こんな映画。わたし——」

思わずあとずさりする千恵子の腕をとり、強引に中に引き入れた。

すでに映画は始まっていた。音質の悪いスピーカーから、女の悲鳴が館内いっばいに響きわたり、逆さ吊りにされた半裸の女が画面狭しとばかりに写し出されている。

「こわいワ」

下を向いたままの千恵子を、強く横抱きにすると、私はゴクリと生ツバを飲んだ。そして、スクリーンと彼女とを交互に見やりながら、熱い息をえり足めがけて無理矢理吹きかけた。

裸にむかされた胸を締めつけられる様に（こ

れが菱ナワという奴なんだナ）縛られた女が折れた弓で強く打たれるシーンが続く。ビシリと素肌をたたきつける、ムチの不気味な音と、低いうめき声がするたび、腕の中の千恵子は、身体をビクリとさせ、両耳をふさごうとするのだった。

「だめだよ。ちゃんと見てなきゃあ」

やさしく両手をおさえ、ふるえている肩を強く抱きしめる。私の頭の中には、いつしかこのかれんで美しい千恵子と初めて出逢った時の事が、浮かんでいた。

二人の場違いな想いをよそに、映画の方はこれでもかこれでもかと女体を痛め続ける。女牢の中で、フトンむしに遭う女囚を助けようとしたキリシタン娘が、他の女囚にそれを見つけられ、逆に同囚仲間の仕置きを受けるハメになった。格子に両手を拡げて縛られた娘の豊かな胸を、非情な板切れが、責めつける。

『アウ……。ムムム』苦しみもがく娘の顔がアップでスクリーンに写し出された時、私は、それがとなりの千恵子の顔と重なって見えた。

「あっ、離して」

身近な声に私はハッとした。彼女の困惑し

た顔が私を伺っている。無意識の内に、自分の手は彼女の胸のあたりで遊んでいた。

「初めて逢った時の夜、覚えてるだろ。あの時の君が、あの人と同じ表情に思えるんだ。ホラ、似てるよ。良く見てごらん」

髪を割って入った唇が、冷たい耳もとでさうさやいた。あとは二人ともパントマイムになった。頑丈な手が、彼女のしなやかな二の腕をにぎりしめる。その手の甲にツメがたつ。が、細い指は押しのけられ、やがてあきらめた様に軽く手の甲に重なって抗らいを止めた。

タバコの煙りが立ちのぼる中で、映画の方は二人の心をあおる様に、物語りを進めて行く。ストーリーなどもうどうでもよかった。終始耳にする女の悲鳴も、不快な雑音となつて千恵子の蚊の鳴く様なかすれた声にかき消されてしまった。

私の腕の中で、彼女は小雀のように震えていた。小さく開いた唇の中で、白い歯がくつきりと浮かんだ。二人の周囲だけ館内のよどんだ空気も散ったように甘ずっぱい匂いが二人を包んだ。

「泣いたのかい」

帰りのタクシーの中で、私は訊ねた。深夜



の京葉国道を行きかう車のライトに、千恵子の目もとが赤く照らし出される。私の右手は彼女の肩にまわり、優しく黒髪をもて遊んでいた。

「君は花の美しさを知っているかい。ツボミの花も、花びらを開いた花も、それぞれに美しさがあり、賞でる人の心を安らかにさせてくれる。生きた花だって、造花だって、ここまでは同じだ。でもちがうのはその後だよ。本当の花の美しさは、そこにあると僕は思っている。——それは花の散る時さ。解るかい。雨に打たれて散るもよし、風に吹かれて散るもよし、人の手で無理に散らすのにも風情がある。女性も同じさ。どんなにきりようが良くても、どんなに綺麗に着飾っても、その美しさには限りがある。しかし、散る時はちがう。君も同じさ。美しさに限りがない世界、君自身で気が付いてるはずだ。きっとネ」

そのうち千恵子の身体が、重く私に寄りかかってきた。軽い寝息が聞かれ、私は話すのを止めた。車は墨田川にさしかかっていた。左手の奥に、浅草の灯がチラリと覗いた。時はすでに十一時を廻っていた。

「それじゃ始めるよ」

木立ちの間で、過して来た一刻の後、甘夢の中をさまよい続ける千恵子を離すと、私はザックの中から買い求めたばかりの真新らしい細ヒモを取り出し、うしろに廻って彼女をうながした。

「こわいワ……」

心なしか、肩をふるわせていた。

「僕を信用出来ないのかい」

「そういうわけじゃあ……」

夏も終り、つくつくぼうしの鳴き始めた奥多摩へ、私は彼女を誘った。ただのハイキングでない事は、二人とも承知の上である。

一カ月程前に観せた『拷問』以来、私は、事ある毎にS・Mの話題を探し、自分達の間を持ち出した。そして、その美しさや本然性を、何かの本で覚えた程度の幼稚なものだったが、あれこれと話して聞かせた。我ながら涙ぐましい苦心の末の、今日なのである。

観念した態の千恵子の腕を、そっと撫でおろすと、しなやかな両腕が自ら背に廻った。手首をにぎり、そこに細ヒモを二、三度からめて、胸に余ったヒモを持っていた。

「誰か見ていたらどうしよう」

「かまやしないさ」

「そんな——」

硬直し、つつ立ったままのかっこうで縛めを受ける千恵子の肌は、まるで石の様に冷たかった。今日、初めて手を通したという淡い紫色のブラウスの上から、無情な細ヒモが、胸の小さなふくらみを引き立てようと、その上下に白い線を引いてくい込んでいった。

「そう硬くならないで。さあ、こっちを向いてごらん」

一度手にしたカメラを地面に置くと、気持ちを柔らげなくてはと、やさしく髪を指先でとかせた。夏のなごりを惜しむかの様に、カサカサと木々の緑がそよぐ中で、彼女は青ざめた顔を私に見せている。

「ねえ、早くして」

恥じらう千恵子が、やっと口にした言葉に私は氣をとりなおすと、半ば忘れかけていたカメラを取り上げた。被写体から数メートル程離れると夢中でシャッターを押し続ける。アングルを変え、場所を変えるたびに、ガサガサと草むらがざわめいた。

初めの内、カメラを向ける毎に、顔をそらせ、カシヤツというかすかなシャッターの音に脅えていた彼女も、時が経ち、慣れるにつれ、身体をもじもじさせ、肩をゆすり、髪を



ふるわせて、未知の世界に自らを引き入れて行った。私の両腕は、カメラを持つというより、カメラにしがみつく様にして、微妙に変化していく一人の「女」を追い続けた。

「もうダメ……」

我を忘れた千恵子は、当然の様に力がぬけその場にしゃがみこんでしまった。首を曲げ身体をよじり、自分の胸に、そして、二の腕に深く溝をつくってからんだ細ヒモをじっと見つめていた。

「どうしたんだい」

顔を覗き込む様にした私は、とっさの思いつきで、何か言いたげな千恵子の口を割り、汗を含んだハンカチを丸めて押し込み、手拭いで抑えて頭のうしろで結んだ。さるぐつわがきつかったのか、こめかみのあたりがピクピクと痙攣している。

そのまま、腰に手をあてがい、力を入れてつき倒した。「ウッ」と呻き声をあげ、ドサリと音を立て、草むらの中で、むなしく白い足が空を蹴った。すっかり秋を感じさせる風がスカートの端を宙に舞わせた。

すかさずカメラを構える私に気付くと、細い足が反射的に身をひいた。足の下で、千恵子の瞳が、うらめしそうに、私を見上げてい

た。

一回ウインクをする。シャッターが立続けに音を立てる。横倒しになった彼女のさるぐつわと細ヒモをほどくと、すぐに次の動作に移った。

「今度はどうするの」

はずかしそうながら、もう嫌といい出しもせずに訊ねるのを無視し、私は無言で、か弱い手首を前に組ませて細ヒモをまきつけた。ヒモの先を持ったまま、私は立ち上る。

「イヤーン」

手首を吊られた彼女は、草の中で一回転した。パラパラと草の葉がこぼれ落ちる。抱きかかえる様にして起こすと、おぼつかない足どりの千恵子を押しやり、近くの松の木の前へ立たせた。

両手首を、顔の上にもっていき、木の幹にくくりつけた。ツマ先立った千恵子は、己れのあわれな姿を見、空を仰いだ。私は別のヒモを取り出すと、胸の突起をはさむ様に、ひとまき、ふたまきときびしい縛めを加えてみた。

万才の型で松の木にはりつけられた姿を、カメラのレンズが執拗ににらみ続けた。腰をくねらせ、眼を細めて恍惚の境地に達した彼

女の唇が、あやしい動きで何かを求めるようだ。

細ヒモの喰い込むブラウスの前を、たどたどしい手つきでやっとな押し開き、むき出しになった肌にそっと指を触れた。

「素敵だよ、千恵子。本当に素敵だ」

胸元の下着が痛々しくよじれている。頭上で結ばれた腕が悲しくふるえ、やがて身体全体にその震動が伝わって行き、その震動で千恵子の熱いまぶたに留まっていたひと粒の涙が、ぽろんとホホに落ちた。

奥多摩の茂み深く、巨大な樹木に囲まれた中で、自由を奪われた小鳥の悲しいさえずりが、低く、いつまでもいつまでも、流れていた。

## (五)

写真が出来たという知らせに、千恵子は一刻も早くそれを見たいと、私にせがんだ。どうやら、彼女の中から私はもう一人の彼女を探り出し、それをこの手でつかむ事が出来た様だ。——成功だ。大成功だ。しかし、彼女はもともと被虐を求めていたのではないだろうか。でなければ、とうの昔に私の傍から逃げ出している筈だ。最初の出逢いのときから



彼女はある期待を持っていたに違いない。ともあれ小心者で、およそ女性とは縁のなかった頃の自分が、ひどく惨めに思えてきた。今迄はとも手の届かぬ所にあったものを、とにかく自分の自由に出来る喜びを得た時、私は、より他人より先んじている何かを、誰ひとり知らぬ間にこの手にした様な、初めて誇らしい自信を味わい、その美酒に酔い始めていたのだった。

三日後、新宿駅近くの某デパートにあるプロムナードで待ち合わせると、夜のネオンの中に千恵子を誘った。すっかり私になつた彼女は、腕をからませ、私に身をあずける様にしてついてきた。

コマの裏にある、『S』という同伴喫茶に入る。一階は、うす暗くただっ広い中に、無数のアベックが一つの方向にずらり並んでいた。そして、人目に気を配る事もなく、互いの愛を確かめ合う姿が群がり、千恵子の胸をひそかに揺り動かすには、充分過ぎると思われりくらいの熱気が渦まいていた。

「僕達はこの上だよ」

彼女の背を押す様にして階上へと促した。そこは階下よりも一段と光の届かぬうえ、人のうごめく気配はしても、全く姿の見えない

世界だった。

少々不安げな様子の彼女を、私は壁側に押し込む。コーヒーが運ばれると、ボーイの馴れた手つきで色あせたカーテンが閉じられ、あつという間に、畳半分ほどの個室に早がわりした。

ほっとする間もなく、前後から低い、うめきに似た声が二人の耳をくすぐった。愛をたしかめ合い、無言の約束をしている様子が、仕切られた薄っぺらな板を通して、はっきりそれと感ぜられ、ある種の異様な雰囲気は二人を包み込んだ。

悦びを誂い上げ、女のかなでる美しいヴァイオリンの響きが、どこからともなく暗やみの中を流れ始めると、せきを切った様にあちこちから共鳴が起り、時ならぬ「愛の讃歌」のメロディーに、すっかり千恵子はホホを赤らめてしまった。

私はそんな彼女の前に、あの奥多摩で写した写真をだまって突き出した。天井からの光もなく、申し訳け程度に赤くついているサイドランプの下で、ナワ目を受けた自分の写真を、千恵子は一枚一枚、食い入る様に見つめた。淡い光の中で、彼女のヒトミが段々と輝きを増し、私の心を踊らせ始めた。胸元をは

だけ、万才の格好で木に縛りつけた最後の写真をとりあげると、それを胸に抱きしめ、耳と目からの立体作戦に、あっさりと音を挙げってしまった様子であった。

目を閉じると、千恵子は身体をぐいぐい私に押しつけてきた。か細い肩を抱き込み、酔いのまわった彼女の顔中に唇をあてた。互いの唇がふれ、そのまま重なり合った時、素晴らしいカクテルを作り出す。しっかりと胸に組まれていた彼女の腕が、遠慮がちに私の首にまきついた。

パサッと、幾枚もの写真がせまい床に散らばった。私はあわてて千恵子を離すと、それを拾いにかかった。思わず顔を見合わせる二人の視線が、この時、ガッチリと目に見えぬ糸で結ばれた様に動かなくなった。

私の頭がフル回転した。ふと、草むらで、そして木々の間で作り得た、自由を奪われマユをしかめた彼女の表情を、今、ここで再現出来るかと直感的に思った。それは、全く恐ろしい予定のコースだった。

荒々しく身体を引き寄せ、私は千恵子のあえぐ白い喉に唇を寄せた。右手で胸の高鳴りを確かめると身体をすくめて恥じらう彼女のカーディガンを奪い、上着のホックをはずし



肩から脱がせた。しなやかな肩を押えると、声をこらして同調のきざしをみせ、許しを乞いながらもむしろ催促する身振りで彼女の身体はせまい部屋の中で、甘いかおりを発散させ、その中で、楽しそうに踊り続けた。

私の唇は、やがてむき出しになった肩に移り、スリップのひもがはずされ、刺繍のされたブラジャーが床に落とされると、千恵子は動きを止め、放心した様に両手をだらりと下に降ろした。

腰かけたままの窮屈な姿勢で、私は彼女を壁に向かせ、両手を背後に高々とねじ上げてしまう。そしてズボンから細いロープを取り出し、肩の近くで交叉した手首にからませると、両の肩にボンと手をやり、こちらに向き直させた。

顔をうつ向かせ、むき出された上半身をかかめている千恵子の背で、しなやかな指がしっかりとにぎりこぶしを作っていた。一時の休みに、つい先程までの自分の姿を思い浮かべているのだろうか、強く首を振り、何度もイヤイヤをしている。これが彼女の悦びのサインだと受けとれる。

「胸をはるんだ！」  
低い声で、私は命令した。あごを押し上げ

背すじを延ばさせると、千恵子は瞳を閉ざし濡れた長いまつ毛を細かくふるわせていた。無残に曲げられた腕の付け根が、気のせいかうっすらと色づき、若々しい肌の白さにアクセントをつけていた。

今迄、何度か触れた事のある私も、じかに彼女の乳房を眺めるのは、これが初めてである。まだ実の青い、お腕を伏せた様なゆるやかな起伏は落ち着きのある息づかいをみせ、ピンク色をした可愛らしいその頂点をつつくと、弾力を持った乳首はピョコンと私に挨拶をした。これが戦闘再開の合図となった。

私はその小山に挨拶を返すことにした。上下左右にゆっくりと動かしながら、じっと千恵子の表情を伺った。うしろの仕切りに背をもちたせかけ、私の手の運動に合わせて首をかしげるその顔は、苦悶とも快楽ともつかぬ味わいを噛みしめもだえている。

焦点の定まらぬ瞳や、かすかにほころぶ口もとに魅せられ、彼女にあるマゾを確信した私は尚一層、手の力を強めた。彼女は表情をこわばらせ、いつもの様にあまり声もたてずその感情を全て顔で表わすのだった。

白い肌がほんのりと赤味を帯び、汗ばんだ体のほてりが、手のひらを通して私のSをい

やが上にも湧き上らせた。

ふんばっていた千恵子の両足は、力をぬきヒールの先が静かに床を流れた。次の瞬間、思い切りなめらかな肌に爪を立ててやった。

「アーン！」

短かい悲鳴をあげると、千恵子は足を引き戻し、背にねじ上げられた不自由な腕を動かして、そして後頭部をしきりに打ちすえて精いっぱい抵抗をした。突然襲ったはげしい痛み耐えられず、髪を乱し、その顔は今にも泣き出さんばかりに、恐怖におびえていた。

ひと息ついた私は、気をとりなおし、やさしく髪に手をやり、かわききった唇に愛を示してやる。

シユミーズに包まれてはいるが、細くくびれた胴——しなやかな腰——そこから延びる太股——スカートからはみ出た可愛らしい膝小僧——そしてピツタリと合わされた両ヒザ——それらが美しくすんなりとした曲線をそこに描き出していた。そしてその両腕は背中に廻わり、細いロープがこの美女を更に美しく捉え上げているのだ。

「許して」

大げさに体をくねらせ、千恵子は叫んだ。  
「許して。ね、お願いです」



私を見つめる顔は、まばたきひとつせず、真剣そのものだった。場所柄も考えるべきだった。私はこれ以上の事は思い止まるべきだと考えた。冷静さを欠いた自分自身に、思わず苦笑した。

「ごめんよ。もうしない」

「あア、はずかしい」

「そうかな。でも、とってもきれいだよ、今の君は。今度はこうやって写真撮ってみようよ」

私は半裸の千恵子と、洋服のまま縛しめを受けている奥多摩での写真を見くらべながら言った。

「もうイヤ！ イヤです」

「本当にイヤだと、思ってるのかな。今日の君、とってもうれしそうだったじゃないか。」

千恵子はきつとマゾヒストなんだよ。マゾヒストって意味はね、解るかな……」

「ウソ、ウソです。もう止めて——」

逃げ場のない個室の中で、不自由な身をどうする事も出来ない千恵子は、私の言葉に耳をかすまいと、しきりに首を振った。私にはそれが自分のM性を意識している彼女の羞恥ととれた。それではもう一度と、私は荒々しく彼女を押えつけ、ロープを締めつけながら

言った。

「約束するね。日にちは……」

「そんなの、勝手ですわ」

私はかまわず、腕の縄目を更に強めてやった。彼女の表情が苦痛を表わした。そのまま一方的に日時と場所を指定し、必らず来る様念を押した。これで、今日私があらかじめ頭に描いていたプログラムは終了した。千恵子が小さくこっくりするのを認めて私は満足感で胸をワクワクさせながら押えていた手を離し、後手のロープをほどいてやった。

「ひどい人」

フウツとため息をつく、千恵子はむき出しのままの胸をかくそうともせずに、私の膝に崩れた。私を目上げる瞳は、何か自分の悲しみを楽しんでいるかの様に、ほほえみさえ含んでいた。

新宿駅のプラットホームに立つと、私は写真の入った袋を手渡した。ひょいと千恵子の手首に残されたアザを見つけ、私はからかった。彼女は胸に手をあてがい、「まだイタイわ。どうしましょう」と言っとうわ目づかいに私を見た。

「すぐ治るさ。そんなの」

化粧を直した彼女のひたいを指で小突きな

がら、私は言った。シルバーピンクの口紅がくすんと笑った。

## (六)

約束の日、私は今までこつこつためてきた預金を全ておろし、千恵子を待った。さり気なく通勤着を着こなした彼女を連れ、皇居を望むホテル『N』で夕食をとった。

「そろそろ出ようか」

やっぱりと言いたげな表情の千恵子を見返えして、車で新宿へ出た。予約しておいた御苑近くの旅館へ、二人は肩を並べて入った。

二間続きの洋間に、バストイレ付きときては、私のフトコロも底が見え始めるのも無理はなかったが、美しい彼女にふさわしい、責め場所である事では、文句の付け所がなかった。

「フロに入れよ」

燃える様な赤いじゅうたんの敷かれた一室で、何となく落ち着かぬ様子の彼女に、声をかけた。ガラスの置き物のあるサイドボードに、ポイとバッグを放り、言われるままにバスへ向かう背を、私の視線が追いかける。

くもりガラスの向こうに、裸身がほの白く浮かんた。素肌をはじくシャワーの音を耳に



しながら、私は責め場作りにとりかかった。イスやテーブル、そしてルームスタンド等を部屋のすみに押しやり、カメラにフィルムをつめ、ストロボを取り付けると、コンセントの位置を確認して、バスの方へ歩んだ。

「あつ、こんな所に。ひどい！」

濡れた裸身が、シャワーの下で小さくうずくまる。水を止める私の手に、一束のロープがにぎられている。千恵子の眼がいち早くそれを見つけた。

「どうしても、縛るの」

「あたり前さ。さ、言う事を聞くんだ」

言葉とは逆に、彼女は意外におとなしかった。後手を腰のあたりで縛り上げ、胸から下腹にかけて、ロープが幾重にもからまった。

水のしたたりが止まらぬままの、白い裸身が、赤いじゅうたんの上にくずれた。なんと素晴らしい一瞬ではないか。はずかしさに、自由である足を動かす事すら出来ず、全てを私の前にさらけ出した得難いポーズ。私は夢中でカメラに納めた。

「じゅうたんが……」と口走る彼女。バスから大きなタオルを持って出た私は、千恵子をタオルに包んで抱き上げた。真っ赤なじゅうたんが、彼女の形どうり濡れ、クッキリと人

の形を描いていた。

「ごらん、あれが千恵子の縛られた影だよ」  
タオルの中から、おそろおそろそれを見下す彼女の耳たぶを、私は軽くかんでやった。  
「じっとするんだ」

濡れた身体を私は包んだタオルで拭いてやった。

化粧を落した彼女の顔は、いつにも増して美しかった。ロープに区切られ、どうする事も出来ない自分自身を千恵子は黙って私に預ける以外にない。

「お願い。髪を直して」

せっかく写真を撮るのだから、私はこのままの方が良いと思ったが、ひとつ位は彼女の言う事も聞いてやろうと、鏡台からヘアブラシを取り出し、後手のままの千恵子の髪をやさしくといてやった。

「スミマセン」

甘える様な眼つきで答える彼女に暴力を受けられ、被虐を待つ風情が私に読みとれた。

広いじゅうたんの上で、縛られた美体がポーズをとる。ストロボの光が放たれ、次のポーズを作る為に、私は千恵子に命令する。

肩を引きすえ、足を動かし、次のポーズを作らせる。さからう事もせず、千恵子は人形

の様に、私の命ずるままのプロポーションを作る。が、やはり生娘である。自由な下肢を利用し、大胆なポーズは巧みにゴマカそうとするのだった。

「言う通りにしないと、足も別のロープで縛ってしまうぞ」

「ダメ！」

足元にかがみ込もうとした私の顔を、彼女の素足がいやというほど蹴り上げた。私はとっさのことに、物の見事に転んでしまった。

「やったな」

「ごめんなさい。かんにんして」

悲しい顔つきで哀願する千恵子に、私は首を横に振って答えた。重苦しい空気が部屋の中にはりつめ、息苦しさに私は堪えられなくなってしまった。

「泣け、泣くんだ」

狂った様に彼女を抑えつけると、ぬくもりを失ないかけた素肌を、ところかまわずにつねってやった。もう、写真など撮る必要はない。私はそう決心した。こうして千恵子を責めてやれば、彼女の悶え苦しむ様を、ひとつ残らず自分の脳裡に焼き付ける事が可能なのだ。

にぎりこぶしが、ロープにくぐられた胸の



ふくらみをひしと打ちすえる。「ウツ」と、もれるうめきに、私はほんとに安心した。肌を責める指先に徐々に力を加え、ツメを立てて責め続けた。

「ア——ツ。ア——ツ」

美しい顔があえいで、引きつる口もとからほとばしる呻めき声がつく。全身をくねらせ身もだえるたびに私の血は沸き立ち、夢中にさせられていった。

爪先責めから逃れた千恵子は、休む間もなく、次の部屋へと運ばれた。なまめかしいピシク、ふとんが剥がれ、新しいロープと美体がそこに置かれた。

白いシーツに伏した彼女の両足をそろえ、足首にロープをまきつけ、背中めがけてぐいと引き上げた。ロープの先を手首に結び終えると、私はベッドを離れた。

一服する事にした。タバコの煙を通してふくらはぎの筋肉が苦しうにあえぎ、肩の骨が大きく突き出ている千恵子の姿が、別世界の妖精のように映った。いくら柔らかい体とはいえ、逆エビに縛られては、やはり痛いに違いない。シーツにうもれた顔面を横にしてやると、乱れた髪を口にくわえ、首すじをふるわせ、眉間にしわを寄せてこらえていた。

しかし、私の責めはまだまだこれからである。腰を上げ、千恵子を逆えびのまま、お向けに寝かせる。

「いたい」

自分の身体の重みが、背に廻され、下になった手足にすべてがかかる。そり返った胸や腹、苦痛を耐える美しい表情。それらが私の心をかき乱した。が、一番にうれしい程に可愛かったのは、やはり、ロープに押し上げられ、蒼白になった痛々しい二つの乳首だった。

「苦しいワ」

それでも千恵子の流し目は、常に私を意識し枕もとに腰かけた私から視線をそらそうとはしなかった。

「よし、苦しさを忘れさせてやるよ」

うなずく彼女の前に、私は薄くけむりをあげるタバコの火を見せた。

「アツ——、アツツ、アツイ——」

この叫び声は、めずらしく大きかった。それもそうだろう、目前を横切ったタバコの火が、今、敏感な肌を責めさいなんているのだ。その火は片方の胸で、乳首からものの一センチも離れていない所で、ゆっくりと円を描き出した。

千恵子は狂った様に声をあげ、頭をシーツにめり込ませて、この灼熱の責めを受けた。ロープが肌をこすり、そこに赤いあとを残した。汗とも涙ともつかぬものが、彼女の顔中を濡らしていった。しかし、さすがにこの責めは長くは続かなかった。叫び声はたと絶え、白い被縛体がシーツの中にくずれた時、哀れにも美しい千恵子は、気を失ってしまったのだ。

あわてて、ベッドのまわりをウロウロする私だけが、熱くなった部屋の中で、一人、惨めなピエロの役を演じなければならなくなっていた。肩をゆすり、ホホをたたいたりして千恵子を気付かせようと努めた。肌を強くこする事も試みた。一生懸命摩擦を続ける。思い及ばなかっただけに私は心からあわてた。先刻までのSの陶酔などどこかへ吹きとび、ただ一途にウロタエルのみだった。

うっすらと彼女の眼が開かれた時、泣き出した程嬉しかった。謝ろうとしたが、気付いた千恵子の瞳には先程のけわしさなど微塵もなかった。うれいをもった表情がとまどっていた私の視線をくぎづけにしまった。動きのぶった手が、暗示にかかった様に謝罪の意をこめて彼女の顔の汗を払った。千恵



子は縛られた身体をもだえ、あえぎ、そして私の指を唇に挟んだ、激しい苦痛が彼女のMを決定的に引き出し、真実に責められる悦びを体得させたに違いなかった。

二人の仲は、もう誰にも引き離す事は出来なくなっていた。この日から二人は逢う時間を待ちこがれるようになった。そしてそこには決して縛めを受けた千恵子が、快楽の酒に酔いつぶれ、私の責めを求め、甘受する姿があった。

バラ色の夜を、私はどこまでも追い続けて行きたいと願った。無論、美しい千恵子連れである。

### (終)

二人がつき合い始めて、二度目の夏を迎えたある日、私はいつもの様に電話で呼び出しをうけた。だがその日は時間が早かった。昼休み、近くにあるNデパートの屋上で、スモッグにかすむ薄黄色い太陽を背にした千恵子は、表情を内にこめ、能面の様な顔つきで私を待ち受けていた。

「急ぐ話して、何だい？」

別に機嫌をとる事もなかったのだが、横に人が多勢いたので、私はいつになく優しい口

調で話しかけた。

「お別れしなければならいんです。サヨナラを言おうと思って——」

「サヨナラ？ 何故だい！」

『ケッコン』……彼女は、ひと言ひと言、解りすぎる位ゆっくりと答えると、表情をくずした。それは明らかに、勝ち誇った者のひとを蔑むような笑いだった。

私は、頭のとっぺんを鉄の棒か何かで打ち砕かれた様なショックを覚えた。目の前が一しゅん真っ暗になり、続いて千恵子の顔も、まわりの人間も、そして立ち並ぶビル景色も、目に写る全てのものが、その色を失っていた。もう、私の耳には、何の気配も感じなくなっていた。

まだほんの芽生え程度だった千恵子の、心の奥底に秘められた彼女の性を引き出し、悦びを具現化してやり、自分の思う通りにそれを操っていたつもりが、何という事だ。私は、彼女が私から離れて行けるものではないと、今の今迄思い込んでいたのだ。千恵子の全てを支配していたはずの自分が、とんだ彼女のオモチャだったとは。——私はそれに、千恵子に対する気持ちだが、もはや只単にプレイの相手という事だけではなくていたの

である。

全てを私に奪われた女のシッペ返しを、私は複雑な気持ちで受けた。しかし、心の中で煮えたぎるSの血は、この屈辱に対してこれ迄にないはげしい怒りを起こさせ、私の自制力ではそれがどうにもなくなっていた。

「明日、逢ってくれないか。もう一度だけプレイをしたいんだ」

私は、半ばやけくそ気味に誘いをかけた。「ええ、どうぞ」

別れようと言っておきながら、『もう一度』と言えば、いとも簡単にOKする。それでいて、ひとつも悪びれる事もなく平気で笑っている。最後には又、首をすくめて例の上目づかいで、私に話しかけてくるのだった。この女の本当の心を、私はやっと知った様な気がした。

その晩、私はある計画を立てると、列車の時間表や小道具をそろえ、明日にそなえた。

翌日、彼女はノースリーブの無地のワンピースで、私の前に現われた。

「どこへ行くのかしら」

千恵子の質問に答えを返さず、とまどう手を引っ張る様にして、東京駅へ急いだ。逗子行きのキップを二枚買くと、けたたましく鳴



るベルの音にせかされながら、電車に飛び込んだ。

チラホラ灯りがつき始めた、夕ぐれの東京を後にした私と千恵子は、しばらく無言のまま並んで腰かけていた。

「私の事、結婚の事、聞かないの？」

しびれを切らせた様に、彼女が口を開いたが、聞く必要はないと私は思った。

「僕には関係ないね」

それだけ言うと、私は、真新しいロープやカメラを入れたバッグを、大事にかかえ直し、後へ後へと流れ去る窓の景色に目をやった。あとはだまりこくったまま逗子へ。そしてタクシーで葉山海岸へと向った。

「ここ、昨年あなた達が私にいじわるした所でしょ。解ったワ。ここで又、私をいじめるのね。そうでしょ」

海辺に着いた時は、とうに七時を廻っていた。若者達でにぎわう浜辺を離れ、私は遠く夜釣りの舟灯りを望む岩場の上に、千恵子を連れていった。

「この下がいい」

大きな石のゴロついている足元には、白い波しづきが黒い海の中で飛び上がり、ぶつかり合っていた。太鼓を打ち鳴らす様な波の音

が、岩場をもふるわせていた。おぼつかぬ足どりで、二人は下に降りた。

「ねえ、ここ、他人に見られやしない？」

「今頃はみんな向こうで夢中サ」

そう、解りやしない。大丈夫だからこそ、ここを選んだのだ——私は、心の中でそう言い続けた。

バッグの中からロープを取り出す間、千恵子は背のファスナーをはずし、もう服を脱ぎ始めている。下着だけになったのを見届けると、私はいきなり、思い切り彼女のホホを平手打ちした。

『イタイ！』——そうさ、いたはずだ。今の私は、プレイのつもりじゃないのだ。

髪をつかんでうつぶせに引き倒すと、馬乗りになり、身につけていた薄ものを、乱暴にむしり取った。

千恵子は少しも抵抗しようとせず、美しい口許にうす笑いさえ浮べていた。自ら背に廻した手首にロープをぐるぐる巻きつけると、あとは暗やみの中で白いロープが狂った様に踊り続け、またたく間に一個の白いかたまりが出来上った。

白い腹を上にして、岩場に打ち上げられた人魚の姿は、上肢も下肢もロープで引きしぼ

られ、見るかげもなかった。

両手首を肩まで引き上げたロープは、細い首にいやらしくまきつき、背後から縦に這って前面に廻り胸の上へ引き上げられ、首のロープに結ばれた。別のロープが十文字に胸を締めつけ、その先は縦のロープを両側から幾度もからんで引き合い、太もものあたりで止まっていた。蠟のひかれた白いロープに、打ち寄せる波のしづきがかかり、神秘的輝きを見せる。日やけた褐色の肌を、縦に横にと幾重にも食い込むきびしい縄目に、細々と息づく苦し気な千恵子は、いつにも増して素晴らしく、美しく思えた。それがその場合、言いかげなく私には、にくらしかった。

「きついね。でも、これが最後ね」

千恵子は、自分自身に言い聞かせる様にひとり言を言った。——そうさ。これが最後さ。本当にね——。

先ずは手はじめにと、いつもの様に胸のふくらみを責めることにする。靴のままの片足を、どすんと左の乳へ乗せた。

「ウツ」とうめき声が上がった。胸の上でツマ先がゆっくりと弧を描く。両足をふんばり、腰を浮かせて千恵子はこらえ様としたが縦横に走る縄の喰い込む痛みがそれを止めさ



せてしまった。よいしょとばかり、私は残りの足も腹に乗せて、彼女の上に仁王立ちになると、もう声にならない叫びが表情に現われた。面白がって、腹の上で靴底を踏みしめ、にじりながらゆさぶると、ついに泣き顔になった。

攻めを替えるべく、一端、千恵子の上から降りると、横腹に足を入れてうつ伏せにする。背中といわず二の腕といわず、岩肌のあるとがくつきりと幾何模様を作り、砂と血が黒く色どりを添えていた。

片足を背に乗せ、髪をからめて頭を引き上げる。「クーツ」と悲鳴をあげた千恵子の顔が、手を離すと共に堅い岩肌につかり、にぶい音を立てた。

ズボンのベルト、ライター、万年筆と、責め道具はいくらでもある。次々と繰り返し責め続ける私の心は、嫉妬に怒りくるっていた。ひとつひとつの動作には、プレイを楽しむゆとりも、相手を思う気持ちなど微塵もなかった。それはプレイではなく、無残に裏切られた復讐だったからだ。

「さあ、最後に海へつけてやる」

手をかえ品をかえ攻めまくった私の耳には呻き声や悲鳴と一しよに、何度か相手の男の

名前が入ってきた。それが余計に私の嫉妬に油を注ぎ炎を大きくした。が、今はもうぐったりとして、あの私を燃えさせた怪しい輝きをもった瞳だけがこちらを見上げている。

——このネコの様な目が、私を狂わせてしまったのだ。痛い、か、苦しい、か、それが当然だ。今日の責めには情がない。怒りの責めは残酷以外になにもないんだ。プレイとしての責めとの違いをよく噛みしめるがいい。……私は心に叫び続けた。

手首のロープを残して縄をほどくと、軽々と千恵子を抱き起した。波に洗われた肌は、ひどく熱っぽかった。どす黒くにじんだロープのあとや、ムチ打たれたあとに手がふれると、顔をしかめて身もだえる。怒りに狂った私の無情さを彼女はとう受取ったのか、長い睫毛をふるわせて、目尻から涙が尾を引いて流れ滑った。「私ね……」と低い声が私の投げ込もうとする手を押しとどめた。「いじめられるの嫌じゃないわ。……でもそのためだけに、人生をすりつぶすのはどうかと思うの。縛って、責めるのも人生のプラスになるようにしなくっちゃあ……」

私は膝上程の深さの海水の中に彼女を抱えたまま佇立して無言だった。

「いつか貴方がいったように、たしかに私はマゾ女よ。貴方と知り合う前から私自身で自覚してたわ。だから縛られていじめられた時、天に昇ったように嬉しかったわ。もう一生、貴方の縄から脱け出したいくないと思ったことも何度もあったのよ。……でもね、結婚は別よ、貴方とはとても出来ない。貴方はサドじゃない。エゴよ。エゴイストよ。本当のサディスト……と私が考えているのは、顔さえ見れば縛って女をいたぶる貴方のようなのではないわ。もっと自制心があったわりのある奥深い責め方の出来る人……そんな人が私は本当の近代的なサディストだと思うのよ。……私はそんな人と結婚したいわ。縛られ通しでいいわ。責め続けて欲しいのよ。それが結婚生活にプラスになり、人生で一番大切なものを築くのに役立つのなら……」

私は呆然と、彼女の珍しい能弁ぶりに氣を取られていた。

「貴方のは、只の獣欲の変形というだけよ。いくらマゾ女だって、ただのなぐさめにもてあそばれるのは、もう嫌！」

千恵子は縛られて海上にさらされているのを忘れていたかのように顔を紅潮させて抗議しているのだ。私には思いもかけぬ言葉ばか



りだった。

「私、結婚するわ。あの方、縛ってくれるかどうか。……でもきつと縛ってくれるように仕向けるワ。……貴方とは、いいえ貴方のサドを舐ったエゴとはもうお別れするのよ。貴方を裏切ったのじゃないわよ。貴方が私の期待を裏切ったという方が本当よ。……口惜しい？ 口惜しかったらいいわ、私を深いところへ沈めなさい。私はこうして縛られているんだし……。殺すほどあっさりした復讐はないでしょうから……」

私は何回も何回も鉄棒で、殴りつけられている想いがした。彼女を抱えている腕がしび

れ切って、徐々にその体重が支え切れなくなってきた。

『サドじゃないエゴよ！無教養の人間と同じ只の獣欲よ！』彼女の吐いた痛烈な言葉がガンガンと頭の中を跳ね廻った。

ザボリ！と音を立てて千恵子の体が、私の手を滑って海中に落ちた。私の脚に幾度かもうぐめく影が足許に透けて見えた。私は放心したようにそれを見据えていた。

ややあってその人魚は両手首を背に縛られたまま、水中に立ち上った。大きく息を吸い込んで、海水をペツと吐き出した。そしてま

っすぐ、私を睨みつけるように視線を投げつけて来た。

「いくら縛ってあっても、ここじゃ浅すぎだよ」

私は、カッとなって両頬に平手打ちを加え足払いをかけた。千恵子は再び水中に没した。その上に大きく波がウネって来た。

ややあって、倒れこんだ辺りから沖寄りのところに、彼女の白い姿が立ち上ったのを認めると、私は無言のまま、岸に向かって歩き出した。

着衣をつけて振り向くと千恵子が波打際で佇んでいる。私は近付いた。彼女はじっとしていたが、肩を私に掴まれてぎくっとなった。私は彼女を後向きにさせ手首の縄を乱暴に解いてやった。そしてその背中に一発平手打ちを与え、突き放した。

彼女は三度び水中に倒れこんだ。私はそのまま帰途についた。何か呼びかける声が聞えたが振り返らなかった。

『エゴイスト！ 獣欲！』

尚も頭の中を先程の罵倒が、渦を巻いて響いていた。私の足は踵でもついたように重かった。

(カット・山田毅画)

## ◎躍進記念◎ 百萬元懸賞 △原稿募集▽

### ▽賞 金△

入選作品 一席 1篇 五万円 10篇	入選作品 二席 1篇 三万円 10篇	入選作品 三席 1篇 一万円 10篇	入選作品 四席 1篇 五千元 20篇
--------------------	--------------------	--------------------	--------------------

### ▽内容△

一、特異な風俗文獻誌を標榜する本誌の内容にふさわしい力作を、読む雑誌としての新しい脱皮を企図する本誌の内容充実のため、広く読者の間から懸賞募集いたします。

一、S並にMは勿論のこと、各種各様のフェッシー一般、女性切腹、男性切腹、男女性

### ▽規定△

一、応募作品は、すべて未発表の自作の作品に限り、作品の中に引用部分があれば、その出処(作者、書名など)を明記願います。

一、枚数は四百字詰原稿用紙換算にて三十枚以上二百枚まで。必ず二百字詰又は四百字詰の原稿用紙をご使用願います。



# 浣腸通信

## マニア雑誌

小林 薫

せるだけで、肛門筋は収縮する為、液も少量ずつしか排泄出来ず、薬効のつづく限り長時間苦しみ続けると言ったマニア垂涎の薬品だが、MRさんはそれに似た経験をしたと言う。日記体のレポートだが、多少文体を変えて、書き抜いてみる。

ひとまとめに浣腸マニアと言っても、その内容にはかなり個人差がある様だ。SやMの手段としての浣腸、羞恥のムードを楽しむ型、また浣腸器や、写真、文献等を集めるフエチ型、純粹に刺戟を楽しむ感覚型と様々だが、私の知る限りでは、感覚型は男性に多くムード型は女性に多い。私自身感覚派に属する為この種の女性の手記が一番たのしいのだが、最近本誌に登場した人では吉村英子さんが印象的だった。彼女との文通は楽しかったが、何故か、ふつりと途絶えてしまったので、彼女の了解を得て、往復書簡として発表するつもりでいた、貴重な体験記も、紹介出来ず空しく筐底で睡っている。(もし吉村さんが、これをごらんになったら、お手紙下さい。新しくごらんに入りたいものもありますので)

もう一人のマニアは、本誌の発行もとの大

阪に居住するRMさんで、広島在住の男性マニアから紹介されたのだがまだ学生らしく純然たる感覚派で先天的とも言える浣腸マニアである。次々と変った刺戟を好み、書き送ったことを片端から実験し詳細なレポートをよこす。私が十年來味わったこともたちまち種切れになる始末である。吉村さんと違って便秘はしないらしいが、グリセリンではものたりなくなり、ドナン以外使用したことがないと言う。あの強い薬を使ってケロリとしているのだから、女性の直腸感覚は、男性に比して鈍いと言う説は本当かも知れない。それはとも角、このRMさんが、変った体験記を送って呉れたので紹介したい。

話は旧聞に属するがFK誌が一と頃浣腸づいたことがある。そのとき、空想上の所産と思われる、ドイツ製のBCと称する、浣腸ブレイ専門薬が登場した。これは直腸を蠕動さ

七月十四日、昨日、運動して汗を出しすぎたせいか、珍しく通じが止まる。我慢したまま登校する。臀部は凄く敏感となり、電車内でいたずらされ思わず悲鳴を上げる。ふつうの日なら別に気にしないところだが……。数人にふり向かれてこちらも当惑。午後直腸部の不快感消える。放課後、早々に帰宅、放っておけば、明日は快通すると思う。浣腸するのなら今のうち……。でも考えなおして止痢剤を呑む。すぐに一粒、就寝前に三粒。薬効ですぐ眠りにおちる。

七月十五日、止痢剤の効果テキ面。二日間便秘でしきりに直腸が気になる感じ。体育のとき挑躍運動をしたので、便意起こる。登校中はK子がおトイレについて来るので用便出来ない。小用をして我慢するうち便意しずまる。五時帰宅。今日は土曜日でママは外泊。こんな状態のとき一人留守居ではとても



浣腸なしではいられない。今日は変ったアイデアがうかんだ。それは止痢剤を浣腸代りに使用したらどうかと言うこと。考えただけでもう有頂天。早速、服用量の倍の薬を粉末にして30ccの熱湯に溶解し、さましてからガラス製の浣腸器で注入する。少し便意昂進。横臥して我慢する。便意段々遠のいて十分後に完全消失。とても変な感じ。直腸の異物感はなくなくなったが、排便後の様なさわやかさはなく、妙に意識される。十一時までかかってKさんにご返事を書く。就寝後も全く便意なし。希求心しきりに起こる。ついに誘惑に負けてドナン標準量、30cc注入。激しい嵐に五分間耐えてトイレ。このとき変った結果となる。激しい嵐が直腸にうずまいてるのに、どうしたわけか排便出来ない。薬液もいつもの様に勢いよく出てこない。しぼり出す様に少量ずつ滴る感じ。しぼり腹の苦しさがごく下腹部でおこった様だったが、液が少しずつ出るにつれて段々おさまって来る。とうとう排便、出来ない。不審に思っグリセリンを50cc注入する。結果は同じだった。直腸全体がマヒした感じ。そこで先ほどの下痢止め浣腸の効果と気付く。浴室に行って大量の水を注入。30分ほどの努力で止痢剤の臭いのする

便が快通。

右が彼女の体験の要旨である。止痢剤の使用は私が教えたものだが、下痢止め浣腸とは気がつかなかった。まだ私は実験していないが、マニア諸兄姉はいかが。

話はいろいろだが、五月頃のこと、悪友に誘われて、池袋西口の「N」と言うバーに入ったところ、何とホステス全員看護婦スタイルという変った店だった。その姿をみているだけで、マニアなら一寸妙な気分になるところに、加えて聴診器などの小道具まで用意されてあり、自由に彼女達とお医者様ごっこが楽しめると言う次第。私もガラにもなく、ウルトラエッチとなって、ニキビ満面の二十才前後のホステスを相手に飲みはじめた。それほど興味もないバストあたりに聴診器をあてながら、「処方箋」と伊藤博文を手渡す。「婦人科らしいね。別に処方箋書こうか」と水を向けると、早速奥のボックスに案内して呉れた。暗い照明と背の高いボックスの中はほとんど密室だが歩き乍らチラと他のボックスをのぞくと、それぞれ診察に余念がない様だった。「ヴァージンの診察は、こっちからやるんだ」と説明し乍ら、お目あてのバック

を内診してしまった。目算違わず、彼女の直腸は例のもので一ぱいだった。ふつうではとても出来ないことだが、アルコールの力も手伝ってか、或は変ったムードの為か、ごく自然のうちにやってのけた。それから改まった調子で、「君、変な話だけど、そのニキビなかなか治らないんだろ」「君、さっきわかったけど便秘してるんじゃないか」と当ってみると、長い間悩んでいたらしく、彼女の方が積極的に打ち明けてきた。お蔭で充分に楽しみながら種々と質問してみた。メモ用紙に消化器の略図まで書いてとうとう話を浣腸にまでもち込むことが出来た。もう一おしで実験も出来そうな感じだったが、同行の悪友に急用が出来て、我々のボックスまでむかえに来た為惜しくも席を立てってしまった。その後機会がなくて訪れないが、もし彼女が私の言を信じて浣腸治療をつづけていればもう今頃は立派なマニアとなっている筈なのだが……。

近日中に訪れるつもりでいるが、話が進展したらまた書くことにして一先ず終ります。

## 追 記

RMさんの使用した薬はアドスミンA。池袋のバーはナイチンガール。ホステスの使っていた薬は毒掃丸です。





懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

## 『あすなろう』の道

中 河 恵 子

ハンドルを握るノースリーブの両手には、くつきりと縄のあとがついています。両手首と二の腕に、縄目のあとまでが、ありあり残っているのが、いやでも目に入ってきます。バスの釣革でも握っているのだったら、目立って仕方がないでしょうに、と思いながらさっきの甘い縛りプレイのことを胸の中で反芻していました。

「貴女の身体を計らして下さい」

彼は自分が持ってきたメイジャーで私の身体を計りだしました。

身長——一五七センチ

バスト——八五センチ

ウエスト——六〇センチ

ヒップ——九一センチ

備えつけのヘルスメーターの上に乗ったところ体重は五二・五キロ。昨年の夏には五〇キロだったのに、あれから二・五キロも肥ったのには驚きました。そういえばヒップあたりには、大分肉がついてきました。

それからの彼は、私の身体をすっかり記録しておくのだといって、太腿の太さ、足首の太さ、足の指の長さだ、といって計りだしましたので、私は擦ったがって、とうとう彼の

手にあるテープをとりあげてしまいました。

彼、小谷俊夫——と知り合ったのは、四月の上旬、私が北陸の旅から帰ってきてからです。まだいくらも日が経っていません。

「この人なら、貴女にお似合いでしょう」

といって紹介された彼は、遠慮しているのか、余裕があるのか、馴れているのか、とにかく、物欲し気のないヌーボーとしたところのある男性でした。

最初お逢いしたときは、洛北にあるNという有名な料亭でした。以前に私はその料亭の前にある光悦寺というお寺へ来たことがある



ので、彼の車に乗せられて走っていても、今どこを走っているのか位はわかりました。もっとも一枚のドライブマップも持たないで九州あたりまで走りまわった私ですから、獵犬のような、方向を探知する嗅覚を持っているのかもしれない。

山が目の前に迫ってくるような感じをとり入れた庭を眺めながら、料理をつつき、雑談を交しました。彼は殊更プレイに関係のない話題をもちだしました。雑誌に載った私の手記を予備知識としていたので、初対面にも拘らず、なごやかに話しあうことができたのですが、彼は私の一身上のことやプレイのことについては、とりたてて聞きだそうとはしないのでした。

その次に逢ったとき、彼は僕のコレクションを見せてあげると言うので、車をつらねて神戸へ走り、K亭という見晴しのよい料亭の一室に到着いたのです。彼は外国旅行にでも使う大きな革製のトランクを部屋に持ち込んできました。一わたり料理が運び込まれると、二人連れのこととて女中達も気をきかして皆引き揚げてしまいました。

彼はトランクの錠前を開けると、パチンと蓋を開きました。ハترون紙に入れられた写

真や絵、切り抜きなどがぎっちり詰め込まれています。雑誌や単行本は今度見せてあげるから、今日は絵と写真を見て下さい。と彼は私の目の前にハترون紙の袋をひろげました。私はわななく指先で、その一つ一つを眺めてゆきました。私にとっては山海の珍味を目の前に並べられたような気持でした。

彼が注文を出して或る画家に特に描かしたという絵は、八枚一組の絵物語形式になっていて、私の胸を打ちふるわせるに十分な出来



栄えでした。控え目に、それでいて好奇心に全身をわななかせながら、丹念に一つ一つ眺めている私を、興味ある眼で見つめている彼は、自分でコップにビールを注ぎながら、やたらに口へ運んでいるのです。

夜、自分の部屋で一人で、こっそり、そしてゆっくり繰り返えし眺めてみたい。そういう気持がするのですが、でも、彼の見つめている前でも、一つ一つ、写真や絵をめぐってゆく、その魅力に抗しきれない私でした。

写真の中にも気にいったのが沢山ありました。胸がますます熱くなり、全身のおののきが彼に知れはしないかと、心配するほどでした。私がちょっと長く眺めていると、彼もコップを置いて私の手元をのぞき込み、それは僕が撮ったのだよ、と、そのときの説明を手短かにするので、私はその間じゅう、その写真を縦から横から、すかし見するのです。

それから、三回目に逢ったときは、記録的な長雨があがって、夏のきざしのような青空が、少し暑さをもたらした頃でした。始めて逢ったときから数えて三月以上も経っているのに、ずっと以前からの知合いのような気易い気持になっていました。

貴女のようなお嬢さんを一度縛ってみたい



と思っていました。今迄何人もの女性を縛って写真を撮りましたが、全部水商売の人ばかりで、いわば金で釣って納得させたというわけです。貴女のように自分から縛られてみたいという方を思いのままに縛り上げることが出来たら最高に幸せです。

この前にK亭の駐車場で別れ際に、そんなことを言っていました。そして、貴女の車のガソリン代と名神の通行料金です、といって何にがしかの紙幣を手渡そうとします。私は月に多いときはガソリン代を二万円ぐらいも使います。でも、父の取引先のスタンドで入れますから、自分の懐はいたまないのです。

そう言うってお断りしますと、彼は気さくに手を引っ込めて、やはりお嬢さんだなあ、と呟き、紙幣をポケットに納めました。その動作に嫌味がなく好感が持てました。

第三回目に逢った日、彼がカメラや縄や小道具を持参してきたとしても、私は決して彼の申出を断るようなことはしなかったでしょう。いや、彼が有無を言わず私を押し倒して後手に縛り上げるということを大いに期待していたといっても過言ではないでしょう。

でも、自分の口から、それを言い出すほど私は厚顔ではありませんでした。いつとはな

しに彼がそういうムードに誘導してくれて、  
△縛って！縛って！△と私に思わず叫ばずにはおれないように仕向けてくれたら、私は恥も外聞もかなぐりすてて、被虐の幕の上にのたうったかもしれない。しかし、現実はどううまくは運びませんでした。彼は再び私をお座敷天ぶらを食べさせるという料理屋へ案内しました。揚げたての天ぶらは本当に美味で、思わず知らずお腹いっぱい食べてしまいました。

ゆっくり落着けるところだったら、私、貴方に縛られた方がいいのよ。

勇気を出して言った私の言葉に、元氣を得た彼は、私の車をモータープールに入れて、自分の車の助手席に私を乗せました。

この前は、ついビールを飲みすぎてしまって、車をK亭に置いたままタクシーで帰ってしまいましたよ。と無邪気に話すのでした。平常は酒類は余り飲まないといっていた彼が何故あの日に限って、あのようにぐいぐいビールをおおるように飲んだのでしょうか。

今日は一滴のビールも飲んでいませんので彼も大威張りでハンドルを握れるというものです。ここは社用の接待に使っているホテルなのでツケがきくのです、といって案内され



た観光旅館は、入口はこじんまりとしているのですが、中へ入ってみると内仙裁も広々としていて庭の真中の瓢箪型の池には噴水まであって、市内とも思えぬ静寂さです。

女将や女中も懇意らしく、至って家庭的な雰囲気、如何にも安心できるといったなごやかな空気が漂っています。車を洗っておきましようと外まわりの男衆がキーをとりに来るのも、なんとなくのんびりムードです。

離れの一室。そこは渡廊下に通ずる扉に施錠してしまうと、この一廓だけが独立した密



室となってしまうのです。廊下には紺のカーペット、窓はアルミの枠と洋式建築ですが、部屋の中は純日本風の数寄屋造りで、障子をしめてしまうと、落着いたお座敷の感じがきわめて濃厚です。

廊下の突き当りは、向いあってトイレと浴室があります。この二つは全くの洋式で、い

かにも和洋折衷の尖端をゆくといった新しい建物でした。彼がカメラの準備をする間に、私は浴室へ行くことにしました。裸にされて両手を後に縛られる、そう思っただけで、私は全身の肌が紅らむ思いでした。新しい男性に自分の肌を晒して縛られる。それは未知なものへの好奇心を含めて新鮮な魅力でした。

女を縛ることを好む男性に縛られる——それも一つの魅力でした。彼はきつと最大の感激を以て、縄にくびれた私の肌を眺めることでしょう。彼の感激が大きければ大きい程、私の喜びも又大きいのです。

お風呂へ入っている間、私は



もややとした何にというさだかなことのない期待で胸がふくらんでいました。彼はどのような縛り方をするだろうか。きつと縄を持つ手は、わなわなとふるえていることでしょう。

シュミーズの上に浴衣を羽織って部屋へ戻りました。フラッシュガンをつけたカメラをテーブルの上に置き、三本の細紐を膝の上に並べ床柱を背にした彼は、やたら煙草ばかりをふかしていました。三面鏡の前に座って、お化粧をはじめた私に、言葉一つかけられるもなく、むつかしい顔をしていました。

私の背後から飛びかかり、浴衣をひんめくり、シュミーズを剥ぎとり、いよいよ激しいプレイが展開される。そういう淡い期待を私は心の中で抱いていました。いや、いやという私の軽い拒否を意に介せず、忽ちのうちに両腕は背後に捻じ曲げられます。私は争うふりをしながら、彼が

縛りよいように、両手首を揃えて、身悶えします。両手首が括られてしまうと、ばたばたする両脚からパンティがむしり取られてしまいます。

この最後の下着がむしり取られるとき、私と彼の最高の演技が発揮されるのです。彼は思いきり私を罵倒して恥ずかしめ、私は思いきり恥ずかしがりながら、しかも彼の喜ぶ姿態を無理強いされているふりをし、そう思い込みつつ演じてゆきたいのです。この出発点で、私達のプレイは火花を散して、陰電気に陽電気が激しく放電しあうのです。

私は時間をかけて、ゆっくり化粧をしつつ彼が飛びかかってくるスキを見せて、それでいて、そのときは、こんな悲鳴を出してやろう、このように肢体をあられもなくさらけ出してしまおうと考えていました。しかし、何時まで待っても、彼が私を襲ってくる気配はありません。徒らに彼の膝の前の灰皿に、煙草の吸いさしが高くなるばかりです。

もうお化粧できましたワ。

私は彼の方へ向き直りました。普通の話題のときは、あれほど饒舌だった彼ですのに、急に無口になって、何にかしら心の中のものを押さえているような具合です。



貴方の目の前に、縛られたいという女、ほれ、こうして待っているのですよ。

そう呼びかけたい私でした。

私の誘いに、彼はやっと重い腰を上げました。紐を手にして立ちあがったのです。しかし、彼が私を縛ったのは浴衣の上からなのです。私が浴衣はとった方が——と言ってからはシュミーズ姿になって縛られました。三本の紐といっても、その一本一本が余り長くないので、胸に四巻きと両手首を括り合わすともう余りはありませんでした。しかし、その紐は真田紐のような組紐で案外よく締まり、凄く緊縛感がありました。



縛り方は単純でしたが、坐ったり立ったり寝ころがったりで、いろいろなポーズを写真に収められました。横向きに寝たときは二の腕が仰向きになったときは両手首が、ぎゅうと締まつて、思わず痛い！と声を出しましたが、カメラに夢中になっている彼は気がつかないようでした。

約一時間ぐらいたったでしょうか、彼の準備してきたフラッシュの球がなくなったのでこの撮影も終り、紐が解かれました。その間彼は、横を向いて、坐って、などと言葉少なに命令するだけで、私の空想していたプレイ用語を発するということは一切ありませんでした。私にとっては、なんだか不満足な状態でプレイは終了しました。

でも、じりじりとよく締まる組紐で小一時間に亘って縛り上げられていたので、指先が痺れてしまつて、まるで自分の手ではないような状態でした。それが、暫く時間が経つてくると、痺れが戻って指先がチリチリと痛く完全に戻ってしまうまで、気持ちの悪い思いをしました。二

の腕と手首には、大きく窪んだ紐あとが赤く鮮やかに残っています。

「貴女の身体を計らせて下さい」

思いつめたように彼が私に向かって言ったのは、このときです。私の身体を計るのだったら、縛ったままのときの方が余程面白かったのに——。そんなことを思っている私でした。でも、彼は私をテーブルの上へ立たすと、シュミーズの裾をまくりあげて太股のつけ根にテープをまわしたのです。

お嬢さんのシュミーズをまくるなんて、普通だったら、とても出来ませんね。

今まで無口だった彼が、紐を解かれた私にそう話しかけました。プレイめいた雰囲気がこの計測のときに生まれたのは不思議といえば不思議でした。私は擦ったいワ、と甘い拒否の言葉を洩らして身をくねらし、彼は私の肌に熱い吐息をはきかけながら執拗に私の身体各部を計ろうとするのです。計りながら私の身体に鋭い視線を注ぐ彼の眼。そうなのです。このざらざらと油ぎった彼の視線こそ私の全身を熱くさせる原動力なのです。

私は男性が最高の感激をこめた視線を私の肌に注いでいるということに、大きな感動があるのです。擦ったいような、思わず身のす



くむような、甘酸っぱいような思いが、こみあげてきます。カメラをすててからの彼は、まるでそのことに憑かれたように、私の肌をテープで計測するのです。

それでも紳士的な彼は、最後まで私のシミーズをとろうとはしませんでした。私にとって、それは不満といえは不満でしたが、それでも、もう全身がくたくたになるくらい、彼の視線にもみくちやにされていました。

もうこれ以上、私の身体で計るところがないとわかって、やって解放されました。

ワンピースをつけましたが、ノースリーブなので、二の腕と手首の紐あとは、いやでも目につきます。快い疲労がまだ身体の奥底に残っているようで、手の指先や足の指先に、けだるさが漂っていて、思わずよろよろとよろめきました。

ホテルを出る時、女将が送ってくれたのがなんだか恥ずかしいような気持ちでした。それでも裏口に男衆がエンジンを掛けたままの彼の車を置いて呉れていたので、女将に顔を合わせただけで他の人には見られることはありませんでした。彼の車でモータープールまで送ってもらい、そこから私は自分で車を運転して名神へ入りました。車は一つの密室で

す。私の手首と二の腕に、どのような紐あとがあるうとも、他人に知られるということはありません。車をガレージへ納めると、もう誰にも知られず自室へ入れるのです。一晩ぐっすり寝ると、若い私のことですから、紐あとも縄あとも、すっかり消えてしまうのです。お風呂へ入ると、もっと早いのですが、今度お逢い出来るときは、写真を引伸して持ってきました。彼はそう言ってくれました。自分の写真がどのように撮れているか、見てみたい気持ち。それにも増して漸進主義の彼が、次はどのような縛り方、責め方を見せるのか。その期待が、彼と四度目の邂逅を遂げてみたいと思うのです。

次は少くとも、パンティ一枚になって彼の縄を受けてみたい。そう思います。若し彼が私のこの手記を読んだら、どのような態度に出してくるでしょうか。そのことについても、私は興味を持っております。この一文によって、もし彼がハッスルするとすれば、私も幸せに思うのですが。

彼もお仕事の方が忙しいし、私も七月末から一週間ぐらいの予定で山陰の浜坂、岩美方面へ、キャンプ旅行をするつもりですので、いずれにしても八月の中頃すぎにならないと

その機会もないかもしれません。それに、またいつ何時私の放浪癖の虫が頭をもたげてくるかもしれませんから、はっきりしたことは申し上げられません。四度目の彼との逢瀬が果されましたら、また拙い文章を綴ってみようと思っています。いつものことですが、書いてしまってから、自分の思っていることの、何分の一も書いていないことに気づき、いらだたしいような気持ちにかられます。

適齢期の私は、いつまでも未婚のままにいるわけにはまいりませんので、いずれ来春あたりは結婚することになると思います。それまでに、うんと厳しく私を縛りあげて下さる方って、おられないでしょうか。名古屋から神戸ぐらいの間でしたら、いつでも飛んでゆけます。私の被虐の虫をかりたてて下さる方。周期的に襲ってくる私のタイミングを狙ってプレイをお申込み下さる方。そんな素晴らしい方が現れたら、私はキャンプも、スキーも、ドライブも、やめにして、きつと縛りプレイに熱中することでしょう。恵子が思ったとき、いつお電話しても、すぐお約束の場所へ来て下さる方があったら、どんな凄惨な責め方にでも、最高の感激をもって、身を委ねることが出来るのですけれど。



## 夫 婦 遊 戯

## 女囚とお役人さま

— ある日の拷問プレイから —

早 木 夢 二



1

七月一日は私の誕生日である。

その日の夕方六時ごろ、慶子は薄暗い電灯のついた部屋の、真中に敷かれた蓆の上に坐っていた。私はその前においた鏡台用のスツールに腰かけて、彼女を見下している。

彼女がこのスツールに腰を下して、自分の緊縛姿を、鏡の中にあれこれと写され、乳房を責められた揚句、さて次の拷問のため引き立てられると、その厚い表面に、眼にも鮮かな輪郭が残っていたことがあった。

今、彼女が胸部に菱縄を打たれているのは、いつもの通りだが、腹にもへそを中心にくっきりと菱形が作られ、その縄は両脚をくぐり後ろへ廻っていて、背面にも上と下に菱形が二つ作ってあった。

菱縄マニアの私の誕生日にふさわしく、彼女の心からの贈り物である。

「どうだい、縄の具合は？」

これはもう私たちの、縄をかけて拷問遊びを始める時の、決り文句のようなものである。

「ハイ。お蔭さまで、とてもいいお縄でございますわ」



彼女が顔をあげて答えた。

「きょうは前と後に四つの菱縄で、随分手のこんだ縛りだけど、嬉しいだろう？」

「ハイ。嬉しいですわ。こんないいお縄を受けるなんて、思ってもいませんでしたもの」  
「そうだろうね。僕だって、そんな縄、まだ受けたことないもん」

「すみません。私の方が先に、こんなお縄うけて……。でも、この次はきつと、あなたにもこのお縄かけて差し上げますわ」

「頼むよ。それにしても、いい縄だね」

私は又、しみじみと眺めた。

責めを受ける時の恒例で、風呂に入って磨き上げた彼女の白い肌には、まだ匂うような湯の香りが立ち込め、ふくよかな肌にびっちりと喰い込んでいる菱縄の美しさは、いつものことながら、私の胸をきゅっと締めつけ、やるせない思いだった。

「お調べ下さいます？」

そういった彼女の声には、多少の気恥ずかしさの中に、美しい緊縛姿を誇示したい気持がありありと窺えた。

「勿論」

「じゃ、お声下さいな」

「女囚、立ちませい！」

ちよつと厳めしい声でいうと、

「ハイ」

彼女は不自由な体を起して立ち上った。そして、

「お改め願います」

と、軽く頭を下げた。

私は彼女の頭の方から段々と、眼を縄に沿って落していった。

菱形の縄目に責められて、ぽっこりと突き出した双の乳房が、切なく喘いでいる。針で突つくとピツと裂けて仕舞いそうに張り切っている腹に、びったりと菱縄がはりついて、深く刻み込まれたへそが押し出されているように見える。

「後ろを向け！」

と命じると、彼女はそのままの恰好で後向きになった。

きつちりと恬り合わされた両手首が、時々びくびく動いて、それにつれて、つながっている縄がぴんと張って肌を苛なむのが、いかにも艶めかしい。

「見事！」

私は思わず唸るようにいうと、彼女の肩に手をかけて前に向けた。

「慶子、見事だよ」

私は重ねて褒めた。

慶子も、

「嬉しいですわ、褒めていただいて……」  
という、そつと体を寄せてきた。

「そろそろ、始めるか」

「ハイ、お願いします」

## 2

私は、彼女を席の上に坐らせた。そして私もスツールに腰を下して、

「女囚、面をあげい！」

「ハイ」

顔をあげて私を見る。

「その方の姓名は？」

「早木慶子、と申します」

「年令は？」

「満三十八才、昭和四年六月十一日生れでございます」

「住所は？」

「東京都中野区本町通り三丁目……番地でございます」

「家族は？」

「夫夢二、四十八才。子供はございません」

「係累は？」

「母は昭和二十六年、父は昭和三十一年、夫

「母は昭和二十六年、父は昭和三十一年、夫



々亡くなりましてございます。弟は北海道で働いており、妹は既に結婚致しております」

「その方の経歴を申し上げます！」

「ハイ。昭和二十一年、旧制女学校卒業後、新宿、渋谷のキャバレーに勤め、その内、現在の夫夢二と知り合い、昭和二十六年秋、結婚致しました」

「結婚前の異性関係は？」

「ハ……ハイ！」

彼女は、ちょっとためらった。

「どうした？包み隠さず申し上げるんだぞ」

彼女の顔が少し赤くなっている。恥ずかしそうに緊縛の身をすぼめる。

「恥ずかしいのか？」

「ハ……ハイ。いえ、いえ、申し上げます」

彼女は、きつと顔をあげて、

「十八才、女学校卒業の時、近所の学生と初めて経験致しましてございます」

「愛し合っていたのか？」

「ハイ、当時はそのように思っておりますが、今考えますと、好奇心が半分であったように存じます」

「何回関係したか？」

「ハイ。二回きりでございます」

「その他には？」

「……」

彼女は、又ためらった。

私は立ち上って、彼女の傍によると、席の上にたれている縄尻を掴んだ。

「慶子！」

「ハ……ハイ！」

私は縄尻をぐっと上に引き上げた。全身の縄がきゅっと柔い体に喰い込む。

「どうした？白状出来ないのか？」

私は又、強く縄尻を絞った。

「ああっ」

彼女が呻く。顔をあおのけ、唇は申し分け開いている。可愛い舌が赤くちよろちよろと、白い歯の間から覗く。

「申し上げます！申し上げます！」

私は、責め言葉をかける。

そして、縄尻を絞りながら、片足で彼女の揃えているふっくらした膝を、ぐっと踏みつけた。

「これでも申し上げますか？」

彼女は眼を吊り上げ、縄を絞られる度に、尻を浮かそうとしては、足で踏みつけられて、又ぺったりと腰を落した。

「ああっ……ううん……」

「どうだ。申し上げますか？」

「い、いえ、私、その他には……」

喘ぎ喘ぎ、やっとさういう。

「ない、というのか？しぶとい奴だ！」

私は、いきなり掴んでいた縄尻を、パッと彼女の体に叩きつけ、膝を押さえていた足はずした。

「あっ」

はずみを喰らって、彼女の体はどっと横ざまに倒れた。

乳房がはげしく鼓動する。荒々しい息づかいが、静かな部屋の空気をかき乱す。

「立て！立つんだ！」

私は、倒れている彼女の髪をぐっと掴んで引き起した。その拍子に、いかにも女囚のように髪を束ねていた紐がほどけて、黒い髪がばらばらに乱れた。

やっと彼女は元のように正坐した。深々とうなだれて、大きく起伏する胸の隆起に、じっと眼を落している。腹がせわしく脈打って、はりついた縄が盛り上る。

「申し上げます！」

「——ハイ」

慶子は大きく上半身を反らせた。

「ああ、お役人さま」

「何だ？」



「申し上げます、申し上げます」  
彼女が、上ずった声でいった。

「申し上げるか？」

「ハイ、お役人さま。申し上げます」

彼女は潤んだような眼をあげて、

「お手数かけて申し訳けございません。委細申し上げます」

「よし。申し上げろ！」

「ハイ。現在の夫夢二と結婚致すまでに、私は二人の男と関係を持ちました。どちらも短い間でございましたが」

「それに相違ないか？」

「ハイ。毛頭、相違ございません」

慶子のいう二人の男を、私は知っていた。

彼女だって、相当の期間、水商売の店に勤めていたのだから、男との関係があったとしても、<sup>あなたが</sup>強ち不思議とはいえない。

私は百も承知で、彼女と一緒にいるのだ。唯、それを利用して、拷問プレイの時に、ねちねちと彼女を責め上げ、屈伏まで導く口実としているにすぎない。

彼女もそんなことはとくに知っている。

但し、どうかすると、それが小さな刺<sup>とげ</sup>となつて、彼女の胸をちくりと刺すことがあるかどうかは、私は知らない。

## 3

私は、彼女から離れた。

彼女は、まだうなだれている。

「慶子！」

「ハイ」

「只今より、その方を海老責めにかける。ありがたくお受けしろ！」

「ハイ。海老責めのお拷問、ありがたくお受け致します」

私は彼女にあぐらをかかせた。尻がべったり席の上につく。痛がゆいのか、軽く呻いて腰をずらした。

私は両足首を括り合わすと、その縄を彼女の腋の下から背中の方へ通し、首の後ろで交差させて前に廻すと、足首を縛った縄にからませてぐいと絞った。

「ううん！」

彼女の体は見る見る内に二つに折り曲げられていった。

すっかり折れ曲った所で、私は縄止めをすると、もう真赤に充血して、汗が滲み出している彼女の体、というより今は一つの奇怪な塊りといえるものを見下した。後ろから見ると尻がちょっと浮いて、股間縄がぴんと張っ

ている。乱れた髪が垂れて、彼女の顔をすっぽり隠している。

いつだったか、私は彼女に責められて、こんな恰好で呻き続けたことがあった。

「苦しいか？」

私はきいた。

「ハ……ハイ。苦しいです！」

彼女のくぐもった声が、二つに折れ曲った体の間から聞えた。

彼女にしても、自分のそうした苦しい縛られ方に呻吟することに、一種の好奇心を持っている。私たちが海老責めを好んでするのは、そんな理由からでもあった。

折れ曲った彼女の顔を覗くと、大きく開けてハッハッとはげしく息する口から、舌がだらんと垂れていた。それは彼女が、その舌を何かに向って、必死に差し伸べようとしているようにも思えた。涎れが太股にだらだらと落ちていく。

鼻水が唇の上まで垂れている。

「ああっ」

彼女が自ら、一そう体を押し曲げた時、左右に張り切った尻がぐっと持ち上り、かすかな音がした。

恐らく彼女は気づかないのであろう。尚も



体を折り曲げて、この拷問に必死に挑んでいくようだ。

……その努力が尽きたかと思える時、彼女は

「あっ！」

と叫んだ。そして両尻を擦り合わせるように体をよじった。

「とうとう参ったな」

私がいうと、

「ああ、どうでしょう、こんな」

彼女は呻くようにそういつて、

「お役人さま。申し訳ございません、粗相致しまして……」

「慶子、心配しなくていいよ。この拷問にはあり勝ちのことだ」

私は、いたわるようにいった。

「ありがとうございます、ありがとうございます」

彼女の声は涙ぐんでいた。

海老縛りの縄をとくと、彼女は席の上に、ぐったりと倒れて、はげしく喘いだ。

私たちの拷問プレイでは、最近はず必ず排泄責めを行なうことにしている。だから、当日になると、私も彼女も、朝から排泄を控えるのが、この頃の習慣になっている。

きょう、私はわざと、排泄責めを行なわな

かったので、彼女が音を挙げたのは当然のことといえる。然し、それは私の意地悪いいたぶりでもあった。

海老責めの経験がないではない彼女にしては、つかうかうかと私の手に乗ったようなものだった。

#### 4

彼女が尿意を訴えたので、私は縄尻をとって便所に連れていった。

水洗の便器に尻を下すと、白い陶器の冷たさに、彼女はちよっと身ぶるいした。冬場は彼女が工夫して、布切れなどをあてがって、直接冷たさが応えないようにしてあるのだが、七月ともなると、それもとって仕舞ってある。

流石に彼女は恥ずかしそうだった。排泄責めで私の前に据えられた金属製の便器を使用するのは、今はもう拷問の一つとっているので、それなりに割り切れるのだったが、そうして本来の便所を使用するのは、何か彼女に羞恥心を取り戻す役目をしているかのようだった。

便所を出ると、彼女が、  
「お願いがございますが……」

という。

「申してみよ……」

「ハイ。鏡の前にお引き立て下さいませ」  
いつもは、責めに入る前、湯上りのほのぼのとした裸身に菱縄縛りをかけられて、鏡の前で、あれこれと写されるのが習慣であった。殊にきょうは、体の前後に、白の菱縄というような、近頃彼女が一度してみたいといっていた亀甲縛りに近い縄かけをされているので、殊更鏡の中で、自分の美しい緊縛姿を確かめてみたいのであろう。

私には、至極尤もなことと思えた。

隣の部屋に引き立て、大きな姿見のカバーをとって、彼女を正面に立たせた。三面鏡なので、色々な角度から見る事が出来る。

「まあ、いいお縄！」

彼女は、しげしげと鏡の中に見入りながら感に堪えぬように叫んだ。

さき程からの拷問で、体が汗ばみ、縄もちよっと、しっとりしているようなのが、何かひどく色っぽかった。

私も鏡の中の彼女を見詰めていた。彼女が乱れた髪をばらりとふり上げ、体をあちこちとくねらせて、上気したような眼で、鏡の中の自分の姿に見入っているのは、私にとって



美しく楽しい情景だった。

それにしても、彼女もよくぞここ迄成長したものだ、私は感慨無量だった。

初めて彼女を縛り、彼女に喜悅の兆しを見つけて、歡喜の念に捉えられてからの年月が、走馬灯のように私の脳裏をかすめた。

この女と結婚してよかった。他の女と結婚していたら、私のこの人知れぬ悦びは、はけ口を求められぬままに内攻して、私の半生を暗い陰鬱なものにしたであろうと思うと、私は、大げさにいえば、彼女を私に与え給うた神に感謝したい気持だった。

私は私につれなかった女を思い出すことが出来る。

旅館の一室で、自ら裸になって誘いをかけて来たにもかかわらず、寝巻の細紐で形だけのような縛り方にも、さも汚らわしうに、肉付きのよい体をぶるぶると揺って、緊く縛ってなかった紐を振り落し、私を見下げたように眺めた女。

その紐が、彼女の前にとぐろを巻いているのを見た時、私は私の青春が葬り去られるような寂しい思いだった。

「あんた、変態？」

女のいまいましてうな口吻を、その後永く

私は忘れることが出来なかった。

「どうなさいましたの？」

慶子が滅入り込んだ私に、不思議そうにいった。私は、急に眼がさめた思いだった。

私は私の腹の底を、彼女に見透されたのではないかと思ひ、わざと冷たくしながら、

「堪能したか？」

と彼女にいった。

「ハイ。ありがとうございました」

彼女は、そういうと、

「拷問部屋へお引き戻し願います」

私たちは、再び元の部屋に戻った。

私の誕生日を飾る、ささやかな拷問劇も、そろそろ終りである。

刑の申し渡しをしなくてはならない。私は席の上に正座した慶子の前に立った。

「女囚、早木慶子、只今よりその方の刑を申し渡す。ありがたくお受けするがよい」

「ハイ」

慶子は、きつと顔をあげた。

「その方、罪浅からぬも、拷問に堪え兼ね早くも白状致したる段、殊勝の至り。由って情状酌量の上、左の通り処刑申しつけるものなり。

東京都中野区本町通り三丁目居住、早木夢二妻慶子、市中裸引廻しの上、小塚原に於てハ

リツケの刑に処す。……ありがたくお受け下さい！」

私が宣告を終ると、彼女は頭を垂れて、「お処刑、ありがたくお受け致します」と申告した。

彼女は何故か、ハリツケが好きだった。といつても、実際に見た訳ではないし、彼女にそんな体験はないのだが、何となく、ハリツケ台高く、両手両足を大きく拡げて括りつけられるという感じが、彼女のマゾ性にぴたりとくるようだった。

だから、私たちの拷問プレイの最後の、刑の宣告は、いつもハリツケでないと彼女は淋しがるのだった。

色々なプレイの体験記などでハリツケの情景が出ていると、彼女はひどく羨しがった。

「ね、一度ハリツケして……」

私は何度かせがまれているのだが、ハリツケとなると、仲々簡単には行かない。それに菱縄をかけ後手に緊縛するのが好きな私にして見れば、ハリツケの形にするには、彼女の両手を自由にしなくてはならないのも、私を躊躇させる原因となっている。せめて、刑の申し渡しの中だけで、当分我慢して貰わなければならぬ。

(完)





△創

作▽

## 異聞『白雪姫』

鈴木省吾

私は白雪姫。そう、あのグリム童話のヒロインよ。皆さんが子供の頃、私の話は度々聞かされた事と思います。魔法の毒リンゴに眠らされたわたしが、王子様の口づけによりがえって幸福になるお話し。おそらく知らない人の方が少いでしょう。

でもこれはつまり、お子様用で、魔法の心得のある継母が念入りに作った毒リンゴですもの、そう簡単に蘇生できる筈がありませんわ。私が現在こうして王子様と幸福に暮らせるのは、実は小人達のお蔭なのです。彼らの

献身的な手当があったからです。でも、その手当の方法というのは……ああ、今思い出しても全身が総毛立つような恐怖に襲われます。忌まわしい治療の記憶が今でも私の心を苛みます。でも、今思い返すと、あの苦しみは奇妙になつかしいような、一寸いい表せない気持ちになることがあります、ひとりで顔を赤らめ、戸惑っております。

小人たちというのは、身長一メートル足らずで私の胸位しかありません。でも、彼らは皆立派な学者なのです。化学、天文学、哲学

など、それぞれに優れた研究をしていました。が、一般学者より一歩進んだ彼らの研究は世に受け入れられず、結局世を捨てて、こんな森の中に隠遁してしまっただけです。けれども、いつかは世間の人達を見返えそうと、研究に夢中になってます。いつでも難しい顔をしながら滅多に笑った事ありません。特に、彼らのリーダー格であるピオと言う植物学者は、それこそ世界中の苦悩をひとりで背負い込んでいるような苦渋の皺を、広い額に刻み付けていました。彼は、庭に数々の変わった



きのこを研究用に栽培していましたが、このきのここそが、後に私を呻き悶えさせる事になろうとは、まるで考えませんでした。

それはともかく、そんな彼らも、私が身の周りの世話をするようになると、ほんの少しですが、明かるく快活になったようです。彼らは私の為に、家の隅を改造して一部屋に区切り、粗末でしたが寝心地のよいベッドや、その他の家具も器用に作ってくれました。でもやはり、彼らはあくまで学者特有のよそよそしい態度を崩しませんでした。

ところが、私が例の毒リングで倒れた時の彼らは、そんな日常とはまるで違っていました。一応いつもの厳然とした態度を保っていたものの、私にくれた様々な療法は、単なる親切以上の、何か別の目的があるようにも思えるのです。ふだん、私が洗濯物を畳んであげたり、食事の給仕などをしてあげると、彼らはおかしい位どぎまぎ狼狽して俯向きながら、やっと小さな声で礼を言う程の内気さなのです。こんな内気な彼らが、あの時だけはまるで人が変わったように、強引な積極的態度で看護したのです。

それは、して貰う私の側からはっきり言えば、看護に名を借りた一種の折檻のようなもの

のといえる程でした。いいえいいえ、そんな事を言っただけはいけなわ。彼らは、私の命の恩人なんですよ。何もかも、私を救いたい一心でしてくれた事なのですよ、きつと。……でも……

小人達が、研究の為の材料を森の中から探し廻る仕事から帰った時、白雪姫は、既に仮死状態になっていた。優れた学者である彼らは、すぐに白雪姫の危険な容態を悟り、機敏に処置を始めた。まず硬張っている白雪姫の身体から衣服を脱がす一方、ピオは例の庭から、ドクウツボダケという、赤黒い色をしたきのこを籠に一杯取ってきた。これは非常に生命力が強く、毒性の植物に寄生してその毒を吸収し、繁殖するという変わったきのこである。それを臼に入れて叩き潰し、掻き混ぜた。それにつれ、どす赤く濁った色から、透明なところてん状に変化し、いよいよ用意ができた。今や白雪姫は、その名の通り、しみ一つない輝くばかりの雪の肌を硬直させて死線をさまよっている。どろどろのところてんは、ピオの両手で掬い上げられ、つましく盛り上がった乳房に、まず塗り付けられた。そうしておいて、毒素をよく吸い取らせる

為、揉み療治が施される。乙女の象徴は、そのおぞましい療法に硬直から呼び戻された如く、小さな頂点がまるでいやいやをするように、ピオの無骨な指の間に見え隠れする。同じように、他の小人達も、ピオを見習って白雪姫の全身に薬を塗り込め、よくマッサージした。この間、彼らは例の如く、苦虫を噛み潰したような顔であったが、よく見れば無理にそう装っている事がわかる。内心の喜悦を取り繕って、わざと肩怒らしている。インテリにありがちなテレ屋なのかもしれない。

失神している白雪姫は、当然ながらまったく無抵抗に、今だかつて人目に触れさせたこともないであろう清純な肌を、愛すべき気弱な按摩に任せきっていた。やがて小人達はその手を止め、何事か期待するように、白雪姫をじっと見守った。美しい裸身は塗られたところてんによって、不気味な程の光りを帯びて、ひっそりと床に横たわっていた。

すると間もなく、姫の全身を包むところてんが乳白色に濁ってきたかと思えるまに、どす赤い突起物があちこちにニョキニョキと出現し始めた。ドクウツボダケが、白雪姫の体内から、命を狙っていた毒を吸って再生したのである。白茶けた被膜に被われて、ドクウツ



ボダケが群生した白雪姫の身体は、もはや一本の朽ち木と化してしまつたように見えた。顔を背けたくなるような無残な姿に変わり果てたが、小人達は黙々と、頃合いを見て、意深くそのきのを取り去る作業を始めた。

まず、特によくきのこが繁っている胸部から取り掛かった。絆創膏を剥がす要領で、肌を傷付けないようゆっくり取り除くと、それにつれ、毒が弱められた為、かなり生き生きした素肌が剥き出しになった。すんなり伸びた両脚からも、ストッキングのように脱がされ、最後に顔からもそれが剥がされると、赤味を取り戻して小さく聞いた形の良い唇から「アー」という微かな溜息が漏れ、意識が回復したのである。しかし、未だ体内に残っている毒の為、手足は動かせず、舌も痺れていて、「アア……ウウ……」としか言えない。

次にピオが用意したのは、ジャイアンツハツタケという、ちょうど朝顔の花のような形をしていて、人が一人乗にその中に入れる位の巨大なきのである。それを、暖炉の上に鍋などを掛ける為の丸い孔を利用して、上向きにすっぽり嵌め込んだ。このきのこは、内側は柔かな襪で被われているが、外側は金属のように堅いので、炎にかけても燃え落ちる

心配はない。やがて、暖炉の熱で、その襪の間から白い湯気が立ち始めた。この湯気が毒消しの働きをするのだ。

ピオの指図で、小人達は、白雪姫の体を二つに折り曲げ、しなやかな蔦の<sup>つた</sup>ロープで、両膝をしっかりと縛り合わせて、その縄を首に緊ぎ強く引いた。「ククッ」白雪姫が苦しうに呻いた。膝頭が喉を圧し、つややかな腿が乳房を押し潰す恰好になったのである。更に、足首を揃えて縛った縄は背後に回され、後に廻した両手を縛った。これで、白雪姫は最も小さく<sup>まと</sup>纏められ、固定されたわけだ。口をきくことはおろか、手足の自由も利かない白雪姫は、この間ただ、「ウウ……」と切ない呻きを上げるだけで、どうする事もできない。

リングを齧った迄は憶えているが、その後生暖かい泥の中に埋まっているような、重苦しい眠りから醒めると、いつの間にか、自分は裸にされていて、こんなみじめな恰好に縛られていたのである。苦痛と恥辱にまっ赤になりながらも、素直な白雪姫は、小人達が重い口を開いてぼそぼそと経緯を説明するのを聞いて、これは自分の命を助ける為に必要な事なのだと悟り、できるだけ我慢しようと健

気に自分に言い聞かせた。

窮屈な白雪姫の身体は、七人の手で持ち上げられ、白い湯気を吹き上げているジャイアンツハツタケの傘の中に、卵を立てるようにして静かに入れられたのだった。たちまち熱気は白雪姫を襲い、全身から汗が流れ始めた。ロープが痛々しく食い込んだ華奢な首筋からなだらかな肩にかけて、ピンクに上気した滑らかな肌に、後れ毛が纏わり付いていた。艶かしい眺めである。しかし、小人達は相変わらず無然とした表情で見守る。

白雪姫は、ただでさえ苦しい姿勢の上、柔肌を擦る熱いガスの為、心臓は高鳴り、目は眩んで、また、今にも気絶しそうだった。

やっとピオの合図で引き上げられ、縄を解かれてベッドに横たえられた時は悶絶寸前だった。しばらく「ハアハア」と苦しうに息を切らしている白雪姫。乳房が、別の生きもののように激しく上下する。それがようやく静まった頃、姫は苦しみが無駄でなかったことを知った。ぎこちなくではあったが、徐々に手足が動かせるようになったからである。しかし、口はまだ麻痺していた。

もう一息である。ピオは、今度は、ツキヨタマゴダケという下剤になるきのこを持って



きた。これは解毒作用も併せ持つのである。これを、特殊な薬液に溶かし、白雪姫に飲まそうとするのだが、舌が痺れているのでどうしても飲み込むことができない。そこで、ピオは思案の末、水草の茎を利用して胃に流し込むことにした。しかし、口からでは相当苦しい。白雪姫が苦しまぎれに、茎を噛み切ってしまうそうなので鼻から入れることにしたのである。

小さく整った可愛らしい鼻孔に二本の管が、ゆっくり挿入され始めた。無残にも最大限に鼻孔が押し広げられる。内部を傷付けたらしく、赤い筋が白い頬に流れた「ヒィー」堪え切れず悲鳴が挙がる。「ククッアグッ」白い喉が苦しげに鳴った。どうやら管の先端が食道に届いたらしい。少しずつ、薬液が注入されて行った。白雪姫は、ようやく動かせるようになった手足をばたつかせるが、むづかしい顔付きを更にむつりさせた小人達に押えつけられた。

ようやくにして、全部の薬液が送り込まれると、静かに管が抜かれた。ぐったりしている姫を、小人達は、毛布で頭だけ出して海苔巻にし、大切そうにベッドに寝かせた。

瀕死から救う為とはいえ、拷問にも似た長

時間の激しい施術に、すっかり疲労した白雪姫は、ついうとうと眠り込もうとする。無理もない。たおやかな乙女の柔肌が、一晚中命の灯を消そうとする猛毒と戦い続けたのだ。もうそろそろ夜明けも近い。しかし、ここで眠ってしまったら、そのままの世行きになる。今までの苦しみが総て水の泡だ。

そこで、ピオが懐から取り出したのは、ムラサキツチグリという栗の実のようなきのことである。それを、眠りかける白雪姫の鼻先に近づけると、クシャツと潰した。すると、紫色の胞子が煙のように飛び出した。それが傷ついて刺激を受け易くなっている鼻孔に吸い込まれた途端、「ハックシュン」と白雪姫は可愛らしく顔を歪めて、続けさまにくしゃみをした。その度に、震えるように瞬く長い睫毛の下から、真珠のような涙が溢れた。鼻からも涙と交らぬ鼻汁が噴き出し、口の脇を通って顎にまで伝わった。ピオの指が、やさしくそれらを拭う。

こうして、何回もくしゃみをさせられて、睡魔と戦ううち、今度は、下腹部を鈍痛が襲った。ツキョテングダケが効いてきたらしい。「アア……ムム……」毛布に包まれた身体が悶え始めた。これを見たピオは、急いで毛布

を剥ぎ取った。白雪姫は、本能的に身を縮めた。ピオは仲間に指図して白雪姫を仰向けに押えつけた。夢中でばたつかせる両脚を持ち上げ、膝を曲げさせてその膝を白雪姫の肩の上に掛けて固定した。膝が大きく開かれ、あまりの屈辱に白雪姫は嗚咽する。おもむろにピオは、ベニシユウロという、蚕の繭のような形のきのこを取り出した。

このきのこは、水分を吸うと急激に笠が大きく張り拡がり、ちよつとやそつとの加圧ではびくとしなただけの伸張力を有するのが特長である。ピオの今度の療法は、ちよつど瓶詰の毒を解毒薬と共に密閉したまま毒素を消滅させようとするのと同様な方法であった。

きのこは、密閉栓の役目を果たすのである。白雪姫は再びロープに見舞われ、両手を頭の上で縛り合わせ、ベッドに括り付けられた。自分で苦しまぎれに栓を取っては、解毒薬が流れてしまうからだった。

絶えず激しい排泄感に襲われて、白雪姫は脂汗を流して苦しみもがくばかり。とても眠るどころではない。

そのうち、東の空が明るくなってきた。最後の仕上げに掛る。毛布にくるまった白雪姫は、外に連れ出され、二メートル程離れて



立っている二本の木の間に寝かされた。両手の縄を解かれ、改めて片方ずつ手首に縄を掛けられる。不安そうに瞬く瞬く、ものを言えない濡れた唇が震える。しかし、小人達を信じて諦めたのか、おとなしくされるがままになっている。

手首の縄尻を持って、二人ずつ各々二本の木に登り、力を合わせて白雪姫を引っ張り上げた。万歳の恰好で、背中から腰、足と少しずつ地面から離れてゆく。小人達は吊上った足首にも縄をつけ、右足の縄を右側の木の根に、左足も同じく左の木に、強く引いて括りつけた。澄んだ夜明けの空気に浮かぶX字形

の美しい晒し者。必死に耐える白雪姫。

その時、朝霞を破って、森の向こうから朝日が顔を出した。その金色の眩い光は、正面から白雪姫の全身を暖かく包んだ。ピオは一人の小人の肩に乗り、姫を苦しめたベニシウロを取り除いた。たちまち二本の滝が現出した。がっくり顔を仰け反らす白雪姫。それを木の上から、下からそれぞれの角度でじっと見守る小人達。

小島も朝の囁きを止め、妙にしんとした森の中に、白雪姫の命を絶ち損じ、無力に解体され、溶液された猛毒の空しい排出音だけが響き渡ってゆく、……いつまでも。

佳人は、被虐の世界に引き入れられた時、初めて真の美を發揮し、あやしいまでの魅力

を撒き散らすものである。そうでなければ美人とは言えない。白雪姫の場合はどうであらう。勿論、猛毒との激しい闘い。苦しい療法を耐えて取り戻した価値高き若い生命。色とりどりの花に包まれて、安らかに眠る白雪姫の姿は、以前に増して、激しい苦しみに磨きをかけられ、輝くばかりに美しい。王子が夢中になったのも無理はない。これ凡て小人達のお蔭だ。彼らの演出に依り、更に従順で心優しい白雪姫が生まれ、ついには最後の倖せを得たのは当然といえるだろう。

## 紙手への夫人子静

山 上 四 郎

拝啓、遠山静子さま。あなたに初めておたよりします。蒸し暑い毎日が続きますが、どうお過ごしでしょうか。もっとも、一糸とも

静子さま。私があなたを最初に知ったのは今よりだいたい一年ほど前のことです。

身にまとうことの許されないあなたには、この蒸し暑さもさしてはお感じにはならないかも知れません。

そろそろ秋風が身にしみいるようになったころ、新宿の小さな書店の一隅にあなたを見つけてました。以来、私はあなたの魅力のとりことなってしまうました。月に一度の逢瀬が

物足りずに、あなたを求めて何度古本屋に足を運んでことでしょう。あなたをさがし出す事が出来ず、むなしく引き返すことも幾度となくありました。こんなあわれな男の心中をお察し下さい。

ところで、そちらでの住みごこちはいかがでしょう。

川田たちから受ける毎日の折檻、さぞ恥ずかしい毎日を送られていることでしょう。精神的な苦痛も並々ならぬものと、お察し申し上げます。けれども静子様。お気づきでしょう



か。川田たちから屈辱的な仕打ちを受けられ、羞恥におののく時のあなたの姿が私には（私ばかりでなく全静子ファンにも）、一番美しく見えることを。

私は「花と蛇」を読みながら、屈辱を受けるあなたの姿を思い浮かべてみます。上気した頬、羞恥のためピンクにはってた肌、豊かに盛り上った胸、上下を荒縄でしごかれ、今にも飛び出さんばかりに張りきった乳房。屈辱を必死に堪えようと慄える太股、等々。

そしてまた読み終ってからは今度は私自身が鬼源や川田となって、静子様を恥ずかしめているのです。その時のあなたは、私の前で屈辱的なポーズをとり、排泄を要求されるのです。さらにあなたは私の命令で、弟子の小夜子や義理の娘の桂子を呻かすのです。川田に向かって言ったように、私に向ってあなたはあの恥すべき言葉をささやかなければならないのです。

できない事とは知りながら、こんな事を考えるのが私の習慣となっていました。下劣な想像をお笑い下さいますな。

静子様、あなたは私にとって、——いや、私ばかりか「花と蛇」を読む者にも、「花と蛇」に出て来る悪者どもにとっても作者の団

氏自身にとっても——、神聖なる女神のごとき存在なのです。それなら「なぜ」とお聞きですか。静子様はおそらく、ビーナスやマリヤを犯したいという男の願いが、お分りにならないのでしょうか。

犯すべからざる高貴な女性たちが、私たちの手によって恥ずかしめられ、私達の目前で羞恥心を取り去ったかのようなあられもないふるまいに及んだとしたら、これほどの快樂が私達男にとってあるでしょうか。彼女たちの羞恥心を刺戟することが、つまり精神的な苦痛を加えることが、彼女たちに肉体的な苦痛を与えることよりも、より大きな苦しみを味あわすことになるのです。（我々の喜びもそれだけ大きいということです）

あなたを恥ずかしい目に会わせるのは、それだけあなたにあこがれているからなのです。静子様の羞恥心と持って生まれた高貴な品格とが、我々の欲情を誘うのです。私達は「花と蛇」に登場する、銀子たちズベ公や、元女中の千代に対しては静子様に感じる欲望を起すことはできません。

静子様、我々男どもの心の中がお分りいただけたでしょうか。いわば鬼源や川田は全男性の分身なのです。（もちろん団氏も含まれ

ます）彼らは、我々が心の中で思っている事を、我々に代って実行してくれているのです。

言いかえれば、私達が日ごろ静子様に対していだいている欲望を、静子様というよりも全ての神聖な物に対して感じている一種の欲望を、川田とか鬼源とかいう分身を通して吐きだしているのです。

静子様は川田によって、団氏の言葉をかりれば、毛穴から血がふき出るほどの恥ずかしい思いを受けられる時、私はあなたが一層愛しくなり、一層喜びが増すのです。

長々とお眼をわずらわせましたが、そろそろ終りにします。

静子様、先ほど書いたように、あなたの生まれつきの高貴な品格と羞恥する心だけはなくさないで下さい。

最後に、あなたが早く捨太郎と夫婦のちぎりを結び、夫婦プレイを始められるように。そしてまた、小夜子の先生として、小夜子をりっぱに調教なさるよう祈って筆を置きます。

一九六七年盛夏

山上四郎より

愛しい静子夫人へ



サド・レディのセミ・ファンタジー

## 異常の門

清水圭子



## 序 章

私は、当年二十一才、東京都内の某芸能学校の演技科に籍を置く、タレントの卵です。

高校を卒業すると、両親のすすめるままに、R大学の英文科に入学致しましたが、生来ハデ好きだった私は、知り合いの、テレビのプロデューサーのすすめで、現在の芸能学校に転校する事になったのです。

自分で云うのは気がひけますが、身長一六二センチ、体重五一キロ、やや肉付は良い方ですが、ウエスト五九センチと、充分にバランスのとれた肢体と、決して美人ではありませんが、男好きのするファニー・フェイスは、充分に将来のスターたり得ると自負して居ります。自分の好きな道に向って努力を続ける毎日。そして、若々しいエネルギーに満ちあふれる私……現在の私にとって、毎日毎日の生活は本当に充実したものです。

そして、楽しい生活の中に、唯一つ、空しい影を投げていた私の秘密……此の暗い影も私は、自分の勇気と、決断とで、とうとう払い除けてしまったのです。

平清盛ではありませんが、正に、「満月の欠けたる事のなき日」を送って居ります。



御自分の性へきを、ひたすら恥じ、そして恥じ乍らも、其れから逃げられないで居る皆様方には申し訳ありませんが、私は、自分のセックスを勇氣をもって、充足する事に成功したのです。……

私は、女だてらにサジストでございます。そして、申すまでもなく、理想のマゾヒスト、男奴隷を手に入れる事を日夜望んで居たのです。

私の人生が、完全な充足感をともなう様になったのは、此の男奴隷を鎖でつなぐ事が実現した日からでございます。

## 1

楽しい毎日を送りながらも、私は、自分のサジスティックな願望を処理する事には非常に熱心でした。

そんな私にとって、大きな自信と勇氣を与えて呉れたのは、SM同人雑誌と云ってよい「奇ク」だったのです。毎号の読者通信には数多くのマゾ男共が、身も心も無い様な、悲痛な叫びをあげて居るではありませんか。

世の中には、何と多くのマゾ男が居る事でしょう。それに反して、それらのあわれなマゾ男共を飼育しようと云う女主人の数の少ない事……私の自信は強まる一方でした。

私は自由に、自分の奴隷を選択する事が出来る。決して早まっていけない。数多い奴隷志願者の中から、最も気に入ったヤツを選ぶのだ……私は、早まる氣持を押えて、時期を待つて居りました。

そして、いよいよ私の行動を開始する時がやって来たのです。

## 2

「私は二十一才の学生です。私は、マゾ男共を飼育する為に生れて来た女王様です。最高教育を受けた私に、ふさわしい男奴隷を希望します。私の厳重な検査に合格する自信のあるマゾ男は至急に申し出なさい。」

圭子

私は、あえて、「奇ク」でなく、日刊のある経済紙に広告を出したのです。何となく、此の方が、ひやかしてなく、真のマゾ男にめぐり合えると思ったのと、一方では、相当の社会的地位のある男共の目にふれると思ったからです。決して「奇ク」を嫌ったわけではなく、「奇ク」では、投書の回送をして居ないと云う事もあったのです。

私は、此の広告を新聞紙上に発見すると、思わず、期待に胸がおどって来るのをどうし様もありませんでした。

一週間後、私は、新聞社の広告部で、思ったより少ない応募者の数を知らされ、いささかガッカリ致しました。しかし、私の手にした五人の応募者のリストは、数は別として、私の自尊心を満足させるに足りる顔ぶれだったのです。一人を除いて、他の四人は、いずれも、私の知って居る知名人だったのです。私は、万一を考え、四人の知名人にのみ電話を掛ける事に致しました。此の人達ならば、決して、秘密をもらしたり、後々まで、私に迷惑をかける様な事は無いだろうと思ったからでございます。

私は、順々に此の四人の奴隷志願者に電話をかけました。わざと簡単に、そして尊大に……。

「××さんを、お願い致します」

やがて、受話器を通して、男の声が流れて来ます。

「モシモシ、××ですが、どなた様で？」

私はお腹に力を入れて答えます。

「××ね！ お前は、私の新聞広告を見て、奴隷を志願して来た男だろ！ 今日すぐ速達



で、お前の奴隷志願書を出すんだよ！ 住所は……私の返事が行かなかったら、お前は落第、以後絶対に私に近づいてはいけないよ」云うだけ云うと、私は、相手の話しかける声を聞き乍ら、乱暴に受話器を置きました。私のサジスチックな血は、此の電話だけで、もう燃えて来るのでございます。

次々と私は、四人に電話を掛け終ると、期待に胸をふくらませながら、翌日の反応を待つのでした。

3

翌日の夕方、学校から帰った私は、一度に四通の手紙を手にしました。いずれにも便箋にギッシリ五枚程度の奴隷志願書が入って居りました。私は、一気に全部を読み終わりました。ハイレベルの男達だけに、達筆で文章も、仲々立派なものばかりです。

しかし、一通を除いては、いずれも、「お互いの社会的地位と、生活に迷惑をかけない範囲で云々……」と、いかにも、もっともらしく書いてあるのです。そのくせ、内容は、社会生活云々はどこ吹く風の、空想的マゾヒスト共に共通のたわ言だらけなのです。私は少々腹を立てて、最後の一通を手にしたので

す。

……私は、此のすばらしい自分の肉体のすべてをさらけ出して、お前達マゾ男を飼育しよう云うんだよ！ 中途半ばな、マゾ男の道楽のお相手は嫌なことだ！ 本当に、自分のすべてを、私に捧げて悔いない男こそ私の奴隷となる資格があるのさ！……。

私は、完全な奴隷を、此の世の中で飼育したいのです。遊び半分の奴隷ゴッコはいやです。そんなお遊びなら金で充分創り出せるでしょう。そういう私の期待は、最後の一通を読むに従って、だんだんとふくらんで来るのでした。

「圭子女王様、

賤しいマゾヒストの私めに対し、御手ずから、汚らわしい私めに玉音を下し置かれ、私、奴隷志願者青山達也にとりまして、此れ以上の光栄はございません。

私めは、自分の人間としての資格すべてを放棄し、唯々、圭子御主人様の所有物として飼育される事を願って居ります。私自身、あるいは、御主人様も御存知かと思いますが、現在、作家として相当の地位を持って居ります。し

かし、私は、此の作家としての名声も、そして財産も、又独身の気安さと申しでは失礼と存じますが、私自身、系累の無い男でございます。如何なる、御主人様の御命令にも従う所存でございます故、何卒、御引見賜りまして、終身、真の奴隷として、鎖につなぎ止め下さいます様、伏して御願申上げます。

青山達也拜

他の三人の手紙の様に、くどくどと自分の趣味を書き並べる様な事をせず、唯々、私に対する服従の気持のみを書述べた此の手紙の真意は、私に大きな満足にあたえました。それに、此の青山達也と云う作家は、三十五才の若手作家としてもてはやされ、そして、仲々の好男子であり、マスコミでは、相当の売れっ子でした。それにテレビ等にも良く出演し、私にとっては、今まであこがれに近い気持を持って居た男の一人だったのでした。

私は、青山達也を奴隷として採用する事に決めると、筆を採ったのでございます。

4

「奴隷志願者、青山達也へ

尊く、美しい女主人清水圭子は、お前



を、終身自由の無い一匹の家畜にも等しい奴隷として飼育する為、検査を目的として引見する。

来る、五日私の自宅まで参上せよ」

私の簡単な呼び出しに応えて彼青山達也はいそいそと、自ら永遠に自由を失う事も意にかいせず、早々に私の前へ現われたのでございます。

六畳と四畳半、バストイレ付、家賃二万七千円の青山のアパートは、年若い私にとっては、決して貧弱な住いではありません。しかし、私は、奴隷を所有する女主人です。いよいよ、これから、私のあくなき女主人ぶりが発揮されるのです。私の夢ははてしなく、奴隷達也の上にふりそそいで行くのでございます。

こんな私の前に、あわれな奴隷志願者として、今をときめく、売れっ子作家青山達也は出現したのでございます。

## 5

玄関のベルの音に私は、達也だと直感すると、

「お入り！」

と、そっけなく応じます。やがて、ドアが

開くと、写真等で見おぼえのある青山達也が玄関のタタキにオズオズと立ちます。

「清水圭子さんの御宅でしょうか」

私は、食堂の椅子に腰を下したまま、だまって頭をふります。

「圭子様でいらっしゃいますか、私は青山でございます。本日は御呼び出し下さいますありがとうございます」

達也は、すでに、マゾの世界に入っているのでしょうか、上ずった声でこう云うのです。

私は、今にも、鞭を振りたいような気持ちを押えて、

「先生、こちらへどうぞ」

と、つとめて、やさしく云うのです。

達也は、一寸、勝手が違ったという様子でしたが、恐る恐る、云われるままに、食堂に上って来ます。私のすすめるままに、椅子に腰を下した達也は、

「圭子様、どうか私を奴隷にして下さい」

と真けんな顔で、うったえるのです。

「先生、奴隷になるっておっしゃるけど、私は、奴隷にした以上、絶対にあなたの自由は奪うことよ。もし、本当の奴隷になりたいなら、その証拠を見せて下さらない？」

私は、わざと、そっけなく云うのでした。

「圭子様、これをごらん下さい」  
達也は、つかれたように云うと、床にひざまずいて、風呂敷包を差し出すのです。

## 6

その包の中に、私は、清水圭子名義の世田谷の屋敷の権利書、そして、二千五百万円の銀行預金通帳を発見して、いささか驚いてしまったのです。しかし、ここでびっくりして居ては……と自分に云い聞かせると、

「何だいこれは……奴隷のお前が、主人様に捧げるものは、これだけかい。私は、お前の財産なんか当然私のものと思って居たよ！その他に、お前は私に捧げるものを忘れてやしないかい！」

と、達也を叱りつけるのでした。

「ハイ、御主人様、私の財産の他に、私自身をすべて御主人様に所有していただきたいのでございます。どうか、あわれな私を、御主人様の奴隷として、一生、飼育殺しにして下さいませ」

頭を床にすりつけて、叫ぶ様に達也は云うのでございます。

私は、この奴隷志願者の姿を見下し乍ら、体中が、燃えてくるのを押さえる事が出来ま



せんでした。

私は、かねて、用意して居た、「奴隷誓約書」を、這いつくばって居る達也の前へ、投げ出すと、

「よく、これを読んで、次の日曜日迄に全部準備しておきな！ 私は、私の家へ日曜日に行くからね」

私の家とは、勿論、新しい御主人様、清水圭子の為に、名儀の書き換えられた、達也の屋敷の事です。

長い将来の悦楽の為には、此処で、あせってはいけない。はやり立つ心を押さえて、私は自分に云い聞かせると、

「権利書と、預金通帳は持ってお帰り！ そして、改めて次の日曜日に、お前を奴隷にするかどうか、決めるからね！」

私は、こう言うと、美しい自分の足で、思いきり、達也の顔を蹴飛ばしてやったのでございませう。

## 7

次の日曜日……

達也の家……いや、もう私の家といった方が正しいはずですが……は、想像以上に、立派なものでした。

私を迎え入れた達也は、

「圭子様、誓約書は、全部読ませていただきました。全部喜んで、お受け致します」と、玄関に正座してこう云うのです。

「ただ、お受けするだけでは駄目よ、証拠を全部見せなさい」

私は、さりげなくこう云いました。私の言葉の終るか、終わらないうちに、達也は、

「これを見て下さいませ！」  
うなる様に叫ぶと、着て居た着物を脱ぎす

てるのです。犬同様のしぐさで、ひざまずいた達也は、先ず、自分の鼻を私の前に突き出します。私の命令した様に、達也の鼻には、

七ミリ程の穴が開けられて居ました。  
「ヨシッ！ 第一検査はパスだよ！」

私も、うわずった声で宣告します。  
「つぎは！」

私の引続いての叱声に達也は、後向きになり四ツ這いになります。そして、その背中には、ありありと、「奴隷、タツヤ」「飼主、清水圭子様」と刺青されて居るではありませんか。此処まで、命令通りにするとは思って居なかった私は、ゾクゾクする様な嬉しさ

で、身体がブルブル、小さきみにふるえ出すのでした。

「ヨシヨシ！ いよいよお前も、本当に私の奴隷になるんだね。一生、お前を飼ひ殺してやるから、ありがたく思いな！」

私は、残忍なホホ笑みをうかべると、直径三厘程の鼻輪を達也、否、奴隷タツヤの鼻にはめるのでした。

ガチッ！ 鼻輪の締まる音と同時に、タツヤは、私が、誓約書で命じておいた様に、床にひれ伏したまま、奴隷の誓いを書き上げた、嘆願書を差し出したのでございます。

## 8

……私、青山達也は、本日只今より、すべての、人間としての権利を失い、私の所有して居た、すべての財産と共に、私自身の肉体及び精神を、尊くも、御美しい、清水圭子御主人様に捧げ奉ります。此の上は、御主人様を唯々、あがめ奉り、あらゆる御命令に絶対服従し、私の生命も、御主人様の御命令の前には、喜んで捧げ奉ります。

私めの、背中に刺青された、奴隷としての証固、そして、私の鼻につけられた鼻輪が、永久にうしなわれない如く私は、終身、御主人様の残忍な、そし



て、お情け深い、鞭の下に、這いつくばる事をお誓い申し上げます。尚、奴隷タツヤは、只今より永久に作家としての活動をやめ、新しく、清水圭子様を作家として世に出す事を終生の務めと致します。

何卒、すべてを失った、この賤しい、変態者のマゾヒストを、御主人様の足下に飼って下さいませ。……

私は、完全に、一人の男性を、それも地位と名誉と、財産を、立派に持つ男を、完全に自分の意のままになる奴隷として、手に入れる事に成功したのです。そして、私は、自分の努力は一切なしに、大金持、そして、新進女流作家清水圭子の地位を同時に手に入れたのです。しかし、私は、有難いとは思いません。私の魅力ある肢体、そして、生れ乍ら、サジストの女王としての絶対の自信、私はこの私だけの持つ二つの力で、一匹の男奴隷を所有する女王様になったのです。当熱の事です。……奴隷タツヤは、これからの日々、唯々私の残忍な行為の下に、苦痛と屈辱と快楽がミックスした、悦楽の日々を送る事です。う。

## 9

その日からすでに八カ月という日々が過ぎ去りました。奴隷タツヤは、今日も、私に命ぜられるままに、女流作家清水圭子として、創作に専念して居ります。私は、すでに、作家として、世の中に充分通用する存在になって居ります。

かつての作家青山達也は、すでに世間から忘れ去られ、今日も、庭にたてられた二坪程の、コンクリート敷の檻の中で、全裸のまま、鼻輪についた鎖を檻の柱につなかれ、みかん箱を机として、一心に女主人の私の為に筆を採って居るのです。私は、時々、庭に出て手にした鞭で、檻の中の奴隷タツヤを、小突き乍ら、

「バカヤロー、何をボヤボヤしてるんだい！ さっさとお書き！ 早くしないと、承知しないよ！」

と、叱りとばします。長い間の奴隷生活ですっかり、飼い馴らされたタツヤは、

「ハイ、御主人様、お許し下さいませ」

と、唯々許しを乞うのです。本当に、いい気持です……私に叱られて、檻の中で、頭を床に、すりつける度に、鼻輪で吊られた、タ

ツヤの鼻が、みにくくひろがります。フフ……、今日は、どうやって奴隷を、いじめてやろうか。……

売れっ子になって、作家タレントとして、今をときめく私には、中々、ひまが出来ません。せいぜい、三日に一度、それも、二、三十分、奴隷の調教をするだけです。そんな私に、珍しく、二日間、完全な休日が出来ました。私に、久しぶりで、サジストの血がたぎって来ました。

私は、思い切って、日頃の計画を実行する事にしたのです。

## 10

タツヤが奴隷として、私に飼われる様になってから現在まで前にも申しました様に、すでに八カ月あまりすぎ去りました。此の間、私の第一目標として、彼タツヤの作家としての才能を、すべて、私を、女流作家として売出す為に生かし、タツヤは、一日の大半を、奴隷用の檻の中で、筆を採る事です。そして参りました。

この為、奴隷としての務めは、まだ、充分に仕込んでありませんでした。恐らく、マゾヒストのタツヤにとっては、満ち足りない



気持も、あった事でしよう。しかし、彼は、今や、完全に私の奴隷になり下った、下等なケダモノです。彼の気持など問題ではありません。只、ひたすら、私を女流作家、そしてはなやかなタレントとして売出す為に、日夜を分たず、こき使って来たのです。恐らく彼なりに、相当のマゾ性の昇華をも、行なっている事でしょう。それだけでも、女主人として私は、充分に慈悲深い女神様だったに違いありません。

私は、久しぶりの休日をひかえて、その十日ほど前、ひそかに、タツヤを、E市（それは東京から、車で二時間程の中都市です）の整形外科に入院させました。彼の顔を、少くとも、青山達也として、人に知られないよう顔面の整形手術を行なう為です。八日間の入院で、タツヤの顔は、従来の作家、青山達也とは、似ても似つかない、下品な豚面に変ってしまいました。其の間、私の手もとから、逃げようと思えば逃げられたタツヤですが、私の命ずるままに、賤しい豚面にする為の整形手術を、自ら受けた彼は、休日の前夜遅く、女主人の家へ、一人ポツネンと帰って来たのです。

玄関のタタキの中へは、原則として入る事

を許されて居ない、奴隷タツヤは、私の豪華な居間の庭先に、奴隷としての命ぜられた姿（革の奴隷用褌を着け、鼻輪をブラ下げ）で正座して、私にうやうやしくあいさつを述べるのです。つい、この間まで、自分が、ゆったりと腰を下して居たソファに、美しい肢体を投げかけ、ゆう然と、煙草をくゆらす私を、おおき見ながら、奴隷は

「御主人様、奴隷めは、御命令の通り、此の様な、賤しい顔に変わって参りました。奴隷めは、完全に、人間世界から、ケダモノの仲間入りを致しました。どうぞ、存分に、仕込んで下さいませ」

と、雨でしめった、土の上に、頭をすりつけながら申すのです。

正直いって、私は、彼が少しばかり、かわいそうになってきました。しかし、これで、彼は、本当のマゾヒストとして、常人の味わえない、楽しい悦楽の世界に入れるのだと思うと、私は、益々、この奴隷を、しいたげたい気持が、一杯になって来るのでした。

「奴隷！ お前の、そのツラはなんだい！

フン！ 本当に、みっともないネ、まあ、奴隷には、分相応のツラだよ！ さあ、いよいよ、私の、御主人様としての調教を、明日か

ら始めてやるからね。今夜は、檻に入っておやすみ！」

私の叱声に、奴隷タツヤは、悲しそうに、そして、又、うれしそうに、四ツ這いのまま自分の檻に向って這って行くのです。私は、彼が、檻の中へ入ると、檻の戸に錠を下し乍ら、……いよいよ、明日から二日間、今まで考えぬいた事を、すべて実行してやろう。……期待に、胸をときめかすのでございました。

居間に、帰った私は、飼いならした、本物のコリーと、一カ月前から、やとった、女中の光子（この娘は、作家志願で、前に、達也の家で、女中をしながら、勉強して居たのです）を居間に呼んで、ヒソヒソと、打合せを行なったのです。光子は、すでに、私の教育を受け、完全な、女サジストに成長して居りました。しかし、私には従順なペットでもあったのです。

朝、目をさました私は、明るいいざしの庭先に下りて、大きく伸びをしました、身体中に、若々しい血がたぎって居る様です。

今日は、私も、女王様らしく、黒い革の長



靴と、黒のビキニパンティー、そして、小さな黒いブラジャー。黒い革の調教用の鞭を手にして居ります。私は黒色が大好きなのです。大きく、伸びをして居る私の右側から、  
「ワンワン」

と、本物のコリーの鳴き声がすると、光子に鎖を曳かれた、コリーと、タツヤが、こちらに、這って来ます。昨夜、光子に、朝早く、一時間程の散歩を命じて置いたのです。

コリーは、嬉しそうに、私の足下にいざりよると、私の手を、ペロペロ舐めます。

私は、コリーの頭を、やさしく、なぜてやります。奴隷犬のタツヤは、長い四ツ這いの生活に慣れたとはいっても、本物の犬と一緒に散歩のため、  
「ハアハア」

と、肩で息をしながら、私の足下に這いよって来ます。私は、ひややかに、この人間犬を見下すと、

「奴隷！ お前は、このコリーよりも下等なケダモノだよ。お前は、私のブーツの裏でもお舐め！」

タツヤは、私の手をペロペロ舐める、コリーを横目で見ながら、尻を高く突き出した、いとも、みっともない姿勢で、私のブーツの

裏をペロペロ舐め廻すのです。

「先生、コリーは、もう、犬小屋へつないで、タツヤを私、少し調教致しますわ」

と、真赤な、私と同じ衣裳をつけた光子がこう申します。

「そうね、あと、二十分も、引っ張り廻したら、朝食にしてね」

私は、こう云い残すと、シャワー・ルームへ入るのでした。

## 12

豪華な、食卓に、私は、若い食欲を満たして居ります。赤い衣裳の光子は、かいがいしく、私に、お給仕をします。光子は、私と、一つ違いの年下ですが、私より、やや大柄な、相当なグラマーです。

奴隷タツヤは、かつて、自分が、あごで使った光子に、今や、完全に支配された、あわれな、奴隷犬の姿で、食卓の脚に、鼻輪の鎖をつながれ、四ツ這いになって居ります。

コリーは、テーブルの下に、入りこみ、御主人様や、光子の美しい脚を相変らず、ペロペロ舐めて居るのです。奴隷タツヤは、それを只、うらやましそうにながめながら、だらしなく、舌を出して、よだれを、たらしてい

るのです。本当に賤しいヤツ！ 私は、ムラムラとサドの血が、燃えて来ました。……

光子の食事すむと、私は、

「光子、犬にも食事をやりなさい」

と、命じます。光子は、心得て、コリーの

前に、私達二人の残飯をさし出します。

コリーは、お美味そうに、食べるのです。

やがて、コリーの食事が終ると、

「アラアラ、先生、コリーが、ほとんど食べてしまいましたわ」

光子が申します。なる程、白い、ボウルの中には、トマトと、キャベツが少し残って居るだけです。

「それじゃ、私達の、いらなくなったのも、も、やっただけいいわよ」

私の言葉に、光子は、心得顔で、うなずくのでした。

みるみる、ボウルの中に、黄金水が、たまります。赤いトマトと、白い、キャベツが、その中に浮いて居ます。

光子が、そのボウルを、奴隷犬タツヤの前に置いて、

「さあ、タツヤ！ いや、青山達也先生！

有難いおめぐみだよ、頂戴しな！」

と、云うが早い、手にした赤い革鞭で、



ピシリ！と、あわれな人間犬、タツヤの尻に一撃を喰らわせるのでした。

國自分の顔が、豚面になってから、始めて光子に会ったタツヤは、まさか、光子が、自分の前身をわざわざ口に出して呼ぶとは思って居なかったのでしょうか。思わず、身体を、ピクリと動かすと、恥ずかしさに身をちぢめるのです。

そんな、タツヤに、残忍な笑をたたえながら、私は、

「どうだい！ タツヤ！ 奴隷！ 御主人様の有難いおぼしめしは！ お前の女中だった女に、辱しめられ、這いつくばっている気持は！ お前は、賤しい変態なんだよ！ マゾ奴隷なんだよ！……。何だって、恥ずかしそうにするんだよ！ 喜んで、光子のオメガミをお飲みッ！ 本当は、それが、嬉しいくせに……」

と、叱声をあげせます。私の、この言葉に彼の、いやしい、マゾ性が強く、刺激されたのでしょうか。

「ハイ、御主人様、光子様、私は、賤しい変態性のマゾヒストでございます。有難く、奴隷めの、エサを頂戴させていただきます」  
と、云うと、ボールの中に顔を突込んで、

ペチャペチャと、音をたてながら、一心に、飲み込むのでございます。

コリーの残飯と、光子のネクタールの、ミックスした、この奴隷用のエサは、私にとつては、楽しい思いつきだったのですが、奴隷タツヤにとつても、この上ない、食べ物だった事は、賤しい奴隷の態度が証明しているのです。賤しい奴隷……汚らしい、ケダモノ……私の、タツヤに対する、残忍な欲望は益々つのもつて来るのでございました。

13

朝食が、すんで、一休みした私は、庭の立木に、縛り付けられて、思い出した様に、光子の、ののしりと、鞭を受けている、奴隷タツヤの方を見やります。私の瞳は、残忍に、キラキラと輝いていた事でしょう。

私は、次の面白い計画にうつる事にしました。

私は、光子を呼ぶと、そのことを耳うちします。彼女は心得て、タツヤを立木から解放し、その立木の根本に、穴を掘らせ始めるのです。

汗水たらしながら、自分を責める為に使用される穴を、奴隷は、光子の激しい叱声と、

肉をさく様な鞭を、背中にあびながら、一心に掘りつづけるのでした。

掘り終った穴の中に、タツヤを入れると、首だけ、地上に出して、埋めてしまいます。後手に縛られ、自由を、うばわれたままの姿で、地中に埋められ、首だけを地上に出したタツヤを、私と、光子は、ゲラゲラ笑いながら見下します。立木の根本に、賤しい豚面のタツヤの首が仰向けに横たわっています。

私と、光子は、代る代る、奴隷の顔を、ブーツの底で、踏みにじるのです。そして、お互いにペッペツと唾を、その顔めがけて、はき捨てるのです。見る見る、タツヤの顔は、唾と、泥とで、みにくく、よごれて来ます。私と光子は、お互いに顔を見合わせると、申し合せた通りに身仕度をして、奴隷の顔をまたいで立ちました。……

一せいに、おめぐみの黄金水が、奴隷の顔の上で、水しぶきを上げます。

奴隷は、大きく口を開け、叫びにならない声をあげながら、地中で、不自由な身体を、よじるのでございます。

畜生に劣るタツヤが、女王様直々にそのみにくい顔を汚して貰い、また尊い水で洗ってもらえるなど、さぞ幸福感に涙が出そうに嬉



しかったことでしょう。

心地よい優越感の後、私は、大変面白い事を思いつきました。

私は、光子に命じると、メスのコリーをつれてこさせます。この飼い馴らされたコリーは、人間の恰好をした、自分の同類のケダモノに、不思議そうな顔をして居りましたが、調教師でもある光子の、

「ハイ、シーシーよ」

と、という言葉に、習性の通り、立木の根本に、みにくく突き出た奴隷の顔の上に、肢をかけはじめました。

何と云う、楽しい見世物でしょう。……

「ヒューッ！」

悲鳴をあげる、奴隷タツヤの豚面から、完全に犬以下の価値づけを象徴する水滴がとびはね、流れ落ちて来るのでございます。

アア、いい気持……私は、自分がサジストに生れついた喜びを、強く強く感じたのでございます。

14

夕食をすませた私達二人は、地中に、埋められた、奴隷を引きずり出すと、頭から、水をぶっかけ、身を清めさせ、屋内に、引きす

えます。

休む間もなく、光子は、タツヤを、洋式バスルームへ引きずりこむと、洋式トイレの上に、顔を固定して、縛り上げるのです。上半身を、弓の様にそらしたタツヤは、自然に大きく開いた口を上に向けて、ダラシなく、腹で呼吸をして居ます。

私達二人は、その、不様な、奴隷をながめながら、楽しく、快活にバスに浸り肌を磨くのでした。満腹感の後の、当然の生理現象が二人を、おそいます。

私達は

「奴隷！ そろそろ、おなががすいて来たるう……夕食をあげるからね」

と、口々に云うと、この豚面の、人間便器は、不自由な身をわずかに動かし、口をパクパクさせて謝意を表わします。

尊くも有難い、お二人のこのおめぐみは奴隷タツヤの最も生甲斐を覚え、感激に価する一刻らしいのでございます。

いささか疲れた私達は、予定より早く、ベッドに入りました。

私は、光子と、ベッドに横になりながら、足下に横たわる、コリーの頭を、脚でなでてやります。

そのころ、人間犬タツヤは、本物の犬が、女王様のおめぐみを受けているのに、鼻輪の鎖を、ジャラジャラいわせながら、庭を、這いまわっているのでございます。

「ワンワン」

時々、人間犬の鳴声が聞こえます。嬉しうに、そして、又、悲しうに。いつしか、私達は、ねむりに入って居りました。

これから、タツヤは、奴隷として生長して行く事でしょう。そして、私達二人も、益々女王様として、女サジストとして、其の残忍さをみがいて行く事と思います。

二日めの休日のことや、又、奇抜な計画を練ってタツヤに益々人間犬の有難さを覚えさせてやったことは、又次の機会にゆずります。

三〇%の実話に、七〇%のフィクションを盛り込んだ、私自身のお話ですが、皆様、いかがでございましたかしら？

また近いうちに、おめにかかりますわ。……





「怪説・義仲をめぐる三人の女」如何でしたか。これには、葵・山吹にホントらしい場面がありました。今回はこの三人に切腹を命じます。イメージといえば聞えはよいが、早くいえばデタラメ。しかも、例のメンメンもあらわれ、どんなしろものになるか、私にもわかりません。すくなくとも、表題とはまる

怪

説

## 続・義仲をめぐる三人の女

(切腹の巻)

黒田 寿

で違ってしまうことは確実です。

葵は勝ちに乗じて追撃中、つい深入りしすぎて敵に包囲された。味方は千恵・美津姉妹と小百合の三人の侍女にすぎず、しかも身には数カ所の傷手をうけている。

前方の千恵がバツタリ仆れた。たちまち何人かの敵が首を打とうと殺到する。そうはさせじと美津が斬りこんだが、飛んで火に入る夏の虫同様、姉妹マクラを並べて討死し、首だけがフットボールよろしく投げ返されてきた。侍女などには用はない。欲しいものは葵の首だといわんばかり。

「こんなところで死んでたまるものか」

葵は小薙刀をふるい、めざましい奮戦をつづけていたが……。

「ウッ」

うめき声をあげて、急にガックリと膝をつく。小百合がおどろいて、素早くそばへかけよってみれば、矢が一本、下腹にふかぶかと突っ立っていた。

「小百合さん、こんなにひどく刺さったんじやあ、とても駄目だわ。もはやこれまでよ。自害するから介錯してよ。あんた、お給料も安いのに、今までよくつとめてくれてほんとにありがとう。お礼をいうわ」



他に策のないことは、小百合にもよくわかった。鎧をぬぎ、なまめかしい下着ひとつになった葵は、静かに大地に坐ると、もろ肌おしひろげ、懐剣をぬいた。

美しき女武者の切腹。しかも介錯にあたるのは、まだ年端もいかぬ美少女だ。周囲の敵はすべて息をのみ、哀惜とも賞讃ともつかぬどよめきのなか、葵の最期をしかと見届けんものと注視した。

左下腹にグサ！と突き刺した懐剣をスウーと右方へ、はらわたのはみでぬ程度に浅く引き、噴きでる血汐をおさえつつ、白く柔らかい首すじをのばし、苦しさを押えて静かに侍女に声をかける。

「もういいわ、お願いしてよ」

声に応じ、小百合は斜め上方に構えた小薙刀を、けんめいの力でふりおろした。

本来なら白刃が葵の美しいえり足で一閃し端坐している身体から勿然と首が消え、噴血六尺もあがる、ということになるわけだが……

小百合は忠実な侍女ではあるが、武芸のたしなみはあまりなく、まして介錯などははじめて。このため、当然コロリとおちるはずの葵の首は、まだ胴の上についていた。

葵は苦痛をこらえてふりかえる。

「小百合さん、せいてはだめよ。おちついで、おけいこのつもりでね」

だが、動転した小百合が、あわてて振り下した第二の刃も頸すじを僅かに裂いただけ。三度目など完全に狙いが狂って右肩に斬りこみ、なおも夢中で何回か刃をふるったが、首は半分も斬れない。

「葵様、おゆるしく下さい」

小百合は馬のりになると、顎の下に刀身を入れて掻いてみたり、刃先を頸すじにあて、ノコギリのようにゴリゴリひいたりしたが、いずれもうまくいかず、さすがの葵も地上をのたうちまわって苦しんだ。

（どうしよう、どうしても切れないわ。葵様って石首なのね、コマツチャウナ）

考えたあげく、指で心臓の位置をさぐり、懐剣の切尖をあてがい、石で釘でも打つようにたたきこめば、心臓が突き破られ、葵の玉の如き乳房から激しく血汐がふりしぶき、ようやく絶命した。葵、ときに年二十二。

ホッと一息つき、地上に横たわる首すじめがけ、もう一度小薙刀をふりおろせば、皮肉なことに首はポロリとところがあった。

「葵様、おあとにつづきます」

汗をぬぐいつつ小百合は葵の生首を小袖につつんで前におき、両脇に千恵・美津の首を添え、けなげにも懐剣をぬきはなつと、みようみまねで己が下腹めがけてブツツリと突き刺した。

「キャッ！ イタッ！ 痛い！」

激痛に身体はのけぞり、けなげな態度のわりに大きな悲鳴があがった。無理もない、彼女はまだ十六才なのだ。

敵将は苦笑しながら小百合の背後に回り、抱きかかえると、右手の懐剣に己れが手をもち添えて、再び左下腹に突っこませてやる。

もがくのもかまわず、キリキリと右へ十分に引き裂き、次いで左乳下に刺しこめば、小百合はギャッ！と一声うめいたのを最後にこ

と切れた。これも武士の情けのうち。

敵将は死せる小百合にはもはやふりかえろうともせず、葵の生首のみを拾いあげ、己が馬の鞍に結び、本陣さして帰っていく。

間もなく、敗戦の平家陣営から、この日唯一の勝どきがあがった。葵の首実験が行なわれていたのである。

葵の生首が、髪の毛をもって松の枝から吊られた頃、小百合の首は、雑兵たちがたわむれ半分に胴体から斬り放し、千恵・美津の首



と共に、同様髪のももって馬の尻尾に結ばれた。馬が走れば生首も、ブラン、ブランとゆれていく。葵の首はのち味方に收容されたが、彼女たちのはどこかにふり落され、たかが侍女とあって、誰もさがそうともしなかった。やはり人間は偉くなりたいもの。

義仲の天下はたちまちにして終り、早くも追われる身となった。巴もいつか夫と別れ、敵の追撃をうけている。この時、侍女お富士は、脱出の機会を得るため、巴の身がわりを申しでた。今はその厚意を喜んでうけるよりほかはない。

お富士は、同僚のお英と共に高やぐらにのぼり、寄手にむかって高らかに叫ぶ。

「わたしこそ巴の前。いざ、わが首とって功名となさったらいかが？」

この言葉のはじめに、お富士の手に懐剣がキラリと光り、いい終えた時、それは左下腹に突き立てられた。衣類のみか、皮膚も、女性特有のあつい皮下脂肪も、まるで薄紙のよう、すさまじい切れ味で、そのまま右までグイと引きまわし、鮮血と共にムクムクとはみでるはらわたをひつつかむと、寄手の方へ投げすてる。

「これが引出物よ！ 受取ってちょうだい」  
これを最後の言葉とし、お富士の身体は高やぐらから転落していった。

われがちにかけよる寄手の勢、先頭のひとり、まだヒクヒクうごめいているお富士を引きおこし、エイッとはかりに首を掻き落と、血の滴るのもかまわず高々とかけ、名のりをあげる。

「巴殿の御首級をちょうだいした！」

お英もまた、いかにも主に殉じたかのごとく、懐剣を咽喉に、襟までも深く刺して、見事な自害をとげている。死体はやぐらからおとされ、雑兵が首を奪いとった。

お富士の生首は、戸板にのせた胴体と共に本陣にはこぼれたが、検分の結果あえなくも替玉と判明。怒った討手は胴体をズタズタに斬りさいなみ、生首の鼻と耳をそいでドブにすてた。しかし、この間に巴は無事にのがれ得て、義仲と再会できたのだ。

この尊い犠牲による喜びも長くは続かず、再び敵の追撃にあい、今度は巴が義仲自害の時をかせぐため奮戦する。

女性ながら武勇すぐれた巴、ここを先途とばかりに振うその薙刀の前に、みるみる屍の山がきずかれたが……。

巴は肩に激しい打撃を感じ、目の前がクラクラとなった。卑怯にも背後から棒で撲られたのだ。更に足をも払われ、両膝をガクンとついでしまう。

「敵ながら、あっぱれ。是非、生け捕りにせよとの敵命だ」

数人がとびかかって薙刀を叩き落とし、あおむけに突き仆し、寄ってたかつてねじふせ、ガンジガラメに縛りあげ頼朝の面前へ。

数力所の手傷をうけ、衣類は破れ、サンタンの姿であったが、見れば見るほど評判以上の美女、しかも武勇すぐれた身とあって、降伏随身をすすめられたが、巴はただ死のみを願った。

気の短い頼朝は、振られてたちまち怒り「あくまでそれを望むなら、名誉ある死は許さぬぞ。これを見よ！」

声に応じて、裸馬にのせたひとりの美女がつれだされる。その顔をみた、巴は驚いた。彼女の副将をつとめた松枝ではないか。

木の枝から先が輪になった縄をさげ、けんめいに首をふつてもがく咽喉にかけ、無情の一撃が馬にムチうてば、いったん竿立ちとなった馬は驚いて走り去り、松枝は両股で必死に馬腹をおさえるもおよばず、首の縄によっ



てスルリとすべりおろされた。

ブラン、ブランと振子の如くゆれる美女。

縄はのけぞる咽喉に食いこみ、息の根をとめようとしている。みかねた巴が目をつぶっているうち、血の気は失せて蒼ざめ、更に紙のように白く変り、苦悶の形相すさまじく、やがてすべての動きが静止していった。

ああ、巴におとらず眉目うるわしく、武勇すぐれた女性として、誰ひとり知らぬものはない松枝が、哀れやむざんな絞首刑に消えさったのであった。

目は大きくみひらき、涙やよだれや鼻汁をながし、開いた口から舌がダランと長くたれている。若く美しい女性だけに、それはおそろしいまでの光景であった。

「このまま朽ち果てるまで吊しおくのだ。それでもよろしいか」

巴は決心した。これは縛られたままの打首以上の不名誉な死だ。しかし、それに甘んじようと。かくして再度のすすめもことわり、遂に死罪と決定した。

そんな巴でも、いよいよ自分の前に長い縄がおかれた時は、さすがに顔色を変えた。四人で押し押し、四肢を一本ずつおさえ、もう一人が縄の輪を首にかける。

先端を木の枝を通して反対側にさげ、ぐいと引っぱれば、輪縄が強く咽喉に食いこむ。

大きくのけぞる巴を、四人で抱きかかえるように押さえたまま、枝の真下にはこぶ。

押さえていた手をいっせいに放し、直立した巴を五人がかりで引っぱれば、巴の身体はジリジリと地上をはなれ、宙に浮いてゆく。

「いやよ。女ながら武將のわたし。しかもこんな美人が首吊りで死ぬなんて。いやいや、いやだわよ！」

美しい顔は苦悶だけでなく、恥と怒りでみるみる紅潮し、目から血汐があふれでんばかり。完全に宙に浮けば、あたふたも呼吸がとまり、二本の脚がバタバタとあられもなく、巴にとってまさに「名誉ならざる死」と思わせた。

手は自由なので咽喉をかきむしり、縄をはずそうとしたがだめ。同じ首吊りでも、上からとびおりる形なら、一気にキューと、すべての血行が止り、比較的早く絶命するが、このようにジリジリ引きあげた場合は、死に至る時間が長くかかるのだ。

まさに一巻の終りという時、和田義盛が姿をあらわし、巴の前の名にかけても剣による死をあたえるべきだと献言、頼朝もしぶしぶ

承知せざるを得なかった。

あらためて切腹を命ぜられた巴は、介錯に義盛をわずらわしたいと願ったが、介錯なしで切ってみよといひすてられ、さらば！と決意を胸に秘めて切腹の座につく。

武將らしき最期と喜んだ巴の切腹は、まさに見事の一言につきた。短刀に力をこめて左下腹に突っこんだ時は、さすがに一瞬ピクン！と身体をふるわせたが、以後は微動だにせず、柄まで深く貫いた刃を右まで横一文字にかさばき、次に臍窩に突き刺すや真下にグイと斬りさげ、雪をあざむく下腹に、鮮かな血の十字架を画く。

しかも本来なら、苦悶のため腹圧が高くなり、当然はらわたがはみでるはずなのに、強力な意志でそれをおさえている。さすがの頼朝も手を打って感嘆した。

「それ、ごらん。首吊りなんかより、ずっと見応えがあるでしょう」

ニッコリほえんだ巴は、刃を首のうしろにまわし、右手で柄を、左手で切尖をつかむや、スウと前方にすべらす。首はポロリと、大根でも斬るかの如く鮮かに斬り放され、巴の身体はバツタリと仆れ伏した。壮烈極まる最期であった。



満場しばらく声もなく、美女の死を悼んだが、ややあってわれに帰った頼朝は、死体を取りよせ傷口をたしかめる。十文字のすべてが三寸の深さを保っていた。再嘆した頼朝、今までの巴に対するにくしみを忘れ、静かに胴体を塩漬に、生首を獄門に梟けるように命じたのである。

山吹は義仲苦戦の報に、十五人の同僚と共に先をいそぐ。救援というにはあまりにも小勢だが、すべてをささげた主君の馬前で死のうと、けなげな決心をかためたのだ。

しかし、目的地はまだ遠いというのに、敵方の一部隊と遭遇、いかに死をおそれぬとはいえ、かよいい女性のこと、あえなくも次々と討死をとげていった。

祐美が勇敢にも、真先に敵中に突入する。

だが、一瞬後にその両手は小太刀ごとふっとび、よろめく身体は胴を薙がれて、上半身下半身べつべつに断たれ、更に上半身が地上におちる前に、四尺の豪刀みたび走って、首を宙天高く刎ねあげ、若い生命は簡単に散ってしまった。

(ワァッ! ざ……ん……ね……)

次なるひとりがその首をうけとめ、手から手へと、まりのように投げ渡してたわむれている。

(ひどいわ。それ、わたしのクビよ!)

続く礼は、ふくよかな腹部のまんなかを、鋭い槍でグサッ! と突き通され急所の痛手にたまらず前に仆れる。己が身体から噴きでる血汐をおさえつつ礼は、続いて刃が頸すじめがけて、一気に断ち斬るべく、ふりおろされるのを覚悟した。

(これで一巻の終りね。仕方ないわ、どうか痛くないように……)

この願いに反し、敵はそのままかけぬけていく。これは腹の傷は必ず死ぬので、急がずに十分に苦しめ、確実に死亡してから首をとろうという計算なのだ。

愛は押し仆され、必死の抵抗空しく、胸といわず腹といわずメッタ刺しされ、次第次第に力は弱まっていった。

(たったひとつしかない首だし、長らくお世話になって名ごり惜しいけど、そろそろお別れして、この人にあげようかしら……)

あきらめたのを知り、首をとるため坐り直

した敵は、夢中で突き出す愛の懐剣に心臓を貫かれ、死体となつてころがりおちた。

だが、愛はひと息つく暇もなかった。ようやく上半身をおこしたところ、第二の敵がおりかかり、あつというまに彼女の首を掻き切ってしまった。

(まあっ! とうとう……)

しかし愛の手には、首をもちさられた無惨な姿となつても、まだしかと血ぬられた懐剣がにぎられていた。

お克は勇戦して一人を組みしいたが、ほかの敵が背後にまわっている。山吹がこれを発見、大声で叫んだが、乱戦のなか彼女の耳まで達せず、遂に大刀の一閃をあび、哀れお克の細首は高々と舞いあがった。あわてて両手でおさえようとしたが、もうおそい。

(待ってよ。どこへ行くつもり? 胴はここよ。断りなしに飛んじゃ駄目!)

あと一息で敵に止めを刺す寸前、己れが首を失ったお克は、いったい自分の身に何事がおきたのか、これからどうしようかと考えるかの如く、首のあったところから血汐を噴きながら、しばらくそのままの姿勢を保っていたが、やがてドオツと横ざまに仆れる。



(やはり、首なしではこれから何かと不便なもの、死ぬしかほかにいい方法はないわね)

真知の背後に、二人が太い竹竿をもってしのびよった。その端には輪縄がゆれている。これで魚でも釣るように彼女を吊りあげようというのだ。

真知がそれと知ったのは、ヒョイと輪を首にかけられ、上にぐんと引かれた時になってからである。

(こんなの反則よ。遊園地の魚釣りじゃあるまいし……)

背後にのけぞり、一歩二歩よろめく。竹竿をあげれば、小柄な彼女は宙に浮く。たたらをふみながら、なんとかのがれようともがいたが、大刀が正面にきらめいた。

(むちゃするわね、まったく。これが最期なのかしら)

白く柔らかい首すじに、横なぐりの一刀をあげせれば、美少女真知は、首と胴ふたつになって、地上にくずれおちた。

(やっぱり。でも死ぬ時の気持ちって、案外おちついたものね)

美枝の最期はみじめであった。というのは

刃で死んだのではない。即ち、大勢で押し出し、首に縄をまきつけ、先端に大きな石を結び、両足先には木片をつけ、近くの沼にほうりこむ。

石の重みで美枝は、二本の脚をピンと垂直に立てたとみるや、ぐうんと水底めがけて吸いこまれていった。

これではいかにもがいても、顔は水面にでないし、しかも木の浮力のため、水底に逆立ちした恰好となり、なまじ泳げるだけに、美枝は無念であった。

(変なことするわね。武士の娘を溺れ死なすとは！どうして斬ってくれないの！)

やがて死をたしかめに、水練の達者がもぐってみると、上と下から引かれて、ただでも長い美しい頸が、更にながくのびている。完全に往生していたので、そこに刃をあて、ザツクリと首を切り離す。首のない身体は、木片のためなおも逆吊りのままプカプカ浮いている。

(くやしいッ！お盆にはきつと化けてでてやるから！)

三千代も無数の傷手を負ったまま放置されていた。なかば消えかかった意識、ぼんやり

とかすむ目に、同じく重傷をうけ、首をとられずにいる礼が、もがいているのを発見、手まねきしてにじりよる。もはやこれまでと、刺し違えようというのだ。

二人の死をまっている敵が面白そうにみつめる中、左手でお互いの襟をつかんでむき合い右手の短刀を相互の咽喉いめがけて突っこんだ。礼は食道・気管を断ち斬られて即死したが、力の弱っていた彼女の刃は、三千代を絶命させるには至らなかった。

(あら、ごめんなさい。でも、もうやり直しは出来ないわ。済まないけどおさきに……)

敵はまっていたとばかり、礼の首をもぎとったが、三千代はそのまま。

(まあ、ツイてないのね、あたしって)

三千代は崖まで這ってゆき、小刀を口にくわえると崖下めがけてとびおりた。柄が地面にあたった反動で、刃は延髄をつき破り、瞬時にして息絶える。

(ハイおまちどうさま。さあ、首をどうぞ)

山吹は最後まで健闘をつづけたが、いつのまにか味方は、佐知・お晴を余すのみ、彼女自身も疲労その極に達していた。

前方から斬りかかる刃はかわし得たが、続



いて左側からも斬りつけられ、これまた辛くもさけたものの、更に正面よりの刃は遂に受け得なかった。

無念の叫びと共に肩先から噴血をあげて、阿修羅の如く刀をふりまわしたが、手ごたえはない。しかも敵は例の如く、一気に斬り仆さず、できるだけなぶり殺しにしようというらしい。

(じらさないでよ。さっさと斬っちゃって)

佐知もまた無数の太刀をうけて、ガックリ膝をつくのが見えた。あとは絶命をまって、首をとられるのをまつばかり……。

(もうだめね。刀って案外に切れるもんね)

山吹は背後の木にもたれると、そのままズルズルと、しおれおちた。ちょうどその時、胴体をはなれたお晴の生首が、コロコロと、ころがってきた。

(おさきに失礼、あなたも早くいらっしゃいな。ご一緒にしませんか?)

それをぼんやりと認めたのを最後に、山吹は意識を失った。

“もういいだろう。首を打とうか”

“ほっとけ、まだくたばっていない”

好きなことをいう敵の話し声も、もう彼女の耳には入らない……。

幸代は、無念にも敵に捕えられ、大木の根本に投げだされた。地上には鮎美・照美・夏枝の生首がころがり、無惨な斬口をみせた彼女たちの胴体は、木の枝から逆吊り、いの吊り、エビ吊りとなっている。

向い側の木には、胴斬りされた下半身だけが、逆吊りのまま血汐を滴たらせ、上半身はとみれば、これは斬口をピツタリ地面につけて、胸像の如く立っている。美智であった。

幸代はこれら同僚の死を悼む余裕はない。彼女自身がなぶりものになっている。

石を布でつつみ、口にぎゅうぎゅうおしこむ。幸代は目を白黒させてあえいだ、かたいいましめにどうにもならない。

そればかりか、指で鼻をつまむ。呼吸がさまたげられ、苦悶のため乳房が、腹部が、ヒクヒクと波をうつ。

こんな風にして殺されるのは、幸代でなくとも有難くない。目から無念の涙がこぼれおち、顔色が暗紫色にかわってくる。

“もうよせ、くたばっちまうぞ”

仲間になしなめられ、やっと指をはなし、ひと息つく幸代に引導をわたす。

“お前は最高に苦しんで死ぬのだぞ!”

幸代が崖までつれだされた時、苦悶と恐怖をいっばいに浮かべた比佐が、首を落されたところであった。

(ああ、苦しかったわ! もう結構よ。そんなオヤツ)

横枝から縄が一本さがっているが、輪がないので絞首刑とは思われぬ。どんな目であろうだろう。

幸代はいましめをとかれ、いきなりどんと突きとばされた。身体が宙に浮いた瞬間、彼女は鋭い槍が十数本立っているのを認めた。血汐にぬれた穂先を上に向けて……。

グサリ! 哀れ幸代は串刺しになるかと思われたが、殆ど反射的に縄にしがみついて、その運命からは免がれた。

しかし手は、重量に耐えかね徐々にさがっていく。手を放したら最後、そのまま垂直に槍の上におちてしまう。

(ちよ、ちよっとのいてよ。私、悪いけど槍先は好きじゃないの)

遂に槍の先端が、柔らかな腹部の皮膚をプスリと食い破り、鮮血がタラタラと流れた。かすかな悲鳴をもらしながら幸代は、必死ですこしずつよじのぼり、辛くも穂先からは



なれたが、再びジリジリとさがっていく。

(嫌いだってば)

二度、三度。さがってはのぼり、さがってはのぼりをくりかえすうち、腹部の傷口は次第に数をまし、また大きくなる。

両脚に分銅がつけられた。いや、分銅ではない。美女の生首だ。比佐と美智の生首が、髪の毛で幸代の足首に結ばれ、彼女を槍の上に引きおろそうとしている。しかも、追加の生首も用意されている。

(生首って、ずいぶん重いよね。わたしの首もそうかしら)

遂に幸代の力がつきた。

幸代は自ら手をはなし、槍の上にまさしく垂直に、自分とふたつの生首の重さをかけるようにおちていった。

槍は幸代の腹壁をつき破り、胸腔に達するほど深くつらぬいた。

短刀の刃が、串刺しの幸代の咽喉にあてられたが、まだ掻き切ろうとはしない。

(ああ、わたしの死ぬのをまっているのね。確実にバイバイしなくちゃ、首をとってこないのね……いいわよ、意地悪！ イイイッだ)

数秒後、幸代の首は胴をはなれた。

山吹はただ果然と夜道を歩いている。すべての愛をささげた主君義仲はすでに討死し、同僚たちも同じ運命となったらしい。

ふと顔になにかふれた。人間の脚だ。二本の脚が宙に浮いている。若い美しい女性が、首を吊って死んでいる。よくみれば、同僚の美枝ではないか。しかも彼女だけでなく、木という木に美女が鈴なり。それをみても、自らくびれたのか、敵がたわむれに絞首したのか、考える余地もなく、ただみんな死んだのだな、としか感じなかった。

もはや何の希望もなく、自分の生命さえ何の価値もないように思われた。苦しい、疲れた、わびしい……種々の感情がせまり、それからのがれる、たったひとつの道だけが、ぼんやりと頭のなかにうごめいている。

山吹はなおもよろめくように歩いた。落ちていた縄をひろい、一方の端に丸い輪を作っている。何のためにそうするのか、自分でもよくわからぬのに。

いつのまにか崖にでていた。一本の木が、太い枝を長くつきだしているのを、山吹は呆然とみつめている。

ふるえる手をのびし、つきだした枝に縄を

結び、輪に首をさしこんだ。

ひとつ大きく息をつき、目をとじると、狂気のように地をけって崖をとんだ。

木の枝がぐうっと下方に傾き、縄がピーンと張った。おそろしい力が山吹の咽喉を、いやというほど圧迫する……。

ギャッ！

悲鳴と共に山吹は息をふきかえした。夢だったのか。気がついてみれば、わが身は、敵の酒宴の中央に横たえられている。

周囲をみわたせば、いずれも斬り放されてから間もなく、恨みをのこした美女の生首がズラリと並んでいる。その数はいうまでもなく十五個。哀れや、勝ち戦の酒の肴として眺められている。

大皿にのっているのは真知の生首だ。礼、三千代のは槍先に梟けられ、愛の生首を刀身に突き刺したまま舞っている武士。お克やお晴は枝から吊られている。祐美に至っては、さんざんけりとばされたと見え、辛うじてそれとわかる有様。

幸代の生首を髪の毛をつかんでぶらさげ、蒼ざめた唇に酒杯をおしつける。注がれた酒が、首の斬口から赤く染まってポタポタと滴



るのを、また盃にうけて飲んでゐる。

すっ裸にひんむいた胴体も、酒杯の台にしたり、腰をおろしてゐたり、さんざんな恥ずかしめをうけていた。

山吹は自分が、なぶり殺しにあうことを覚悟した。現にこんな声が聞えるのだ。

「さて、この子をどうしよう」

「両脚を二頭の馬に結んで左右に走らせ、股からピシリ！」と裂こうか」

「逆さに吊し、皆でユサユサゆすぶると面白い。目鼻口から血が噴きでておだぶつだ」

「棒に縛り、火にかざしてジリジリ焼くか」

「吊し首だつてすてたものじゃない。前に松枝の処刑をみたが、あのきりょうよし、涙や鼻汁やよだれを……」

聞いただけで、気が遠くなる話であるが、

侍大将の言葉は意外であった。

「くの一ながらよくやった。切腹はどうだ。」

見事に切るなら介錯してやろう」

山吹は夢かと思つた。義仲軍団にあつて、巴は中将、葵も准将格の將軍だ。この二人ならいざ知らず、下士官の自分が切腹など……しかも立派な武士が介錯する。こんな晴れがましいことになるなど、想像もしなかつた。

「有難うございます。お言葉に甘えます」

侍大将は実はからかつてみたのだが、真にうけた山吹は、膝をきちんと並べて坐り、渡された懐剣をしっかりとにぎつた。

（喜んで、自信ないわ）

内心、山吹は不安であつた。咽喉や心臓を突くのとことなり、腹を切るのは容易ではない。果して自分にできるかと。

だが、葵と共に死んだ小百合を見よ。収容された死体は、見事腹一文字、搔っさばいていたではないか。首がなく、その斬口をみると、感にうたれた敵が介錯したのであろう。小百合にできたことが、自分にできぬ筈はない。よし！ 思いきつてやってみよう！

山吹が懐剣を、いざ己れの下腹につき刺そうとした時、敵將は無造作に大刀一閃、その右手を斬り落した。

「あッ！ これは……」

（斬れないじゃない、どういう気？）

驚く山吹の、左手をたたき落しながら、冷たくいい放つ。

「巴殿や葵殿じゃあるまいし、たかが雑兵の身分で切腹など、身のほど知らんヤツめ」

悲鳴をあげるのをけたおし、両脚をもつけねから切断、胴体だけにしてしまう。

更に下腹を横にザクザクと切り裂き、おへソに突っこんだ刃をぐいと真下に……これで見、鮮やかな十文字切腹となつた。

おびただしい出血にかかわらず、山吹の顔は恥と怒りで紅潮していた。何かいいたげに唇がうごいたが、もう言葉にならない。

（なぜ切腹がいけないのよッ。巴様も私も同じ人間の女なのに。だますとはひどい、あんまりよ。キライ、だいキライッ！）

髪の毛をつかんで顔をおこし、ちよつとイカス、といった表情の敵將は、この時山吹がこと切れたのをたしかめ、ゆっくり首をチョン斬ると、ひろがった両脚の間にポイと投げすてた。

こうして山吹は、三人の女のうちもつともみじめな最期をとげたのだが、巴や葵の生首が結局は晒しものとなつたのに対し、彼女の死をあわれんだ村民たちの手によって、首と胴をひとつとつ斬口をあわせてたしかめたのち、ささやかではあるが情のこもった墓穴に葬られ、しばらくの間、香煙が絶えなかつたという。

（カット・桐原紫門）



## ゴムマニア・ストーリー

畏

(わな)

津田亜紀子

みよう」

☆

小淵流子は十時になると家を出て、いつものように冴子の家をたずねた。

「ああ、いらっしやい」

ブラウスにシューズという軽装で出迎えた冴子は、流子を応接間へ通した。

「まあ、これなあに？」

応接間の窓ぎわには、これみよがしにダーク・グリーンのゴム長ぐつが、長いゴムを誇示するかのようにつるされている。

「ああこれ、磯釣用よ。お魚つりに私よくいくでしょう、だから——」

「ずい分、大きいものね」

流子の目は、ゴム長ぐつに吸いついてはなれない。

「流子さん、私、今からどうしても駅に送っていかなくてはならない人があるの。一時間ばかり待っててくれる？」

「ええ、いいわよ。どうせ今日は一日のつもりで出てきたんだし」

冴子がかけたあと、流子はソファアーにかけて雑誌をよみはじめたが、視線はついゴム長ぐつの方へ向かってしまう。何回かためらった後、そっと立ち上った流子は、ゴム長ぐ

窓の外で鳴いている小鳥の声で目を覚まし

いたださえて

た冴子<sup>い</sup>は、けだるそうにからだを起こす

とサイド・テーブルの上にあるタバコに手をのばしてライターをつけた。紫色の煙を吸

いこんでふーっと吐きながら、冴子は天井を

眺めた。ベッドのわきにおいてある机と椅子

には昨夜から明け方にかけて冴子のひそやかな楽しみのパートナーをつとめたゴムの雨合

羽、水枕、円座、太ももまであるゴムの長ぐ

つ、ゴム手袋などが乱雑にひろげられたまま

になっている。

やがて冴子は、ゴム長ぐつに手をのばして

ベッドの中にいれた。グリグリと動く大きな

ゴム長ぐつは、魚つり用のダーク・グリーン

の表皮を艶やかに光らせ、またしてもお目ざ

めのためのお相手役となった。しばらくの後

ひたいに汗をにじませて、冴子は身を起して

立ち上った。浴室のドアをあけながら、冴子はフト考えた。

「そう、今日はこれを使って流子をためして



つに近よってなでてみた。

「まあ、ずい分なめらかなゴムだこと」

流子はホッとため息をついた。そして時計をみて

「あと一時間——」

ソファアーに戻った流子は、しかし又すぐ立ち上ってゴム長ぐつのそばへよった。次第に流子の表情が変わり、目がキラキラとかがやきはじめた。とうとう我慢できなくなったように流子は、ゴム長ぐつの片方をとり下して抱きかかえ、頬を寄せた。やがて、それを逆さにもって下げてみると、小柄な流子にはとても大きく思えた。流子は何かにつかれたように夢中になってゴム長ぐつの穿口へ脚をすべりこませた。ぬめるようなゴムの冷たい感じが、流子を更に夢中にさせた。片手で逆さにゴム長ぐつの足の方を持ち、もう一方の手で穿口を腰のうしろまで引き上げると、ゴム長ぐつは流子の両足の間を通過して、身体をつつむようになった。そこで、ぐっと両手に力を入れると、ゴムはピタリと流子の肌に喰いあった。ゴム長ぐつの足先だけが、奇妙な形で流子のおなかの前に突き出ている。「呀子さんが帰ってきたら大変だわ、早くやめなければ」と思いながら、そっとこのまままでい

たいという感じにおされて時間が流れた。

カタリとドアが開いて呀子が入ってきた。

まだ二十分しかたっていない。勿論、呀子は最初から、そのつもりだった。すばやく目を走らせて、ゴム長の片方がないのをたしかめながら、

「ごめんなさい、待たせちゃって」

流子は真赤になり、床にうずくまってしまった。

「あら、どうかしたの？」

呀子は内心のうれしさをおしくして、すましてたずねた。

「どうしたのよ、流子。のんきな人ね。おなかなんかおさえて。痛いなの？」

「……」

呀子は、手をのばして流子のおなかに触れようとすると、流子は必死になってその手をおし返した。

「へんな人ね、こんなところにしゃがみこんだりして……」

呀子が意地悪く流子の肩に手をかけて引き起すと、ガバガバと音がしてゴム長ぐつの足首が、流子のスカートの下からのぞいた。

「まあ、これ、どういうこと？」

「あの、あの、ごめんなさい」

「ごめんなさいって——流子、こんなものに興味があったの？」

「そうじゃないの。ついフラフラと——ごめんなさい」

「いやだわ、それならそうと早くいえばいいのに——」

「あの、ほんとに出来心なの。もうしませんから、かんにんして。人に言わないで——は——ずかしい——」

「ちょっと出してごらんよ、どういう風になっているの？」

「ハイ」

かんねんして流子は、ゴム長ぐつを引き出した。ダーク・グリーンのゴムは一そう艶を増し、ぬめるようなゴムの肌をみせていた。

「流子」

呀子は、きびしい声を出した。ソファアーにかけてショーツに足を包みながら

「これ、足にはくものよ、腹巻きじゃないわ。ここへもってきて私にはかせて——」

流子はゴム長ぐつをかかえて呀子の足もとにひざまずくと、呀子のすんなりのびた足にそれをはかせた。

「もう片方もよ。そして流子は、そこにお坐り」



太ももまでのゴム長ぐつをはき、吊りゴムで腰わきをとめた冴子は、わなにかかったねずみをいじめる猫のように舌なめずりした。流子はオドオドしながら、その前に坐った。「ほんとに流子は変った趣味ね。お友達に知らせたら、うけるだろうナ」

「それだけは——かんにんして、冴子さん。あなたのいうこと、なんでもきくから——」

「フーン」

冴子は立ち上って部屋を歩き廻りながら

「じゃ、私のいうとおりにするわね？」

「ええ、もちろん」

「じゃ、そこで着てるもの皆ぬいでごらん」

「えっ」

「裸になるのよ。いやならいいわ」

「いやじゃないけど——」

「なら、早くおしよ」

流子は、しかたなしに服に手をかけた。

「すっかりよ」

あきらめた流子は、冴子の前に服を抱えてうなだれた。

「服をおいて私の前にお坐り」

流子のうしろに立った冴子は、ゴム長ぐつをはいた足先で冴子の腰をぐっと押した。

「ああっ」

「なにいつてるの。ネエ、面白い遊び方があ  
るの知ってる？」

冴子は片足で調子を取り、片足の爪先をぐ  
っとこねるように持ち上げて、ぐりぐりと動  
かしながら、流子の身体を責めはじめた。

じっとこらえ身体を固くしていた流子は、  
まもなく責めをやわらげるためか、冴子の足  
先の動きに身体をあわせはじめた。

「流子、面白くなってきたらしいね」

冴子は冷笑するようにいった。流子は、す  
っかり冴子の尻にかかったようだった。

三十分ほど後、二人は向いあって椅子に坐  
った。冴子は、まだゴム長をはき、流子は裸  
のままである。

「どうだった？ 面白いお遊びでしょ？ こ  
れからは何んでも私のいうとおりにするのよ」

「ええ、そうしますワ」

「いい子だわ。そうすれば、お友達には秘密  
にしておいたげるから……」

と、冴子はゴム長を指さした。

「もう服をきていいでしょ」

「だめよ」

冴子は流子をにらんだ。

「あなた、何でも私の命令でするって今いっ  
たばかりやないの。そんなことじゃ、お仕置

しなきゃならないワ」

「あの、どうすればいいのでしょうか」

「ここへきて、床に坐って——こう足を前へ  
のばして——手はうしろでからだをささえる  
の。お顔をあげて大きく口をあけ目をつぶっ  
て——いいわね、何があっても動いちゃダメ  
よ。動いたら蹴とばすわよ」

流子の目をとじさせておいて、冴子は一旦  
長ぐつをぬぎショーツをとり、またゴム長ぐ  
つをはいた。そして床に坐っている流子の肩  
をまたいで腰を下ろした。流子の顔は冴子の  
ゴム長の穿口に挟まれる恰好になった。

「流子、わかったわね。始めは少しでカンベ  
ンしてあげるからね」

冴子の意図がわかったのか、流子は目をと  
じたまま、こっくりした。やがて流子ののど  
がゴクリゴクリと鳴りはじめた。

それから後、二人きりのときは、いつも流  
子は冴子の召使いとなり、冴子のために奉仕  
することになった。そして流子は、その奉仕  
に対するおめぐみとして、ときどき冴子にゴ  
ム長ぐつで責められるのを無上の喜びとする  
ようになった。

勿論、彼女たちの友達はだれも知らないこ  
とだった。



ニューモデル新趣向力作緊縛写真案内

Y字型宙ハリツケ

大手札四枚一組 略号五〇〇円  
左近麻里子 略号八ちねV  
両腕を高々とYの字に広げて柱にハリツケられた麻里子の美しいプロポーションを正面斜両側面背面から宙縛りで見せします。

開股逆さ吊り姿態

大手札三枚一組 略号五〇〇円  
左近麻里子 略号八ちてV  
両脚を大の字に思いきり開けて足首を鴨居に縛られ後手縛りのまま逆さ吊りになった左近嬢の美しくも無残な姿をのぞいて下さい。

強烈菱縄柔肌縛り

大手札四枚一組 略号五〇〇円  
左近麻里子 略号八ちやV  
豊かに息づく両の乳房、可愛いお臍を中心にして強烈な菱縄縛りで柔肌をいためつけます。

豊満な臀部への責

大手札四枚一組 略号五〇〇円  
左近麻里子 略号八ちみV  
豊かさは両の乳房ばかりか恰好のよい双丘も又適度の膨隆を見せしている。この双丘を最もあらわに見せた縛り方で魅力を発散。

猪吊りの滑車責め

大手札四枚一組 略号五〇〇円  
左近麻里子 略号八ちつV

両手首両足首を揃えて一つに括り滑車できりきりと吊り上げれば豊満な女体は完全に宙吊りとなつて一本の縄を中心にして回る。

悶々たる尻立縛り

大手札四枚一組 略号五〇〇円  
左近麻里子 略号八ちなV  
シミ一つない豊かな尻を突っ立てた女体はライトに白く輝く。

股間立縛りの表情

大手札四枚一組 略号五〇〇円  
左近麻里子 略号八ちすV  
首、胸、胴と横縄を掛けながら女体の中心を縦に割った股間縄で完全に緊縛された正面の立像。

全裸立縛りの表情

大手札四枚一組 略号五〇〇円  
左近麻里子 略号八ちさV  
一糸まとわぬ真白な裸身にむごたらしく喰い込む黒い麻縄姿で暫し佇立する若々しい立像。

豊満緊縛のあえぎ

大手札四枚一組 略号五〇〇円  
左近麻里子 略号八ちにV  
首縄股間縛りで床の上に身を投げだしたムチムチとした若い女の肌が目の前で艶に躍動している。

緊縛と柔肌の交錯

大手札四枚一組 略号五〇〇円  
左近麻里子 略号八ちこV

抜けるような白さの肌にゴツゴツとした麻縄の喰い込む奇妙なコントラストの醸し出す雰囲気。

投げだされた裸女

大手札四枚一組 略号五〇〇円  
左近麻里子 略号八ちくV  
両手首を厳しく背中括られて身動きの出来ない裸女が椅子から転落して床に投げだされた。

渾美表と裏の二態

大手札二枚一組 略号三〇〇円  
左近麻里子 略号八ちけV  
白の六尺褌をキリリと締めた女性の前面と背面の二態の美しさ。

美女の鼻を弄そぶ

大手札四枚一組 略号五〇〇円  
左近麻里子 略号八ちるV  
美しい麻里子嬢の鼻の頭を指の先にてめくり上げ、鼻の穴の奥までをさらけ出した弄鼻の表情。

美女の鼻孔を観賞

大手札四枚一組 略号五〇〇円  
左近麻里子 略号八ちれV  
女性の鼻ファンのために特に新鮮な左近嬢の可愛い鼻をかりて鮮鋭なピンポイントによって鑑賞願う。

開孔器で鼻腔検査

大手札四枚一組 略号五〇〇円  
左近麻里子 略号八ちきV  
鼻の孔を開孔器で押しひろげて腔内をのぞき込もうとする有様をいろいろな角度から狙った。

開股拷問椅子正面

箱第十四号

中河恵子 略号五〇〇円  
この羞恥の椅子は露出好みの恵子嬢にとつては嬉しい拷問の椅子でありSファンのとつては、脚大の字開きの垂涎の作である。

甘美な椅子プレイ

大手札四枚一組 略号五〇〇円  
中河恵子 略号八あV  
全身をしばれさせる甘い陶酔はこの悪魔の椅子に縛られたときから襲ってきた。今や羞らいたも忘れた彼女は大胆なポーズをとった。

のけぞる痛打の果

大手札四枚一組 略号五〇〇円  
関谷富佐子 略号八なちV  
乱打するムチによる反応は驚くほど敏感で全身を戦慄させ顔をのけぞらせて悦ばれむせび泣く夫人の真に迫った表情を把握した。

臀部に炸烈する鞭

大手札四枚一組 略号五〇〇円  
関谷富佐子 略号八なつV  
肉づきのよい固ぶとりの丸々とした臀部にブチッブチッと快い手ごたえと共に皮鞭が炸裂し、白い肌はミミズ脹れがふくれ上る。

痛打による表情集

大手札四枚一組 略号五〇〇円  
関谷富佐子 略号八なてV  
関谷打による豊かな苦悶の表情を各角度から狙いをつけ、その美しい残酷のムードをふりまく。

お申込みは、大阪阿倍野局私書箱第十四号——箕田京二へ



☆総天然色華麗美女緊縛極鮮明フオト

柱縛り強烈ムチ打

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

関谷富佐子 略号(みあ)

高小手に縛り上げた縄尻を柱につなげた夫人の臀部に太腿に皮ムチが乱打され、白い肌が忽ち真紅に縞模様を描くのをカラフオートによって見事に把握した。

臀部に炸烈する鞭

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

関谷富佐子 略号(みこ)

膝頭と頸とを連結されて豊かな臀部を高々と突き立てたポーズであらわな双丘に激しく炸烈する非常の鞭。柔肌はむごたくしくミミズ脹れとなるところを色彩で。

笞にのけぞる女体

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

関谷富佐子 略号(みけ)

一打又一打、力まかせに揮うムチは肥り肉の肌に鈍い打撃音を残して狂う。その度に絶妙の悲愁の表情を顔面に漂わせて、カラー写真の迫力が最高度に発揮される。

苦悶する女の表情

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

関谷富佐子 略号(みて)

鞭に喜悦し笞に感泣した夫人は今や立っていることも坐っている

こともかなわず、畳の上にどたりと転って、その美貌に涙を浮べて喘ぐ表情を色彩で鮮明に捉える。

鞭に泣く美貌の女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

関谷富佐子 略号(みも)

ムチ打ちの連続は今や女体に対して激しい痙攣を呼び起し、伸ばしきつた脚は、爪先に至るまでブルブルとふるえ感激の極に達している。涙の女の表情を彩る。

転り回って泣く女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

関谷富佐子 略号(みひ)

白い肌はムチ痕で真紅に染まりカラで素晴しい色彩を見せ、ける夫人は、余りの痛苦にムチを避けて畳の上をころがりまわって泣き喚き迫真の表情を見せている。

鞭に喘ぐ全身表情

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

関谷富佐子 略号(みの)

ふり乱した髪、のけぞる顔、喰いしばった唇、乳房もお臍も打ちふるえて鞭の恐怖におののいて、びつつ喘ぐ素敵な色彩の姿態。

高小手の全裸身

大手札三枚一組 一〇〇〇円

中河 恵子 略号(なゆ)

ピンク色の若々しい全裸の肌に、手首を高く背負ったまま、両の手の恵子の緊縛姿態が華やかな色彩写真で皆様の身近かに待る。

豆絞りに輝く美貌

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

中河 恵子 略号(なめ)

豆絞りの猿ぐつわをきりきりと噛まされた恵子の美貌が胸に掛った高小手縛りによって一層の哀愁と残酷味を漂わせ、乳房と乳首と色彩がまことに可憐である。

赤い絨氈に悶える

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

中河 恵子 略号(なさ)

或は伏臥、開股縛りに逆エビ縛り、或は伏臥、開股縛りに逆エビ縛り、の魅力に憑かれたマニアに捧ぐ。

豊満な臀部を晒す

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

中河 恵子 略号(なし)

彩で、その女体の陰翳を微細に表現したカラーフオトは、美しい恵子嬢の全裸のすべを、他に見られない緊縛姿態として提供する。

美しき緊縛の立像

大手札三枚一組 一〇〇〇円

左近麻里子 略号(なひ)

新鮮な魅力と美しさを持つ左近嬢の緊縛の全身をカラーの豊富な色彩の画面で、まるで自らがその場面に立ち合っているように感じることが出来る素晴らしい立像。

転落寸前の緊縛女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

左近麻里子 略号(なも)

後手に縛られたまま、椅子の上から床へころがり落ちようとする女体の微細な変化を色彩によって一層多様に描きだえ、肌を喰い込む縄目のむごたらしさを強調する。

椅子に羞らう美女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

左近麻里子 略号(なす)

赤いクッションの黒皮の椅子の上、縄に縛られて羞らう美女の身をピンクに染めて、今やその均斉のとれた美しい肢体を足の爪先に至るまでとく御覧に入れる。

緊縛裸身を横える

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

左近麻里子 略号(なえ)

華やかな背景の中に後手に縛られた真白い裸身が縄目に悶えて、捻じらるようなくねらせ、縄に羞の色彩感覚によって迫ってくる。

◎お申込みは、大阪市阿倍野郵便局私書箱第十四号、箕田京二へ。





八月号で拝見しました。京都の岡村美和子様、誌上をお借りして通信させて頂きます。私は二十六才になりますが、ずい分長い間、といっても六年ぐらいですが、今から四年ほど前に一女性とプレイしたことがございます。写真はその時はとらずにいましたが今から考えると残念でなりません。色々の雑誌やその他の方法で手に入れた写真は多くはありませんが、持っではおります。貴女は写真に写されるのを望んでおいですが、多分、ここへ投稿されるのには勇

気を要したと思います。しかし人間、同じ悩みを持つものと話してみたいと私も考えた末、通信を出した次第です。お便りは誌上でお待ちしております。(大阪・岸田信次)

岡村美知子様、綾研二です。編集部から、読者通信は短くまとめるように、と指示があったばかりです。七月——盛夏の宵を浴衣姿で夕涼みする貴女の新鮮で艶やかな姿が目につくかぶようです。その貴女が、やがて静かな自分だけの時間に入ったとき緊縛の魅惑、妄想にやるせなく、ただでさえ寝苦しい夏の夜が一層つらく、貴女をさいなむのではなからうか。同好の方を求めることも、自分でプレイを行うことも出来ず、同性の緊縛フォトを見ることが自分を慰めるだけです。おっしゃる貴女の切なさがよく解ります。私も貴女と同じように、お手紙を下さったりフォトの交換など考えて下さる方の、あらわれることを祈っています。(四二年五月号、雪の中のフォト)と申しあげました。そして今月号で、せめて写真の交換だけでもと願う貴女の通信を拝見して早速ペンをとりました。さて岡村

さん、写真をお送りするには如何しましょう。局止めとか、編集部にお願いして経由にして貰うとかその方法をもう一度この欄にお便り下さい。それがわかりましたらすぐに、雪の中の緊縛フォトをお送りします。私からのフォトが届きましたら、フォト裏面に書いてある住所によって、綾研二宛に直接お手紙下さい。西と東に遠くはなれているから、私は、このお便りを差しあげました。また、はなれてはいるからこそ、フォトの上だけでも仲よしになれると思うのです。幸い、私は緊縛写真を写してくることが出来ました。その中の貴女の好きな乳房責めなど貴女のために、お送り出来ることを待っています。(綾 研二)

八月号、二五四ページに記載の「かわむら生」様お便り差し上げます。住所から見ると同じ市内の方と思われそうです。お呼びかけいたす次第です。内容から見ると、僕よりうんとお年をめしておられる方と思われそうですが、僕と仲よしになっして下さい。年令こそ差はあれど、同じ同好者、又同じ市内、お話しがしたいし、ぜひ会いたいと思います。僕は市内の会社につと

めております。この通信ごらんの節は次号にお返事下さい。お待ちいたしております。呼びかけたり返事したりしている中に二カ月や三カ月は過ぎてしまいます。そこで勝手なことを申しますが、次号拝見次第、すぐお会い出来るように市内の駅でもバーでも貴方のよろしき所へ呼びだして下さい。かまいません。何月何日、所、時等指定下さい。僕の方からの希望は土曜日から日曜日の午後五時—七時がよいのですが、書きたいことは山ほどあれど、お会い出来ることとして、その時は心ゆくまで語りあいましょう。次号のご返事、首を長くしてお待ちいたしております。(愛知・南利明)

カメラハント、カメラルポ記は毎号素晴らしい。小説にはない現実の生々しさがにじみ出ていて、大いに参考になる。只慾を云えば皮具責め、枷責め等も行なっている。小生四十五才、妻を緊縛しても反応なく、あきらめて今まで二人の若い女性と月二回ぐらいプレイをして来たが、二人目の彼女も家庭の事情で別れた。夫婦プレイの出来る人は羨しい限り。彼女も始めはカメラハント記を見せつ



けられて「こんな女の人って本当にいるかしら」等といって好奇心で読むうちに、いつしか奇巧を私にも買ってくれとせがむようになり、遂には私に「縛ってくれ」と恥じながらいうようになるから妙である。東京都内でM女性の人、私とプレイする方いませんか。辻村、山本両氏の健筆を祈る。

(東京・大久保新)

○ しばらく御無沙汰致しました。

前川様、室井様のすばらしい挿画のお蔭で、私の拙文もいくらか恰好がついたようです。九月号、短信往来の福原実様、おほめの言葉ありがとうございます。シロウトの私にとっては、一人でも二人でも喜んでくれる方があれば嬉しいのです。いろいろ御注文がありました。したが、これらには前に書いたものがあつたり、その部分をカットされたりしているのです。私と相棒の佐出須登の作品、十三人の女死刑囚が始めて登場したのは三十八年の十一月号からですが、お

読みになられたでしょうか。バスに沈められ溺死する女性、両脚をつかまれ泥田の中に逆さにつつまれる美女などが現われるのです。……現在、酷連の死体処理員の話として一作、ものにしようと思っております。末筆になりましたが、黒淵様の「日本婦人部隊奮迅録」面白く拝見しております。今後とも美女を続々あの世に送るようお願いします。(黒田 寿)

○

皆様、お暑い日が、毎日続きます。小生、奇巧を愛読してより早や十年ぐらいになります。ほとんど毎号、手にして、古い旧号も、中でも気に入ったのは数年、保管し、時折眺めては悦にいつています。さて八月号では、告白(高村初子さまのもの)がよかった。私は告白ものが大好きです。S、Mのもので細い点まで書いてくれるものが大好きです。その点「花と蛇」は告白ではないが、細く書いてあるので大好きです。作者も上手ですが……。先日、S市の肛門の上、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号箕田京二宛御予約下されば完成次第第一号を直ちにお送りいたします。

## ◎分譲品総目録◎

分譲品満載の豪華な目録を只今作成中です。切手五十円同封

科病院で診察のことですが、浣腸後、W・Cへ行くようにいわれ、W・Cは診察室の中にあり、W・Cに看護婦さんはいってきて、「用を足したら、この鐘を鳴して下さい。先生が直ぐきてくれます。なりすから」といいました。そして先生が私のつき出したお尻をよくごらんになり、直ぐ診察室のベッドに寝かされました。女性の患者も半分ぐらいいて、女性の時もやはり同じような診察をされるのだろうか……と思うと、色々空想し、その夜はねむれませんでした。読者の皆さんも、診療経験などありましたら、ぜひお知らせ下さい。又、小野田順子さまは、その後どうなさったか、誌上へ載せて頂きたいです。あの方のモデル写真を見たいのです。では皆さまのご精励を心からお祈りします。(静岡・藤井正好)

○

神戸の山下和子様、九月号の通信、拝見させていただきました。私も浣腸とおむつに興味を持っていました。おむつを知ったのは十八の時で、それと一しょに浣腸にも興味を持つようになりました。しかし、まだ女性のマニヤの方はだれ一人知りません。そこに貴女

の通信を拝見し、大変うれしく思っています。でも私は、貴女のように朝夕プレイをすることができません。ですから、貴女がとてもうらやましく思えてなりません。せいぜい週に三、四回といったところ。それに、おむつなども二枚ほどで、浣腸器も五十CCが二本あるだけです。ですから三百CCなどというのは、まだ見たこともありません。是非一度、拝見したいと思えます。私は二十三才貿易会社に勤めております。

(東京・河合一男)

○

私は中年の独立セールスマンです。外見的には極めて男性的で、仕事上は勿論、男性的にバリバリ活躍しております。しかし私はMの傾向があります。性格の強い女性に、言葉で種々命令されるといったことでなく、実力で女性に征服されたいのです。畳の上のように倒され、女性と格闘の上、引き倒され、馬乗りになり組み敷かれてしまうといったプレイです。そしてどんなにジタバタもがいても跳ねかえせず、組み敷いたまま上からゆうゆうと見下しながらギューギュー責めつけ、一時間でも二時間でも気のすむまで馬乗りを楽し



むような残酷なSの女性とお話しをしたと思います。私は毎月、十四日と二十八日は、新宿歌舞伎町のコマ劇場近くのマンモスパー王城にて午後七時から八時まで飲んでおりますから、呼び出して下さい。御一しよに飲みながらS・Mのお話しを致しましょう。

(東京・青木雄三郎)

私は途中購入不能がわずかりましたが、足かけ十三年の愛読者です。他の雑誌では、こんなに継続して読んだものはありません。本誌は私にとって非常に魅力ある雑誌だということになります。読まして頂いたのは長い間ですが、告白記を投稿したのはまだ一回きりです。今のところ私の趣味は女性の足くすり責め、吊り責め、特に逆吊りです。ただ縛るだけでは物足りなく、擦ったり吊るしたりしないとプレイの気分がでません。北海道の山下洋子さん、その他このような趣味の方、御連絡下さい。本誌の内容についても、小説や創作より事実のことが好きです。だからカメラ・ルポとか、体験記等を多く掲載して頂くことを希望します。最近、読者間の連絡同好会、写真交換等を希望する方

が多くなりましたが、皆思うようにいかなかったお困りのようです。そういう方々、よろしかったら私のところを連絡取次場所に利用下さっても結構です。ただし双方からの連絡がないと取次ができませんので為念。秘密厳守の点については御心配なく。電話〇七九八―四一―四六八二、比左良守を呼びだして下さい。不在のときは連絡先を告げておいて下さい。最近号で特に気に入ったのは、大島照代さんのルポ、小竹一浩氏のSM日記で、何れも逆吊りがあるからで小竹氏と同様、私も逆吊りが最高のプレーポーズと思っています。同好の皆様、互いに協力して本誌の発展に各自の趣味のために、がんばろうではありませんか。

(西宮市・比左良守)

編集長さまには何かと毎日お忙しいことでしょう。私は東北の蔵王山のふもとに住んでいる一女性です。奇巧は三年前から愛読しております。縛られた女性の絵や写真を見るのが大好きです。今のこの手紙を奈美江の拷問部屋で書いています。拷問部屋と自分で呼んでいる誰も入ってこない離れの物置きを改造して奈美江の住居にし

大手札印画紙焼付

〔緊縛女体美のシリーズ〕

両手吊りに悶える女体

大手札印画紙焼付 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もえ▽

強烈なる甘いムチの洗礼

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もゆ▽

ムチに狂い哭く美貌の夫人

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もよ▽

半吊りでムチ打つ

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もす▽

逆エビの味に感泣する

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もせ▽

ムチの一打に反りかえる

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もれ▽

関谷夫人の女体陳列

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もる▽

尻立ての鞭撻ポーズ

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もて▽

片足吊り挙げて喘ぐ

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もな▽

私をムチ打って頂戴ネ

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もね▽

脂ぎった女体を縛る

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もむ▽

鞭は柔肌に炸烈する

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もう▽

滑車吊りに甘い鞭

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もき▽

両手万才吊りに鞭打ち

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もこ▽

狂う鞭に哀切表情の夫人

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もみ▽

浴後の剣玉子縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河恵子 略号△はゆ▽

投げだす白い緊縛裸身

大手札四枚一組 五〇〇円  
中河恵子 略号△はよ▽

待望の脚挙げ緊縛姿態

大手札四枚一組 五〇〇円  
中河恵子 略号△はて▽

二つ折り女体エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河恵子 略号△はお▽

柱の前に緊縛された全裸

大手札四枚一組 五〇〇円  
中河恵子 略号△はの▽

神妙なプレイ寸前の女身

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河恵子 略号△はひ▽



ています。他にこれといった趣味のない私にとって奇クを愛読することと拷問部屋を飾りつけることが唯一の楽しみとなっておりま

す。田舎に住んでいますので奇ク

○

の旧号も中々思うように手に入りませんが、それでも見つけたときに買い求めて、角がすりきれるまで読みふけております。それから編集長さまにお願いが

から取り出しては楽しんで読んでおります。私の半生にこれほど楽しみを与えてくれた雑誌はないと思います。案外、奇クの価値というものは世の中に認められておりませんが、これから何年経ったなら、又その真価が認められるのではないかと思

(老愛読者)

○

ファンの皆様今日は。小生も奇クの愛読者です。独身時代は雑誌とグラビア写真のスクラップ等相当ためておりましたが、結婚しました折、皆処分し新婚時代は暫く中断して居りました。然し日がたつにつれて再び読みたくなり最近になって妻にかくれて内緒で奇クを読むようになりました。小生はMの女性に大変憧れて居ります。縛られた女性の何ともいえない愛らしさ。御夫婦の方で思うままにプレー出来る方は何んという幸せでしょうか。そしてきっと生活にも張り合いがあることでしょう。こういう御夫婦の方を小生は本当に羨ましく思い、それにひきかえ、現実の自分を嘆いて悶々の日を送って居ります。小生は結婚することによって、自分の性癖が変

開股縛りに喜悦する女	大手札四枚一組 中河 恵子 略号 八はわ	五〇〇円	悶える猿轡の裸身	大手札三枚一組 関谷富佐子 略号 八へも	四〇〇円
全裸の女体立ち縛り	中河 恵子 略号 八はわ	四〇〇円	ムチ打ちの陶酔境	大手札三枚一組 関谷富佐子 略号 八へさ	四〇〇円
黒縄は白肌を酷に彩る	大手札三枚一組 中河 恵子 略号 八はふ	四〇〇円	両手吊りで痛める女身	大手札四枚一組 大島 照代 略号 八へし	五〇〇円
悦虐に身もだえる美女	大手札四枚一組 中河 恵子 略号 八はあ	五〇〇円	後手縛りの竹棒責め	大手札四枚一組 大島 照代 略号 八へす	五〇〇円
菱縄は白肌をくびる	大手札三枚一組 中河 恵子 略号 八はう	四〇〇円	強烈開股強制縛り	大手札三枚一組 大島 照代 略号 八へせ	四〇〇円
柱に立縛りでさらす	大手札四枚一組 中河 恵子 略号 八はさ	五〇〇円	両手吊りであえぐ女体	大手札四枚一組 大島 照代 略号 八へゆ	五〇〇円
卓上の開股羞恥責め	大手札四枚一組 中河 恵子 略号 八はめ	五〇〇円	竹棒強烈開股責め	大手札三枚一組 大島 照代 略号 八へた	四〇〇円
無防備の女体を開陳	大手札四枚一組 中河 恵子 略号 八はし	五〇〇円	厳しき緊縛の正坐責め	大手札四枚一組 大島 照代 略号 八へち	五〇〇円
遠山静子夫人の立縛り	大手札四枚一組 中河 恵子 略号 八はも	五〇〇円	責めの魔手に屈伏する	大手札四枚一組 大島 照代 略号 八へつ	五〇〇円
若妻の魅力を発散する	大手札三枚一組 関谷富佐子 略号 八へむ	四〇〇円	竹棒の胴絞め責め	大手札四枚一組 大島 照代 略号 八へて	五〇〇円
後手縛り全裸身の魅力	大手札三枚一組 関谷富佐子 略号 八へめ	四〇〇円	竹棒開股胴絞め縛り	大手札四枚一組 大島 照代 略号 八へと	五〇〇円



化するか、或は妻が簡単に自分と同調してくれるものとばかり安易に考えておりました。然し現在の妻は一向にそういう理解もなく又理解しようとしませんでしたので、小生はいつも孤独をかこっている始末です。独身の頃、被縛者の苦痛の度合と緊縛の方法を考えるため自分の体をモデルに色々と試してみたことが有ります。文字通り自縄自縛でしたが後手に括った縄がゆるまず（足は始めから緊縛してあり絶対にゆるまない）一時間ぐらいもがいたことが有り、先ず効果は九十%と自ら悦にいったことが有ります。只今の小生はただ一度だけでもいい、只話し合うだけでもいいからMの女性とめぐりあいたいもの、と日夜念じて居ります。もしそういう女性とめぐりあうことが出来たら、その女性に対して天女の如く崇めるでしょう。誰方でもかまいません、年令も問いません、小生のため一言でも話しあってやろうという博愛精神のある方の出現を、小生は伏してお願い申し上げる次第です。

（茨木県・森本博）

○ 奇ク愛読者の一人として益々の御発展よろこび申し上げます。最

近はMの分野がまことに佗びしく残念に思っております。すべからくMの新分野の開拓を企って頂きたいものです。昨年十二月号で田代俊夫氏が述べておられた「M雑感」はまさに我が意を得たもの。徹頭徹尾同感の意を表します。M愛好者として「尻敷き」のたぐいも大いに結構ですが、もっと新味を盛られたら如何。例えば人間（男）ばかりでなく小動物のたぐいをいたためつける場面を入れることです。グラマー女に踏みつぶされる蛙（それもプリプリ肥った赤がえる）白い太腿にはさまれて圧殺される犬ころ。握りつぶされる小鳥等々は如何。必ずや世のM連の嗜好を満たすものと考えます。これら小さい犠牲者の可憐なしかも断末魔の絶叫が聞えませんか。まさに生命を奪われんとする時の彼等の訴えるような眼の光はどうでしょう。奇クにかかる新機軸をとり入れられるよう切に希望するものです。

（田部正一）

○ 梅雨が季節の上で終ろうとする頃になって、この頃、雨がよく降ります。今日も朝から雨で帰宅まぎわになってから一層降りがひどくなってきました。事務所の窓か

ら見える御堂筋のいちょうも、連日の雨で青々と元気よく葉をのばしています。五時前だというのにあたり一面うす暗くなっているでスモッグでもかかっているようです。私は田舎の高校を出て三年になるOL。この頃、大分仕事にもなれて退屈してきましたが、これといったボーイフレンドもないので、一人淋しく夕暮の御堂筋を散歩したりしています。三月ほど前から、好奇心で御誌を読みはじめ何かしら共感めいたものを感じて

います。すばらしい男性があらわれて、私を縄つきでさらってくれないかしら等と空想しています。SとかMとかいっても、何にもわからぬのですけど、自分が縄や紐で縛られる、と思っただけでは、何んだか胸があつくなくて、わくわくするようなんです。で、中河恵子さんの文章なんか、凄いなあと大変ひかれてしまいうんです。一度お姉さまに逢って話してみたい。お友達もなくて淋しい悦子に、何んでも教えてほしいなあと思ったりしています。映画も時々一人で行きますが、雑誌にのっているような責めの映画に連れて行って下さる方っていないかしら。今、悦子、一人っきりのので

とっても淋しい。はじめてのお便りに、こんなこと書いてごめんなさいね。

（大阪・森田悦子）

○ 私は今年二十三才になった調理人です。私が奇クを読み始めて既に二年余りになります。今では全く奇クのとりこになってしまいました。毎月奇クが発売日が近づくと妙に胸の高鳴りさえ覚えます。今私はせまいアパートの一室に居りますが、室の本箱には奇クがずらりと並んでおります。私の友人も奇クの大ファンで、奇クを読み始めたのは私よりも早く、旧号も沢山持っています。だから休日などは彼の所へ遊びに行き旧号も愛読しております。先日、彼の所で限定版写真集を見せてもらい実にすばらしいと感激しました。今後共益々充実した奇クをお作り下さるよう皆様の御健康を御祈りしてペンをおきます。

（大阪・陸奥隆）

○ 水野香代夫人の分譲フォトを是非実現して下さい。四月号のカメラ・ハントで、その見事に肥った美しい肉体を見せてくれた夫人、その後いつかは分譲写真にと待ちこがれている一人です。種々の事



情（水野氏の承諾等）もありました。ところが、中年のむっちり肥った女性を思いきり責めたポートを望むファンもかなり多いと思います。七月号の本欄での東京の外野勤氏の様に、必ず実現を希望しております。三十才を少し過ぎた位の中年のでっけり肥った女性、十七、

### 秋山夫妻残酷ショー写真

逆エビに狂い泣く女

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

ローズ秋山 略号 (たな)

髪吊りに悶える女

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

ローズ秋山 略号 (たに)

黒髪をふり乱して

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

ローズ秋山 略号 (たね)

股間縛りを熱演する

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

ローズ秋山 略号 (たの)

女馬を調教する男

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

ローズ秋山 略号 (たか)

尻帆立て縛りの実演

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

ローズ秋山 略号 (たき)

秋山式縛りに喘ぐ女

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

ローズ秋山 略号 (たけ)

熱帯は柔肌を焦す

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

八貫の豊満な肉体と若い中肉の女性との斗い、はげしい女斗美にたまらない魅力を感じます。そんな夢の実現が水野香代夫人の登場によって満たされたら、と一人思い悩んでおります。それから山原清子さんの女斗美の新しい企画をお待ちします。（京都市・左藤朗）

ローズ秋山 略号 (たあ)

鞭と羽毛の操り責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

ローズ秋山 略号 (たら)

早縄術を披露する

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

ローズ秋山 略号 (たお)

急所縄に慟哭する女

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

ローズ秋山 略号 (たそ)

熱気を帯びた実演

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

ローズ秋山 略号 (たさ)

強烈な緊縛プレイ

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

ローズ秋山 略号 (たし)

弄られる緊縛女体

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

ローズ秋山 略号 (たす)

鞭と縄に追われて

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

ローズ秋山 略号 (たむ)

◎お申込みは、大阪市阿部野局

私書箱第14号 箕田京二へ

○

昨年よりの貴誌の愛読者、従来近所の書店にて購読していましたが、近頃店を閉めてしまいました。もしお差支えなければ大津か水口あたりで貴誌を発売している書店がありましたらお教え下さい。小生、当年二十五才の一流メーカールの社員です。勿論、独身です。自分ではごく真面目な人間つもりですが少しS派がからいます。もし同好の女性のペンフレンドがいれば、この人生はもっと充実した楽しい生活が出来るのではないかと思います。初めてであつかましいですが、毎月貴誌を読んでいると何か同好の人と一面識もあります。よく知っている人のような感じがしてくるのが不思議です。では最後にますます貴社の隆盛とキクの発展を謹から望んでいます。（滋賀県・水口生）

○

本格的な梅雨期に入り嫌な毎日が続いて居ります。貴社益々繁栄の事お慶び申し上げます。さて先月二十六日、何度か買って常連になつて居る近くの書店へ行つた所が、一日違いで売れ切れたとの事残念やら口惜しいやら、それと共に、こんなにも愛読者が増加した

○

ことを身を以って知らされました。昨日の休日は、わざわざ電車に乗って布施の書店を探して参りましたが、すでにどの店も売切れたとの事、全く徒労に終わりました。今迄過去五年間、本誌を愛読しておるものですが、発売日より四、五日間は一、二冊は売残って居たものです。本屋さんの話によると最近（といっても三月程前）急に愛読者が多くなり発売当日に売切れる事が多いそうです。又、私の住む八尾地区は入荷日が一定せず、二十五日を境にして三日程遅れる事も有りますので油断しておりましたら、遂に八月号を買い損いましたので、これからは入手を確実にしたいと思ひます。

（大阪・柏原靖夫）

○

本格的な暑さを目前にしたこの頃ですが編集部の皆様には御元気に御活躍のことと思ひます。同好の皆様は如何ですか。暑くなる、どうしてもプレイ意欲がにぶりますね。ノースリーブのため、高手小手の緊縛も手加減せざるを得ないし、プレイの幅も必然的にせまくなつてしまいます。辻村、山本両氏の競演は実に興味深く毎号読ませて戴いていますが山本氏



は氏自身の個性が強く浮き彫りになってしまいい、ともすればマンネリ化の危険をはらんでいるように思えてなりません。毎月のこととて、そろそろ楽しみの中に多少の苦痛を覚えてきた頃と思うのですが、プレイの内容もフォトも、もう少し変化のあるものにして戴けたらと考えています。勝手なことを書きましたが、辻村氏と共に奇クのパックボーンとして永続して下さるよう念じています。昨年後半（七月十二日）のフォトストーリー、私の「S M日記」（四月号掲載）を書いてから、はや半年を経ようとしている六月も、あと数日を残すのみなので、七月に入ったら四十二年度上半期のプレイより選んで又書き綴る予定ですが大分御無沙汰しましたので今日は二葉のフォトを同封してお便りしてみたい次第です。（小竹一浩）

○ 小生は二十六才の独身者で平凡な会社員です。もう四年余りになります。貴誌を愛読しております。御多分に洩れず、四年余り前の或る日、古本屋にて貴誌を見つけてからのことで、それ以来、今日まで読み、且つ見てきました。その頃から、すでに一般書店には

あまり見かけることがなく、しかたなしに、あちこちの古本屋をさがし歩き、一カ月あるいは二カ月おくれのを買いあさりました。今では、そのさがし歩くことに喜びを味わうようになりました。他の雑誌類に混って、ひっそりと待っていたてくれた「奇ク」をさがしあてたときの感激は、ほんとうに筆舌には表わせぬものです。やっぱりきてくれたのね。他の人に見つからぬように一生けんめい隠れていましたのよ。そういつてくれるような気さえします。内容も月も見ずに代金を支払って店を出てから、前に買ったのと同じものであったのに気づいたこともありました。今までも何度もお便りを出そうとしたのですが、何だか気遅れしてしまいい。ポストに入れる寸前に破り捨てたこともあります。気遅れがすること自体、まだ「真の奇クファン」ではないのかも知れませんが、他のどんな雑誌書籍よりも奇クを愛しているつもりなのです。私は、プレイに対する経験は皆無です。今から考えると、そういう機会もあったように思えるのですが、生来の気弱さから、ミスマスのがしてしまったようです。ですが近い将来、結婚す

れば妻に対して必ず実行しようと思秘かにファイトをかきたてております。容貌は、少しぐらいますくても、太りぎみの体の丈夫な、そして従順な女性に魅力を抱いています。恐らく、結婚まではプレイの味は知ることはないと思うのですが、それまでに大いに勉強しておきたいと考えています。そこで一つ、提案があるのですが、というより、おねがいをお願いします。夫婦（増田氏や新田氏、須磨氏等の御夫妻）に貴誌の主催で集まっていただき、座談会の形式にて体験談プレイに対する喜び等を行って、誌上に掲載していただけたらと思うのです。各氏の御仕事、その他、困難な事情もおありになると思いますが、私のような、これからのプレイを味わいたいと願うもののために、先輩としてぜひとも御指導いただきたいものです。貴誌なら充分、実現可能と思うのですが、いかがなものでしょう。それでは今回は、これぐらいにしす。又、お便りさせていただきま

○ （和歌山・浜湊陽一）

KKの皆様、初めまして。僕は十何年前頃よりと思いますが、昔

の読者だったのです。しかし、ここ五、六年間、御目にかかっていませんでした。六日ほど前、入院中の外出先で目に止まったものです。早急に買い求め、新聞等そっち除けで、朝から晩まで読みつづけてしまいました。昔は人目のない処でないと読むことが出来ませんでした。このようになりますと、ちょっと淋しい気もしますが学術的に思えて大変よろしいです。私は先月かぜを引き高熱を発し病院に運ばれ、急性肺炎に肋膜炎を併発との由で、入院してから三十何日になり、あと二十日ほどしなければ退院出来そうもありません。寝て新聞か本でも読むのが私ども入院者の仕事ですので、繰り返し読む内、自分自身に水道を利用した浣腸をしたらどんなことになるか、物は試しと実行しました。何日か前から、内径十五ミリぐらい長さ一・五米ぐらいの余り硬質でないポリエチレン管のあるのに気づいておりました。それを使って水道のカランから水を挿入しました。水量は計量しないのははっきりわかりませんが、一・五立ぐらいではないでしょうか。尚直腸に水の入った終りぎわには、いくわけはないんですが、みぞ落



ちから胃のあたりで水がボコンボコンしましたよ。これは私が初めて自分だけで行った拷問です。東京都在住の出来得れば品川駅附近にお住いの自家用車を御所持の方がおられましたなら御一報賜りたく存じます。一度だけ初回かぎり発行所回送に恐縮ですがお願い申し上げます。八月の初めに五、六日間の公休があるかと思ひます故うまく行き御交際が願ひ得て期日まで間に合えば、よき思ひ出を残せると存じます。

(横浜・南次郎)

皆さん、ひさしぶりでお便りいたします。以前は色々の名前で投稿し、そのうち一度のせてもらいました。でも今度からは本格的に仲間に入りたく思います。今まで定期的に貴誌を買っていた店が急に取扱いなくなったり、もしや廃刊ではないかと思っていました。先ごろ久方ぶりに七月号を手にし、あたためていた原稿を送る決心ができました。どうか一読をおねがいします。まだ文を書くコツを知らない未熟者ですが、精一ぱい努力しました。どうかよろしくおねがいします。

(東京都・井上俊彦)

○ みちのくの岩手遠野の郷に住む古くからの愛読者の一人です。よろしく。生来、多趣味でホモ、MS、浣腸、開腹(切腹に非ず、好きな男のお腹の中を見たいという願望なり)吊り、擦り責め、鼻責め、アヌス責め、P責め、エログロ映画、催眠術、奇術、何でも興味があります。都を遠く離れた田園都市に静かで何となくわびしい目を送っております。浅黒いさつぱりした気性の男性、又なよなよしてハキハキしない色白の女性的な肌の男性、内気で殊にMに生きた感じを感じるような男なら最高です。こんなヌードを仕事台に横たえて、白い腹の静かに波打つ肌を見てみると、仕事に疲れた頭も新たな元気をとりもどし、股を開いて坐っているヌードの内股や腹部にマジックでいたずら書きしている中に、スランプの頭から新しい構想が生れてくるし、椅子にもたれて仕事に疲れた眼を、机の側に立たせて胸を反らせたヌードにぼんやり向いているとき、きつと疲れた眼はランランと怪光を帯びてくることと思ひます。(ホモの分らない人は男を女と読み返る要あり)平安の古から伝説に富む遠

### 〔最近作緊縛傑作フォト〕

開股竹棒羞恥責め	大手札三枚一組 略号「ねろ」 中河 恵子 四〇〇円	逆エビ責め手足縛り	大手札三枚一組 略号「ねき」 中河 恵子 四〇〇円	竹棒開股強烈繋り	大手札三枚一組 略号「ねく」 中河 恵子 四〇〇円	鼻責めと鼻孔大寫し	大手札三枚一組 略号「ねけ」 中河 恵子 四〇〇円	首繩後手強烈縛り	大手札三枚一組 略号「ねこ」 中河 恵子 四〇〇円	全裸開股膝頭縛り	大手札三枚一組 略号「ねさ」 中河 恵子 四〇〇円	菱繩縛り竹棒責め	大手札三枚一組 略号「ねし」 中河 恵子 四〇〇円	柔肌に喰込む縄目	大手札三枚一組 略号「ねす」 大島 照代 四〇〇円	豊満な全裸を弄る	大手札三枚一組 略号「ねせ」 大島 照代 四〇〇円	逆エビに痛める魔手	大手札三枚一組 略号「ねそ」 大島 照代 四〇〇円	黒髪をいたぶる手	大手札四枚一組 略号「そや」 大島 照代 五〇〇円
強烈後手縛りの狂態	大手札四枚一組 略号「そき」 大島 照代 五〇〇円	牝犬奴隷の醜態	大手札四枚一組 略号「そよ」 大島 照代 五〇〇円	全裸二つ折り縛り	大手札四枚一組 略号「そむ」 中河 恵子 五〇〇円	菱繩しばりの表情	大手札四枚一組 略号「そめ」 中河 恵子 五〇〇円	八の字開股羞恥責め	大手札四枚一組 略号「そか」 中河 恵子 五〇〇円	菱繩縛りの全裸を晒す	大手札四枚一組 略号「そえ」 中河 恵子 五〇〇円	奴隷捨札開股縛り	大手札三枚一組 略号「きむ」 木村 洋子 四〇〇円	菱繩強烈開股縛り	大手札三枚一組 略号「きま」 木村 洋子 四〇〇円	竹柱立縛り晒し者	大手札三枚一組 略号「きみ」 木村 洋子 四〇〇円	柱宙縛り苦痛表情	大手札三枚一組 略号「きめ」 木村 洋子 四〇〇円	猿轡股間縛り歩き	大手札三枚一組 略号「きも」 木村 洋子 四〇〇円



野に遊びに来られた方、気が向いたら東館の遥雪荘へお立ちより下さい。  
(岩手・三原柴三郎)

いつも楽しくよませて頂いておられます。きようは随分と決心してペンをとりました。……彼の切なる願いを聞いていますと、錯覚を起すのでしょうか……私もなんだか、そんな思いにかられてしまうんです。人間って誰れでもチョッピリいたずら心とか、背徳の願ひがあるのでしょうか。彼の願ひってそのまま申し上げるのが恥ずかしいぐらいです。彼は今までのように、この耽美な世界の楽しみをわたし達でなく同好の御夫婦の方々といっしょに楽しみたいというんです。最初は猛烈に反対したわたくしも、最近はお互いが信じ合えるお相手なら、彼のことに従ってもいいと思うようになりました。MS誌上で夫婦の方々の作品発表も数多くみられるようになってきたし、同好の方々が多いことは本当に心強いと彼は氣をよくしております。軽いSMプレイやムード溢れるすばらしい夜を信じ合える方々と過ごしたいと念じております。御面会の機会や夫婦交際の機会に恵まれて、良い御

友人としてめぐり合えることを重ねて彼とともに希望いたします。ついでながら、私達の作品も、いささかございますので、そうした機会に恵まれて御笑覧に供したり御批判を頂ければ幸いです。もし御交際頂ける方々の中には、いろいろの御制約、そして不安と入り乱れていられる方もいらっしゃるでしょうが、どうか、ともに語り、ともに交際し合って、より仕合せな夫婦生活を歩みませんでしょうか。夫三十五才、私二十八才です。皆様の御便りを心から、おまち致しております。

(西宮市・松田美恵子)

八月号の山下洋子様へ。わたしは多分、あなたと同じであろうと思います。札幌に住んでいる奇譚クラブの愛読者です。もう十年になります。読者通信の欄で、久しぶりに北海道の方に接し、感激を覚えました。特に、文中にありました「札幌市大通りのテレビ塔」には喜びさえ感じました。洋子さんが急に身近な存在になって来たからかもしれません。わたしは一会社員です。社会的にも、決してだいそれたことはできません。本屋で人目を気にしながら奇

# 中河恵子新趣向写真

大手札印画紙極鮮明焼付フオート

片脚挙げで晒す裸身

大手札三枚一組 略号△とは▽ 四〇〇円

強烈エビ縛りて苦悶

大手札三枚一組 略号△とは▽ 四〇〇円

膝頭縛り開股竹棒責め

大手札三枚一組 略号△とは▽ 四〇〇円

竹棒開股足首縛り

大手札三枚一組 略号△とは▽ 四〇〇円

股間縛りの裸身表情

大手札三枚一組 略号△とは▽ 四〇〇円

菱縄縛り猿ぐつわの表情

大手札三枚一組 略号△とは▽ 四〇〇円

乱痴騒ぎの結末

大手札三枚一組 略号△とは▽ 四〇〇円

菱縄縛りて床に喘ぐ

大手札三枚一組 略号△とは▽ 四〇〇円

八九月の妊婦に革具責め

大手札四枚一組 略号△とは▽ 五〇〇円

増田みゆき

大手札四枚一組 略号△とは▽ 五〇〇円

九九月の妊婦に首枷責め

増田みゆき 略号△とは▽ 五〇〇円

澣腸責めの甘い恐怖

大手札三枚一組 略号△とは▽ 四〇〇円

澣腸液の注入直後

中河 恵子 略号△とは▽ 四〇〇円

強制澣腸の各姿態

大手札三枚一組 略号△とは▽ 四〇〇円

澣腸責めの美態開陳

中河 恵子 略号△とは▽ 四〇〇円

澣腸を待つポーズ

大手札三枚一組 略号△とは▽ 四〇〇円

クを購入するのが、せい一ぱいの男です。年令は三十三才、勿論、妻もあります。しかし妻は堅い女性です。わたしは奇巧のファンであることも知りません。わたしは妻に知られぬために本の置き場所にも気をつけています。洋

子さんをお願いですが、決して御迷惑はかけません。また、あなたも御結婚前の体、お互い後悔したくありません。いかがでしょうか。楽しい思い出となる交際をしてみたいとは思いませんか。二人で奇クを話題として、大いに語りませ



んか。わたしを信じて下さるならば八月二十七日の日曜日、四丁目の喫茶店「にしりん」へおいで下さい。午後一時から一時三〇分まで店内におります。テーブルの上にカメラと週刊誌をのせておきます。また人目をはばかるのでしたら、その時刻に「西林」に電話を下さい。店内呼び出しで連絡がつくと思います。その節は「木村」と呼び出して下さい。勇気を奮って洋子さんにお手紙を差し上げました。御心配の向きは、お会い下されば氷解すると思います。お会いできることを念じつつ。

(札幌・木村せい一)

○ 奇ク編集部の皆様、お元気ですか。毎度御苦勞様ですが、このところ、奇クの傾向は稍マンネリズムの感がありますね、かつての「大奥裸女決斗」や「女斗美八景」など生首もの盛んな頃がなつかしく、ああいう読物をまたのせて下さるようお願いします。実は去年の一月でしたか、予告に「女忠臣蔵」というのがあって、毎月楽しみにしていたのですが、遂にのらなかったことなど残念に思います。いろいろ面倒なこともあるのでしようが、予告されたものが

出ないのは、お預けにひとしい残酷物語です。どうなったのか聞かせていただきたいですし、それに代るものをのせていただければ幸いです。勝手なことを書きました。御誌の発展祈り上げます。

(東京都文京区・山下米晴)

○ 八月号を求めまして「花と蛇」その他の小説を読むにつれて、私にとつては重要な記事を見落していましたことを、ようやく気がつきました。それは二十三頁の「あぶあらかると」の中の「残酷モード流行のきざし」で、ピアスイヤリングは欧米では昔からあるとのことですが、日本にも上陸とは大変嬉しく楽しいことで、桃源社発行の「快楽の女性」の一八五頁にも日本女性間には未だ流行のきざしは見られないが、東京周辺では時々若い女性の中に本格的な耳の刺環(穿孔)のある人を見かけることもある——と記してありました。将来、流行するようでしたら小生にとってはたまらないことです。社会思想研究会、昭和三十五年一月発行の「アクセサリ」の中に、イヤリングは我国でも案外流行するかも知れない、と書いてあ

りますが、どうぞ一日も早く流行して男性でも嵌めて堂々と街を歩けるようになると思っております。「快楽の女性」には、耳と鼻と両方に嵌めている五人の女性のフोटがあります。本誌八月号四十五頁の「ピアシングと刺青」は乳首だけの記事ですが、もう一筆、耳と鼻の方も書いてあると一層読みごたえがあると思います。とにかく本格的な耳環が流行してくるようでしたら、小生にとつては生甲斐のあることで、あと十年ほど長生きして満喫堪能したいと思ひます。

(京都市・佐々木耳鼻環生)

○ 奇ク九月号を読んで。一口に奇クの愛読者といっても、いろいろな傾向があり、編集部としてもできるだけ多くの愛読者に向くようにと苦心して下さっていることに先ず感謝したい。私の趣向はMであるが、一般にMよりS好みの方が多いようであり、従って奇クの内容も、やはりS向き記事の多くなるのは当然だと思う。どちらかといえば、ウェイトの比較的軽いM記事に毎月、胸をおどらせている一人である。さて九月号の中で私を満足させてくれたものを二

三あげて感想をのべさせて頂きたい。先ず第一に挙げたいのは春川ナミオ氏の「母娘蜂」である。直子という若いグラマー女性の巨大なヒップの下に顔を敷かれ死ぬような苦しみを受ける一郎。窒息寸前という時、ようやく浮かされたヒップの下で、やっと吸い込む一息。ああ、その時、嗅がされる直子のヒップの強烈な臭気。パンティ一枚を通して嗅がされるお尻の臭気。一郎は気も遠くなるほど臭い目にあわされたことだろう。そして更にトイレに引きずっていかれて直子の神酒を直接受ける一郎。「それは滝のような激しい勢いでとび散った」と表現されている。若い直子の神酒は、正にほとばしる温い泉として、又滝として一郎の顔面に浴びせられたことであらう。神酒を浴びたといえば、次に斎藤夜居氏の「性風俗資料入門」の便所窃視症(四十九頁——五十頁)にあげられた金沢市蔵という男。若さ溢れる女学生たち十三人の尿を頭に、顔に浴びたという。つかまったとはいふものの、羨ましい次第である。又ある時は使用済のチリ紙にも恵まれたことであらう。そして、もう一つ「奇クサロン」の中の春川ナミオ氏の



筆になるM漫画「女王様」を取り上げた。恐らく初めての企画と思われるが、実に楽しく拝見した。特にその中の18場面、男の顔が女王様のパンティ一枚の巨大なヒップの下敷にされ、目だけわずかに残して口も鼻も完全にお尻の下に敷かれているのは実にすばらしい。そして終り29場面が、神酒の洗礼をもって終ろうとしているところが、しめくくりとしてよかった。以上、勝手な感想をのべてせて頂いたが、他に二、三のM読物を加えて九月号も非常に楽しく読ませて頂いたことを、重ねて感謝します。終りに芳野、三原両氏、及びM文学の権威の方々の御活躍を心から祈りつつ、拙き文をとじます。

(M生)

○ 小生、奇クの長年に亘る愛読者です。古川裕子さんに憧憬を持っているファンです。いうまでもなく大変なゴムマニアです。九月号には梅川さんの雨の夜のゴムプレイを拝見しましたが、梅川さんとまったく同じような品を大切に集めておりまして、夜毎、ベッドの上にて腰まで届くゴム長を履き、ゴム合羽をまとい、頭からすっぽりとゴムの袋をかぶって汗にまみ

れているS六十パーセント、M四十パーセントのある会社の経理を担当しております、サラリーマンです。年令三十五才、この度、十年間の結婚生活にも終止符を打ち、現在、別居中の身の上です。やはり小生のゴムマニアの性癖から性格が合わなかったのでしょう。決して小生は妻にはゴムプレイを強いなかったのですが……。お蔭で小生は現在、誰に遠慮もなく、今日も又、胸まで届くゴム長靴を着用し、生ゴム製のオシメカパーを頭からかぶって、ゴムの感触とゴムの臭いに我を忘れております。一度で良いから、梅川さんのような同じ性癖を持った方とプレイが出来たらと、夢をみながら筆を走らせました。前にものべましたように、現在は独身故、誰にばかすることなく自由に行動出来ますので、同好の方の呼びかけをお待ちしております。尚、編集部にお願ひしますが、旧号の古川裕子さんの手記、並びに告白文(長期刑我が心の記など)全部をまとめた古川裕子特集号、出来ればフオトを挿入して発行して頂けたらと存じますが、如何でしょうか? ゴムマニアも全国に相当いらっしやること故、決して無駄にはなら

最新撮影総天然色  
カラー・プリント写真

両手吊りに悶える女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
大塚 啓子 略号八てきV

後手裸身柱縛り

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
大塚 啓子 略号八てかV

縄目にあえぐ裸女

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
大塚 啓子 略号八てくV

豊麗な裸身をくびる縄目

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
大塚 啓子 略号八てこV

後手高手小手縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
大塚 啓子 略号八てまV

長襦袢の緊縛色模様

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号八てみV

緋の腰巻緊縛色模様

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号八てむV

猿ぐつわに呻く女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号八てめV

柱宙吊り強烈縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号八てもV

ポリウムを縛りあげる

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号八てんV

縄に苦悶する裸女を狙う

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号八てるV

真紅の腰巻着用姿態

大手札二枚一組 略号八〇〇円  
大塚 啓子 略号八うおV

縄に悶える緊縛色模様

大手札二枚一組 略号八〇〇円  
東浦・大塚 略号八うてV

真紅の腰巻着用縛り

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
大塚 啓子 略号八うこV

華麗なる緊縛裸身

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るむV

みだらな開股縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るのV

責めに疲れた諦観

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るおV

真紅の腰巻姿で緊縛

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るまV

羞らしい真正面縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るけV

若肌に喰い込む縄目

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るふV

高手小手後手縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るやV



ないと思いますが……。一度、御考慮下さいますように……。

(吹田市・五務好生)

○

札幌、山下洋子様、七月号での呼びかけ大変うれしく拝見し、早速テレビ塔まで伺いましたが、お目にかかることができず残念に思っております。私は現在二十五才の独身男性で、大学卒業後、ある建築関係の会社に勤めております。KK誌は六、七年前からの読者で特にS的傾向のものにひかれます。私は乳房責、股間しぼり、くすぐり責め、浣腸等、特に女性の羞恥心を刺激する責め方が好きで、余り体に傷がつくような責め方は好みません。山下さん、私は貴方のM性を必ず満足させてあげる確信があります。お互い同好の士ですから、お逢いしたら種々話に花が咲くことと思います。プレイへの前提として、先ずおつきあいしてみませんか。その上で、お互い気持が確認し合えれば、ということにしては如何でしょうか。私は決して無理押しはしないつもりです。あくまでもフェミニストの立場で、お互いの理解のもとに御交際したいと思えます。不真面目な態度は不幸を招くばかりで

す。秘密は絶対守ります。さし当り、九月十日(月)午時三時——三時三十分までの間に(二三)八一五一の電話に高宮さんをお願いしますといって呼び出して下さい。山下さんが私が勇を奮って呼びかけたのですから、自分の幸せをつかむため貴女も勇気を出して下さい。貴女からの電話を心待ちしています。尚必ず日時をお守り下さい。(札幌市・高宮宗行)

○

全国的に有名な七夕祭を後十日に控えた仙台に住む一男性です。奇巧に寄せられた数々のお便りを拝見して、勇を鼓してペンならぬボールペンを手にとりました。宮城県、或は仙台市に住んでいるM女性の方に呼びかけたいと思います。プレイを通して純粋なSとMの欲びを知るための御交際ねがえないでしょうか。私は三十五才の会社では責任あるポストにある一サラリーマンです。私の責めは主としてM女性の牝犬化にあります。す。映画「胎児が密猟する時」のヒロインのように、徹底的に一匹の牝犬として責めさいなみ、飼育したいのです。如何でしょうか。私のこの熱望に答えてくれるM女性の方、ぜひ次記の日時、場所ま

### 股間縛りの開股姿態

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
中河 恵子 略号△れよ▽

### 羞らしいの股間縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
中河 恵子 略号△れに▽

### 双胎臨月蛙腹鮮烈写真

大手札六枚一組 二〇〇〇円  
増田みゆき 略号△れや▽

### 双胎臨月腹強烈縛り

大手札六枚一組 二〇〇〇円  
増田みゆき 略号△れゆ▽

### 臨月腹裸身の媚態

大手札六枚一組 二〇〇〇円  
増田みゆき 略号△れえ▽

### 黒縄縦縛りの媚態

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
中河 恵子 略号△れぬ▽

### 立縛りにあうの裸女

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
木村 洋子 略号△れぬ▽

### 開股された股間縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
木村 洋子 略号△れの▽

### 豆絞りの猿くつわ縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
木村 洋子 略号△れむ▽

### 柱宙縛りに喘ぐ刺青女

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
山原 清子 略号△やか▽

### 高手小手に悶える全裸

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
山原 清子 略号△やき▽

### 緊縛に映える入墨の肌

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
山原 清子 略号△やく▽

### 脱がされた緊縛刺青女体

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
山原 清子 略号△やも▽

### 縄にのたうつ入墨裸身

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
山原 清子 略号△やし▽

### 腰巻一つで縛られる刺青女

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
山原 清子 略号△やみ▽

### 女相撲迫力投業連続動作

大手札十二枚一組 五〇〇〇円  
大塚・東浦 略号△なる▽

でお出下さい。九月の第一、二、三日曜日、午前十一時、仙台、市役所の大噴水までお越し下さい。(雨天の時は三越デパートの正面玄関、時間は同じ)目印としてアサヒグラフか毎日グラフをまるめて右手に持っていて下さい。私は同じものを左手に丸めて持っています。(仙台 林生)



# 次号(十一月号)は九月二十五日に発売します。

○

私は二十九才の男性です。数年  
来の愛読者ですが、益々本誌の内  
容も充実し、愛読者として我がこ  
とのようにうれしく思います。こ  
の夏には本誌の記事になりました  
秋山夫妻のサジズムショウを名古  
屋で見ることができました。実に  
素晴らしく拝見いたしました。さ  
すがに奇譚クラブで取り上げられ  
ただけあり、SM愛好者として満足  
のいくショウです。さて私自身も  
一度、愛読者の女性の方とSMプ  
レイをぜひ致したく、日頃色々  
空想をしております。愛読者の女  
性の方で一度しばられてみたい  
又色々なしばり責めがされたい  
と思つて見える方、ぜひお合  
いしましょう。そして貴女様が  
希望される、どのようなSMプ  
レイでも致します。九月六日午後  
七時三十分、国鉄名古屋駅構内、  
大時計下にてお待ち下さい。その  
とき貴女様はごめいわくとは思  
いませんが、目印に右手に奇譚  
クラブを丸めてお待ち下さい。  
必ずまいります。又、おたが  
いに秘密厳守いたしますから  
ご安心下さい。

(名古屋・田中生)

○

本当に有難うございました。私  
は何って幸せな女でしょう。私  
は毎月二十五日の来る日をたの  
しみに本屋さんに行きます。今  
月の二十五日、バーにつとめ  
に行くとき私は本屋さんにお  
胸をはずませて寄りました。そ  
して貴誌を買いました。それで  
たのしかったです。私は直ぐ  
タクシーのり目次を見ました。  
すると、その中に女性肥満体  
の郷愁という告白があるでは  
ありませんか。私は車の中で  
ひろげてよみはじめました。  
私は上気して胸が高鳴り、涙  
が止めどなく出て息が止まり  
そうに感激しました。私はバー  
に出勤が遅れるのを電話し、  
直ぐアパーに帰る改めその  
記事を読みなおしました。私は  
、何って幸せな女でしょう。よ  
りによって私の告白が貴誌に  
のせられるなんて、私は夢心  
持です。これを読んだ人は何  
と思つていられるでしょう。私  
はいても立ってもおられない  
ほど興奮しました。私は、その  
時、改めて自分の肥満に、絶対  
の自信と誇りを感じ、私一人  
の身体でない、皆

様ファンのためのもののような  
感じがしました。私は、ファン  
のためにも、どこまでも歩くの  
にも困難なぐらいまで、大きく  
育てたいと日夜これから一層  
の努力を致しますことを、ここ  
にちかかって申し上げます。  
(美川美美子)

○

小生、奇クを読みはじめて約三  
年になる青年です。誰か他の  
方も言っておられまいように、  
最近の本を読みだしてからは、  
以前に発行されたものが読み  
たくなくなり苦勞して古本屋  
通いをしました。が、手に入  
っても歯の抜けたように、と  
ぎれとぎれにしか買えません  
し中には、手垢で真黒になっ  
ていたり、肝じんのところが  
切抜かれていたり、なぜだ  
たしい気持ちにいられます。  
なぜもっと早く、奇クが発  
行されていたのに気がつか  
なかったのかと惜まれてなり  
ませんが、それにしても、こ  
のように書店ではまま子扱  
いされては、奇ク全体としての  
発刊部数も大変少いのではない  
かと思つたりします。時折  
36年頃以前の本を読ん  
でいると、グラビヤ写真に出  
てくる大塚、四方、東浦、水  
本、梨花などの諸嬢が責めを  
楽しんでる様子を見て、小生  
もなんともいえな

い気持ちにおそわれます。この  
ような諸嬢を色々責めること  
が出来ると村田氏や塚本氏  
がうらやましくなりません。  
彼女たちが色々な責めにあ  
つていられるグラビヤを見て  
いると小生の心がすつとす  
るのです。こんな美しい女  
性を自分の手で思いきり責  
めてみたいという気がし  
きりですが、それも出来ない  
相談です。箕田様、いつも  
村田氏や山本氏ばかりにま  
かせないで小生のような読  
者にも一度でもいから紹介  
してくれませんか。モデル  
嬢の住所氏名は公開しない  
のですが、せめて文通なり  
ともし、そのときの気持ち  
をおききしたいと思いま  
す。小生は一サラリーマン  
で資力もなく、それに内気  
なので自分でパートナ  
ーを探すというよう  
なことはとても出来ない  
です。最近には新人が次々  
と誌上に登場され、うれ  
しく思います。沢山の愛好  
女性の中に一人でもと、  
可能性を信じて毎月たの  
しく愛読しております。  
(大阪・建川喜美夫)

○

貴誌を愛読するようになって  
から、早や十六年にもな  
ります。或る時は狂人の  
ごとくむさぼり読み、そ  
して或る時は静かに遠ざか



○本誌既刊雑誌は左記一覧表の通  
申し上げます。

○従来、雑誌の送料は当社にて負担しておりましたが、今後は三カ月以上予約御注文以外（既刊号は含まず）は一部につき送料二〇円の御負担を願います。多数一括し  
てお求めの際は△小包▽にて発送

既刊雜誌在庫案內

昭和39年6月号 (送共二七〇円)  
昭和39年7月号 (送共三二〇円)  
昭和39年8月号 (送共三二〇円)  
昭和39年9月号 (送共三二〇円)  
昭和39年10月号 (送共三二〇円)  
昭和39年11月号 (送共三二〇円)  
昭和39年12月号 (送共三二〇円)  
昭和40年1月号 (送共三二〇円)

[illegible]

昭和42年9月号	昭和42年8月号	昭和42年7月号	昭和42年6月号	昭和42年5月号	昭和42年4月号	昭和42年3月号	昭和42年2月号	昭和42年1月号	昭和41年12月号	昭和41年11月号	昭和41年10月号	昭和41年9月号	昭和41年8月号	昭和41年7月号	昭和41年6月号
(送共三七〇円)	(送共三七〇円)	(送共三七〇円)	(送共三七〇円)	(送共三七〇円)	(送共三七〇円)	(送共三七〇円)	(送共三七〇円)	(送共三七〇円)	(送共三七〇円)	(送共三七〇円)	(送共三七〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)

(大阪市・藤田欽也)

てきました。始めて貴誌を手にしたのは十八才の時でした。その時の胸の高鳴りは、今更ここで私が形容しなくても、何千何万という同好の方々は今までにさまざまに表現しておられます。この頃は内容が益々充実し毎月楽しみに愛読しております。特に「花と蛇」「SMカメラハント」「この女と」等が小生の好みで一氣に読んでしまいます。九月号の「この女と」では、新しく左近麻理子嬢の美しい緊縛姿が登場し、一人楽しく読み耽りました。近頃又「鬼六談義」が迫力をもって読む者の心を打ちます。いつもながら興味深く

小生はSの男性です。二六才、公務員で独身です。「果報は寝て待て」という言葉がありますが、SMに関しては、そんな言葉はあてはまらないでしょう。SMに限らず、何ごとにおいても、そのものを獲得するための情熱がなければ成就できないものです。小生もM女性獲得のために勇気を出し、一生懸命努力し、その暁の感激を夢みています。どうです。M女性も勇気を出そうではないですか。そうして小生のSをもって、貴女の満たされぬMの欲望を満足させ

てあげましょう。そして恥辱と苦痛の中に充分な愛情のあるSMプレイの神髄を通してお互いの人生をバラ色で飾ろうではないですか。小生の行なうプレイは厳しい首縄を併用した高手小手縛りや、グリップを使用しての乳首責め、縦縄を厳しくした股間縛りや、又これらの責めに付随したアヌス責めや浣腸責めなどをして、歓喜と羞恥に満ちたMの快感を味わえます。九月中毎週、日曜日、六時から六時半まで大阪東口前の地下鉄階段の入口サンガラスに白い手袋、週刊誌を持って立っていますので、勇気あるM女性の快いお呼びかけをお待ちしております。

奇クの編集部・読者の皆様、ごきげんいかがでしょうか。私は数年来の奇クのファンです。私は特に春川ナミオ様のファンです。春川様の作中の女性のように、思いきり男性をいじめたいという気持ちと共に「花と蛇」のように男性にいじめられ、はずかしめられたいという気持ちが同居しています。どうしてこのような気持ちになるのか自分でもよくわかりません。奇クの方の皆様にいろいろお教え頂きたいと思っております。

(名古屋の南区・川村順子)



○本誌は口絵、グラビヤ写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に注意する各条例に指定されないうち、充分に注意して編集いたしておりますが、本来成人向として発行を企図しております関係上、十八才未満の方には絶対販売下さらさないよう、特にくれぐれもお願ひ申し上げます。